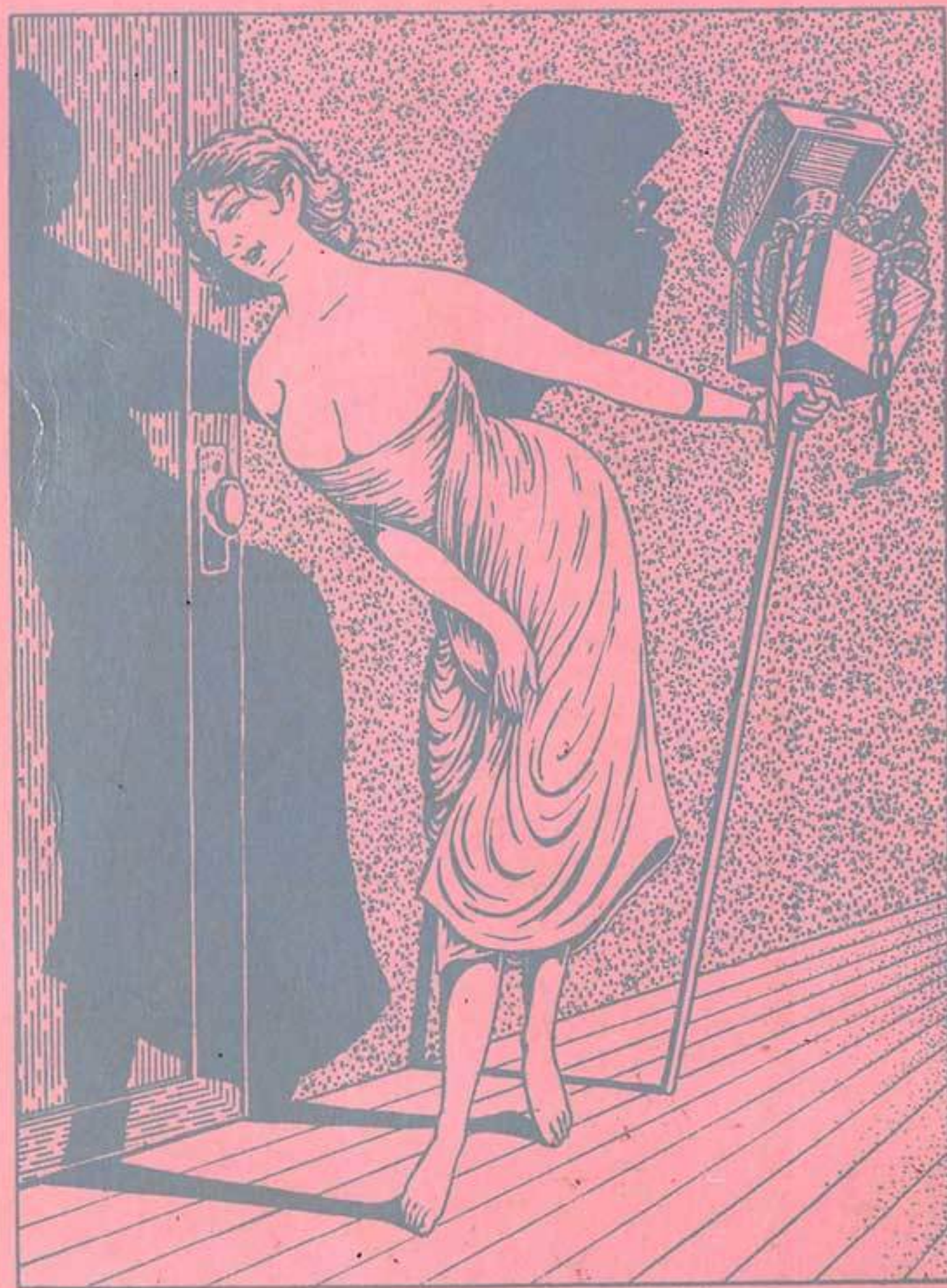


スラヴ譚奇

3 月号



新しい風俗文献誌

1973・3

昭和四十八年二月二十日印刷 昭和四十八年三月一日発行 三月号（第二十七卷第三号）毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国鉄大局特別掛承認第二一〇号

極彩色のカラーで描く
五人のM女の美しき生態

可憐な近代の姿態の深田菊子。純情で素人っぽい笠井奈保子。お侠やんで陽気ない福井桃子。妖艶な芸者福竜の松本たえ。飼育済みのMマダム江口淑子。五人の個性ある誌上に大活躍した。大型のキョウチン肌色も鮮やか。鮮明に生々しい再現した。自然のまの生々しい縛と責めに喘ぐ彼女たち。ど、肉迫的でも画面に盛り上げる使用して、貴重的な資料の作成に努めて貰いとしました。カメラは誌上の力でメラとペン。の塚本鉄三氏です。お馴染みの本は、是非この新しい白黒写真では物足りなく思いました。発表を機会に貴方は、コレクショナルの一端にお加え下さい。必ずや御満足されることでしょう。臨月の腹の力。特殊な縛り。桃子さんの珍資料として。ラ、緊縛。少価値を發揮すること。て必ずや稀少価値を發揮すること。と思ひます。カラ、12cm)で。さきはRサイズ(8cm)から。大型のコダックネガカメラ。鮮明度も。リントしましたので。鮮明度も。も断然素晴しいもので。鮮明度も。M女のカラーにきいたお楽しみ下さい。

カラ―三枚一組
一〇〇〇円

深田 菜子 附号八ある
思いきり両股をひらいて開陳す
る可憐で美しい女体も縛られて
こんなあどけない表情なのです。

カラ―三枚一組
客一〇〇〇円
号〆50/

かに甘いムードを盛りあげる。
 の美しいコントラスは惨虐のな
 真白い肌をぐっとくびる斑ら紐
 浴衣 薬子 略号あり

カラー三枚一組 一〇〇〇円
番号 599/

各種の浣腸器を前にして大の字に正面開股したマダムと後手高小手に縛られた。

カラー三枚一組
各号〇〇〇円
500円

保子が大好きな縄で縛られるとい
うナマナマしい色彩の中の羞恥。

大手札三枚一組
一〇〇〇円
各号\あり／

原色の中心に全裸の肌
腋毛もあらわに繰り展げられる
緊縛と羞恥のかもしれない饗宴。

カラ―三枚一組
客号 1000円

笠井奈保子 昨号「あめ」
縄にくびられた乳房の先のグミ
のような乳首もピンク色に染まり
全裸を晒して縛られた美麗な女体

笠井奈保子
略号△あり

き思わす開股する女体の息づまる
ような迫真的な色美しきシーン。

カラ—三枚一組
一本〇〇〇円
格号へあき

芸者福竜が全裸にひん剥かれて
三種の縄にて変った縛りをさ
れ、そのM性を露呈してゆく。

松本
たえ
略号△あ
い

如何なる強烈な責めにも耐える
というM女の繊細な裸身を厳重に
縛りあげて執拗にいたぶり抜く。

カ
ラ
ー
三
枚
一
組
一
〇
〇
〇
円

が、目覚め、前悟は、それを払っていくのでも、躊躇するのだから、

カラ―三枚一組
番号〇〇〇円

田号/おれ

もうこれ以上大きくはならない
という程思いきり突き出た太鼓腹
にも情容赦なく縄が襲いかかる。

カラ―三枚一組 一〇〇〇円

福井 柳子 略号／あれ
丸々と極めて美しい線を見せた
妊孕腹をツンと突き出させて非情
な縄は妊婦の裸身にからみつく。

カラー三枚一組
一〇〇〇円

福井 桃子 略号／あよ▽
出産間の便々たる蛙腹でも苦しいのに、更に縄目も凄く後手高
手小縛りが肌を痛めつける。

カラー二枚一組
八〇〇円

江口 淑子 略号／あお
強烈な海老責めと伸した後手を
逆に吊り上げた女の秘態のなかつた。
られないM女の秘密があつた。

カラ―二枚一組
客号八〇〇円

江口 淑子 附号 / あれ
 厳しい縄目で裸身をさいなまれ
 る苦痛も彼女にとつては、身のお
 きどころない甘い喜悦であつた。

◎お申込みは前金にて、大阪市阿倍野郵便局私書箱第14号天星社へ略号記入の上、御注文下さい。送料当方負担にて急送いたします。

本誌愛読の女性の方々へ

曉出版株式會社 編集部

百萬円懸賞原稿募集

▽
内
容
△

▽規定△

並に持込みは固くお断わり致します。

2805

奇譚クラブ

昭和四十八年二月二十日印刷 昭和四十八年三月一日発行
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可
昭和四十二年四月二十一日 国鉄大島特別貨水運補給第一〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan.

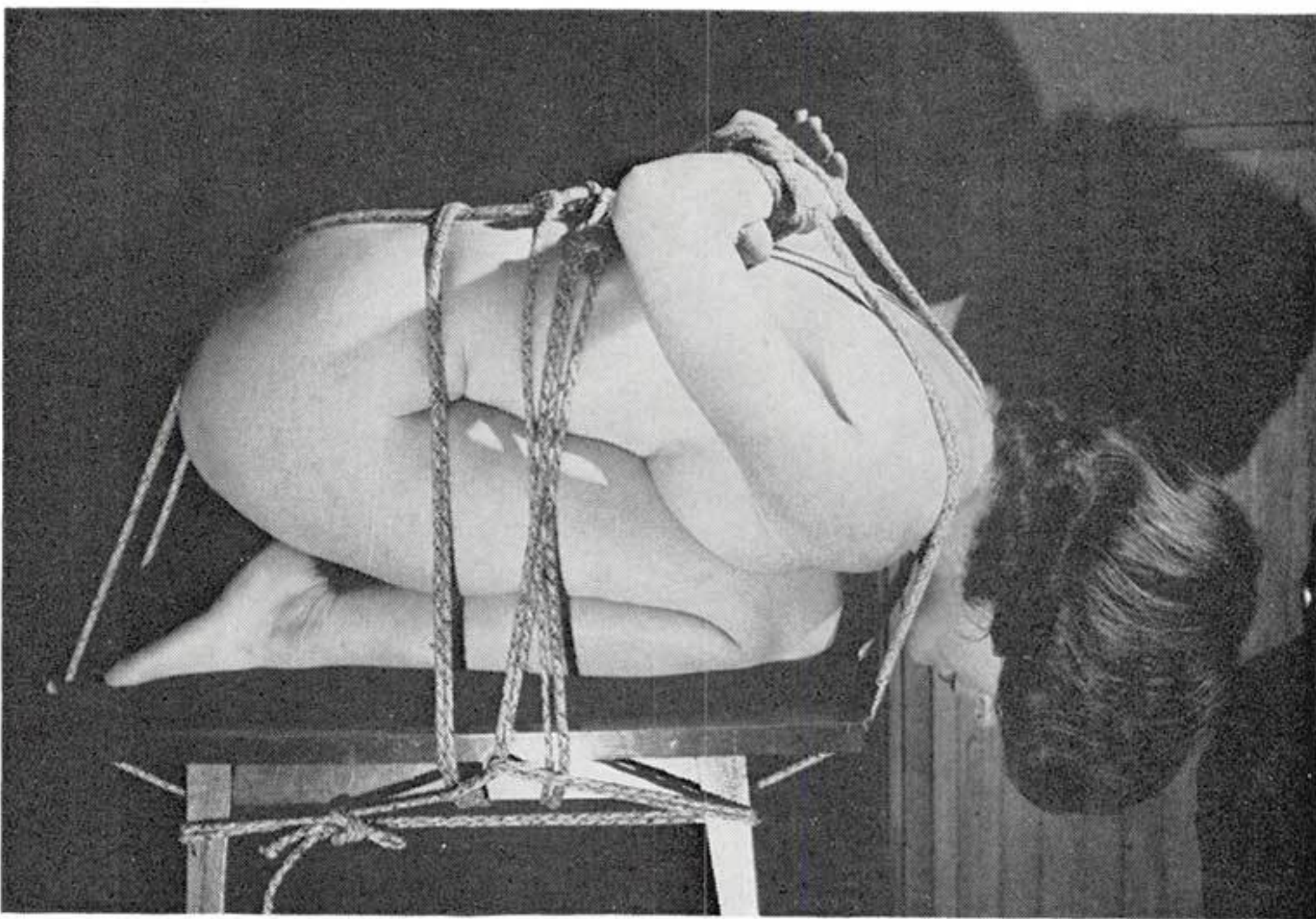


少女美しく吊られゆ

塚本 鉄三・撮影

前田 真知子





奇
譚
ク
ラ
ブ

三月号目次

△昭和四十八年▽

△第二十七卷Ⅱ第三号Ⅱ通刊第三〇一号▽

本 文

フォト「水蜜桃のような双丘」△左近麻里子▽	井上幸太郎	(21)
公開書簡『黒い乳房』“M女浩子”を想う	諏訪大路健	(22)
呼びかけ “M女よペンを執り給え”	市島 夢路	(29)
告白『とき子の自縛教室』	山口とき子	(30)
告白 見せたい妻の寝乱れ姿	沢田 路夫	(39)
連載・奴隷妻小説『命預けます』(6)	柴 利好	(42)
読切りフェチ掌篇「黒(ほくら)子」	芳野 眉美	(52)
「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ△西条紀代の巻▽		
『別嬪じゃないけど凄く可愛い娘』	塚本 鉄三	(60)
体験記 “奇妙なカップルとの奇妙な出会い”	加美赤比古	(90)
創作『花は傷つかない』△第三部・花あわれ▽	久留木 栄	(100)
告白 “緊縛女体への幻想”	松本 良二	(119)
連載・時代S小説『紫蘭の門』(19)	風流極道軒	(122)
告白『SM恋の処方箋』	瞳 耀太郎	(138)
連載・S大河小説『パロディ花と蛇』(15)	山光 純	(142)
読者通信の “大きなヒップを晒して”	笠井奈保子	(152)
皆さまへ		
連載・アブ紳士行状記『M派交友録』(36)	鬼山 絢策	(158)
ある便り “妻が私を苛めます”	繁木気次朗	(171)
懸賞告白「密室(トイレ)での女の生態」	豊田 二浪	(172)
連載小説『大噴火』△第五十四回▽	千葉 青鬼	(178)

「女子トイレ考現学」余聞 福島 和男
私のプレイした女性
屁理窟「細縄で縛ろう」 優敷 良男
「奇ク狂」のくりごと 大島 雅夫
△夫婦プレイ雑感▽
同好の士を求めて 伊勢 国男
オイラも求む！ M女 原 多津男
二百cc浣腸器讃歌 竹迫 誠也
アマゾンの脚下に 佐野 寿
大塚啓子様を慕う キトー・淳
女王ぶり今ひとたび 扇 由起夫
ナルシスト小杉千恵羞恥の宴 堀 真彦
千恵考抄 夢二
ああ慶子さま 浮気の果て 早木 恵子
イメージ画「脱出？」 中河 左徒
フォト「不安定な安定」 沙斗
幻想譜「夢の処刑場」

新春艶夢 晴着残酷物語 牧 高志
サロン楽我記△最終回▽ 辻村 隆
フォト「挑戦の眼差し」 深田 菊子
短信往来 最上卓也様へ 西原 浩
〃〃 松本たえ様へ 山本 徹男
〃〃 長谷田真知子様へ 伊勢 国男
フォト通信「妻の下着」 紀川 正信
〃〃 「ボリュウム」 村井志摩雄
オムツ派「粗相防止装備」 仁戸せんじ
赤ちゃんの告白 高畑 勝則
「おしめカバーと私」 村田 好雄
ビキニを穿こう 赤井 尾越
腰巻マニアの願い 編集部
「宝ものと共に」 市原幸三郎
編集部だより 東山 映史
映画・TVの縛りシーン 市原幸三郎
イメージ画「女囚拷問之図」

吊られゆく美少女 前田真知子
交差した後手首・よく挙がる後手 西条 紀代
海老縛りに耐える・二の腕の縄痕 前田真知子
柔肌に喰い込む白縄 前田真知子
胡座縛りに羞らう 花坂 道子
長襦袢と赤い腰巻(2葉) 田中 芳代
蒲団の上で悶える女(2葉) 益田 房子
女子大生の縛られ姿(2葉) 益田 房子
初縛りの恥じらい(2葉) 笠井奈保子
浣腸の宴のあと 三浦 純子
強烈な海老責め 玉木 章子
責めの悦楽断章 深田 菊子
転倒した一瞬 前田真知子
被虐のポーズを晒して 村井知可子
折檻される腰元 鈴木千鶴子
女体検身の緒 高村 浩子
責め抜かれた末・俎上の魚

目次 フォト

或るゴムマニアの体験告白	「私のラバちゃん」	加藤 明美 (186)
SMカメラ・ハント(最終回)		
『悦虐の遍歴』△佐野みさ子の巻▽	辻村 隆 (192)	
浣腸マニアの告白「私にとって素敵な浣腸」	藤野 陽子 (226)	
那津子追想『ひとり都の夕暮れに』	城 章夫 (229)	
読者通信	編集部選 (266)	
イメージギャラリー	「新入りです、よろしく」飯田ひろくに (46)・「女刑務所」三鷹I・O (49)・「女難こそ最高」春川ナミオ (57)・「わだつみへの供物」室井亜砂路 (95)・「屈辱と恐怖」岡たかし (105)・「置物」宮城昌子 (109)・「どこへ行く気？」飯田ひろくに (114)・「休憩のひととき」三鷹I・O (128)・「ある夜突然に」岡たかし (133)・「湖畔のスナップ」小川茂正 (146)・「M女からM妻へ」岡たかし (148)・「硬軟の挟み討ち」春川ナミオ (162)・「生き甲斐のひととき」岡たかし (165)・「悲鳴の挙がる至福」春川ナミオ (168)・「ボールぐつわ」志羽利也 (188)・「ある家族」室井亜砂路 (191)	
目次 フォト	シーラー・ケニー	



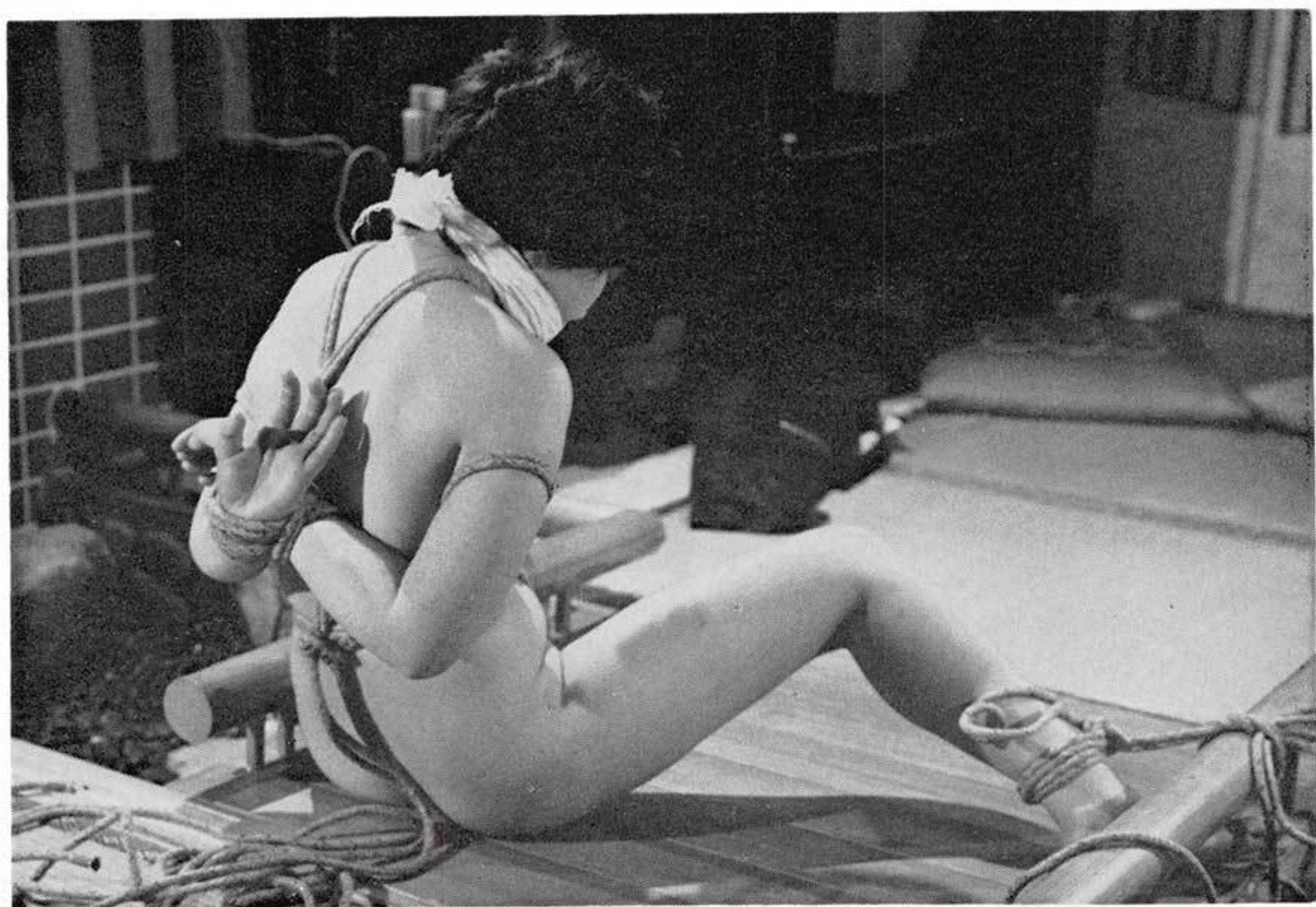
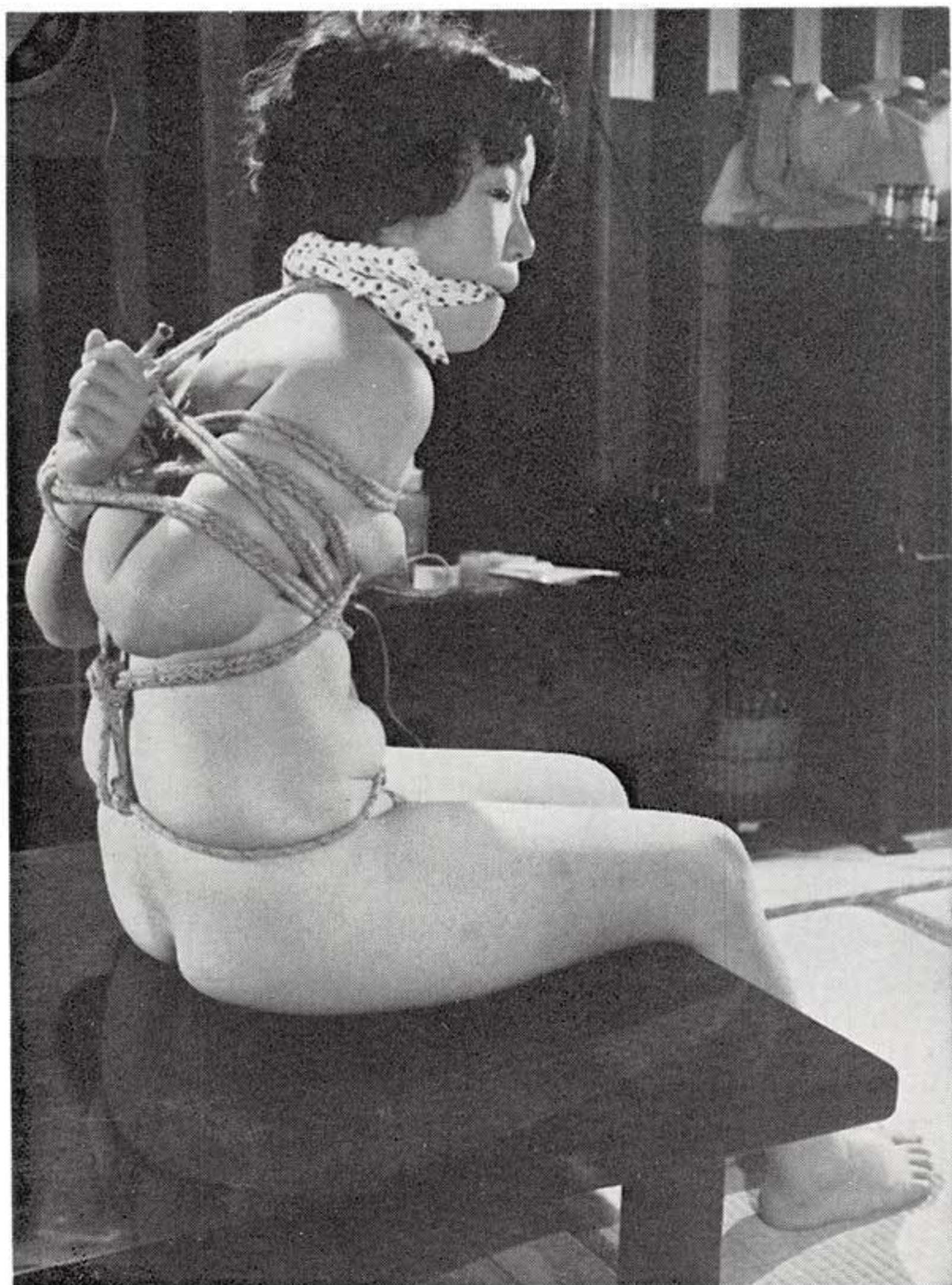


交差した後手首



よく挙がる後手縛り

△西条紀代▽



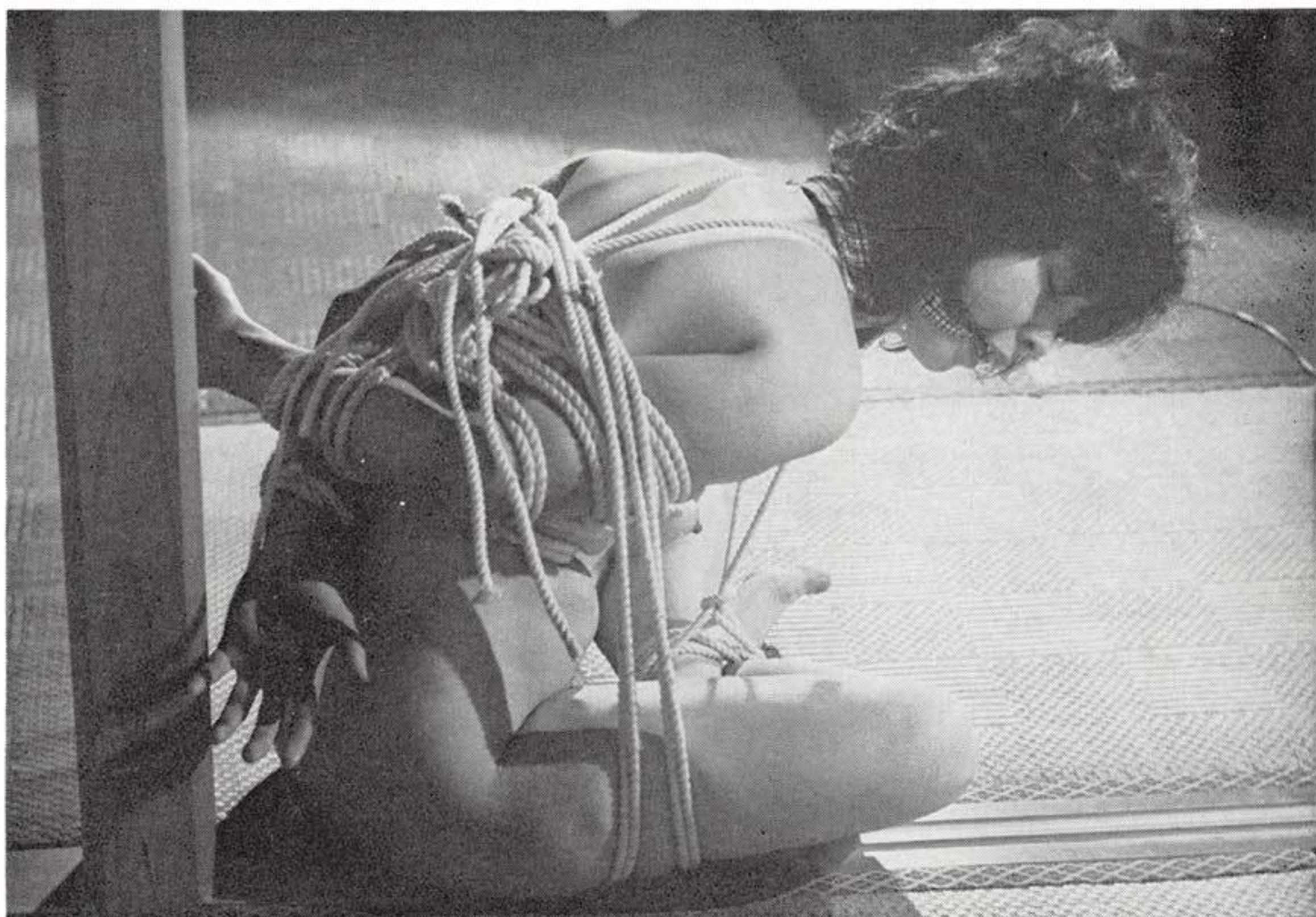


海老縛りに耐える

＜前田真知子＞

二の腕の縄痕

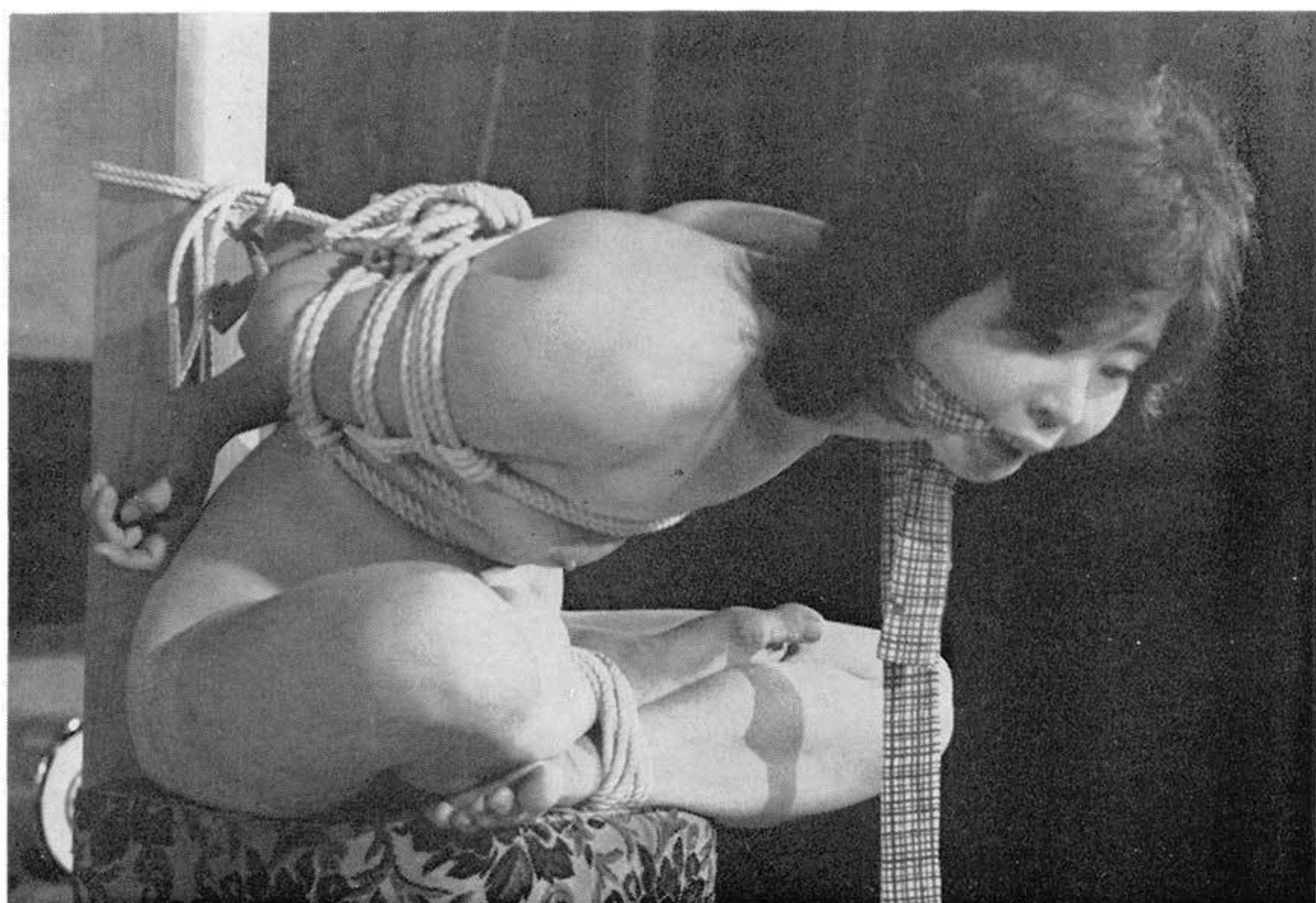


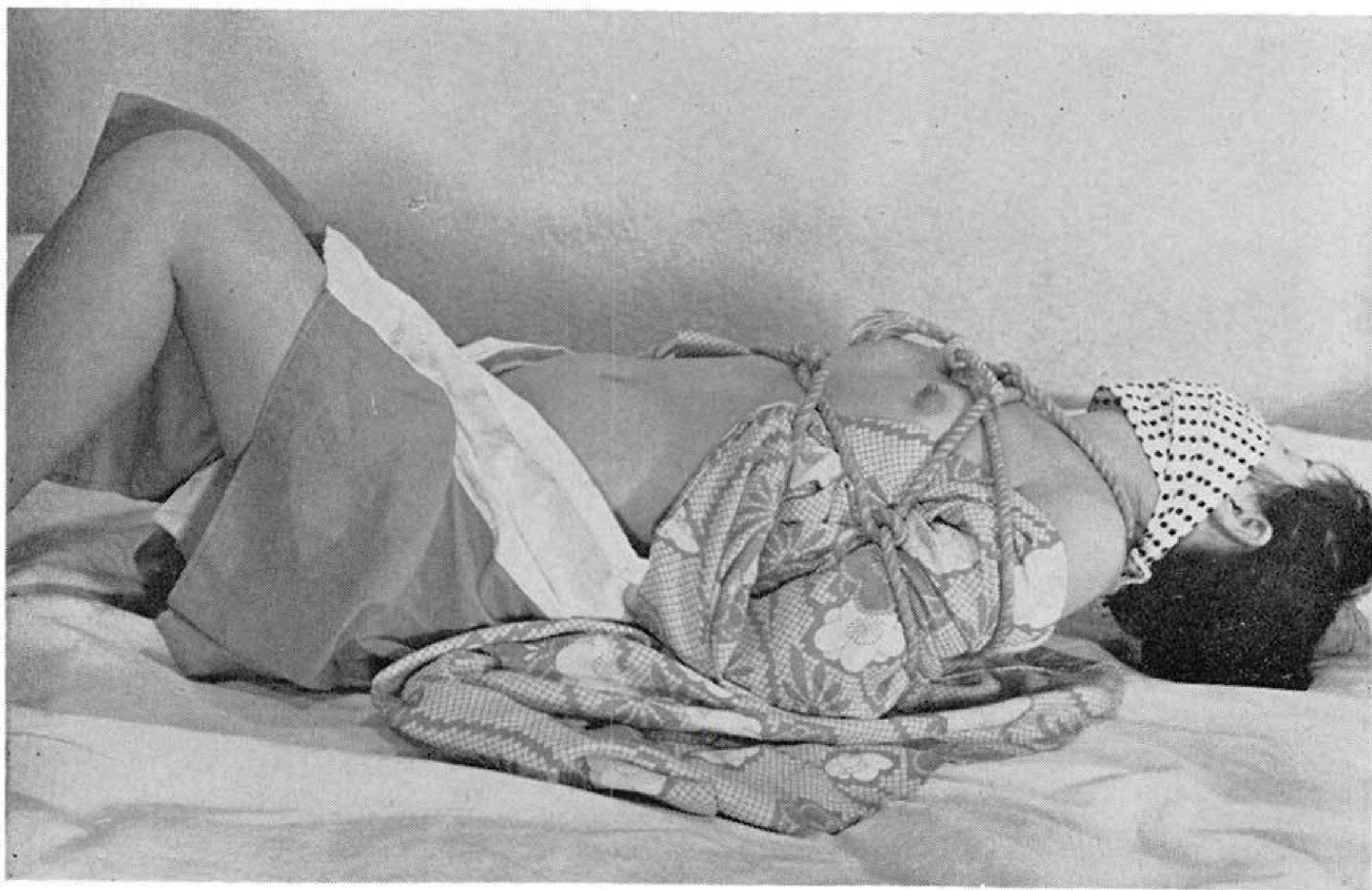


柔肌に喰い込む白縄

＜前田真知子＞

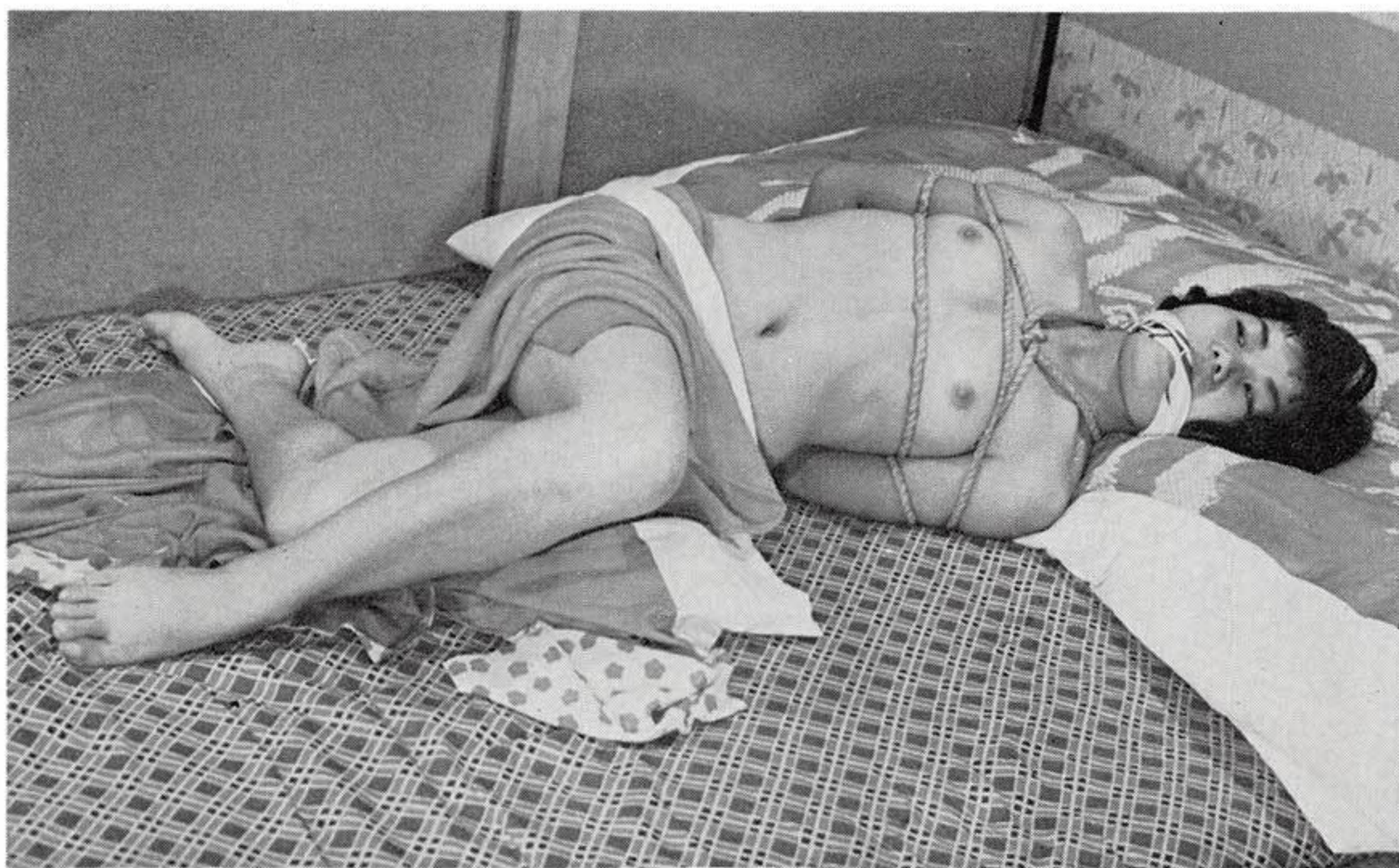
胡座縛りに羞らう





長襦袢と赤い腰巻





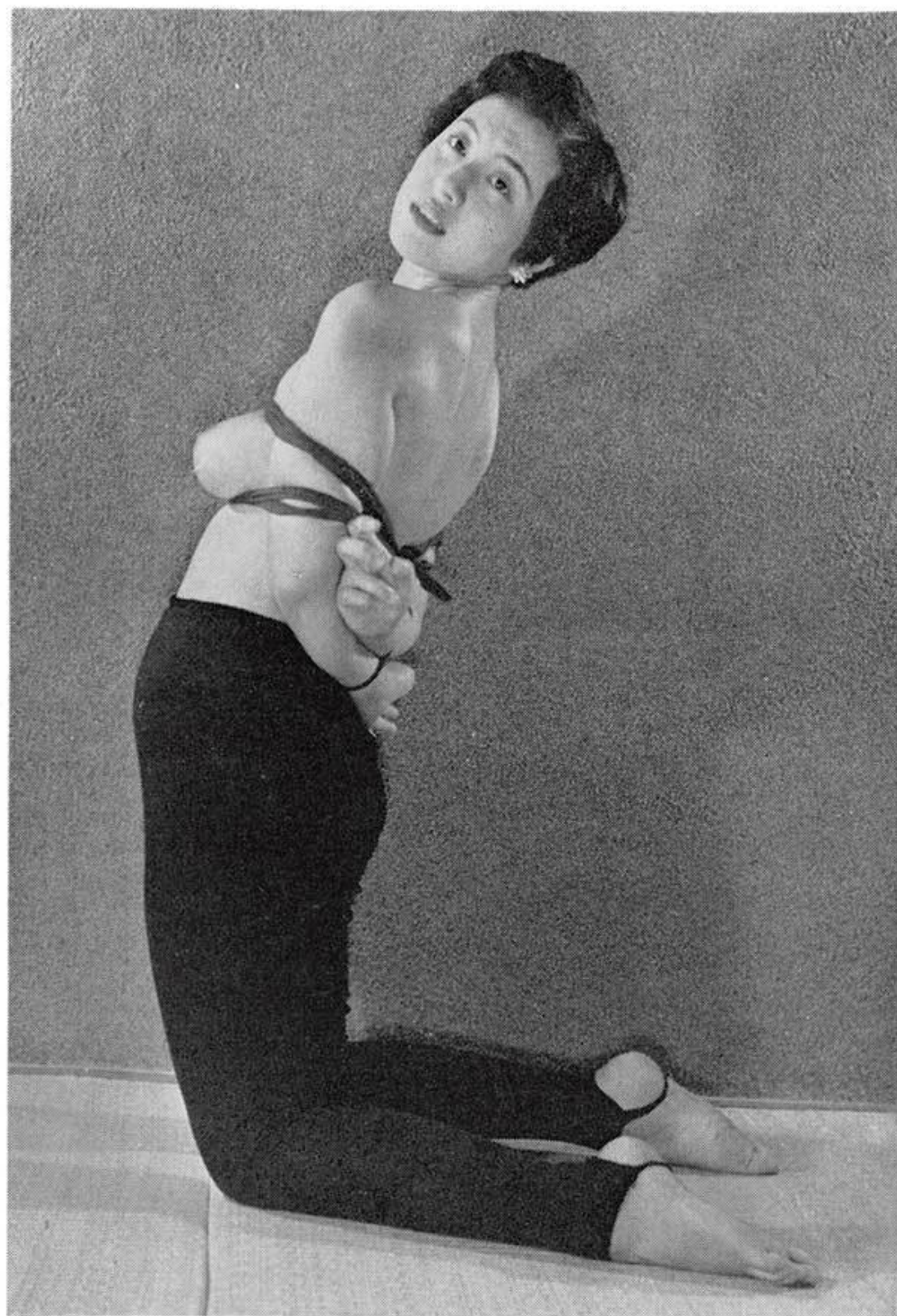
蒲団の上で悶える女

<田 中 芳 代>

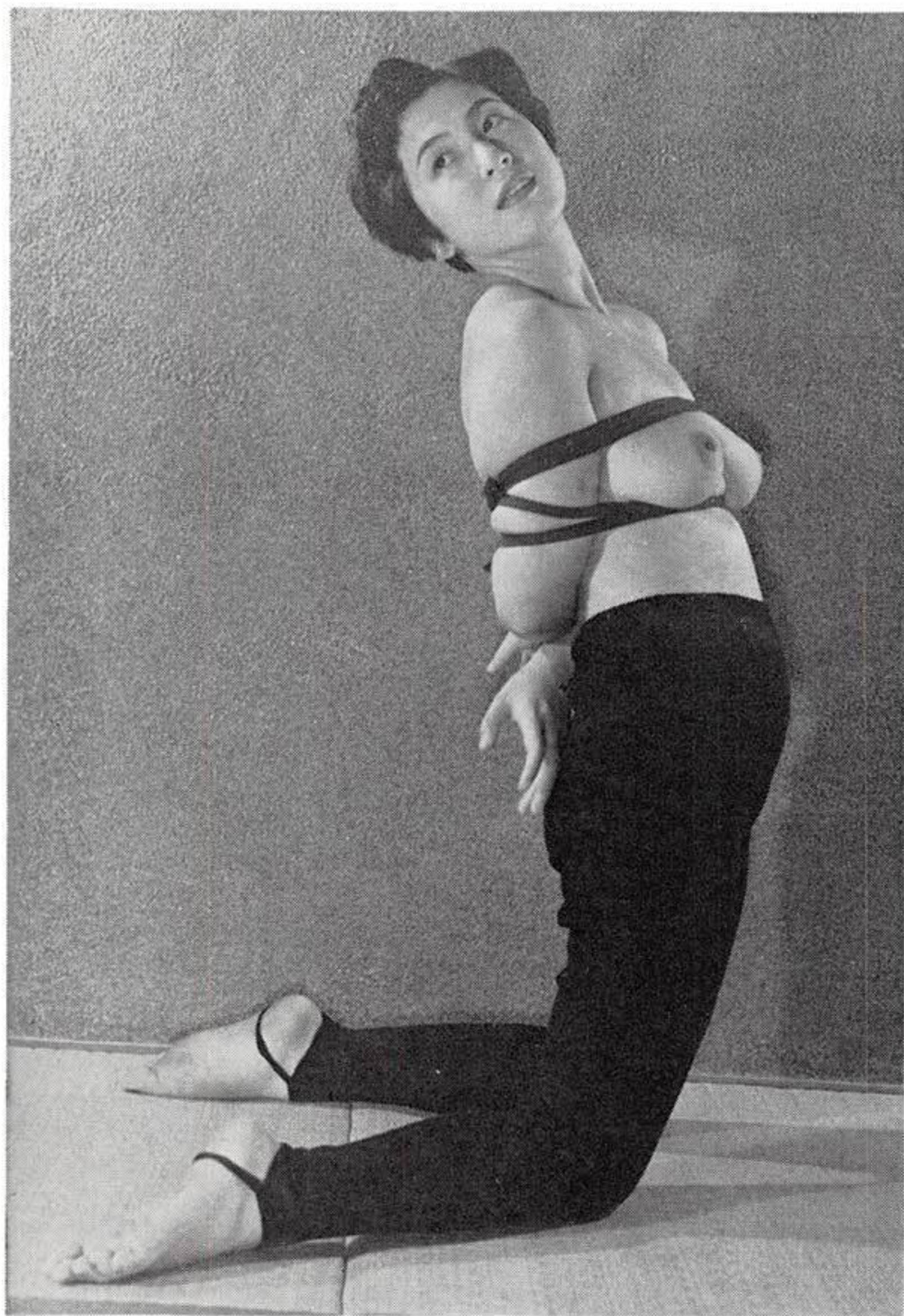


女子大生の縛られ姿

△益田房子▽

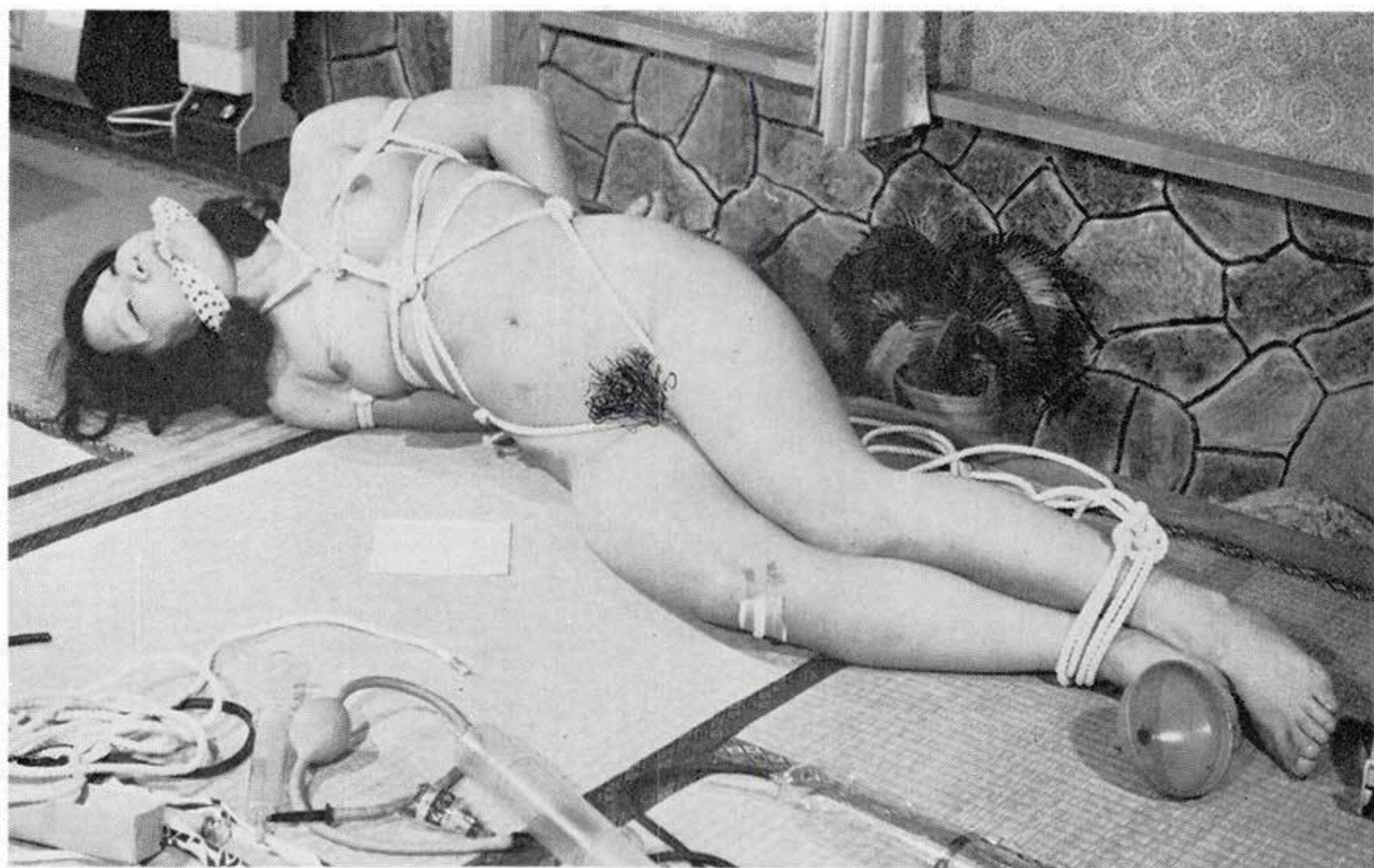


初縛りの恥じらい



△益田房子▽

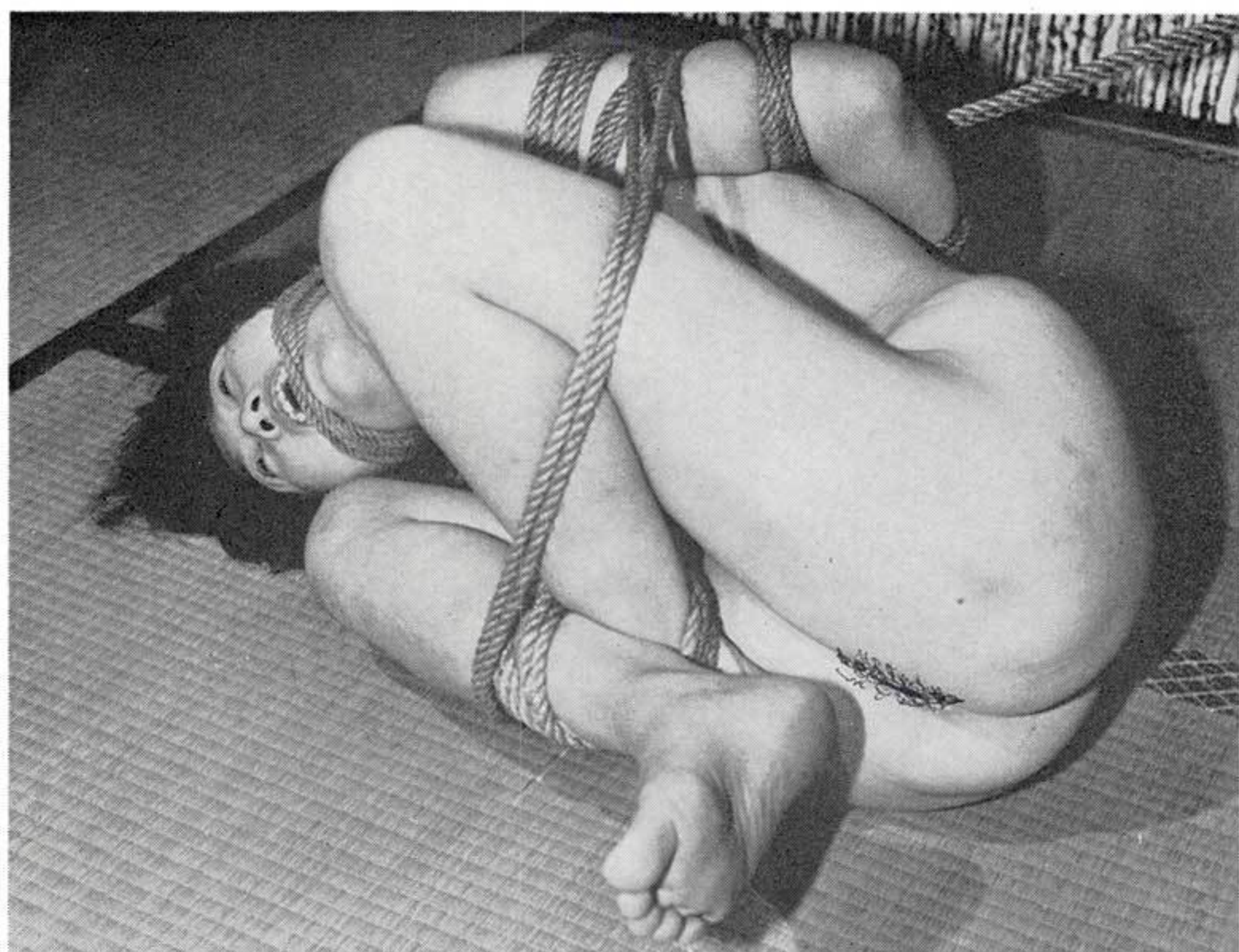




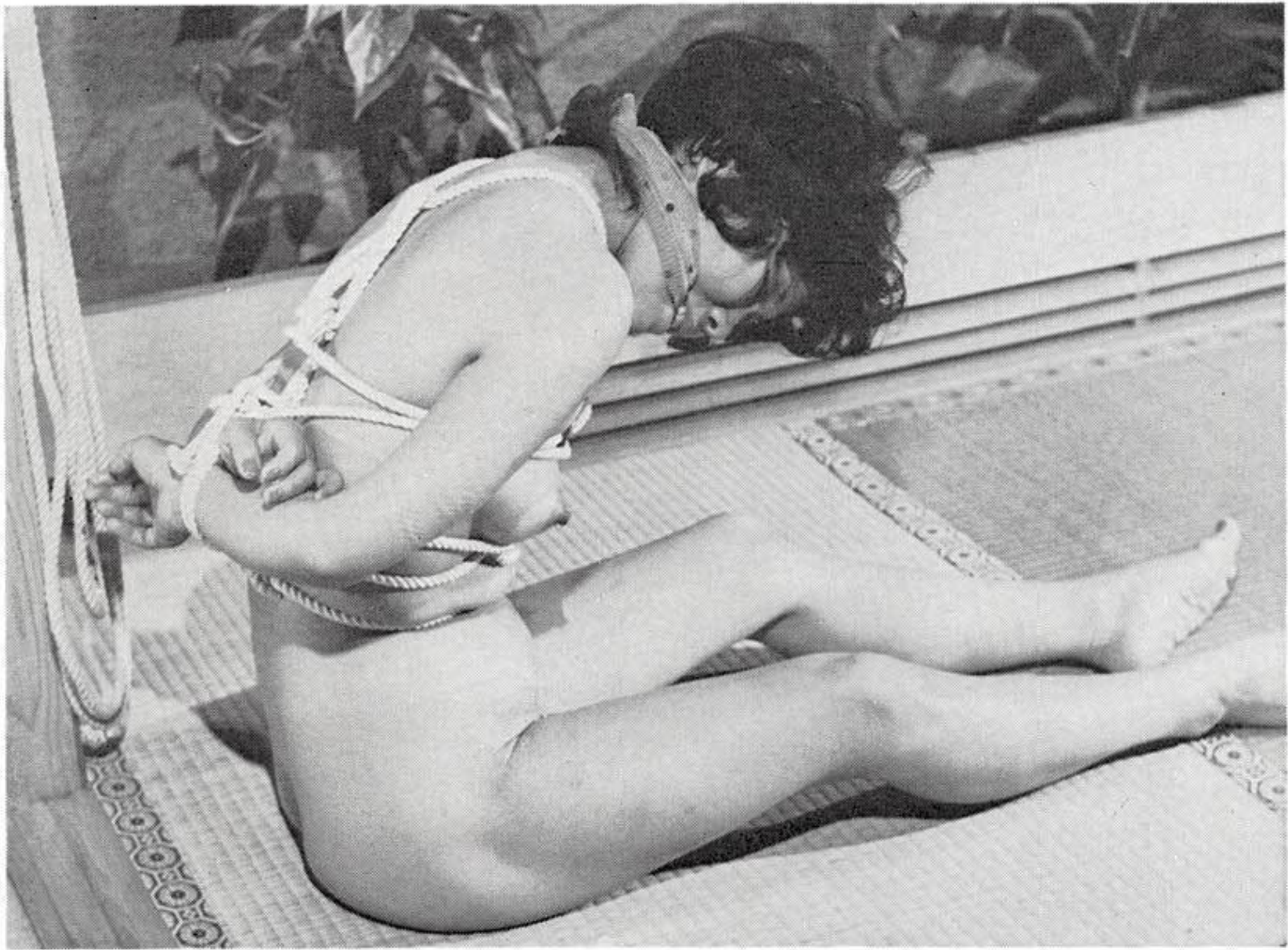
浣腸の宴のあと

＜笠井奈保子＞

強烈な海老責め



△三浦純子▽

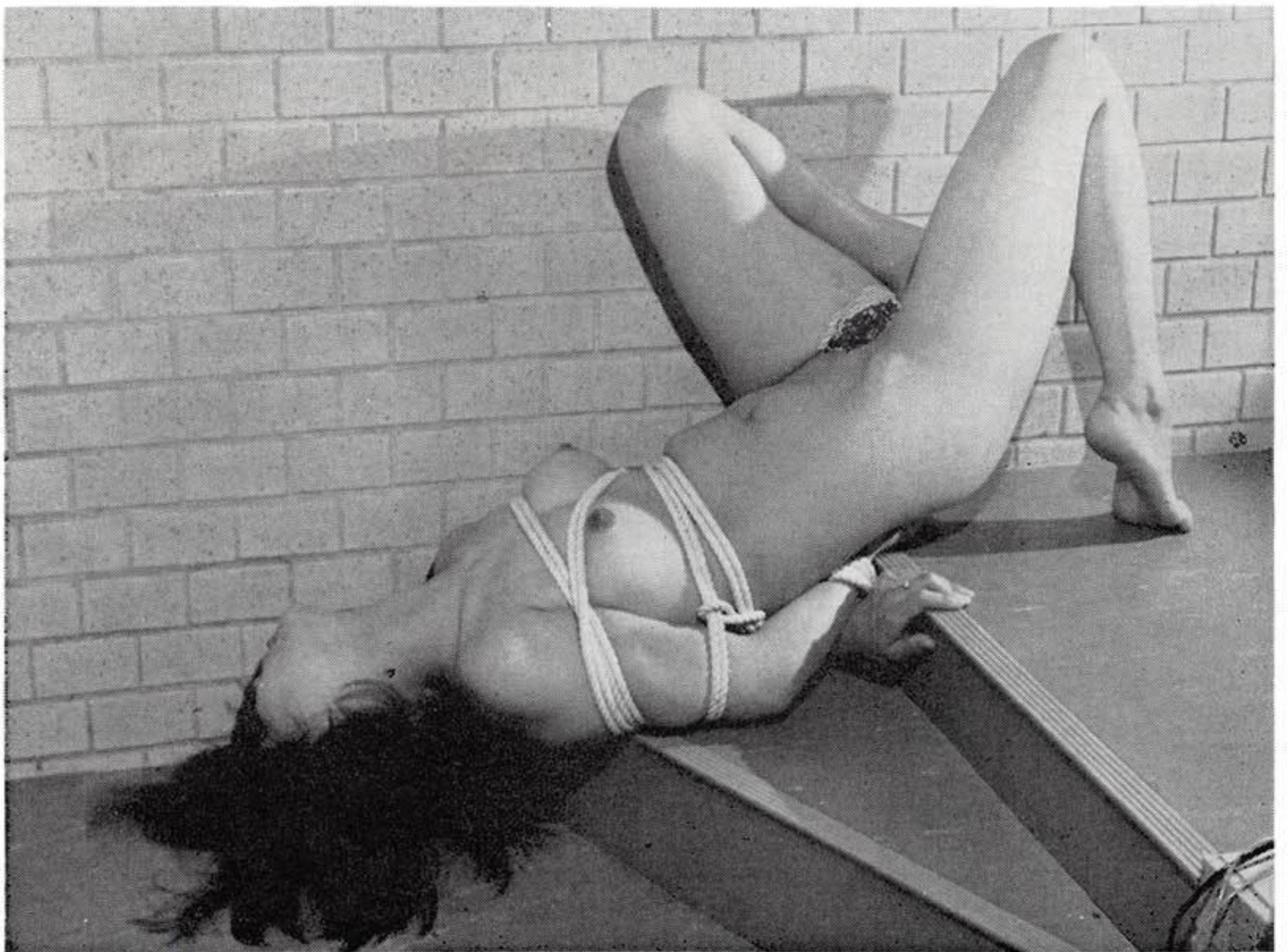


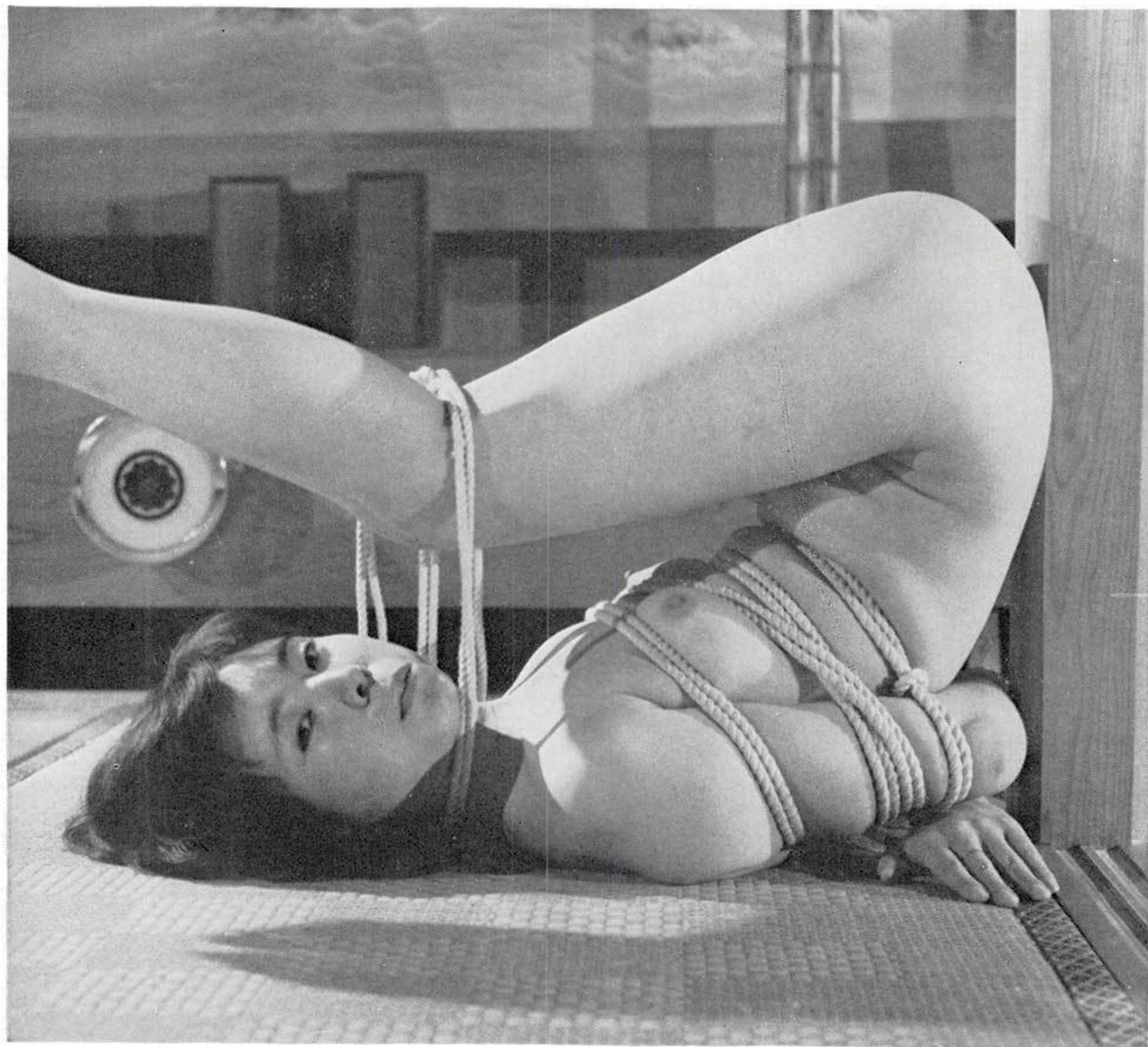
△玉木章子▽

責めの悦楽断章

転倒した一瞬

＜深田菊子＞



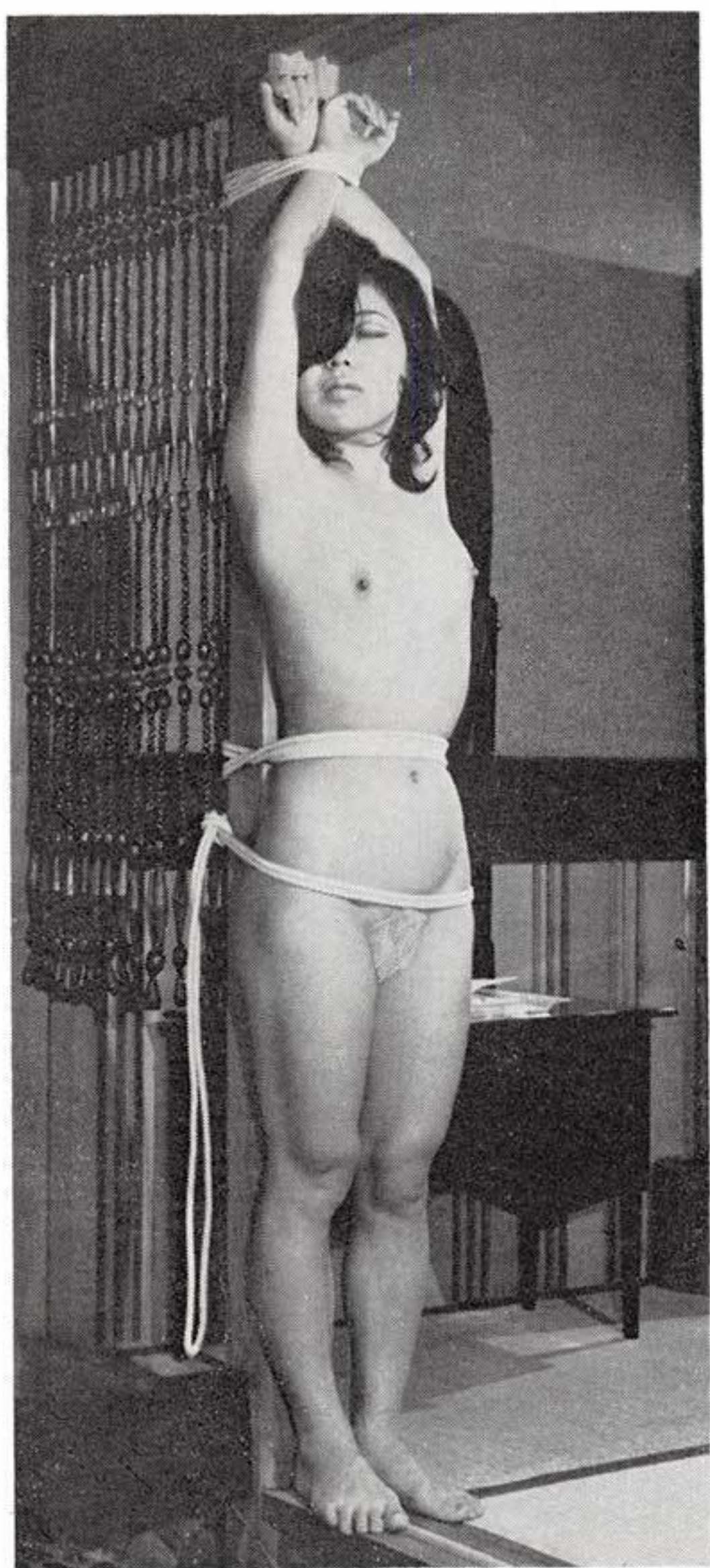


折檻される腰元

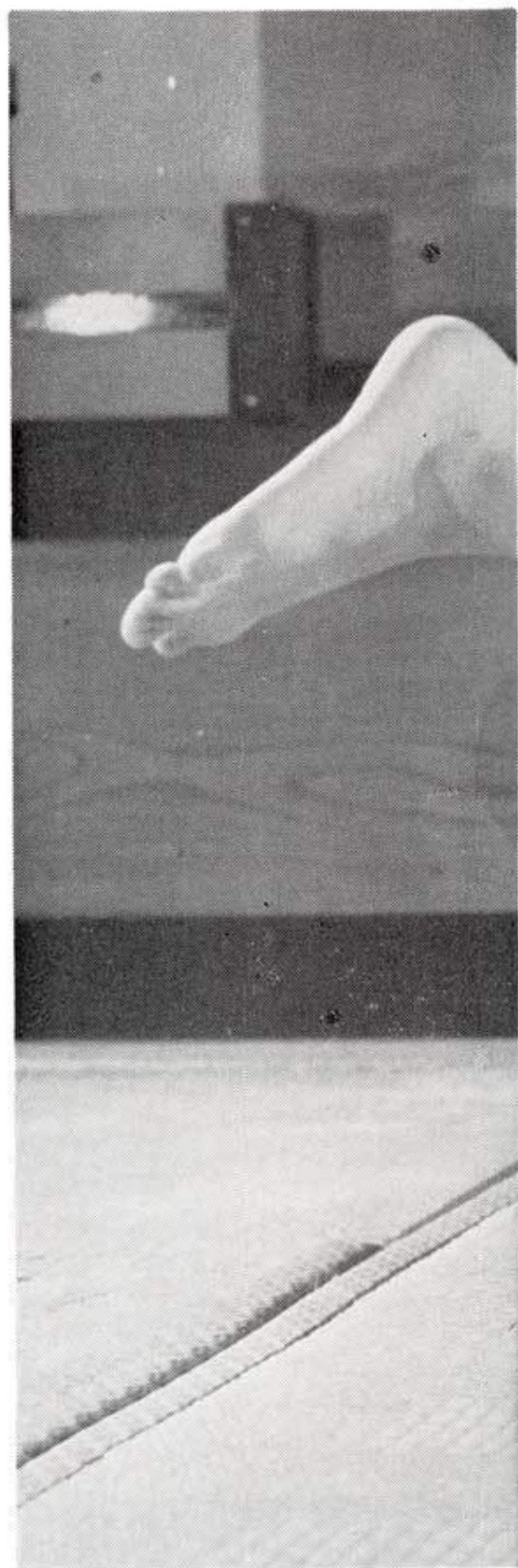


△村井知可子▽

被虐のポーズを晒して……



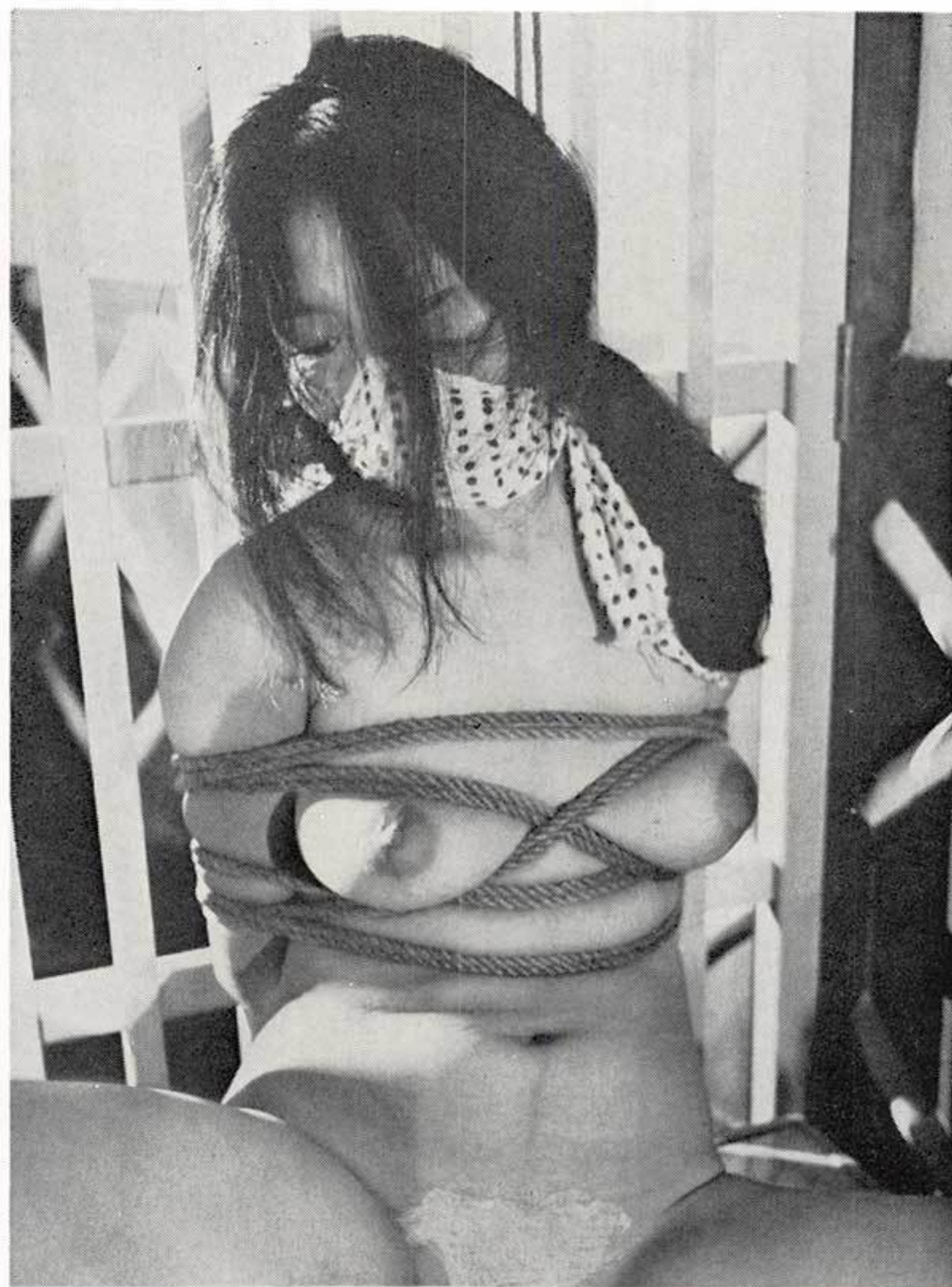
△鈴木千鶴子▽



△前田真知子▽

女体検身の緒

責め抜かれた末



△高村浩子▽

俎上の魚



奇

譚

ク

ラ

ブ

昭和四十八年三月号

(第二十七卷 第三号)
通刊 第三〇一号



水蜜桃のような双丘

—— モデル……左近麻里子 ——

淡い陽ざしを浴びて、逆光
気味に浮かびあがった瑞々し
い乙女の裸身を、ま新しい縄
が要所だけを無駄なく、きつ
しりと締めあげている。後手
首と乳房に縄が掛かっている
ために、無防備で晒されている
肉づきのよい臀部の二の丘
陵が、私にはこよなく魅力的
に、美しく見えるのである。
もし、この乙女にして、縄が
なかったとしたら、これほど
までに、私の眼を楽しませる
ことはなかっただろう。

(井上幸太郎・記)

黒い乳房

「M女浩子」を想う

諏訪大路 健



それに、小さなニュース（姉妹同居、転居、「御主人様」塚本氏を慕う、友人の出現等）誌上情報が刻々伝われば、一般読者は誰彼もが次第に諦めざるを得なくなっていくでしょうし、貴嬢の嘆きは、「身から出た錆」のようなものではないでしょうか。

その、極言すれば「過失」といえる事柄が私にもあったのですから……天の川にさえぎられる七夕の夜空のようなお話を、秋の夜ながに書きましょう。

高村浩子さん。

昨年八月号、「妄想の自画像」に寄す——「誘惑」——の、筆者混同という失態以来、高村初子さんと貴嬢に陳謝、訂正も果たさぬままに一年が過ぎて、実のところ益々不誠実感に苛まれ、焦慮切迫さがつり、人知れず窮地に立つ思いがしています。

誌面寸借して、高村初子さんには、お赦しを乞い、その後の創作を拝唱させていただきたく存じておりますことも、この機に、お伝えしておきたいと考えます。

また、一旦は積極性を示しながら、その後

可憐なる人よ。

繁多忙殺、貧才鈍筆、等々は礼を欠いたことの申しわけにはならないかもしれません。

しかし、その身動き出来なかった理り^{ことわ}は後述に含めるとして、貴嬢が愚生の「楽我記」の提言にそってか、ともあれ達者に日々想念の筆を走らせ、寄稿常連に伍しておられたことは、毎号楽しく拝読しておりましたとお伝

えしておきます。そして、このたびの「雨の降る……」（十月号）を読むに及んで、古い投稿の準備稿に手を入れたのです。

「次々に誌上には若くて美しい云々」などと僻^{ひが}んではいけません。貴嬢のことを想う者は近くにも遠くにもいるのですから。

ただ、様々な難関があるように思われて、近づきたい思いにとらわれるのでしょう。

御無沙汰続きましたことは、浩子さん、深甚より貴嬢にお詫び申し上げます。

「よい人、見つけた！」とばかりに飛びついた年甲斐もない粗忽さが、そっくり跳ね返って来たような慚愧は、まず自分が驚愕したことの赤面狼狽で、その気鬱さからも脱けきれず、身辺の多忙、過労と重複して今日まで御無音のまま打ち過ぎて来たような次第です。何卒お二人共々、御機嫌をお直し下さい。

× × ×

さて——「誘惑」が陽の目を見させていただけの事は、私に全く清々しい思いと得意満面な気分を「奇ク」誌が、もたらしてくれました。おそらく原稿は「没」になるか、埋め草程度に使われる、と予測していたのにもかかわらず、トップという栄誉を賜ったのですから、「ヒヤ—ッ」と魂消る動転と歓喜が湧く感情は、貴嬢にも容易に推察していただけることでしょう。

しかし、それも束の間……編集部の御指摘訂正が末尾に見出されるや、奇ク誌を叩き捨てたくなるほどの羞恥と、以後、一顧だにしないくらいにの衝撃を味わったのです。

自分の散慢さを棚に上げ、おしなべて筆者は「仮名」の筆名を用いるとの常識から、ま

ぎらわしい名は避けてこそ当然。高村性を名乗った貴嬢にもチェックの段階で朱筆一つでどうにでもなる編集子の神経にも腹が立ったのは、偽りのないところだ。

「些細なこと……」と、貴嬢ばかりではなく、奇ク誌を通読する他の読者も嗤うかも知れません。しかし、こうした事にも「物を書く者の態度と難しさ」や人間感情のデリカシーがあることを知ってほしいと思います。

同時に、あらゆる意味での「責任」ということで、雑誌作りの難かしさ、をもです。

文字は、出版物は、世に出てしまうと後世にまで残る物となり、強烈な印象と影響を伴います。それ故、曲折しない自己主張を企図した文章には、特に心せねばならないものがあるのです。そうした文字使いの背景を承知で、殊更、問題にせずとも済みそうな事に触れ、私憤ある如く個人的感情を、ここで記述するのは、「公開書簡」と、ことわった多くの読者を意識したものだからです。

貴嬢ばかりではなく「奇ク」誌に集う投稿者全般、はたして印刷物が出来上がって行くまでのプロセスを知っているのでしょうか？もし、「割付け」という千差万別な原稿整理から始まる混み入った作業を経て、植字工が

「活字」を拾い、組版して印刷機に載るまでの、校正を含む面倒な行程を見聞きしていたら、一時的な妄想や願望希求ばかりの文章は書けなくなるか、なるべく簡略に記述しようと努力するなり遠慮して、そこに「奇ク」ならではの価値ある記事を掲載願うという、互譲の気持が生じて当然の筈なのです。

従って私は、奇ク誌上「無益曖昧」と思われる事柄は書きたくもなし残したくないと思っており、小説の分野に進出しようとは思えないのです。何分にも私は気促な投稿者であり、今のところ、期待される執筆者、又は原稿依頼を受ける立場の者ではありませんから一入^{ひとしお}そうした感慨を強くし、反省と同調を呼びかけたくないのでしよう。

その私の基本姿勢から云っても「誘惑」が公表される前に、筆者の誤認を指摘され至急変更、乃至は、加筆を要請されなかったかと「何故？」に、こだわり無念がって、編集子を逆恨みする一方、満天下に「恥晒し」させられた被害感が払拭されずにいたわけでは

また、もし仮に、あの数行の指摘文が「編集部だより」あたりで目についたものであったなら、被害妄想感生まれず「迂闊でした……以後、大いに留意します」と直後、各位



宛、陳謝を完了し、貴嬢には「誘惑」の補足と進展を促す貴嬢にも好まれそうな刺戟、挑発要素に溢れた文章を綴り続け、出逢いまで漕ぎつける努力をし、辻村・塚本両氏の後塵を拝したとはいえ、独自のレポートを、それこそ「奇ク」に寄与還元する成果と信じて、送付出来ていたかもしれないのです。

結果から見れば、この一年、私は沈黙し、貴嬢は大層、饒舌家になりました。

「M女通信」の連載は、貴嬢の成長、健在を知る上で好読物でした。それ以外では、このままで行ったら無理して書いていくという感じが押し出されて来そうで心配でした。

つまり話種^{ネタ}がつき「内容のない記述」に終始する危険。または、重複と錯誤が、ちらついで、M女どころか贅沢な我儉娘への変身報告と、なりそうです。（豪華な環境、ホテル遊び歩きを覚え、こうじゃないと没入、出来

ないなど、厚かましさが出てきては、浩子ファンは退却します）

片や慚愧混乱があつての一年間の私の沈黙は、はからずも人物考察に役立ちました。その結論からいっても、今回の誌上、再登場を必要と感じたのです。

もともと「誘惑」は、貴嬢の一文を読んだ直後に書き上げ、その翌月号に誰よりも早く「反響」として採り上げられることを欲し、私としては異例なほど早目に投稿したものです。一読者の「積極性」を高く評価していただけのなら、必ずや特別な計^{はかり}があるに違いないとまで自惚れた考えと期待があり、ただ、ひたすら「奇ク」が時の氏神であってくれたらと祈ること切なるものがあつたのです。

ところが、その「時の氏神様」は大変、意地悪でした。私の拙い文章が貴嬢に多くの読者へ「目汚し」で供される前に、怖れていた予告が繰り上がり、カメラ・ハントの大家、辻村氏の玲瓏な文章が掲載されたのです。

しかも、貴嬢の「奇ク」登場の曰く^{いわ}を思考し予感もあつた事柄さえ記事の一節に盛り込まれており、当座は氏の識別眼が狂っていて欲しいと思つたくらいでした。更にニュアンスから、所期の目的を遂げた貴嬢は、辻村氏

の前に二度と現れないばかりか「奇ク」誌からも遠ざかってしまう人、だと考えられたのです。——それから先「奇ク」を買うこともなさそうな人に読んで欲しいと願ったところでどうなりますか。まさしく「これでおしまいだ」とK Oくらった思いにおち、自分の投稿は採用されずに済むよう祈ったのです。

大家の作品が発表された後では、告白をした貴嬢への反響のあらわれではなく、単なるプレイ・パートナーも持たないマニアのたわごとか、良くいって奇特なファンレターとなるに過ぎず、新鮮味のないものへ価値転落することが判断されたからです。

運命的悲哀と時効化した無益感を自作に対して持ちながら、回収の取り下げを請求しなかったのは、原稿が保留^{プール}されているとは考えられず、没になったものと思ったせいです。

それでも掲載に感激したのは、ある時間、費やし、なけなしの知恵を絞った労作が活字化された満足と、「遠ざかる人」と思われた貴嬢には無縁でも、ひょっとして内容に共感し、名乗り出てくれる人が、いるかもしれないと、その反応の期待に望みをつなぐ手段が得られた楽しみへ置きかえられた為です。

ところが「ご無沙汰いたしました。私はま

すますS Mが好きになってまいりました」との「M女通信」で貴嬢が「奇ク」に戻って来たものですから、私は驚き、あわてだしたのです。

だが、いかんせん、失策失態感が、のしかかった下で、本業の多忙さは一段と加わり、趣味と片づけられてしまう「奇ク」への寄稿参加は、二次的以下のものと諦めざるを得なくなり傍観の隠忍自重を形作ったのでした。

皮肉なもので、表面、無為に流れた私を尻目に、貴嬢は驚異とも云えるほど大きく成長して行きました。未婚の母となりかけた現実体験もM化助成に寄与したのか、今日の姿はアブ感覚で云えば見事な成育と願望のコースが定まった稀有な「個性開花」と賞讃惜しみないところです。

顧みて、当然のことながら、貴嬢は私のことなど眼中に置いていないようです。また、



私の方にも「こっちを向け……従^ついて来い」という強制力は持っていません。ただ、あの「誘惑」が四葉の貴嬢のフォトで飾っていただけたのを、幸福のシンボル・マーク「四つ葉のクローバー」に想定し、時の氏神の御裁量の善き予告と思いつつ、貴嬢の志向と希求が私の嗜好と心情へ傾くのを期待して、永続的に見守るだけです。なにしろ「浩子は、家

の中にあって、私を責めて下さる方に、身も心も捧げきって、かしずきたいと、思っています」と心憎いばかりの哀訴を書く才女ですから、その「虜囚の生活」を与えると、どんな感応が示されるか興味をそそられ、私の生活圏内へ引き入れたくになります。

貴嬢も使った「二重人格」の文字は、殊更に、そうありたいと思っただけに私も好



きで、解釈や理解に差異はありましようが既にその生き方をしていると云えるでしょう。それも一つの体で、より多くのことを知りた^いと行動するための装いであって、知る人ぞ知るの尻尾を曳きずったもの。また、それでいいと思っています。「奇ク」誌に希求願望を供託する程度の「二重人格者」ぶりでは鰯の頭も信心次第と同じことですから。

でも、その演技的な使い分けで貴嬢が満足しようとしても、貴嬢の場合は酷な云い方ですが公刊誌上に「肖像権」を放棄した形で取り扱われた人であり、もっと鮮明な印画によって日本国中に知れ渡ったのですから、けじめをつけようとする「二重人格者」ぶりも、甚だ脆く露見し、隠そうとすればするほど、好奇な視線を浴びる結果を招くことになるでしょう。

この点で、貴嬢と私とでは、立場が大きく違っているのです。もし貴嬢が、街を歩いている時、勤め先で働いている時、見ず知らずの男性が「おい、ねえちゃん、ワイともSMゴッコせえへんかア」と声をかけたとして、それを、いやらしい、イケスカナイからと官憲に連絡し制裁を期待しても、実害がなければ「彼」は、せいぜい「変質者かもしれん」と

チェックされる程度で、平然としていられるのです。その時、係官に、じろじろ眺められ事情聴取などで恥かしい思いをしなければならぬのは、一連の「M女」語録」を、ものにした貴嬢自身であり、自業自得と冷笑されてしまうでしょう。

「奇ク誌」の上では「二重人格」の一面だとして、通用した表現が、一般世間では、その時に至って「あれは作りごとです」の抗弁を用いても通らないのです。

私が、貴嬢の飛びつきそうな字句を並べ、いたたまれなくさせ「コノ人、紹介して……ねえ、オセーテェ！」と編集長に頼み込む程の関心を湧かせるどころか、水を差すような事を書くシカツメらしさが、お判りいただけるでしょう。

誰にも書ける夢想の「ああしてやる、こうするぞ」では、私の先刻の「基本姿勢」が許さず、理屈っぽい……退屈だと思われても、それでもなお、という気にさせるなら、意志の疎通が、果たされた事を意味するとはばかり「お堅い」ことを書くのです。

「かしづく」ことを理想とする生活の実現は貴嬢が初夢を見て以来の交友交歓を熱望する人々と意気投合し、愉悦に耽溺した後で醒め

て想う私への追憶が、新たに芽生えてからでも、いいことです。

自身にとって清福な創世を希う心が萌え出した機に一報あれば、私は翻心なく貴嬢の要請を肯い、憂身をやつした苔の衣を、かなぐり捨てさせる地点から、私の表明した意図に沿い、修正を兼ねて順化してみます。その場合断わるまでもなく、日常生活のことごとくが「SMムード」のものであり、高村浩子の前

歴を忘れさす「矯正」でしょう。

高村浩子さん。

私は「白い馬にまたがった素晴らしいSの騎士」ではありません。「一人暮しの佗しき、淋しさ……」を忘れさせ「心が燃え上がるような、お膳立て」の中で、二十才を過ぎ青春のおもい定まらず彷徨する娘を「足なが小父さん」気取りで明日への希望を絶やすことがないよう育ててみたいと思っている四十に手



の届く男です。

現在、貴嬢にとって見ず知らずの小父さんが、今一番心配する事は、喫茶店のウェイトレスから更に転職してホステスへと、水商売の道へ踏み込んで行くことに、なりはしないか、という事です。年頃の娘の纏ったお金欲しさ、異性関係も次第に大胆となり、そこで手っとり早く目的が達せられそうな夜の世界を選ぶのがお定まりですから……その安易な選択が一生を大きく変えてしまう事になっては取り返しがつきません。

貴嬢が働きながら「奇ク」へ書く楽しみを続け、そこに欲びを見出して行けるようになるため「プレイに徹したい」を、ただ想念にとどめず、貴嬢が慕う御主人様が振り向いてくれない不満などを、大胆な冒険と、ささやかな報復的体験で補うことにして、ペンに躍動を与え、実録をものにすることも、して御覧なさい。カットは、それをそそのかすイメージ・イラストです。「足なが小父さん」の人物判断の機会ともなる小旅行記は、御主人様を刺激し「折檻」の口実になり、懲罰が冴えてそのあとの悦虐歓喜の告白「M女通信」を、一段と精彩、放つものへと、させて行くでしょうし「雨の降る……」かばそい想いに

二度と、おちこまずに済ませるでしょう。

今から十年前の「奇譚クラブ」を一冊、お送りします。マゾ女性の告白はないようです。「私を責めて下さい（東浦ひかる）」のレポがあり、何かの参考になるでしょう。

兄たり得ず父たり得ずの気取り屋小父さんとしては、貴嬢が淀みなく読みおこせるような文章を若々しい筆致で綴ることが出来るのを、我が身に於て羨ましいと思います。

私は近代演劇の父といわれるイプセンのドラマから芝居作りの楽しさを覚えた劇作家のはしくれなので、どうにも癖が抜けきれません。台詞の一つ一つに伏線がある凝縮文体が好みに合い、従って、この「公開書簡」も漢文読解のように、ルビ順、返り点戻りで読んで貰わねば、納得に至らないかもしれまん……つまり、この第二信と同時に、改めて「誘惑」の方も読み返していただきたいものと思っています。

憲法で保障された言論の自由、なかんずく「表現の自由」を最大限に活用、利用しておきながら「新憲法」を批判する挙に出て同性愛、無理心中を選んだ人……そこまで暴走的にアブの世界に溺れようとは思いません。もし私に、三島事件裁判を終え大阪に転任した

小父を「小父貴、ゴク로우サマでしたね……」と「堅物」ぶりを、ひやかす機会があれば、貴嬢の顔形、背恰好をモニタージュ写真風に脳裏に刻んで、幾内の在所に探し当てたいとも思うほどです——内に秘めた積極性ということでは。

だからと云って、その姿勢と情熱はSMPレイに飢えた者の喘ぎとは異なるものです。第一、SMなるコトバは好みません。貴嬢と同じように、それに代わる適切な表示用語を探しています。

男と女の両性の存在を確認し、その特質から見て能動と受動の相互関係をみつめ合うとき、A&Pの略表記でも十分同旨が伝わると思っています。アクティヴスト（積極者）なる言葉は聞いたことないでしょうが、それが溫和しい公刊誌上に限られたアブの世界のサディスチンと理解されたいと希っています。

本物のマゾヒストなど、綺麗なものではありません。被虐淫楽の果てに死が待っていた小口ヨネの話は不気味です。

貴嬢がつのる憧憬から自称「M女」を恥じないとしても、願望を……将来の生活設計を被虐淫乱のルートに乗せることはないでしょう。賢明な生き方を模索する過程で、充実感



M女よ、ペンを執り給え

市島夢路

M女よ。わが愛すべき奇ク誌上で、縛ってほしいだの、苛めてほしいだのとノタマイ、私の好き

心をナヤマセルM志望女性の方々よ。私じゃあネ、つい一年半ばかり前まで、アンタ達のそんなウレシイ言葉を信用しなかった。イヤ出来なかったんだ。そらマア根が好きときてるから、リクツぬきでドキドキもしワクワクもしながら読むんだけど、でもサ、なんたって活字だモン、おしりの女名前をネメつけながら、すぐに曲がったヘソが、しゃしゃり出てくるのを止めようが、なかったんだ。『ホントカイナ?』って。

でもサ、一年半前に、そのヘソ野郎を撃退することを覚えたネ。つまり、悟りをひらいたってワケ。『信ずるモノは、救われる』って……。べつにキリストさんのコになつたワケじゃないんだ。独りで悟ったんだヨ『疑わないほうがテメエのためだ』って。

なんたって、この奇クを読み、通信として呼びかける女のヒトがいるって信じるこ

とは、私の生理上ハナハダ有効な心理作用のガソリン的なネウチがあるもんネ。透きとおるように白くって、スナナリと、しなやかでほっそりしながら、ふくよかな手で『縛られて思いきり羞かしいメにあわしてもらいたいと思います』とか、なんとか書いている美女を想像するだけで、私じゃカッかときちゃうもの、すなおになんきや損ダワサと気づいたってコトなのサ。

M女よ。わが愛すべき被虐願望のオトメ達よ。願わくば書き続けタマエ、恋繩の艶文を。読ませタマエ、やわ肌のうずきを。私信であれば尚、良いが……。とにかく書きタマエ。

一年半の修練で、素直に『すなお』になれるようになった男が、ここに居ることを意識して……。つまりのこと、貴女にはレター・セックスの相手が、少なくとも一人は居るってワケ。この相手、とっても純情で、とっても義理堅く、とっても情熱的な美男子だよ、おカネはないけどサ。

でも、縄と、紐と、鎖は、いつも持つてるヨ。いつの日か誰かと……の憧れと一緒にネ。

ある青春を謳歌する体得であり、健康な肉体が求める情熱の発散を好みに合わせた限界内で、かなえれば、いい事です。

異性互助の精神性を尊重するところにバイタリティが生まれます。「M女」は堪能的な演技性、自己顕示だから、ほほえましいのであって「奇ク」も性犯罪研究の題材を提供しているものではないし、偏屈な人間から云うと「不良図書」も私には人間の知恵が溢れた宝庫であり、善い娯楽誌です。一筋のチョロチョロ縄もA・Pの世界では人間信頼の象徴になるでしょう。

文字で表わし得なかった部分や趣旨は、挿入イラストで思惟して下さい。私の「公開書簡」は、これを以て完了です。いついつまでも御機嫌よくお過ごしになるよう祈ります。

貴嬢は何卒、御自愛專一に。

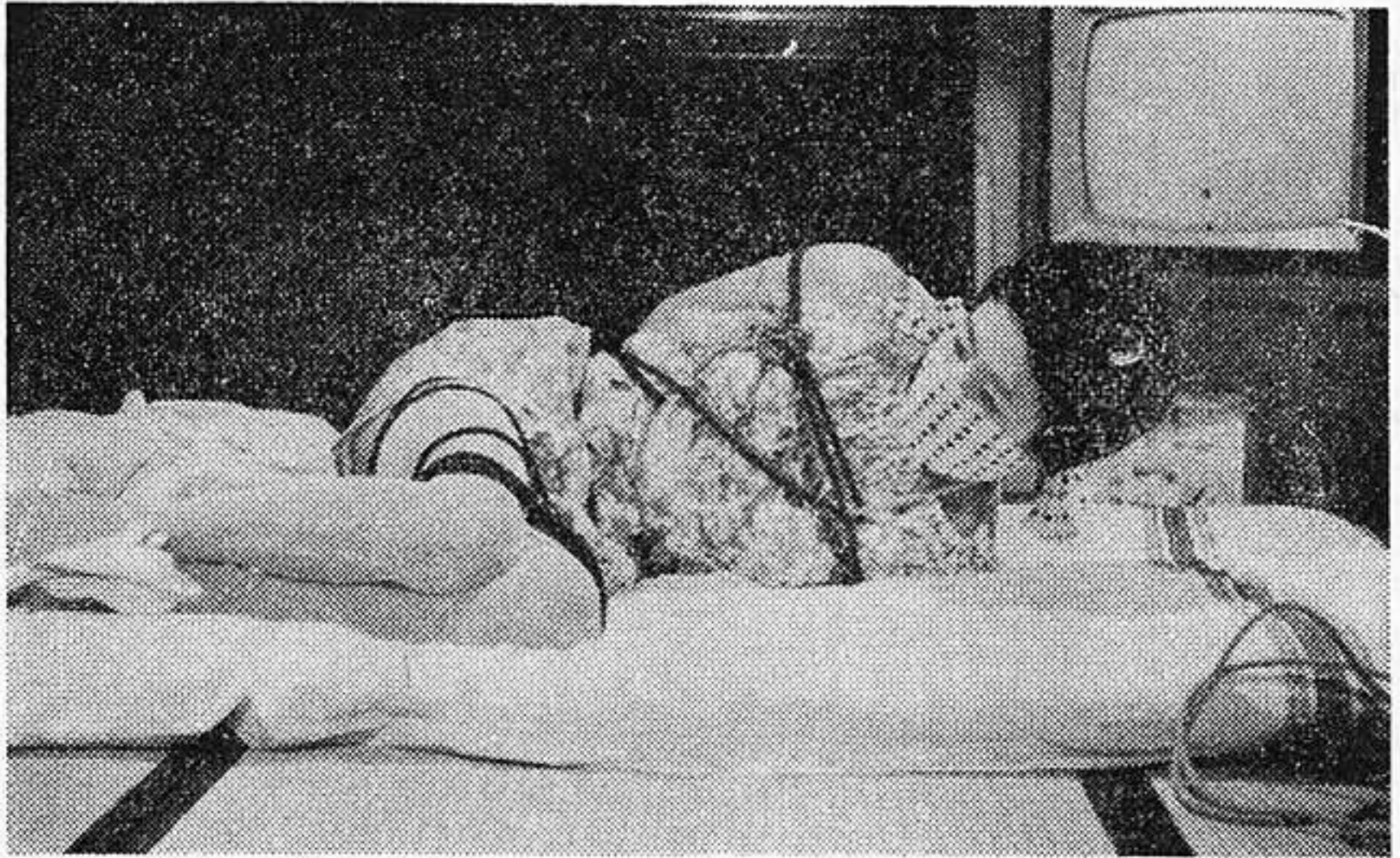
× × ×

追伸

「黒い乳房」は私の想念で「M」をあらわした調教中の基本スタイルです。貴嬢の豊かな乳房(ブレスト)は、黒く染めると見事な鑑賞品となるでしょう。

イラスト説明

①被虐の過去懺悔入口述録音
②カメラ・レポの写真特撮
③日常の緊縛修練志向督励
④真性交歓嗜好探究
以上、「M女浩子」の縄のある生活を夢想し、興味を供しました。



とき子の失敗談

私は、もう何年、自分の身体を縛り続けてきたことでしょう。なにごとも、このように情熱をこめてやれば女ながら相当の仕事がで

△告

白▽

とき子の自縛教室

山口 とき子

きたのに……。

自縛では、どんな人にも負けないなんていばっても、これを発表すれば世間の物笑いになるだけの淋しい孤独な研究成果です。そして、これだけの体験を積むには、いろいろの失敗がありました。

まだ、ときどき失敗しているのですが、この場合の失敗は、縛ることの失敗ではなく、解けなくなる失敗ですが、マゾの方は経験があるように、縛りはじめると夢中になって、あとのことを考えずに縛り、興奮し、最後にほどうとしたときには、もう手遅れのことがあるのです。

私が最長の時間、縛られていたのは、十二時間という体験があります。もう一年半ぐらい前のことでしょうか。よく人の眼にふれずに済んだものと今でも冷汗がでます。

その時分は、いままで、お話してきた、いろいろの自縛の方法を覚え、自分でも、スムーズにやれるようになって、より完ぺきになりますます夢中になっているときでした。苦しかった一夜のお話をいたしましょう。

○

その日は、七月中旬の蒸し暑い夜でした。比較的、早く寝て、一眠りしてから、夜の一時ごろ起き、押入れから縄の宝物を取り出

し、自縛をはじめたのですが、いろいろのポーズで、二十枚どりのフィルムを撮り終え、一たん縄を全部ほどき、冷たい麦茶でも飲んでから、さあ、もう一度、縛られてから寝ようと考えました。

私の中に住んでいる一人の女が、もう一人の女を思い切り責めさいなんてみたいという気持が、その夜は特に強かったのでしょうか。

まず私は、できるだけ刺激的な姿になろうと、もう一度、鏡の前で、どぎついお化粧をしてから、真紅のブラジャーをつけ、同色のパンティーをはきました。（私はブラジャーとパンティーは、このようなときのために各色を揃えて持っています）

私は、いままでに、ご説明してきました順序で、まず、さるぐつわをしました。ガーゼを思い切って沢山、口の中に押し込み、その上から二重に腰紐で縛り、頬がくびれるままに締めつけ、その上から、これも真赤なネックチーフで目のすぐ下から鼻口にかけて覆うなじのところで強く結びました。

すぐ唾液がガーゼに吸われて口が、からからになってきます。用意した縄で身体を亀甲縛りにしました。胸から二の腕にかけて、ぎしり縛り上げると、股の間に通った縄が摩

擦して、もう夢中になります。

次に腰紐四本で、足首から太ももまで縛り太ももの紐は、ずり落ちないように亀甲縛りの縄につないで結びました。

自由なところは、ひじから両手までの間だけになりました。私は、もう夢中でした。それまでは解くときのことを考えて縛っていく用心深さをもっていた私も、その夜は、何かに憑かれたように後手に縄を何重もかけ、思い切って締めつけ、二の腕が身体に固定されているので、そうはあがらないのに、腕の痛みをがまんしながら、無理に両手首を引き上げては、余った縄を背中中の縄に掛け、そこで結び、また両手首に巻きつけては、別の横縄に通して結び、徹底的に堅結びにして力一ぱい締め上げました。

これだけのことをすると、全身びっしょり汗をかき、両手首は一寸も動かず、背中に横に通った縄に吊るされ、ひじは水平以上にあがって、文字どおり後手高手小手に縛りあげられたのです。

腕が痛くなるので、ぐっと引き下げると、胸に巻いた縄が引っ張られ、乳房の上下にかかった縄と首縄が締まります。

苦しくなって、また手首をあげると、首と

胸は楽になりますが、またひじが痛みます。

私は鏡の中を、のぞいて見ました。真紅の猿轡、真紅のブラジャー、パンティをした厚化粧の女が、首から足首まで縦横に、がんじがらめに縛られ、女ながら、どこにこんな力があったのかと驚くほど、縄は皮膚に喰いこみ、縄と縄との間に、はさまれた肉が盛り上がって、全身が凸凹にみえます。

私は不自由な身体をずらせて、背後を鏡に写してみました。きっちり合わさって縛られた両手首が高く吊り上がって、手首からの縄は、いたるところに搦まり結ばれています。

それを見たとき、私は、ふと危険を感じたのですが、まあ、なんとかなるだろうとの安易な気持もあって、自分の縛られ姿に陶然としていました。

棒のようになった自分を今度は、じゅうたんの上に倒しました。これもまた、大変なことで、膝をわずかに折り、肩をついて倒れるのですが、普通の横になるようなわけにはいかず、物を、どさっと投げ出すような感じでは、いささか、肩をうちました。

でも、自分の身体の重みで押しつぶされた乳房や二の腕が痛いので仰向けになると、今度は背後の両手が押されて痛みます。丸太を



転がすように、ごろごろと転がっては、肌に喰いこんでいる縄との摩擦に、私は興奮の極に達し、気がついた時には全身、汗でびしょになり、口からは唾液が溢れ、猿轡の下から首の方に流れてきます。

申し遅れましたが、私は女としては身長がある方ですが、あまり太らない性質（たち）で、バストとヒップは人並みですが、その他は、むしろ痩せている方かも知れません。スタイルだけは良いと、よくいわれています。そのため腕や手足などを縛った場合、肉

づきのよい人に比べて早くしびれてきます。そのときも刺激に夢中になりすぎて、気がつきませんでした。二の腕から手首まで、だんだんに、しびれてきていたのです。

特に床に倒れて圧迫されてから、急にしびれが上半身にひろがり私は、これはいけないと思って指先を動かそうとしたときには、もう指先まで、しびれがきて、自分の意思ではどうすることも、できなくなっていました。

私の自縛の方法は、最大限に手首と指先をつかって縛る方法で、ほどくときも縛った順序を逆にして、ほどいていくことしかないのです。ですから縛るときには、自分の意思で動いてくれた指先が、いざ解こうとするときに自由にならなければ、もう絶望です。

そして、このしびれは手首を縛っただけでは起こらず、まず腕を緊縛した場合——それも腕の下の方を強く縛った場合には、急激に

やってきます。

多分、血液の循環の問題なのでしょう。変な話ですが、よく強盗に入られて縛られた人が、強盗が出ていってから一、二分で紐を解いて届出るようなことがあります。これは単に手首を縛っただけですので、簡単に解けるのではないのでしょうか。

私なら腕の下の方を力いっぱい縛り、後手をつないでおけば、まず数時間は、ほどけなくなるだろうと思います。しびれた場合には、もう自分の身体の一部ではなく、なにか別のもののような感じになってくることは、皆さまも、お分かりのことと思います。

私は、今までの快美な夢も消し飛ぶ思いでした。急に、さるぐつわが息苦しくなりました。私は呻きました。いつもは日本手拭いのさるぐつわが、この晩に限ってネッカチーフです。これがまた、汗と唾液で鼻口に、びったり張り付き、窒息しそうになり、あぶら汗が流れてきました。

この哀れな格好で死んだら、物笑いになると思い、なんとかしなければと焦れば焦るほど気が転倒して、どうにもなりません。

もう三時半を過ぎたでしょうか。あと一時間ぐらいのうちに解かなければ、牛乳屋さん

がやってくるし、お勤めに行くにも差しつかえます。

私は、まず少しでも冷静になることに、つとめました。そして、まず猿轡をはずして、この息苦しさから逃がれることが必要だと思い、床に顔を、こすりつけてネッカチーフをはずすことを考えました。

ネッカチーフというものは、薄手の絹地なので、頬にぴったり喰い込んでいると、少々床にこすりつけても、すべて引っ掛からずなかなか、はずれません。

頬が、すりむけるほど、ごしごし、こすったりして、やっと鼻だけは出せるところまでして、大きく息を吸い、それからは一挙に、あごの方に、ずらし、口の中に突込んであった布切れは舌で押し出して、やっと一息つきました。

ただ、唇を割っている腰紐は、どうにも、はずれないので、それは噛んだままですが、大分、楽になりました。

倒れたままでは、どうにもならないと思いまた肩と膝とをつかって坐ろうとしたのですが、足を四力処も縛り、特に太ももに厳しく紐をかけているので、身を起こそうにも大変な苦勞です。

何度も失敗し、やっとベッドの足に身を、もたせかけ、足を前に投げ出したか、こうで坐れたのが、それから三十分も経ってからでしょうか。

このようなときも、足を縛っているのと、いないのでは、どんなに違うことか。私は足だけでも自由になれば、なんとかなると思いい、足首を、こすり合わせたり、膝を動かせたりしてみました。

一本の縄で、上から下まで縛ってあるときは、そのような事をすれば、だんだん、ゆる

んでくるのですが、その夜のようになんて一本一本の紐で四力処を、別々に固く縛ってあるのでは少しも、ゆるみません。とうとう足は、あきらめて、今度は手首を、なんとかしようと考えました。

気のせいかな、倒れていたときより、指先が幾分、動くような気がして、手のひらを拡げたり握ったりして、し



びれが、なおるのを待ちました。それと同時に、しびれるのは二の腕の緊縛だということを知っていましたのでそれを、なんとか上にずりあげようと、ベッドの足で縄を、こすってもみましたが、相手が丸いのと、肉に喰い込むほど締めつけているので、全く駄目でした。

そのような状態で、とうとうカーテンから外が白みかけ、夜が明けるのが分かるまでになり、私は泣き出したような気持ちになりました。

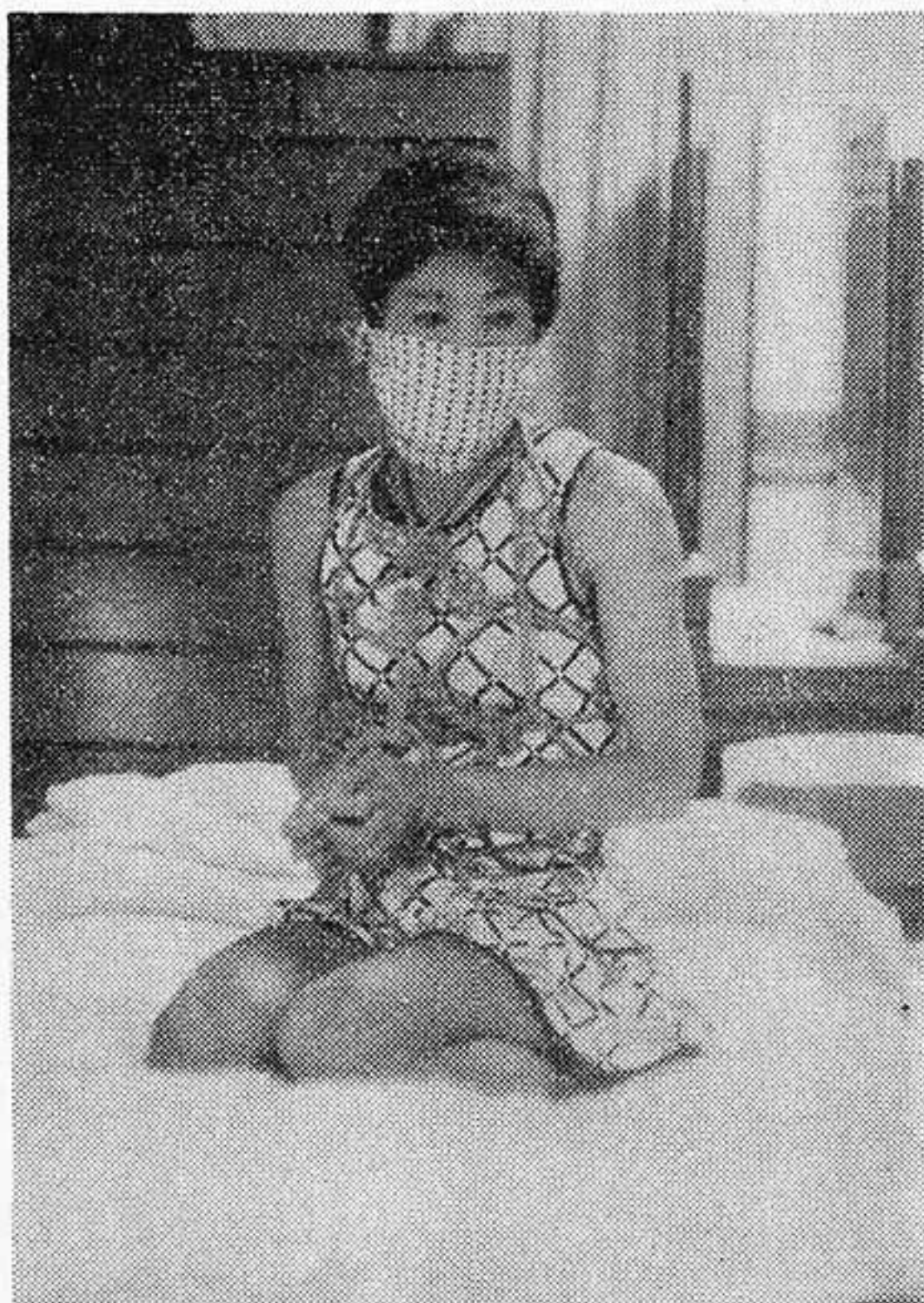
私が、もたれかかっているベッドの向こうに三面鏡があり、横目で見ると、わずかに私の姿が、うつります。あれまで私自身を興奮させた私の縛られ姿は、どうでしょう！

さるぐつわのネッカチーフが顎のあたりにずれ落ち、真紅のルージュで塗られた唇が、べとべとになった腰紐で割られ、それにもまして、目の上下に濃く画かれたアイラインが床にこすったのと、汗とで、ずれて緑色のアイシャドウと一緒に目目のふち全体を真黒にしているし、つけまつげが、はがれてピエロのような顔になっています。

このまま、解けなくなったらどうしよう。

私は、その時、はじめて自分の、いまわしい性癖を、うらみました。これまでも多少の失敗はしましたが、これほどの絶望感を味わい自己嫌悪に、おそわれたことは、その夜が、はじめてでした。

いまわしく全身に、まとわりついた縄や紐が、にくらしく、どうにもならない自分が、うらめしく、これが他人に縛られたものならともかく、自分で縛り、自分で苦しみ、自分



で後悔し、助けを呼ぼうとしても呼ぶことのできない自縛者の悩み。

“このまま解けなかったら”という思いが、私の頭を狂わせてくるようです。“落着け！落着け！”私は自分に、いいきかせました。

部屋の前の階段を、誰かが昇ってくる足音が聞こえてきたときには、私は全身を締め、じっとしていました。が、牛乳屋さんだったのでしょうか、ガチャガチャという音がして、やがてその足音も遠くなりました。

世の中というものは不思議なものです。一枚の扉の外の人、内の人、どんな状態で

いるのか分からないなんて……。

まさか若い？ 女が全身を縛られて（自分で縛って）ほどこうと、もがいているなんて牛乳屋さんも想像しなかったでしょう。もしこれが強盗にでも縛られているのなら、猿轡もとったところなのでしょが、反対に物音をたてないように、じっとしていなければならぬなんて……。

いずれにしても、このままでは何日も何日も……いずれ誰かに発見されるまでは……と思うと、再び私は焦りだしました。

もう一度、手首を動かしてみました。先ほどより、少しは動くようです。しかし、ころげまわり、もがきまわり、やたらに引っ張った縄は、いろいろなところにある、結び目を一層、固くして、普通感覚の指先でも、ほどこけなくなっています。

アパートの各部屋の人々も起き出して、朝の仕度をするような気配が、してきました。六時になったでしょう。外は、すっかり明るくなったようで、私の部屋だけカーテンが引かれ、その上に、電灯がついているのが不自

然に思われないかと、それが気になりだしましたが、縛られている身では、電灯の線を引っ張ることも、できません。

私は自分で縄を解くことは、あきらめました。といっても、他人に助けを呼ぶことも、できないことです。それも、寝巻姿や普段着で素顔で縛られているのなら、勇を奮ってアパートの人に助けをもらい、強盗の仕業にでもしたでしょうが、なにしろアパートの人達としては、普段の私からは想像できないような顔や姿でいる現在では、他人を呼ぶことなど思いもよらないことです。

私は、なにか刃物で縄を切ることを考えました。そこで鏡台の引き出しに日本かみそりが入っていることを思いだし、まず不自由な身体をベッドに、もたせかけながら、やっとのことで立ったのです。立ってから鏡台まで、ぴょんぴょんと兎飛びして行き、鏡台の引き出しを後手で引き出し、やっとカミソリを見つけてきました。しかしそれを持って縄を切ろうとしても、持つ

ことができません。

口に銜えようとしても、口には、まだ腰紐を噛んでいるので駄目で、たとえ、口に銜えても胸の縄を切ることは不可能です。やっとの思いつきも駄目なことが分かり、がっかりして鏡の前に、また、坐りこんでしまいました。

もう全身が一寸、動かしても痛みが走り、縛られることが、こんなにまで、苦しいものか。また、ブラジャーだけなので、じかに膚に喰いこんでいる縄が、これほどまで痛いも

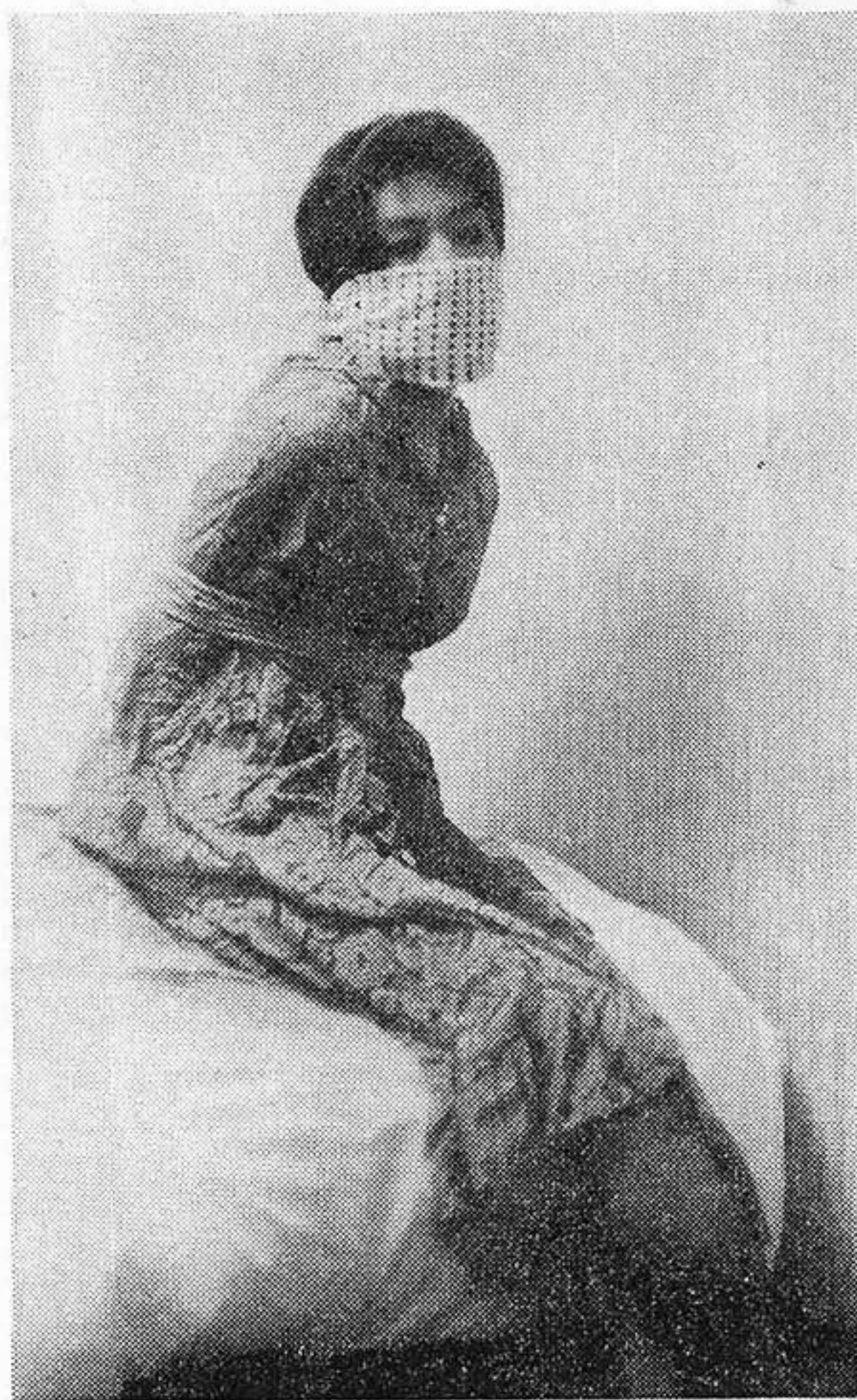
のか涙が出てきました。

階段を下りてくる足音が多くなり、アパートの人が出勤していく様子が分かりました。私も、もう出勤する時刻です。このままでは無断欠勤になります。

カミソリが駄目だと分かってから、私は遂方にくれました。鏡の前で不自由な姿で坐った私は、全身にまつわりついた縄を、うらめしげに眺めるばかりでした。ブラジャーの吊り紐が、だらしなく肩の方に垂れ、汗でしみができています。パンティも右左に縄がかかって、よれよれになっています。

もし、この姿を誰かが見たら、どう思うでしょう。いくらSMの愛好者の方でも顔をそむけることでしょう。髪の毛まで汗で濡れて額に、べっとり張りついて気持ち悪く、それをとることもできません。

八時を過ぎ九時になりました。その間、二回ほど玄関に人がきたようですが、そのたびに私は身を、すくませていました。しかし、ただ、じっ



と坐ったままでいたわけではなく足の方の紐を二カ処ばかり、はずしました。

まず膝の下の部分を縛った紐をベッドの角で思い切り、ずり下げ、それがゆるむと、今度は膝上の紐も同じようにずり下げました。膝上の紐は膝に邪魔されて仲々下に落ちなかったのですが、やっと下がったのです。

足首も何度かやってみました、これは結局、駄目でしたが、足首と太ももの紐だけになったので大分、足は楽になり、それから口に噛んでいた紐も、やっと、はずしました。これも唇に喰い込んでいたので苦労しまし



たが、顎を極端に引き、舌で口の中の紐を押し出しながら、これもベッドの角に引っかけて、ようやく首の方に、ずらし、やっと、さるぐつわが全部、とれたわけです。

さて、このままでは、いよいよ、どうにもならないし、喉が渴いて、ひりひりしてきたので、紐を解いた膝をつかって、柱に背をつけながら立ち上がり、ダイニングの方へ、また兎飛びしていきました。

昨夜、飲み残しておいた、お茶が湯飲み茶わんにあったので、それを口に銜えるようにして、のみました。お茶を飲んだら幾分、落

着いてきたのはいいのですが、今度は、お手洗いに行きたくなり、我慢できなくなつて、とても困りました。

トイレに行くことは、なんとかできても、股間に紐がかかっているの、どうすることも

きません（あとは、ご想像に、おまかせいたします）。

ダイニングで、お茶を、やっと飲んだ私はそこに包丁があることに気がつきました。先ほど、カミソリで失敗したのは、カミソリは小さくて狙いがつけにくいことだと思い、包丁ならば、なんとかなると考えました。そこに気がついたのはよかったのですが、包丁は流し台の上に張ってある棚に乗っていて、と

うてい縛られた身では取れません。なんとか取る工夫をしようと努力しましたが、身をのり出しても、口も届きません。仕方がないので身体をつかって、食事の時の椅子を、その位置に押し、足首を縛られたままやっと、その上にのぼって、背中で見当をつけながら後手で、それを取りました。

こう書いてみれば簡単なようですが、これも相当の時間をかけたのです。さて包丁を取ったのはよいが、どうやって縄を切るかが問題です。

自分で自分の縄を切ることはできませんので、私は流しの引き出しを開け、それに包丁の刃が横に向くようにして挟みました。このようなことも、身体と後手を使ってやるのですから、なにしろ、時間がかかります。

やっと、そこまでしてから、どここの縄を初めに切ればよいかを考え、以前の経験から、後手に縛ってある縄が、胸を巻いてある縄と連絡してある部分を、切ることにしました。

ここさえ切れば、ある程度、高手小手に吊られていた後手を下におろすことが、できるかもしれません。人間は、後手でも腰のあたりで縛られている場合には、比較的、力が入れやすいのです。

私は包丁の刃に身体を、もたせかけるようにして、その部分の縄に狙いをつけ、右左に身体をゆすりながら、切ろうとしました。包丁で、しかも目にみえない場所で切ろうとするのですから危険です。しかもブラジャーだけの裸で、ちょっと刃にふれるだけで傷がつくことになり、慎重に、どんなに時間がかかっても、いい気持で身体を動かしました。

そのような状態なので、なかなか縄は切れません。映画やなにかでは、このような場面では、簡単にぶつりと切れますが、実際はそうは、まいません。

あまり切れないので今度は、その部分を包丁の刃に通し、身体で引っ張りながら、ごしごしやってみますと、今度は手ごたえ？ があって、やっと一本、切れました。

最初の一本が切れても、まだ二、三本は連結してある縄があるので、まだ下におりません。しかし要領が分かってきたので、それから三十分ぐらいかかって、手首を吊ってある縄を切り、やっと手首が腰のあたりに下りたとき私は、これで助かった、と思いました。まだ後手のままですが、手首のところで結ばれているわけではないので、手首をこすっていけば自然に縄は、ゆるむのです。後手のいましめを、やっと、ほどこき終えたとき、もう、こんな苦しい思いは二度としたくない。今後、絶対に自縛なんか、やめよう……とまで決心したほどでした。

手首を前に回してみると縄のあとが真赤に、はれあがり、ところどころ皮が、すりむけているようです。

私は、足首の紐をとき、上半身の縄を、ほどこきました。首から胸、腕にかかっている縄は簡単には、ほどこけませんでしたが、ここまですれば、なんとか、いつもやっているの慣れていた

ます。やっと全部の縄と紐を、とり去り、首にかかったネッカチーフも、はずして、一息ついたのが、もう午後一時、近かったように記憶しています。

深夜の一時に縛られてから（縛ってから）十二時間余も縄に苦しみ痛めつけられた私。もう汗もかわいてしまって、ブラジャーとパンティーだけが、だらしなく一部分を覆っている状態のまま私は、それから三十分ぐらいたく息を吐きながら、お風呂に入

その日は無断欠勤のまま休み、お風呂に入



って、すぐベッドに入ってたまでは覚えていますが、次の日も頬についた紐のあとが気になって、病気といって休んだような、気がします。

夏のことで、それまではノースリーブのセーターばかり着ていた私が、それから二、三日は長袖のブラウスを着て、お勤めにいっていました。一週間ぐらいは、腕や手首についた縄のあとが、消えなかったからです。

このほかの失敗の例は、まだありますが、以上、長々とお話した夜が最も、つらい思い出であり、最大の失敗で、そのほかは、二日も休むようなことはありません。

ただ、後手がほどけなくなって、もがきまわり、二、三時間かかって、やっと解いたことは四、五回は、あったでしょう。また、前に書きました吊りの場合も、両手両足を縛って吊り下がったとたんに、足で踏台を倒し、宙ぶらりんのまま、どうにもならず、苦勞したこともありました。

このときは、後手は縄手錠を、ただけだったので、なんとか後手を脱してから、鴨居を通して腰を縛った縄をほどき、四十センチぐらいの高さから床の上に、どさっと落ちて可成り痛い思いをしたことがございます。

そのほか、全裸になって後手高手小手という姿で、お風呂に入り、やっと湯ぶねにつかったけれど、縄がぬれて締まって、ほどけなくなり、風呂桶から出られず、のぼせて困ったこともありました。

○

このような失敗を、どんなに繰り返してもまた、どんなに痛い苦しい思いをしても、その翌日には、もうまた、縄が恋しくなり、深夜、起きだしては、鏡の前に縄を持って立つ私。

私という女は、もう一生、こんな性へきが直らないのでしょうか。S・Mという言葉は近頃よく雑誌にも出てきます。私も恥かしい思いをして本屋さんで、その種の雑誌を買ったことがございます。

さすがに「これを下さい」なんて言えなくて、なるべく女の店員さんのいるお店で、さも誰かに頼まれたように紙切れに「……クラブ」などと書いて、それを見せ「頼まれたのですけれど」といって買っています。

でも矢張り、表紙などに女の人縛られてる絵や写真などがあると、恥かしいです。といっても、女の人縛られた写真を見るのは大好き。

私には、とてもモデルになるような勇氣はありませんし、自縄自縛するだけで十分、満足ですが、心の奥底には、自分の縛られた姿を人の前に出してみたいという気持もあることは確かです。

残念ながら私は男の方には、あまり興味がありませんが、もう年ですから、いずれは結婚せねばならないでしょう。

私の夫となる人が、どんな性格の人かは神ならぬ身では分かりませんが、それまでに私の性へきは今より一層、進んでいるとすれば心配です。

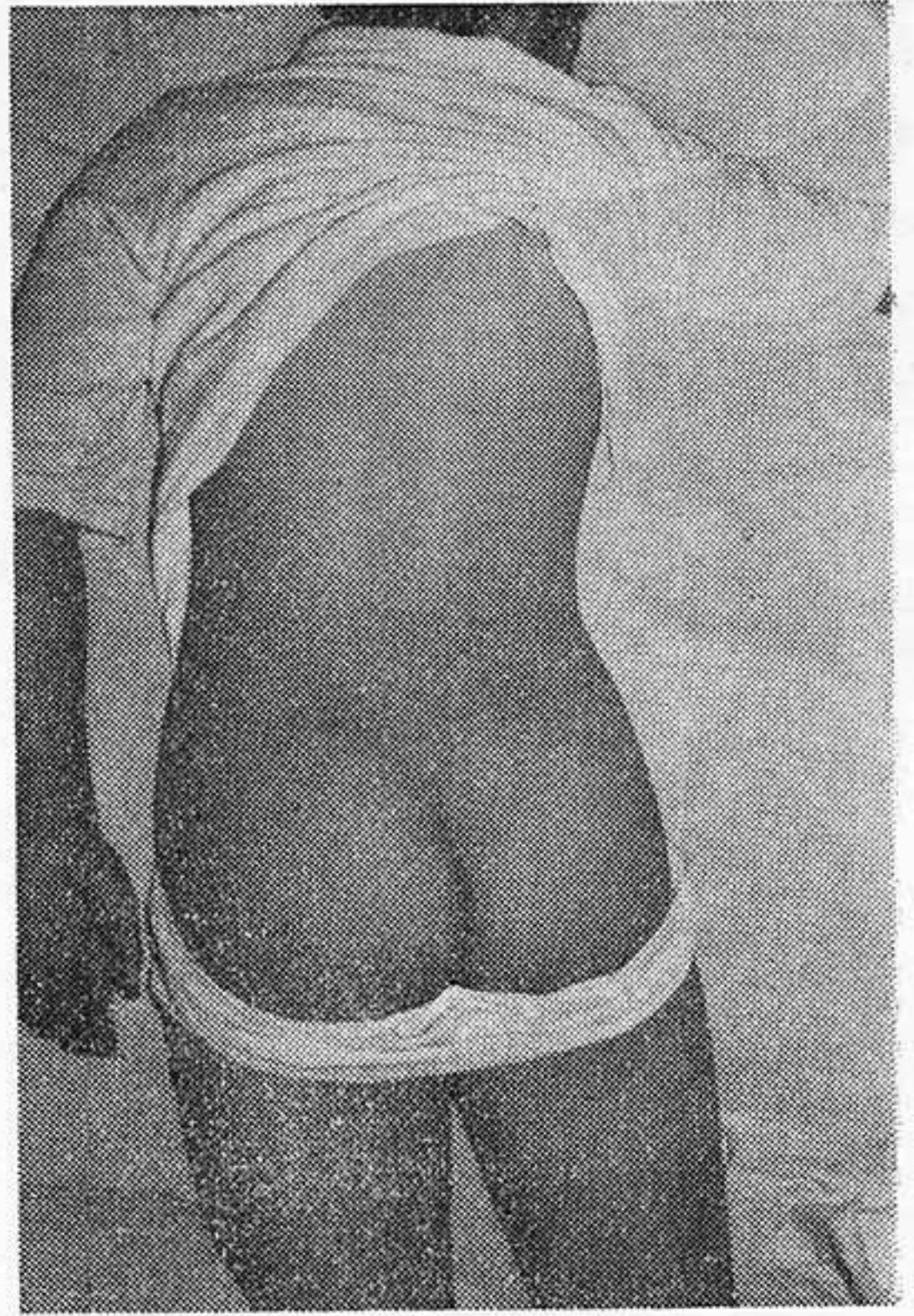
今、夜の二時を、まわりました。

この原稿を書いている私の姿。読者の皆さまに、ご想像いただけるでしょうか。不自由な、かつこうで書いているのですよ。

ネグリジェの上から上半身を緊縛し、前手に縄手錠をかけ、もちろん口には猿ぐつわをして、机の前に坐っているのです。

足だけは坐りにくいので、縛ってありません。

前に両手首を縛られていても、なんとか字は書けるものですね……。



告——白——

し
見せたい

妻の寝乱れ姿

沢田路夫

最近、特に私は早坂夫人、渡部夫人の写真に心が引きつけられます。

奇クの写真の数は、月を追う毎に多くなり読者の一人として、心から喜んでいゝのです。あの豊満な肉体の早坂夫人、露出好みの渡部夫人、更にセックス好きの佐野みさ子さん等……。この人妻たちは、まったく、私の心を熱く、うずかせる素晴らしい妖しさをもっているように思えます。

更にもう一人、これが結婚している人妻であつたらなあ——と残念に思う人に、近頃メキメキ頭角をあらわしてきた笠井奈保子さんがあります。(早く奥さんになって下さい)こうしてみると、私の好きな人は、どの人

も、皆、豊かなボリニウムを誇り、セックスの喜びを満喫している花咲ける人妻ばかりだということになります。

実際、私は相手の女性が、中年の太り肉の人妻であるということだけで、何かこう楽しく、妖しい期待感に心が、あふれてくるのをおぼえます。

それに前述の彼女達の夫自身が高度なSMの愛好者であり、その道のリーダー格の人達であるともなれば、なお更、彼等夫妻を、うらやましく思います。

夫も妻も、着ているすべてをかなぐり捨てて、素っ裸になり、思ひのままのポーズをとり、縛り、開き、撫でる、くじる、アヌスに

注入する、便を噴出させる、むち打つ……などなど。妻達は、思いきり股を開き、羞かしがりながらも、淫らな言葉をはきつつ、肉欲の悦楽を楽しみ味わっている。

そんな夫婦が、とても、うらやましいのです。私は長年、奇クを愛読しておりますが、家が狭いため本を蔵っておく所がなく、家族の不在の時、本をバラして、特に気にいった小説、奇クサロン、通信欄、素晴らしい写真の記事等のみを集めては、数カ月分を一冊にまとめて製本しております。

こうしないと、一冊だけでは、あまり厚い本とは言えなくとも、毎月ともなれば結構の厚さになるので、それをいくらかでも防いで

いる訳です。

これだけ好きな私ですが、残念ながら、妻の方は、さっぱりSMに関心がないので、実に淋しい思いをしています。

そこで、近年は、こっそりと妻の寝乱れ姿を写すことで、満たされない欲望を中和させております。

昼間の家事で疲れて、ぐっすり寝込んでいる妻の体を、あちこちマッサージをしてやりながら、夢うつつの妻の体からスリッパをた

くし上げたりパンティを脱がしたりします。

夫婦とは変なもので、案外に眠っていてもそんな時は腰を浮かして脱がしやすくしてくれるものです。(眠っていても、案外こっちの腹を読んでいるのかもしれませんが)

腰が裸になれば、しめたもので、あちこち揉みながら徐々に足を開かせて、あらかじめ用意してあるカメラを取りだし、フラッシュを一発、二発……。

こんな風に写した写真が、いつか、知らず知らずのうちに、かなり、たまりました。

堂々と乳房やお腹をだして、いやそれどころか、股を大きく開き、女の秘所をあからさまに露出させてカメラにおさまっている世間の奥様達の写真から比べると月とスッポン。ナンダ、こんなものと笑われるシロモノですが、私にとっては、秘かな盗み撮りの写真で

そんな程度のもので、貴重この上もない大切なものなのです。

只、こんな縛りでもない、又、SMの場面でもない写真なんです、平凡な人妻のスナップ写真としては、他人には見せられない姿であるということで、私にとっては、いわば貴重品という理由になる訳です。

ここで又、私の心の奥に、いくらか巣くっている欲望が首を上げてきます。

それは、そんな妻の寝姿を知らない他人に見せてやりたいという欲望です。

裸の妻の写真を人様に……と、そう思うだけで、とてもたまらない感情が、わいてきて抑えることが、できなくなるのです。

できることなら、奇クの誌上をかざる人妻達のように大きく脚を拡げさせて下腹をあます所なく鮮明に写しとり、四ツ切り位の大きさに引き伸ばして奇クの愛読者に見せてあげたい気持なのです。自分の妻のあられもない寝姿を他人に見せることで、喜びを覚えるというのは、私もいくらかのマゾッ気があると思えます。

読者の中でも、自分の奥さんを写したヌード写真や、愛の交わりの場面を撮っている方がいると思います。それを発表したいという方が多数おられると思いますが、そんな方々と文通したいものです。

奇クの写真は公開する関係から、どうして



も白で女を中心をかくしますが、読者としては靴の上から足の裏をかくようなもの。実際に歯がゆい気持です。読者同志の無修正のストリートな生の写真を交換しあいたい。その為には本誌が転送の労をとってほしい。そう切実に願う次第です。ただ、どこまでも、これは趣味なので、秘密は絶対厳守。他人の迷惑や不安感を起こさせるような行為は絶対にやめるべきで、その為にも奇クが間に入って手紙や写真の送届をして貰いたいものです。

読者の皆さん、いかがでしょう。

露出狂的な奥様方や旦那様方と、セックスについて、トコトンまでの表現で手紙や写真の交換をしたいのです。

私の妻が佐野みさ子さんや早坂夫人のようであってほしい……。そんなことは夢のような事ですが何よりも強く願っているのです。

そして、更に最終的には、他の男性が私達夫婦の間に入ってきて、三人によるプレイを行ないたい。たくましい体の男性に、妻を抱かせて肉欲にからみあう二人の行為を横から上から、斜めから、あらゆる角度から写し撮りたい。

興奮にあえぐ妻の声をテープにとってみたい。いや、もっとひどい事を想像します。それは全裸の妻が若い男性に背後から抱かれながら、大きな乳房を揉ませている……。そう

いった事を妄想します。

妻は、うっとり目をとじ顔をあげて若者のキスを受けています。

正面のこちらに向けられた豊かな乳房。白く螢光燈の光に輝く張った腹部。大きく広げた両脚。開かれた女性の中心……。私は、それらを見ながら大きな写真用パットを尻の下へ置きます。

カメラを三脚に固定させ、レリーズをしっかりと握って、時を待つ私の目に欲情に狂う妻の体の一部……。アヌスから茶色の固形物が見えてきます。

下へ向かって、それがたれ下がるのをシャッターの音が続けてパシャッ、パシャッ……。肉欲に狂い、身悶えする妻の体を押えつけて、きれいに排出口を拭いてやる私……。

夢は、果てしもなく拡がり、エスカレートしてゆきます。

私のこんな欲望も知らぬ現実の妻は、傍でぐっすり深い眠りに落ちこんでおります。

二児の母である妻は、今年三十五才の教育ママの賢母型。とうてい早坂さんの奥さんや好美さん、みさ子さんの様に奉仕妻（男性にとっては最高の女性）には、なりそうにもありません。

教育するには、相当年数がかかることでしょう。私一人の力では教育用資料もないし、到底難しいのですが、これからの人生を、な

んとか少しでもSMに、又新しいセックスについて、なじませたいと思っております。

それには、奇クを読ませるのも一方法でしょうが、それでは、「雑誌だから、面白く書いてあるだけよ」と、あっさり、けられるだけだと思います。それより生の同好者（私の様に妻の赤裸々な姿を写すとか、三人による夫婦生活の新しい刺戟とか、自分達のセックス公開Ⅱ又は、夫婦交換をしてセックスを楽しんだとか……）の体験者との文通、写真の交換をして、刺戟を与えながら、少しずつ、なじませたいと思っております。

世の夫婦の方々からの、貴重な体験記録をお教え下さい。妻に見せるための写真として奥様方の写真ばかりでなく、旦那様自身の写真も、お見せ下さい。

私は当年三十九才の会社管理職。小太りタイプの陽性な夫です。

妻は先程のべた様に三十五才、大柄で中肉タイプ。スタイルは上の方。フェイスも人並みに見える方です。

私の下手な文では意志が、まだ充分、書きつくせませんが、私の様な欲望に理解のある方との文通を、お願いします。

写真、二枚程、同封します。

こんなのは、どうってことはないものですが、他の写真には顔が写っているので、やめました。

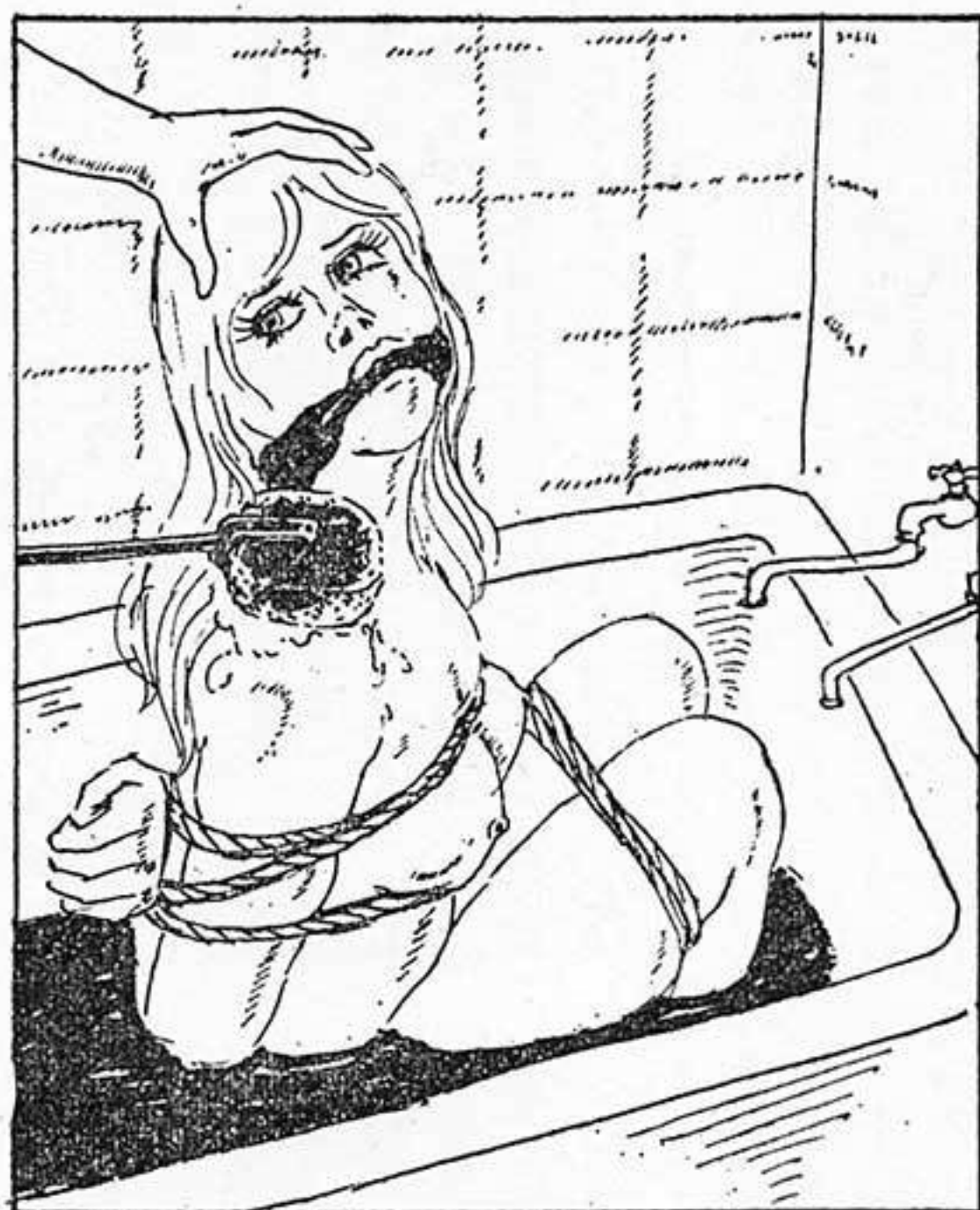
連載・奴隷妻小説

命預けます

六の章 悦虐萬華

柴 利 好

カット・志羽利也



22 春情炬燵牢

「さあ、聞いての通りだ。お客様向けの特別プログラムは、これで一先ず、止めにする。奴隷は引き続いてもっと、いじめられたいだろうが、後は奴隷時間が上がるまで、ゆっくりと、お前独りで楽しんでおくれ。さもないと、奴隷は野口さんに愛想を、つかされてしまうかもしれないよ。今日はこれ位にして置いて、その代り、これから、ちょいちょい

来て戴いて、お前の気の済むように野口さんにも責め上げてもらおうとしようや。分かったね？」

新吉は春子を、なだめるような口振りで話すと、聞いて、うなづく彼女に、なおも語をついで

「分かってくれたね。よし、分かったら奴隷衣装の略装に戻って、しばらく炬燵牢で過ごすといい。どうした。お前、泣いているじゃないか。なんてこったい涙を流したりして。野口さんの優しいお心遣いに感激してるのかい。それとも、もっとお仕置を続けてほしいからなのかい。まあいいや。俺には奴隷心理は良く理解、出来ない。さあさ、衣装略装の責め環を嵌めてやるから、起きた起きた」

夫の励まし声に春子が、ようやく起き直った時には、さしも戸外で全身を濡らした汗も殆ど納まって、その肌合は一層、艶やかさを増したように見えた。

「足が酷く汚れてしまったなあ。雑巾を取って来てやろう」

こういって新吉が持参した濡れ雑巾で、春子が未だ麻痺が残った、ぎこちない手つきで自分の汚れた両足を拭い終えるのを待って新吉は、直ちに次の行動に移った。

「さあ、歩け！ 急いで歩け」

と鎖を振り動かし、次の間を指さすと、彼女は「済みません」と、いわんばかりの素振りを見せて、ヨチヨチした、立膝の歩を進め

新吉が櫓の上のシーツを刎ねのけるのと、

「野口さん、炬燵に這入って一服なさいませ
んか。靴下のままでも、お脱ぎになっても構
いません。ご遠慮なくお楽になさって」

というが早いか、先ず自分から炬燵に素足を踏み入れる。その中から又しても一しきりをゴトゴト床の鉄網の軋む音が聞こえた。

浩介は一瞬ためらった後、意を決して靴下を脱ぐと堀炬燵に這入った。彼の素足の裏にこの前、彼が初めて経験したと同様な感触で春子の柔らかな肌が触った。しかし、その部分が身体の、どの辺なのか、よく分からなかった。けれども中を覗き込む事は、彼には彼

女が可哀想で出来なかった。比較的、広い面積と分厚い、その肉付きから判断すると、多分、横倒しになった臀部の辺りらしかった。

「時々足で蹴ったり揺すったり、してやって下さい。奴隷が喜びますから。それから奴隷は奉仕が好きなんです。よ。良かったら、こちら側の顔のある方に、お這入りになりませんか。実は小まめに動く舌と唇が、素適なサービスをしてくれますよ。如何です、一つ、お話しになっては……」

まさか、それに応じられる浩介ではなかった。それでも幾分、彼女の肌の感触に慣れた浩介は、恐る恐るではあるが、少し宛、足の位置を動かしては、触った春子の肉体の部分々々が何処であるかを、密かに想像して楽しむ余裕さえ、出て来たのであった。

新吉は立ち上がって、背後の押入れから数冊の本を取り出すと、再び炬燵に戻って、
「こういう本を、ご存知ですか？ 所謂 S・M 専門誌ですが、大変、私達の参考になります。一概に責めのプレイといっても、矢張り性慾の一変形でしょうから、その究極はセックスに係わって来るのが通例のようです。しかも例外的にはセックスに全然、関係なしに虐めること虐められることだけに喜びを感じ

る人達もいるのには驚かされます。大抵の場合、女は虐められる事を、相手の男性に愛されたいとか、現に愛されている証拠の一つとして受け容れているようです。そのために、縛られたり、鞭打たれたり、その他、様々な折檻を受ける訳ですが、それには、そうされる事を心から喜ぶ、つまり悦虐というんしうか。そういう性質の者の他に、自分では皆目、そうした悦びを感じないにも拘らず、ひたすら、犠牲的、奉仕的に努める女さえあるといえます。春子の場合は、虐められる事の楽しさと同時に、愛されているという喜びとを両方、感じているようです。新宿の店で働いていた時分でも、なんの情愛も湧かない相手にでも、縛られると結構、楽しく感じたといっています。そうした楽しさが、どんなものかは、その女の身になってみないと詳しくは分かりませんが、男女間のセックスを一応離れたものとして考えられはしないでしょう。それに虐められる楽しさには、肉体的な要素の外に、精神的な面が多分に重要な意味を持つとみえます。春子は、仕事としてモデルになって縛られるのと、奴隷妻になり切って縛られ、責められるのでは、その楽しさの内容に微妙な差違があると白状しています

もの。春子の場合は、長く激しい訓練の成果として、肉体的快楽を楽しむようになった訳ですが、それに加えて精神的快感が伴っているのです。それでこそ、長い奴隷時間を、よく辛抱し続けられるんですね。それから、長い仕置時間の間には、心から楽しさを味わえる時と、肉体的苦痛に堪え切れないで呻き苦しむ時とか、周期的に交互にやって来る事も話しています。これは、きっと女の生理の特殊性と関連があると思います。口の奉仕だって、私が、せがめば何時でも、いやとは、いわない位、従順な春子です。でも同じ勤めるにしても、自由妻としてよりも、奴隷妻でいる間に要求された方が、遥かに気持良く楽しく奉仕出来るともいっています。この本の中には、浣腸が特に女に好まれているように書かれてあります。ですが春子は、さほど喜びません。短時間の快感はあっても、その後の結果が、どうしても体力の消耗を避けられませんでした、もっともっと激しく長く虐められていたいという奴隷意識に副わないのでしょうか。切腹も良く出ていますが、元々私達は二人共、血を見るのが嫌いな性質なので、特に関心を持ちません。その代り、胴鎖でお腹が千切れんばかりに細く締めつける事を楽

しんでいます。反対に太鼓腹にばかり興味を持つ人もあるようですが。お互いに身体を傷ける事が、きらいなので、同じ拘束具でも、鉄製の手錠や足枷などは、買って持っていないまでも、実際には殆ど使いません。肌に鋭い錠縁が擦れて傷になる事が、いやだからです。本には悦虐の小道具として、針、クリップ、鋏、錐、嵌口具等の特殊な器具を使う例が出ていますが、身体を傷つけない我々には無用のものです。従って刺青など以ての外です。これは、私自身がヤクザの出なので殊に厭わしく感じるからなのでしょう。そのくせ、面白いもんですね。厳しい縄目に原因する皮下出血は全く別ものなんですから。縛り縄で作られた肉体の凸凹とか、変色の具合を鑑賞、玩味するのは、縛り責めに欠かせない楽しみです。条痕の多さ、深さ、変色した肌の色彩的美観を、二人して前例などとも比較して楽しむ事が、プレイの大きな目的の一つになっています。そんなにまで縄目の跡を楽しむ一方では、それを他人に見られるのが、春子は、きらいときてるんですから勝手なものです。私だって決して、それを望みはしません。相手が、いやがる事を無理矢理にやらせるのもS・Mの一方法に違いありません

んが、世間体だって一応は考えなければなりませんし確かに矛盾といえはいえる事です。春子も、この縄目の処理にはホトホト参っているようです。サーカス時代はタイツや肌シヤツで旨く、ごまかせたんですが、今は仲々むつかしく、出来るだけ長袖の物を着たり、ズボンを穿いたりして、なるべく肌を出さない工夫をしているのは、そのためです。包帯を巻くとか、太目の腕輪を嵌めたりもしています。そんな時、春子は、南洋やアフリカの現住民が羨ましいと、よくいっています。写真で見ると、首や腕や脚に一面、色々な輪を嵌めて飾り立てていますねえ。それも皆、身体に喰い込むように締めつけている様子を見て、こんな風にして日本でも暮せたらなああと二人で嘆息してるんですよ。春子は、ご承知のように、類稀な細い腰をしていますので、その腰の細さを強調するため、衣裳の上から革ベルトでギリギリに締めつけ、それを皆に誇示する目的で街に連れ出した事も度々ありました。はたから、凄いい細さねえなどと、ささやかれると、矢張り春子も嬉しそうにしています。それも家から、ずっと離れた処での事で、近所では少しでも自分の奇形を他人に見せまいとして、服装に苦心しているの

す。要するに羞恥責めに類する事を春子は余り好まないのです。間借り時代には旅にも出掛け、そこで色々な緊縛を楽しんだものでしたが、今は全く、そういう事もなくなりました。たまに何処かに行かないかと誘っても私はこの家で暮るのが一番、幸せなんです。だって聞き入れません。話のついでとってはなんですが、羞恥責めに関連して、春子の場合、体毛除去に刃物は使いません。一本宛毛抜きで抜いてやっています。普通なら寝かせてするところでしょうが、春子の場合特別な姿勢を、とらせる事もあります。アクロ責めの応用で、逆エビに頭と尻が密着する迄身体を曲げ、腹部を上にして、うずくまらせるんです。しまいには馬乗りになったりして抜いてやるんです」

23 お引き回し哀歓

一気に喋りまくった新吉は、ここで煙草を一服してから、更に話し続けた。普段は余り口数の多いでも、なさそうな男だが、事S・Mの話になると、まるで人が変わったように止めどなく話が弾む彼なのである。浩介も、それが好きだからこそ、訪れて来ている訳だ

から、話を遮るどころか、益々興味津々の面持ちで、飽かずに聞き入る。

「そんなに縄目を他人に見せるのが、いやなくせに、奴隷の奴は勝手な事を、いうんですよ。去年の秋頃だったかなあ。時代劇映画で女が後ろ手に縛られて番所に連行される場面を見た時、私も、あんなふうに縛られて外を歩いてみたいなんて、いい出したんです。私も、その気になって、映画から帰ったその晩に、春子を本当に縛って外出した事がありました。映画の場面のように、着物の上から高小手手に縛ってやろうかとも考えましたが、その時は流石に、それは出来ず、素肌を縛った上から着物を着せる事で我慢しましたが、当時としては、これで精一杯だったんです。先ず春子を全裸にして頸から腿の辺り迄、嚴重に菱縄を掛けました。行李の荷作りなどの時にする縛り方です。縦縄に沢山、結び玉を作って置いて、身体の前も後ろも、幾つもの菱形を作り、鏡台の前に立たせてやると、自分の縛られた裸の姿を前後左右から眺めて、春子の奴、すっかり昂奮してしまって、早く早くと急ぎ立てる始末です。その縛った素肌の上から、肌着なしで直接、襟の立った長袖の毛糸のブラウスを着せ、下は、いつものス

…… イメージギャラリー …… 『新入りです、よろしく』 …… 飯田ひろくに ……



ラックスで、さて外へ連れ出そうとすると、春子は、手がこの尽じゃあイヤだと駄々を、こね出しました。私も乗り掛かった舟ですから、別縄で春子の両手を後ろ手に組ませ、十文字に縛り上げてやっと二人して家を出たんです。星一つない暗い夜道は、縄つき奴隷妻の引き回しには、絶好でした。ただでさえ、人通りの少ないこの辺りの寂れ果てた夜道を春子は如何にも切なそうな思い入れ宜しく、後ろ手に縛られてトボトボ辿る様子の中に、奴隷妻の喜びを、はっきり感じ取る事が出来ました。初めての事なので、自然と足が街の明るさと反対の方に向かいます。こうして、かれこれ小一時間も闇に紛れて歩

き続けました。その内に、ふと私の心に面白い考えが浮かんだのです。こういう私の考えを春子は、いつも悪魔的というんですが、春子を、この尽で、一杯飲み連れ行く事を思いついたのです。私が提案すると勿論、春子は、いやがりました。自分で望んだ引き回しなのに、人には見られたくないんです。それも、もっともな事ではありますけれど、いくら説得しても、そればかりは許して下さいと路端に、しゃがみ込んで、動かなくなってしまうたのには困りましたねえ。結局、後ろ手縛りだけは許して、両手の自由を与え、その代り肌つきの菱縄は元通り縛ったなりで、私の行きつけている駅近くの飲み屋に這入ったのでした。夜も更けていましたので、客数は少なく、二人程、おりましたでしょうか。良く覚えていませんが、何しろ私も結構、アガっていましたから——年寄りの主人夫婦と少女一人のその店は、私の氣に入りました。その安心感で私は飲み出したんですが、春子の方は、それどころじゃあなかったらしいんです。氣がついて見ると、着ていたブラウスの毛糸の布地が薄かったもんですから、身体に纏った縄目の線が、すっかり、まる見えじゃありませんか。それが私には、夜道の暗さで

分からなかったので、タカを括っていたのが失敗でした。客は大分、酔って話し込んでいましたので、まずまずでしたし、主人夫婦も世間慣れているせいでか、わざと下うつむいて詮索がましい態度は見せませんでした。が小女にはマイりました。眼ざとく春子の異様な風態を見て取ると、すっかり興味を持ってしまいいはカウンターから客席に出て来て、私達の後ろに回って奴隷の縄付姿を観察し出したのには閉口しましたねえ。春子は遂に堪まらなくなったとみえて、顔を両手で覆ったきりで、箸に手をつけるどころではないのです。無理もない話です。仕方なく私達は勘定も適当にして、その店を出ました。小女は店先まで私達を追って出て、いつまでも後ろから見ているらしい様子です。その好奇の視線を背中に痛い程、感じながら二人は、さんざんな態たらくで逃げ帰ったのでした。この前貴方を夕食にお誘いした時、春子が珍しく反抗したのを覚えておいででしょう。その時の事なんですよ」

「成る程。あの時の奥さんの抵抗振りには、私もびっくりさせられましたもの」

と浩介が相槌を打った時、彼の足の下から春子の腿の辺りが、あたかもノックでもする

かのように、二度三度、動くのが伝わって来た。炬燵牢に這入ったばかりの時、彼女の身体は激しい汗が引いた直後だったせいか、大変、冷たく思われたのだったが、今では、すっかり温もりを取り戻して、櫓の中からムンムンするような女の体臭さえ感じられるのであった。

「どうしました？ 奴隷の奴が下で何かしてるんですね。そうでしょう？ きっと、さっきの疲れが大分とれて、私の話が気になるもんだから、奴隷意識が又々燃え上がって来てるんですよ。構いせんからウンと蹴っておやんなさい。何処でもお好きなように……」

新吉のこの言葉を聞いたとたん、下からの合図は、ピタリと停止してしまった。これも一つの奴隷意識からなのかも知れないと浩介は思いながら、

「屋外での引き回しは、その時限りだったのですか？」

と尋ねると、新吉は炬燵の中の足をポンポン続けざまに、蹴り動かしながら、話し続ける。

「この時が初めてでしたが、その後、何回もやっています。こうした冒険は回を重ねる内に段々慣れっこになって来るものですねえ。」

奴隷の奴は次第に、より以上の刺戟を欲しがるものですから、実の処、まいてるんです。まさか真昼間、人中でやる事も出来ませんから、どうしても夜分になります。今では月に一度や二度は奴隷の縄尻を引いて、隣の空地とか用水池の堤の下辺りまで出掛けて行って、立木とか棒杭などに縛りつけて楽しんでいきます。雨の晩なんかは特に奴隷心を喜ばせているようです。専門誌には、ゴム・フエチとかいって、身体中ゴムの衣裳で固めて雨に打たれる話が出ていますが、春子の場合は何も着けない裸縛りです。つまりゴムの感触などは問題ではなく、ひたすら緊縛を肌身に受ける事自体に、楽しさを求めているのです。裸の引き回しといえば、あの時は本当に楽しかったなあ。お前、覚えてるだろう？」

新吉は炬燵掛けを捲くって、中を覗き込みながら、

「ホラ、お前の浅草の舞台がハネた夜の事さあ。今、此処で話してしまっても良いかい？ それとも後で、お前が自分で話すのに取って置きたければ、それでも良いんだが……」

と思いやりのある言葉を掛けると、春子は炬燵の中から初めて声を出して

「お話して下さいな。奴隷妻春子も、ご主人

様のお口から、あの時の事を詳しくお聞きし
とうございます」

と甘え声で応答して来た。

「分かった。じゃあ、そうしよう。実は、あの時の野外引き回しは、全裸にしてやった最初の冒険だったんですよ。春子が舞台に出ている間は、肌に直接、縄を掛け通して、一日の中途では楽屋でも解かなかった事は、ご承知ですね。それでも、その日の出番が全部、終われば縄目は、すっかり解いて、キチンと着る物も着て帰ったものでした。それが、最後の晩には、縛り上げた俵で皆と一緒に飲みに行ったのです。縛った俵といっても肌つきの縄だけです。手足は無論自由です。お互いに連日の疲れが一時に出たんでしょう。良い気持ちに酔っぱらっていました。帰りの電車の中でも始終ウトウトして、二人して肩をぶつけ合う位、酔っていても、生酔い本性違わずで、それでも降車駅は間違えずに降りました。確か終電車だったので、私達二人を出してしまつた駅員は、改札を閉めて奥に這入って行った様子でした。その時、春子が突然オシッコが、したいっていい出したんです。無理ありません。ビールを鰯腹、飲んだんですから。私も実は催していた矢先でしたが

家まで我慢しようかと思つていたところだったんです。丁度、都合の良いことに、駅舎を出た直ぐ傍に共同便所があるのを思い出して二人して這入りました。

夫々に用を足して手を洗っている時、例の私の悪魔的考えが、浮かんで来たのでした。幸い深夜で人通りも途絶えている。春子を裸に剥いで、後ろ手に縛って引き回しながら家まで帰ろう。と、こう考えたんです。これは我ながら、素晴らしい思ひつきでした。計画を話すと、春子も一も二もなく賛成してくれました。二人共、未だ酔いが醒めていなかったからこそ出来た事なんです。私は、なんの躊躇もなく、春子の着物を、剥ぎ取りました。その時の服装が、前開きのニットブラウスに巻きスカートでしたので、脱がすのに手間は掛かりません。下着はスリップだけはいましたが、ノーパンなんです。裸に剥ぐと、その日の午後に縛ったなりの肌縄が、その俵しっかりと春子の肌深く喰い込んでいます。勿論、胴鎖もです。感激しましたね。薄暗い電灯の下で、春子のバッグから、舞台で使つた自前の細引を取り出すや否や、私は夢中で肌縄の上も構わず、更に一層、厳しくギリギリ縛りに縛り上げてやりました。

勿論、両腕は後ろに回しての十文字縛りです。それに、別縄を下腹からヒップの方まで掛け渡して、雁字搦めの目茶苦茶縛りでしたよ。後で家に帰ってから、この縄を解くのに一苦労した位ですから、どんなに酷い縛り方だったか、お分かりでしょう。夜路は全く人が途絶えていました。小川に沿った暗い細道の辺りは街灯ありません。それでも努めて暗い処、暗い処と選んで、家までの短い距離を、たっぷり時間を掛けるようにして、わざと引き回しの味わいを楽しみながら、二人で歩いた、あの深夜の、全裸の道行きは忘れられません。奴隷妻春子にとっても、本当に楽しい一夜だった事は申すまでもありません。その証拠に、縄で引かれながら、嬉しいワ！嬉しいワ！と何回、繰り返したか分かりませんでした。しかもその夜、一晩中、春子は遂々舞台用肌縄を着けた俵、過ごしてしまいましたもの。縄を解こうかって、夜中に何度も尋ねました。けれども春子は、この俵、縛られていたいと駄々っ子のように首を振って私に解かせないのです。肌縄を解いたのは、翌日の昼近かったと思います。肌縄を解いた時の、縄痕の凄まじさも忘れる事が出来ません。無理ありません。前の日の三時過ぎ、

舞台上上がる時、縛ったなりで、二十時間、縛り放しで置いたんですから。その跡が物凄く肌に着く筈ですよ。縄が全部、解かれて、肌に一本も残っていないのに、それでも上体が、真赤な細引で縛られてでもいるかのよう

に見えましたもの。それ程クッキリと肌深く縛り縄の跡が段になって、くびれ込んでいてそれが真赤に、今にも血が滲み出て来るのではないかと思われる程でした。この時の肌縄の跡が、完全に治りきるまでには、二カ月以



イメージギャラリー

『女 刑 務 所』

三鷹 I・O

上、掛けました。もっとも、後から後から毎日、新たな縄目が肌を責め続けていますから拭ったように綺麗な肌になる事はありませんがね。前の縄痕と同じ処を何度も縛られたために、内出血が皮下で重なって、色素が皮膚の下で沈着し、帯のように肌を染めている処さえあります。或は段々薄くなって自然に消えて行く縄の跡もあります。これは当然、その時に限った事ではなく、毎度、行なわれている訳ですけど、そうした縄痕を、一筋一筋、辿りながら、これは、あの時の縄目、これは、この間の縄目などと懐かしむ事が、私達の楽しみなのです」

こうして新吉が、全裸引き回しの一件を話し終わった時、炬燵の中から、

「アア！ ハアッ！」

というような、微かな奇声があったような気がした。それは、楽しい思い出を甦らせて、つい堪まらなくなって春子が洩らした、奴隷妻の甘い吐息に違いなかった。

炬燵に這入って、絶え間ない足先の攻撃で奴隷を遊びながら続ける新吉の話は、何時つきるとも知れなかったが、彼の話が途切れた時に腕時計を見ると、とっくに四時を過ぎていた。春子との約束の時間が、既に終わって

いるのに気づいた新吉は、そこで漸く奴隸時間終了の宣言をして、春子を炬燵牢から、引きずり出したのであった。

春子は顔を赤く火照らせ、尚も昂奮に震えていたので、手足や頸を繋いだ細い鎖が、小さくジャラジャラと鳴っていた。やがて解き放された鎖の始末も待たず春子は、身体の要所々々に固く革環を、いくつも嵌められた俣で、感極まったかのように新吉の懷に飛びつくや否や、その顔を逞しい夫の胸に埋め、両手を部厚い彼の背に回して、固く抱き締めながら、

「あなた！ あなたあ！ 愛してますわ。貴方を愛してますわ！」

と絶叫すると、傍の浩介の存在をも構わず半ば狂ったように嗚咽する、哀しくも優しい春子の姿であった。

24 悦虐万華

一回目のプレイ参加を契機として浩介は、新吉の呼び出しに応じて牧山家を訪れる度毎に、彼等夫婦と三人で、所謂、複数プレイの享楽に耽るようになって行った。

プレイの場所は、二間続きの座敷は、もと

よりのこと。台所、玄関、便所、廊下に至るまで家中、全てが使われた。独立柱や廊下の天井に渡された梁、押入れなどの利用法は先に述べた通り。台所の床下は、簀の子を一枚敷いて、揚板を頸回りに合わせて穴を明けた板と取り替える事によって、立派に半地下牢の役目を果たした。

風呂場の十字柱も、下部に別の横木を差し込むだけの簡単な作業で、キの字柱に改められる仕組みになった。風呂の水や沸し湯が、折檻の道具に使われるのは無論の事で、柱に縛られたり、吊るされたりした春子の全身に水責め湯責めが仮借なく行なわれた。縛った俣で風呂に漬けられて、長い間、放置される事もあった。そんな時には、身体が浮き上がらないように、予め、釜との境の簀の子板を取り出して、それに、春子の身体を縛りつける。そして、その俣桶の中に入れて、簀の子板を境の溝に嵌めてから、水を入れるようにした。こうしてしまえば、どんなに跪いても簀の子が、外れない限り、身体が浮く事はない。

戸外に於いても、庭全体が責め場を提供していた。例の布団干しの横木をはじめ、物干柱とか庭隅に埋めてある二本の棒杭が、縄尻

の繋ぎ場になっていた。境界の生垣や、点状する何本かの庭木の全てが、何れも例外なく縄目を待ち受けているのであった。

折檻の内容は、その殆どが細引による緊縛を主体とし、それに時折、革鞭の打擲が付加された。特筆されるのは、その折檻の時間が長い事と、被虐体位が、尋常でない事であった。春子は、アクロで鍛えられた柔軟な肉体であればこそ強要可能な苦しい姿勢をとらされ、しかも一時間も二時間も、その苦痛に堪え続けなければならないのであった。この事は、そうされる事を春子自身が積極的に望んだからであり、普通在り来りの程度では我慢出来ないという、強度な彼女のM性に由来するのであった。

廊下の高梁責めにしても、只単に両手首だけを縛って、その俣高々と引き上げ、両足先が、やっと廊下に届く程度にして長時間放置した。或は後ろ手に縛って置いてから首輪を梁に半吊るしとし、顔が仰向けに、のけぞる位にして、何時までも晒したりする仕置もあった。これらは、方法としては全く幼稚単純でも、この姿勢の俣、長時間責められる身にとっては、普通の柱縛りや吊るし責め以上の甚だしく苦しい折檻になった。

こうした至極、簡単な責めで、アクロ応用の一例に高梁を利用した、逆胴半吊るしがある。先ず春子の身体を胴を上にした逆エビに反らせ、両腕両足で逆四ツ手の姿勢で立たせる。次に上を向いた胴中に細引を掛けて、梁に繋いで半吊るしにする。縄を掛けられた当座は、逆四ツ手の手足を踏ん張って、暫くはブリッジの姿勢を保ってはいる。が、やがて時間が長引くにつれて腕や脚が疲れ、遂に力が尽き果てると、丁度、操り人形の糸が緩められたようにガタガタになってしまう。すると半吊るしの胴に全体重が掛かるから、胴が真二つに折れ曲がって、逆折り胴吊るしになってしまうのである。同様の逆四ツ手でも、両手首、足首を上にして一つに括り上げてのアクロ吊るしも、この高梁で行なわれた。兎に角、この梁が廊下にあるので、このような長時間のプレイの実行と観賞に便利だったからである。

アクロ責めの珍しい例に、直線開股逆吊りが挙げられる。これは開股逆磔刑の変形で、春子ならではのプレイに属する。先ず、長さ一米半弱の責め棒に、春子の両足を真横一直線に開いた姿勢で縛りつける。縛り方は足首膝の上下、高腿の両足、合計八カ所を責め棒

に嚴重に括りつけられるから、腰から下は全く身動き一つ、出来ない。ついで責め棒の両端に吊り縄をつけて一つに纏め、その尻吊るし上げる。春子の身体は一直線に開かれた両足を上にして、上体を下に逆さまに宙吊りにされるのである。この場合、両手はダラリと下げても良いし、手首を合わせ縛りにして重しを、ぶら下げたり、後ろ手に縛ってやっても良い。このT字形逆吊りでグルグル身体を廻してやるのも面白い。この責めは、室内では風呂場の十字柱の横木を、戸外では布団干しの横木を使って行なわれた。

浩介が訪問しない普段の日にも、もとより奴隷妻春子の生活は変わりのない被虐の明け暮れであった。彼女が一命を預けた新吉の意の俥に、その肉体の全てを任せ切り、捧げ切って、限らない悦虐の涯に浸り続けていた。しかもその合間に、新吉の生業の良き伴侶としての被虐モデルの様々なポーズを、長時間とる事を強制され、その苦痛にも堪え続けている彼女であった。従って、春子がその柔肌に縄目を受けない日は、月に一度もなかったのであった。

それにしても、このように縛られ、責め折檻されている時の春子の肉体的魅力の、なん

と素晴らしいことであろうか。小ざっぱりした身なりの時には、却って着痩せして、華奢にさえ見える彼女なのだけれども、一旦、裸に剥がれて、その柔肌に深々と縄目を受けた時の、春子の凄まじい変貌振りは、どうだ。その肉体は突如として圧倒的迫力に満ち、輝き溢れた豊艶さで、浩介の心を悩ませずには措かない魔女の肉体に化身するのであった。この時、既に浩介は「春子なしでは生きて行けない」とまで、真面目に考えるほど彼女に打ち込み、その肉体の魔力に取り憑かれてしまっていた。浩介が魅せられた春子のその肉体的美しさが、果たして万人に適合したものかどうかは速断出来ないかも知れない。それは他の多くの人達にとっては、殆ど、取るに足らない、又は一種異様な、変態的な、いわばグロテスクな妖美の範疇に入れられるべき性質のものとして、寧ろ顰蹙される態のものであるか分からない。けれども、兎に角、この時点に於ける浩介にとっては、彼女の肉体こそ何物にも替え難い、宝玉以上の価値ある存在なのであった。この価値ある肉体こそ、彼女生来の恵まれた資質に加え、新吉という名奴隷飼育者の手によってなされた、絶え間ない緊縛による、悦虐教育の賜物であった。

読切フエチ掌篇

黒

(ほくろ)

子

芳野眉美

カット・春川ナミオ



A

畳に俯伏せになって、両手足を拡げている
全裸の女体を8ミリが追う。

黒い長い髪が畳にうねり、静止したままの
女体に、8ミリはアングルを、かえていく。

畳目と白い女体のコントラストは、妙に艶

めいた情感が漂っている。

題は、黒子^{ほくろ}。

だが、裸体をアップにしても、どこにも目立つほどの黒子は見られない。

未成熟の、まだ幼い感じのする白い裸体は被写体にしては痛々し

すぎた。

ようやく、細い両足が動いて、小さなお尻が少しずつ、畳から離れた。

畳に両肩をつけたまま、お尻だけが持ち上がり、両膝が立てられる。

はっとするような露骨な光景に、8ミリのスクリーンは変化する。

くびれた、か細い腰から丸いお尻が、ぐっ

と折れ曲がったように屹^{きつりつ}立した。

若くて柔軟な女体であった。

8ミリが屹立した臀部の正面をとらえた。

新鮮な水蜜を半分から割ったような、甘味の富んだ白い果実を想わせる。

その果実は、あたたかくやわらかく、しつとりと潤んでいるように見えた。

スクリーンは、女体のもっとも羞恥に満ちた、犬の恰好をアップにする。

8ミリが黒子を、とらえた。

白桃のように水々しい、そして、淫らな柔肌に、大きな黒子が、ぽつんとあった。

8ミリは、そのまま停止する。

私は深い嘆息をついた。

これは、とても公開できるものではない。

映写機の音だけが部屋に響き、画面の女体は臀部を屹立したまま、微動もしない。

と、黒子が動いたように見えた。

黒い一点を凝視する。

黒子だけが動くはずはない。

眼の錯覚だろう。

が、また黒子が動いたように思えた。

カメラの眼に捉えられた女体は、淫らな柔肌につけられた大きな黒子を微妙に動かしているのである。

「わかりましたか」

と8ミリの製作者が私にいった。

「ワイセツでしょう、あの黒子」

画面が切れた。

映写機が空まわりする。

部屋に明かりがつけられて、紺の制服の女学生が、コーヒーを運んできた。

軽く会釈し、テーブルにコーヒーを置くとだまって出ていった。

「妻です」

と藤井が私にいった。

「えっ」

初対面であった。

「高校三年生」

「――」

「妻の両親は、高校を卒業してからの結婚を希望したのですけれど、卒業するのを待てなくて」

楽しそうに藤井は、いった。

「女学生妻も、わるくはないですよ」

返す言葉がない。

「もっとも、高校を卒業するまでは、妊娠をさせられませんけれど」

「あの……」

コーヒーを飲むのも忘れて、私は映写機にフィルムをセットする藤井にいった。

「今の8ミリのモデル……」

「妻ですよ」

「奥さん」

私は、また深い嘆息をついた。

「ワイセツでしょう、あの黒子」

という藤井の言葉が、前よりも重く、生々しく再生された。

「妻の黒子を発見したのは、初夜です」

次のフィルムをセットして、藤井はコーヒーを、うまそうに飲んだ。

「創作意慾が湧きましてね、帰宅して、すぐ製作しました」

結婚記念ともいうべき作品らしい。

「8ミ리를まわしながら、気がつかなかった妻の情念ともいうべきものを知りました」

藤井の説明が、よくわからない。

カメラで見られただけで、彼女は男に抱か

れたときのように、あえいだという。

そこに、藤井は女学生妻の情念をみたというのだろうか。

「次の作品も、モデルは妻です」

部屋が暗くなった。

映写機が、まわる。

たんぼの畦道を紺の制服の女学生が通る。

浅緑の葉を広げた、白い小さな花が咲き乱れるセリを摘んでいる。春の午後は、なんとなく、もやっとしていて、けだるい。

雑木林に包まれた小山の、細い谷間の^{あい}たんぼに、人影はない。

女学生が畦道で中腰になった。

襷の重なった紺のスカートがまくらられて、白いパンティが下げられた。丸い小さなお尻が可愛い。

女学生は畦道に、かがんだ。

白い小さなセリの花が、女学生の可愛いお尻を飾る。

と、一条の白線が弧を描いて、畦道に咲く

春の七草を濡らした。

春の、のどかな風景であった。

「次は夏の作品です」

スクリーンは怒濤の海を、うつしだす。

波に濡れる黒い砂と、真夏の太陽を反射す

る白い砂のコントラストが美しい。

海からあがった少女は、ビキニがはずれて小さな乳房がでてしまっているのに気がつかない。

全身を濡らしたまま少女は砂浜をかける。

乳房の白さが眼に、しみる。

8ミリは、海岸の粗末な便所を、とらえている。

砂の上につくられた、便所とは名ばかりの板の囲の中に少女は飛び込んだ。

細長く切られた板をまたいで、少女はビキニをさげる。

砂の穴に山になった汚物に蠅がうるさい。

まっ白なビキニのあとがついた少女のお尻が、ぐっとおろされ、激しい尿流が汚れた便所に、たたきつけられた。

わざわざ不潔なところでしなくても、海の中で自然にとけこましてしまえばいいのと思う。

「ワイセツでしょう、あのきたない便所」

藤井が同じ言葉を二度、使った。

「わざと、きたない海岸の便所を、さがしたのですよ」

製作者の意図が、よくのみこめない。

画面が、かわった。

黄金の稲穂が重たく首をたれる。

陸稲^{おかほ}の波がゆれる中に、紺の制服の女学生の顔が見える。

女学生は中腰になって、8ミリの方を向いて笑っている。

「わかりますか」

と藤井が私に、いった。

「わかりますね。春・夏・秋と同じシーンを繰り返しているのです」

陸稲に包まれて、中腰のまま、女学生は放尿していることになる。

「妻と知り合った頃の作品です」

まだ高校一年か二年の頃の藤井夫人に違いない。

「勿論、このときの妻は処女ですよ」

「隠して内緒に、とったのですか」

素朴な質問であった。

「いえ、違います」

笑いながら藤井は、いった。

「私は、いつでも8ミリをまわしていましたから、妻は、私が8ミリマニアであることをよく知っています」

「そうすると、場所を指定して、排泄をさせたのですか。8ミリをとるために」

「そうですよ」

当然だというような藤井の答であった。

「よく承知しましたね」

「それほど、みられるのが、いやだとは思っていなかったようですよ」

「どうしてでしょう」

「さあ、処女だからじゃないかな」

「――」

「男を知らないから、排泄行為に、さほど羞恥を感じなかったのでしょうか」

そんなものかと思う。

が、説明不十分といえないこともない。

画面は雪。

白一色の谷間の畦道に、紺の制服の女学生が、かがんでいる。

8ミリは、はじめて女学生の真正面から、ねらっている。

白い雪に深い穴が掘られて、あたたかい湯気が、たちのぼる。

「ね、ワイセツでしょう、あの雪の掘れ具合が」

同意を求めるように製作者は私にいった。

8ミリの題は、四季。

部屋が、また明るくなった。

紺の制服の藤井夫人が、氷と水をテーブルに置いた。

私の顔を見ようとしなさい。

藤井がウイスキーとタンブラーをテーブルに並べた。

「コーヒーより、アルコールのほうがいいでしょう」

藤井夫人が、さめたコーヒーを下げた。

「気がつきませんでしたか」

と藤井が、いった。

「えっ」

「妻の体臭」

「別に」

藤井は、にやりとして、うなずいた。

ウイスキーの水割りを飲む。

モデルの女学生妻を見てしまっでは、プレイベートフィルムの刺激が倍増するのも、やむをえない。

「結婚してから、放尿するところをとらせてくれないのです」

と藤井がいった。

「男を知って、急に见られるのが恥ずかしくなったらしい」

藤井は、おいしそうにタバコを吸った。

「四季は、次にお見せする作品の序章なんですよ」

立ち上がると、二番目の作品をセットし始

めた。

のどが乾く。

私は、えんりょなくウイスキーの水割りをつくった。

B

二つ並べたテーブルの間に、便器が置いてある。

紺のセーラー服の藤井夫人が、テーブルをまたいで立った。

8ミリの方を向いて笑っている。

藤井の部屋に違いはない。

紺のスカートの裾がひるがえって、白いパントリーが膝に、まわりつく。

可愛いお尻を見せて、女学生妻は、しゃがんだ。

8ミリはアングルを変え、真下から、ねらった。

「これも、結婚する前のフィルムです」

私は画面から目を、はなせない。

「処女は大胆ですね」

思い出したように藤井は、いった。

テーブルをまたぐ白いソックス、屈折した両脚、花びらのように膝に巻かれた白いパン

ティ。8ミリは大胆にアップにする。

顔は見えない。

藤井は、テーブルの間に仰向けに寝て8ミリを、かまえているのに違いはない。

その時点で、藤井は、テーブルの間に置かれた便器と交代している。

カメラがねらっているというだけで、微妙な変化があらわれる脈動は、女学生の息の乱れと同じなのかもしれない。

プレイベートフィルムに声はない。

無言の画面に、ぐっぐつと迫る力強さが、みなぎる。

スクリーンには現われないが、女学生はきつと、眉をひそめ、息を詰め、唇を半開きに

して、息ばっているのに違いはない。

「まるでイソギンチャクでしょう」
胸をどきどきさせながら画面を見ている私に、藤井はいった。

顔をだした果実。

黄金の果実は、そのまま宙に浮く。

落ちない。

落ちたとしたら、それは藤井の顔の上だろう。

「便器を胸の上に置いて8ミリをまわしていましたよ」

と藤井が説明した。

「受けるつもりでした」

未来の夫の顔を見下ろして、女学生夫人はいやいやをしたらしい。

藤井は、あわててテーブルの間から身体をのけぞらせたらしい。が、落下寸前までカメラは的を、はずしていなかったのである。

「アヌス、大きな黒子と、黄金の固体」

と藤井が、いった。

排泄の中に、藤井は妻の情念を見たというのだろうか。藤井のプライベートフィルムは黒子の核心に触れようとしているらしい。

題は、花虫。

イソギンチャクが花虫綱の腔腸動物だからそこからヒントを得て、つけたらしいが、それだけではないだろう。

藤井にとっては、女学生妻のアヌスは、美しい花虫と映るに違いない。

ウイスキーを飲みながら、藤井がはじめて用件を切り出した。

「あなたに私の作品をお見せしたのは、お手伝いを、おたのみしように思ったからです」

「できることなら」

と私は興奮していった。

「あなたの趣味に合ったフィルムだったでし

よう」

藤井は私の性癖を知って、招待したのである。私は、うなずいた。

「次の作品は、どうしても男のモデルが必要なのです」

「――」

「勿論、プライベートフィルムですから、発表するようなことは絶対しません」

「それは、わかっています」

と私は、いった。

藤井夫人の、いや、紺のセーラー服の女学生、なまなましいフィルムを見せられて、私はすっかりウイスキーに酔う以上に感情を高ぶらせていた。

「私の指示通り動いていただけますか」

「奥さんは承知の上なのですか」

藤井は、にやりとして私を見た。

「こちらへ」

と藤井は私を促した。

「妻の部屋に御案内します」

藤井の手に8ミリが、にぎられていた。

C

教科書と参考書と、ぬいぐるみ人形で飾ら

れた、女子高校生らしい部屋であった。

とても人妻の居間ではない。

机にむかって教科書をひらいていた藤井夫人が、二人の侵入者を振り返った。

藤井は無言で、ライトを位置づける。

「文子」

藤井が奥さんの名前を呼んだ。

「机に腰掛けてごらん」

文子夫人は私の顔から眼をそらしている。

コーヒーを運んで来たときも、氷と水を運んで来たときもそうだが、私はまだ文子夫人と言葉をかわしていない。

藤井は、そんなことは別に気にしていないようであった。

文子夫人が机を背にして立った。

紺のセーラー服の、胸の赤いリボンが、まぶしい。

黒いストッキングに包まれた細い脚が、女学生の魅力を漂わせている。

私もそうだが、藤井にも、女学生の紺の制服に対するフェティシズムが多分にあるのは間違いない。

藤井が口にする情念という言葉も、女学生の紺の制服がなくては考えられないようにも思える。

椅子に足をそろえて文子夫人は、夫のいうままに机に腰掛けた。

紺のスカートを気にしているのも女学生ら

しい。

「片足を、はなして」

8ミリをかまえながら藤井は妻にいった。



ナミオM画廊

『女難こそ最高』

春川 ナミオ

「スカートを、まくって」

夫だけなら、文子夫人は素直にスカートをまくってみせるのに違いない。

だが、部屋の中に、初対面の、見知らぬ男がいるのである。

片足を、そっと下げたまま、文子夫人は、うつむいていた。

夫のいいつけを拒否しているわけではないらしいが、躊躇している。

「文子」

藤井は素知らぬ顔をして、妻を促した。

ひだの重なった紺のスカートの少し、まくられた。

「それではパンティが見えない」

文子夫人の前に跪きながら、藤井は私がうしろに立っているのを無視したように、強い言葉でいう。

文子夫人の顔が、ゆがんだ。悲しそうな顔で夫を見た。

「汚れていることは、わかっている」

どきりとするようなことを藤井はいった。

「この一週間、パンティを穿きかえることを禁じているのだからな」

文子夫人の顔が羞恥で赤くなった。

残酷な言葉の遊戯は、あるいは、これから

8ミリをまわすための前戯なのかもしれないと私は思った。

立ち上がると、藤井は妻のスカートに手をかけた。

乱暴に、まくりあげる。

文子夫人が両手で顔を、おおった。

両脚が固く閉じられた。

フレヤーで飾られた可愛く白いパンティは女学生らしい、清楚な感じを、あたえた。

そう汚れているとは思えない。

赤いリボンのようなガーターと、黒いストッキングがチャームキングにみえる。

藤井が文子夫人の両足首を、つかんだ。

ぐいと両脚を裂く。

椅子が派手な音を立てて倒れ、文子夫人が机に両手をついて身体を支えた。

「かわって下さい」

藤井が振り返って私にいった。

文子夫人の顔が今にも泣きそうな顔になった。

私は藤井と、いれかわった。

黒いストッキングの足から、靴でむれた異臭が鼻をついた。

が、不快な匂いではない。

文子夫人が眼を閉じた。

「両脚を肩にかついで下さい」

と藤井が私にいった。

8ミリのまわる音がする。

「顔を近づけて」

藤井は私のうしろをまわりながら指示してくる。

「よく見て下さい」

藤井の命じるままに顔を近づけて私は、はっとした。

白いパンティの汚れが、眼の前に大きく広がって飛び込んできたのである。

「汚れたところに鼻をつけて」

と藤井が、いった。

「えっ」

「かぐのですよ」

文子夫人の全身が硬直したようであった。鼻をつけるまでもなく、もやっとしたパンティの匂いを敏感に感じとっていた。

肌にぴったりとまとわりついた白いパンティは、文子夫人のぬくもりを吸収して、一週間の汚れをミックスし、なんともいえない独特な匂いを放っている。

8ミリの音が頭上でする。

私は、汚れのひどい部分に、唇を触れた。じわっと、人妻の熱気が唇につたわった。

かなり強い体臭であった。

「くさいでしょう」

いってはならない言葉を、藤井は平気で口にだした。

「くさくありませんか」

どう返事をしていいか、わからない。

肩にかついだ文子夫人の両脚が、かすかにふるえていた。

文子夫人は、夫の残酷な言葉に、必死にたえているようであった。

「一週間、同じパンティを穿かせたというだけではありません」

と藤井は、いった。

「妻には、風呂でも洗うのを禁止してあります」

愛人に入浴を禁じて、その異臭を喜ぶ性癖の人もある。

「入浴を禁止するわけにもいきませんしね」

その時、パンティがかすかに濡れているのに気がついた。

分泌物か、それとも、尿か、それはわからない。

文子夫人のパンティを唇で、つまんだ。

文子夫人が、のけぞった。

声は殺している。

8ミリの音が、せわしない。

文子夫人の排泄物か、私の唾液か、白いパ
ンティの、汚れのひどい部分が更に汚れた。

「脱がせて下さい」

と藤井が私に、いった。

黒いストッキングで包まれた文子夫人の両
脚が、とたんに私の首を締めつけた。

夫の言葉に文子夫人は、かなり敏感であっ
た。

私は、まくれあがった紺のスカートの下か
ら、文子夫人の細くて小さい腰に手をのばし
た。

顔をはなして、パンティを巻くようにして
下げる。

汚れのひどさが露出された。

首を締めつける文子夫人の両脚の力が強く
なった。

ずり下げたパンティに顔を埋めるような恰
好になる。

「脚から取ってしましましょう」

とりにくいのだろう。藤井は、文子夫人の
パンティをつかむと、私の頭ごしに荒々しく
はぎとった。

「嗅いで下さい」

と藤井は8ミリを、かまえた。

「くさいでしょう」

文子夫人の固く結んだ唇から、嗚咽ともつ
かぬ喘ぎが洩れた。

氷と水を運んできたとき、

「気がつきませんでしたか、妻の体臭」

と藤井は、きいている。

しもわきがのことを藤井は暗示したのであ
る。

少しずつ文子夫人の体臭が強くなっていく
ように思えた。

悪臭ともいうべき、しもわきがを、見知ら
ぬ男に嗅がれ、羞恥にみちた被虐に文子夫人
は、興奮をおさえることができないようであ
った。

日本人は嗅覚が鈍いといわれる。

体臭が弱いせいもある。

ルイ十五世の妾、デュ・バリール夫人は竜涎

香でワギナを洗っていたと、つたえられる。

藤井は、花の匂いのかわりに、汚れによる
匂いを、わざと強めたようであった。

「どうです。酒の肴の匂いを思い出したでし
ょう」

妻の両脚を肩にかついだモデルの男に藤井
は、いった。

「クサヤですよ」

その瞬間、文子夫人がビクツとふるえた。

「いつものように、いってごらん」

と藤井が妻に、いった。

文子夫人が、いやいやをした。

「いうのだ」

文子夫人の息が乱れた。

「わたくし……」

と、あえぎあえぎ文子夫人は、いった。

「くさい……」

声が消えて、よく聞こえない。

「もう一度、はっきりと」

藤井が叫んだ。

「わたくし……くさいでしょう」

「――」

「ね、くさいって、いって」

ほとんど同時に白線がぴゅっと一閃した。

「あっ」

まともに顔に、かかった。

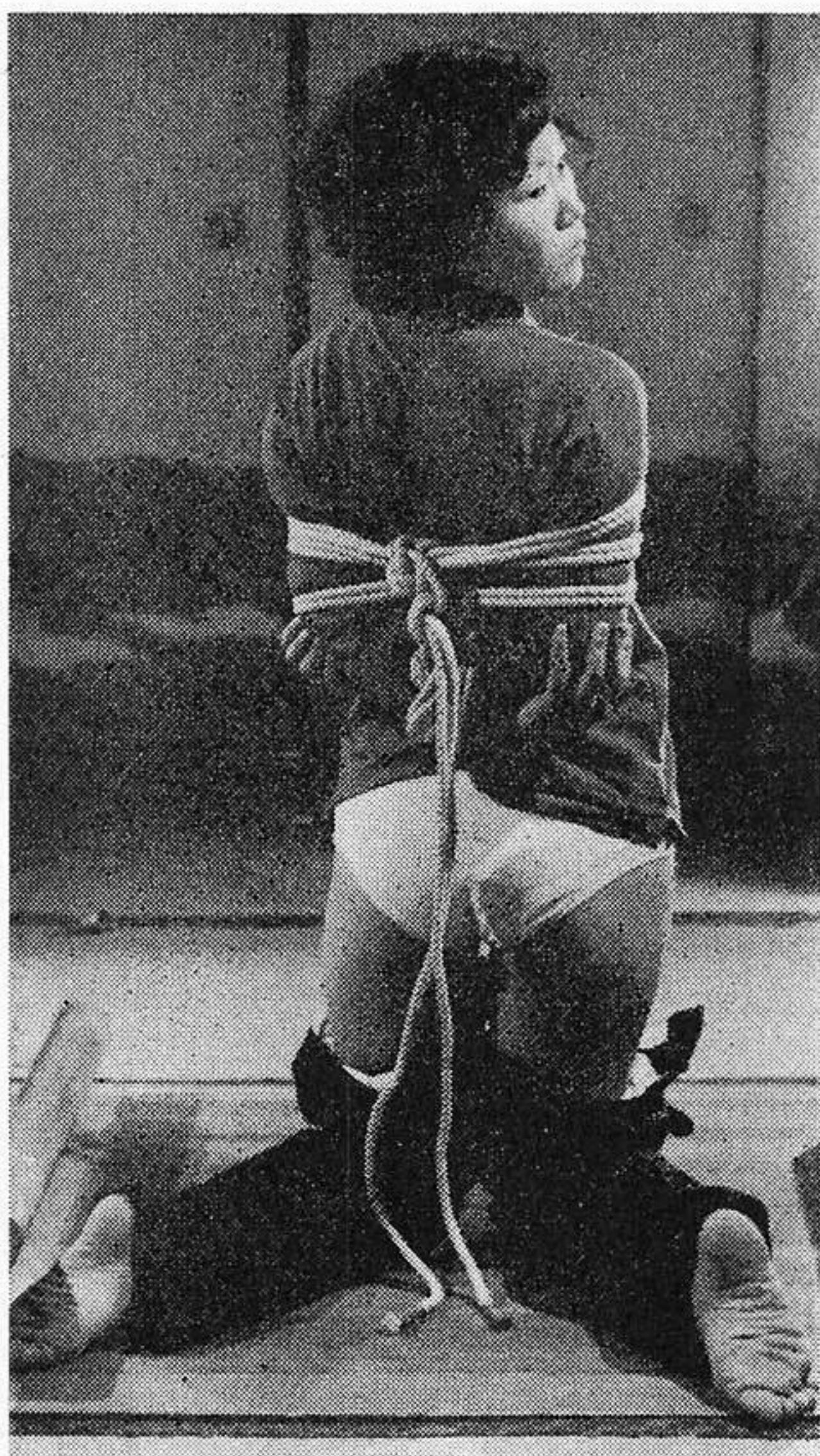
「くさい、っていって」

紺の制服の女学生は、うわごとのように、

つぶやいている。

あたたかい尿流が私の顔を流れた。

今まで気がつかなかった黒子が、淫らな柔
肌に輝きを増して動き始めた。



「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ (西条紀代の巻)

別嬪^{べっぴん}じゃないけど凄^{すご}く可愛^{かわい}い娘^こ

塚^{つか}

本^{もと}

鉄^{てつ}

三^{ぞう}

待てば海路の日和

私が鈴木千鶴子を責めるための助手を募集したことから、沢山の誌友と知り合いになれたのだが、その中で田中洋氏と懇意になり、その結果、江口淑子と濃厚なSMプレイを演ずることになった。その取材の様子は一月号に寄稿したのだが、それから程なくして、新しく玉木章子と縛る機会を持った。

そんなわけで、一月号、二月号——と、たみかけするようにして、江口淑子と玉木章子の二人のカメラ・ルポを書いたのだが、その時、私が奇巧の編集長にも断わっておいたように、十一月には、深田菊子と松本たえの二人にプレイの予約をしておいたので、これを

今後のルポの題材にしようと考えていた。

深田菊子、松本たえには、今春以来、逢っていないだったので、久しぶりに密度の高いプレイを展開したいものだと思っていた。殊に松本たえは、これから空の便を求めて上阪するという連絡があったのに、私の方の都合で延ばしてもらったといういきさつもあって、是非とも彼女の昂進したM女ぶりを、この手でじかに確かめたいと思っていた。

深田菊子からは、限らないマゾへの願望を手紙に托して、露骨とさえ思われる文面で、その心中を吐露してきていたので、私のSMに関する好き心は、いたく馳りたてられていて、いつとはなしに、それでは、一日ぶっ通しでもSMプレイをやってみようか——と話が、きまっていた。

それが、玉子章子という新しい女性の出現によって奇ク編集部の意向でもあり、新人を先に取材するという結果になってしまった。

そういうわけで、二月号には玉木章子のルポを、一気呵成に書き上げて、もう読み返すヒマもなく、速達で送り届けたのだった。本当は一回でも二回でも読み返し推敲をしたかったのだが、年末を控えて発売日の繰り上げのため、早く原稿がいるのだとせかされては

いくらペンの早い私にしても、慌てざるを得なかった。

原稿を送り届けておいてから、さて、玉木章子に対しては、約束していたアナタの写真が出来上がったから——と、電話した。

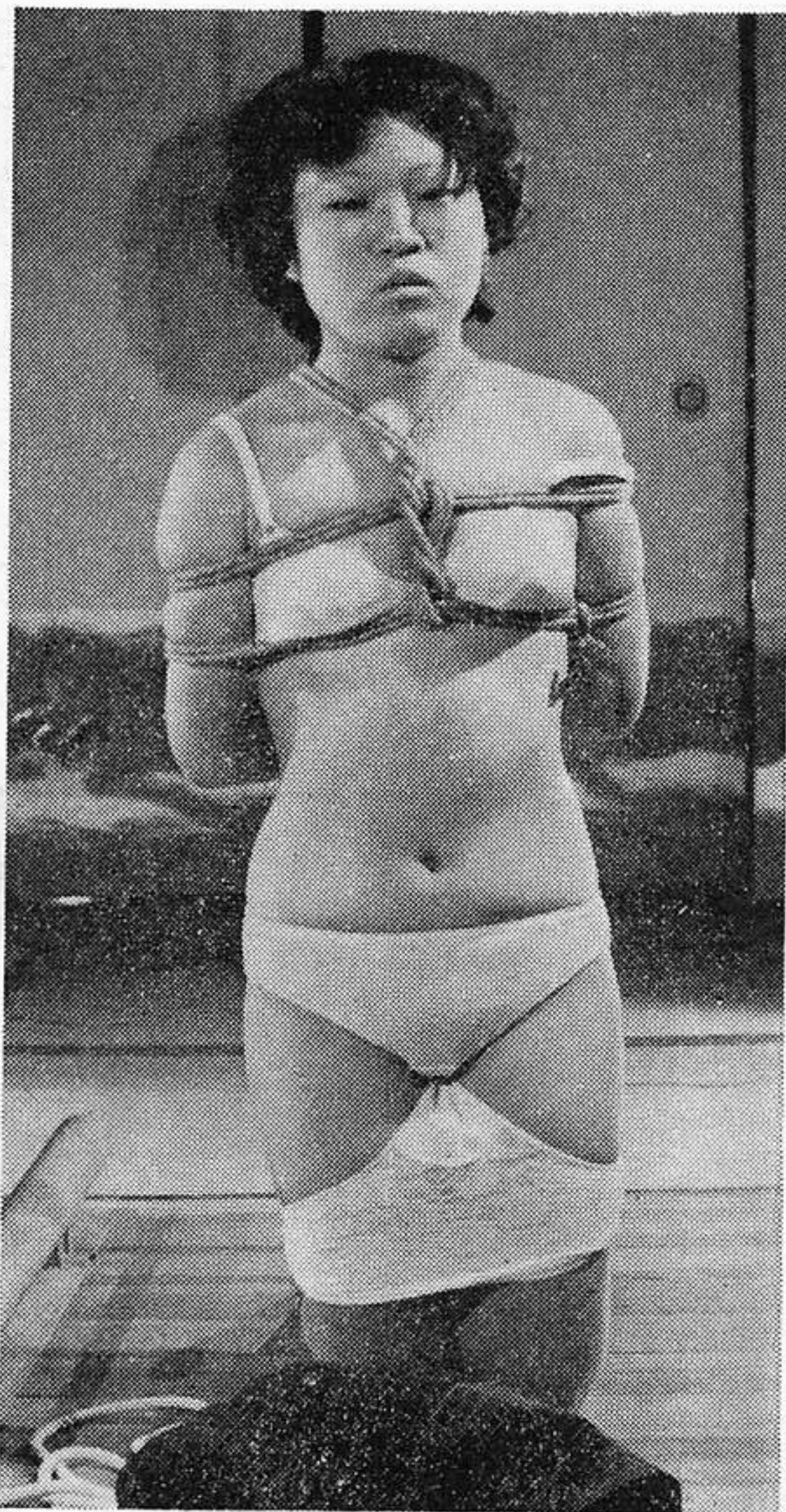
「今、わたし、お部屋に一人でおりますの。すぐ、これから頂きにまいりますわ」

はずんだ声で玉木章子の声が返ってきた。写真が出来たと知らせたら、きっと彼女の

旦那さんが、早速、今夜あたり取るものもとありあえずやってきて、激しいSMプレイをやることだろう。

なにしろ全部で百数十枚と枚数が多くて、それに、気にいったやつは六つ切りに伸ばしたりしたので嵩ばるため、私としても郵送するよりも手渡しする方が都合だと思っていたところだったので、適当なモーターインを指定して、そこで昼食をとりながら逢う約束





をした。私にしたって、どうせ外食するのだから、気晴しに郊外に出てみるのも一興だった。車過密の大都市大阪であるが、やはり昼食時は、なんといってもスムーズにゆける。

地下の駐車場までエレベーターで降りて、車にエンジンをかける。エレベーターで地上へ、発進させてすぐ阪神高速道路へ入る。十五分ばかり北へ飛ばすと美人の眉のような青い山脈の稜線が、くっきりとフロントグラスに見えてくる。

このモーターイン・レストランは、別にう

まいものを喰わすわけではないが、数百台はゆうに置ける広大な駐車場があるばかりでなく、周囲には豊かな緑がひろがっている。それに、レストラン、喫茶店に棟続きで温室があって、そこには熱帯植物が、所狭しと繁茂していて、まるでハワイにでも来たような錯覚をするほどだ。ハイビスカスの赤やピンクの鮮かな色が目をさましてくれる。

玉木章子と逢うのは、これで三回目過ぎないのだが密室での濃厚なSMプレイを経験して、彼女の身体のすみずみまで見てしまっ

たのだし、彼女にしてみれば、私にその痴態のいくつかを見られてしまったのである。だから、もう何年も前から知り合っていた恋人のように、心と心、肌と肌が触れあう心易さというものが感じられるのであった。

二十六才という、女としては一番爛熟した魅力を持っている玉木章子である。いつの日にか玉木章子のSM生活についてVというようなルポルタージュを書くようなことがあるとしたら、こんな昼下がりのひととき、こうして逢っておくのも無意味ではなからう。

大型のハトロ紙の封筒に入れてセロテープで密封した玉木章子の緊縛写真を手渡してから、軽い食事をとりながら、あの日の思い出を話しているうち、知らぬ間に時間が経ってしまった。そして、タクシーで来たという章子を彼女のマンションへ送ってゆく破目となってしまった。

「ちょっと、お寄りになりません。おコーヒーでも、おいれますわ」

玉木章子が意味ありげに笑顔で、そう誘ってくれたが、私は、これから行く処があるので、厚意を謝して別れた。いくらなんでも彼女は、主人持ちの身である。その留守宅へのこのこと、上がってゆける筈もなかった。

「わたしは、いつも暇ですから、貴方様のご都合さえよろしければ、第二回目のSMプレイをお願いしたいと思いますの。今度は吊りなんかも、して頂きたいと思いますわ」

別れ際に、章子はそう言っていた。たしかに私も玉木章子の七年のキャリアのある豊満な女体を、これからも何回も何回も責めてみたかった。まして第一回では果たし得なかった吊り責めや海老責めをやってみたかった。

いずれ、それは後刻、出来ることだろうと思うが、さし当たって私はかねて予約しておいた深田菊子とのプレイを進める必要があった。そして、このMがかった美少女とのカメラ・ルポを『足の裏の温い女』と題して書くつもりでいた。

年の瀬が迫ってくると、私の本職の方も次第に忙しさを増してきたのに、皮肉なものでカメラ・ルポの方の話も折り重なってくるのだった。深田菊子とのスキンシップ的な甘美きわまりないSMプレイを展開して間もなく松山市在の松本たえから、予定していた通り十一月二十二日に上阪するからという電話を貰った。だが、しかし、私は暫く延期してくれるよう頼まざるを得なかった。前回にも、そういうことがあって、松本たえには気の毒

したのだが、今回も、私の余暇範囲としてはようやく繁忙さを加えてきたこともあって、パンク寸前にあったわけだ。

それともう一つ、読者の側からの期待として、ハントやルポの対象となる女性を、いつも新しい女性で——と望んでいることから、編集部としても、私に対して、新人のルポを要望しているのである。私としては馴れた女性の方が楽しくて気が楽であるが、そうとばかりは言っておれない。

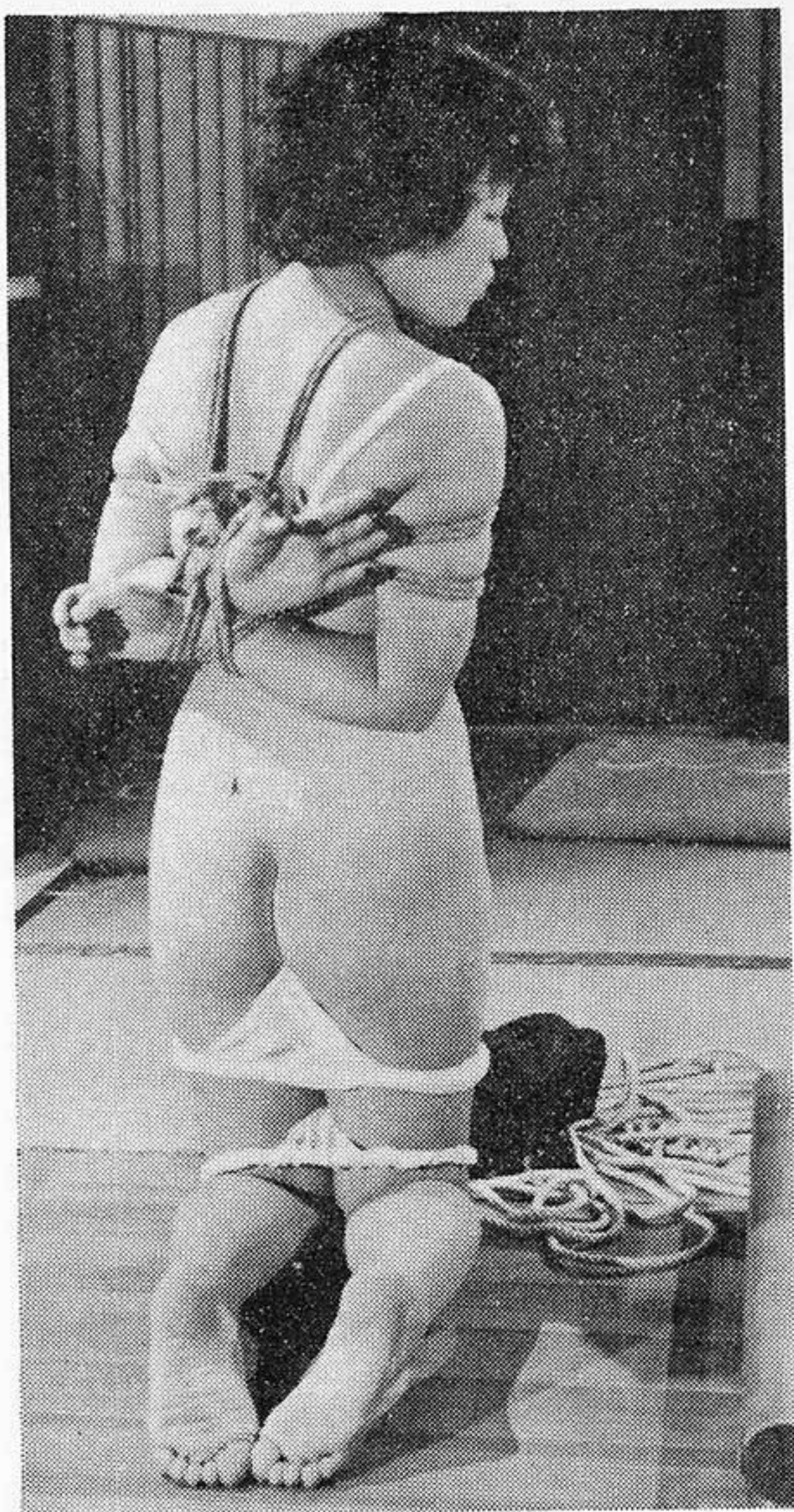
そんなとき、久しぶりにマダム芙美代こと

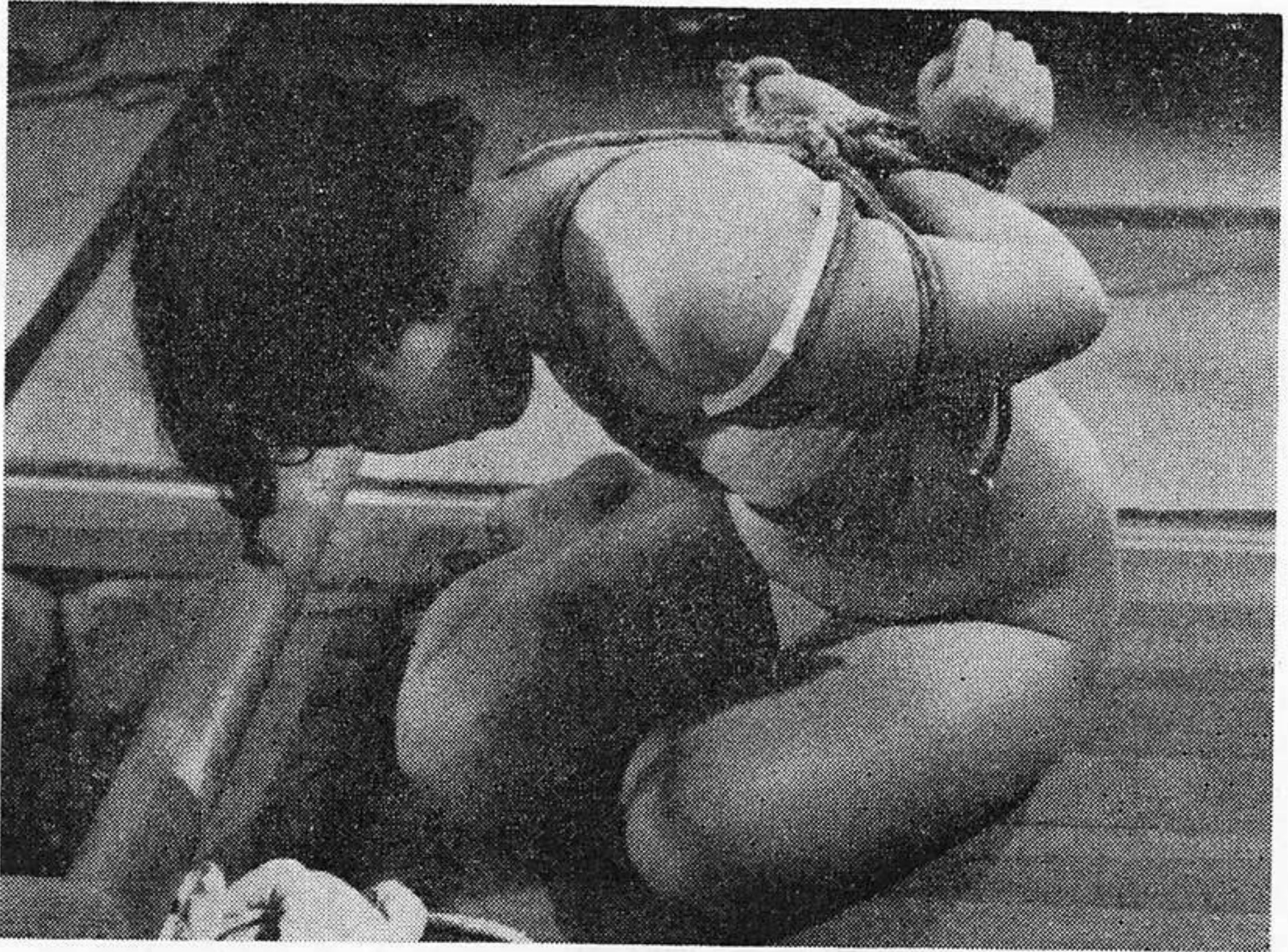
福井桃子から、次のような耳寄りな手紙が届いたのである。

○

大変ごぶさたしました。この前、おあいしましたときは、すごく楽しかったですわ。あれから、もういく月ぐらいになるでしょうかしら。今日お手紙しましたのは、あんたに縛られたっていう若い女の子があらわれましてので、ちょっと、お知らせしようと思ってペンをとりました。

たしか、初めて、あんたとあって、お喋り





しましたとき、私の近所の純喫茶にいるウェイトレスの、お話しましたわね。その子にあんたに送ってもらった奇譚クラブを見せたんですよ。そして、私もこの口絵の写真のように縛ってもらえないかしらって言いだすのよ。

年は、あるとき、十八って言ってたから、今はたしか、十九才になる筈よ。顔は別びんというわけじゃないけど、凄く可愛い感じなの。

本人は大変、のりきなので、よかったら、私のとこへ電話下さらない。

十一月二十三日

福井桃子

塚本鉄三様

○

そして、便箋の余白に念のためとして電話番号

が、書き込んであった。自分のことは何も書いてなく、それに用件だけを書いているのは如何にも福井桃子らしかった。

福井桃子が三月末に出産してから、私は彼女に二回しか、逢っていない。

赤ん坊も、ようやく手が放せるようになったし、身体の方も落着いたというので、第一回のSMプレイと写真撮影をやったのが、たしか五月頃だったか。

その次に、逢った時は、彼女の希望もあって、カメラもテレコも持って行かず、激しいSMプレイに耽溺したのであった。子供二人ぐらいを産んだ女体の味は最上とよく言われているが、福井桃子は志摩の海岸で育って体力もあり、それに踊りで鍛えた柔軟な肢体の持主。その上、なんといっても、お俠きちゃんな性格のところへ持ってきて、男あしらいがうまい——と、いうのだから、あのポリュームのある身体をぶっつけられたら、たまったものじゃない。お天道さまが黄色く見えるというところぐらいでは済まされない相手である。

幸いにして福井桃子は新しくお店を持つということに俄然、忙しくなり、私の方もお役御免でホッとしたところだったのだ。だから彼女とは半年近く逢っていないことになる。

私は福井桃子からの手紙を読んで、早速、奇クの旧号を漁ってみた。

あった、あった。昨年の十一月号に、ハマダム芙美代の告白Vとして、福井桃子の第一回のお喋りが載っているが、そのなかに、たしかに、彼女と親しくしているウェイトレスのことが載っていた。

☆

なにか変わった話をしろって？

そうね。私のお店の近くに、ホラ、その角を右へ曲がったところに私のよくゆく純喫茶店があるんだけど、そこに可愛いウェイトレスが一人いて、どうも私に気があるらしいのよ。ええ、私に注文の品をききにくるときなど、ワザと身体をすり寄せてきたりするの、それとわかったワ。

私が男のお客さんなんかと一緒にいくと、私には、鄭重にコップを置くけど、男の方へは、中の飲物がこぼれるくらい乱暴に投げすてるようにするのよ。おかしい子でしょ。顔は、わりかし可愛いんだけどネ。

それでいて、私一人で行ったときなんか、「姉さん。お金いいわ。私、払っとくから」なんて言って、私に払わせないのよ。

それで私、彼女を映画につれて行ってやっ

たの。暗がりて手を握って、

「貴女、姉さんのこと好き？」って聞いたら

「ええ、大好きよ。でも

何故？」って、不思議そ

うに問い返すのよ。だから、思いきって

「私も貴女が可愛いくて

大好きよ。貴女、姉さん

の言うことだったら、ど

んなことでも聞いてくれ

る？」と聞いてみたの。

「ええ、お姉さんの言う

ことならなんでも」

そんな返事をきいて、

二、三日して、私は彼女

を、自分の部屋に、呼ん

だの。ええ、アパートの

一室を借りているので、

その点、少しも心配ない

のよ。——下略——

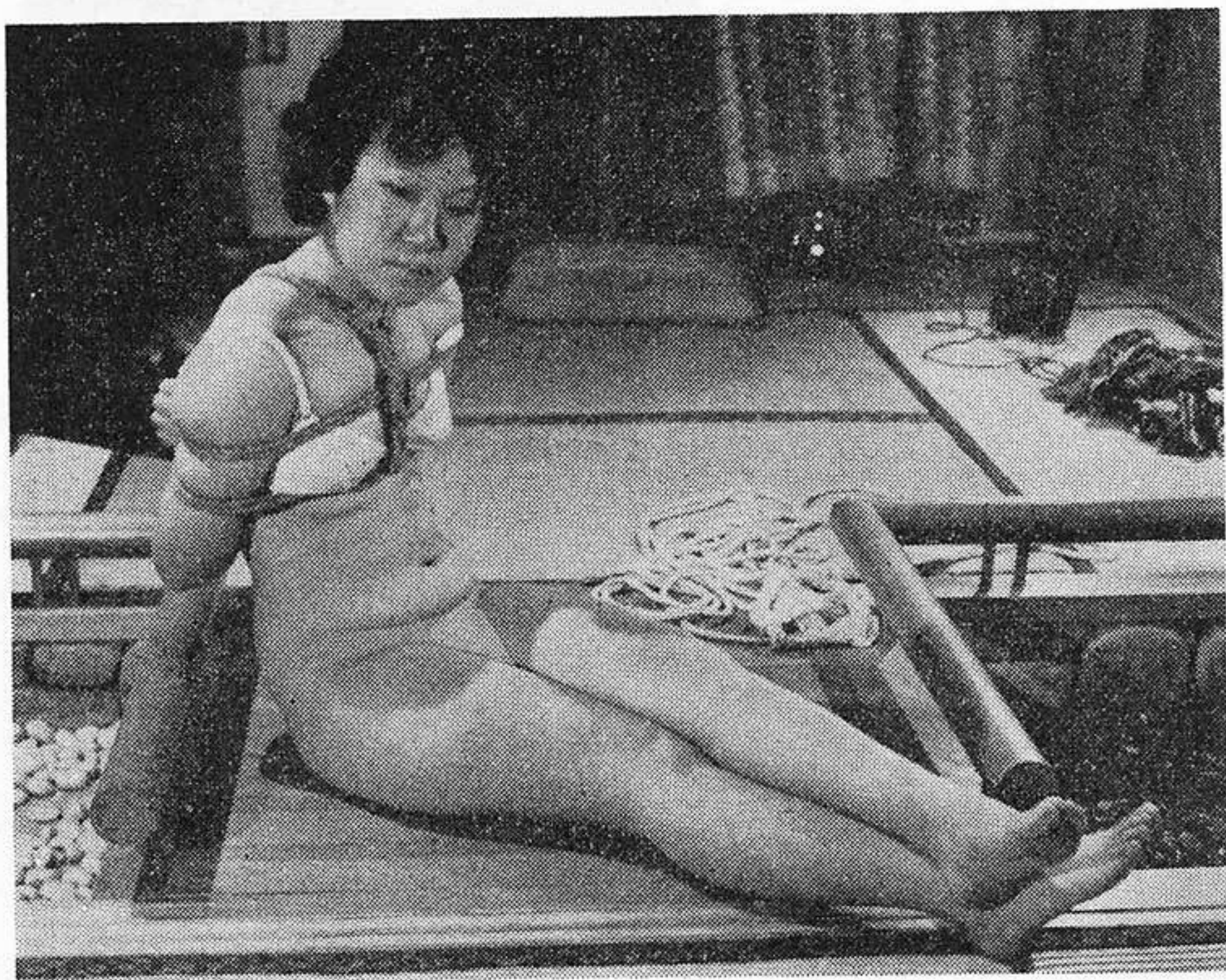
☆

奇クの71年十一月号に

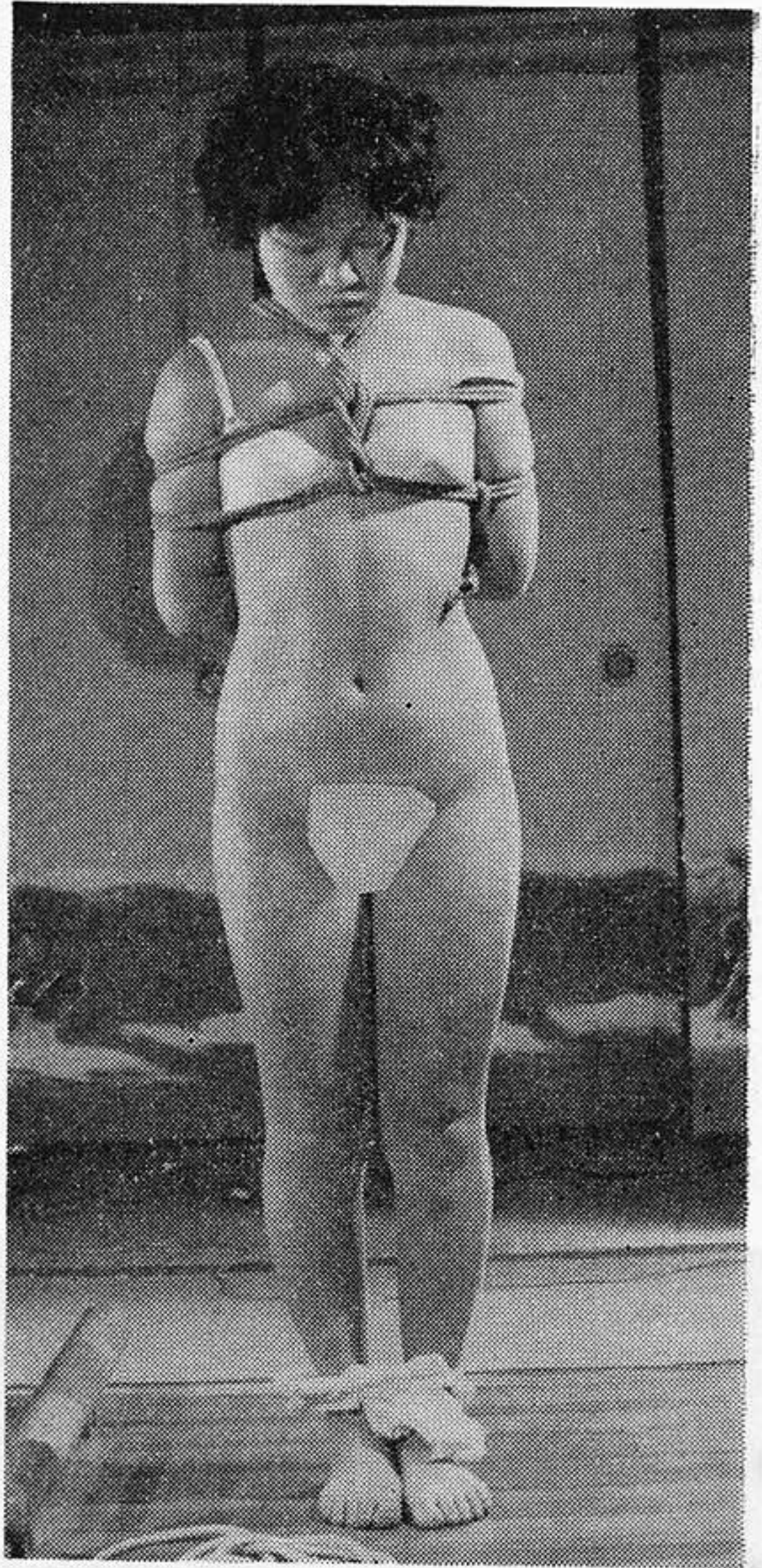
載った、福井桃子のお喋

りを読んでみると、彼女

に初めて逢ったあの頃の



ことが、まざまざと目に浮かんでくる。なんでもかんでも型破りの彼女に、とても新鮮な



ものを感じたものだった。

今では、すっかり彼女の言っていたウェイ
トレスのことなんか忘れてしまっていたが、
福井桃子の手紙で指摘されてみると、ちゃん
と、こうして文章にも残っている——。

私は早速、電話のダイヤルを回していた。

棚から牡丹餅

「モシモシ、桃子、僕、塚本です。大変長ら
く御無沙汰しました……」

「あーら、塚本さん、お久しぶり。手紙着い
た？ あの手紙出してからね、毎日、今日は

電話かかってくるか、今日は電話かかってく

るかって待ってたのよ。あんたのことだから
あの手紙読んだら、すぐかけてくると思って
たけど。それはそうと、あの子どうお？」

「そうだね、どんなに忙しくたって、是非
撮ってみたい子だね。それに、マダムの推薦
だつてあるんだから、本人にその気さえある
んなら、願ってもないね」

「それなら、まかしといて。実はね、奇譚ク
ラブを見せたのよ。12月号だったかな、口絵
の一頁に深田なんとかいう人の大きな写真、
のってたでしょ。あれを見てネ、この写真、

きれいだわ。あたしも、こんなにして縛られ
てみたいわ。って言うのよ。だからネ、私、
言っちゃったの。その一頁めくったとこの写
真、これは姉さんだつて。びっくりしてたけ
ど、信じてないのよ。そんなことないって言っ
て。そいでネ、だったら私、この写真うつし
た人、知ってるから、あんたも、うつして貰
ったらって、すすめたんよ。そしたらネ、姉
さん、お願いしますって、手を合わすのよ」
「そりゃ本当かね。本当だったら、棚から牡
丹餅っていうところだが、一体、その子はど
んな子なの？」

「年は十九よ。色が白くてピチピチしてんの
よ。私のこと、お姉さん、お姉さんって言っ
て、一日、^{ついたち}十五日の定休日には、きつと遊び
に来るんよ。別嬪っていうんじゃないけど、
凄く可愛い子だわ。小柄で凄く純情なの。
お乳なんか、そりゃ可愛いくて、蓄って感じ
ね。きつと、あんた、気に入るわよ」

「ふん、桃子の話によると、とても、いい子
らしいナ。それで、その子を撮るとして一体
どういうことになるんだい？」

「ええ、まかしといて。本人が凄く乗気なん
だから、うまく話、すすめるわ。彼女、そう
そう、私はキヨって呼んでるんだけど、どん

な字を書くんか知らないけど、とにかく名前はキヨって言うのよ。なんでも信州の松本から出てきて、ここの純喫茶で、働いているんだよ。ええ、寮に入ってるわ。次の休みは、というと、十二月一日になるわ。そいでよけりやキヨに話しとくけど……」

「一寸、待ってくれよ。ええと、一日だね。」

一日はと、うん、一日だったら、いいよ」

「そうお。それだったら、日は一日というところで、キヨに話しとくわ。ここからだったら名古屋まで出て、新幹線で大阪へ出るのが便利だから、新大阪駅まで迎えに来てやって下さいネ。時間は、またお電話するわ。それから、キヨは、まだ何も知らないのよ。私にしてみたいに無茶したら駄目よ」

「わかった、わかった。その方は十分、心得てるよ。破れ物を扱うように鄭重にやるよ。」

それはそうと、キヨという彼女は、マゾっ気はあるのかい？」

「その方は、私にも、はっきりわからないけど、奇譚クラブは三冊ほど見せたんよ。そうしたら、凄く興味を持っていそうよ。特に縛られた女の写真なんか、熱心に見ていたわ。だから、あんたの飼育次第では、よいモデルになるんじゃないかしら。お正月には、くにへ

帰ってスキーをするって言ってたけど、それまでに二回くらいは撮れるかもよ。一日と十五日が定休日らしいけど、その他に別にお休みもとれるそうよ」

「そうか。だったら、よろしく頼むよ。列車の到着時間がわかったら、電話してくれナ。」

ああ、それから目印は、どうする？」

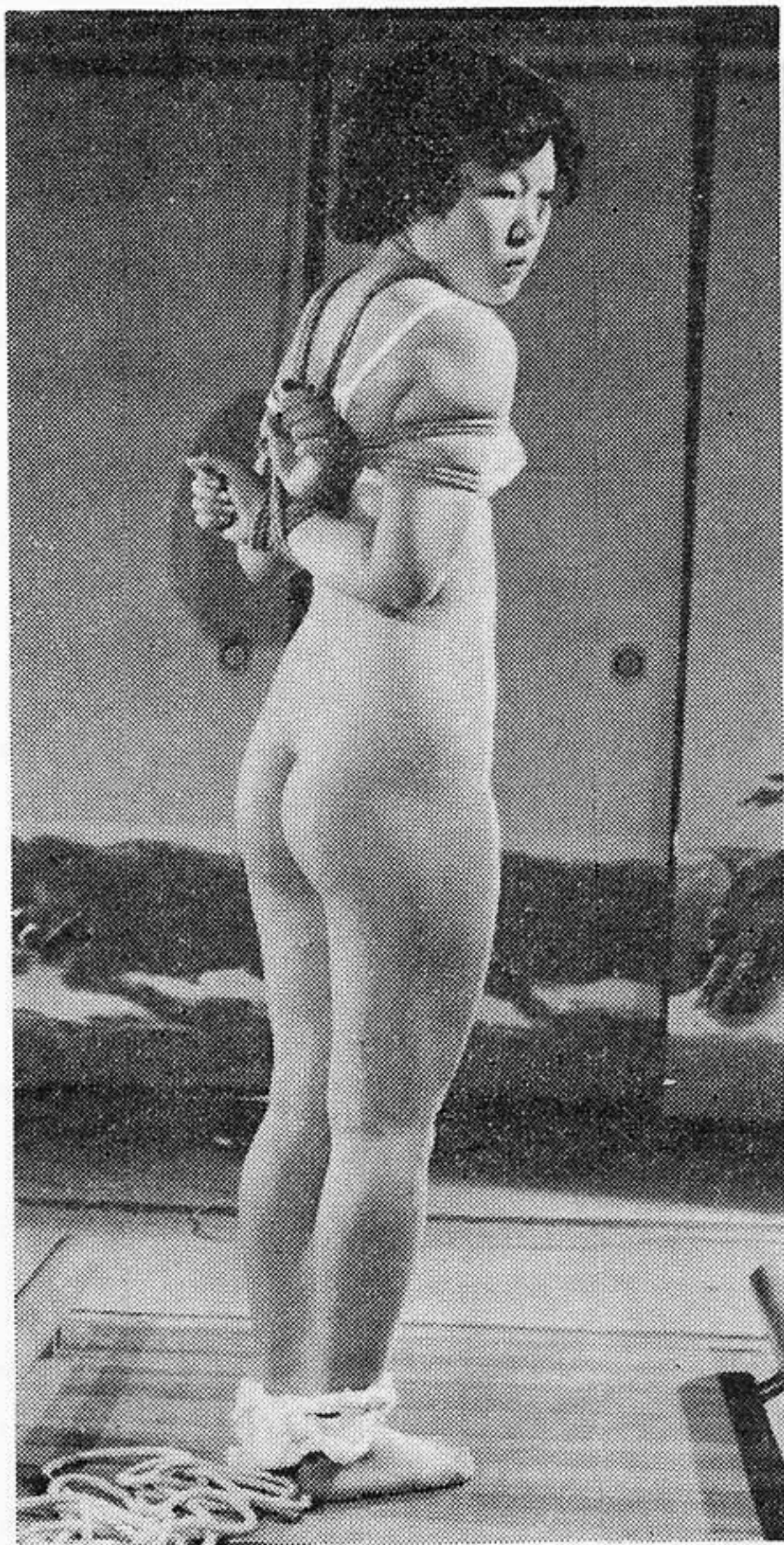
「そうね、ええと……。だったら、私、指定席券を買ってやって、その何号車の何番っていうのをお知らせするわ。キヨには電車が着いても、じっと待ってるように言っておくか

ら、ホームにまで迎えにきてやって——」

「わかった、わかった。じゃあ、さよなら」電話を切って、私は席へ戻った。

十二月一日といえば、あと、五日ほどしかない。先日、玉木章子を撮影したときそのまま、カメラも緊縛用具も、そのまま整理をせずに放りばなしに、したままである。

玉木章子を縛った時は、比較的、新しい白ロープ一点張りだったので、大分、痛がっていたが、今度のキヨという娘は章子と違って十九という年の若さもあり、それに縛られた



経験は一度もないのだから、柔らかい縄で手加減して責めなければならぬと思う。

その意味で、白ロープを全部出して、斑のロープと入れ替えておいた。

十九才のピチピチとした色白の乙女。生まれて初めて縄の洗礼を受けるという、その白い肌を思い浮かべて、私はいろいろと責めの構想を頭の中に思い浮かべていた。

縛りや責めの経験を、たっぷりと持ったベテランのM女を責めるのも、こっそりとした濃厚な味があつて、こたえられぬものだが、そうした脂の、のりきった女性とはこと変わり、未知の好奇心に胸おどらせる初心な娘を縛るのも、新鮮な魅力が溢れているのだ。

手づかずの真白い絹布の上に、思いのままに絵筆を走らせる爽快さは、また何にもたてえようもないSMプレイの楽しさでもある。

何物にも汚されていない無垢の白肌を縛りあげる快感を味わいたいと私は、かねがね考えていた。また読者の中にも、そうした若き女性の出現を心待ちしておられた方も決して少なくないであろう。

羞恥責めも、こうした純情で無垢の処女を責めてこそ、本来の感激性を高めることが出来るということを、このキヨという少女によ

って立証したいものだと思った。

季節風の吹く日

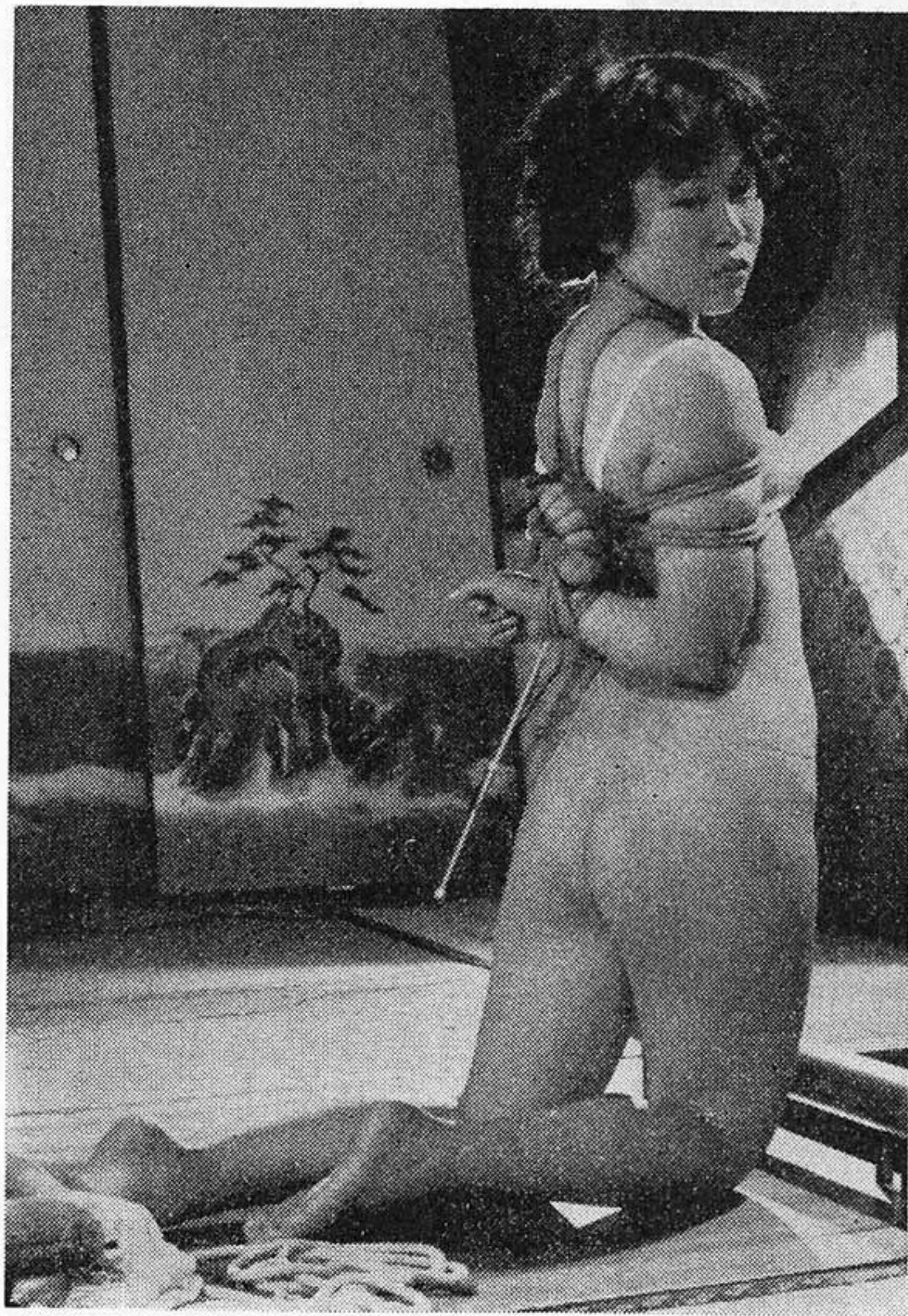
十二月一日、

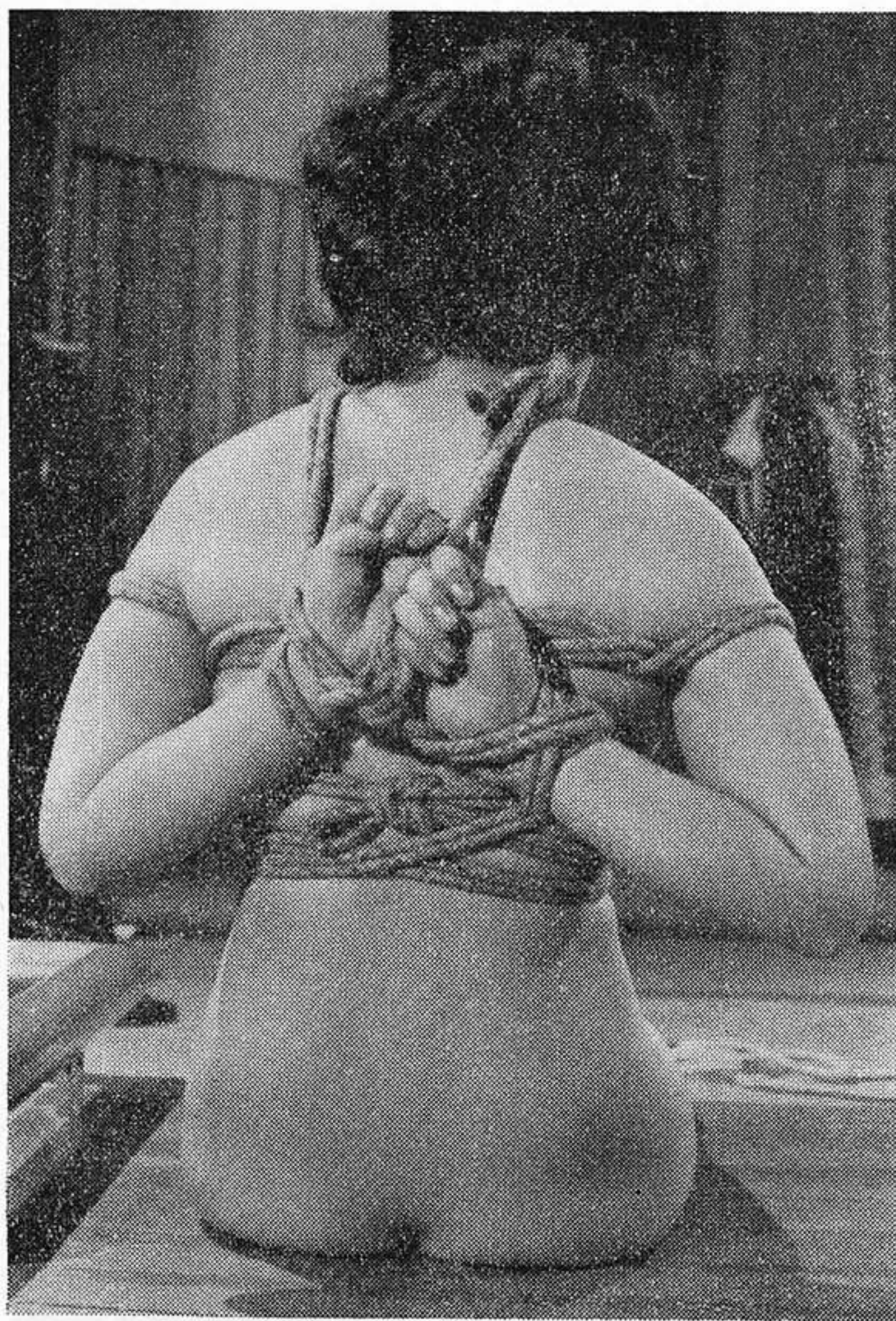
昨夜から吹きまくっていた季節風は、朝になっても尚激しく吹いていた。それに気温もうんと低下して、十一月とは打って変わった

寒々とした十二月の入りであった。

しかし、強風のおかげで今まで立ちこめていたスモッグが吹き飛ばされて紺碧の青空を久方ぶりに仰ぐことが出来たし、北摂の山々がくっきりと、その青い稜線を見せていた。

私は十二時二十五分新大阪駅着のひかりにて来阪するキヨを迎えに行くべく、駅前の駐





車場に車を置いていた。駅の入口に近いところは既に一杯だったから、道路を隔てた遠い方の駐車場へ入れたので吹きさらしの中を駅構内まで五分ばかり歩かねばならなかった。『ひかり7号車の12C』という座席を目当てに私は入場券を買ってホームへ登った。

7号車といえば列車の中央に当たる。轟音

と共に、ひかりの列車が到着すると、降りる客が一わたり出払ってから、私は車内へ飛び込む。ぼんやりと座席に寄りかかっている年若い女の子を見つけて声を掛けた。

「キヨさんですか？」

「ハイ」

ほっとした顔に、はにかんだような作り笑

いを見せて元気よく答えてくれた少女を伴って急いで車を出る。降りた客は、あらかた階段を下りてしまつて、ホームには人影もまばらで、そして、吹きさらしの風は至極、冷たかった。

エスカレーターで下へ降りて、食事をする事にした。丁度、昼時で、ごった返している食堂で、やっと向かいあった席をとる事が出来て腰を下ろした。始終うつむいて、はにかんで顔を上げない少女に私は話しかけた。

「あんた、名前、なんていうの？」

「ハイ、あの、サイジヨウキヨって、いうんです」

「ははん、サイジヨウと言うのは、西に条と書くんでしょう。それで、キヨっていうのはどんな字？」

「キというのは糸偏にこんな字、ヨは人偏にこんな字を書きます」

「ああ、紀代きよと書くんだね。それでは、西条紀代さん。マダム美美代は、あんたのことを紀代、紀代って呼んでるらしいね。僕もあんたのことを、紀代って呼んでもいいですか」

「ハイ、紀代って呼んで下さい」

「では、紀代——」

「ハイ」

西条紀代は素直に返事して、にっこりと笑う。そんなつまらない会話のやりとりで、彼女の堅くなっていた態度が少し宛、ほぐれてきたようだ。伏眼勝ちにしていた顔も徐々に上を向いてきた。

福井桃子から、彼女の乗車する、ひかりの時間や列車番号、座席番号を知らせる電話が私にかかってきたとき、

「紀代はネ、信州の田舎から出てきたばかりで、まだお化粧の仕方也不知道くらいなのよ。私のこと、お姉さん、お姉さんと言ってたってるけど、ほんとうに、まだオネンネなんだから、そのつもりでね」

そう念を押されたことを思い出していた。

私の目の前に神妙に坐っている西条紀代はマダムの言ったように、まことに山出しそのままの純朴そうな娘さんである。色が白くて丸顔の頬っぺたが、林檎のように紅い。

都会育ちの厚化粧の女性を見慣れている私にとって、悪く言えば野暮ったい感じさえ受ける紀代ではあるが、はち切れそうなピチピチとした若さ、それに野性的な健康美というものが、全身から感じとられた。

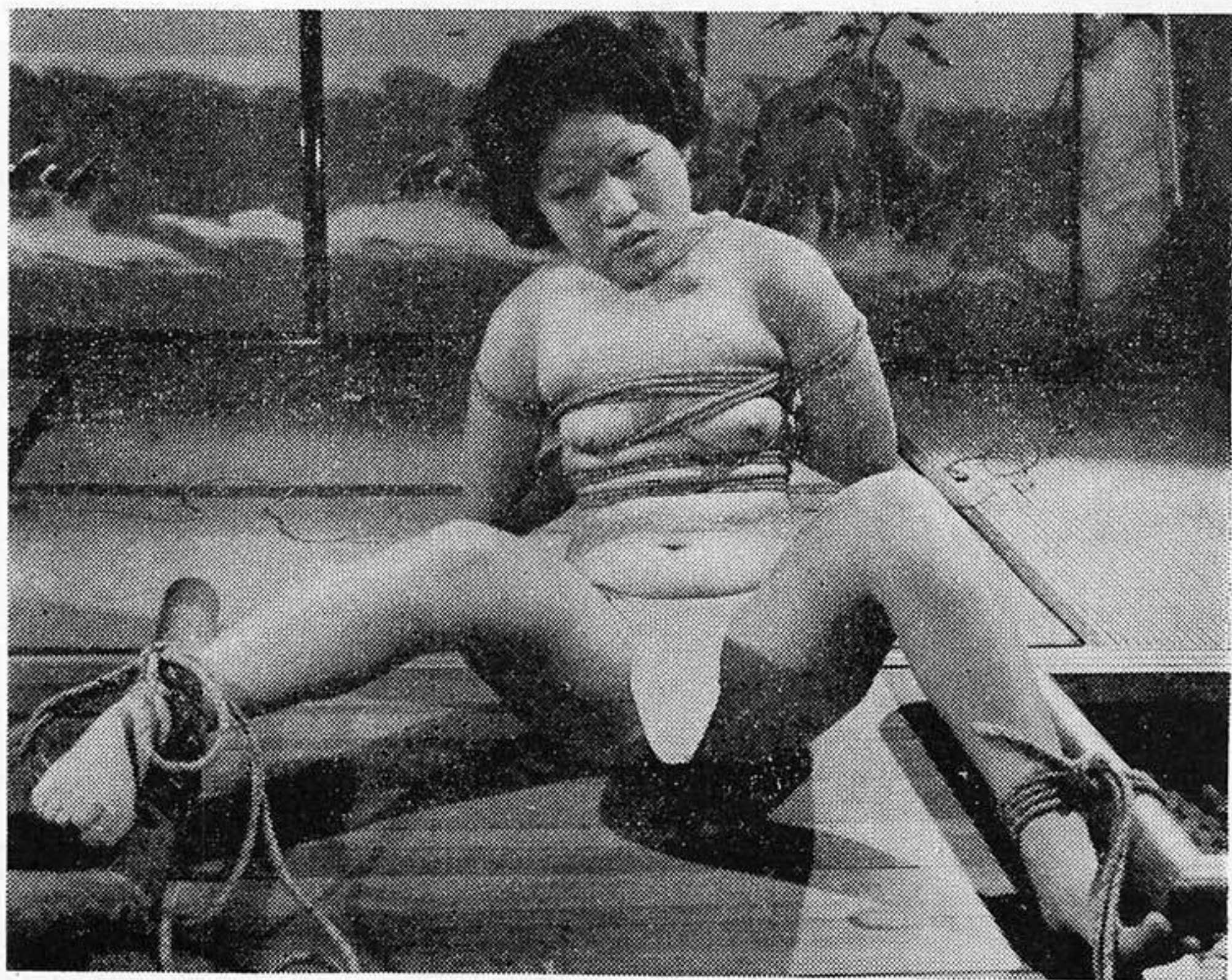
天ぷら定食で昼食をすませて外へ出る。階段の下から吹き上げてくる風は肌を刺すよう

に冷たい。駈足で車のところまで走って行って乗車。エンジンは、すでに冷えきっていたが、暖機する時間が惜しいので、そのまま発車して新御堂筋線を南へ向かう。

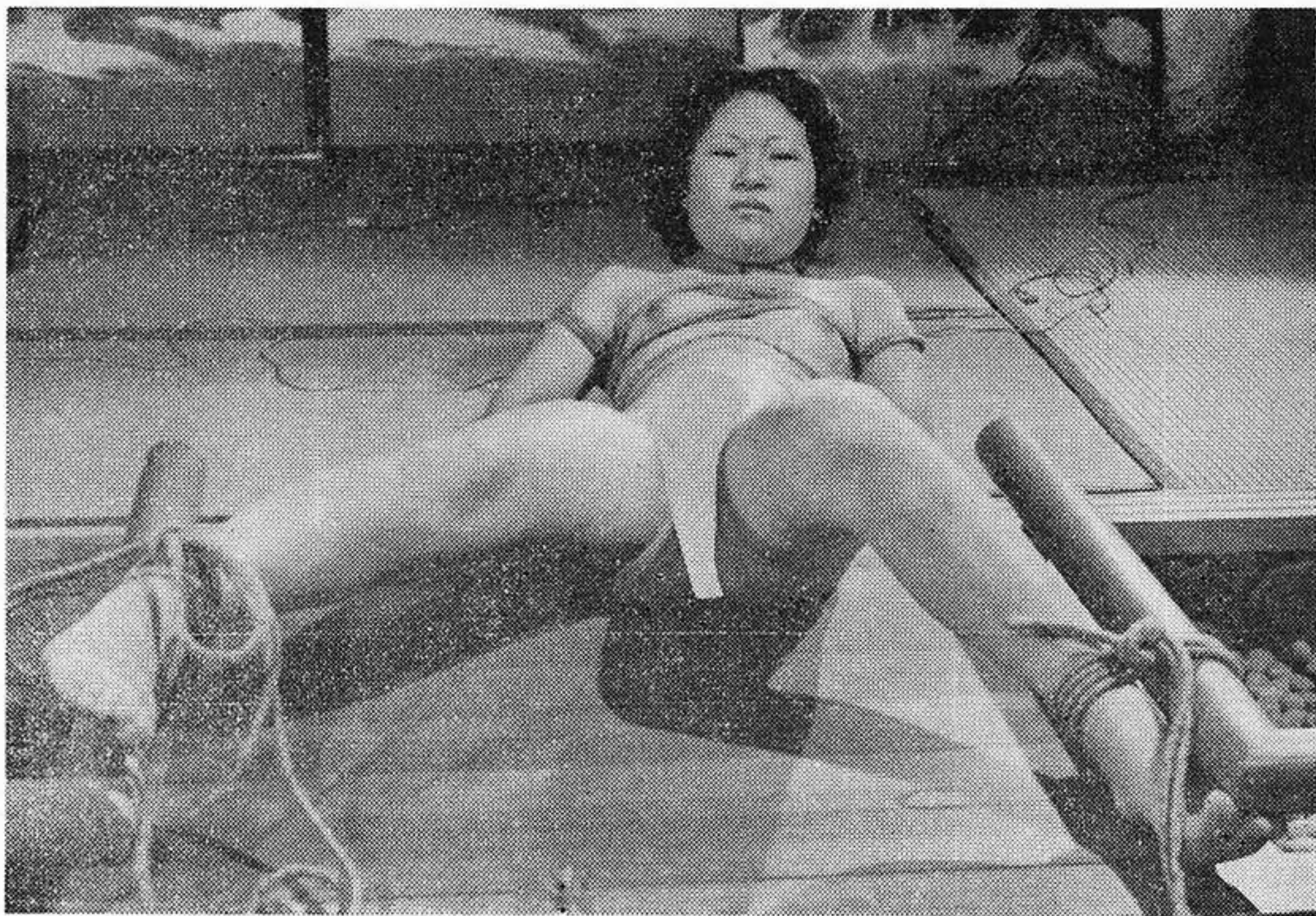
山添いホテルの温い一室に落着くと荷物を廊下に置いて、私は素早く上衣とズボンを脱いでシャツとズボン下一つになって、どっかりと座布団の上で腰をおろして煙草をくゆらしはじめた。

西条紀代は部屋の片隅で膝小僧を揃えて正座して坐り、両手を膝の上のせてチンと、かしこまっている。如何にも場違いなところへ来たという途惑いを見せて、目だけきよろきよろさせて、あたりを珍しそうに追っている。

女案内人が、「お願いします」と言って湯



を出していった浴室では、盛んに水音がして硝子窓一面に湯気が、こもってきた。



「僕は撮影の準備をするから紀代は、その間にお風呂へ入ったらどうだ」

「いいえ、私はいいんです。それに、何も持っていないから……」

「タオルもバスタオルも浴衣もここに入ってるから、紀代はお風呂へ入ってきなさい」

私は洋服ダンスからビニールの袋に入ったのを紀代の前に投げ出してやる。

「私、あの、入らなくても構いません」

「紀代は、こんなところへ来るのは初めてなんだね」

「ハイ」

「それはそうと、紀代は自分から縛られたと思ってきたの？ それとも、お姉さんからすすめられて、きたのと違うのかね」

「ハイ、お姉さんから、あの雑誌見せてもらって、すごく綺麗ねって私が言ったら、お

姉さんが、あんたも縛って写してもらいなさいよ、ってすすめてくれたんです」

「それで、紀代は、すぐ縛られてもいいって思ったのかい？」

「ええ、その時は思いませんでした。でも、何冊も見せてもらって、お姉さんの写真だというのを見せられたとき、自分もこんなにしてほしいみたいになりました」

「ああ、そう。でも、素裸にされて、こんなロープで、きつく縛られるんだよ。それでも構わないのかい？」

「ハイ、そのつもりで来ました」

「まあ、紀代は、どうやら縛られるのは初めてらしいから、最初から素裸にはしないけど縛るときには手加減しないから相当痛いよ。辛抱できるかな」

「少しぐらいのことでしたら辛抱します。来るとき、お姉さんにも言われたんです」

「ほほう、どんなことを？」

「お姉さんなんか、片方の足の踵が顔の上になるくらい、足を挙げて縛られたんだから、紀代も、少々のことでは、いけな

いよ、って言われました」

「そうかね。その覚悟だったら頼もしいネ。まあ、そう心配しなくても、痛くないように

うまく縛ってあげるからね。それはそうと、お風呂に入って温まってきたらどう？」

私は湯加減を見てから、紀代を脱衣室へ追いやっておいて、準備にとりかかった。

奥の部屋の中央にデンと敷いてあった蒲団を取り片づけ、マットレスを壁に立てかけ、取り払った襖を、その前に立てる。

ライトの光とハイにした暖房のおかげで室温が次第次第に高くなってきて、シャツを脱ぎズボン下を脱ぎ、結局はパンツ一丁になっってしまう。そこへ紀代が風呂から上がってきたので慌てて浴衣を素肌に着る。

紀代は渡してやった浴衣を着ないで、着てきた自分のシャツ、スラックスの姿で入ってくる。顔は湯気で上気してピンク色に染まっているばかりか、シャツの袖から出ている手首やズボンの裾から出ている足首も、真赤になっている。

「さあ、紀代、こっちへおいで——」

私は西条紀代の手を握って引き寄せた。

いじめたくなる娘

「紀代」

「ハイ」

「紀代は縛られるのは、今日が始めてだから

洋服を着たままで縛るよ。手首なんか、シャツの裾の上からだったら痛くないだろう」

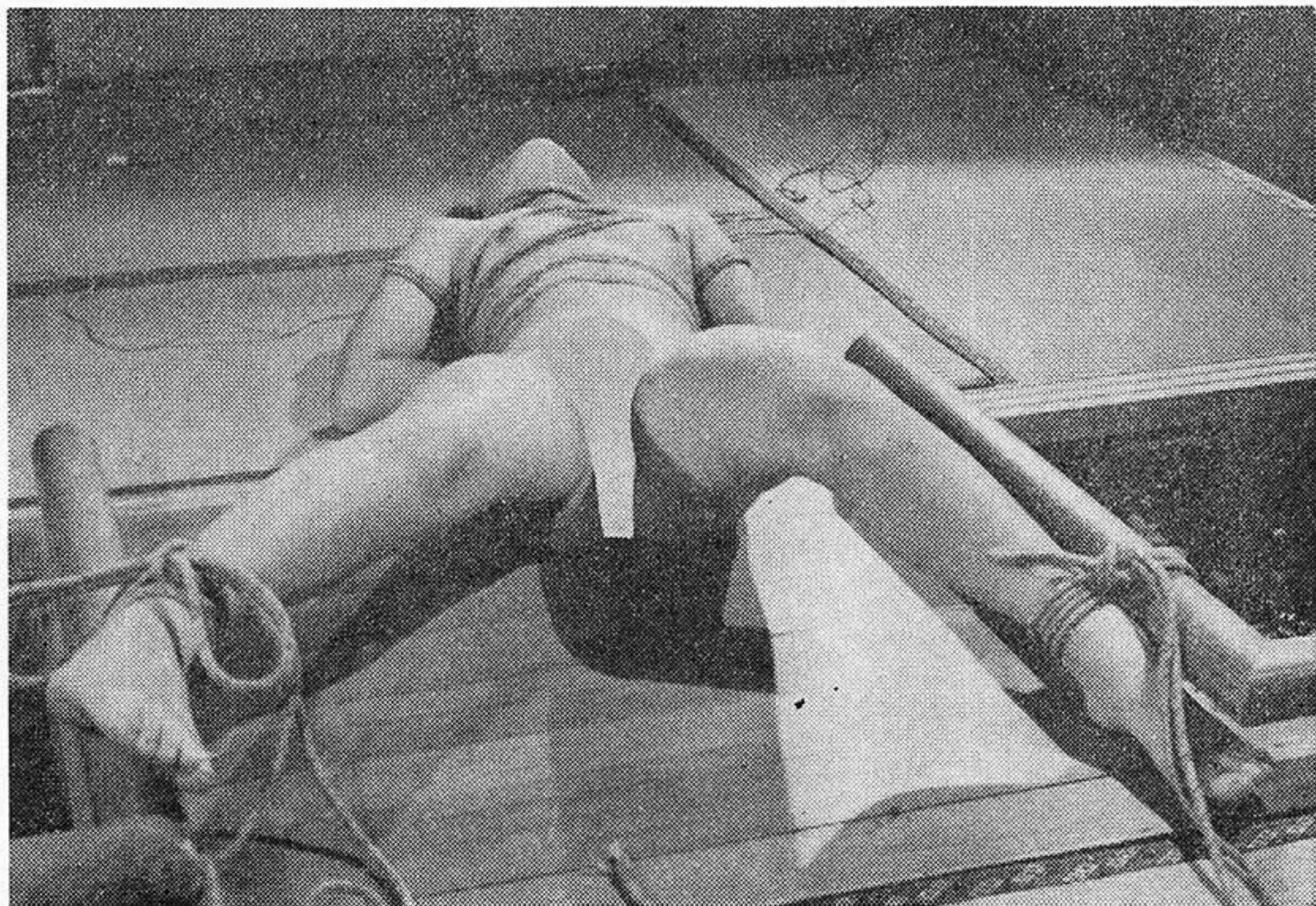
私は白ロープを取り上げて西条紀代の手首をシャツの上から、きゅっと縛りつけた。いつもの手馴れた縄捌きで、あっという間に、高手小手に縛り上げてしまった。

湯上がりの柔らかくて温い肌がシャツの下に湿っぽく感じられるのを、掌に快く味わいながら、ぎゅっと白いロープを締めつけてゆく。

「痛いかい？」

「いいえ」

素直で大人しくて、なんでも言うことを聞きそうな紀代は、なんとなく、いじめたくなるタイプである。痛くはないだろうと思いつつも一応はそう聞いてやって、紀代の否定の返事をきいてからズボンのチャックをはずして引き下げる。



ぴっちり太股に喰い込んだズロースがあらわれる。そのズロースを引き下げると、その下に、またパンツをはいている。

そこまで、数枚の写真を撮っておいてから白いロープを解く。紀代は下がっていたズボンを慌てて元に戻す。

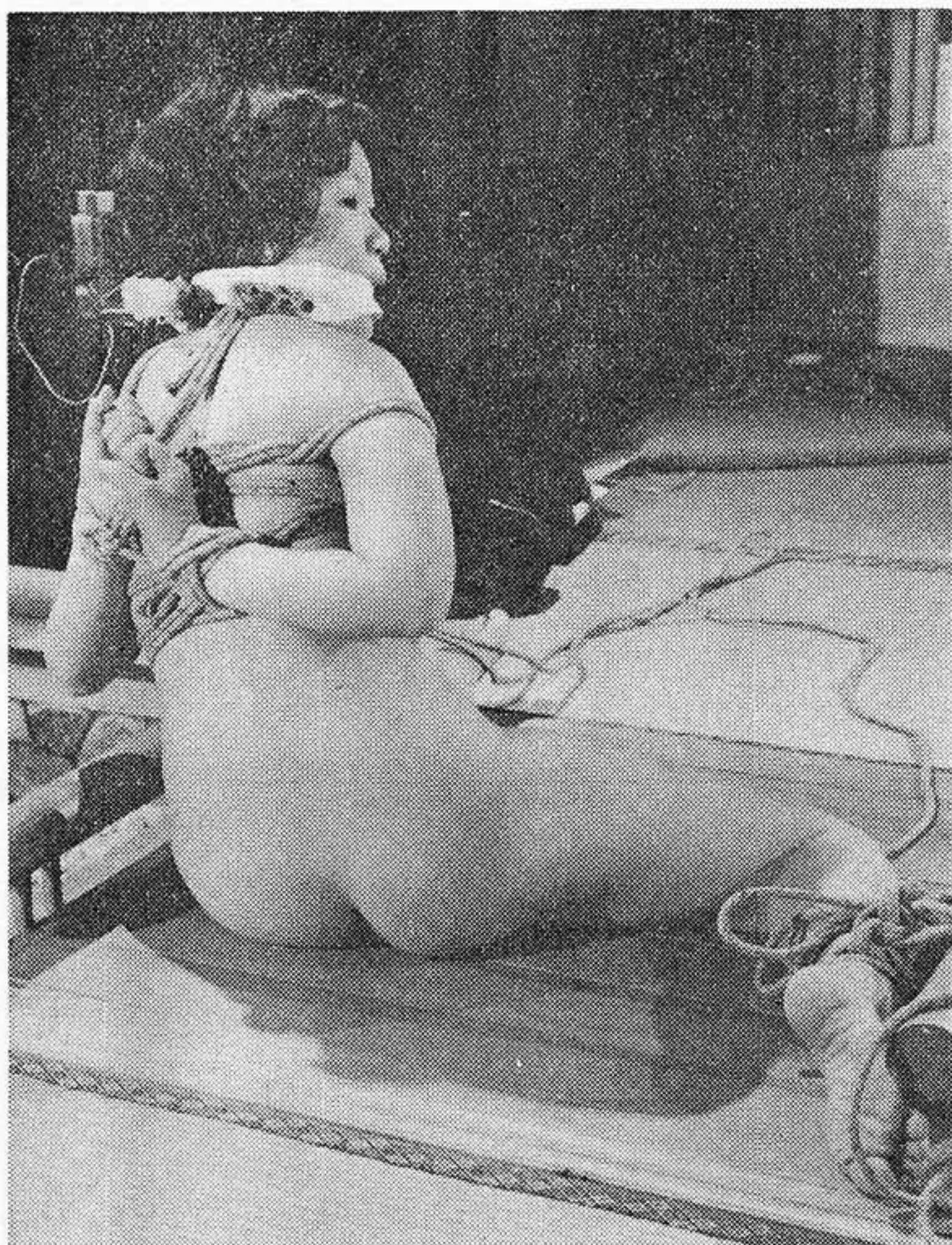
「どうだ、痛くなかっただろう？」

「ええ、ちっとも……」

「次は、そのシャツを脱いでもらおうかな」

紀代がシャツを脱ぐと、むっちりとした白い肌があらわれた。私が近づくとブラジャーをむしり取られるかとも思ったのか、両手で胸を押さえようとす

るのを、背後へ捻じ上げて背中のところまで交又させた。



る女も多いのだが、紀代は思いきり、手首を引き上げても、少しも苦痛を訴えない。

「なかなか、腕がよくあがるナ。これだったら、素晴らしい後手縛りが出来るゾ」

「そりゃ、若いもん」

「若くっても、身体の堅い人は、痛がるもんだよ。紀代は何かスポーツをやっていた？」

「ハイ、中学校の時、バレーを……」

「そうか。とにかく、これだけ身体が柔らかかったら責め甲斐があるというもんだ。相当極端なポーズでも出来るんと違うかな」

私は再びズボンを脱がせ、ズロース、パンツと引き下げてゆく。男の手で、こんなに下着をとられてゆくななんて、紀代にしては生まれて始めてのことだろう。下着を、すっかり取り去ってしまう

と紀代は、くたくたと、その場へ膝を合わせて、坐り込んでしまった。

「どうした？ 起つんだ、起つんだ」

叱咤して立たせ、私はカメラを構えたままでポーズを次々に命令する。紀代は私の言うことが充分、飲み込めなくて、おろおろする。それでも一生懸命、言われた通りの格好をしようと両手を緊縛された不自由な身体を動かす。私の叱声は矢つぎ早やに飛ぶ。

胸をブラジャーでかくしたままの縛られた裸で、紀代の肢体

は羞らいを、いっぱいに見せながら、明るいライトの中で微妙な動きを見せる。こんな間近で異性に裸を見られるのも初めての経験であらう。

剝玉子むきのような真白い女体が、五〇〇Wのフラッドランプ二個に照らし出されて、今、私の目の前、近々メートルのところで、うごめいているのは、紀代のハダカを初めて見る私にとっても、それは中々興味があった。

ほん、一時間ほど前までは、きっちり洋服をつけていた西条紀代だが、今では素裸にされて縄で縛られているのである。読者の方々にとっても、初めて見られる紀代の裸で縛られた写真は興味が、おありのことと思う。

嘗て、辻村隆氏と会って話をした時、まだ一度も縛られたことのない若々しい女性をハントして、写真を撮りSMプレイをするところを記事にしてみたいね——と、言い合ったことがあるが、今の西条紀代こそは、まさにその一度も縛られたことのない若々しい女性なのだ。

私の施すこの縄が、紀代にとっては、いわば処女縄ともいふべき筆下ろしなのである。

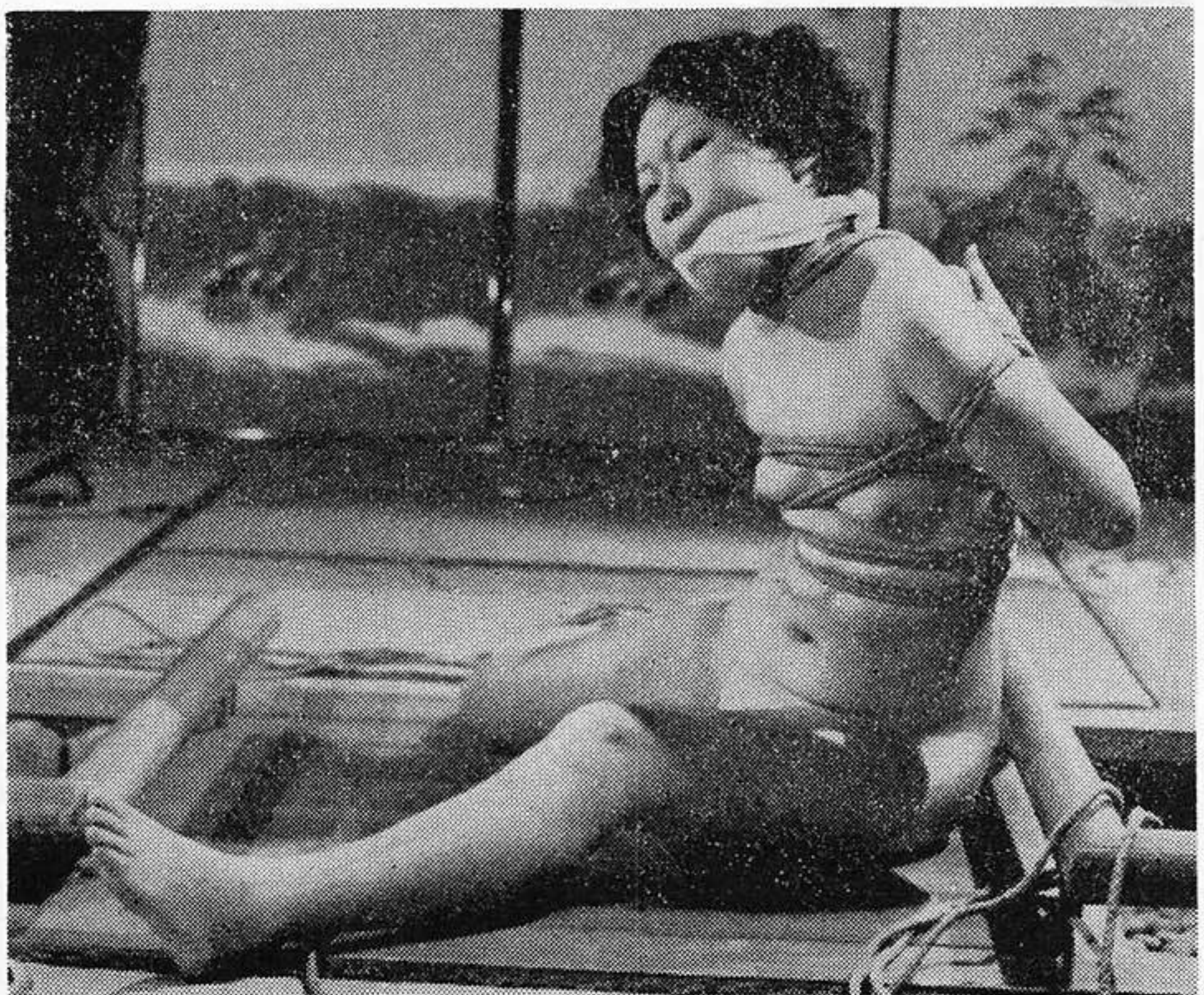
十九才の白い肌を思ふ存分、眼で眺めまわしてから、私は再び縄を解いた。

紀代の様子から見るとこれくらいの縛り方だったら、まだまだ、いくらでも辛抱するように見えただのであるが、ブラジャーを取るために、私は縄を解いたのだ。いわば、

今までは試し縛りのようなものだ。縄に対する紀代の反応を見してみる段階であった。

今まで見ていた範囲では、これはなかなかいけそうである。流石に、ベテランのマダム美美代が選んで推してくれただけのことはある。これだったら、本格的な強烈な縛りをやったところで、決して弱音を吐くようなことはないだろう。紀代には、どうやらマゾの素質がありそうである。

縛りの序の曲が終わったところで私は最後に残っていたブラジャーを、むしり取った。



ピンク色の可愛い乳首が、ちんまりと鎮座します乳房は、申訳程度の膨らみを見せているだけで、まさに異性の手垢で汚され



ていない稚さを秘めた丘陵であった。同じ年頃、いや、紀代よりは二つ三つ、上かも知れ

ないが、あの高村浩子のような見事に成熟したポインは期待すべくもなかった。

「紀代、君は男の友達に居ないのかね」

私は突然、なんの気なしに、そんなことを口にしていた。

「男の友達って、ボーイフレンドのこと。そんな人って居ないわ。話しかけてきたって、返事もしないもん。勤めてるところが純喫茶だし男の友達なんて出来ないのよ」

「そうだろうナ。この乳房は、男のさわった形跡ってものがないからね。どうだい、ここを男の人に触らせたことがあるかい？」

「いやッ、くすぐったいわ。そんなところを触ったら……」

私が、その低い盛り上がりを見せた乳房を触ろ

うとしたら、慌ててその手を払いのけようとした。紀代にしては、初めてあらわな表情と自分の意志表示をしたことになる。

可愛いくて、そして、なんとなくいじめなくなる少女である。私は裸の紀代を、ぎゅっと抱きすくめてやった。こりこりと腕のなかで、もがく快い反応が伝わってきた。

「そうだろうなあ。どう見ても、どうやら手づかすの無垢の肌だもんナ」

私はそう言って、本格的な縛りをすべく、縄の束を手元に引き寄せていた。

後手首がよくあがる

こうして、西条紀代を裸にひん剥いてみると、顔もタイプも高村浩子に、よく似ているように思える。あの急速にM女化していった高村浩子に似ているとしたら、紀代もまたM女化する運命にあるのだろうか。

ここまで縛った手ごたえでは、紀代はどうやら、縛られることを嫌がっていないばかりか、徐々にではあるが、縛られることを楽しんでる風さえある。

無垢で純情な紀代のことであるから、縛れば縄になじみ、鞭打てば鞭になじむかもしれない。最初から懲りてしまうようなことをし

ないで、女の肌を仕込んでゆけば、縄にでも鞭にでも、或は浣腸器にでも、馴染んでゆくように飼育してゆけることだろう。

条件反射をうまく応用すれば、抵抗少なく所期の目的を達することが出来る筈であるが、これには施術者の強い意志の力と、辛抱づよい馴致が必要であるのは論を俟たない。

S Mプレイの中で、責められるということが、いつの場合に於いても、直接間接に快感につながるといことが体験されるように、繰り返し反復されるとしたら、特に暗示にかかり易い女性は、それだけで、もう自分がマゾであると錯覚してしまうかもしれない。

Mの傾向のない人でもそうであるから若しマゾの素質を濃厚に保有している女性であったならば、当然のこと、急速にM女性化してゆくことになる。

西条紀代を見ていて、私はなんとなく、そんな危惧を感じたのである。

若し仮に、私が腕に縊^よりをかけて紀代を縛り且、責めてゆくとしたら、それこそ、第二の高村浩子が誕生するかもしれない。



の自分の心境を手紙に書いて寄こしてきたので、私にとっては大いに参考になった。

浩子が浣腸してほしいと思っっているということも手紙によって知ったし、次のプレイでは部屋に入るなり奴隷扱いにしてほしい——というような希望もわかった。

そのうち、後手に縛られた不自由な身体で私の足や、もっと他のところも自分の口で舐めて浄めるといマゾの奉仕を願い出るよう

高村浩子も最初の頃は大人しくて無口で、

素直に私に自分の身体を縛らせているだけであつたが、次第に回を重ねるに従ってマゾの心が昂進してきたのか、S Mプレイの最中にマゾの世迷言を口から洩らすようになったりした。もっとも浩子の場合は、プレイをやった翌日には、必ずといってよいほど、その時

になったりした。

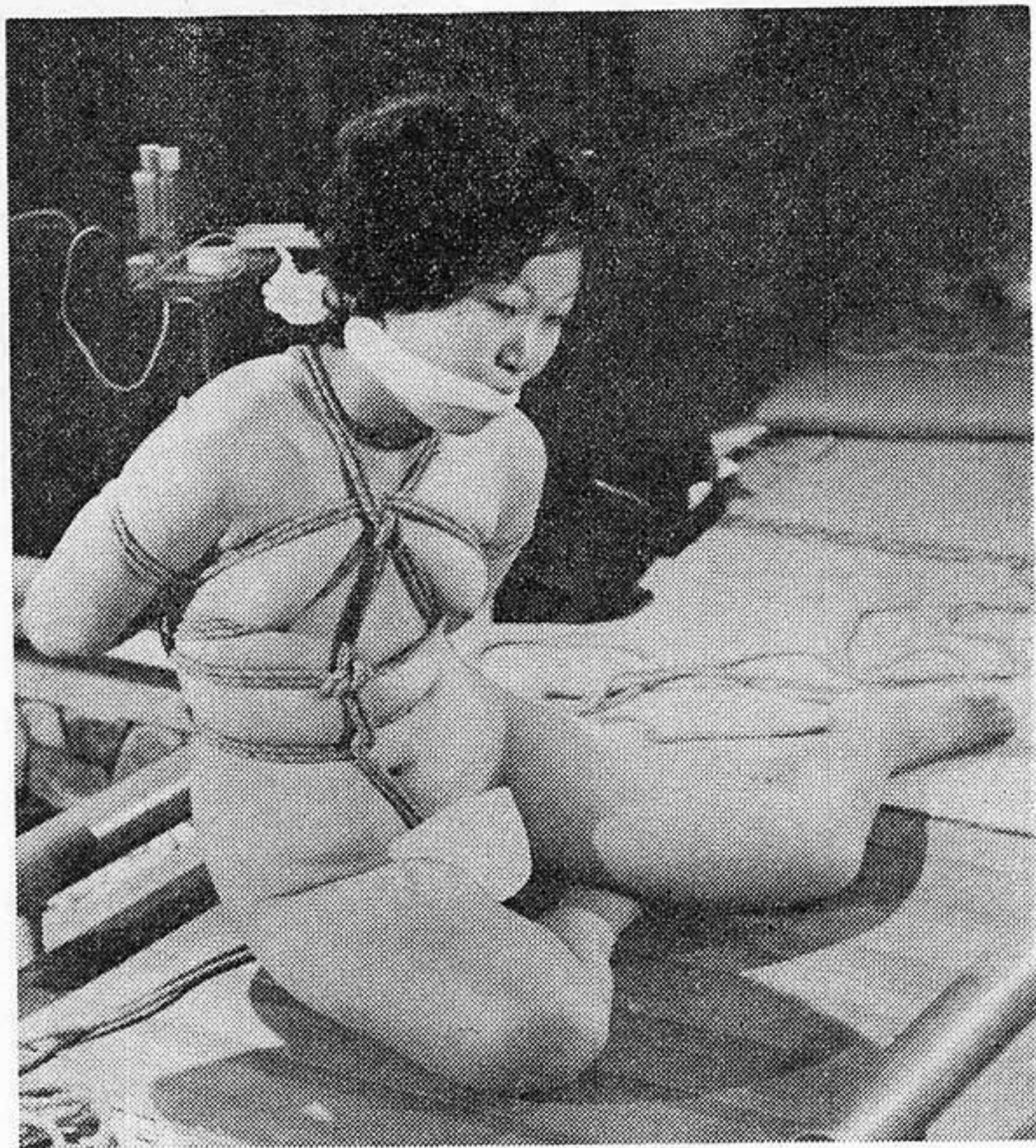
△この世の中にマゾの女性なんて、果たしているのだろうかVという疑問を抱く読者の方も多いことと思う。たしかに手をこまねいてはマゾのプラカードを掲げて先方から誘いかけるマゾの女性なんて、いないかもしれない。しかし、そうした行為が精神的にも肉

体的にも、直接間接、快感につながるものであるということを知ったならば、多くの女性は、繰り返される条件反射によって、マゾ的心理に陥ってしまうらしい。

その端緒としては、やはり心と心とのつながりが第一であると思う。

女性がこの人にだったら、どんなことをされてもいい、いや、どんなことをされてもいい、自分分は嬉しいのだという気持ち。もっと進んで、どんなことでもされてみたい——と、いう気持ちになってくるためには、心と心が離れてしまっていては最初から無理である。

女性の心をぐっと掴んでから、緩急よろしきを得て、たぐり寄せ、てゆけば、やがて水面に、その麗しい肢体と共にマゾの本心を現わしてくるものである。もっとも、鯛を釣ろう



と糸を投げていて、河豚^{ふぐ}がかかってくることも時にはある。こちらの努力が思わぬところで実を結ぶこともあるが、河豚^{ふぐ}は静かに針からはずして海へ放してやればよい。

さて——。

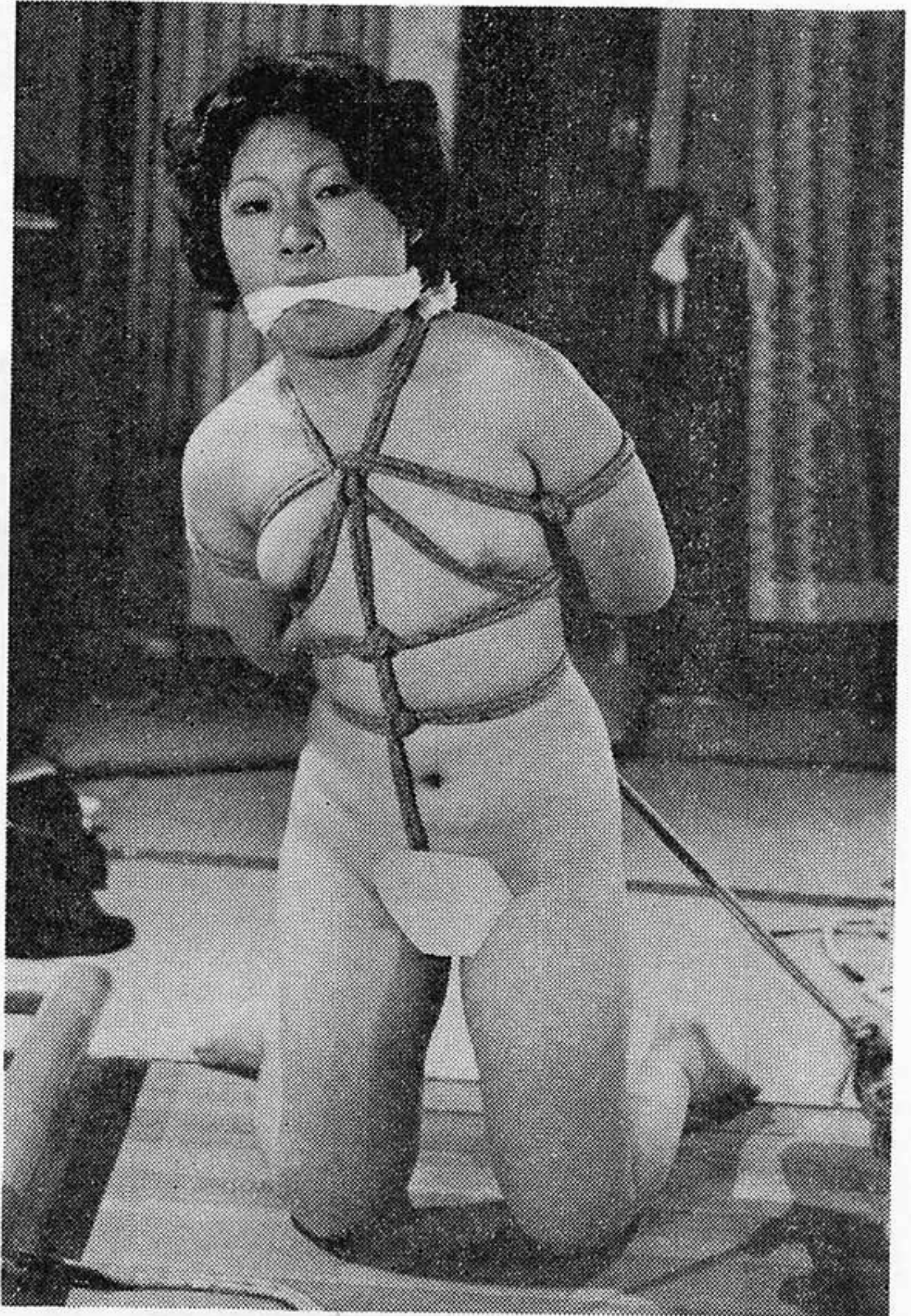
西条紀代は素裸にされたまま、部屋の中央で立たされている。脱がされたズボン、シャ

ツ、それにズロース、ブラジャーなどが足もとに、ちらばったままである。パンツなんかは、ひんめくった時、裏返しになって、丁度股の当たる個所が表になって、その汚れを、はつきりと見せている。

私は紀代の下着を傍に足で、はねのけておいて縄を手首にからませていった。肉づきのよい割りには驚くほど、よく上にあがる後手首であった。笠井奈保子なんかは、腕も相当太かったけれど、背後で水平以上に引き上げると、痛い、痛い、と忽ち悲鳴を上げる始末だった。本人は言われる通りにしようとするのだが、身体が堅くていうことをきかぬらしい。いつも私の叱責をかって、ベソをかいていたものである。

それに引きかえ、紀代の肢体は柔軟きわまりなかった。背中がX字に交叉させた後手首を引き上げると容易に肩口まで上がってくるのだ。その縄尻を腕と胸と胴へと縛ってゆくと、見事な緊縛感が醸し出されてくる。縄を身体に密着させて、痛くないように心を配りながら、きっちりと締め上げてゆくと、一分の隙もないように女体と縄とが、一体となって馴染んでしまった。

握りしめた拳が、だんだん充血してきて



赤く色が変わってくる。こちらから見ると、まるで自分の両手首を背中に背負ったような格好になっている。

「紀代！」

「ハイ」

「こちらを向いてごらん」

「ハイ」

「誰が足を動かせと言った。足は、そのまま顔と上半身だけを、こちらへ向けるんだ」

「ハイ、こうですか？」

「そんなに、反りかえっては駄目だよ。腰をひねって、そうそう、少しぐらい足は動いたって構わないから、もっとねじって——」

まだまだ固い固い蕾のような乳首、ピンク

色にはんのりと色づいているが、胸の膨らみは、ほんの低い丘陵程度である。それを、胸に掛けた縄によってたぐり寄せ、盛りあがらせ、なんとか目立つように仕上げる。

ちよっと触っただけでも、くすぐったいと逃げだしていた敏感な乳房。だが、今では無惨にも、その無垢な手づかずの乳房も、まわりを縄によって締めあげられて、むっくりと盛り上がっているばかりでなく、縄の間から引っぱり出され、揉みしだかれて、私の掌のなかで小鳩のように、ふるえている。

身動き出来ぬように後手首が背後で高々と縛られているばかりか、二の腕にも、胸にも胴にも縄が掛かり、このように乳房が飛び出すほどに、きつく縛られて弄ばれると、こんな気持になるのか——。

そんな風に紀代は思っているのか、うっとりと目を閉じて、私の腕の中に倒れ込んで来ようとする。

別嬪じゃないけど凄く可愛い子だと、マダム芙美代が言っていただけに、こう近々と寄ってみると、その言葉が嘘じゃないと感じるほど愛らしい。若さ溢れる女体の匂いが、ぶんぷんと鼻先に漂ってくる。

私の両腕の中に倒れ込んできた紀代を抱え

るようにして、その場へ腰を下ろさせる。

両足だけは自由だが、上半身は隙間なく、きびしく縄掛けされている。生まれて初めて全裸で縛られた紀代は、果たして、どのような思いでいるのだろうか。

下腹部のふくらみ、太股の白い肌の肉づきのよい、ぽちゃぽちゃとした感触。私は掌に若々しい女の生温い肌のタッチを味わいながら目の前の女体を視線で追っていた。女体の隅から隅までを肉眼で観察しながら、紀代だったらカメラで、どの部分を、どのように狙ったらよいかを考えていた。

今日は、なんといっても紀代にとっては、緊縛に関しては初日である。そう変わった極端なポーズもとれないだろう。縄に馴らす意味で、カメラの処に戻った私は、口で指示を与えつつ、紀代が自ら肢体を変化させる時の微妙な肌の変化を目で執拗に追っていた。

「紀代ッ」

「ハイ」

「こちらを向いて、このカメラの方を、みなさい。そして左足を曲げて右足を伸ばして」
ウブ毛一つなさそうな真白い肌が私の言葉に従って妖しい動きをみせて、足を伸ばしたり曲げたりして、肢体をくねらせている。私

は故意に意地悪いポーズを要求して紀代を困らせる。

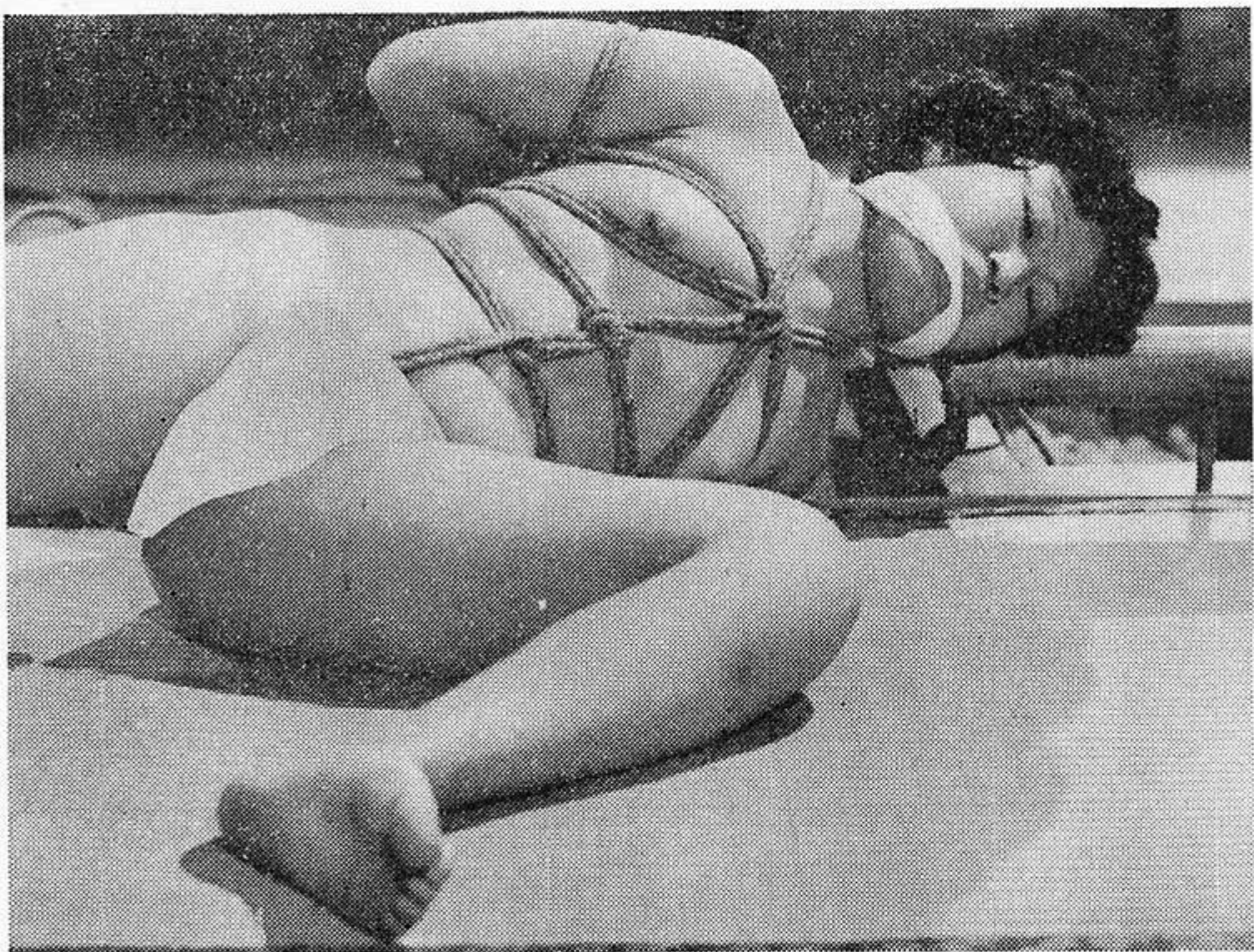
縄で、高手小手に縛られたということだけで、この平凡な田舎娘が、これほどまでに美しくなるものであろうか。高々と背後に掲げた後手縛りが紀代の被虐美を一層、実のあるものになっている。手首のよく挙がるという肢体の柔軟さが今の場合、紀代を被虐モデルとして一段と生彩あらしめているといってよい。

「腕がよく上がっているからよいポーズだ。その調子で僕の言う通りに身体を動かしてみろんだよ。紀代は中々カンが鋭くて呑み込みが早い。僕は大変、気に入ったよ」

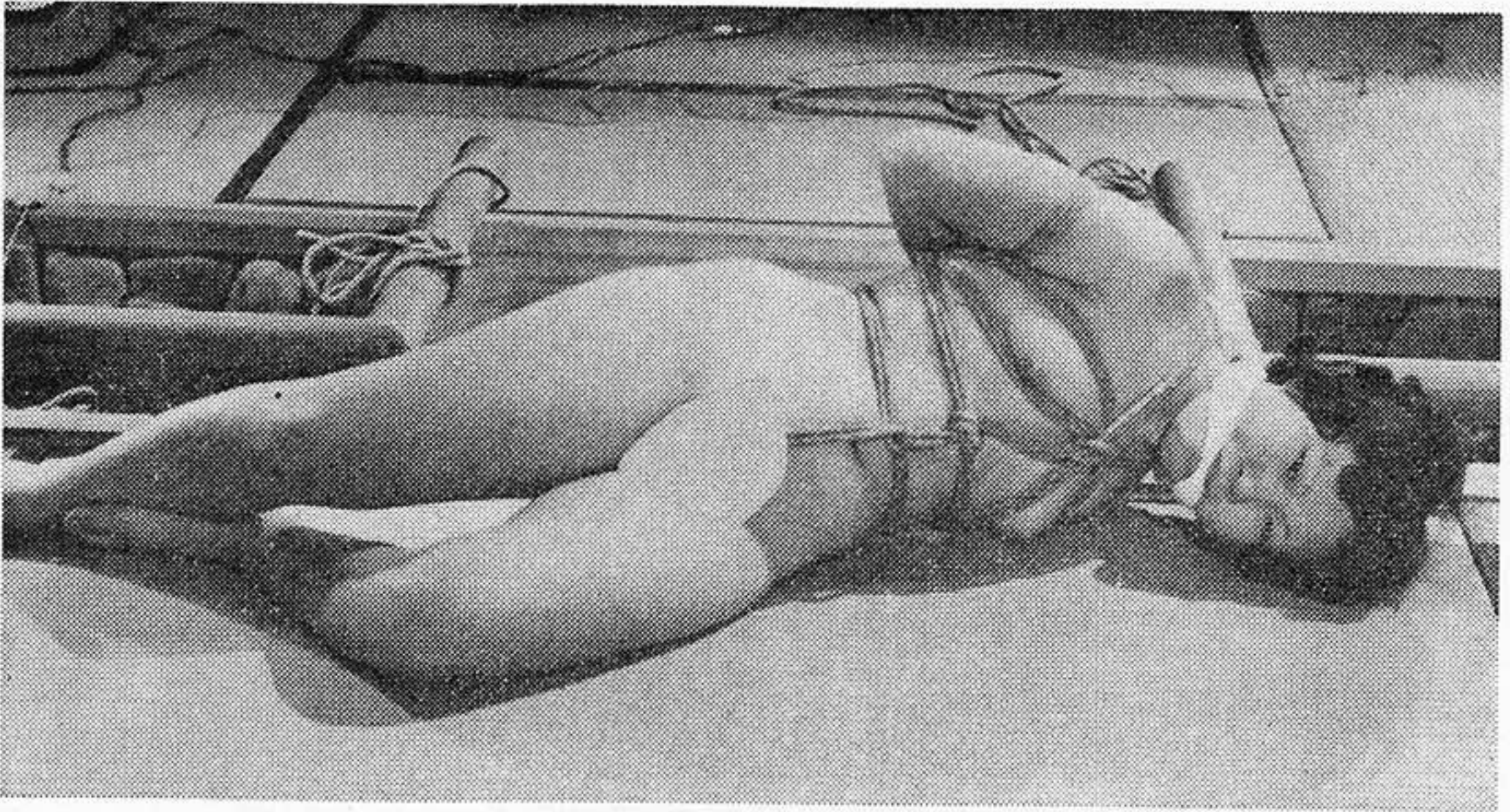
賞めてやると紀代は、うれしそうに、はにかんだような笑顔を見せる。

ここで私は紀代の縄を解いた。

早い目、早い目に、縛り方



を変えて、肌に対する縄の刺戟を、いつも新鮮にしておきたかったからであった。それに



若い女体は、今、縛られているという現在進行形が、妙にスリルと刺激を感じるらしいのだ。

紀代の裸身に、バスタオルを投げておいて、冷蔵庫からコーラ二本を出して分けて飲む。

処女の検身

室温は益々上昇の一途を辿っていた。

私は浴衣を肌脱ぎになっていたが、少しも寒く感じないばかりか、縛ったり解いたりしていると、額から汗さえ、にじみ出てくる。

窓のカーテンをめくってみると、射し込む淡い陽ざしの向こうでは、ひゅうひゅうと木枯しが如何にも寒そうな音を立てている。窓を少し開けてみると、思わず身ぶるいする寒風が刃のように飛び込んでくる。

休憩している間に、ライトの配置を若干変化させる。といっても、二つの部屋の間の板敷きの処へ被写体を据えるということには変わりはない。逆光で人物を浮き上がらせたいと思ったが、引けがないため、どうもいつものことながら思うように配光が出来ないのが極めて残念である。

後手首に縄を掛けると面白いようによく上がるので首縄に連結して下がらないようにしたが紀代は少しも痛がる風はない。後手縛り首縄に、二の腕と胸とをきっちり縛っておいて、板敷きの両端にある手摺りに両足を拵げて各々足首を左右に括りつけようとした。

だが、このポーズをとらせるためには、流石に紀代の抵抗を受けた。完全な開股縛りになるため、足首を手摺りに括りつけようとした時、膝を堅く合わせて開けさせないようにした。それを無理に押し開いて、やっこのこととで八の字に両足を開かせて左右それぞれに足首を縄で固定した。

そこで私がカメラに戻って、シャッターを切っているうち、安定を失った紀代は仰向けに倒れてしまった。シャッターを切りながら私は紀代に、「起きろ、起きろ」と言葉をかけたが、両足を八の字に開いて足首を括られているので、これは無理であろう。

仰向けに寝て両足を開いた紀代の姿は、まことに無防備きわまりないポーズであった。起き上がろうとしても、起き上がれず、すべてを放りだしたまま、懸命にもがいている紀代を私は上から冷ややかに見下ろしていた。「紀代、君はまだ男を知らないんだね」

「ハ、ハイ」

仰向けのまま消え入るような声で答えた紀代の顔が真赤になった。

「紀代の言うことが本当か嘘か、これから検査するからナ、大人しくしてるんだよ」

紀代は、その間中、素直に、じっと両足を八の字に開いたままだった。

「本当に紀代はバージンなんだナ」

私はその根拠をはっきりと見てから立ち上がり、紀代の足首の縄を解いた。

室温が徐々に上昇してきたように、紀代の心も次第次第に、私に傾斜してきたようだ。私の検身の触手に対して、嫌がるどころか、なんとなく、お尻をもじもじさせて、持ち上げるようにして、それから身をすり寄せてくるような素振りさえ見せてくるのだった。

身動き出来ぬように縛られていて、異性の手で検身されるということは、いたくマゾ心を、くすぐるらしいのである。

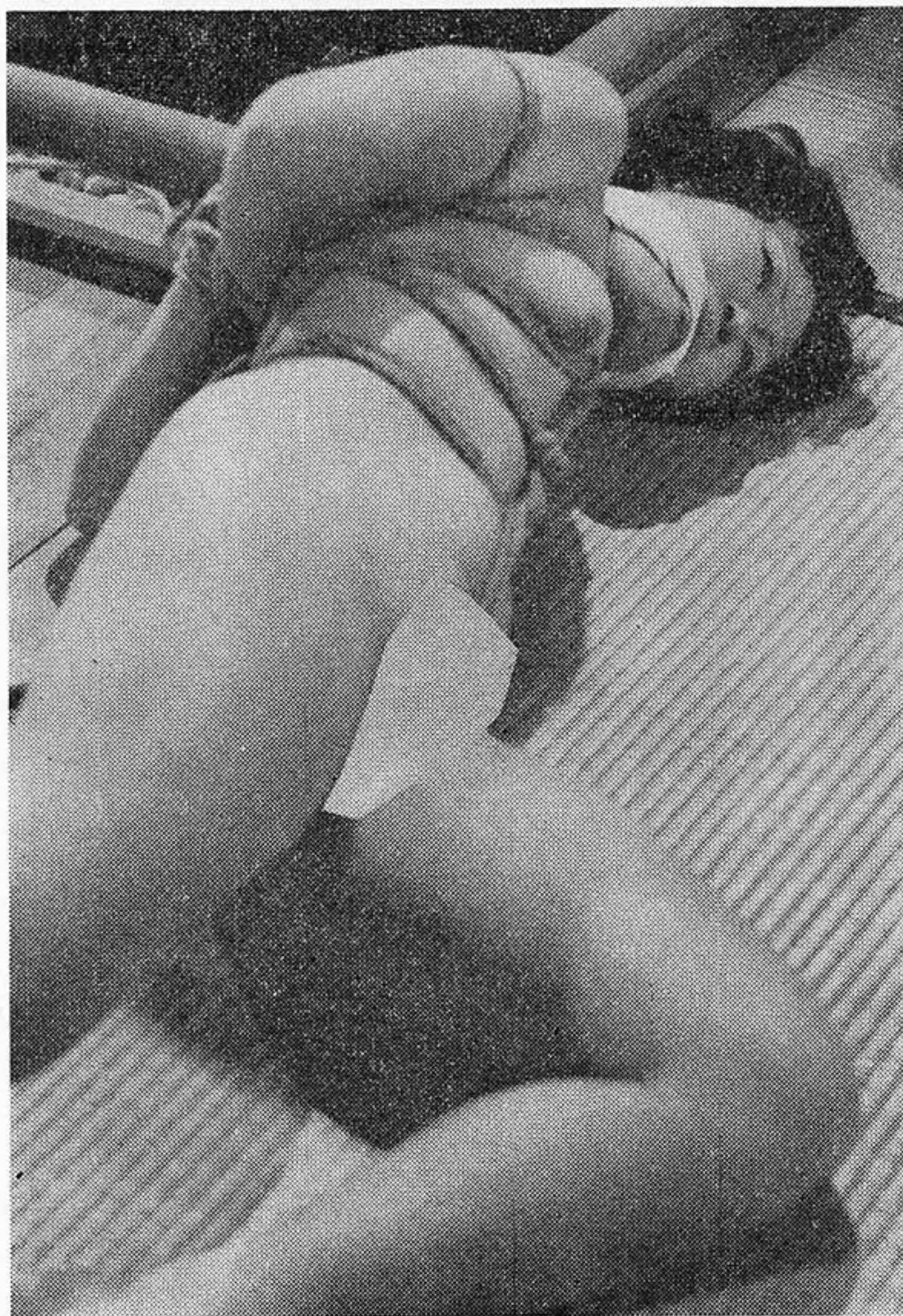
ここで私は白布をとって、紀代の歯と歯の間を割って猿ぐつわを噛ませた。別に発声を封じようと考えたわけではなく、被虐の表情に一抹の色どりを添えようと思ったからに外ならない。猿ぐつわ美人と言われるくらい、猿ぐつわによって眼の表情が、いきいきして

くることは経験者の知るところである。

猿ぐつわを噛ませることが、緊縛女体について必須条件だと主張する猿ぐつわファンもある反面、顔の表情をかくすといって嫌がる人もあって、まちまちであるが、猿ぐつわは被虐のムードを高めることだけは確かである。また、M女のなかには、非常に猿ぐつわ

の好きな人があって、猿ぐつわをされると、忽ちにして燃え上がってしまうという例を知っているが、無垢の紀代は、何をされるのかわからない、といった不安な目ざししながら、言われた通り、素直に口を開くのがあった。

足首の縄を解いておいて、被虐の姿態を自由に与えるため、私は離れてカメラの処に



位置し、紀代に指示の言葉を、かける。

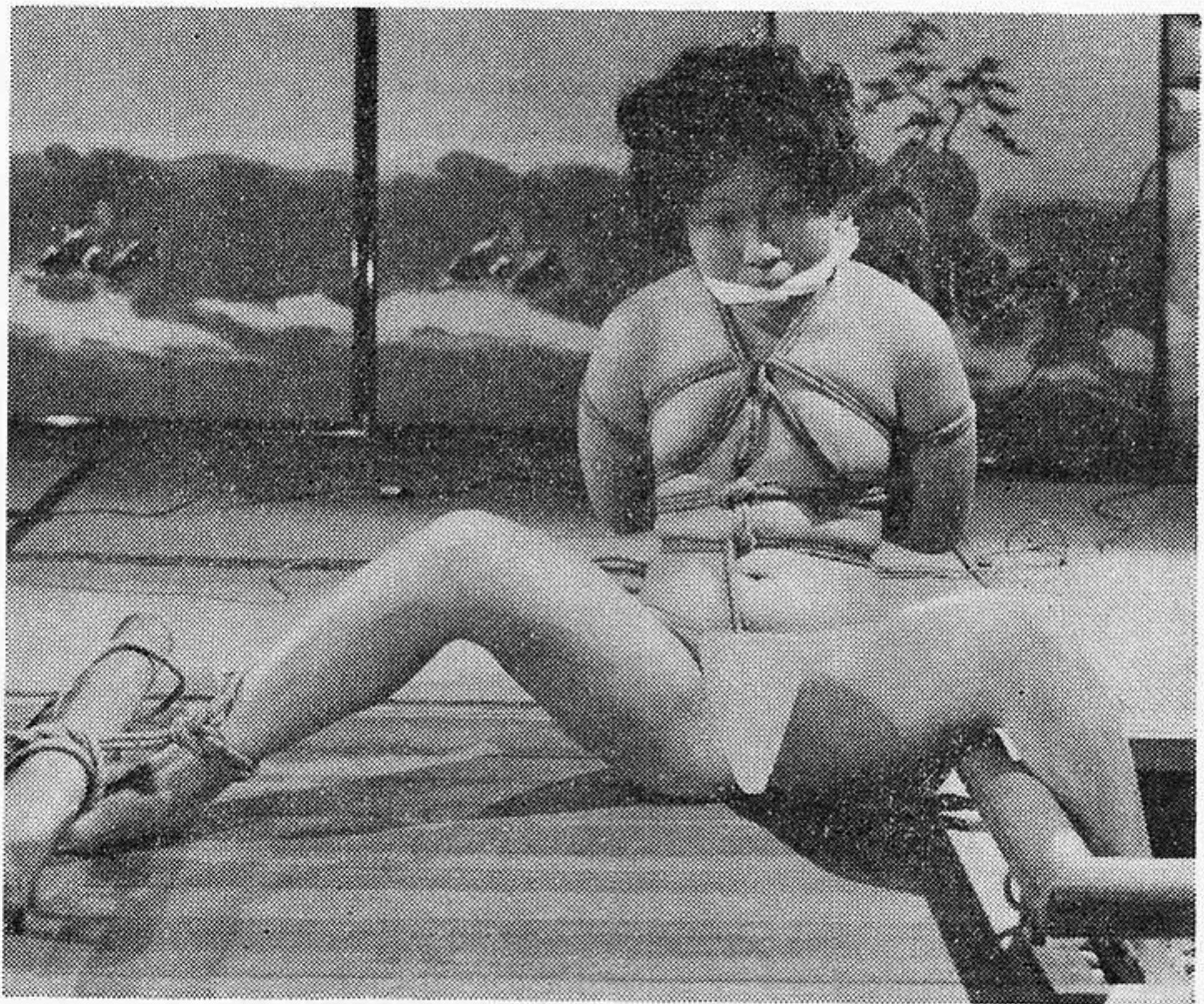
「左足を伸ばして上半身を左にひねるんだ」

縛り初めてから二時間ばかりで、紀代はポーズをつける要領を早くものみ込んでいた。白布の猿ぐつわもまた、顔の表情に、しまりをつけ、一層、被虐味を増してきたようだ。

紀代の希望しているように、口絵の第一頁を飾るような緊縛写真が果たして出来るだろうか。西条紀代は本当に、田舎から出てきたばかりの素人娘である。東京のヌードモデル専門の女性と違って、お化粧道具さえ持っていないズブの素人なのである。

それが、第一回の緊縛から、これだけの被虐のポーズが出来るのであるから、読者の方が初心な女性とSMプレイを経験される場合この西条紀代の緊縛行は、大いに参考になるのではないだろうか。

先月号のルポで私が試みた玉木章子なんかは、なんといっても、七年間の緊縛プレイの



と同日に論ずることは出来ない。

股間縛りに羞らう

縄を解いて、すぐ縛り直したのが股間縛りである。荒尾慶子は、大胆にも、剃毛と股間縛りが好きだと言ってきたが、一体、若い女性にとって股間縛りというものが、どのようなショックを与えるものであるのか、その内面的なことについては、男性の私には、よくはわからない。

後手高小手に縛り上げておいてその縄尻をパツと股の間にくぐらせて、ぐぐぐ——と締めつけてゆくのは、S男性にとっては女体緊縛ならではの痛快味であるに違いない。

間髪を入れぬ巧みな縄捌きに対して、あっと驚きながらも、その時に示す女性の表情の変化や態度は、さまざまである。しかし、その際、嫌悪の情を現わすのは皆無であるばかりでなく、それが当然のように、縄をくぐらせよように協力してくれる女性もある。

中には、如何にも心地よいといったうっと

キャリアを持っているし、年令も二十六才と爛熟した女体の持主であってみれば、私にしては第一回の緊縛行ではあったが、西条紀代

りとした表情で、縄に身をまかす女性もあるのだが、そうした女性の縄を解くときに、注意しなければいけないのは、うっかり縄をたぐり寄せていると、手にべっとりと液体を感じることがある。そうしたことは、あながち経験に富んだ女性に、ということは限らなくて、どちらかといえば、未経験な年若い女性の方に多いように思う。

西条紀代に対しては、私は容赦なく、縦縄をきゅつと力いっぱい締めつけて双丘の間へ喰い込ませていった。今までの三時間に亘る緊縛プレイによって、彼女が縛られることについて、好ましく思っていることをいち早く見抜いていたからである。

平凡なポーズで、シャツターを切っておいてから、畳の上へ寝かせようと思った。勿論、自分で倒れることが出来ないのも、私が紀代の肩を抱えて横にならそうとしたのであったが、身

体を斜めにするにつれて、縦縄が喰い込んできて、苦痛を訴えだした。

私が縄を指で辿っていったらみると、前の方で挟み込まれていて、お尻の方では、たくし上がっていたので、縄を平均になるように、ずらして紀代の身体を畳に横たえる。

馴れてきたとはいえ、この股間縛りでのポ

ーズは、やはり初心な紀代にとっては羞かしげであった。

恥かしさをかくして、私の指示に従って懸命にポーズをとろうとする紀代は可憐であった。股を開けと言われて、どうしようかためらいながらも、おずおずと命令に従う紀代の心のなかに、マゾの心が次第次第に芽生えてくるように感じられた。

ここで私は再び縄を解いた。

余り長く縛っていると手首や腕が痺れてくるということを感じたためでもあるが、紀代のよく上がる後手首に魅せられて、更に変わった縛り方を試みたかったからである。

そう長く股間縛りにしていたわけではなかったのに縄を解いてゆくにつれて、温くぬくもりをもった縄の一部が明らかに濡れているのが感じられた。

次は、変化をつけるために卓を持ち出してきた。例



によって後手首をがっちりX字に交叉させておいて、皮肉に喰い込むほどの力をこめて縄を掛けていった。今までと違って手加減は一切せずに思いつきり力を入れて縄を締めつけた。

胸にも胴にも、縄を喰い込ませておいて、豆絞りの手拭いで猿ぐつわを噛ます。

そうしておいて卓の上に乗せると、丁度飾りの置物のように、美しく鎮座ましましている緊縛女体が白い肌を縄の縞目で彩っているのが、カメラのファインダーいっぱいに映じている。私は憑かれたようにピントを合わすと、正面と背面からシャッターを切った。

二の腕と脇腹とをびったり密着させておいて、後手首を逆十字に交叉させて縛られている姿態は、まことに緊縛感に溢れている。二の腕の盛り上がったところに厳しく縄が掛かっているのも、被虐感が溢れていて美しくも見事な眺めである。卓の表面に臀部の白い肌が、くっきりと映っているのも、一幅の絵のように美しく見える。

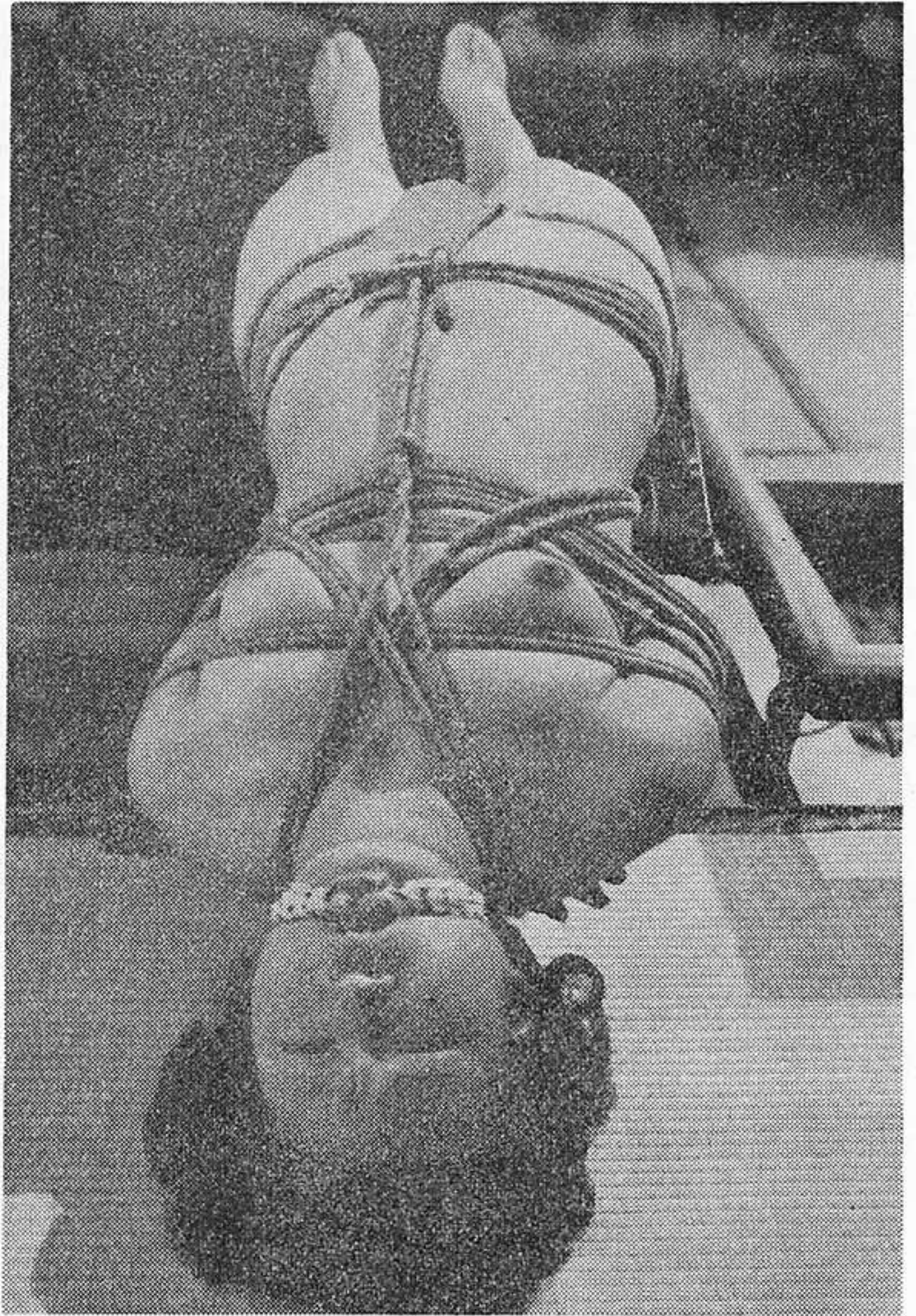


「なかなか、いいよ。ポーズもいいし、責めの感じが、よく出ている。初めて縛られたにしては、立派だよ。気に入ったね」

そう言葉をかけておいて卓の上でポーズを変えさせて次々とシャッターを切ってゆく。そこで一呼吸いれて立たせ、更に一本の縄を使って股間縛りにする。

辛抱づよいというのか、或はマゾの素質があるというのか、西条紀代は未だに一回も、痛いとか、解いてほしいとかいう弱音は吐かない。しかし、股間縛りにしてから、卓の上に横にしたときは、板に触れた肩口や二の腕の縄が痛かったのか、額に皺を寄せて、痛さをこらえている風であった。

しかし、次に縛られた両手首を身体の下にして仰向けにさせたときは、縄が二の腕や胸に恐ろしく喰い込んだので、流石にうううう……と呻き声を洩らした。余りにも痛そうなので、頭を下にして卓から、はみ出させて卓の角のところを丁度背中中に当たるようにしたのだが上半身の体重が、その背中にある両手首の一点に集中して、猿ぐつわを噛まされた口から苦悶の吐息が洩れた。私は背中の部分に手を差し入れてずらし、紀代の頭を畳につけるようにした。それでも全身が弓のように反って苦しいらしい。私はす早くシャッターを切ってから抱き起こし畳



の上に寝ころがした。

ポーズとしては、さして珍奇なものではなかったが、実際に受ける立場の者からしたら痛くて、そして苦しいお仕置であつたろう。

うっすらと目に涙を浮かべた紀代は、猿ぐつわの手拭いを取られても怨み言一ついうでもなく、そんな責めが当然だったように私の

両腕の中に縛られた身体を、ゆだねていた。

完全に荷造りされた女体が、私の膝の上で温かく息づいていた。私は、この縄を解いてしまふのが惜しいような気持だった。

「紀代——」

「ハイ」

「どうだ、痛かったかい？」

「ええ、少しは。でも、いいんです。私、辛抱します」

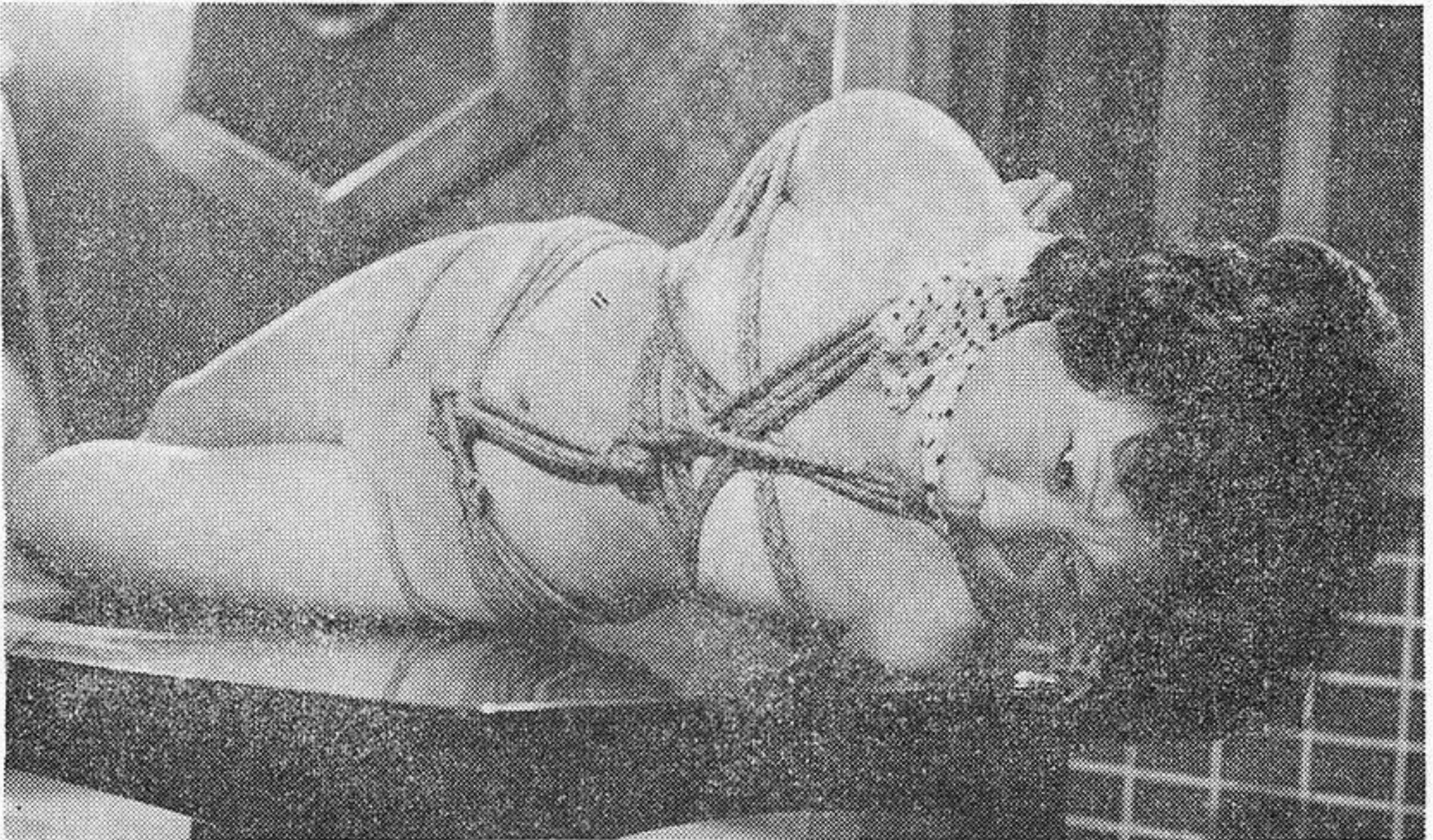
「そうか、いい子だ、いい子だ。本当に、紀代は素直で、いい子なんだなア」

私はいつまでも、このまま西条紀代を縛ったままで置きたかった。だが、そう長く彼女を引き止めておくわけにはいかない。今日中に新幹線で名古屋まで帰さなければならぬのだ。私は紀代を抱きかかえたままで片手で縄を解きにかかった。

また逢う日まで

ここへ来てから、もう何時間ぐらい経ったであろうか。カーテンのすき間から見えていた窓硝子の向こうの明るさも、いつの間にか真暗になってしまっている。この頃は午後五時を待たずして日が暮れてしまふのだからそれもまた当然のことだろう。

流石にタフな私も、こう縛ったり解いたり連続で休みなくやっていると、いささか疲れてくる。これが協力的でないモデルで、あでもない、こうでもないと言ってるんだつたら、とっくの昔に匙を投げているのだが、西条紀代は、縛っているうちに、だんだんと可愛いさが増してくるので、私も知らず知ら



ずのうち、張り切ってしまったのだった。

可愛いさが増してくるにつれて、もっともっと、手を替え品を替えて、いじめたくなってくるのだった。このまま手放してしまうのは、なんとしても惜しい紀代であった。

責め甲斐のある可愛い娘の紀代——あどけなくて純真で、田舎から出てきたばかりの素朴さを、そのままに持ち続けてきている紀代。彼女は幸いにして東京とか大阪のような大都市へ出て来なくて、地方都市の一角で勤めていたことが、すれていない原因になったのであろう。

身体がくびれるほど強く縛りつけていたのに、紀代は縄を解いてやると、いささかの不満の表情も見せず、浴衣を身にまとってから、お茶を淹れだした。

私は、この紀代が好きになった。

このまま帰してしまいたくない気持ちになってきた。一晩中でも、続けて責めてみたい娘であった。これから責め続けてゆけば、紀代の女体が果たして

どのように変化してゆくのか、それにも大いに興味があった。

「紀代、疲れたかい？ 今日、ぶっ続けて大分、縛ったからナ」

「いいえ、そんなことはありませんわ。私よりも貴方こそ、お一人でお疲れになったでしょう。私が休んでる間でも、動いておられるんですもの」

「そうね、少しは疲れたけど、紀代が大変、気にいったんで、思わずハッスルしてしまっただよ。紀代が、縛られることを少しも嫌がらないんで、もう一度、この白いロープでやってみたいもんだナ」

「ハイ、私は縛ってほしいと最初から、そう思って出てきましたんですもの、あたりまえですわ。縛り直されるたびに、だんだん縄がきつくなってきましたわね。今度は、もっときつく縛って下さっても構いませんわ」

「よし、そうときまれば、早速、やるとするか。この白いロープは、少しは痛いかもしれないよ。だが、なんといっても、紀代の手首のよく上がるのには感心したよ。縛り方によったら首筋近くまでくるんじゃないかな。ちなみに、よく上がる女^{ひと}って、余り知らないナ」

「そうですかしら。自分では、よくはわから

ないんですけど……」

「紀代だったら、海老責めでも吊り責めでも逆海老にでも、なんでも出来るだろうナ。なんととっても、若いところへ持ってきて、身体が柔らかいもんナ」

「そんなに気に入って下さったんだったら、今日だけじゃなしに、もう一度、縛って下さる？ 次のお休みは十五日なんです」

「うん、そうだね、大体いけると思うよ。マダムに電話して、詳しいことは連絡してもらおうからね」

「うれしい、是非お願いしますわ」

紀代は立ち上がると、パツと浴衣を脱ぎずって部屋の中央へ行くと全裸のまま、こちらを向いて笑っている。全く無邪気なものである。だが、最初あれほど恥かしがっていたのに、僅か二、三時間のあいだに、よくも、これだけ変わってしまったものだ。やはり縄の魔力というものが、紀代をこのように変身させてしまったのであろうか。

私は、次回の約束を紀代に対して、はっきり確答を避けていたのには理由があった。

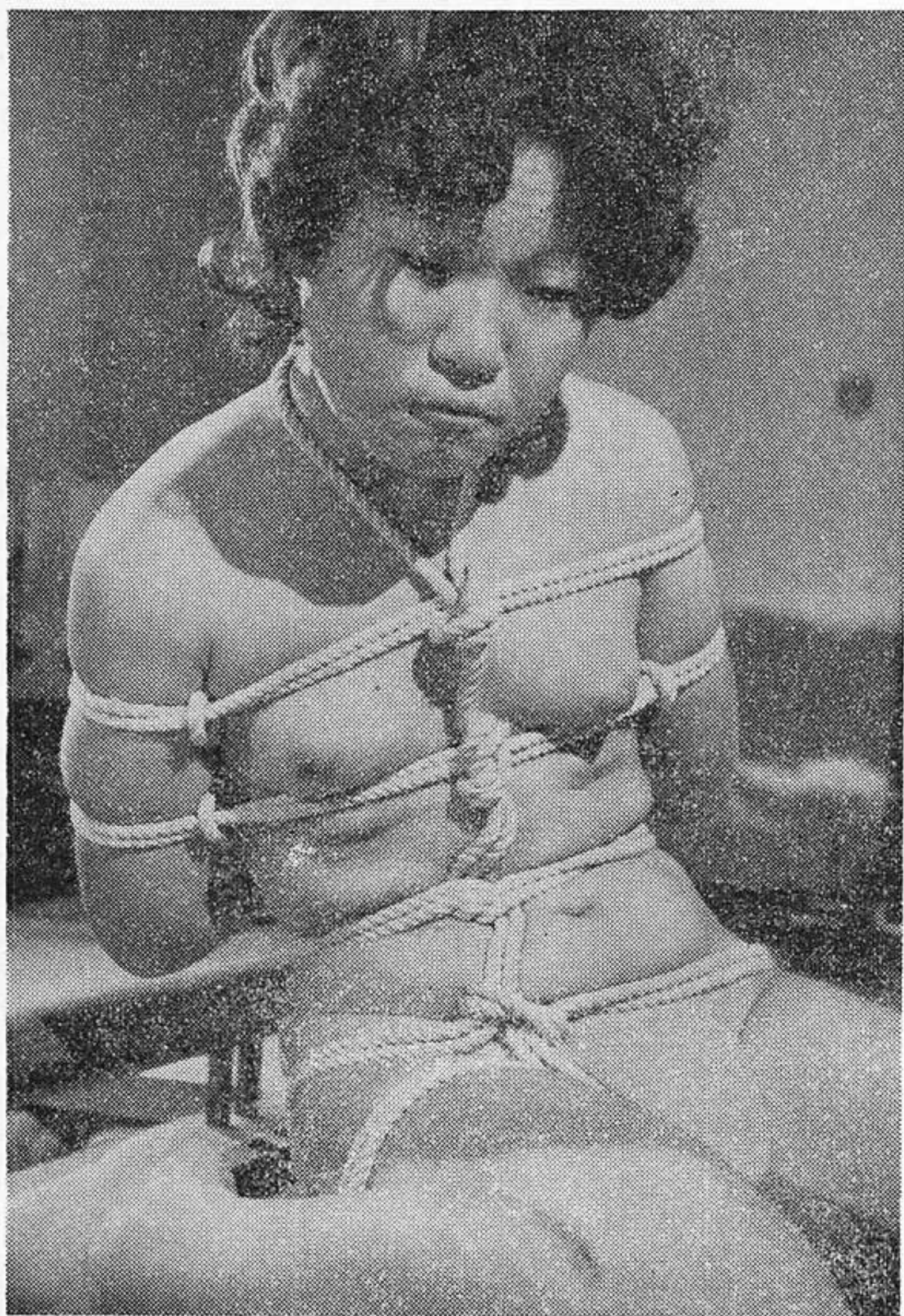
それというのは、十二月の中旬以降に、前田真知子が久しぶりに東京から京都へ訪ねてくるという通知を貰っていたからである。そ

れと、もう一人、先月もSMプレイをやった深田菊子とは、カメラを抜きにした複数のプレイをやりたいと持ちかけられて、十日すぎに日を決めて約束していたのだ。

例年、十二月という月は一年中でも、一番忙しい月になるのだが、今日はその幕明けの一日。その一日から、こうして午後の大半を

紀代と共に過ごしているのである。だから、うっかりした返事は出来ないわけだ。

皮肉なもので、不思議なことにSMプレイのルポ取材の話は、有る時にはよく重なるものである。更にもう一つ、十二月中になんとかして呉れと依頼されて気になっている話がある。なんでも、今まで読者通信にも



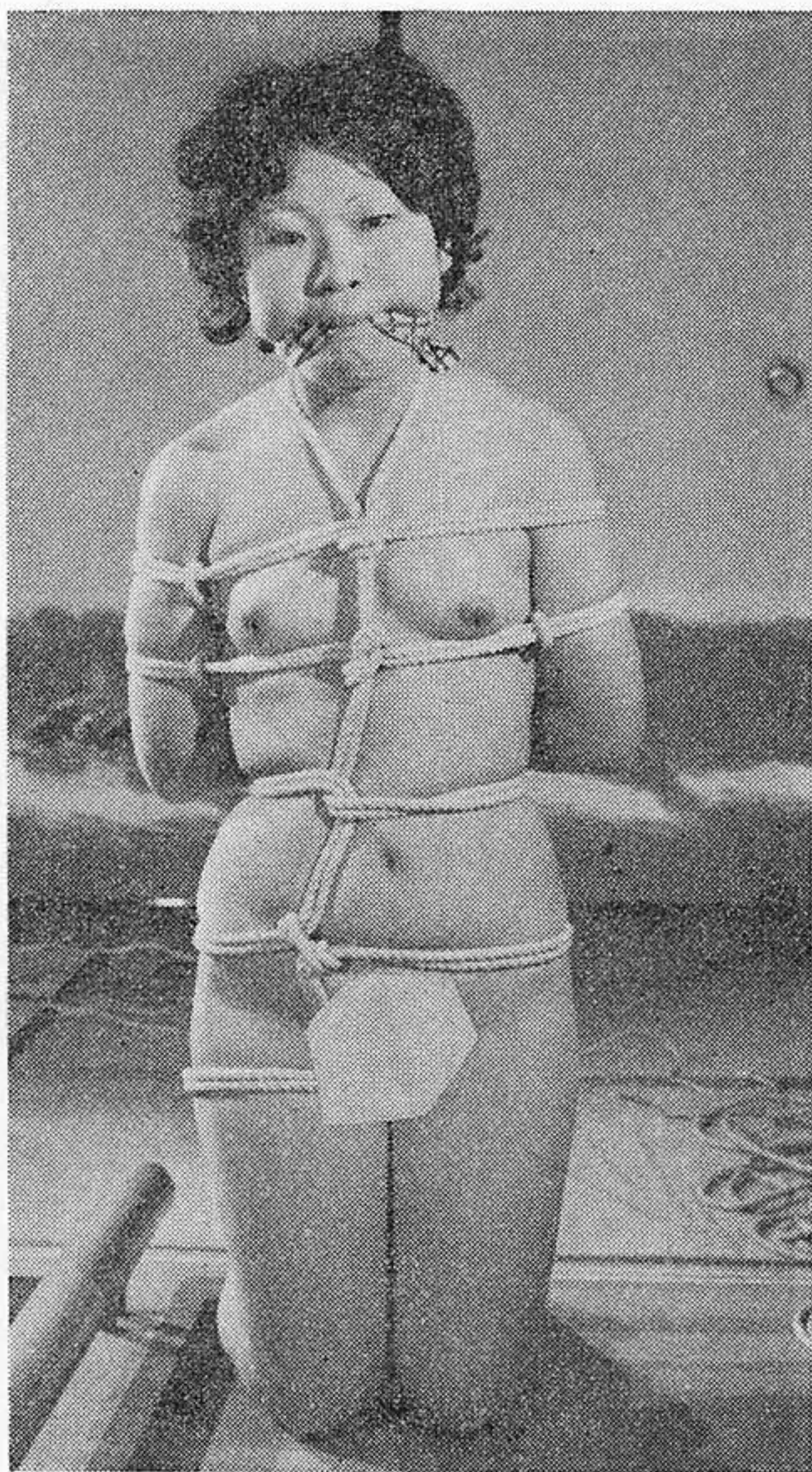
何度も載っていたという大分県中津市の南加津子という若い女性のことである。

何度も緊縛モデルの志願をしてきたのだそうだが、遠方なもので返事しないでいたところ、とうとう待ちきれなくて上阪してきたのだそうだ。いずれ、この女性のことルポしたいと思っている。手紙を見ているだけでも非常に興味をそえられるSMファンの女性であるからだ。私にしても時間の余裕さえあれば月毎に新しい女性のルポ記事で誌面を飾りたいのだが如何せん、いくつもの仕事を持っているため、趣味のSMプレイにさくことの出来る時間が限られているのが残念である。

お茶を飲み雑談に時を過ごしているうち、私は疲れが、すっかりとれてしまっていて、再び元気が回復してきた。

白ロープを手にして紀代に近づき、ぽっちやりとした肩口に手をやって、くると向こうをむかせて、両手首を引き寄せて交叉させロープを掛けていった。この白いロープには玉木章子も至極、痛がっていたのだが、果たして紀代には、どんな反応があるだろうか。

白くて長い一本のロープが、巧みに働いて後手高手小手、首縄と形づくり、やがて股間縛りに縄止めして、紀代の可憐な女体を拘束



していった。

「さあ紀代、今日の縛りはこれで最後だよ。歩いてごらん。部屋の中を、ゆっくりと、歩き回るんだよ。そうそう、うしろを見せて。それから、前も見せて。次には横も見えるように回ってごらん。そんなに、しゃがみ込んでしまっただけ駄目じゃないの」

私の言う通り、股間縛りのままで部屋中を歩きまわっていた紀代は、突然、動きを止めて、しゃがみ込んでしまった。

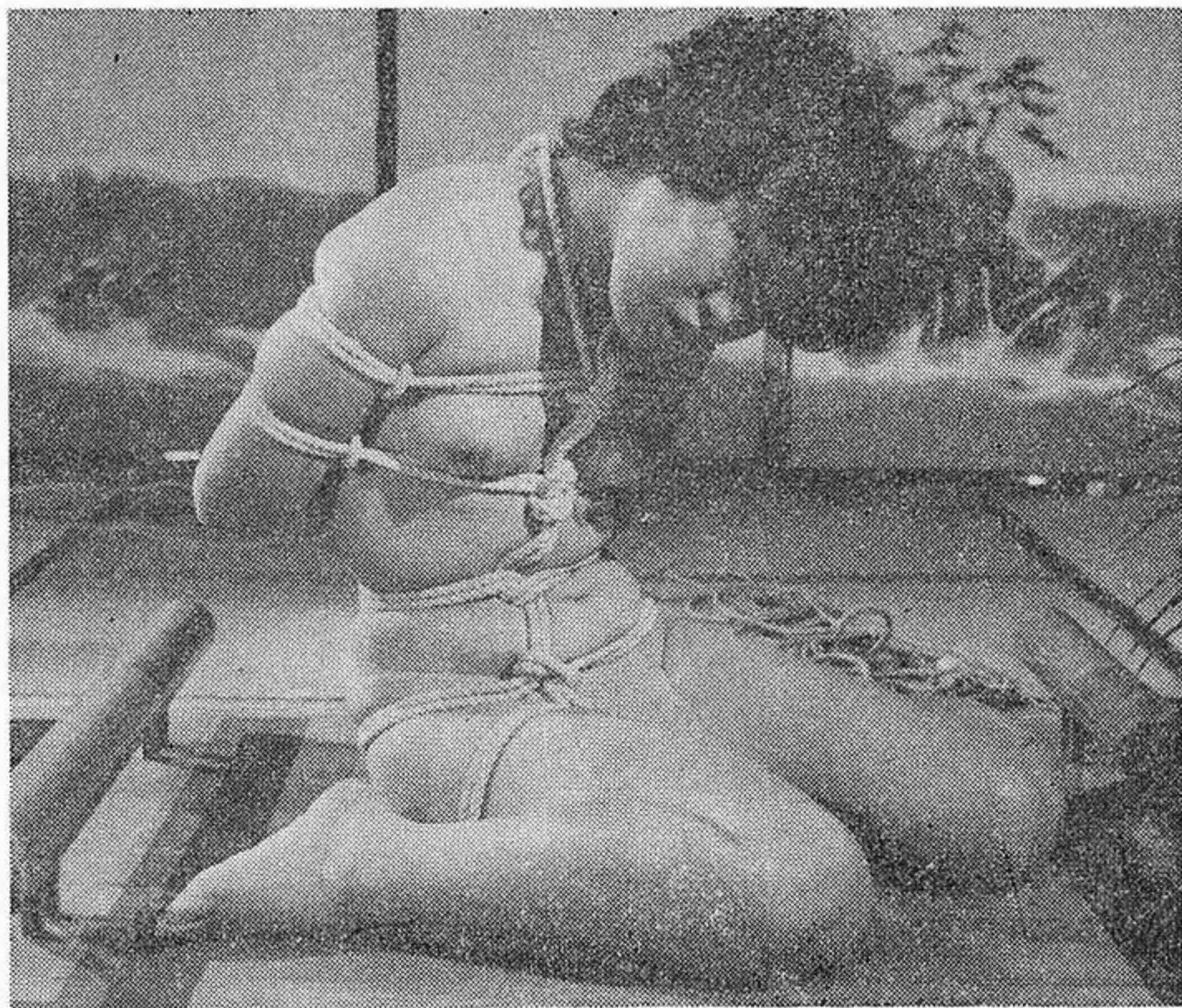
「どうしたの？」

「あの、股がすれてしまって……」

近寄った私は双丘に喰い込んだロープをずらしてやりながら、兼ねて検身を行なった。

紀代は上半身をのけぞらして私に、もたせかけ、お尻をもじもじと、よじりだした。

魔性の謎を持つ白蛇のような一見しなやかなロープが、この引き回しの間に、紀代に対して、一体どのような刺戟を与えたのであろうか。



紀代の柔肌を固く、きっちり締めつける縄目、その結び目は、堅いコブとなって喰い込んでいる。

私の手が触れただけでも、その縄目のきびしさが、ありありと感じられるのである。やはり、この白ロープは、今まで使っていた斑ら縄とは違うきびしさを、そのなかに秘めているのだ。

じわじわと、時が経つにつれて、徐々に肌を締めつけ、いためつけてゆく縄目。

女体のあらゆる個所に分布している性感帯を、目に見えない魔力で、じりじりと、刺戟し続けてゆくのだ。

紀代は、縄目が痛いとも、言わなかったし、解いてくれとも、言わなかった。

ハアハアと洩らす紀代の荒い吐息だけが、彼女の心の中の微妙な動きを表面にあらわにしているようだった。

白い肌も、心なしか、

ピンク色に染まって、上気しているようだった。

私はカメラの中にフィルムの大半を残したまま、全裸で荷造りした紀代の身体を膝の上に抱えあげていた。

ピンク色に燃えた柔肌に対して、ごつごつとした感触の白ロープは、美しいコントラストを醸成して、私の目の前に堅い結び目を見せていた。

私は、その結び目に手をやってみた。石のように堅い堅い感触であった。

胸のところで、一つ、二つ……と結び目に手をやった私は、その縦縄を伝って掌を下へ下へと、ずらしていった。

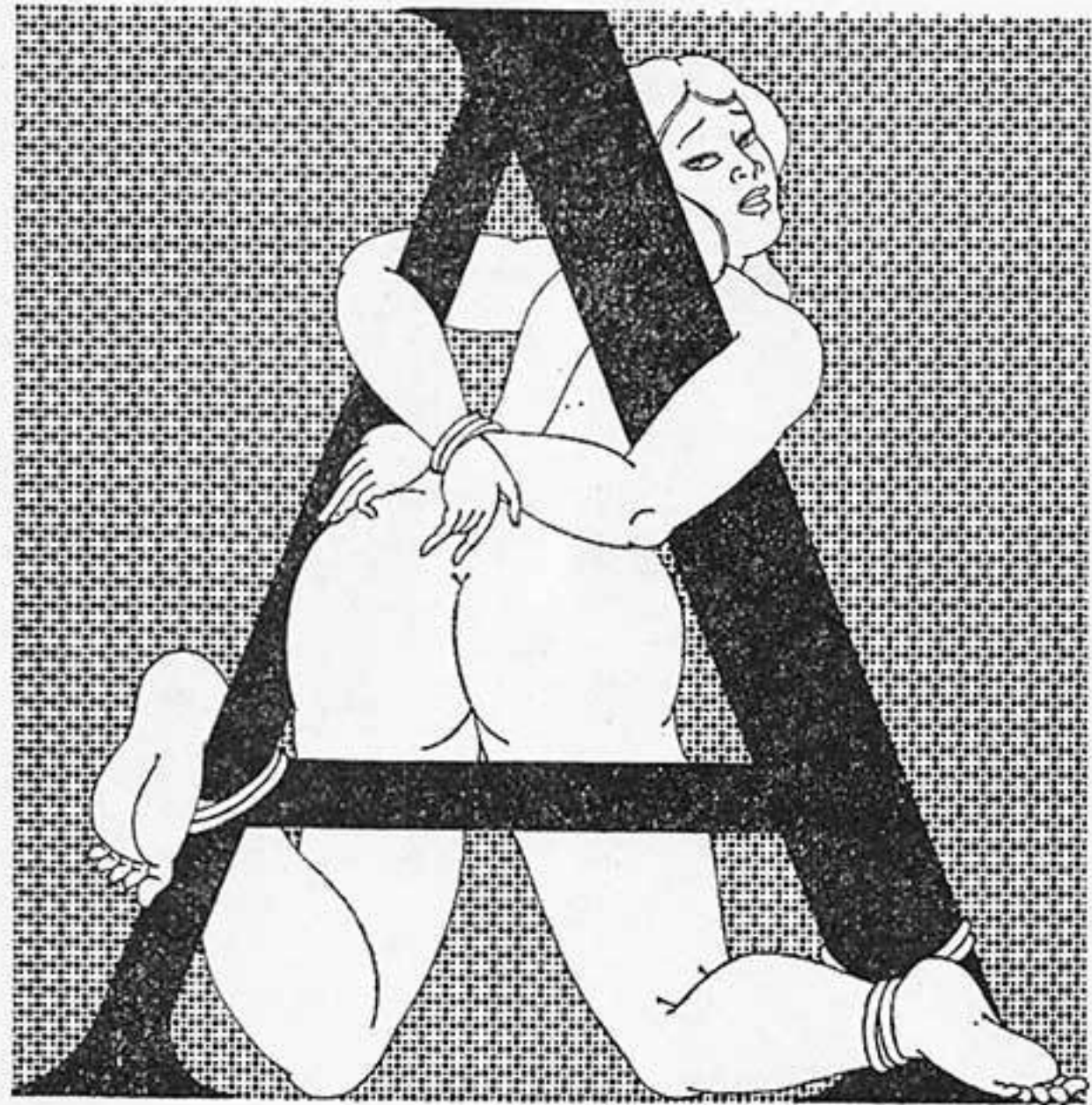
窓の外では、季節風が一層、激しさを加えてきたのか、窓の障子が隙間風を受けて、がたがたと音を立てている。

それに引きかえ、この部屋の中は常夏の花園のようであった。身に何一つ、纏っていないくても、いささかも寒くないのであった。

「紀代」

私は可愛いさの余り呼びかけてみた。紀代は、それには答えず、クククク……と、忍び笑いを洩らして、私の腕の中に頬を埋めるようにして顔をかくすのであった。

カット・マエダヒオミ



私のアブ体験記

(今年の晩夏の思い出)

奇妙なカップルとの

奇妙な出会い

加^か 美^み 赤^{あか} 比^ひ 古^こ

私が、この山奥の辺鄙な温泉場^{へんぴ}にやってきたのは、九月になって間のない、ある、むしろ暑い日だった。

私は美術大学の学生で、この夏中、秋の展覧会に出品する油絵を制作していて、ゆっくりと休む暇もない有様だったのだが、やっと仕事が一段落したので、旅行案内の雑誌で探しながらブラッと、やって来たのだった。

なにしろ、ふもとの村からバスが一日に三回しか、やってこないといった場所である。

私は、その日の最後のバスに乗って温泉場に着いたのだが、夕闇の中を管理人の家に行ってみると、太ったおばさんが、今はシーズン・オフで、客は私一人だと言うのである。

休養に来たのだから、それもまたよいとは思ふのだが、それにしても、管理人の家から少し離れて建っている古い建物の中で、今夜まったく私独りで泊まるのかと思うと、いささか心細くなってきた。

太った管理人のおばさんと中学生位の女の

子とが案内してくれた。建物の中は、まっ暗で、おばさんが廊下の灯をつけたが、それでも薄暗く、シーンとして無気味である。

二階の一室に通されると、すぐ傍を流れる溪流の音が耳に伝わってきた。おばさんは、すぐに風呂に入るよう勧めてくれたので、中学生の女の子に案内してもらった。

広い湯舟に独りで、たっぷりつかり、部屋へ戻ってくると、二人ともいなくなっていて、そのかわりに夕食の膳が置いてあった。バス

に乗る前に、村の食堂でソバを食べただけの腹具合だったので、またたく間に平げてしまい、それから、だらしなくゴロツと寝そべっている、急に車の止まる音がした。

ハテナと思っていると、数分後、管理人のお婆さんの笑い声と何人かの足音が近づいてきて、近くの部屋の前で止まった。

男のヒソヒソ話す声が私の耳に入り、泊まり客が来たのだな、と私は思い、急にホッとした。実のところ、今夜、私独りで、こんなだっ広い、シーンとした所にいなければならぬのかと、密かに心配していたので、独りでも他に泊まる人がいるのは嬉しかった。

管理人のお婆さんが、私の部屋に入ってきた。お婆さんの顔を見るなり「お客ですか」と私の方から聞くと、彼女は私の食事の後片づけを始めながら「ええ、御夫婦で、先日、連絡のあった人達なんですよ」と答えて、今度は布団を出してきて部屋の隅に置いた。

その夜は旅疲れのせいもあり、グッスリと寝てしまった。翌日、目を覚すと、もう日は高くあがっていて、小鳥のさえずりと川の流れる音が気持よく聞こえてきた。一風呂浴びようと浴場へ向かった。独りで湯につかっていると脱衣場に人の話し声がして、中年の小

柄な男がガラス戸を開けて入ってきた。

彼は、私と視線があうと、急にニンマリと笑いを口もとに浮かべて「気持のいい朝ですねあ」と言う。少しばかり金に余裕のある商人、といった風情。そう悪くない感じなので私は軽く頷いて「そうですね」と返事した。

ガラス戸に、ぼんやりと女の姿が写り、男が「純子」と女の名を呼んだ。女は、私が入っているからか、仲々入ってこない。男が、もう一度促すように女の名を呼ぶと、ガラス戸が開いて色の白い、都会風な顔立ちのسنナリした体つきの女が、タオルで前を押えて入ってきた。

中年の男が気になって、女を直視することができない私は、窓から見える溪流を眺めながら時々チラリと彼女を見た。女は、私に背を向けて湯を浴びていた。むつちりと成熟した美しい腰が朝の日溜まりの中で揺れて、私は湯舟の中の男の存在も忘れて、思わず見入ってしまった。

風呂から上がり、朝食を済ませると、温泉場の周囲でも散歩してみようと外へ出た。

山から気持よく風が吹き下ろし、真蒼な空からは太陽が、夏の終わりを惜しむかのようにサンサンと照りつけていた。溪流沿いに小

道を歩いていると、先方の川が折れ曲がり、砂地が露出している場所に人影がチラッと見えたので、釣でもしている人がいるのかと思いつきながら近づいていった。

男の声が風に伝わって、何か意味はわからないが私の耳に入り、男と女であることがわかった。大きな岩がゴロゴロしている間を気づかれぬように身をひそめて、なおも近づくと、二人が、昨日やってきたアベックなのが判別でき、更に私を驚かせたのは、中年の男も若い女も裸で禪をしていることだった。私の胸は妙にドキドキし始め、好奇心に駆られて息を殺して岩づたいに近づいていった。

重なりあっている岩の小さな隙間から、身を屈めて覗いてみると、男はカメラを片手に持ち、しきりに女にポーズをとらせている。女は羞かしそうに、それでも時折、笑いながらسنナリした肢体を動かして艶めかしくポーズをとっている。女の後ろ向きのポーズで白く豊かな尻に、くつきりと黒い禪が喰いこんでいるのが、何ともいえず、よかった。

男は、何枚かカメラに女の姿を収めると、今度は小型の旅行鞆から紐をとり出して女を縛りだした。女は、ちょっとした間、抵抗を示したが、男は女に寄り添って、しきりに口説

いている様子で、しだいに女は承知したかのように、男に身をまかせていった。

私は女の姿態に、すっかり見入ってしまった。女は後手に縛られ、白い乳房の上下に紐がかかり、思いきり二つの白く形のよいかたまりが飛びだしている。男は、女を乾いた砂地に押し倒し、雑草の茎で彼女の体をピシッと打った。ウツと呻き声をもらして女はゴロゴロと砂地の上を逃げまわり、男は追いかけてはピシッピシッと彼女を打っている。私は生まれて始めて見るサディスティックな光景に、恐怖と期待の入り混じった不思議な気持ちで見入っていた。

打つのを止めた男は、顔をしかめてグッタリしている女の体に接吻しはじめた。縛られた体を右に左に振らせる女に、男は蛇のように絡まり、執拗に舐めまわっていく。すでに放心したような気持ちで白日夢でも見るかのような私の眼前で、更に男は彼女の尻や乳房をいたぶり続け、次第に二人は川の水辺に入りこみだした。

両手を縛られたままの女が浅い水面から立ちあがると、男は女を再び水の中へ突き倒した。水しぶきがあがり、後手に縛られたままの不自然な姿で体をくねらせて起きあがろう

とする女を、男はとびかかつては倒した。女の白い体がクネクネと動き、水に濡れた尻が左右にゆれ、その白く豊満な尻の割れ目には鮮かなほど、黒い禪が喰いこんでいた。

部屋に戻ってきってから、ゴロツと横になって、さきほどの光景を思い浮かべてみた。女の禪姿が鮮かに目に浮かびあがると、思わずホッと溜息がもれ、次から次へと禪姿の女の動作が浮かんで消えていった。しだいに私はあのような事が自由にできる男がとても羨ましくなってきた。軽く目を閉じて、自分が、その男になったつもりで、女との事を、いろいろと想像してみた。

太陽の輝く川のはとりで、鞭を持った私が禪姿の若い女を追いかけてゆく。女は水しぶきをあげて必死に逃げるが、口元には常に優しい微笑を浮かべ、時々私の振る鞭が彼女の背中や尻にあたって赤い筋がヒューと走る。

先ほどの川原の女の顔がしだいに、ぼやけてきて少女の顔に変わってゆく。少女の顔が振り向いた時、私はハッとして夢から覚めた。

その少女は、私の初恋の女性であった。どうしてこんなところへ初恋の女性がでてきたのだろうかと思ひ、それと共に、今までの事に嫌悪を感じてきた。サディスティ

ックな夢は、私のソツと秘めている美しい思い出にまで忍びこんできたのだろうか。

せっかく騒がしい東京を離れて休養に来たのに神経を消耗しては、かなわないと思い、スケッチブックを持って外へ出た。

夜になり、夕食を済ませたあと、トランジスター・ラジオを卓上に置いて、この地方の放送を聴いていた。時が経つにつれて、先ほどのアベックの事が、また気になってきた。川原で見ながら、まだ一度も出会っていないけれど、一体、今頃は何をしているのだろうか。そう思うと妙に胸がドキドキしてきて、何となく落着かなくなってきた。

純子と男に呼ばれていた女は何才ぐらいなんだろうか。本当に夫婦なのだろうか、私は、いろいろと勘ぐってみたが満足な結論は出てこなかった。それというのも、サドとかマゾとかいわれている世界を、本では読んで多少、知ってはいたけれど、実際に目の前で目撃したのは始めてであり、とても冷静には考えられない有様である。私も美術大学の学生なので、女性のヌードモデルなら、あきるほど見てきたが、それとこれとは別世界のようだ。

廊下を歩く足音が聞こえ、男の笑い声が廊

下を伝わってきた。私の胸は急にドキドキしはじめた。ソツと戸を開けて、忍び足で後をつけていった。

小さな豆電球だけの廊下には彼等の姿は見あたらず、風呂場に灯りがついていていた。相変わらず胸はドキドキしていて額からは汗が滲んでくる。思いきって風呂場の裏にまわり、気づかれないように、背たけほどにも伸びた雑草の中に身を沈めて眺めてみた。

純子という女が、後手に縛られたまま湯舟の中へ下半身を沈めていて、彼女の美しい、ムッチリとした乳房が灯に照らしだされている。男は彼女の前に身をかがめて、首だけ湯からつきだしているのだが、時々、女は目を閉じて、ウツとうなり、首をのけぞらせ、快樂とも苦痛ともつかぬ表情をする。しばらくそんな状態が続き、やがて女の首が左右に激しく揺れ、ウーッと呻き声を発してガックリと、うなだれてしまった。

男が立ちあがって、女の体に巻きついている紐を解いた。女の方は、気だるく湯舟の縁にもたれ、男は右手に二十センチほどの黒い奇妙な棒状のものを握って脱衣場へ消えていった。

一方では恐くてゾクゾクしていた私だが、

もう終わってしまったのかと思うと、ちょっとガッカリしてしまい、急に虫に刺されて痒くなった手足が気になり始めたとき、また、男が、小さな袋を下げて、裸のまま戻ってきた。女を湯舟から出して耳元で何か囁いている。女は素直に頷くと、体をやや反り身にして下腹部を前につきだし、両足を開いて立った。

男は女の前に坐り、顔を上げて大きく口を開いた。何をするのだろうかと思ふと、好奇心に駆られて窓際に近づいて眺めている私の目に、女の股間から一条の白い筋がとび出したのが映り、やがて激しい勢いで男の顔にかかった。男は、口をパクパクしながら、その水しぶきを懸命に飲みこもうと努力している。

無我夢中で見詰めていた私は、足元の空力に足をとられて尻もちをついてしまい、カンは転がって石にぶつかった。気づかれては大変と、あたふたと部屋に戻ってきた。

部屋に戻ってきて、今までの興奮が醒めくると、今度は逃げてくるところを二人に見つかったのではないかと心配になり、急に憶病な気持になってきた。覗いていたのが男にバレて、刃物で威されて、二人の前で変な行為を強制されたら、どうしようかと、とりと

めもなく憶病風に吹かれてしまった。

廊下に足音がして、二人が風呂から帰ってきた様子で、私は耳を澄まして更に何か起きはしないかと窺っていた。しばらく時が流れ物音一つ、しなかった。ただ聞こえてくるのは旅館の傍を流れる溪流の音だけである。

ラジオを聴きながら壁にもたれてウトウトしていると戸をコツコツと叩く音がして、ハッ和我にかえった。「ハイッ」と返事をする。と戸が開いて、純子という女が立っている。「なんでしょう」と慌てて言う。彼女は落着いた態度で、ちょっと笑ってから、私が独りで夜を過ごしているのも詰まらないだろうから、旅のよしみで気兼ねせず、自分達の部屋へ遊びに来て下さい、と私を誘った。

彼女が去った後、私はどうしていいものか迷った。もう完全に先ほどの事がバレてしまいい、それで女に、私を呼びにやらせたに違いないと、そう断定したとたんに、こんな山の中で、それも夜で外は真っ暗、もう駄目だと思わざるを得ない。しばらくの間、部屋の中を行ったり来たりして迷っていたが、どうにもうまい考えが浮かばず、遂にイライラしてきた私は、急に居直って、彼等の部屋へ向う事決めてしまった。恐怖と共に、やはり

私の心の中に何かを期待するものが芽生えてしまったのだろうか。

小さな豆電球だけの暗い廊下を通って、彼等の部屋の戸を叩くと、スーッと戸が開いて純子という女が私を部屋へ入れて、後から戸を閉めた。戸の閉まる音に、思わずギクッと

して、正面の卓の向こうに男の笑い顔を見た時には、どうにでもなれと、私は観念した。

男は私にビールを勧め、自分も多少、飲んでいたのだろう。もう顔を赤らめて機嫌をよくしている。始めは男と、あたりさわりのない世間話を消極的にしていた私は、男の話の節々から、彼が東京のデパート関係の商人である事がわかった。女もビールを飲んだらしく、頬がポーッと上気して、窓から暗闇の外をボンヤリ眺めている様子は艶めかしく、先ほどの風呂場の光景を思い出して、私は背筋がゾクゾクしてきた。

急に沈黙が続いて、私はまた恐怖感にとらわれてきた。男の顔を窺うと、顔から笑いが消えて強ばった表情になっている。男は何かを話そうとして迷っている様子で、私は遂にあの事だなどピンときて、緊張した。しかしこの気まずい沈黙を破り、男が喋りだした。

「実は、君はもう承知しているだろうが、私

達は特別な世界を持っているんでネ。できる事なら隠しておきたいものなのだ。というのも、世間では大変、誤解されているものなのでネ。この温泉場も今はシーズン・オフで誰も来ないと聞いたものだから……。でも偶然君が、いたわけでネ」

男は、そこまで言って、後をどう続けていものかと思案している様子。ここまでハッキリしてしまったのなら、別にこの男がヤクザか何かではなさそうなので、自分の方から先手を打った方がよいと私は思い素直に先ほどの事を話してあやまった。サドとかマゾとかいわれている世界についても、何も悪い事ではないと思っている事を彼に話した。男の態度が、私の話で変わり、急に私と男とはリラックスした気持ちになり話がはずみだした。

私の方は、今までにかじった、性的倒錯を弁護している本の内容を思い出しては懸命に話していたのだが、彼は自分達でつくっているグループの事を話しはじめ、いろいろと面白い体験談を聞かせてくれた。

私が、絵を描いている学生で、悪友の下宿で何枚かのサド・マゾのイラストを見せてもらった事があるのを話すと、男は旅行鞆から自分達のグループで写した写真を取り出して

きて見せてくれた。

男は、私にこの写真を、派出な色彩のイラストに描いてくれと頼み、私も東京へ帰ったら注文通り描く事を約束した。

写真に写っている女は皆、割合美人で、柱に縛られた女性、複雑に体中を縛られて畳の上にエビ反りになっている女など、皆、禪しか着けておらず、白い乳房や豊かな尻が、あらわにされている。

中でも興味をそそったのは、セロハン紙に包んだ写真で、上半身セーラー服を着た少女が病院の診察台の上で四ツん這いにさせられムッチリとした、まだ成熟しきらない果実のような尻を後方に突き出して、白衣をまとった医者のような男に浣腸をされている写真である。あと一枚は、少女が全裸にされてオムツカバーをあてがわれた姿で診察台の隅に佇んでいる写真――。

写真の少女の顔を見つめているうちに、オヤッと思って、純子という女の顔と見比べてみた。どうも似ているのである。男の方がそれに気づいたらしく、何年か前の純子である事を教えてくれた。彼女は羞かしそうに俯いていた。男はテレながら、何年か前、先妻と死別して、それから子供がなかった事もあつ

て、グループに入り、途中でグループの写真のモデルに連れてこられた彼女と知り合い、一緒になった事を打ち明けてくれた。

更に彼女の過去についても、ちょっと触れて、彼女のおいたちが貧しく、家庭が不幸だった事や、その後、高校を中退して水商売の



僕のイメージ画集

『わだつみへの供物』

室井 亜砂路

世界に入り、金に困ってヌードモデルなどもしているうちに、男の入っていたグループの連中が目をつけて、連れてきたのだということ話を話して呉れた。

何とも奇妙な夫婦だと、あらためて二人を見ながら、それでも、何も彼等とて社会に迷惑をかけているわけでもないし、かえってこうまで何も隠さずに二人の仲を知ると、私の方が彼等に好意を感じてしまった。そんな気持を卒直に私が話すと、彼女は男に寄り添い二人でテレ合っている。

しばらくして、男は私も含めて三人でプレイをやるうではないかと言いだした。さすがに私はためらうと、君が加わってくれると、より新鮮なプレイができるだろうし、さっきの君の話から、君の本意がわかったから、君の考えを実行してみるのも悪くならう、と男はすっかり私を信用したのか、そう言っ部屋の中央を、彼女と二人で片づけ始めた。

男が、彼女に裸になるように言ったが、彼女は私を意識してグズグズしている。そこで男は三人とも禪一つになろうではないかと提案し、私にも禪を貸してくれた。その場のムードに入りこんでいた私は、もうジタバタしても、しようがないと腹をきめた。

一部屋に三人の禪姿は何とも奇妙である。

男は私に紐を手渡しして、彼女を縛るのを手伝わせた。彼女を立たせたり寝かせたり、あぐらを組ませたりして、様々なポーズで縛っては責めた。始めのうちは慣れぬ手つきだった私も彼女の艶めかしいポーズを見ているうちに次第にサディスティックな気持になっていった。彼女は時折、ウツと唸ったり、悲鳴をあげたりする。それでも何故か苦痛が甘い快樂に移行するかのようなウツトリとした表情をも見せた。

私が少しきつく縛ると、彼女は首をのけぞらせてウーと呻いた。それが私を、たまらない気持にさせ、幾度となく彼女を呻かせてはいい気持になった。

私達は疲れたので、一息、入れようと三人三様に坐り、今のプレーについて、いろいろと話しあった。軽く汗をかいだ体に山の夜風が快く吹きつけてきて、禪というものが、こんなに素晴らしいものかと、つくづく感じた。

禪の事から、私が相僕の力士が禪をしているのが、日本的な美の極致なのではないかと主張すると、男は急にニヤリと笑い、私と彼女とで相僕をとらせてみようと言いだし、ついでに、その場面を写真に収めておこうと、

楽しそうに言うのである。相撲の方は私も調子に乗って賛成したが、写真の方は承知しかねていると男は、写真は完全にプライベートなもので、絶対に他人の手には渡さないからと私を説得してしまった。

部屋の中央の畳一枚が土俵ときめられ、私と彼女が向かい合った。彼女はニガ笑いをしながら、それでも目つきは真剣そのもので、私の前方に、すっと立つ。私は、まるで夢のような気持になり、生まれて始めての甘い陶醉に、頭がクラクラしてきた。

この相僕に負けた者が勝者に浣腸される事を男は決めてしまい、さっさとカメラをかまえてしまう。男の合図で、私は彼女とガップリ四つに組んだ。彼女の甘い髪が私の頬に触れて、私の足の力が抜けそうになった。私の力が抜けたのを知り、チャンスとばかりに彼女は押してきた。私はハッとして土俵ギリギリで食いとめて反撃に出た。力いっぱい彼女を押して、あと少しというところでスツと力をぬいたりし、技をかけておいて、彼女が倒れそうになると途中で止めてしまい、何度となく彼女を、じらせてやった。

ところが、私が油断して、男のカメラを意識していたところ、彼女は満身の力をこめて

体ごと、ぶつかってきたのである。私は体勢をととのえるヒマもなくズルズルと押し出され片足が土俵の外に、はみ出してしまった。

「勝負あり」と男はカメラを右手に持ったまま、左手で彼女の片手を高々と挙げた。私は咄嗟に浣腸の事が思い出されて「しまった」と思ったが、どう悔んでも後の祭である。

「さあ、覚悟をしておらうか」

そう言って男は彼女に紐を渡した。私は部屋の中央に立たされた。

「約束を実行するだけよ」と彼女はちょっと高慢な態度で私の両手首と両足首をギューツと縛りつけてしまった。私が身動きできずにだらしなく横たわっていると、後ろの方から彼女の手が私の尻に触れ、一瞬ギクツとして彼女の手から逃がれようと体をゆさぶったが彼女は、そんな事には、おかまいなく、

「駄目よ、大人しくしていなければ。暴れんぼうのボッチャン。ホホホ」と小気味よく笑いながら、私の尻に指でオイルらしきものを塗りこみはじめた。思わず私が呻き声を出す。「お客さんに、たっぷり御馳走してあげなさい」と男が冷かし「ハイハイ」と彼女が答えて、更にたっぷりオイルを塗りこまれてしまった。余りの羞かしさに、なすすべもな

私は、固く目を閉じて必死で、この屈辱に耐えようとしていた。

二人の、クスクス笑う声が聞こえ、突然、体にビリビリと電流が通ったかと思えた瞬間遂に私は彼女の手によって浣腸をされてしまった。次第に下腹部が苦しくなってきた、彼等に手足の紐を解いてくれるように頼んだが「まだ、まだよ」と彼女は意地悪くひややかに言っ、いっこうに紐を解こうとしない。尻がムズムズし始め、猛烈な便意が襲いかかってきた。やっとの事で彼女は紐を解いてくれたので、私は素っ裸のまま廊下へ飛びだした。

疲れて不機嫌な顔つきで部屋に戻ってきた私に男は、「明日はもっと楽しい事があるから、マア、そのくらいの事で怒りなさんな」と言っ、彼女と部屋を片づけ始めた。

翌日、小鳥の鳴き声と、部屋に差しこむ眩い朝日に起こされた。管理人のおばさんが持ってきた朝食を済ませて、スケッチブックを片手に外へ出た。山の中腹まで登り、見下ろすと、くねくねと蛇のようにくねっている溪流がキラキラと光って美しい。谷の窪地に、へばりつくように建っている温泉場が小さく見え、昨夜の事が夢のように、それでいて一

つ一つが鮮かに蘇ってきた。あたりをスケッチしては、何度も目を閉じて昨夜の事を思い出し、甘く苦い気持ちに包まれた。

太陽が真上に昇ってきて、夏の終わりを惜しむかの如くサンサンと照りつけてきたので私は余りの暑さに耐えきれず、山を下った。

旅館へ戻ってくると入口に履物が増えていたので、ハテナと訝りながら彼女の部屋の前を通りかかると、純子とび出してきて、「何処へ行っていたの。先ほどから探していたのよ」と言っ、私を彼等の部屋へ、ひっぱりこんだ。

彼等の部屋に見知らぬ女性が二人、寛いだ姿で坐っている。男が笑いながら、自分達のグループの者で、一時間ほど前に到着したばかりだ、と言っ彼女達を私に紹介した。小柄でポチャッとしていて愛嬌のある礼子と、顔は余りどうといった特長はないけれど、ボインな感じのマリ（あとで男が言っていたがマリは、すでに結婚している女性である）。

今度は、純子が私を彼女達に紹介しはじめると、彼女達は顔を見合わせてクスッと笑った。私は咄嗟に、昨晚の事を思い出して、ハーン、さては純子が彼女達に昨夜の事を、もう話してしまったのだな、と思ひ、純子を

睨みつけたが、彼女は素知らぬ顔でいる。

昼食を済ませ、みんなで風呂へ入り、その後すぐに五人そろって外へ出た。溪流に沿って、はしゃいだり冗談を言い合いながらスタスタと山道を登っていった。

今はシーズン・オフで、ただでさえ人の来ない場所なのに男は、見知らぬ人に見つかるのは困るからと言っ、更に上流に向かって進んだ。うっ蒼としげる木々の間を通り抜け吊り橋を渡ったところに絶好の砂地ばかりの河原を見つけた私達は、大きな岩づたいに砂地へ下りていった。

さっそく皆で禪姿になった。面白い事に礼子はピンク色の禪を、マリは赤色の禪をしている。二人とも大変よく似合い、私はうっとりと見惚れてしまった。

礼子もマリも都会育ちのせいか溪流の澄んだ水を珍しがって、さっそく水遊びをはじめた。私と純子も後につづいた。

私は女達を追いかけてまわし、彼女達はキャッキャッとはしゃぎながら、水飛沫をあげて逃げまわる。赤やピンクの禪をしめた美しく豊満な尻が私を思うぞんぶん楽しませ、ハレムの王様のような気持ちで、彼女達をつかまえては水の中へ押し倒し、ぶざまな恰好で突き

出しているお尻を平手でピシャピシャと叩きまわった。男はそんな私達の姿を楽しそうにカメラに収めている。

水から上がった私達は、持ってきたコーラを飲んで、渾一つの姿で砂地に横たわった。

次のプレーは馬乗りゲーム。これは、一人が柱の代りに立ち、まず始めに鬼にきまった人が柱代りの人の腰に手をかけて背を曲げ、馬のような恰好になり、その上に他の者が乗るのである。乗った人は上で暴れて下の馬がつぶれたら、もう一度、始めからやり直し。逆に下の馬に落とされたら、二番目の馬となって、始めの馬の尻にくっつくのである。

題して『ロデオ大会』男が柱の代りになり最初の馬はジャンケンでマリに決まった。馬形になって、お尻を突き出しているマリの上に純子が走ってきて、思い切り跳び乗った。ウツと唸ってマリは潰れてしまった。結局、乗り手を振り落とさない限り、何度でも続くのである。

二度目も、勢いよく走って跳び乗った純子は、乗ってからもマリを胴じめにして暴れたが、体勢を整えたマリは必死になって腰を切ったので、今度は上に乗っている純子が支え切れずに、キヤーと叫んで転がり落ちた。

これには皆で大笑いとなり、純子は痛そうに顔をしかめて、マリの腰に手を回して二番目の馬になった。今度は礼子の番。ピンク色の渾をキュツとした可愛らしいお尻をプリプリ振って、ピョンと純子の上に乗っかり、下になっている純子が大人しくしているの彼女のお尻をピタンと一打ちした。すると、純子は怒ったように、片足を横に蹴り、お尻を大きく回したので、アツという間に礼子は砂地へ転落してしまった。

いよいよ三匹？の馬が揃ったところで私の出番である。三つのお尻が順番に並んでいるのは、これまた格別の眺めである。そのお尻を見ているうちに、ムラムラと私の胸の内にサディスティックな気持が湧いてきて、彼女達をたっぷり虐めてやろうと心にきめた。

私は三番目の礼子の上に、反対向きになってサツと跳び乗り、彼女の可愛いお尻の二つのかたまりを両手でつねったりピタピタ叩いたり、しまいにはギュギュと力いっぱい揉みだしたので、遂に彼女は降参してしまい、私と一緒に砂地へ倒れてしまった。

次に私は純子の上に馬乗りになった。彼女は懸命に暴れて私を落とそうとしたが、私は身を低くして、彼女の乳房を両手で握り揉み

はじめたので、彼女は次第に呻きだし「やめて、やめて」と喘ぎながら叫ぶのを、尚も昨夜の流腸の仕返しとばかり、執拗に責めたてて彼女を降参させ、同じように先頭のマリもダウンさせてしまった。

「仲々、やり手じゃないか。君には十分、素質があるよ」と男は私をおだてて笑った。

女達は復讐戦だと言って、砂地に棒で土俵を描いて、私と男に相撲を挑んできたが「マアマア」とそれを制し、まず女達同志で勝ち抜き戦をやってから男達と女達でぶつかるときめた。始めはマリと礼子とが、ぶつかる事になり、両者が土俵の中央で身を屈め尻を上方に突き出して睨み合い「ハッケヨイ、ノコッタ」という私の一声で跳びかかった。

四つに組むとみせかけてマリは、サツと礼子の後にまわりこみ、礼子の可愛いお尻を力いっぱいグーッと押して土俵の外へ出してしまった。「ずるいワ、ずるいワ」と黄色い声を張りあげて礼子は憤慨している。

続いて取り組んだマリと純子は、みものであった。二人共ガップリ四つに組んでエイーと気合をいれて技をかけあい、土俵の上をいったりきたりしている。二人の乳房がプリプリと揺れ、渾がお尻に深く喰いこんで、私は

身をゾクゾクさせて見入った。

この勝負は純子が勝ち、次に純子と礼子の勝負では、小柄な礼子は善戦の甲斐もなく、またも負けて結局、完敗の礼子がお仕置を受ける事に決定した。礼子の禪を脱がせ、皆の囲む中で、四つん這いになって浣腸を受ける事になった。

始めはブツブツ文句を言って逃げ腰だったのを皆にどやされて、しぶしぶ四つん這いになった。男が彼女の禪をはずすと、彼女は顔を

を赤らめて目を閉じてしまう。彼女のお尻にクリームを塗る特権を与えてもらった私は、彼女の後にまわった。こんなに身近に女性のお尻を見るのは始めてである。

私の方も緊張と興奮とで思わずクリームをベツトリとつけた手がふるえた。思い切って塗りこむと、ウツと呻いて彼女のお尻がブルツと揺れた。男の手によって浣腸がなされた後、更に皆で彼女を担ぎ上げて、川の中の平らな岩の上に乗せた。彼女は小柄なせいか、

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆ 賞金 ☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆ 規定 ☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別すること「告白懸賞」とお書き下さい。

早い流れの水面を見つめて岩から降りられずグズグズしているうちに便意が最高潮にまで達し、岸に立ち並んだ私達の拍手の中で、遂に排泄をおこなったのである。

彼女を岸にあげてから今度は、いよいよ女達全部で私と男に勝負を挑んできた。土俵の上に私と男が立つと、女達はいっせいに跳びかかってきた。彼女達は力いっぱいかかってきたので、私と男は、あつという間に負かされてしまい、彼女達は大喜びである。

私と男は、目隠しをされて土俵の中央に仰向けに寝かされた。目隠しをされているので彼女達が何をしようとしているのか見当がつかずドキドキしていると、突然、暖かいものが顔にかかってきた。彼女達が放尿を始めたのだ。次第に体中に浴びはじめ、温い滝の中に身をおいた私は、奇妙な快感の中から欲びが湧きあがり、今までの事が夢のように脳裡を掠めていった。

夕方になり、美しい夕焼空の下を私達は旅館に戻り皆でさっそく風呂場へ駆けこんだ。白かった彼女達の肌が陽に焼けて、禪の跡だけが白く残っているのが、おかしかった。翌朝、私は彼等より一足先に発つ事になり皆に見送られてバスに乗った。

(完)

—— 創作・罌に掛かった乙女 ——

花は傷つかない

—— 第三部 花あわれ ——

久留木

栄

カット・志羽 利也



あらすじⅡ弟の大学進学のために、江戸法制史のカット撮影の緊縛モデルとなった花枝は、その第一日目から滅茶々に縛られ、第二、第三日目と責めは次第にエキサイトし、さんざんに罵り抜かれたが、ようやく五日間の仕事を終えた彼女の気持は——。

(八)

三日目は池本教授の講義のある日で、一応休日になっていた。初日、二日目と異常な体験に花枝は心身ともに疲れ果て、静かな一室でダブルベッドに身を沈め、泥のように眠った。前夜、明方近くまで、池本夫婦のお相伴をさせられた花枝は赤いシボリの長襦袢にくるまり、前手錠という軽いお仕置スタイルだったので、すっかり安心して熟睡してしまったのだろう。

花枝が目を覚ましたのは、もう十時近かった。目を覚ますと、枕元のベルを押すようにいわれていたもので、それを押した。すると、熊野道子が入ってきた。道子は、けさはグリーンの花模様のワンピースを着ていた。

「やっと、お目醒め？」

「はい、すっかり疲れてしまってた」

「そう、それでもう、すっかりなおった？」

「いいえ、まだ節々が……」

「そう、そりゃ仕方ないワネ。きょうは午前中は私一人よ。さ、手錠をはずしてあげましょうネ。久しぶりに、ひとりで顔を洗って用を足してくるのよ。その間に食事の準備でもしておきましょう……」

「はい、ありがとうございます」

花枝は、そうやって頭を下げた。道子が手鏡を、はずしてくれたので、一礼して御不浄に立って行った。こんなことは、この家に来て始めてだった。

薄い長襦袢姿が恥かしかったが、道子だけという安心感もあり、花枝は、ゆっくり用便をすまし、風呂場に行って顔を洗うと、ついでに裸になって体をふいた。鏡に写して見ると、二の腕などに紫色にナワの跡が残っていた。その傷跡が、悪夢のような二日間を思い出させたが、それでも、いま束の間の楽の方が、花枝にとっては重大なように感ぜられてなんとなく、おかしかった。

花枝が体調を整えて食堂に入って行くと、道子が、きちんとイスにかけ、花枝を待っていた。ミソ汁を、よそおってくれ、中に卵を入れるなど、いやに親切だった。

「どんな感じだったの」

「どんな感じでしたっけ？」

「二日間の経験よ！」

「ああ、何とっていいのでしょう。最初、昔のお仕置のモデルと聞いていたので、縛られるのは覚悟していましたワ。だが、すっかり脱線して、苦しいやら悲しいやら、気も動

転して、まるで何をしたのか、まだ、ぼんやりした気持です……」

花枝は正直に告白した。

「恥かしい？」

「ええ、とっても」

「いまでも？」

「ええ」

「そう。じゃ、よかったわ。ところで、きょうは、どうしよう」

「どおって……お休みじゃございません？」

「休み……休みは休みだけど、私、動けないようにして休ませなさいと命ぜられているのよ。食事のときにも縄を解いては、いけないって。でも同じ女性でしょ。食事ぐらい、ゆっくり、たべさせたかったの」

花枝はミソ汁を、すすり、ノリを御飯に、まぶしてたべながら、そんなことを言う道子の顔をみていた。道子は、あいかわらず意地の悪そうな顔をしており、言うことと態度が妙に、ちぐはぐで、そぐわなかった。だからつい花枝は卑屈になる。

「ほんとに有難うございました」

「お礼、言われるほどのこともないのよ。あとで結局は縛らなければならぬのよ」

「それでも、このお家で、こんな楽しい朝食

は初めてですワ」

「そりゃよかったわ。じゃ、食事を終わったら、また縛るから覚悟をしておいてネ」

「ハイ」

花枝は道子に柔順だった。この家にいる限り、どうにもならないと、すっかり覚悟を決めていたし、あと、まだ数日、契約が残っている。悪あがきをしない方が、いい。それにこの道子夫人を花枝は、どうもムシが好かなかった。陰険なところがあり、逆らうと、どんな、いじめ方をされるか知れないと一、二日目の経験から、膚で感じ恐れていた。

その道子は食事がすむと、花枝をベッドルームに案内して、花模様のソフトなダブルベッドに腰かけさせた。戸棚の引き出しをあけ、ごつい綿ロープを、とり出し、見せびらかすようにして、しごいた。そこには何本もの、いろんな太さのロープが、しまっていた。道子は比較的、短か目の柔らかい太いロープで長襦袢姿のまま花枝を後ろ手に縛りあげ、手首を首に吊り、縄を胸に回して、とめた。縄は、きゅっと締まり、いかにも緊縛されたという被虐感を花枝に与えた。道子は力が強く、縄さばきは、ここの連中のうち、抜群だった。

「どう、独りで寝る？ それとも、わたしと
いっしょが、いい。あら、言えないの？ 言
いたくないの？ こちらは、聞きたいことが
あるのよ」

道子は別の縄で花枝の足を交差させ、縛り
ながら聞いた。

「独りの方が、いいですワ！」

「あら、きらわれた」

「そ、そんな！」

「いいのよ、きらわれて。わたしは女を、い
じめるのが好きだから。だから、あなたも
そのつもりで覚悟を決めるのよ！」

「まあ……」

花枝は何もいうことはないと思っていた。
だから、答を言いしづっていたのに。つい道
子のペースに乗せられてしまう。ムダなこと
を言ったなと思った。

道子は足首の縄と手首の縄をつないで締め
あげた。そのため、自然、花枝は後ろに、そ
り加減になる。

寝台の上に、うつぶせになって縛られた花
枝を、ごろりと横に一回転させ、仰向けにす
ると、花枝は自分の体重が手足をしめつけ、
そうきびしく締められていなくても、ちっと
も身動きができなくなった。寝台が柔らかい

し、花枝自身のからだも柔軟なので、そうつ
らくはないが、この逆さえび縛りのポーズに
きめられたことで、花枝の自由は、頭をのぞ
いて全く奪われたのである。

「うちの宿六が言っていたけど、あなたに、
この出演をすすめたのは謙蔵ですって！」

「はい」

「弟を大学に入れるのが条件って、ほんと」

「はい」

「そう。たいした度胸ね。その度胸にほれて
謙蔵と喫茶店に行ったんですって。一度？
二度？」

「一度です」

「あら、ウソおっしゃい。謙蔵は、もう何
十回も行ったって、いっていましたよ」

「そんな、それはウソです」

花枝は真顔になって打ち消した。

「否定してもダメよ。謙蔵を拷問にかけて自
白させたんだから。……旅館にも行ったとい
うじゃない。あなたは、そこで手を縛らせ、

裸も見せたというじゃない。真っ白い、から
だをしていて体毛が薄かった。右胸の乳の横
に黒いホクロがあるとも、いっていたわ」

「そんな！ そんなこと、ありません」

「それは、どうだか。ともかく、こんな大勢

の人の前で平気で縛られ、裸にされても動じ
ない人ですものネ。信じられないワ」

花枝は絶句した……でも、謙蔵への誤解だ
けは、とかなければ、いけないと思った。

「私は信じられなくても、先生に限って、そ
んなことはありません」

「おや、どうして、それがわかるの？ その
先生が告白してるのですよ！」

「まあ！」

「その先生が見たという、右胸のホクロがあ
るかどうか、調べてみましょうか。そしたら
ウソかどうか、わかるわ。きのう、きょうの
縛りで、裸にされていても、腋の下まで調べ
て見るほどの余裕はなかったものネ！」

道子は、そう言いながら花枝の長襦袢のヒ
モを解き、胸をはだけた。形のいい乳房が露
出し、乳房の横に副乳が黒いホクロとなって
残っていた。女性には誰でもあるものであっ
た。道子は、それを指さし、いきなり、つね
った。

「あら、ほんとに、あるワ。憎らしい！」

その目が吊りあがっていた。その目を見た
途端、花枝は、もう何と言っても相手には通
じないと思った。花枝の顔はキツネのように
鋭く変わり、目は妖しく光っていた。花枝は

何も言うまいと思った。だが、その意志とは別に、

「ウソよ、ウソ。そんなハズはない。何かの間違いよ、間違い」

と、しゃべりつづけた。

「間違いないで、いけずうずしい！ この乳房で誘惑したんでしょ。人の夫を寝とりながら、平気で処女だなんてツラをして。殺しても、あきたらない……」

と道子は乳房を、つねり責めはじめた。花枝は首をふって、こらえる。道子は責めまくる。いつしか枕もとのタオルをとり、花枝の口につめ、その上を真っ赤な、しごきで幾重にも巻いて嚴重にサルグツワをかけていた。手と足とに別の縄を、いくつもとりつけ、体を弓のように、そらせ、きりきりと、しめあげる。素裸に剥いた胸に、乳房が、とび出るような菱形や、縦横に縄をかけ、開いた太ももが、つばめないように縛りあげた。下腹部にも縄を通し、その太い結び目で、いたぶった。

「この体、めっちゃめっちゃに、してやる」

そう言いながら道子は花枝の乳房を徹底的に責め、さらに、わき腹から下腹部に攻撃の手を、のばしてくる。さらに足の裏を、くす

ぐり、羞かしい攻勢も、かけてきた。乳房を責められたことで花枝は、はじめ、その痛さに涙を流した。だが痛みは、しだいに快感へと変わってきていた。乳房はカッと燃え、体も燃えはじめた。女性の悲しい生理だった。花枝は、それが情けなく、みじめで、道子の目的が何であるか、ほぼ分かっていた。それだけに、こわかった。

道子は、ゆっくりと指で花枝の感覚を呼び起こす刺戟を加えはじめた。それは誠に巧みで、うぶな花枝にとっては余りに強烈であった。そればかりか道子は、ちゃんとレスピアン用の道具も用意しており、自分も、いっしよに楽しみはじめる。いつしか道子自身も裸になっていた。そして責めを加味したレスピアン技法を存分に発揮し、花枝を責めさいなみ、燃え尽すことに全力を傾けて、道子自身も全身に汗していた。

花枝は、それによって興奮させられた。体がカッカしてくればくるほど心は惑乱した。しかし、逆に頭は、すんできた。というのは、いま確実に道子のねらうものが、はっきりと理解できたからである。

その卑劣なやり方が、我慢ならなかった。くやし涙を噛みこらえ、必死で、この粗暴な

女に負けまいと努力した。その頃もう道子は花枝の気持など念頭になかった。まっしぐらに感情のまま、突き進んでいた。「責めあり！ そこに喜びあり、女ありそこに喜びあり！」とは夫謙蔵がデカルトの「われあるがゆえにわれあり」を、もじって言った言葉だった。それを思い出していた。人を責め、いじめることに喜びを感じる主婦の残忍な性格がそこに剥き出しにされ、その上、道子の豊満な、からだ火となって燃えさかっていた。やがて道子の身体の上を、嵐のような興奮が走り去っていった。

花枝の体の上にも、あるていどの嵐が吹きそれは、あわただしく去って行った。

道子の興奮が道子のからだを、さわやかにして、かけぬけたのにたいし、花枝の興奮は逆に花枝の心を重くし、この粗暴な女への憎悪を、つのらせたにすぎなかった。

生きる苦しみというものは、かくも冷たくかくも重たいものだろうか。花枝は身も心もくたくたにされ、かき回され、汚辱に、はい回らされた屈辱感に、うちのめされていた。

道子は、みかけ以上のサジストだった。ひとしきり興奮が去ると、新たな興奮を作ろうと努力しはじめた。まず、花枝の体中を、し

めつけている縄を順序だつて縛り直さねばと
考え、全部、とき去った。そのとき、花枝は
必死に抵抗しようとしたが、長い間、縛られ
しびれあがったからだは、言うことをきかず
逆に道子を喜ばせるだけだった。道子は、ま
ず花枝の手首と足首だけに、きっちり絹のロ
ープをかけ、こんどは嚴重に、しかも四肢を
一カ所に、まとめて縛りあげた。そのあとで
サルグツワをとくと、こんどは皮製のサルグ
ツワを、とりだした。このサルグツワには、
ちょうど口にくわせる棒状の突起物がついて
おり、花枝の口の中に入る部分は穴があいて
いたが、その反対側も、やはり円筒型に、と
び出しており、装脱自由の帽子が先端につい
ていた。そのサルグツワを嚴重に装着した。
そればかりか、皮ヒモで顔を縦しぼりにした
その花枝は、以前にもまして苦しい恰好とな
ったのである。

道子は花枝を固定するとニヤリと笑った。
「これが何か、わかる？ ウ、フ、フ……。
知らないでしょ。女のいやらしさを、みせつ
ける道具よ。それと同時に、あなたには人間
を廃業したくなるような残酷な道具よ」

と、さもうれしそうに説明した。
それからタバコを一服したあとで、道子は

その突起にやわらかいゴム状のカバーをはめ
ゆっくりと、その上に、またがった。花枝は
あつと思った。

道子は花枝の目の前で自分だけ楽しもうと
いうのだ。女の貪欲な、すさまじさをみせつ
けながら、自分は興奮し、相手を絶望の淵に
おとそうとする。何という、いやらしさ。何
という残酷さ！ 花枝は口が自由になったら
かみついてやりたいと思った。花枝の顔の上
に、ゆっくりと腰をかけた道子は、猿臂をの
ばして自由な花枝のワキ腹を、くすぐりはじ
めた。それでなくても息苦しいのに、花枝は
首を振り、力の限り、もだえた。すると、そ
のもだえは、そのままサルグツワを通じ、道
子の快感となった。道子の足は、がちり花
枝の顔をはさみ、その腰は花枝の顔の中心に
あり、時には、どっしり全体重を顔にかけ、
シリで花枝の頬を圧迫する。するとサルグツ
ワの筒型のツメ物が花枝の口の奥深く沈み、
ノドを突き、まるで今にも窒息しそうな恐怖
を花枝に与えた。花枝は、そこで全力を集中
し、道子を、はねかえそうとする。そのたび
に道子は、さらに興奮する。

こうして道子は、しだいに快感をつのらせ
逆に花枝は不安と憎悪と恐怖をつのらせた。

性経験の豊かな主婦と、余りも純情な少女と
の差は大きすぎた。道子がサジストとしての
遊びで女の悦びに浸ったとき、花枝は逆に、
かるい目まいを、おこしていた。

だが道子は、それで花枝を許したわけでは
ない。こんどは花枝に目隠しをし、今まで花
枝に窒息の恐怖を与えていた筒のキャップを
はずすと、そこから、タラタラと水を流し込
んだ。

「お疲れさん。お茶を一服、どうぞ」

活を入れられ、息を吹きかえした花枝は、
グウともいえず、抗議もできず、その茶を、
のまなければいけない。

「お茶でよかったわね。小便でもいいんだけ
ど」

と、いじわるをいう。

「いまから、酒盛りをするのよ。あなたにも
のませてあげるワ」

そう言いながら道子は、ウイスキーの小び
んをとると、一気にその中に注ぎ込んだ。強
烈なアルコールのにおいがし、花枝のくちび
るから、余ったしずくが尾をひいて垂れた。

花枝は、こんな強い酒は、はじめてだった
のでムセた。ノドが火のようになり、胃が腹
が灼け、やがて全身が、かっとな火のように燃

えさかった。

花枝の白いからだはサクラ色に変わり、目が、とろんとして、急性アルコール中毒の症状を呈してきた。そんな花枝の横で道子も、のんでいた。のむほどに、いたずらは激しく

なった。花枝を寝台から、ひきずりおろし、フロに連れて行き、水をかけて遊んだ。浣腸もして花枝を、さいなみ、さらに自分のウラインも花枝のからだに浴びせ、その一部をのませるといふ狂態を示していた。そして、す



イメージギャラリー

『屈辱と恐怖』

岡

たかし

べての縄をとかれ、かせをとられ、サルグツワを、とられても、ぐったりした花枝に、なおかつ、いたずらを、しかけていた。

「うーい、殺せ！ 殺してよおッ！」

と花枝は酔った声で道子に、からんだ。しかし、その体は、ぐったりして立ちあがる気力もなく、酒くさいイキが口をついた。

そんな花枝に愛想をつかしたのか、そんな自分が、いやになったのか——ほどなく、われをとり戻した道子は、花枝をフロからあげ体をふくと、再び寝室に連れ戻し、後ろ手に縛って、いそいそとその部屋を出ていった。その顔には明らかにサジストの女の満足したほほえみが浮かんでいた。

(九)

かわって入って来たのは浦本千波である。千波は花枝を一目、見て、これでは、とてもサマにならないと悟った。時をかせぐしかないと手首以外の縄を解いたあと、花枝の横に入り、ぐっすりと寝た。

花枝と千波が目ざめたのは夜も、もう更けてからである。

「あら！ あなたは千波さん！ いつ代わったの。わたし、酔っていたのかしら」

「どうして？」

「道子さんから強引にウイスキーを飲まされ天井が、ぐるぐる廻りはじめたの。あとは覚えてないのよ」

「ほんと？」

「ええ、ほんとですワ」

「じゃ貴女が、もっとひどく、きびしく縛ってとネダっていたの、知らないの」

「私、そんなこと、いったかしら」

「そりゃ、ひどい要求だったワ。早く天井から吊るせと、わめいてたの」

「まあ！」

「私も、お酒、のませようかしら」

「いや！ そればかりは、かんにんして」

「オホホホ。私は道子さんのようにサジストではないわ。ただ、ゆっくりと花枝さんを見たのしませたいのよ。さ、私のいうとおり、してネ」

そういうと千波は両手で花枝の顔をつつみゆっくり唇にキスした。それは長い長いキスだった。それから花枝のからだを、まるで犬のように舐め始めた。胸から乳房、腹から下腹部にかけ、ゆっくり上手に舐める。そのため花枝は、いつしか興奮していた。道子は人を苦しませ自ら楽しむ方だったが、千波は違

っていた。他人を楽しませて、それを楽しむ複雑な型だった。そのため、花枝の体を最高に燃えさせた。同じ道具を使ったレスビアン技法も千波の方が、はるかに上で、花枝は何度も身をそらして、のぞけり、やがて疲れはてて、名実ともにグロッキーとなり、泥のような睡眠におちていった。

(十)

四日目の朝はドクター奥村の訪問によってはじまった。どうも花枝の疲労が激しいようだという君代夫人の要求で、奥村が、とんできたのだ。花枝は起こされ、ベッドの上でドクターの診察を受けた。

「どう、疲れた？」

「少しは。でも、大丈夫です」

くたくたに疲れていたが、花枝はそう言いたくなかった。気は、しゃんとしているようだった。手首は昨夜のままで背中結ばれていた。そんな花枝の手を、ほどこうともせずネグリジェを、ずらして奥村は、無造作に聴診器をあて、それから打診する。

「念のために便と尿を調べてみましょう。千波さん、あとで、とって下さい」

奥村はテキパキとして全く事務的だ。花枝

は、そのまま否応なしに便所に連れて行かれた。ここ三、四日の生活で、こういう、やり方にも、もうなれていた。だから花枝は、さからわず便所に入った。そして後ろ手のまま便と尿をとられた。それを見た奥村は、便は小さなマッチ箱に入れ、その一部を持って帰って顕微鏡で調べるといふ。尿は、その場で幾つかの試験管にわけ、カバンから取り出した試薬を入れたが、それを振ってみて、電灯にすかしてみた。花枝と見くらべる。花枝はベッドに腰かけていた。

「異常はないようだネ。疲れが激しいように見えるのは、二日酔いの、せいかな。誰かがきのう酒を多量に、のましたようだ。さて治療となるとビタミン剤にブドウ糖、それぐらいかな。かなり疲れているだろうから、点滴ですと、よくなるでしょう。一時間ぐらい安静にすること。そう点滴は50プロのリンゲル液に50プロのメルチオニン、アリナミンも50ミが、いいでしょう。ビタミンCも入れよう。その点滴をSM流に、して下さい」

「SM流というと……」

千波が聞いた。

「まず、花枝さんを寝台に固定する。そして右腕に注射するというわけ。SM用の寝台が

あるだろう。その豪華なダブルでなく、うちの病院から持ってきたあの鉄ワクで行こう。それも絵になるよ。それから君代さん。池本先生に、これ以上、予定を変更する必要はないといって下さい。確か、あと二日だけ、たっぷり休養させる予定だったでしょう。だから、きょうあすは、いくらいじめてもOK。と、ヤボDRが言ったと、いって下さい」

奥村は医師だけに、指示はテキパキしていた。花枝はホッとする間もなかった。奥村の指示で点滴されることになった花枝は、忽ち別室に連れていかれた。庭の見える明るい部屋で、その一部にワラぶとんと鉄わくダケの寝台があった。

その寝台に追いあげられた花枝は、医師の治療を受けるのだからという理由で素っ裸にさせられた上、大の字なりに寝させられ、両足首両手首を、それぞれ鉄棒に固定された。皮紐で左手首、両足首は嚴重に縛られたが、右手首は比較的、ゆるやかにしてあった。花枝の下半身に毛布をかけたあと、看護婦が呼ばれ、天井からビタミン、リンゲル液が吊るされ、太い注射針で右手の腕の静脈に入れられると、処置は終わった。液が、ゆっくりと花枝の体内に流れ込みはじめた。

いつ来たのか、道子が花枝の髪を束ね、それにヒモをつけ、これを、また鉄棒に固定したので、花枝は顔を動かす自由すら失った。それにもあきたらず、道子は花枝の口をあけさせ、舌を割りバシに、はさんで固定するのを忘れなかった。道子は、まったくサジストだった。花枝は昨日のことを思い出し、やるせない思いに沈んだ。

看護婦が去ると再び毛布はとられ、恥かしい肢態は人目にさらされることになった。

花枝は子供の頃、一度、大ケガをしてリンゲルを打たれたことがある。その時は、ふとももに大きなハリを刺されたと思っていたがそれに比べると、静脈への注入は痛くもかゆくもなかった。同僚が胃潰瘍で入院したときそのリンゲル姿をみたことがあった。その時友は右手を、じっとさせて静かに寝ていた。それに比べると身動き一つ、できない静注であってみれば、もっと気楽だと考えられないこともない。だが、それにしても舌までと、道子の仕打ちが憎かった。

ともかく、病人にさわることはならないということで、静注が終わるまで、そのまま放置されることになった。しかし、カメラの撮影は自由とあって写真班の男たちは、いいポ

ーズだとばかり勝手に放列を、しいていた。そのうち池本教授や熊野謙蔵、浦本久則らがつぎつぎに顔を出し、容態を聞いた。それを道子が、花枝に代わって答える。

奥村ドクターも横から口を、そえる。人々は、やがて一人去り、二人去って、花枝は、やがてひとりぼっちにされた。

花枝がリンゲル注射を受けている間に、別室では協議会が開かれていた。江戸法制史の撮影としては、ほぼ主要なところは済んでいた。あとに残されたのは実際には演技不可能なものが多い。かといって、あるていどは実現したいし、そこに討論の必要が出てきたのだ。

たとえば、先日のように逆さえびで吊るすことはできても、そのまま、からだを廻す駿河問いは、できない。キシタンのリンチにしても、火刑であるミノムシおどりやナマリ責めが、できるわけではない。だが、実際にはタワラづめぐらいは、してみたい。花枝の体力も心配になるが、こんなチャンス逃がしては、まず二度と機会がないものとみて、できるだけのことを実現させたいというのだ。生き埋めは何処を使ってもできるが、石子詰めは、まず無理。斬罪は竹光を使った恰好だ

けしかできないが、将来のために花枝の顔型をとっておくという案も出た。しかし、それも実際には不可能だった。こうして四日目にほとんど全部のスケジュールを終え、五日目は純粋な意味で責めのプレーを楽しもうということに衆議一決した。それと同時に六、七日目は保養をかね、大学の指定の温泉センターに君代と二人だけで行かせることも決定した。

こんなわけで四日目のスケジュールは、びっしり組まれ、花枝は注射が終わり次第、そのレールに乗せられることになった。一同はさらに、これまで二日間、撮影したもので撮影洩れはなかったか、本と首っぴきで点検しそれからタバコを一服しながら点滴の終わるのを待った。

四日目のスケジュールは、まず最初に死罪など、マネだけのものからはじめ、午後は晒し、生き埋めなど、次第に演技でも苛酷度の高いものに移り、俵づめから大の字吊りなどを、させることになった。

こうして四日目のコンテが描かれたあと、最終日の計画が練られた。これは、皆で楽しむゲームという趣旨もあり、マゾ的傾向を持つ千波夫人との、かたつむり競争をはじめ、

各人二十分間ずつ、自由に縛る、縛り方コンテスト”更に徹底したボディペインティングSM胴挙げ、吊るし責めコンテスト、厚着コンテスト、囚衣コンテストなどが、計画された。女たちは、自分たちがデザインした囚衣コンテストは絶対と主張。男たちは縛り方コンテストを、カメラマンは吊るし責めコンテストを希望するという風で、いったいどうなるかと思われるほど。ともかく、あとは成り行きにまかせるということで、討議は終わった。

リンゲルが終わるまで、あと二十分というので、このアブノーマルな男たちは、それぞれ池本教授の指示で、その日の仕事の準備にかかった。打ち首用の穴を掘る者、生き胴の台を作るもの、ハリツケ柱を持ち出すもの。小道具には万全を期した。それを順序よく、整理してみるうち、

「あっ、正式の木馬責めがなかった」

「梯子責めもない」

という声が出た。そういえば水責めも、されていない。

ともかく、それらも内容に含めようというので、スケジュールは、さらに窮屈になる。カメラは、こうした撮影の位置の決め方を三

人がかりで、検討していた。こうしてオールスターキャストで一氣に活動をはじめたのはやはり気が合った者たち、ということができるよう。

あわれなのは花枝である。

何だか、騒々しいなと思いつながら、うとうと、としていた。最初は舌が痛く、顔の自由がきかず、ポロポロと泪が出たが、不自由になれ、口がしびれてくると疲れのためか、意識がかすんでくる。そして地獄に落ちるような気がしてハッと目がさめるとこのこと繰り返りだった。四肢の束縛には、もうなれていたが、想像以上に苦しいのは、何といっても舌責めだった。

声を出したくてもアウアウとしか、いえないし、歯も顎も自由がきかないのだ。そんならと横を向くわけにもいかず、たまるよだれをのみこむのが、せいっぱいだった。

次第に、いらだつを抑えかねたとき、注射が終わった。

そのころから眠気とは逆に頭が、さえてきた。奥村がきて注射器をかたづけると、道子夫人らが、やってきた。

「さあ、気つけに、こそぐってあげて」と道子夫人が、けしかけた。

イメージギャラリー
『置物』
宮城昌子



「OK」

若い佐野助教授、熊野謙蔵らが、かけより、猿臂をのぼした。四本の手が忽ち花枝の脇腹や足の裏を捉えた。その突然の嵐に花枝は

「グエー、グエー」

と、声を限りに、もだえた。

静から動へ、激しい悦虐の一日は、この日もまた、幕をあけたのだ。

割ばしをとられた花枝は、やっと鉄わくのベッドから解かれた。裸体の身を恥かしいと思う間もない瞬間に、次の責めが待ちうけていた。

最初は正式の木馬責めである。口に詰め物をされ、嚴重な

サルグツワに、高手小手。しかも素裸のまま手どり足どり木馬にのせられる。股間には、外に見えないよう柔らかいスポンジを敷かれてはいるというものの、三角形の背に跨がらせられると、痛みは、かなりのものだった。髪は、まとめて天井から吊るされ、足に石の重りを、つけられると、

「ギー、ギー」

と悲鳴が洩れた。

体中から脂汗が出、腰を動かせば動かすだけ、痛みが背をつらぬいた。顔を、しかめてもだえる。その姿をカメラが、しつように追う。一転して木馬から降ろされると裸の上に囚衣を着せられ、再び女五方に緊縛されての木馬責め。今度は囚衣で、ごまかされるため股間のスポンジは大型となり、痛みは前回より、やわらいだが、逆に足首を木馬の後部足に固定され、その足裏を羽根でくすぐられることになったので、苦しみは内にこもり、吊られた髪の毛が抜けるのではないかと思われるくらい花枝は、もだえた。その表情がいいと熊野が、ほめる。責め手は、もちろん道子夫人。羽根の手さばきは達者なものだった。やっと木馬から解放された花枝は休息の意味もあって、晒し、生き胴の形と進み、打ち

首のまねもさせられた。そのあとで生き埋めとなり、砂場に首だけを出して高手小手のままで、うめられ、表土を赤土にして撮影された。こんな演技は楽であり、サルグツワも、とられていたので心にも、ゆとりがあった。

しかし鉛責めのまねや、鹽に強制的に顔をつけられる水責めのまねは、そう苦しくないといつては誤解される程度の苦しみはあった。鉛責めでは鉛のかわりに色つきの水。鹽に顔をつける水責めは、水につけられている時間が、ものの三十秒で呼吸に困難はなかったが、苦しそうな演技をせねばならず、水が目や鼻にしみて、やはり溺れそうな感じだった。

それに比べると俵づめは、きつかった。囚衣の上から縄で縛られた上、俵に首だけ出して詰め込まれたのだが、息苦しい上に、素肌の部分にワラが、ささって、何となく痛がゆかった。その上、本物の俵の上に置かれたりその俵を花枝の入った俵の上に置かれたときはギャツといった。地上を転がされたり、髪を握られて首の運動を、しいられたり、いかに撮影のためとはいえ、いい加減にせいとハラが立ってきた。

しかし、いくら腹を立てても、どうにもならないと、あきらめ、花枝は再び無抵抗主義

に移った。この俵責めに比べると、スマキは楽である。素裸でされたが、大きなムシロにすっぽり巻きこまれると、苦しみはあっても相手に見られないという、安らぎがあった。これに比べるとハリツケは恥かしかった。

最初は囚衣で十字に。足も、そろえて縛られたが、つぎは大の字。これまでは我慢ができたが、ついで素裸で大の字にされ、高くされたのには頭にきた。それでも最初は腰巻だけは、つけさせられていたが、やがて、それもとられると、さすがに花枝は顔が、こわばった。こんどはサルグツワも、されていない。同じ素裸でもリングル注射のときは、注射に気をとられて相手の視線を感じなかった。だが、白日のもとでは、痛いほど見物人の視線がわかるのだ。そればかりか撮影の邪魔になると、わざと道子夫人がハシゴをかけて台にのぼり、カミソリを使いはじめた。

「やめてえ！ それは。それだけはーっ」

と哀訴しても誰も答えてはくれなかった。悲鳴は逆に男たちを楽しませ、私語を多くさせたにすぎなかった。

「やめてえ！ やめて」

それでも、二度、三度と花枝は哀願したがダメで、それどころか、それを理由に、梯子

責めに、かけられることになった。

これも全裸の責めであった。

仰向けに、俯向けに、大の字に、人の字にはては梯子を抱くように縛られ、頭を下にしたり、上にしたり、体を横にされると、血がのぼったり、降りたりした。

「ねえ、口を縛って」

花枝は苦しさに堪えかねて、哀願した。口に詰め物をされ、真っ赤なしごきを割り込まされサルグツワをされると、花枝の姿は若い娘の受刑図から一変して落花浪籍となる。江戸時代の戯作者なら、さしずめ、どんなストリーを書くだらうかと想像された。

この梯子責めが終わって一同は一服した。この間、花枝は立木縛りにされて放置されていた。背中で立木を抱くように手足を縛られ枝の分かれ目の切り株で股間を支えられるポーズは、ちょっとした木馬縛りである。しかも縛りは、きついし、不安定で重心が、とりにくい縛られ方だった。だから花枝の心は、ゆらぐ。それを見すかすように佐野が近づき乳房の先を、いじった。

「このスケベー」

と、ののしってやりたくても、花枝は自ら願って縛ってもらった、しごきが口に、くい

こんでいた。朝から縛られる一辺倒の中にあつても、この刺激は強烈すぎた。花枝が全身から羞恥心が噴き出る思いだった。

「ほう、だいぶイキが、いいな。もうネをあげたかと思った」

と熊野。熊野は、左の乳房を責めだした。

思わず顔が赤らみ、身体がくねる。それと同時に顔中が燃え、体全体が燃え、目から火花が出るように、血が頭にのぼった。

「ム、ム、ム、ム、ム、ウム」

花枝は、たまりかねて、ほえた。目から泪が流れた。池本が、たしなめなかったら、花枝は気が狂ったかもしれない——そう思ったくらいだった。そんなアクシデントをふくんで、花枝の責めは再度、逆さえびの吊りに入ってしまった。二日目と違い、この日は、もっと長時間、しかも、きびしくしようというのである。

背中に四肢一つにして縛られるだけで苦しむのに、その姿で宙に吊られるのである。最初は腹に肩に、腰に補助金具をはめた上で、囚衣を着せられての吊りだったので、かなり吊られても、そう苦しくはなかった。しかし全裸で、しかも縄だけとなると、もうそこに救いはなかった。人に支えられ、宙に浮いて

いるうちはよかったが、その手が徐々に下がり、手足の縄がしまり、全身をその縄で支えるようになった途端、息もできぬくらいの激痛が四肢と腰を中心に襲った。ものの一、二分だったろうか。それが一時間にも、二時間にも思われる長い間で、それを繰り返して五六回、やらされると、顔は引きつり、肌が白けてきた。逆にしめあげられた手首、足首は紫色に変わってきた。撮影は、これで終了した。

四肢を解放されたとき、花枝は失禁しており、意識を失っていた。あわてて奥村が強心剤を打ち、女たちが手足のマッサージを、はじめた。それでも花枝は、まだ肉のかたまりのように、よだれを垂らしていた。花枝に意識が返ってきたのは、この直後であり、軽い痛み止めの注射をされたあと、君代らにつれられ、バスに入れられた。

撮影は終わった。男たちは跡片づけに忙しかった。すばらしい写真ができたぞ、という期待が男たちにはあったが、その半面、池本教授は少々行き過ぎだったと認めねばいけない、ホロニガイ感じもあった。それは花枝がこの縛り専門のベテランのモデルでなく、まだ純真な乙女であることを思い出したからで

ある。あすの責め地獄の羞恥責めを、どうするか、池本は、ふとそう考えた。

恐らく花枝は、このまま、ドロのように眠るだろう。いかに、みずみずしい肉体と精神をもっているか、もう限界は、きていると池本は思ったのだ。

だが、サイは投げられている。

途中でやめることは、会のためにも本人のためにもならないと、池本は心を鬼にした。

(十一)

第五日目は朝から雰囲気違っていった。

責め手には、仕事というものから解放された、おおらかさがあった。この事は詳しくは花枝には知らされていない。しかし解放感というものは、知らず知らずのうちに伝わるものだ。朝九時過ぎ、花枝が疲れきったからだを、いたわるように目をさましたとき、人々は、もうざわめいていて、縛りの準備に余念がなかった。しかし、きのうまでの張りつめた空気はなく、暖いものが流れていた。御不浄に行き、洗面し、朝食をたべながら花枝はそんな空気を肌で感じていた。しかし過去、四日間における花枝への束縛は、花枝を臆病な引っ込み思案な感情に歪曲していたので、

「何かあったの」

と尋ねることができなかった。うかつに聞けば、それを逆用され、あっさり縛りあげられてしまうのではないかと思った。

しかし、花枝の気持とは関係なく事は進んでいた。ぶらりと食堂に顔を出した道子は「あら、花枝さん。やっと、お目覚め？ 朝寝した罰に縛ろうかしら。きょうは九時半からですよ。あと三十分間、借り切つて責めたいワ」

と、相変わらず怖いことばかり言う。千波夫人は道子と違って何か、ひどく落ち着かないらしく、花枝の横にきて、

「いったい、どうするつもり、なのでしょうね。きょうは、私も積極的に花枝さんのマネをせよ、といわれたのよ」

と、ためいきをつく。

「私のマネ？」

「ええ、そうよ」

と千波は、げげんな顔をしている。あとで考えてみると、千波夫人は、このとき、もう自分も縛りのモデルにされることを知っていたハズだし、それを言いだしかねて、とぼけてみせたらしい。花枝は、そうしたところが分からなかった。

ともかく、熱いミソ汁に玉子かけの朝食はおいしかった。花枝は、まだ縄目の痕のとれない手首を、さすりながら、それを、むさばるように食った。考えてみれば、昨日は強行スケジュールで殆ど食事をする事がなかったのだ。だから腹がへっていたのも当然だった。食事が終わると花枝は寝室にひきかえし寝ころびながら、ゆっくり九時半になるのを待った。出を待つ俳優の心境とは、こんなものかと思われた。

九時半かきりに道子が迎えに来た。花枝は長襦袢、腰巻姿で来いといわれていたので気軽に着替えた。ネグリジェをとり、パンティをぬいで和服に着替えるのに何の抵抗も感じなかった。

「花道には、縛られて出るものよ」

と道子がロープを、しごいたので自然、後ろ手に組むと、細手の綿ロープが手首に巻きつき、花枝は引き回し姿よろしく引っ立てられた。庭に連なる座敷に案内されると、そこには池本夫妻や浦本夫妻、熊野教諭、佐野助教授、奥村医師らが待ちかまえていた。

「ともかく、きょうは、五日間の仕上げをします。いつも花枝さんだけを縛るのでは可哀そうなので、きょうは千波さんにもモデルに

なってもらいます。最初は縛りコンテストをしましょう。花枝さんには最初、浦本さん、千波さんには佐野先生という組み合わせで、いかがでしょう。二十分間、一人ずつ、別の部屋でモデルを縛りあげ、それで皆で、ここにひきずつてきて合評会をします。第一の組が終わると、花枝さんには、熊野夫人、千波さんには熊野さんという夫婦競争の縛り方教室と、いきましよう。最後は池本夫妻が花枝組、奥村医師組が千波組で雑誌社の方は自由に撮影して下さい」

と池本夫人が説明した。終わると拍手があり、花枝は、さっそく浦本久則氏に、せきたてられるようにして左側の部屋に入って行った。

そこは六畳の間で、部屋の片方に窓があり朝日が差し込んでいた。浦本は花枝をひき込むと無言で、しばらく考えていたが、不意に突き倒し、すそが乱れるのを、しばらく見詰めていた。やがて真っ黒のロープを取りあげ右足首を左足のひざに、厳重に縛りつけた。それから長襦袢を剥いで手首にまとめ、手首附近に、たくしたまま両手首の縄を力一杯ひっぱって、両足の縛られた接点へ向けて引いた。このため胸は、そり、不安定な、からだ

が、さらに一そう不安定になった。それから別の縄を首にかけ、胸だけを菱型に縛りながら縄を下げ、腹をヒョウタンのように締め上げてとめた。腰巻ははずし、下腹部の縄を股間に通して締めつける。こうして不安定なまま三本の縄を駆使して縛り終えたと赤いシゴキで簡単にサルグツワをしただけで、浦本はフスマをあげ出て行った。

しばらくすると熊野ら多勢が部屋に入ってきて、手どり足どりして花枝を元いた部屋に連れて行った。そこには千波夫人が縛られていた。千波夫人を縛ったのは佐野である。佐野は浦本に遠慮したのか、長襦袢、腰巻姿のまま、女五方に上半身を固め、下半身は全く正座したまま、固定してあった。夫の浦本が千波夫人の背中を突くと、

「うあっ」

といいながら夫人は、まるでダルマのように、ころがったが、足首は太ももに折り曲げて嚴重に括られていたので、破廉恥に下半身が露出するようなことはなかった。それに比べると、まったく花枝の方は、法にかなわない縛り方だった。

「いったい、何という縛り方よ」

と道子が、なじるように聞いた。

「カタツムリとでも言おうかね。案外、これで、きついんだよ」

と浦本は弁明しながら、

「こうすると面白いだろう」

と自由な左足首を手にとって、くすぐる。

「ウアウ」

と、こんどは花枝が悲鳴をあげる番だ。だが千波の場合と違って花枝は、ひっくりかえることもならず、思わず両足を、ちぢめる。すると変な形に組み合わされた、からだが、くねってカタツムリのように前に進む。

「どうだ」

と浦本は笑った。思わず拍手が鳴った。

「よし、わかった。つぎ」

と池本教授が時計を見ながら指示した。

花枝も千波も、その場で寄ってたかつて縄を解かれ、次の部屋につれて行かれた。

花枝は道子、千波は謙蔵である。

二人だけになると、道子は例のごとく、

「女の方が意地が悪いのよ」

と、おどした。それは言われなくとも花枝

が一番、知っていることだった。

道子は花枝を素裸にした上、手首を、きっちり体の前で縛った。その両手を上にあげさせ、頭の後ろにひき入れると、手首を縛った

黒い縄を胸と首に回して締め上げた。それだけで花枝は、うっといった。口に詰め物をしたあと、別の縄で下アゴから口の上を通し、鼻の上から頭を縦に一周させた。下アゴの上と鼻の上に結び玉をこしらえておき、頭の後ろの手を、さらに縛った余りを口の上の縄にかけて左右にぐいとひくと、顔の前で口を中心に菱型の縛りが完成した。縄の余りを再び頭の後ろに回し、きっちり縛ると、嚴重な顔縛りが完成した。

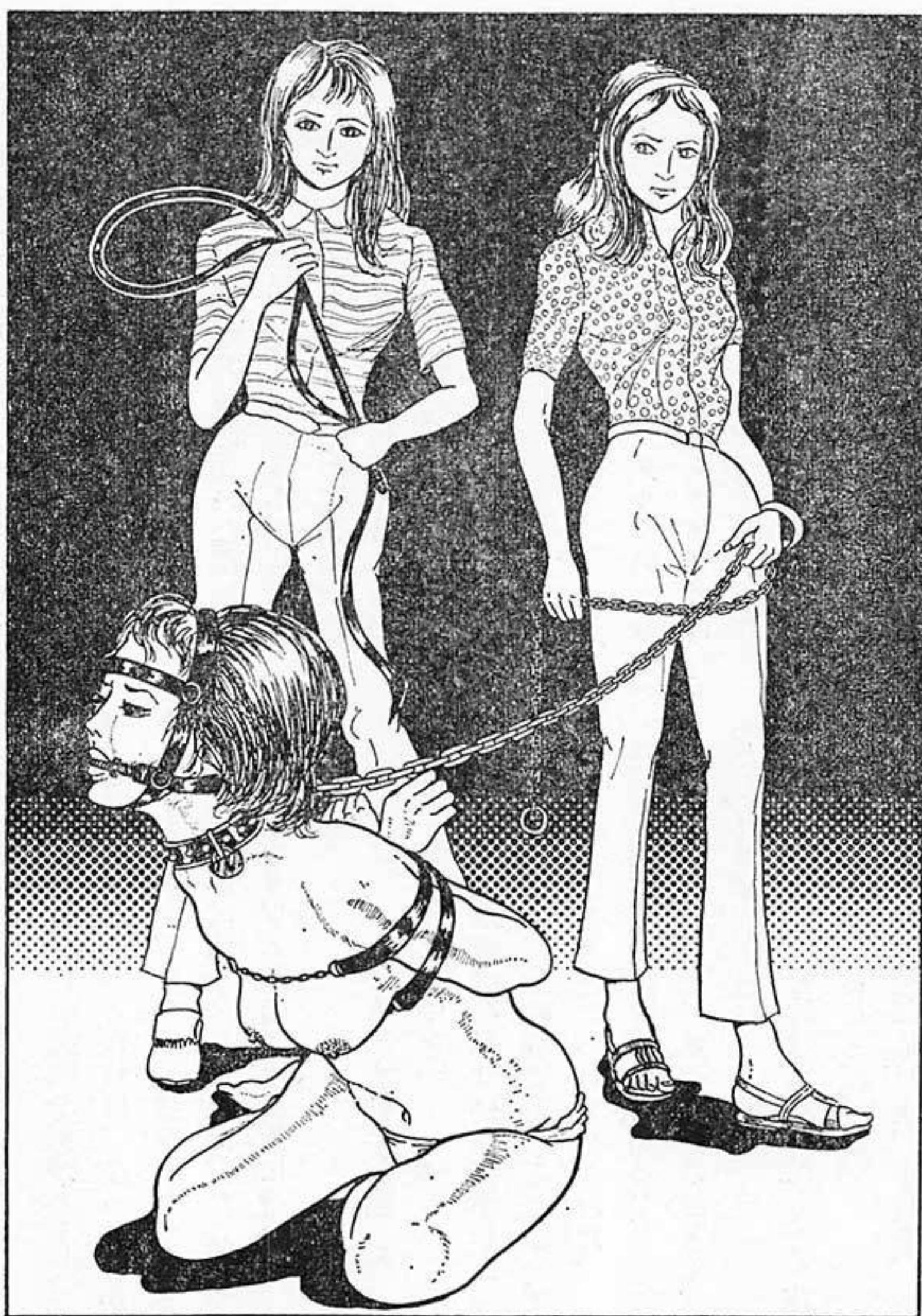
両足首を、あぐら縛りにしたあと、上体ができるだけ前に倒させ、足首の縄を首の後ろに回して締め上げた。左ヒジと左ヒザ、右ヒジと右ヒザを、できるだけ近づけてしめるとコの字型に折れ曲がった型ができあがった。道子は笑いながら皆を呼び、花枝をころがすように座敷へ連れて行った。

一方、千波も全裸にされていたが、千波の縛られ方は逆さエビ縛りで、余分の縄を胸にブラジャーのようにしめ、下腹部には、まるで力士の回しのようにかけていた。夫の浦本が、それを見て、

「千波は、この形がすきでネ」

と言いながら、何やら機械をとり出したので、どっと笑い声が、おきた。しかし花枝は

イメージギャラリー——『オヤ、どこへ行く気?』——飯田ひろくに



それを見ることができなかった。花枝は、頭を下にして置かれていた。尻が天井を向き、白日のもとに晒されていた。しかし、それを考える余裕がないくらい息苦しかった。しかし、道子がピシヤピシヤ尻を、たたくだけで

なく、ゆっくりと手でマッサージするので、どうしても恥かしいポーズを意識しないわけにはいかず、逃げ出したい気持ちで、一杯だった。

花枝は声をあげて泣きたいと思った。それ

と同時に心から道子を憎んだ。

池本が見るにみかねて、ドクターストップをかけた。

「じゃ、最後の一回に行きます」

という教授の声で、皆は、どっと二人に襲いかかり、二人は再び束の間の自由を、とり戻した。花枝は再び前の部屋に連れて行かれ、こんどは池本夫妻と二人だけになった。

「花枝さんも、だいぶグロッキーだね。じゃ古典的縛りにしましょうか」

と二人は言い、すぐ着物を取りよせ、腰巻長襦袢だけでなく、黒緇子のついた昔の良家の娘風に着付けた。そのあとで細い柔らかな縄紐をとり出し、花枝の両手の親指を合わせきっちりと縛り上げた。また、正座させ足の拇指を、きっちりと縛った。これだけで終わりだった。花枝にとっては一番、楽な縛られ方だったが、実際、時間がたつと、かなりきびしい責めであることがわかった。縛られる箇所も、紐も小さいので、激しく痛むのだった。

一方、千波の方は全く大変な縛り方にされていた。左手首と左足首、右手首と右足首をきっちりと縛られた上、両足首の間をできるだけ開いて棒に縛りつけられたのだ。むろん

全裸である。しかも、その棒に噛みつくような形にサルグツワをかけられ、千波夫人は何とも奇妙な形で皆の前にひき出されてきた。これを見て一番、喜んだのは夫の浦本で、彼は、いつしかバイブレーターで、夫人を責めるのに余念がなかった。

「余り脱線しては、いけませんよ」

と池本夫妻は、たしなめながら、それでもあいかわらず大家らしく落ち着いた、そぶりだった。

これで第一回の縛りコンテストを終えたが合評会では道子の責めが圧倒的に評判をとり花枝の憎悪を、さらに、つのらせる結果となった。このゲームが、ひととおり終わったので、今度は女たち三人の考案した囚衣のデザイン発表会となった。囚衣という表現が悪ければ拘束衣といって、よからう。

女たちは、いそいそと、その準備に、かかった。モデルは花枝、ひとりだけである。花枝は改めて裸にされ、準備のすむのを待たされた。

準備は終わった。

最初は池本君代デザインの拘束衣だった。これは、よろめき衣服ともいわれるもの。まず素裸の彼女に、いきなり頭からワンピース

を着せた。真っ赤なビニール製の、がんじょうな布で袖はなく、ちょうど円筒形の布に、すっぽり頭から包み込まれ、顔を出すだけといった姿である。足首すれすれまで、この服を着せた上で、夫妻は背中にある鳩目を使ってダブダブの布を、きっちり体の線に合うようにして、しめあげた。手は予め細い縄で背中に軽く縛り合わせてあった。締めあげられると、まるで肌着のように密着して、女らしい形が浮き彫りにされてきた。もちろん両乳房のところだけは、くってあるので、乳房だけは衣服から、とび出し、その他のところは胴でくびれ、尻や腰でふくれ、さらに膝の上で、きっちり緊縛されたように強く、しめられると、自由になるのは足首の、わずか十センチ余り。これでヨチヨチ歩きを、させられた。一度ころぶと、もうどうにもならず、それこそ、女たちの手を借りなければ立てなかった。

これにたいし、千波夫人の考案した囚衣は上半身は男物のシャツのようなもので、下半身はスカートで、タイツになっていた。上衣は手より袖が長く、腕を組ませ、袖を縛り合わせることで、自由を束縛した。ぞくに精神病院などで、よく使われる囚衣に近か

った。

一方、道子夫人のは、男のシャツとズボンをコンビネーションにしたもので、背中の割目から手足を入れて、首を出し、割目を閉じると完全に、ぬいぐるみの中に収容されたことになり、腰に巾広いベルトをしめ、両手首両足首にもベルトを締めて衣服が、ずれないように固定した。両手首、両足首の先は袋状になっており、その先は約一メートルぐらいのロープが、とりつけられていた。道子は手首のロープは背中から腹に回し、そこで軽く縛り合わせた上、二本を一緒にして股間を通して背中の手の交差点にかけると、締めあげて固定した。このあと、首のところが二つに分かれた縦縛り用のベルトを腹のベルトにとりつけ、背中で縛りつけて仕上げた。これは完全な拘束衣で、花枝は身動き一つできない。そんな花枝にサルグツワをはめ、袋状になった頭巾で目、鼻だけを出して、顔をおおい、縦縛り用のベルトに固定するという、やり方で作業を終えたので、花枝に残された自由は目をパチパチさせるだけとなった。花枝を仰向けにし、完全拘束の状態を確かめると道子は、その拘束衣の上から花枝の脇腹をくすぐり、花枝を、もだえさせ、皆に拘束の完全さ

を表現した。

自ら人間ベンチといって花枝の上に腰をおろし、しゃべりまわる、その道子の後姿に花枝は、この女の徹底した冷たさを見た。花枝には、とてもできない態度だと、一筋二筋、涙を流しながら花枝は、再び道子に憎悪の念を、ふるいおこした。

午前中は、これで終わった。

午後の開始まで一時間の休憩。

「花枝さんは、この方が、すばらしい休養になるワネ。何しろ動かずにすむのですもの」という道子の意地悪い提案で、またしてもそのまま放置されることになった。徹底した拘束は、そう痛くはなかったが、手足はしびれ、放置されることは相変わらず自由を上回る苦しい修業だった。

皆が昼食するのを横目で、にらみながら、あわれな犠牲者は水一滴すら、のむことができなかったのである。しかも午後になると責めは、こんなものではなかった。

こんどは男たちの要請で皮革の拘束衣や貞操帯が花枝の体を襲った。それがすむと、再び全裸にされた吊り責めコンクールで、夕方になったときは完全にグロッキー。最後に縄で完全に拘束された花枝は、千波とともに庭

にひき出され、泉水一周のカタツムリレースを、させられ、元気な千波夫人に一メートルの差をつけられ、泥まみれでゴールしたが、罰に泉水につけられるという、あわれさ。サルグツワ姿で顔だけを水面に出した花枝の体をコイが、つついていった。そこから、ひきあげられると今度はフロ場に連れて行かれ、お湯責め、浣腸責めをされた。こうして夜になってもアブノーマルな男や女たちの狂宴は続き、花枝が解放されたのは十二時過ぎ。ネグリジェ姿にされて寝台にねさせられると、泥のような眠りに落ちていった。そこに思想や感情の入り込む余地は、もう全く残っていなかった。

(十二)

六日目の朝は静かであった。

花枝は、わりと朝早く目がさめた。やけに空腹だった。ベッドから降り、食物を捜しながらキッチンに入って行くと、時計は午前七時をさしていた。池本夫人が起きていて、もういつものように、きちんと和服を着込み、「あら、もう目が、さめたの。おなが、すいたのでしょ」と食事の用意をしてくれた。それを食べな

がら、

「皆さんは？」

と聞くと、

「心配しなくてもいいの。もう誰もいないのよ。この家には私だけ」

と、いった。

すると、花枝は急に心細くなり、

「ほんと」

と聞き直し、食事を中止するとワッと君代夫人に抱きついて嗚咽しはじめた。

「お母さん、お母さん！」

と花枝は小声で、くりかえした。

不慮の事故で肉親をなくした花枝には、母は神様よりも尊い存在だった。それほど花枝は心身ともに参っていたのである。

君代は子供をあやすようにして、そんな花枝に食事をとらせ、ふたたびベッドに案内して花枝を、ねかせつけた。

花枝が、ふたたび目をさましたのは十時をちよっと過ぎていた。

みるとベッドサイドに真新しい下着類が揃えてあり、卵色の新品のツーピースも準備してあった。それらを一つ一つ、身につけ、花枝は、やっと一人前の女になったような気がした。いつしか君代夫人が、そばに来て手伝

ってくれた。

鏡台の前に坐り、薄化粧をするのも、五日ぶりである。髪をなでつけると、

「セットに行っていらいっしやい」

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	四〇〇円(送32円)
三月分	3冊	一二〇〇円(送共)
半年分	6冊	二四〇〇円(送共)
一年分	12冊	四八〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

と君代夫人が、いう。その案内で、この家に来てから始めて、その家を出ると、君代夫人の知人の美容院に連れて行ってもらった。

花枝の髪ができあがるころ、君代が迎えに

(大阪四二七八三番)のいづれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添附致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

来た。花枝は見違えるように美しく変わって来た。それから君代夫人の呼んだ車に乗り、花枝は、郊外の大学の、温泉センターに行った。

教授夫人の君代は、顔なじみらしく、大もてだった。

「従妹の花枝よ。よろしく」

という、あいさつに、従業員たちは深々と頭をさげた。

「この庭が美しいの。そこを散歩したら、まず温泉につかって疲れをいやしましょう。ここは、ラジウム泉で、打ち身、切り傷に、よく効くという評判なの」

と君代夫人は、やさしい。

庭は、確かに美しかった。枯山水の造りで雪舟邸を模倣したものだと、君代は説明してくれた。時間は、まだ十二時をちょっと過ぎたばかりでフロには早い時間だが、君代夫人に薦められるまま、フロに入り、並んで大きな湯舟につかると、疲れが、どっと押し寄せたのを感じた。

「よく体をマッサージをするのよ。縄目をとっておかないと、弟さんに怪しまれるわよ」そう言われて花枝は五日間の思い出が、どつと、よみがえってきた。

いったい、人間とは何だろう。

こんな五日間もの責めに耐えさせたものは何だったろう。

それは失われた青春に対する、はかない乙女の抵抗だったのだろうか。それとも弟にたいする肉身の愛だったのだろうか。

花枝は一応そう思ってみたが、この体験を通じ、そうと確信できるものは何もなく、ただ遅くなり、変わったことが、わかっていった。

遅しいということは一体、何だろう。

人間の遅しさとは体験を通じて蓄積された力、器量というものではなからうか。そういうことが、おぼろげながら花枝にもわかりかけていた。花枝は、これでよかったのだと思った。

その日の午後は、ゆっくり休み、翌日も、ゆっくり休んだ。そして昼近く、帰り支度をはじめるところには、すっかりリラックスした花枝に、君代夫人は、

「どう、懲りたでしょ。もう二度と誘われても、こんなことしないでしょ」と聞いた。

「ええ、絶対！」

「でも、ダメよ。ほら、こんな写真があるも

の。これを知人にバラまくと威かされたら、また、いうことを聞く破目になるのでしょ」と一枚の写真を見せた。

ポロライドのカラー写真だったが、その写真を見ただけで花枝は、びっくり仰天した。とても他人に見せられた図ではなかった。あのときは、夢中だったから、わからなかったものが、目に見えてきて大きなショックだった。

「こんなの見せられたら、多分、断われなく承知する、でしょう、ね。でも本当に、これが私なのかしら。信じられない……」

「信じられないといっても、これは真実の写真よ。もっとも、これをバラまいたりしたらわたしたちも、メシの食いあげになるわよ。だから、そんなことは、できないのよ。心配しないで、いいワ——」

と、君代夫人は笑った。

そんなものかなと花枝は感心しながら、しみじみと自分の今後について考えてみた。

弟が入学し、就職し、成長し生きるハリがなくなったら、本当に自分は、どんな生活をするようになるのだろうか。二度と、こんなモデルは嫌といいながら、その気持が押し通せるものだろうか。恐らく、こんな世界から

離れられなくなるのではないかと、心のどこかに、ささやく声を聞き、花枝は呆然と立ちつくしていた。

そこには女としての本当の姿が出ていた。弟のためという考えはなかった。世の中が、すべて、うまくいかなかったても、新しく生まれた花枝の生命は、いきっていた。

こんどの五日間の体験で、よかれ悪しかれ官能を目ざめさせられた女の生命は、花枝の中で、もはや息づくことを、やめようとしな

い。

そのことを自覚したとき花枝は自分が一歩成長したことを知った。

大きな目で見れば弟の進学も、人間形成への道程ではないか、自分の味わった不思議な世界も、まったく、それと同じことであり、人間として、女としての脱皮でもあったのである。

花枝はそう思うと、気が落ちついて、ほほえみを、とりもどした。

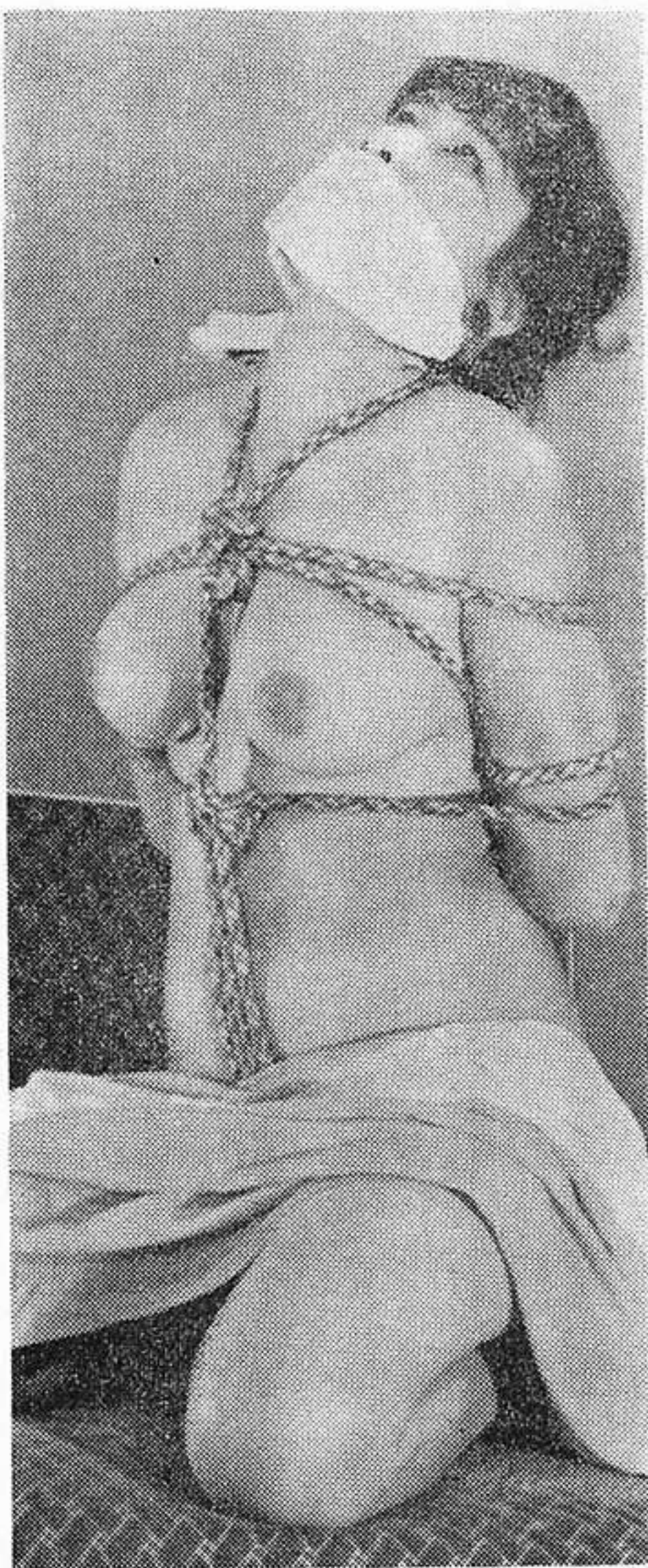
そして落ちついた声で、
「奥様。帰りましょうか」と、いった。

—〔告白〕—

緊縛女体への幻想

松 木 良 二

(写真は愛川悦子)



私は家庭的な妻と二児のある四十才になる内気で平凡なサラリーマンです。

私は物心ついた頃から今に至るまで、自分だけが、このような異常な性癖を持っているのだろうかと思って悩んでおりましたが、奇クに発表されている読者の皆さんの告白記事

を読むにつけて、自分一人だけでなく、他にも同じような傾向の方が沢山おられることを知り、心が安まりました。

私には親兄弟や妻にも言えない、自分のかくされた性癖について秘密があります。

小学生の頃から、読書が好きで本ばかり読

んでいました。五、六年生頃になると、子供向の本ばかりでなく大人の単行本や講談本も読むようになりました。(その頃は丁度、太平洋戦争の最中でした)

父の実家が農家で毎年、夏休みには遊びに行くことにしていました。都会育ちの私には農家の住居が珍しく、よく土蔵の中へ入って遊んだものでした。埃にまみれて、いろんな古い道具類が置いてあり、そんな道具のなかに混じって、隅の方に石炭箱が置いてありました。なんの気なしに蓋をとってみると、古い雑誌が、ぎっしりと詰まっていました。

一番上にあった雑誌のページを見るともしにくっていますと、女の人の縛られた挿絵が目に入りました。(今から思うと伊藤幾久造のペン画だったと思います)その時、私の胸はドキリと刃を刺されたような衝撃をうけ本を持つ手は、わなわなと、ふるえました。

天窓からと扉を開けた入口とからさし込む淡い光をたよりに、その本を無我夢中でむさぼり読みました。(その頃から私の心の中に倒錯の血が流れていたのかもしれませんが)

その雑誌の小説は、若い娘が山賊や雲助に襲われている筋書きで、胸をわくわくさせながら読んだものです。

夏休みがすんで家へ帰ってから、しばらくは、その雑誌のことが頭にチラついて勉強も手につかない有様でした。でも、やがて中学校の入試の為、それらの事など考えておられない程、勉強しなければならなくなりました。そんなわけで、いつしか忘れともなく忘れてしまっていました。（その頃は旧制中学でした）

そして、大東亜戦争も終戦となり、世の中が、がらりと変わっていました。高校を卒業した私は勤めに出ましたが、その当時、世上に氾濫していた、いわゆるカストリ雑誌を、両親にかくれて濫読していましたが、何かしら自分としては、物足りなさを感じて居りました。その頃の私には、それが何であるかについては、わかりませんでした。

自分の求めているのは、一体なんであるのか。それについても、はっきりとは自覚していなかったのです。なんとなく異性を慕いたい気持は持っていました。でも、内気な私にはガールフレンドすら作る勇氣はありませんでした。

私には姉が一人、居りました。ある夏の夜、銭湯から帰った湯上がりの姉の薄桃色に染まった肌を見た私は、みんなが寝静まった頃、

そっと起き上がり（姉と私は同じ部屋で寝ていたのです）姉の枕元へしのび寄りました。暑いと寝苦しいのか、姉は掛蒲団をかけた状態で寝ていました。寝巻は着ないでスリッパだけでいたので、余り大きくはないのですが、白くて格好のよい乳房がのぞいていました。そっと手を伸ばして、スリッパの紐をはずして、ずり下ろしました。

姉は昼の疲れで、よく寝入っているのか、身動きもしませんでした。私はそのまま、ほの暗いスタンドの灯りの中で、白く浮かんている乳房に、近々と顔を寄せながら、喰い入るように、それを眺めました。

幼い頃は、よく母と一緒に風呂に入りましたが、その頃の記憶は全くありません。記憶にあったとしても、何の感情も持っていなかったと思います。ですから、今始めていい程、若い女性の、それも実の姉の素肌を眺めた私は、口はカラカラに乾き、全身から汗が、にじんできました。

思わず知らず、手を伸ばそうとしましたがその時、私の隅に理性というものが囁く様な気がして、ハッと我に返りました。『お前は畜生なのか。実の姉に一体、何をするのだ』その言葉に、私はオコリが落ちた様に、ふる

えながら自分の蒲団に、もぐり込みました。

その翌朝、姉の顔色をそっとうかがいましたが、何ら変わったことがなくて一安心したものでした。それ以来、私の姉に対しては何となくひけ目を感じる様になりました。

この姉も良縁を得て結婚しましたが、子供を産むこともなく、程なく病気でなくなりました。実の姉の裸体を見たいと思った私の心は、果たして異常なものでしょうか。

私が奇クを始めて本屋で手にしたのは、そんな事があって間もなくでした。（もう二十年前のことでしょうか）

その時の身ぶるいする程のショックは未だに忘れることが出来ません。グラビア頁のフットには、たしか愛川悦子さんが、豊満な乳房をローソク責めされている写真が載っていました。そうした口絵や写真は勿論のこと、その他の記事も、私の性癖を満たして余りあるものでした。

家人にかくれては、毎月発行日を待ちかねて買い求め、夜、蒲団の中で読みふけては自己満足するのです。それでも次第に、何となく満たされないものを感じだしてきました。それは、写真や記事だけでなく、生きた動く女体の真白い豊満な乳房、そして肉づ



きのよい臀部、それらのものを、自分の目で見かに確かめたくなったのです。

そうした欲望を満足させるため、私はストリップ劇場にも行きました。自分の願望が果たされたわけではありませんが、独身の私にとっては、一つの慰めになったことは確かです。そして当時まだあった赤線地帯をさまよって歩いて、生きた生身の女体を求めました。

そんな私も、やがて人並みに結婚をし、子

供も出来てみると、そうした性癖もしずまってきたのか、それとも職場の仕場が忙しかった為か、いつしか、そんな事も忘れてしまった様でした。そして、いつしか、奇クとも縁遠くなりつつありました。

子供も大きくなって小学校へ上がる様になった頃、一人でぶらりと大阪へ出て、何気なく古本屋をのぞきました。

そこに昔なつかしい奇クが、以前とは全く

違った表紙で、しかも前よりは薄くなって出ていました。でも、辻村隆氏のカメラハントやSM読物の充実感、奇クサロンに於ける夫婦プレイの数々に、私は思わず昔の自分を取り戻した様になり、早速求めました。

私の妻は小柄で痩せていますので、性的には魅力の乏しい女です。それに、SMに關しての興味も全くありません。私が少しでも変わった態位を要求したりしますと、それこそ喰いつく様な目でにらむのです。ですから私は妻に、そうしたSMプレイについて話すことは、すっかり諦めています。

毎月の奇クを読んでいますと、夫婦のSMプレイを楽しんでおられる方の投稿が非常に沢山ありますが、こうした夫婦プレイの方のフォトを見るにつけても羨ましくなりませんか。せめて、そうした夫婦プレイを、隅々の方で見学させて貰えれば、どんなに嬉しい事か、同好の方の温い御理解をお願い致します。

私の願いは、いわゆる三十才前後か、多くとも四十才位迄の爛熟した豊満な女体を羞恥責めにして、その喘ぐ表情を見たいのです。どなたか、フォトでもいいから、お送り下さいませんか。

連載—時代S小説

紫

蘭

の

門

(19)

カット・岡 たかし



風

流 極 道 軒

珠玉も磨かざれば光らず、
天与の美体とてまた然り。
縄目もて柔肌を飾らんか、
それ尚美への道程と知れ、
妻たるべき研磨なりせば。

石 の 花

「穴沢流綱渡り——じぶんでじぶんを慰める
ような恥知らずの女には、もってこいの拷問

がら云うのを、お景は煮えくりかえるような
憎悪のおもいで聞く。

「な、なにを云ってるのさ！ みな、お前た
ちが、やらせたのじゃあないか！」
「フッフッフ。やらせられたのか、好き好

だろうぜ、姐御」

白豚が、ぐった
りと拷問部屋の床
にうつぶせて肩で
大きく喘いでいる
脇腹のあたりを足
の爪先でこづきな

んでやったのか、さあどうかな姐御。初手は
ともあれ、終わりのほうは姐御も……」

「な、なにを云うのさ！ 妾が、いつ……」

あとは絶句する、お景であった。

ざまあみやがれというふう、

「こっちにゃあ、れっきとした証拠があらあ
な。ほれ、この匂い、このしみ——いやいや
ながらやったにしては、ずいぶんとまた派手
なものさね。よく見るがいい」

お景に、屈辱の口惜しさを思い出させる布
を、斑猿がひらひらさせて見せつけるのであ
った。

その五尺四方の白絹の布の中央辺りが、ほのかないろどりをを見せて、嵯峨菊の花の髄蕊のような奥床しい香りを、ただよわせているではないか！

あまりの恥かしさに、齒を鳴らしてガバツと、ふたたび床に打ち臥してしまったお景の双臀に、ぬるぬるっと指を這わせたのは青蛇であった。

「綱渡り——いいな、小紫の。お前だって男たちから姐御、姐御とあがめられるほどの女なら往生際が肝心だぜ。さあ、神妙に穴沢流荒踊の縄をうけな」

ゾーッとするような不気味な声でいうと、愛用の青色の縄で、バシ、バシッと、菊灯台のあかりをうけて、ひかりかがやいている背筋を打つ。

荒踊の縄とは、竹内流、方円流、八重垣流など他流の緊縛術でいう早縄に似ていた。

犯科人を、ともかくも、素早く縛りあげる

前号まで——五夜のロザリオをめぐり元禄屋の手におちた怪盗徳夜叉の情婦・小紫のお景の美しい裸身に、鞭兵衛一家の拷問が加えられていく。なかでも穴沢流綱渡り——これは、女にとってこの上ない羞恥責めとなろう。

ための縄の掛けかたである。が——

元亀・天正の頃に穴沢主殿助盛秀が編み出した穴沢流のそれは、いささか趣を異にしており、単なる早縄ではなく被縛者に（縄抜けなど、とうてい、できない）という絶望感を感じさせるとともに、肌に荒々しく喰いこみときとして、そのあまりの苦痛に被縛者が踊り出すというところから名付けられた。

男の場合ですら、然り。

犯科人が女である場合、いっそう厳しくその縄目が柔肌に喰いこむことは必定であり、お景のみずみずしいばかりの弾力を秘めた肢体にそれは毒々しい牙を研ぐことであろう。

正面——この拷問部屋の主人・元禄屋の大鷲のような眼がキラリとひかり、そのそばで羅卒の鞭兵衛が、主人のおながれである血のように赤い南蛮酒をみたしたギヤマンの盃を淫らに眼を細めながら傾けている。

「お景姐御。さあ両手をうしろに回せ」

しみのついた白い布を牢格子の一端にぶら下げた斑猿が、うつぶせているお景の白い肩に長い手をのばしてひきおこそうとすると、

「お、お触りでないよ！」

まるで焼火箸でもあてられたように身をふるわせたお景であったが、前面から左肩を白

豚のブヨブヨした手で突きおこされると、もちろん上半身が、うきあがる。

「なにをするのさ！」

おもわず両手で豊かな胸の隆起をかいこんだが、その動作では、下半身が、まったくの無防備。

ハッと、それに気づいた、しなやかなお景の右手がサッと防備に走ったが、その頬にはみるまに秋の紅葉色が、さしそめる。

「いまさら恥かしがっても、もう始まるめえと思うがね。ええ、姐御」

からかうように云った斑猿が、手首をつかまえようと迫っていく。

「恥……恥知らず！ 外道……」

怒りの呟きを、わななく唇から吐き出したものの、お景は抵抗ひとつ、できない立場に ooit つめられていた。

お景の左側、すぐそこに、丸柱があり、そこにまだ、うら若い娘が、青竹で足を「八」

の字に開かせられて縛りつけられている。

日本橋小町と、うたわれた千登世——。

鹿の子絞りのしごきの猿ぐつわをかまされているほかは、一糸もまとはっていない。

お景が、もしも鞭兵衛たちの命にそむけば千登世を穴焙りの責苦に喘がせると脅迫し、

すでにその一部を実行に移しさえした男たちであった。

かなしそうに、その姿から目を離したお景は、フウーツと肩で呼吸をすると、

「あこぎなやりかたですわねえ、親分さん。

千登世さんを人質にとったうえで、かよわい女を裸にして、がんじがらめに縛りあげて鬨りものにしようというのですからねえ——

つとめて冷静さを、よそおいながうも、お

景の心は煮えくりかえっている。だが、

——あせっちゃあ、いけない。恥かしがって、いけない。男たちを囃にのらせるだけ。

心も軀も石のように、かたくして……そう、

石の花だわ。石の花になって、この拷問を耐

えぬくのよ。お景、いいわね。——

「石の花」という奇妙な言葉が、うかんだとたんにお景は、いくらか恥かしさが軽くなったように思う。

（拷問をうける女は、石の花——石の花にならなければならない！）

もう一度、しっかりと心に云いかせたお景は、目と鼻の先でジロジロと自分を観察している白豚に、

「白豚さん。さあ、どうとも、おしよ。この小紫のお景姐さん、穴沢流の責め折檻で泣き

を入れるような女じゃあないからさ。さあ、縛るんだろ。ほれ、手を、手を回して縛りやすいようにしてあげようじゃあないのさ」

お景の言動は、あきらかに女人豹変の好例

と云えたが、囲んでいる五人の男たちは、こゝと女にかけては百人斬りはおろか千人斬り、それも暴行、野合、アオカン、強姦、夜這いに、たらい回し。ときには、しっぽり四畳半

と、柔肌の微妙な反応のすべてを熟知しているつわものたち。豹変したお景の心を察知しないはずはなからう。

「フッフッフ、姐さん。いやに、はりきってきたじゃあないかい。さては、お床いそぎ（とこ）ってところかな」

「お床いそぎ？ だって白豚。フッフッフ、こりゃあいい。お床急ぎは、男急ぎ。男が急ぐものじゃあねえのかい」と斑猿。

「いやさ、斑猿の兄貴。女が男をもとめて急ぐから『男急ぎ』というんでしょうぜ」

無駄口をたたく二人に、青蛇が怒って、

「バカ野郎！ へたなゴロ合わせをしてるときかい。姐御が、こんなな神妙になさっているんだ。それぞれ、両手を背後に、しっかりと回して、さしあげろい！」

一人で縄掛けをするよりも三人がかりで掛

けるほうが、より女心を刺戟するものと知っている青蛇は、白豚と斑猿を介添え役に、ゆっくりとお景を縛りながら、荒踊の縄をかけていくつもりらしい。

「じゃ、姐御。お言葉に甘えまして」

兄貴分の青蛇に、ペロリツと舌を出してみせた斑猿は、猫を撫でるような声を出すと、お景の右手首をとらえ、

「ヘッヘッヘッ、まったく美しい手でやんすなあ。縄をかけるのが惜しいくらいですよ」

いくらか俯向き加減に正座して両手を背後に回していたお景は、いま、その手首を、がっちり押えられると、ジーンと胸に、ひびくものを感じる。

（いよいよ、縛られる。もう、反抗もできなくなるのだわ……）

こみあげてくる口惜しさに奥歯をかみしめているうちに、もう一方の手首も捉えた斑猿が、きらめくような、お景の背中で双の手首を「×」字型に交叉させ、

「胸を、はりなせえ、姐御。隠すにゃあ、もってえねえ乳房じゃあねえですかい」と、驚づかみにした双の手首を、ななめ上へと吊りあげる。

「ア、アッ……い、いたいじゃあないかい」

おもわず体勢が崩れて腰がうき膝が割れると、待ってましたとばかり前面の白豚が、

「よう、待ってました！」

手を拍って囃したてる。

いくらか上に反った、かたちのよい乳房が眼のまえで弾んで、白豚にとっては、つい囃したくなるようなみものであったろう。

「兄貴。じゃあ、お景姐御に、お縄を、いただかせてやっておくんなさい」

ななめよこに半歩下がって見上げる斑猿の鼻先で、青色の縄が、おどった。「×」字に組みあわされた両手の中心点に三重の縄が、あざやかに絡まり、つづいて、その両端が鎌首を、もたげた二匹の青大将のように、お景の左右の高手を狙う。後手に縛った直後、他流では前面に縄が回るのが普通であるが、この荒踊では高手を、まず厳しく痛めつける。

「ア、アッ……」

さらに体勢が乱れて、両膝立ちとなったお景の太腿が妖しく白豚の視線のなかで躍る。

しのびよる秋の冷気のなかで、豊麗な女体のまわりだけが妙に、なまあたたかい。

「クッククック。こたえられねえよな、この匂いは」

青蛇が、高手をしめつけながらいうと、

「噛めば噛むほど味があるといいますが、兄貴、この女は、責めれば責めるほど美しくなってきたやすぜ」

高手の肉に喰いこむ縄目を調べながら斑猿が答える。

事実、次第に上半身に縄が絡まっていくにつれて、お景の裸身からは馥郁とした香りが漂ってくるようであった。

がっくりと根掛けから崩れた黒髪が頬から肩のあたりに垂れているのも白磁のような肌を、きわだたせていたし、妖しげに、くねる左の太腿のつけねの小さな、ほくろまでが、可憐な風情を匂わせていた。

左右の高手に三巻きされた縄が、いよいよ前面に、まわる――。

「おととととと……」

青大将が、くねるような、かたちで姿を見せた、その青色の縄を、すばやく、うけとった白豚は、乳房の下で交差させると、柳行李でも、くくるようにギュと締めつけ、男結びにして腋に通す。

それを背後で、うけた青蛇が、大きく縄尻に空を、きらせたかとみると、ほっそりした首頸に縄が、からまり、

「ア、アッ……」と、お景が咽喉をのけぞら

せて苦しそうに喘ぐ。

「心配するねえ。息を止めるような下手なことはしないぜ」

苦痛にゆがむ顔を覗いて、あざ笑った青蛇は、

「このところが違うのさ。他の流派の早縄とはな」

いいさま、首にからめた縄を腋のあいだにねじこむようにして通していく。

「い、いた！ いたいじゃあないのさ！」

毛羽の多い青色の縄が腋に密着している高手のつけね、つまり、腋毛の上をとったもののだから、柔らかい腋の肉を擦り、そのはずみに何本かを、ひき抜くことになったのである。お景の前面に再び回ってきた縄の表面には一寸ちかくから三分・五分ほどの腋毛が附着していて、白豚の染め分けの組帯のしたのあたりが、こんもりと盛りあがる。

「ヘッヘッヘッ、下の方も、こんなにして、ひっこ抜いてやりてえな、斑猿の兄貴」

「ひっこ抜くのもいいが、どうでえ。ひとおもいに剃りあげてやるってのは。フッフッフッ、徳夜叉の野郎、てめえの情婦が、のっぺらぼうになったのを見たら、どんな面をしやがるか、こいつは、みものだぜ」

「やるんですかい、ほんとに！ だったら、たのむ。あっしに、その役をつとめさせておくんなせえよ。ヘッヘッヘッ。お聞きのとおりですぜ、姐御」

なんさま、すぐ近く——いや、すぐ近くなんてものじゃあなく、お景の肌に常時、触れているありさまの男たちのことである。

白豚のブヨブヨした手が、待ちかねるように、ひょいとびたかとみると、

「ヒ、ヒヤアッ！ な、なにをするのよう！」
お景が、たまらず悲鳴をあげる。

「なにさね、姐御。これくらいのことであら。れもない叫びをあげるなんて」

こともなげに云った斑猿までが手をのばそうとしたから、青蛇が怒鳴った。

「楽しむのはあとにしな！ ほれ、しっかりと乳房を押えておかねえか！」

荒踊の縄のいまひとつの特色は、乳房掛けにあった。

乳房のつけねを親指と人さし指で搾木（しめぎ）にかけるように締めあげておいて、そこへ縄をかけるのである。が、その呼吸が難かしい。あまり強く責めあげると窒息しかなないし緩慢だと、まったく意味をなさない。

叱られて、なおニヤニヤしながら白豚が

「姐さん、許しておくんなさいよ。こんなところに触るのは気が咎めていけねえのだが」と心にもないことを言って、両膝立ちの不安定な態位をとっているお景の前にたちはだかると、自分も両膝をつき、縋りつくような恰好になり、右の乳房のつけねを、まず餅でもひねるようにひとひねりしてから、両手をつかって搾りあげる。

「ア、アッ。ひ、ひどいことをするじゃあないのさ！ いったい、妾を、ど、どう縛りあげようというのだい！」

千登世が捕えられているのでなければ、目のまへの男たちの急所を蹴りあげて、かなわぬまでも鬱憤をはらすこともできるのにとおもうと、じれったさ口惜しさが、締めつけられる乳房の痛みよりも強く、こみあげてくるお景であった。

その胸のうちを見抜くように、

「いまさら、じたばたしっこは無しですぜ、姐御」と、背中を斑猿にまかせて前に回った青蛇は、自分の掛けた縄の具合を調べていたが、どうやら満足したのであろう。

「恥かしいだろうねえ、これが亭主持ちの女の姿とは、おもわれねえよなあ……」

意地悪い、せりふを吐いて、お景に徳夜叉

のことを思いださせて齒ぎしりをさせたが、つづいて、

「じゃあ、ぼつぼつ、荒踊の縄の真髄、たっぷり味わってもらいましょう。そこどけ、白豚！」

鋭く叫んだ青蛇が、その瞬間から繰りひろげていった早業は、さすが穴沢流緊縛術の達者と云えた。

右の乳房のつけね、つづいて左の乳房とそれぞれ三巻き、グイ、グイッと鮮かな手並みで青縄を掛ける。

「ア、アッ！……ア、アア……」

身をかわそうにも、後手の縄を斑猿にひきつけられていては、腰を「い」の字を描くように振って身悶えするほかとてはない。

「もっと、もっと腰をふりなせえ、姐御！ そうれ！ それ、左、右、今度は左だ。それ振れ、やれ振れ！」

手持ち不沙汰になった白豚が盛んに野次る

なかで青蛇の縄は、なおも執念深くお景の裸身を這いまわり、みるまに乳房の上下に三つ四つ、五つと菱形をつくりあげていく。

「荒踊の縄！ キリキリ立ちませえ！」

お白洲の吟味役のような台詞を吐いた青蛇が、斑猿から縄尻をうけとると、ドオッとは

かりに弱腰を蹴りあげた。

「アレッ！ な、なにをするのさア！」

おもわず悲鳴をあげて、崩れる軀を、一歩まえに出した左膝で支えたお景は、そのままたち上がるとして、

「い、いた！ ヒ、ヒッ！ イイッ！」

われ知らず朱い唇から絶叫がほとばしる。

その痛さは、一種、形容しがたいものであった。三角木馬に乘せられるときとか、そろばん責めにあうときとかの激しい痛みではなく、かとして、鷹の羽で全身を撫でさすられるような甘美な疼痛でもない。

しいて云えば、軀の毛という毛をやさしくひき抜かれるような、夢のなかで拷問をうけているような、ともかく「真綿でくるんだ激痛」とでも形容するほかはない奇妙な感覚であった。

激痛なれば、じいっと身を縮めて耐えようし、疼痛なれば五体をよじって軽くすることも可能であろうが、いま、お景を襲っている痛さは、尋常一様ではなく、いてもたってもいられない——という感じに被縛者を、おとしこむ。

「フッフッフ。荒踊の縄は、じたんだ踏んで苦しむものよ！」

灼熱した鉄板の上に追いあげられたように日頃のつつしみも忘れて、足をあげ、腰をふって踊りはじめたお景を眺めて青蛇が、ほくそ笑む。

まず高手にからまった縄、次に腋をしめつける縄、そして乳掛け縄と、この三つが美事なバランスを保って、女体に、羞恥をも忘れはてたような荒踊りをさせるのであらうが、見ている男たちには、ともかく縛られている女にとっては、これはまた、なま殺し、半殺しにも似た残酷な拷問の一つと云えよう。

「面白い縄捌きよのう……荒踊の縄とは」

いままで一言も口をきかなかった元禄屋がお景の淫らきわまりない踊りを眺めて眼を細める。

「これから本番でござりまする」

軽く主人に会釈した鞭兵衛が、もっそりと立ち上がると、お景のそばに歩みより、

「戌夜のロザリオの秘密、白状したらどうか、お景さん。でないと、いよいよ、綱渡りにかけねばならん。穴沢流綱渡り、これくらいのことではすまんよ。骨の髄まで翻られ抜かれるが、いいのかい」

とたん、お景が、ハッと身を固くする。

戌夜のロザリオの秘密——断じて吐くもの

か！

（石の花……石の花、石の花！）

奥歯をキリキリッと喰いしばったお景は、ともかくも、いま自分を押しつつんでいる奇妙な苦しみから逃がれようと、清水の舞台から飛びおりるような覚悟で、我が身をガバッと床に、たたきつけたのであった。

苦しみから逃がれるには、より大きな苦しみが必要である。

床にうちつけた五体の苦痛のせいであらうか。それとも、おさまるべきところに青色の縄がおちついたせいかも知れない。ともかくも、いてもたってもいられない苦しみは、いくらか柔らいだ。

チラッと見上げた、お景の瞳に、さきほど一枚一枚、剥がされていった唐棧のきものや友禅縮緬の長襦袢がうつり、その向こうで、鞭兵衛の指示をうけて、いそいそと立ち働いている白豚たちの姿が見える。

新しい責めが始まるうとしている。

（と、と、徳夜叉さま！ お景は、お景は、たとえば、どのような責苦にあいましょうとも耐え忍びまする！ 決してロザリオの隠し場所を白状するようなことはありません、徳、徳夜叉さまア！……）

イメージギャラリー

『休憩のひととき』

三 鷹 I・O



女の覚悟

ほっそりと息づく肩にふりかかった、お景

の黒髪をかきあげて、

「姐御。用意ができたぜ。さあ」

と抱きおこしたのは白豚であった。

菊灯台のあかりと、幾本かともった大蠟燭

の焰が、お景の無残な縄目を、まひるのよう
に照らし出す。

「姐さん、これを見なせえ。ここから、あそ
こまで綱渡りをしていただろうという趣向で
して」

得意そうに青蛇に指さされるまでもなくお
景は、床の上から五尺くらいの高さに太い綱
がここの拷問部屋の一隅から潜り戸をぬけて隣
の部屋まで、はりつめられているのを見る。

その長さ七、八間はあるうか——。

（な、なにをさせようというのだろう）

不安におののきながら見つめていた、お景
の端麗な顔から、一瞬、血の気がサーッと
ひいた。

（ま、まさか、まさか！ そ、そのようなこ
とを！ そ、そのようなことを！ そ、そん
な非道な、鬼畜生のようなことを、妾にやら
せるはずがない……）

とおもったものの、なにさま、相手は鞭兵
衛たち——今度は、頬が、パァーッと反射的
に赤く染まっていく。

（綱渡り。たしかに綱渡りと、いていた。
すると、これを……ア、アアウ……）

お景は、この綱を、またがされて歩かされ
ると想像したのである。

江戸は吉原、京では島原、大坂は新地、長崎は丸山と、各地の遊廓で、抱え主の命に背むいた遊女たちを、壁にたてかけた三角柱の上をまたいで滑らせたり、衣桁をななめにし、同じく痛めつけたり、時として太い綱を内股にはさんで一町も二町も広い楼のなかを歩かせるという私刑――。

（妾を、遊女のように扱うつもりなのだわ。徳川十一代將軍家齊さまのご落胤・徳夜叉の妻である、この妾を！）

新しい屈辱の念が湧きおこってきたが、いま眼のまえに、はりつめられている直径一寸五分ほどの太い綱には、さらに格別のしかけがあった。

まず、ところどころにある、大きな結び目――それが、どこをどうするためのものか女であれば誰でも察しがつくだけに、お景は肌に粟立つおもしろい。

さらに、ほぼ二尺間隔で、きのこ状のものをやらすりこぎ、こけし状と、さまざまの小道具が、綱に取りつけられているではないか。

（あ、あれを、あれを、妾に！）

眦がきれるかとおもうほどお景の瞳が見開かれたかとおもうと、

「鬼……鬼だわ。お、お前さんたちは人間じ

やあない！」

どうしようもない恐怖が、お景の産毛うぶげという産毛を逆立たせる。

「フッフッフ、鬼でも蛇でもねえ、れっきとした人間さまよ。それにしても、さすがは姐さん、お察しがいい。これが、どこを狙って鎌首をもたげるか、ちゃあんとお見とおしとは、おそれ入りやした」

長さ一尺はあろう、表面にイガイガがところどころに植えてまわっている木製の棒をにぎりしめた青蛇が、ケタケタと奇妙な笑いを洩らし、

「お察しとあれば、説明する時間が省けたというもの。さあ、姐御。穴沢流綱渡り、最後まで首尾ようつとめてごろうじろ。無事つとめ終えたら、フッフッフッ、そのときは仲良くお床入りといううぜ」

「な、なにをいうのさ。このお景、絶対にお前さんがたの自由になんかならないからね」
「まあ、せいぜいいまのうちに、ごたくを並べておくことさ。半分も渡りきらねえうちに、泣きべそかくにきまってらあな」

「フン、なんで妾がお前さんたちの」

唇をとがらせてみたものの、お景は自分を顧みてゾツとする。

白豚に右から、斑猿に左から、寄り添うようにして挟はさまれている裸身――。

身にまとうのは、青色縄の縄化粧のみ。

ほかならぬ自分自身の体臭を、しみじみと感じると、現在、置かれている立場が、いかに女として悲しくも惨めなものであるかがよくわかる。よくわかるだけに、（石の花になりきるんだわ）と自分の心に云いきかせているだけに、突如、口を開いた元禄屋の言葉が胸につきささる。

いままで「我不関焉」と、始めて男を知った処女がながす血のように鮮かな南蛮の酒を泰然と傾けていた元禄屋が、

「面白いことよのう」

と、ひとりごちると、「よく聞きなされやみな衆」と、いくらか酔った口調でいって、お景を指さし、

「人として生きんじゆうれて禽獣と異なるゆえんは、自分がほんとに好きなことをどれだけ生きていくうちに実現できるのか――その夢を実現するためにどれだけ努力したか、ま、そういうところできまるのじゃろうて。禽獣には夢をみる力はなく、ましてやそれを実現しようという努力もしない。人間はそれをやる、夢を見て、また夢をみて、更に夢をみて、それが

実現のために骨身を砕く……」

グイッと鮮血の酒をのみ干した元禄屋は、
「儂の好きな言葉は、お景さん。『汝の欲するまゝを為せ』——ただ、これひとつじゃ。人の生命というものは、まさしく夢・幻のごときもの。生きていくということ自体が、夢かも知れぬ、幻かも知れぬ。真実の生命は、どこにあるのやら、はるかこの世のほかにあるのかも知れまいて。しかも人生五十年、まったく霹靂のはたためくまの絵空事。人は好き勝手なことをして存分に生き抜くのが一番正しい生き方なのじゃ」

ゆつたりと、七尺ちかい巨軀を起こした元禄屋は、

「お景さん、儂は、はっきりという。この世には善もなければ悪もない。積善の家に余慶などなければ、積悪の家に余殃^{おう}などもない。因果律など、いっさい、この世にはない！」
めずらしく真剣な顔でいい捨てた元禄屋はさらに、

「もしもこの世に因果律があったとしても、それがはねかえってくるのは一万年、二万年向こうの話。お前さんにも儂らにも何の関わりあいもないこと。ハッハッハッハッハ」

ここで豪快に笑ってみせると、

「いいですか、お景さん。『汝の欲するまゝを為せ』——人は自分の好き勝手なことをするのが一番よいのだし、それ以外に生きる方法はないのだし、また、現在、生きている人間どもはみな、好き勝手に生きている——とも云えると思うが、ちがうかな」

大鷲のように爛々とひかる眼にみすえられたお景は、
「汝の欲するまゝを為せ」という言葉に、なにか不可思議な魔力のようなものを感じて胸打たれたものの、

「自分の好きなことをすればいい——と、そうおっしゃるのでしょうか、元禄屋さん」

と、せいっぱいの啖呵をきった。

「妾は、こ、これでも、好きなことを、好きなお人のために、や、やっているのですよ、元禄屋さん。な、なにをまた、突然、お経の文句のような奇妙なことを！」

「ハッハッハッハ。これはこれは、失礼いたしましたなあ。そうでした、そうでしたともね。お景さんは、いま、好きこのんで、鞭兵衛たちの拷問をうけているのでしたな」
「そ、そんな！ 誰が好きこのんで、こ、こんな、責め苦を！」

お景が、たまらず叫ぶ。

「それなら白状しなされ。短かい生命じゃ。」

若い女のみそらで、そのような恥辱にあうよりも、サッサと白状して儂の手活けの花で楽しく栄耀栄華にくらすのが、どれだけお景さんのためになるやら。力のない男ならいざ知らず、儂には、なんでも好き放題のことをさせてあげる力がある」

元禄屋、本心からなのか、お景に畏をかけるためなのか、娘でも論すように云う。

「なあ、お景さんや。戌夜のロザリオのありかさえ云えば、お前さんは、人もうらやむ幸福なくらしができるのですよ」

お景の瞳がキラリッと、ひかった。

鞭兵衛たちの獣じみた扱いに較べれば、元禄屋の言葉には何か惹かれるものがある。

しかし——たとえ、どのような条件を出されても、ロザリオの秘密をしゃべるわけにはいかぬ。

「お言葉、嬉しうはございますが、元禄屋さん。いちど云わぬと心に誓った以上、金輪際白状はいたしませぬ。さあ、遠慮はいりませぬ。好き勝手に罵られていられると思われて、存分にお責めなされませ！ 小紫のお景、みごと耐えてみせましょう！」

悲愴な決意を秘めるその凄艶な美貌を、まじまじと見つめていた元禄屋は、二呼吸の

ち、柔和な顔に戻ると、

「またしても僕の負けじゃわ。徳夜叉も過ぎた女房をもったものよ」

と、太くてしなやかな右手の指々を、お景の縄目にせり出した肌にすべらせ、

「鞭兵衛。いまだき稀にみる、けなげな女じゃ。ワッハッハッハッハハハ、存分に慰んでやるがよい。そのうち、なにかも白状する気になるかも知れぬて」

云われるまでもなかった。いままで主人の元禄屋と、女囚・お景のやりとりを、じりじりしながらきいていた白豚と斑猿は、さっそくお景の両脇に、ぴったりと寄り添うと、

「姐さん。じゃあ、ここをまたいでくださいえよ。まずは、てまえの結び目から参りましようぜ」

あとはまかせたとばかり、正面の脇息に戻った元禄屋は悠然とギヤマンの盃をあげる。

五夜のロザリオのうち、すでに四つまで手に入れている――。

鳴かぬなら鳴くまで待とうほととぎす――その心境は、まさにこういうものであったかも知れぬ。

穴沢流綱渡り

はたして、ほととぎすは、美しい声で哭いてくれるであろうか――。

元禄屋の見まもるなかで、穴沢流綱渡りの拷問が、いよいよ開始される。

直径一寸五分の太い綱を白豚と斑猿に抱きかかえられてまたがせられた瞬間、

「ア、アッ！ アアア！」

ほととぎすは、たしかに鳴いた。

綱は五尺の高さにはられてあり、それをまたいだ部分が、お景の体重で押し下げられ、当然、逆に伸張した綱が下から上へと、はねかえすことになり、これで「鳴き出さない」女はおるまい。

それはちょうどサーカス小屋での美女の綱渡りに似ていた。日傘を手にしてきらびやかな衣裳をまとい白足袋で綱を一方から他端へと渡っていく。足の親指と人さし指にはさまれた綱は女の軀の重みで下にさがすが、それが上へとはねかえる反動を彼女は腰でバランスをとりながら美事に渡っていく。

サーカス小屋の美女の場合は、足の指のまたで綱を支える――それに対して、いま、小

紫のお景は……。

「初手から痛がっていたのでは、あとがおもいやられるぜ、姐御」

白豚が厳しく縄掛けされている高手をしつかりと握っているのだが、つきあげてくる綱の疼きはなみたいていのものではなかった。

「な、なにをいうのさ！」

必死で歯を喰いしばりながらお景は、一歩二歩と前に、すすむ。太綱の荒々しい表面の固さ、痛さ。「ア、アッ！」と、お景のやつと床についている両足がたたらを踏むように躍る。

「それ、それ、あんよは上手、手の鳴るほうへ……おっと、あぶない、転げちゃあたいへん」

ぐらりと裸身がよこに傾き、あわてて斑猿が、ひきもどす。

やがて第一の結び目――。

まるで松の根のこぶのように盛りあがったその太綱の塊りを眼下に、お景の裸身からスウーッと血の気の失せていくのがわかる。

「姐御。なにをしりごみするんだい。さあ、半歩まえに！」

むっちりと肉ののった双臀を押されて、「な、なにをするのよう！」

悲鳴をあげたが、そのとたん、

「最初の関所は手伝ってやらなくちゃあね」
すうーと猿のように長い手がのびたかとも
ると、

「ヒ、ヒヤアッ！ ヒ、ヒイイ……」

お景が、のけぞる。

たまぎるような絶叫が拷問部屋にひびきわたり、太い綱が激しく上下左右に揺れる。

「暴れるんじゃあねえ！」

斑猿の長い手につづいて、白豚のブヨブヨした手も伸び、なにかもそもそと妖しく蠢いていたが、

「どうやら一件落着のようですな、兄貴」

まず顔をあげた白豚が、お景の腰に手をあてて、ぐるぐると「の」の字を描かせる。

「ヒ、ヒイイ……」

白い歯をむきだしにして、お景が吼えた。

それは、いままでの、どんな悲鳴よりも、
すさまじい五臓六腑を絞り出すような苦悶の
叫びであった。

「そんなに顔をゆがめて、あらねえ叫び
をあげちゃあ、せつかくの美貌が、かたなし
だぜ、お景姐御」

青蛇が、つきだされたあごに手をかけて、
「いいさまじゃあねえか。フッフッフ、痛

えのも、はじめだけさ。そのうち、ゾクゾク
するほどになろうってものさね」

なにを云われているのか、お景には、はっ
きり聞きとれなかった。

覚悟していた苦痛を、何十倍もうわまる
激しい疼痛が、ジーンと頭のとっぺんまで
つきあげてきて、さすがのお景がこのまま地
獄におちるのではなからうかと思ったほど。

それをやっと耐えて、うっすらと瞳をひら
くと、

「よく見るんだ、どうなっているか。フッ
ッフッフッ」

左右から頭を押えられて、いやもおうもな
く上体が前に屈んだ。とたん、

「イヤ、イヤ、イヤ……」

哀しい声が、ほとばしる。

チラッと視野に、とびこんできた、自分の
あまりにも惨めなありさま！

(ア、アウ！……)

お景の全身が鳥肌立った。

「フッフッフ……かわいい恰好じゃあねえ
か。まったく申し分ねえよ」

「まったくもって、喰べたいような……」

「これを肴に、いっぱいやるか。うめえだろ
うなあ、斑猿の兄貴」

鞭兵衛の前の珍味佳肴をのせた切盤台の上
から箸をとりあげた白豚は、どうやらほんと
に喰べたいらしく、箸先を伸ばそうとする。

「バ、バ、バカ野郎！ へたなまねをして傷
でもついたらどうするんでえ」

「だ、だって兄貴。あんまりうまそうなもん
で、つい……」

「つい出たって？ おめえ、冗談ぐらいは、
わかるだろう」

「もちろんでさあ。だけどつづいてみるくら
いは、いいでしょう」

「いけねえ！」

と一喝されると、

「じゃあ、兄貴。お願いだ、せめて舐めるく
らいは許してくれても」

「舐める？」

「ヘイ。悪うござんすかい」

白豚と斑猿の羞恥地獄の羅卒のようなやり
とりが、お景の耳につきささる。

(ち、ちくしょう……)

こみあげてくる痛さもさることながらこの
二人のあまりにあくどい思いつきに、お景は
もう反抗する言葉も知らなかった。

「よかろう、やってみな、白豚！」

鞭兵衛の野太い声がとんだ。

「あ、ありがとうございます！」

箸を投げすてた白豚は、やにわに両膝をついてかがみこむと、斜め上のお景の顔をふりあおぎ、

「姐さん、お、お世話になります」

奇妙な挨拶をおくったものである。

さすがの地獄の羅卒どもも、ポカンとして

見詰めるうちに、もぞりと白豚のだんだん鼻がうごめいたかと思った瞬間……

「ウ、ウツ、ウ、ウウウウ……」

稲妻にでもうたれたように、しっかりと喰いしばられていたお景の唇から呻きが洩れは

じめた。

「ウ、ウ、ウウ……な、なにをするのさ！」

や、やめなかいかい。お、おやめったら！」

もがきまわる裸身を青蛇と斑猿が、がっちり左右から押えつける。

白豚のいきはながかった。

喰いついたらでこでも離さないと、すっぽんのような執念深さで、顔をあげようともしない。

「大丈夫かな、息がとまっちゃうぜ」

斑猿がふとそう呟いたとき、やっと白豚の顔があがった。

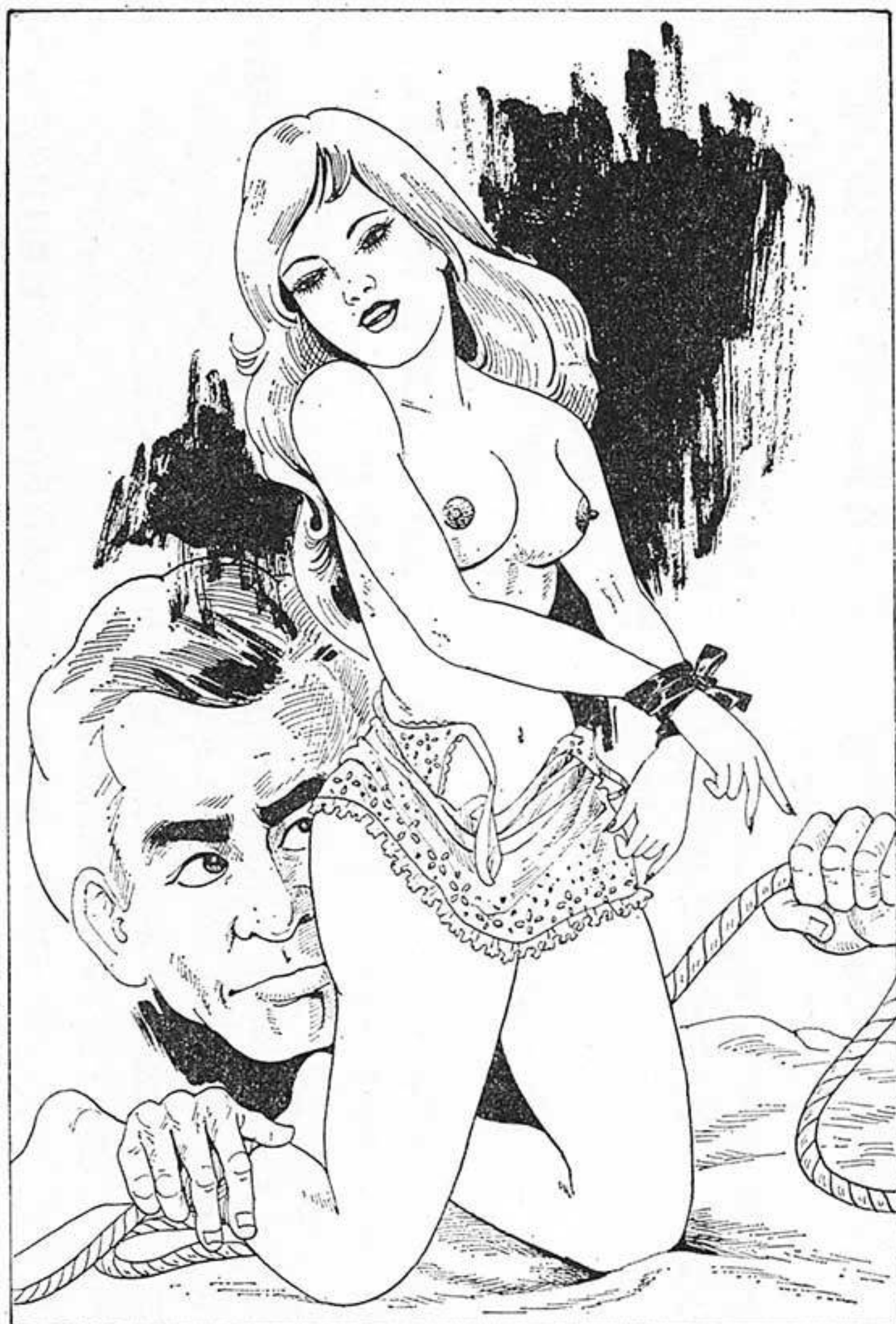
笑っているのかべそをかいているのか、ともかくも奇妙キテレツな表情をうかべたそのまるい顔は、さらにしばらくの間、呼吸ひとつしなかったが、お景の「ち、ちく生！」という歯ぎしりを合図にしたように、

「ヒ、ヒョウ……ヒャアア！」と奇声をあげると醜い唇をパクパクさせて、「う、うめえ。うめえってなんたって」

そのあまりのおおげさな身振りや言葉に青蛇が、苦虫をかみつぶしたような顔をしたが斑猿は、真顔で、

「で、どんな味がした、おい、白豚」

「そ、それがなんとも云えねえんで。兄貴も



……イメージギャラリィ……

『ある夜突然に……』

岡

たかし

自分でためしてみちゃあどうです」

「そうするか……」

そそのかされた斑猿が、ほんとにためそう
と思つたらしいのを見て、

「斑猿。あとにしなよ。白豚はともかく、お
前までがそのざまじゃあ、羅卒の鞭兵衛一家
は女に飢えてると姐御に思われねえともかぎ
らねえ。あとにしな」

と、青蛇が云う。斑猿、しぶしぶと諦めた
ように頷いたものの、未練氣にもう一度、白
豚に低い声で訊いている。

「ど、どんな味だった。えっ、白豚」

「そ、それが兄貴。菊の花の匂いなんで。そ
れも嵯峨菊の三分か四分咲きのころの、ほれ
あの、なんとも云いようのない……」

「俺のきいてるのは匂いじゃあねえ、味だ。
味のほうだ」

「だから云つたでしょ。ためしてみなくちゃ
わからねえって。けど、まあ、兄貴。まるで
蜂蜜につけた菊の花びらとでもいうような、
いや、ひよっとすると、極上の酒に浸した桜
鯛とでも……そうだ、やっぱり、菊の花と桜
鯛のさしみだあ」

興奮その極に達しているらしく白豚のいう
ことは、つじつまがあつてはいなかったが、

一端を形容するものとして当を得ているかも
知れなかった。

それはともあれ――

穴沢流綱渡り、まだ第一の結び目にさしか
かっているにすぎない。綱の長さ七、八間、
イガイガの植えてまれた木製の棒をはじめ、
お景の前途によこたわる責め具は、十数箇。
うっすらと見ひらかれたお景の瞳に、不安
と恐怖のかげが、色濃く刷かれ、一筋の真珠
のような涙が頬へと、こぼれ散って行く。

男―女―男

同じ頃――

日本橋四丁目の元禄屋の本宅では、貴子が
昭吉と和吉、二人の番頭の手で、あられもな
い痴態を演じさせられていた。

湯浴みをさせて置けという主人・元禄屋の
いいつけを、忠実すぎるほどのまめめしさ
で湯殿で実行した二人は、すみずみまで洗い
終えた貴子の清雅な裸身を座敷牢にひたて
て行ったが、さて、そのまま手を拱いてひき
さがるような野暮な真似はしない。

「御内儀さま、ゆっくりお休みになれました
か」

と、夕餉の膳を運んだのをきっかけに、か
ねての計画を実行に移し始めたのである。

その計画とは、二人がひそかに、こうもし
たい、ああして責めてみたいと、妄想を逞し
くしていたものの、ひとつであった。

それがなんであるかは、夕餉の箸もつけな
い貴子のまえに運びこまれた木馬で、大体の
想像はついた。

「こ、これをどうされますの、昭吉さん」

行灯のあかりに白い肌をうつ金色に映えさ
せながら貴子は、紅色の湯文字ひとつの裸身
をこわばらせて、なじるように云った。

いくら夫の元禄屋から命令されて自分を監
視しているとは云え、番頭の分際で、かりに
もこの家の女主人であるものを、勝手に拷問
してよいものであろうか。

「御内儀さまに乗って頂くことと存じまして」

「な、なんと云われます。主人のお許しも
なく……」

乳房を抱きしめた柔らかな腕のはずれから
紅真珠のような左乳首がこぼれる。

「お許しはあとで頂くことにして、ともかく
も、姫！」

「姫」とよびかえた昭吉の眼が妖しく光った
かと思うと、やにわに躍りかかり、

「ご、ご無体な！ なにをなされまする」

という悲鳴もなんのその、和吉と二人がかりで、縄をかけるのも痛々しいほどの双腕を背後にねじあげて、手首を重ねあわせキリキリッと縛りあげる。

「ア、アッ、お、おやめ遊ばしませ！ ほ、ほんとにおいたは許しませぬ！」

七尺近い黒髪を床に波立たせて悶えるのを縄尻をとって、たちあがらせると、

「いいか、和吉さん」

「合点、昭吉さん」

しめし合わせていただけに、二人の動作はすばやかった。

華奢な貴子の躰を抱きあげて、「よっこらしょ！」と木馬の上に追いあげる。

「キャアアッ……」

鋭い悲鳴が牢格子をくぐり抜け、黝くよんだ四周の壁にこだましたが、この木馬、尋常の木馬ではなく、背梁がとがってもいなければ、さほど高くもない。足は爪先だけではあったが床についているし、平らになっている背梁のせいで、一尺四、五寸も開いた両膝をあわせようとしてできなかった貴子がパアッと顔をあかく染めたくらいであった。

「姫……」

昭吉の青白い顔が貴子の頬に触れた。

「和吉さんと私と三人で、馬にのって楽しんでみたいとおもっておりました。やっとその夢が、いまかなえられます」

「馬、馬とおっしゃいますと……」

両手を背後で縛られていてるだけで、縄一筋かかっている貴子の大理石なめいしのような肩から胸、腹へかけて、肌がなまめかしく匂う。

「御内儀さま、ほれこれでございます。この木馬。この木馬に三人乗りをしようと思ひますのよ」

和吉が例によって女言葉になると、しなまで女をよそおって貴子をふり仰ぎ、

「お湯文字もとらせていただきますわよ。やはり邪魔でございますものね」

「だめ、だめですわ！ そ、そのようなことは許しませぬ！」

「許すも許さぬも、ほれほれ、もう……」

大店の番頭らしく細っそりした和吉の指が有無を云わせず下半身をおおっている湯文字の紐をすらりと抜きとると、「ア、アッ、おいたはおやめになって！」と貴子が腰をくねらせるよりも早く、紅色の湯文字がハラリと左右に割れた。

「観念なされませ、御内儀さま」

左右に割れても尚、豊かな腰の辺りでためらっているのをみた和吉が、「フウッ！」と息を吹きかけると、真赤な姫椿の花が花ひらくように、音もなく湯文字が八方に垂れ開いた。

「ア、アアアア……」

女は、いつも、どうしてこのようになるのだろう——湯文字を人前で剥ぎとられるのはこれが始めてではない貴子であったが、何度経験をかさねても、この瞬間に襲ってくる空虚さ、恥かしさに変わりはなかった。いや、四度が五度と、たび重なるごとに、いよいよ羞恥心が増してくるようになえ思われる。

「お、お許しになって……」

秋の夜の虫の音にも似た哀れな訴えの声をあげて、木馬の上でうつぶせようとする貴子の両手を縛った縄尻を、昭吉が、天井の滑車に括りつけて、ひきあげる。

——ギイ……ギイ……

不気味に軋む滑車の音——。

「御内儀さま。恥かしがられることは少しもございませんのよ、私たちもすぐ裸になってさしあげますから」

いいさま和吉が博多織りの角帯をとき、紺色のつむぎのきものを脱ぎ始めたから、驚き

あわてたのは貴子であった。

「な、なにをなさいますの。お、おやめになつて。もうこれ以上、貴子をお嬲りにならないで下さいませ！ ほ、ほんとに。アッ、和吉さん。ほんとにダメでございますのよ」

「なんと申されましよう、私は後から、昭吉さんが前から。三人で、ね、楽しくお遊びすることになっておりますのよ」

貴子が眼をそむけている間に、早くも輝ひとつになった和吉の裸体は、女のように色が白く骨組みも、きゃしゃであった。

一方、滑車をほどよいところでとめて、おくれじと、これにつづいた昭吉は胸毛は、さほどではないが、太腿から脛へかけての毛が深く、いかにも江戸随一の太店を、きり廻す一番番頭らしい精気が、みなぎっていた。

「姫、参りまするぞ！」

いつ何時、^{なんどき}主人が六本木の別宅から帰ってくるか、わからないだけに、昭吉の動作は素早かった。

身をひるがえして木馬に、とび乗る。

「アレッ！ ご、ご無体な！」

くらくらするほど強烈な男の体臭に、息がいまにもつまるかとおもわれ、上体がくねりあでやかに乳房が揺れる。

「フッフッフッ。姫。さあ、これから、たっぷり可愛がつてさしあげましよう」

昭吉の手は、白鳩を捉える鷹の爪のような勢いで、なめらかな乳房を襲う。

「ア、アッ、アッ。昭、昭吉さま。お、おやめ下さりませ！」

「いや、許しませぬ、姫。ほれ、こ、このように！」

蘭麝の香りを放つ貴子の肌であった。

その崇高い香りを心ゆくまでかきながら昭吉は、乳房を撫で、脇腹をさすり、紅真珠の乳首をつまみあげていく。

「昭、昭吉さん。い、いけないわ、いけませんたらッ！」

もしも両手が自由であれば、悔しまぎれに平手打ちをあげたであろう。主人の留守に許しもなく、裸になって迫ってくる番頭！

「あとで、き、きついお叱りをう、うけますことよ。昭、昭吉さん！ いまなら、まだ、許してさしあげます。どうか！ おやめになつて下さいませ！」

最後の抵抗の姿勢を毅然とした口調にこめて貴子は叫んだが、昭吉にはひびかない。

ひびかないどころではなかった。

無防備の背後で、

「御内儀さま、ぼつぼつ私も、ご一緒の木馬に乗らせていただきますことよ！」

和吉の言葉が冷水をかけるように聞こえたかとおもうと「ヒ、ヒヤアアッ……」

貴子の悲鳴が、ほとばしった。

和吉のねっとりした皮膚が、ぺったりと背肌にあいついてきたではないか！

それはまるで臼で搗きあげたばかりの餅の塊りのように、貴子の燦めく背中一面をおおいつくすかとおもわれ、そのあまりのおぞましさに貴子は、息が止まった。

「御内儀さま、お美しい御内儀さま……」

なおもうわずった声をあげて和吉が、貴子の腰のくびれに双腕を巻きつけ、顎を肩にのせて波立つ黒髪を舐めまわす。

前面をうけもつ昭吉の唇は、ずうーと、ほっそりした首頸を這い、なめらかな鼻を柔らかに噛みつづけている。

重ね餅――。

貴子をまんなかにして前から昭吉、後から和吉と、木馬にまたがった三人の姿を、行灯の光が、あかあかと照らし出す。

背後に縛られた手首の縄を、滑車につなぎとめられている貴子は、上半身をくねらせるほどの抵抗が、せいっぱいで、あとは、ど

ここに触れられ、どこを賜られようが手出しひとつできない、あわれな身である。

「昭、昭吉さん、和吉さん。ほ、ほんとにもうお、お許し下さいませ……」

哀願をこめて、貴子がせつなく訴えたが、それも、鼻孔を昭吉の舌でびったりとふさがれてしまつては、「ム、ムムム……」という呻きに変わるほかとてはない。

「よい香りでござりまするな、姫……」

柔らかなあごに手をかけ、鼻孔だけでなくよくとおった鼻筋も、大きく開いた口で、あぐりとくわえてしまった昭吉――。

「ム、ムッ……、くるしい、苦しうござりまする……」

熱い息とともに、真白い歯並みがのぞき、そのあいだで、色艶のよい舌がおどる。

「姫……姫……」

もうこうなつては、ほかにどんな言葉があるか。昭吉は「姫……姫……」と呻くように呼び、背後からは和吉が「御内儀さま」とうわづった声をあげつづける。

「ア、アッ……昭、昭吉さん。お、おいたはもう、ダメ、ダメですよ。ア、アッ」

とおく、絢爛と王朝文化の華をひらかせた平安時代以来、代々、貴族の血をうけついで

きた前右大臣菊亭政房の息女・貴子姫――

その清雅な気品にあふれる裸身を、卑しい二人の男に、いま、もてあそばされる！

「ダメ、ダメ、ダメですつたら！」

いくら訴えてもききとどけてもらえないもどかしさが、とうとうその切長な眸をきつとおしひらかせ、

「昭吉！ 和吉！ お止めなさい！ これ以上つづけられますと、許しませんぞ！」

高貴な声音を、ほとばしらせた。

貴子にしてみれば、この一言にいまわしい責苦からのがれ得るであらう、最後の希望を托したつもりであった。

しかし、次の瞬間、貴子は、

「ヒ、ヒイイ……」

と哀切な叫びを奏するほかはなかった。

焼鑊をあてられてもこれ以上、烈しく四肢を痙攣させることはあるまいと思われるほど裸身が、おののく。

背後、双臀の中程のあたり、前方は、柳の葉をたてにしたよう可憐なへそのあたり――貴子は、不気味な膚ざわり以外の蠢きを、なかば悪夢のなかでもあるかのように感じる。

「お、おやめ下さいまし……」

ついでしたがたの高貴な声音もどこへやら

朱い唇から泣きじゃくるような訴え――。

「ア、アッ、……お、お、お許しを！ アレツ、ヒ、ヒアッ……」

貴子が腰をくねらせた拍子に、いままで木馬の背と三人の臀のしたにはさまれていた真紅の湯文字がひとゆれすると、フワッと黝い床に舞い散っていったが、昭吉と和吉はなおも執念ぶかく挑みかかつていくのであった。

この二人、限度を越えることは許されてはいない。囚われの美肌を責めあげて、その羞恥の風情に酔うことまではできても、その美体によって劣情の吐け場とすることを、まだ元禄屋は厳禁していたのである。それだけに女体へのいたぶりは、ながくながつづくであらう。秋は深く、夜も長い。

恍惚とした思ひの二人の男と、間にはさまれて木馬の上で哭く高貴な美女の裸身を、牢格子から忍びこんだ月の光が照らし出したがそれはあたかも深い深い海の底で、三尾の大魚が戯れあうのにも似た美しさ――。

大江戸八百八町――

どのように愛し合う若い夫婦でも寝静まつたであろうとおもわれる夜の空を、夜鷹が鋭く一声哭くと、十三夜の月に向かって飛び立って行った。

――（つづく）――



告白

S M 恋 の 処 方 箋

瞳 耀太郎

恋の成就是準備されたあとに来る。

その夫は、他の異性によって、自分の妻が抱かれることを求める。

妻を自分以外の異性に与えたという悪魔的なスリルが、また得体の知れない焦慮となつて、彼の全身を掩い包む。

与えられた者、抱かれる者、それぞれに、異なつた快い戦慄が背筋を走り、快感は、ある時は風のように柔らかく、ある時は怒濤にも似て猛り立つ。

SとMとの華麗なプレイを通して、男と女

が心を交わし、情を通じ合つて一体となり、そのサドとマゾの美味に、ひたる。

心が解かれて、すべてが取り除かれた時、そこには、男と女の切なくも美しい営みが行なわれ、壮麗な契りが交わされる。

彼の肉体の逞しい部分が、彼女の肉体の隠微な奥庭に迎え入れられた時、彼女は声をあげて喜びの、うねりを放つ。

彼もまた彼女の手厚いもてなしに応えて、濃度の高い熱い滋液を贈って、その恋の始まりに祝福を与える。

それが真の恋というものだ。

これは、私と妻とが、二人で描いた恋のSM処方箋である。これは、SMに関心のあるあなたにも用いてもらいたい処方箋だ。

処方箋(その一)

夫たるもの、先ず彼女を入浴させて、入念に全身を磨きたて、肢体のすべての部分の洗礼をすませておく。

ノーパンティ、ノーブラジャーは厳守すること。妻の提供を受ける男性は、彼女の夫君を通じて、事前に真紅の腰巻一枚を贈っておく。

妻たるもの、木綿浴衣一枚となり、紐合わせとして腰紐は使わない。

髪形を整えさせ、足指、手指に対して、燃えるような紅色の彩色を施しておく。

処方箋(その二)

デルタに対する手入れは、提供者である夫に於いて行なう。

それは提供を受ける者に対して、不調法が

あつてはならないからである。

美丘の上の灌木や雑草は一切取り除いて、プレイの支障となる様なものは、当然、止め置かれてはならないし、繁茂した雑草が、丘や谷にあるということは非礼といえる。

唇は可能であれば、朱色か鮮紅色に染色して、更に美観を添えるを好しとする。それは口紅よりも食紅などによって染め上げた方がプレイの為に接触しても退色しないという利点がある。

乳頭、菊座の手入れも、これにならって入念に化粧させておく必要がある。その他、肉体の手入れは十分にしておきたい。

処方箋(その三)

男と女が、お互いがお互いを理解して、接見の儀式がすんだ後は、当日の招待客(つまり夫以外の男性)の手によって、妻の浴衣は脱がされ、腰巻の紐がとかれる。

夫は、その神聖な脱衣の式典に立会い、そのスムーズな進行に対して助言を与え、且、監視するものとする。

夫以外の男性の手に依って、その腰紐を解かせるということは、取りも直さず、妻自身が、その心身のすべてを委ねて開放されることの喜びを意志表示するに外ならない。

妻は、この脱衣の儀式に依って、生まれたままの肉体を捧げて、天衣無縫にSMプレイを行なうという宣誓を、言葉に代えて、その心の真実を示すわけである。

彼女は進行に当たって、テーブル又はサイドテーブルの上に全裸となって仰臥し、肉体のすべてが、一望にしてよく観察できる様に大きく開股し、縄又はベルトで固定される。こうして、女体の美は、惜しみなく開陳されなければならない。

可能な限り、車付き台車、ワゴン等のサイドテーブルを使用し、提供者たる夫は、そのパートナーが、台上の妻女を歓喜して桃源の境に彷徨する様に導くため、任意の場所へ移動出来る様にする。

このサイドワゴン等については、車止め装置のあるものが望ましく、その高さは六〇糎以上、巾七五糎、長さ一〇〇糎のものを準備

する。また台上の女体は、台込み薄布にて覆われる準備がなされておく。

処方箋(その四)

彼女は夫によりプレイ交歓を主体として他の男性の手に委ねられたものであるが、一定の時間帯を区切って、パートナーに手渡された場合、その肉体と心とは、その間は、その男性に貸し与えられ、また寄贈されたものであるから、肉体とそれに附随する構造物、醸成された液汁、果汁、製作品は、一切その異性の所有物となる。

肉体の受領者は、誠意を以て彼女に愛育を加え、愛撫、愛号、愛泣、愛吸をさせ、催淫の情を養い、肉体演奏を施すものとしなければならない。

何れがSとMとにかかわらず、求めるものは惜しみなく与え、持てるものは分かち合いその情を遂げさせなくてはいけない。

肉体の艶姿を記録し、肉体を画筆としてベッドの上に於いて或は他の肉体の上に於いて彼と彼女の交りを深くしなければならぬ。





彼女はマゾ或はサドに徹し、与えられるものは、総べて受入れることが肝要である。

処方箋(その五)

彼女はパートナーとなる男性を選択することはできない。

夫の希望を満たしパートナーの欲求を満たす為に、上口、頸、胸、乳房、乳頭、腹部、尿道口、膣、肛門の、すべての性感帯の器管を無条件で、その使用の自由を認める。

催淫の情をもよおして、パートナーの肉体と結び、契りがなされ、オルガズムを通して情を深め、愛号、愛泣することは、一つの過程として、これを許される。SMのパートナーに年令の区別は問題ではない。

のたうつ愛の号泣は、サディズムを刺戟して、その快感に伴う陶醉を誘うものであると共に、マゾヒズムにある者にとっても、また悦びに通じるからでもある。SMエロチシズムは、セックスと表裏の関係をもつものであり、その努力は称揚されてもよい。

処方箋(その六)

パートナーの彼は、深い愛情を以て、彼女の肉体を、開股椅子縛り羞恥責め、羽毛責め晒し責めの外、浣腸責めも行なう。

アヌスに対する浣腸責めは、そのアヌスに對して、次の飲料を吸飲、又は鯨飲させるものとする。

石鹼水、グリセリン溶液、ビール……を飲料水として採用する。

人間花瓶、又は人肌燭台とならせることを承諾させる。

年令の老若、容貌、肉体の美醜にかかわらず、提供を受けたる精露は、その要望に添い自己の肉体の内部の美しき袋に収めなければならぬ。

彼の行為は、容色を完全に保ち、感情の緊密なる連繫を求め、愛情の深さを示すものとして許容されるものである。

処方箋(その七)

SMプレイ中に於いて、或はプレイの終了

後に、全裸の彼女を中央に置き、川田、鬼源方式による八結びの固め式Vを行ない、中国の古式よろしく、彼女の肉体は媒体となり、盃に供され、愛露交歓を得て、友愛の情が礎かれたものとする。

場合によっては交換プレイを実行する。

SMプレイの媒体は、その女体による外、適当な提案によって進行を計る。この時の彼女は肉盃になり切らねばならない。

処方箋(その八)

SMプレイの契約によって、その夜のプレイメイトとなった場合の彼女の肉体は、その受領者に進んで寄贈されたものであるから、本来のパートナーであっても、自己の意志によつて、中断させることは出来ない。

一時の夫婦となった当日のプレイの男女の主賓は、パートナーが希望するときは、勿論のこと、プレイ進行の情景を具に開示して、プレイに全身全霊を以て陶醉していることをあらわにしなければならない。

プレイの主賓こそが、当夜の夫婦又は愛人

であることを、如実に示すことが、唯一の誠意であることを忘れない様に覚えておく。

カメラ及びテープレコーダーを通じて、情熱のSMプレイを記録しておき、その技能の向上を計ってゆく。

処方箋(その九)

その夫は、恋人である妻の肉体が、SMプレイの祭壇に捧げられた場合、女体の讃仰者である複数以上のプレイメイトに依って、プレイが実行されることを、女体が許容したときは、これも承認されたる行為として、寛容を示さなくてはならない。肉体を傷つけないプレイは、そのフォームについて介入してはならない。むしろ、その女体を悦楽の桃源境へ導くもの、又は喜んで彼女に奉仕しているものと理解して、共に悦び合う必要がある。

複数以上の愛奴に依って奉仕され、又は奉仕する時も、正常なるSMプレイと理解することが肝要である。その女体提供者が、それを望んでいるのを遮ってはならない。

妻の頭部、顔面全体、頸、胸部、腹部、下

腹部、手足等、女体全面に亘る愛撫訓育が行なわれるも、これは器官各部の機能向上をめざすものとして、愛奴飼育の一環をなす。

処方箋(その十)

SMプレイを通じて愛奴となり、或は高い能力を備えられるに至るときも、夫以外の異性と愛欲を共にすることを、彼女は喜ばなければいけない。

愛する者の幸福を希う夫に依って、心身の限りを尽して、愛の営みに渾身の努力を傾け異性に親しく接し苦楽を分かち合うのは、爽快なる心身の美と健康を招くものなり。

自らの催淫の情を高めることも、それが女性としては究極の美につながることを思い、恥技、恥態、狂態、嬌態、痴戯は、SMプレイでも最高の愛技と見てよいと思う。

異性に対しては、痴戯、痴態の限りをつくして応え、年令美醜に関係なく、老いにも若きにも、愛のSMプレイを行ない、肉体を愛撫せしめ、肉体の提供をなすのは、性母(聖母)ともいうべく香り高き神聖なるSMプレイの行為である。

女体が聖なる愛の権化となり、異性を我が肉体に抱きとるのは、至純の美にして、女の純情の発露と解されるのである。

附属処方箋

契約妻となり、又は愛の聖母(性母)となった女体が、聖水(精水)を分かち与える促進の法として、適量のビールを、彼女は嚥下しなければならぬ。

これは聖母の聖水拝受の希望者に、急速に多量の醸造が可能になるばかりか、心のわだかまりや、しこりを解き放つのに役立つ。

聖水は直接、口づけに依り供与することが親しみを増す措置である。つとめて異性に対しては、プレイ成立のときの接吻は、ボディ乳房、V、Aに行なってもらう様にして、発声をとぎさない様につとめる。忘我の号泣、すすり泣きは、つとめて行なう様に心掛け、異性との情を細やかに通じ易くする。愛の契りはSMプレイ後を拘束してはいけなし、プレイ後は他人にならなければならない。





カット・宮城 昌子

美しき姉妹

勝ち誇ったようにギラギラと目を輝かせた五郎は、後手縛りの美津子を部屋の中に蹴りこんだ。

続いた清次は、下からせしめてきた寿司の桶や一斗ビンをかかえている。

「やれやれ、奥座敷のほうは大へんなさわぎようだぜ。こちとらも一つ、酒池肉林とゆこ

うじゃねえか」

階下が、そんなぐあいなので、美津子を、こっそりと、しょっ引いてくるのも案外、簡単だったようだ。

三郎もケロリとした顔で、

「美津子もまったく悪くないじゃないか」と舌なめずりするように、しげしげと眺めまわすのである。

美津子の裸身は、若々しい青春の気がみなぎり、ぐんぐん開きつつある健康なお色気が

連載・S大河小説

パ
ロ
デ
イ

花

と

蛇

(15)

山
光

純

むうんと匂ってくるようである。静子夫人のような熟れきった甘ずっぱさはないが、触れればピンと指先を、はじき返すばかりの弾力がありそうだ。思春期の乙女のみがもつ、もつとも麗わしい特権を美津子は、その全身にあふれさせていた。

ねっとりとした長い髪の毛は肩先にまで垂れ、唯一の装いであるヘア・バンドで、まとめられている。その紺色のヘア・バンドは、彼女の着ていたセーラー服を切りとったもの

である。

最近の娘は変わり身が早いことだから一糸もあたえず絶えず人目にさらしておけば、長い間に全裸でいることに慣れてしまうことだって想像される。それでは、ういういしい8ミリ映画を撮ることはできないから、常に女子高校生時代の思い出のよすがを身につけておくのがいい。セーラー服の一ひらは、彼女に清純な追想をあたえつつける一方、調教をうける際にも常に羞恥にもだえる見えないムチの役目を果たすことになった。

姉の、身を捨てた庇護のおかげと、桂子が三下共の間でタライ廻しにされたため、幸運にも美津子は津波のような被虐の洗礼は受けていない。

姉に似て、プロポーションは満点で、特に両脚はスラリとのびている。肌はごく白く、キメが細かい。乳房は腕をふせたようなまん丸いかたちで、小さいうす桃いろの乳首がポツンと頂上にある。実際に抱くとき、ゆっくりと揉みこんでゆくと、その隆起は見たところより、はるかに、たわわな量感のあるのに、誰しも意外な感に打たれるのである。

姉に会わせてもらえるときいておとなしく二人のチンピラに従ってきた彼女は、さすが

に頬をこわばらせ放埒に荒れた部屋の中をみまわし

「五郎さん、お姉さんはどこにいるの……」

と、か細い声をだすのだ。

「へへへ……京子の奴、どこへゆきやがったんだろう。お前に会わせてくれて泣いて頼んでいたくせに勝手な女だぜ。もし、お前をここへ連れてきたことがバレると、組の兄貴衆から大目玉を食らうかも知れねえオレの事も少しは考えてもらいてえものだ」

と口から出まかせで、はぐらかすのだが、五郎は、もう目をランランと輝かせ、ウミをもった、にきびを一層、赤くさせている。美津子と同年の彼は、何といっても同世代がいのだろう。

十八才という若さで、充分な休養がとれていいるからには、辱かしめをうける女のことなど、まるで考えにもいれず、ただカッと、のぼせあがってしまったという様子だ。

久し振りに姉に会える嬉しさに頬を紅潮させ、前後も考えなかった美津子であったが、この部屋の淫蕩な空気を悟ったらしく、

「おねえさんに会わせて。お願い……」

と大きい声で重ねて催促するのだ。

に、かくすこともならない胸乳を指で、つついたり、綺麗にされている腋の下あたりに掌を、さしこんだり、しはじめ。

その五郎の、一たん火がつけば強暴になる性質を知っている三郎が、はぐらかそうとして美津子を、からかう。

「いやあ、せっかくのご対面だと喜んでいお前に、こんなことをいうのは、あまり気が進まねえんだが、実は京子は、森田組の兄たちの怒りを買っちゃってな。お前も聞いてるだろうが、京子は進んでエロ撮影にも協力しねえし、客人をもてなすのも嫌だと、ぬかしやがる。まあ、そのせいで、ろくに旨いものも食わせて貰えない有様だね。まあ俺たちが陰になり日なたになりしてかばってやってるんだが、他の女の手前もあるし……そこで今日も、泣くようにして俺にすがりつき、どうか皆に内証で、すこしでもいいから稼がしてくれというわけだな……ふふふ……まあ、妹の前で何だが、今、あっちで売春をやっている最中なんだ。せめてすこしでも、俺たちに日頃のお礼をしたいんだってよ。いや、いい姉貴じゃねえか」

「ウ、ウソですわ！ お姉さんが、お金が欲しくて身を売るなんて！ そ、そんなことは

絶対にありません。ねえ、三郎さん、お願いですから本当のことを教えてちょうだい」

「いいや、お前が直接、京子に尋ねてみりゃいいんだ。考えてもみな、女にとって貞操は命の次に大事なものだぜ。いくらひどい目にあったって、身を売るなんて最低だ」

深々とさしうつむいてしまふ美津子に、もっと酷いイタズラをしかけようとする五郎を引きずるようにして離し、車座をつくって冷酒をやり寿司をつまみ始める三兄弟である。

特に五郎は、すばらしい早さで寿司をつまみ、ぐいぐいと茶碗酒を呷る。

味も何も、かまっちゃいない、まるでヤケクソのような食いつぶりである。

食いながらジロジロと無遠慮な目付きで美津子の全裸を、ながめまわす。

見れば見るほど一責めしたくなる体つきである。細っそりした撫で肩には脂が乗っており、ケシつぶのように小さい乳首は、生意気にもツンと上を向いている。

京子もそうだが、こうして肉体を觀賞される時、女どもは、きまってぴったりと太腿をつけ正座する習性をもっている。もっとも恥かしい部分を秘匿するには、そんなポーズしかないのかも知れない。

後手に縛ってあるから、他の部分は隠しようがない。白い胸も、スベスベの下腹部の辺

も△どうぞ、ごゆっくりご覧になって……▽という具合だ。それにしても女の尻って、どうして、こうデカく出来ているのだろうか。

「三郎兄貴。京子の野郎、いやに長いじゃないか。ちっと、のぞいてくるぜ」

「まあ落着けったら！ もう出てくるさ」清次と三郎は、なおも寿司を食いつづける。

うるし塗りの寿司桶の中は乱暴にかきまわされているが、バランの青さとマグロの赤味が鮮かな色合いで食欲をそそる。イカの種は青白く、ノリ巻きは、いい香りがする。

「こりゃ、旨いぜ」三郎は、唇をつぼめて茶碗酒をすすり、「ああ、腹にしみるな」

シャワールームから化粧室につづいているダイヤガラスに法界の坊主頭が映った。

押さえくぐもったような女の声がきこえたが、坊主頭は変にモタモタし、なかなか、現われない。思わず緊張しかける三兄弟の前にとうとう二人が姿を見せたとき、期せず大笑いが、わいたのだ。

法界は、奇抜な恰好で京子を伴っていた。

「はは……こりゃ、面白いぜ！」

と調子者の三郎が、すかさず、へつらう。

あれだけの誇りを保ちつづけ、時には驕慢とも思える態度をとった京子が、なんと、四つん這いで、その背に、ズシリと重い法界を乗せて、のろろと苦しそうに現われたのである。

すっかり上気した全裸。拭われきっていない水気と、恥辱の汗が、おどろに乱れた黒髪を首筋や頬に張りつかせている。

つんつる坊主の法界は得意満面である。

大騒動をやった猿轡はそのまま、柔らかい首筋に、手綱に見たてた赤いシゴキを巻きつけられている。

京子は苦しげにバンと張った尻をモクモクとゆすり、法界の体重に耐えて這うのだ。とても、美津子がいることに気がつく余裕はない。

法界は器用にバランスをとり、両脚で女の胴を、しっかりと巻きしめているのだった。そうした痴戯の中に、ほんの短い時間だったとはいえ、彼女が男から受けた責苦のほどがしのばれる。

奇妙な人馬が、ようやくのことで男たちの近くまで来たとき、

「アハハ……」

と、こらえかねた三郎が、腹を押えてその場に、ひっくり返ってしまった。

つられた二人の苦笑いも、メス馬の様子があまりにリアルなので同じ哄笑の合唱となってしまう。

手綱とハミだけではない。白い牝馬は、巨大な臀部の双丘から、尻尾にみたてた太い筆をピンと突き出していたからである。

三兄弟は肉の享樂をできる限り盛り上げるため、様々な小道具を持ちこんでいたが、先端をボサボサにした大筆も、もちろん、その中に含まれていた。

天性の狡猾さで、海坊主は買った女を徹底的に楽しもうと、それを抜かりなく利用したのだ。

筆の尻尾を用いられるとき、物言えぬ京子は、どのような恥辱に悶えたことだろう。

有頂天の法界は、三兄弟のすぐそばまでくると、息を切らせている牝馬の片尻をピシヤピシヤと叩き、ご丁寧にも、ぐるりと一回転するように命じるのだ。

ヌルリとした見るだけでヘドの出そうな体付きの無毛症の乗手は、腰にタオルを巻いているだけだ。

しとど流れる汗も拭えない白馬は心の葛藤

をふりきるように、まず右手を床に滑らせて位置をきめ、それから左手を並べる。つづいて右膝を動かし、最後に左膝をずらして少し位置をかえる……といった具合に懸命の努力をしながら、乗手の命令に従うのだ。

その間にも法界は、
「何をモタモタしてるんだ。さあ、早く一回りしな。そうでないと牛のように乳を絞ってやるぞ」

などといいながら、我ながらその思いつきにニヤリとしつつ腰をずらし、上体をかがめてゆき、猿臂をのばすのだ。

必死の努力をしている京子を乳牛に見たてるのは、あまりにも酷な仕打ちだが、そういえば下に向かって突き出した九〇センチのバストは、ホルスタイン種のそれに見えなくもない。

見られていることを充分に計算している法界は、ぐらつかないようにもう一度、胴を両脚で巻きしめ直し、一気に両側から掌で乳房を包みこむのだ。

これ迄も何度も男たちの手で散々に弄ばれてきた胸乳である。

三兄弟と言わず誰しものが、劣情にみちて京子の肉体で鬱さ晴らしをやる時の手順には

きまったパターンがある。——まず抵抗を警戒して縛りあげる。続いて、満ち張った乳房を揉んで、たっぷりとその得もいわれぬ感觸を楽しむのである。京子のバストは、他の女にはない男心をそそるコケツトリーを秘めているらしい。

今の法界も、そうである。まず、一わたりツルツルと表面を撫でまわしたのち、人差指と中指の間に乳首をはさみ、やがてムチムチと、やりはじめた。

まるでモチをこねる時のようにゆるやかに揉む。

肩で大きく息をつく京子は、ちょうど尻の正面をチンピラ兄弟たちの方に向ける。

又しても歓声があがる。

屈辱の尻尾がブルブル慄えている有様と、力をこめて踏んばっている、開いた膝の生々しい対照が、ゾクっとくる程、蠱惑にみちているからだった。

翻弄に耐える白馬の艶臀は、かくしようもない非情さに泣いていた。

男どもは、もはや寿司どころではない。

法界は、そこでついに名残り惜しげに京子の背から降りた。

「おっとっと……しばらくそのままいな。」

……イメージギャラリー……『湖畔のスナップ』……小川茂正……



皆んなにようく見ていただくんだ。結構だぜ
全く。お前は何をさせてもいい女だな……」
根限りの力を出した京子は、もうすっかり
気力も失せて、バタリとその場に腹這いにな
ってしまふ。

その時だった。

虐げられる姉の姿をとうてい正視できず、

ただ顔をそらして必死に歯をくいしばってい
た美津子が、たまぎるような声で、

「お姉さん！」

と一言、叫んだのだ。

「……む、むむ……」

同時に、縄尻をしっかりと押えられている
ため、走り寄ることもできない美しい姉嬢は

無限の非痛さと慈しみのこもった視線を、妹
の方に向けた。

京子の萎えきっていた瞳に、みるみる、あ
の鳥のように強い光が戻ってきた。

厚く口を蔽っている布切れのため、声を出
すことはできないが、首に巻かれたシゴキを
振りきって、今にも飛びかかってくるのでは
ないかと、男たちも気色ばむ様子である。

「久し振りのご対面をさせてやっているんだ
ぜ。お礼に頭くらい下げたらどうだ」

と、三郎が頭ごなしに、どなりつける。

ただ今の姉の無残としかいいようのない姿
に、すっかり動転している美津子は、はじか
れたように、すぐさま三郎に頭をさげ、

「すみません……どうか、お姉さんを許して
あげて……」

と、か細く言って、しゃくり上げる。

続いて、清次、五郎の順に深く頭を垂れ、
最後に法界を見あげる。姉をあのような目に
合わせた恨みの表情があったが、これにも素
直に伏し目で詫びを入れる美津子である。

「やいやい京子、お前はどんなんだ」

酒が入って突っかかる五郎を押えながら、
清次が、

「まあ、いいじゃねえか。妹のことなんか、

どう転んだっていいのよ。元々はといえば、皆んなお前のせいなんだぜ。俺たちのツラに泥を塗りやがって、その挙句、すっかり謝まるなんぞとぬかしやがったくせに。こっちが慈悲を見せると、すぐこうだ。じゃ、一度だけ聞くんが、姉妹二人して落花無残というヤツでいいんだな？」

目も眩むほどの憤りに捉えられ、クラクラと気が遠くなりかける京子の耳に、最愛の美津子の悲しげな叫びが届く。

「お姉さんが、かわいそう……どうか、どうか、お姉さんをいじめないで……」

可哀そうな美津っちゃん！——京子は、全身を憎悪でたぎらせながら、火のように燃えた。

今なら斗うことができるワ。疲れきって鉛のように重い体だけれど、もうガマンなんてできない。さあ、京子……今なら両手も両足も自由よ。後のことなんて、もう、どうなったっていい——いずれにしても、あたしは死んだのと同じ。美津っちゃんを、あたしと同じにしないために、あたしは……

京子の目は燃えた。彼女は砕けるばかりに奥歯をかんだ。ききとれない絶叫を喉の奥で爆発させた——

「な、なんでえ……その態度は」と、勝ち誇っていた清次は、我にもあらず尻をついたまま、反射的に、ついずると後にさがる。

どんな責苦を受けても、心の底から男どもの前にひれ伏す性奴隷そのものになり切れない鉄火娘は、黒目勝ちの双眸に憎しみの色を浮かべて、つい一足、膝をすすめてしまう。

猿轡の布で一層、強調されている瞳はキラキラと光り、妖しくも凄艶だった。

世間の常識を完全なまでに踏みにじった残忍な仕打ちを身体一杯に受けながら、その死に勝る恥辱を我慢したのも、すべて美津子はこの責め場に連れてこさせまいとする為だった。その返事がこれだと思うと、京子は悲しみに身も引き裂かれそうだった。

だが一方、昨夜以来、続けられてきた色責めのつらさは、今もまだ軀を重くしている。すぐ目の前にいる加虐者に、恨みの拳を振りあげられないのも、あながち無理もないことである。京子らしくもない思い切りの悪さを一併、誰が責められよう。

残るチンピラ共が、その一瞬のためらいをつくのは造作もなかった。

五郎が背後から羽がい絞めにして、押さえ

こむ。面白半分の法界も、折り重なるようにのしかかる。

「……ぐっ……うぐっ……」

しばらく翼を押えられた鳥のように四肢をバタバタさせた京子の抵抗は、次第に弱いものになってゆくのも、やむを得ない。

彼女は憤りと悲愁のあまり、一瞬、我を失ってしまったことに気づき、ふうっと気が遠くなるのを感じたのだ……

それから十分たったのか、二十分たったのか、よく分からない。京子は、ビシヨビシヨに濡れたタオルで、あお向けの胸や下腹部を拭かれるのを感じて気をとり戻した。

一糸もまとわれない曲線は陶磁器のように白く、明かるい照明の下でテラテラと光っている。

すぐ目の前に大口径のカメラがあり、シャッターが、しきりに切られていた。猥褻とか、いいようなないポーズであった。

京子は身を起こして、美津子の姿を捜す。可哀そうな妹は、パンツ一丁の清次の膝に抱え上げられコップ酒の酌を強いられているところであった。

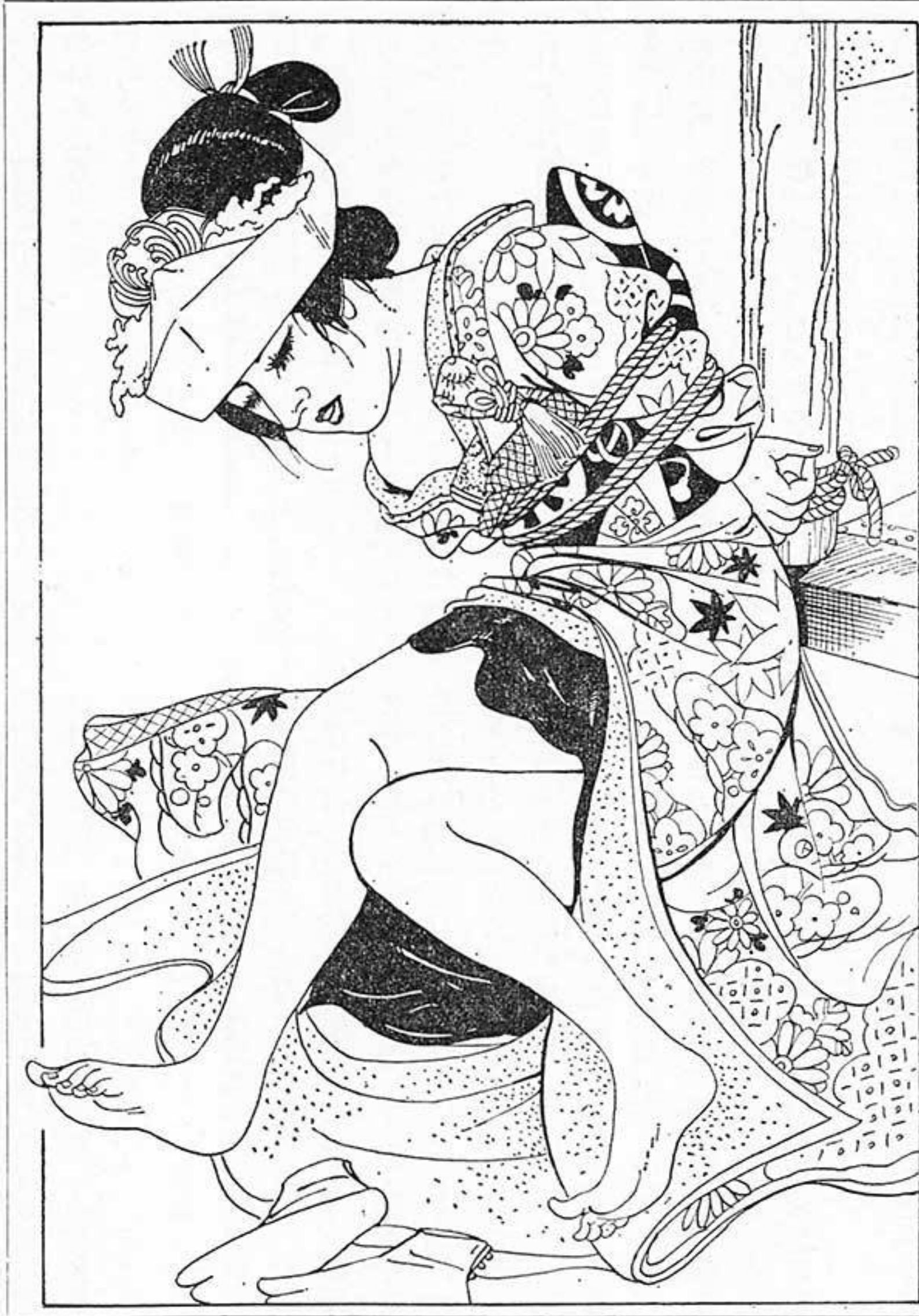
清次は、ニタリと凄んだ目付きをし、起き上がった京子に顎を、しゃくる。

イメージギャラリー

『M女からM妻へ』

岡

たかし



「京子、どんなに反抗したって、もうどうに

うぜ」

清次は、思わず本音を吐いてしまった。

巷に、うじゃうじゃいるスケ番共——葉桜

組のズベ公たちもそうだが——もセリフだけ

は一人前の事をいっているが、ちょっと絞め

上げれば、たあいなく音を上げるのが、落ち
なのだ。まず、これほどの仇っぽさと根性を
もった女渡世人がいるとすれば、この世界で
かくれもない名声をほしいままにすることに
まちがいはない。口惜しいことに清次の見聞
では博徒の世界に、このように抜群の魅力を
もった女渡世人は、あり得ようはずもなかつ
た。

それを考えると清次は、より一層、残忍な
気持を募らせ、美津子を小抱きにしたまま、
京子の髪を乱暴に掴み、ぐいと引きよせる。
「だが、手前なんか俺たちに掛かっちゃ、犬
コロの値打ちもありやしないことが、これで
分かったらう？」

哀れな美貌の裸女は清次の勝ち誇った猛々
しい視線を、もうとても受けきれず、弱々し
く、うなずくのだった。

「ようし、猿轡だけは許してやろう。さあ、
両手を縛ってもらいな」

唾液と汗と涙で、ベトベトに濡れた布切れ
を、ようやく取り出すことを許されると、如
何に気丈な京子も、もう二度と反抗する気力
も失せ、進退きわまったまま、顔を床にがっ
くりと落とすばかりである。

泣いているのかと思えば、そうではなかつ

た。快活な、ある時は男を男とも思わなかった彼女が、聞きとれないような慄え声で、

「美津っちゃんのかわりに、あたしを虐めて……気のすむように……どんなことだって、イヤだなんて、もういいませんから……」

疲れた身体を無理にふるいたたせている京子のけなげな横顔をじっと見つめ続けると、三郎にも、清次と同じ気持がわいてきたらしく、

「それにしても、いい女になりやがったな」

と、感に耐えないようにいう。

まるで極くうすいベールをかむったようにおぼろに霞んでみえる京子の肉体は、一きわ美しい。その上、男たちには、たっぷりと趣向をこらして、牝の奉仕をさせた先程の生々しい記憶があるため、その肌色は、こよなく淫らにも見える。△ざまあ見やがれ——▽と彼は思うのである。

世のスネ者といつては聞こえはいいが、この兄弟たちなど、金も力も頭脳も持たない、いってみればクズのような存在である。まともな就職はもとよりできこなく、同じ弱い手合い同志が精一杯肩肘を張って、せいぜい屋台を引っ張るか、酔っぱらいの懷中をねらうか、くらいの事しか出来ない。男の世界は

本質的に斗争の世界であり、弱者は道ばたに掃き棄てられるクズである。

だが、何ということだろう。世の中には、このようなクズが、存分にふるまうことのできるチャンスもあるのである。

清次たち兄弟は、この千載一遇のチャンスにめぐりあった。二度と転がりこんで来そうもないこの裸女を、そう簡単に手放してしまふ訳にはいかなないのである。

「おい、京子。もっとシャンとしろ。まるでぶん殴られた、牝ブタみたいだぜ。ウフフフ……妹にゆっくり話をさせてやるから、オレにお礼をいうんだな」

三郎が、ニタニタ笑いながらいだしたのを聞くと、京子は乱れた髪をハッとゆすって丸顔の美貌を苦しげに歪めるのだ。

「美津子がこの部屋に入ってきた時、すぐにも姉に会わせてくれとせがまれて、オレは大弱りだったんだが——あの時、お前は何をしていたんだっけ。とても俺の口ではいえないから、お前が妹に説明してやんな」

「え、ええ。京子……法界さんが……あのとき、あたしのカラダを買うと、おっしゃったので……それで、三郎さんのお許しをいただいて、あたしを、買ってもらったの……」

チンピラ共は津々たる興味につつまれて、一糸まとわぬ姉妹の対面を交互にみつめる。

兄貴の特権をもって、清次はあぐらをかいた膝の上に美津子を抱きあげ、嘲るような大口をあけているのだ。

すっかり動転し、紙のように白い顔付きの美津子では、とうてい、この対話の面白さがでないので、三郎がおどけて、

「でもお姉チャン、ミツコまだウブなので、お姉チャンのいつていることが、よくわかりません。もっと、くわしく説明して下さい」

「お、男の人が女の人を買うと、女の方はお金でその人のものになったのだから、何をされても、仕方が、ないの……姉さんも、ほ、法界さんの、おっしゃる通りに……」

「ほほう。すると、売春をやったというわけだ。今は、法律で嚴重に禁止されていることを、まんざら知らない訳でもないはずだが」

「だ、だって、三郎さん、あなたが、そうしろと……いいえ、京子も法界さんのお望みをかなえて、あげたかったの……」

清次は、後ろ抱きにした美津子の両腋にツブリと腕をさしこみ、胸の隆起の上で交叉させる。そして野太い声で、

「それで？　いくらで、その何ともいえない

カラダを、見ず知らずの男に売ったんだ？」

「……」

ここまでくると、急激に両頬に血をのぼらせ、狼狽と羞恥のあまり言葉も出ない京子であつた。

「妹に、お前の肉体がどの位の値段がつくのか、はっきり教えてやんな。もしかしたら、美津子もどんな拍子で、同じように稼がなくちゃならねえことだつてあるかも知れねえからな。ひひひ……」

「五、五千えん……だったワ……」

「お、お姉さん……」

「ええ？　いくらだつて？　美津子が、わめ

くんで、きこえねえよ」

「五千円でしたわ……ショート・タイムで」

こらえきれない恥辱の涙が、明眸から一筋流れた。小麦色に充ち張った肩が目に見えてフルフルと震えている。

「聞いたか、美津子。お前の姉は、たったそれっぽっちの稼ぎしかできねえんだぜ。見ねえ、素っ裸の身体を張ってだぜ。近頃じゃ、ちよいとした手内職でも、それくらいの小遣いは取れるというのによ。チエツ、値打ちのねえパン助だ。おい美津子、これで俺たちがウソなんかついてねえことがわかったろう」

暴れられないよう、万力のように急所の乳房を押えられている美津子は、ただ、

「ああ。お、おねえさん……おかわいそうなお姉さん……」

と呻くばかりだ。

「ついでに聞くが、京子。姉じゃなくて同性として、美津子に客を取らせれば、どのくらいゼニになると思うか、いってみな」

それこそ、京子がもっとも恐れていた話題であつたろう。生酔いで目のすわってきた清次の追求に、もう一切の抵抗はムダだと感じさせられているが、それでも尚、京子は妹を救うのだと決心していた。

「ま、まって！　美津っちゃんは違うのよ。

あたしは、こんなになつてしまつたけれど、ダメですわ、美津子にはそんな羞かしいことは、できないのよ。ねえ、清次さん、三郎さん……お願い。ネ、ネ」

と必死の媚を全身に浮かべて、チンピラの気まぐれに取りすがろうとするのだ。

「もう沢山だぜ。ゼニにもならないわりに、あれもイヤ、これもイヤと口数ばかり多いんだから。俺たちは、もう手前の泣きごとなんて、ききたくもねえんだ。お喋りはやめて、ズバリ感度で示してもらおうじゃねえか。ク

ネクネするだけが取柄でもあるめえ」

あげくの果てに法界が提案した事は、京子を、ただオロオロとさせたのだ。

彼はシャワールームの湯元のなかで、京子が示した夥しい惑乱に、いまだに痺れたまま、あげくは、うっとり、その豊満そのもののヌードを眺めては吐息をついていた。

気に入った女の思い出のよすがとして、女の身につけるものを貰いうけるなり、盗むなりするのは一種の稚気である。もとより彼はそんなお上品なことではなく、得べくんば京子のヘアを、と思つたのだが、この兄弟たちの様子では、ヘアが揃うのは百年河清を待つに等しいではないか。

京子の得もいわれぬ、クネクネとうねった肉体と、あの激しい応え方。それに自らどうしようもなく憤りを爆発させてしまひ結局、その癪癪の故により一層の責めを受けなくてはならない惨めさを見ると、彼はゾクゾクした。いや、その他に、彼がもっと気に入ったのは、今の京子の体が、無毛の彼の肉体的特徴と、ぴたりと一致したことである。

何が何でも、法界はそのスベスベの記念が欲しくなつた。森田組に飼われているこの女

を、そうしばしば責め虐むことは組員でもない彼には、できないことであろう。

あの、じゃまもののない絶好の面影が欲しい。それには、口紅を塗り、それを柔らかい紙に写しとる――

彼は、その企みを思いつくと、言葉が上わずのを、どうしようもなかった。

「よくアメリカ女優がやるじゃねえか。サインブックにキスマークを押しつけるやつ。色のねえところでは、相撲取りの手型よ。いや、京子のは唇じゃねえぞ、まして手なんかじゃねえ。ヒッヒヒヒ……。わかるだろう？ こいつはポルノ女優にだって出来ねえ芸当だろうぜ」

チンピラ兄弟たちは、思わず吹きだしてしまいながら、手を打つ。

酒の酔いも手伝って「その横に、水茎の跡

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早いに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。
略号『花』 定価五〇〇円(送共)

も麗わしい字で、俺たちへの思いのたけを込めたラブレターを書かせようや。『いつだって、あなたのよろしい時に、お待ちしてますわ。京子』――なんてのは、どうだ」

「実演写真に添えて売りだしてみろ。羽根が生えて飛ぶように売れるにちがいないぜ」

「姉と妹の二人分を、ならべることだな」

「少しばかりシミのついてるのを喜ぶ奴も多いはずだぜ。かすかな香りが、したりしてな。ぜひ、それでゆこう」

「できるだけカパッと拡がったのがよさそうだな。問題は、どこまで真に迫った写しを取るかだぜ」

「こいつは、やっぱり一連の続きものにするべきだと思う。朝起きてから寝るまで、その間にアクビもするだろうし、ひしゃげることもあらあな。おもしろいぜ、誰一人、探究できなかつた百面相――」

「8ミリとセットでやるのが、やっぱり一番だぜ。まずニコヤカに京子が現われる。そして、お手元にお届けしましたのは、あたくしの実物大の……」なんて解説入りだ」

「これに、もっともピタリとくるサイズを推理させるんだナ。正解を当てたお方には、賞品として、実物を堪能するまで楽しんでいた

だきます……なんてのは、どうだい」

――いやはや、てんでに冗談半分に騒ぎたて大笑いをするチンピラ共は、すっかり疲れも取れ浮き浮きした気分になってきたようだ。

じっと長い睫毛の明眸を閉じて、又しても襲いかかろうとする嵐に耐えぬく決意をみせている京子の姿は、限りなくエロチックに見える。

それは、男たちの暴虐を吸収した年ごろの女だけが持つ、あの豊饒さからくるものである。京子の肉体は、もはや自分のものではない。あくまで、森田組が所有し、飼育し使用するためのものである。

空手できたえ引き緊まった臀部は、近ごろ一まわり更に大きくなった感じだ。真後ろから見ると、腰のくびれのあたりで、ゆるやかな段がついたように一たん、くぼみ、その緊まった反動のように二つの尻たぶめがけて、グイグイと張りだしてゆく脂の厚みがある。

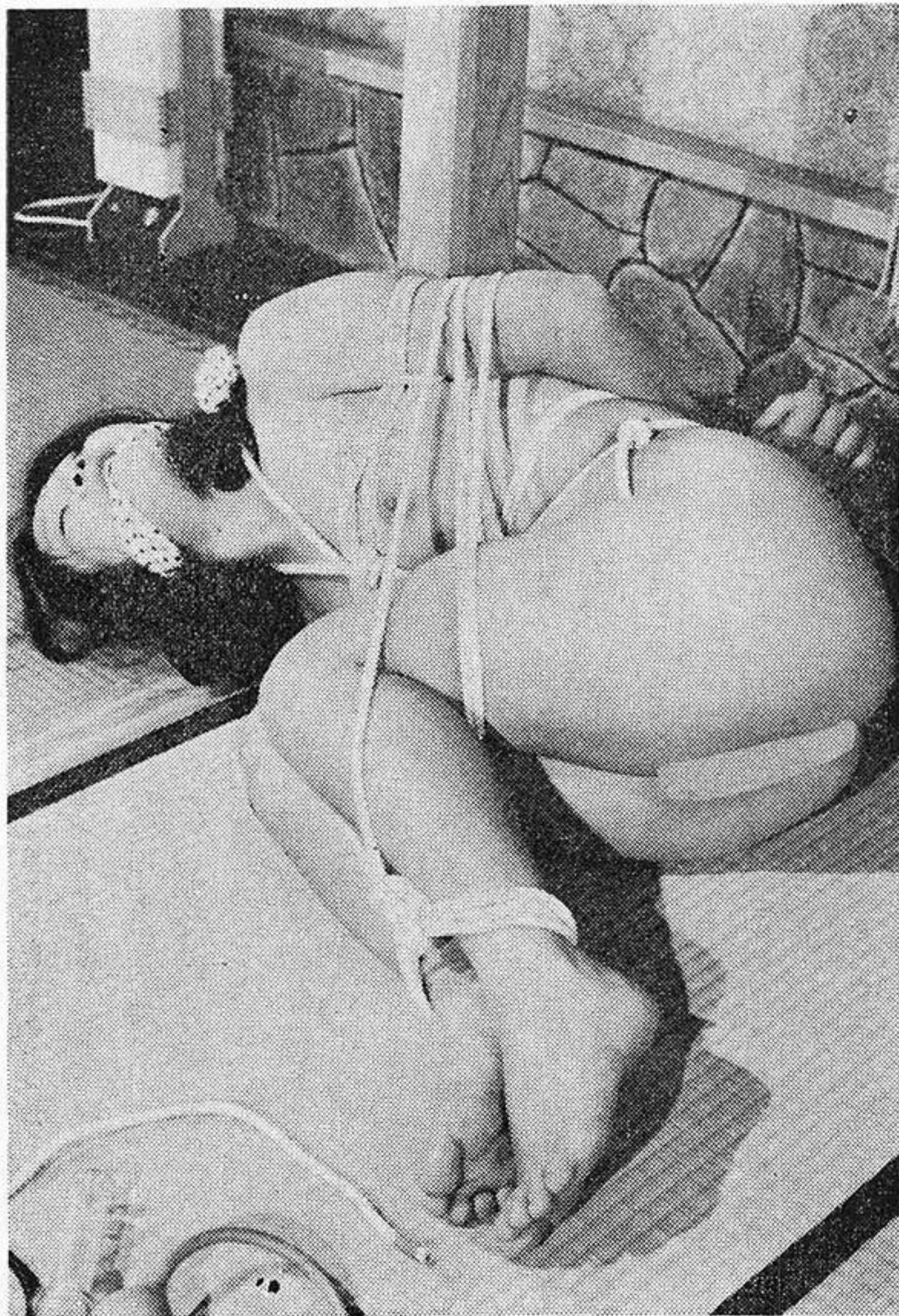
「さて京子、聞いた通りだ。四の五のいわねえで、これからというポーズを取りな。俺は気が短いんだ」

と、相変わらず美津子を、あぐらの上に乗せたままの清次がいった。

読者通信の皆さまへ

大きなヒップを晒して

笠井奈保子



しばらく、ご無沙汰しました。

十二月号に「奴隷妻になりたい」という下手な文章を書いたのせていただきましたところ、沢山の皆さまからお手紙をいただき、ほんとうに有難うございました。

本が出てから読みかえしてみますと、自分の考えていたことは、違ったような文章になっていて、自分ながら、自分の才能のなさにあいそがつきてしまいました。自分の思っていることを、すらすらと文章に書けたら、どんなによいのにと、いつも思います。いくら鉛筆をなめなめ、一生けん命になっても、うまく書けないものはあきません。

一月号で、私に通信を下さった奈良市の香取鷹一郎さん、有難うございました。こんなに書いて下さると私もうれしいですわ。でも貴方は、きっと私を買いかぶって、いらっしゃるのだと思います。

もし、お逢い下さったとしたら、きっと失望されると思います。奇クにのっている私のシャシンを見ていて下さって、いろいろと夢を描いていて下さる方が、私としては大変、気が、らくです。貴方様の考えておられるような理想的な奴隷妻であつたとしたら、それはいいのですが、本当の私って、我ままで、その上、大変な欲張りなのです。

ですから、貴方は実際の私を見られたら、必ず興ざめされることでしょう。私が大変な欲張りだと書いただけで、もう貴方は、なんだ、そんな女かと思いでしょ。

そうなんです。私はなんの魅力もない若いのと健康なのがトリエの女性です。顔はブスだし、性質もよいとは決して、自分でも思っておりません。

ただ、私が『奴隷妻』として、お仕えする男性は、この広い世の中に、たった一人だけののだから、一人くらいは、こんな私でも、『奴隷妻』として可愛がって下さる方も、いらっしゃるのではないかと自惚れています。何カ月ぶりかで、こんな、つたないお便りを書いてみようかと考えたのは、丁度、今朝一通のお手紙をいただいたからです。

神戸の方からでした。お名前だけを伏せて

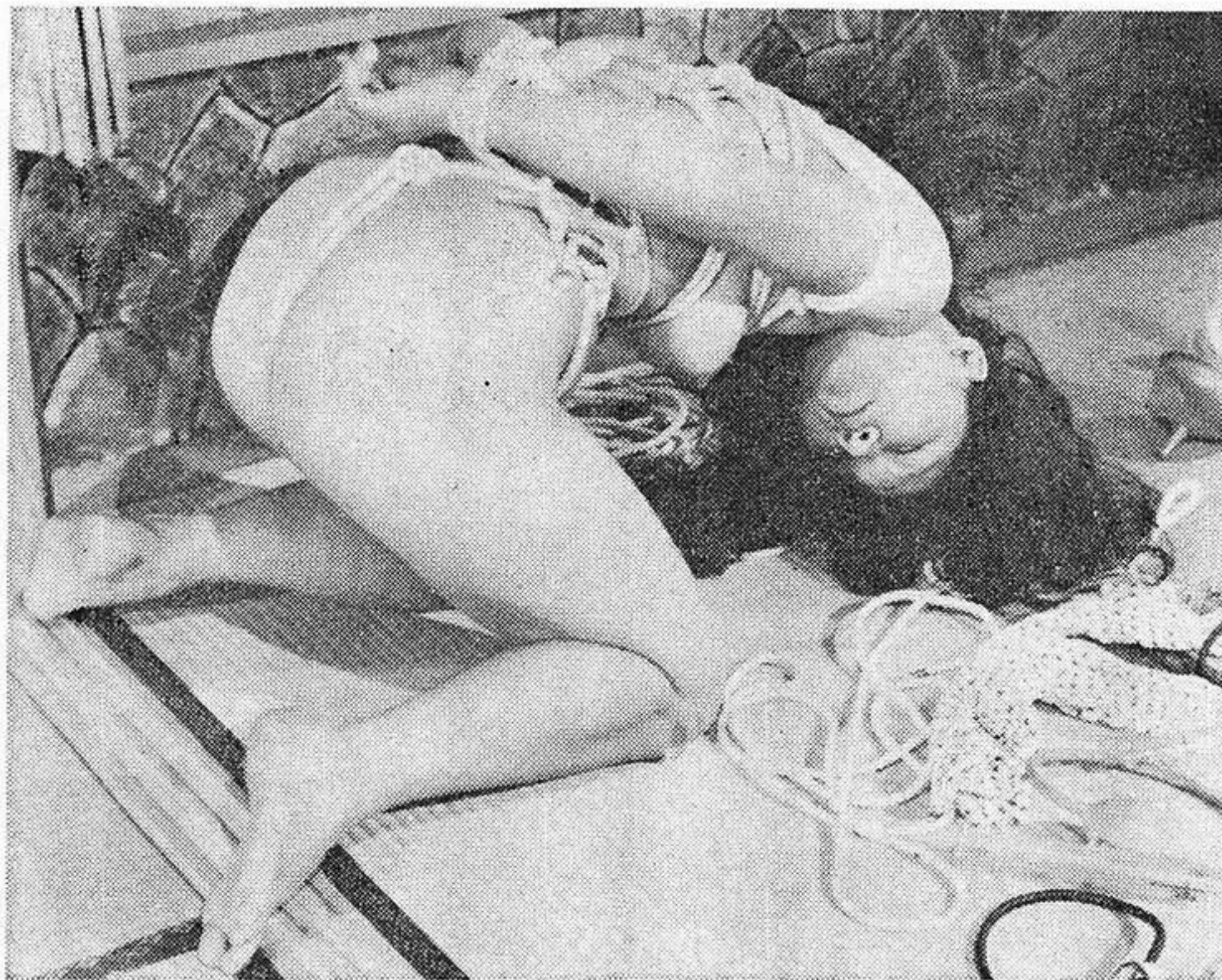
ここへ書かせていただきます。

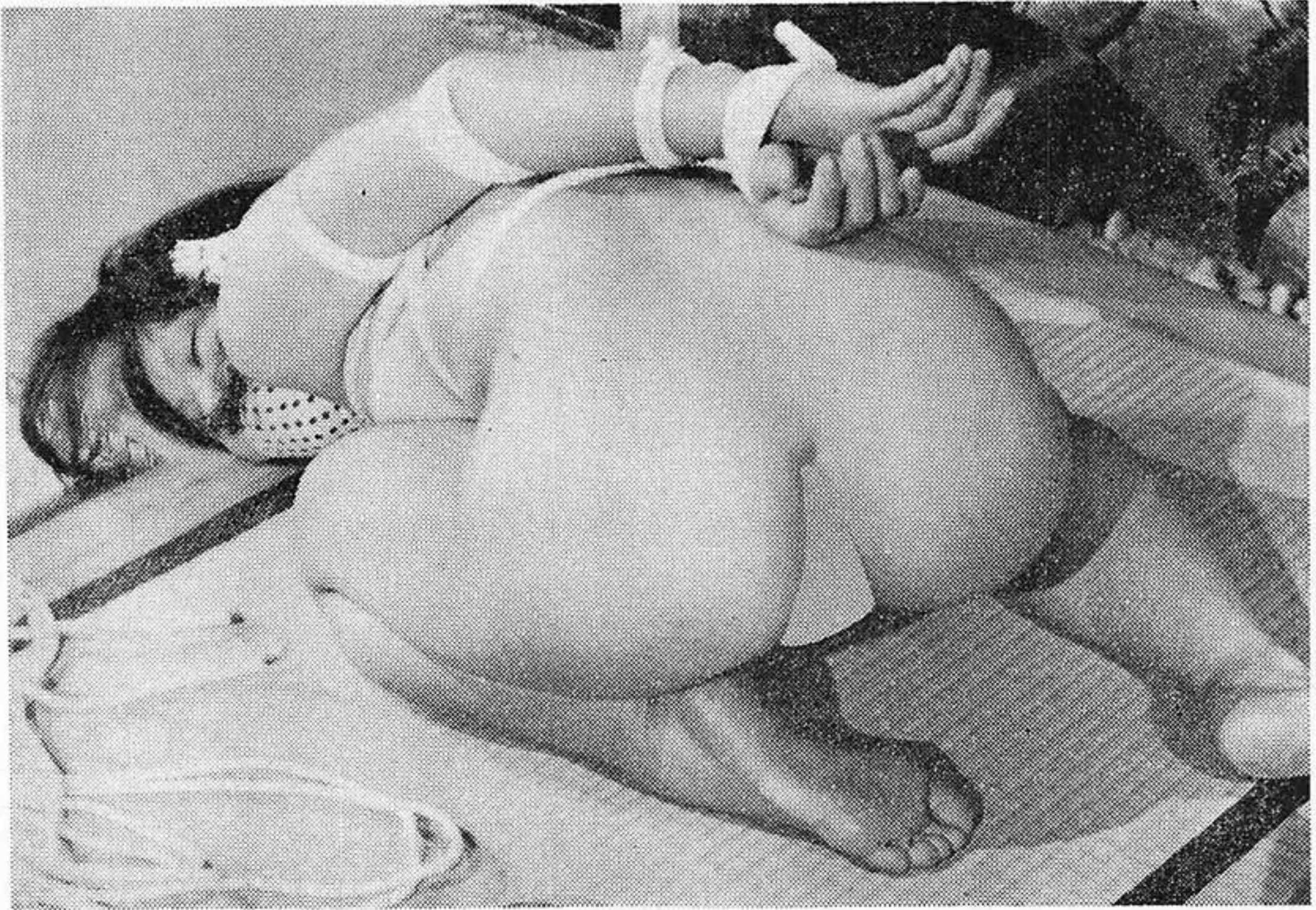
「一月号、表紙をめくると、第一頁に、貴女の大きな緊縛写真、ドキッしました。顔の表情がすばらしく、つき出た乳房が、みずみずしく、ほんとに美しいですね。しかし、貴女が書かれたものは、何もなく、少しガッカリしました。

十二月号『奴隷妻になりたい』。多くの奈保子ファンの方からの便りに返事を書くのに少しウンザリした様な気持、少しは、わかる様な気がします。私等は、この一通の大好きな貴女に書く手紙ですら、私には思う様に書けません。思っている事は山程あるのに、ペンはほとんど動かず、いらだたしいかぎりです。

その中で、私の書いたまずい文が、少し書いて

ありましたが、私には、どう表現したらわからぬ位の喜びでした。





あの手紙により、貴女との間に、ほんの少しでも心のつながりが出来た事は、私にはかけがえのない事です。

夫婦にしても、恋人同志、親友にしても最初は、ほんの小さな出来事から発展していると思います。最近は何故か貴女がすぐ身近に感じたり又全く手の届かない遠い処に行ってしまった様な、あせりにも似た感情で、淋しく思う事もあります。しかし、考えて見ると、まだ一度も貴女に会った事もないのにと苦笑します。

貴女の肉感的な、お尻を平手で叩いたら、どんなにいい音がするでしょう。

食事の時、貴女を後手に縛り、私の持つハシで交互に食べる食事は、どんなに楽しいでしょう。

右足首と右手首、左足首と左手首と一緒に縛り、カエル

の様な、かっこうで、つき出た大きなお尻に軽くムチをあてながら、はわせたり、海老縛りにして、太モモから尻、乳房を羽毛で、くすぐったりしたら、貴女はどんな反応を示すでしょうか。

一番最初、貴女を全裸して、手を後ろに回し、肌に縄がふれた時、貴女は、きっと乳房を固くして顔を美しく染めるでしょう。

貴女の心の中に土足で入りこみ、貴女を私好みの方法で縛り、そしていじめたい、飼育したい、夢の様な一時を貴女と過ごしたい。

こんな事を、私は何度、いや、数えきれない程、空想しています。」

この方の書いていられるように、一月号に私の文章がのっていなかったのを、失望しておられる方が、ほかにもあるのだろうかと考えて、私が再び投稿しようとしたのではありませんが、せっせと私信のお返事を、いくら書いていても、それは一般の読者の方には、わかりませんものね。

やはり、投稿して、雑誌にのせていただいてこそ、私の存在価値があるような気もしますが、書くようにとすすめられながら、とうとう筆不精のくせが今になって出てきてしまいました。ここ半年ばかりは、あれほど、ず

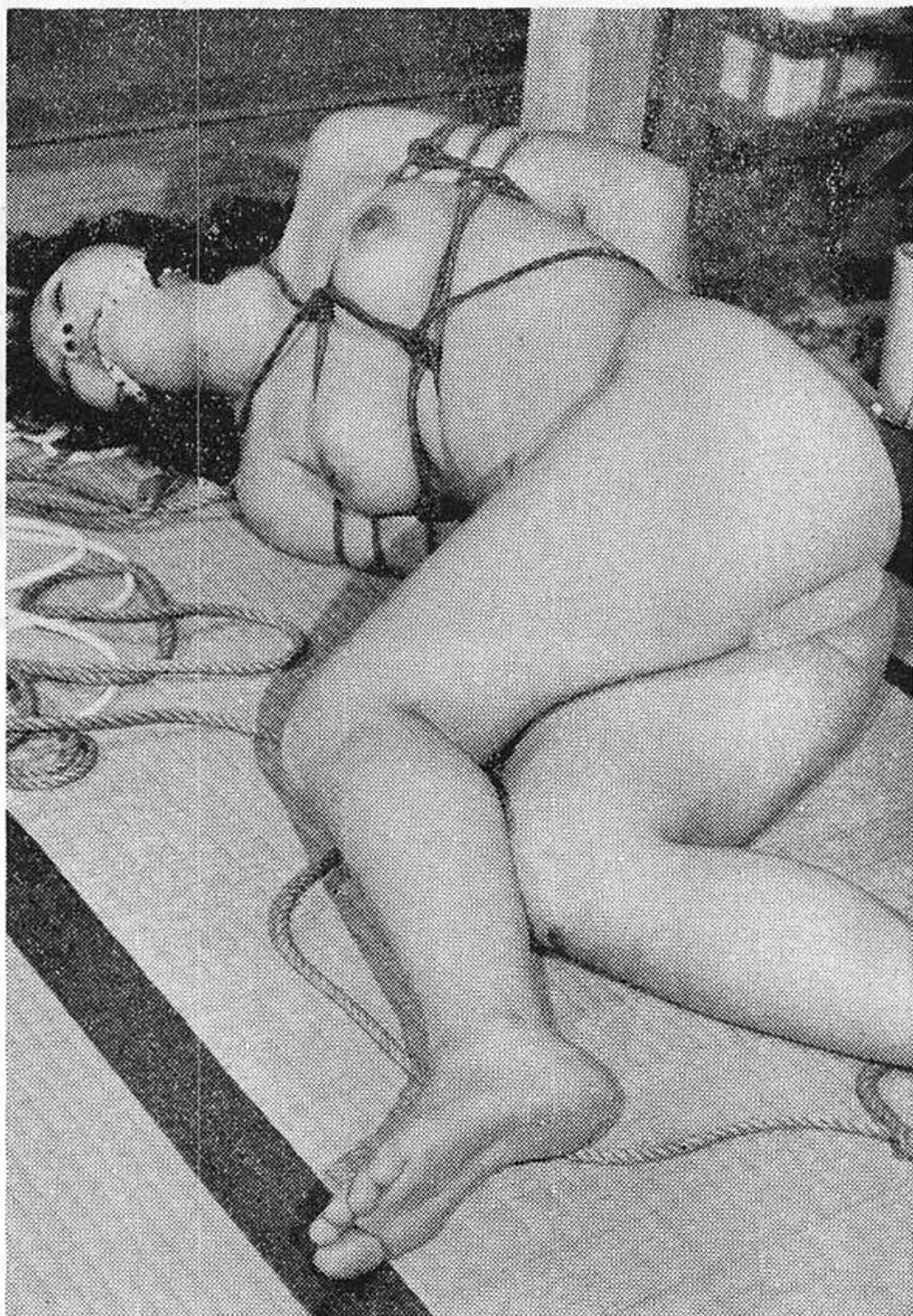
っと書きつづけていました日記帳も、すっかり書く気を失ってしまいました。

今から思いますと、平凡に生活していたときの方が、いろいろと空想したり願望したりすることが多くて、書くことも多かったような気がします。今では、その頃の感激性というものが、うすれてきたのでしょうか。

それとも、実際に自分の身体が縛られてみると、その頃の気持も変わってくるのでしょうか。そこところは自分でも、よくはわかりません。とにかく、数カ月は、ぼんやりとして過ごしてしまったのです。

もちろん、お手紙を下さった方へのお返事は、せつせと書きました。どうしても文通は限られた方と、しげくするようになるものなのです。一番最初にお返事をいただいたとか、その方の言っておられることが気にいったとか、そんなちょっとしたことから、お互いに、お返事のまたお返事、ということになってしまい、いつの間にやら、同じ方のお手紙がと、びっくりする位たまってしまうのです。そうなりますと、つい書きそびれて日のたつにつれて、遅れてしまったお手紙には、お返事を書く機会を失ってしまうのです。

ここにのせさせていただいたお手紙の方の



ように、私の身体を縛りたい、責めたい、だからお逢いしたいというような方が多いのです。私も縛られたり、責められたりすることは嫌いではありません。でも、だからといって、誰かれなしに縛ってほしいなんて、夢にも思わないのです。

いや、むしろ、ある人だけに、責めてほし

いと思うのは、女心としては当然ではないでしょうか。誰でもいいから、とにかく縛っていじめてほしいと思うほど、私は強いマゾの心は持っておりません。

私はまだ若いですが、でも、一年も二年も先まで結婚を待てない気持です。できたら、半年先、いや三月先にでも結婚したい気持で

す。そんな、あせりの気持が、あんな『奴隷妻になりたい』というような、はしたない文章を書かしてしまったのかもしれない。

もしも、結婚するんだったら、奇クを愛読されている方で、私を奴隷妻として可愛がって下さる方なら、一番、今の私にふさわしいのではないかと思ったのです。

気さえ合えば、明日にでも、愛の巣をつかって、その方の奴隷妻としてお仕えしたいと思っていますのです。盛大な結婚披露宴や新婚旅行などは望んでおりません。六帖一間のアパートの一室でも、二人っきりで同棲できれば、それでいいのです。

毛皮のコートを買って下さらなくても不足



は申しませんし、一日や二日、食事を与えられなくても、泣きわめくようなことは決していたしません。ただ、その方が、私の大好きな方であったなら、私は自分のすべてを捧げて、一生、奴隷妻としての身分に甘んじて、奉仕をつづけさせていただきたいと、願います。

そのかわり、気にいらない方だったら、身体の一部をさわられることさえ嫌なのです。縛られることなんて、とても耐えられそうにありません。考えただけでもトリ肌が立つような気持になってしまうのです。

私が縛られた女の方のシャシンを見るのが大好きなもの、そんなところにあるのかもしれない。縛られている美しい女性が自分であり、縛っている人は、自分の大好きな男性だと、自分勝手に空想してしまうのです。

でも、最初に、そんなシャシンを見たときのショックは、決して、そんな理くつからではありませんでしたけれど。

私は沢山の男性の方から、お手紙をいただいて不思議に思ったことは、（女性というものは、誰にでも後手に縛られ、お尻をぶたれたい）と思っていると考えていられるのかということです。

自分は女をいじめることが好きだから、お前を縛ると言われても、私はちょっと困るのです。

男の方も、相手が女性だったら、それこそ誰でもいいから、いじめたいとおっしゃる方は少ないと思います。

殊に、受身の立場になる女性の側にとっては、この好き嫌いの気持は殊に強いんじゃないでしょうか。これは他の女性の方のお気持は聞いたわけではありませんから、断言するわけにはまいりませんが、私はそんな風に想像します。

私だったら、相手によって、飼いならされ

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いません。致しておりません故御了承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下さい。電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

た犬のように従順になったり、また相手によつては、反抗的な野犬になって噛みついたりするようになるかもしれません。

すべて、相手次第という気がしてならないのです。

それだけに私は、この自分を『奴隷妻』として飼育し、愛して下さる男性の出現を待ち望んでおります。

『奴隷妻』と申しましても、何も正式に婚姻届を出して下さいなどというような大それたことは望んでおりません。

もちろん、そうしていただければ、それは私としては有難いですが、それよりも、もっとも大切なことは、相手の方が、私が奴隷妻として、お仕えするに足る方であるということなのです。

たとえ、弄ばれて捨てられようとも、その相手の男性が、私の大好きな大好きな、死ぬほど好きな人であってほしいのです。

もしも、そんな魅力的な方にお逢いできたとしたら、私は、その場ですぐにでも、『奴隷妻』になってしまいます。

私は相手の男性の方が、ただ八女を責めたり、いじめたりすることが好きだVというところだけでは「はい、どうかいじめて下さい」

という気持には、どうしても、なれないのです。

こんな私の気持って、不自然なものでしょうか。大好きな方のためなら、どんな汚いことでも喜んでやりますが、好かない人だったら、口を聞くのも嫌なのです。

私がまだ若くって、我ままなのかもしれません。

私の秘密の玉手箱は、この頃は余りふえませんが、それでも、近頃、画を少しばかりと外国のシャシンを少しばかりいただき、毎日のしみに眺めております。

若い女性の私が、こんなものを集めるなんて、変に思われるでしょうが、内向的な女性にとっては、日記を書いたり文通したり、シャシンや画を眺めている方が、実行にうつすよりは安全なのかもしれないと思ったりしています。案外、若い女性の間で、奇クの人気があるのも、そんな女性心理からかもしれません。

今朝、彦根の父から、彦根にも今年になって、はじめての雪が積もったという便りが届きました。お正月には、父のもとへ帰りたいものだと思っております。

カット・岡 たち



別の買いもの

あまり古い話ばかりでは、どうかと思い、今度は比較的、新しい交友から先に紹介しようと思う。

一昨年十月、ある女性週刊誌の主催で、読者優待の香港・マカオ旅行があった。

そのT誌の編集の月村君から「若い女性ばかりの一行だから行って見ませんか」と誘われた。何しろ費用が全部で五万ちょっととい

うのが、安くて魅力であった。

私は親友の春木君を誘ってみたが、彼は仕事が多忙しくて行けない。代りに門馬篤五郎氏を誘ったらどうか、といった。

門馬氏は、まだこの交友録に現われていないが、春木君の友人で二、三年前から交際している人物である。彼に電話すると、一も二もなくOKで、是非、連れて行ってくれということだった。

門馬氏については、いずれその項で委しく書くつもりだが、一応アウトラインを紹介す

連載—アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

劉 騎 麗 の 巻 (1)

鬼 山 絢 策

と、ある光学機械の会社の次長で年令四十才、身長百七十センチ、体重九十キロの巨漢である。

若い頃は、ドイツに留学し、アメリカにも一年あまり出向社員として生活してきたという海外には明るい人だが、香港は始めてなので、仕事をはなれた旅がしてみたいと大へん喜んでくれた。

四人の課長を部下に持ち、重役候補として会社では、かなり幅をきかせているが、ハミリに趣味を持ち、海外のポルノやSM事情に

委しい人物だった。

私も彼もパスポートや種痘、注射等は有効期限が切れてないので手続きは簡単だった。

一行は百名を越す団体だったが、その九十パーセントは若い女性だった。

カイト空港へ一時に着いたというのに、女の旅行というのは荷物が多いので、荷物の受け取りに手間どって、一時間余もかかった。

たった四日の旅だと言うのに大きなスーツケースを二つも三つも持ってくる女性の見栄には呆れ果てた。

「団体旅行というのは、待つ時間が長いのが閉口ですね」

ふだん忙しい仕事をしている私や門馬氏は全くイライラしてくるのである。

フィアット・ホテルに着いても部屋割りがまた、もめて、なかなか決まらない。次の予定は五時集合でクラブ・ミラマーで夕食と決まっているから、それまで街を散歩して来ようと、手の空いた女の子を二人、誘って、四人で九竜の街へ出た。何しろ飛行機の中から門馬氏は外国通なので、女の子に、モテモテだったのだ。

私は香港には二、三度、来ているから町の地理は明るい。ただし、英語も広東語も、だ

めなので、言葉が通じない。そこへ行くと門馬氏は英、独、仏とペラペラなので、英語の通じる香港では便利だ。

女の子は早くも買物に熱中してショーウィンドーの前に立ちどまり、二カラットもあるダイヤに目を輝かせている。

「指輪なら安い店を知ってるから、そこを、あとで紹介してあげますよ。いまは、どの品物が、どのくらいするか、香港の相場を知っておく程度に、しておきなさい」

香港も、来るたびに値段が上がって、普通の店で買ったのでは、それほど安くはない。

夜は、お定まりのクラブ・ミラマーで食事をしながらショーを見て、あとはガイドのあとへ、ぞろぞろ、くつついての買物だが、ここで私と門馬氏は団体から離れて、別の買い物をすることにした。その買い物については主任のガイドよりも助手の陳さんの方が委しい。

陳さんに頼むと、陳さんは主任ガイドの劉さんに許可を求めに行った。主任のガイドというのは責任者であるから、また絶対の権限を持っていて、サブガイドの勝手な行動は許さないのである。

私は劉さんにウィンクして「頼むよ」とサ

インした。劉さんは笑って何か陳さんに注意を与えていたが、どうやら許可したようである。いままでボサツとしていた陳さんが急に生き生きと目を輝かせて私達の方へ、やってきた。

「で、どんなのが、よろしいですか」

陳さんは日本語は、まだ、あまり上手ではない。

「相場は、どんなところなの」

「そうですね。地元の女の子でしたら二十ドルです。ハイ、米ドルです。これは昼間は勤めているシロウトです。外人の女でしたら、四十ドルです」

「外人の女って、アメリカの女もいるの」

「ああ、アメリカ、高いです。アメリカの女は八十ドルです。どうかして百ドルになると、あります」

「ホウ、美人かな」

門馬氏が興味を示した。

「ハイ、それは美人です。でもアメリカの女悪い癖、あります」

「何が？」

「お客さんのあすこ、ナメル癖あります」

「そりゃ、悪くない。良い癖だよ」

陳さんはニヤニヤしている。

「どれにしますか」

「アメリカの女は高いですね」

「やっぱりナメナメサービスつきだからでしょう。それで、客にも舐めろというかね」

「サア、それ分かりません」

「高いですな。ニューヨークやシカゴでは三十ドルでOKですよ。もっとも女にも、よりますかね」

「やっぱり香港に来たんだから、香港の女がいいでしょう」

「そうですね」

香港の女は通常、泊まりは、やらない。日本のショートよりは長いが必ず帰って行く。もっとも、この前、来た時は、香港島の方へ案内されたが、これは女のアパートに泊められて朝まで、たっぷりサービスして二十ドルというのもあったが、これには運がよくないと当たらない。

「ただしね、陳さん。もしも気に入った女の子がいなかったら、やめますよ」

「ハイ、それはケツコです。最初のひと、気に入らない。次の人、くる。何人、見ても見るの、タダです」

と言うことで、案内してもらった。陳さんは細い裏道伝いに曲がりくねって行ったが、

行きついたところは二十階以上のビルで、表通りをチラと見たところでは北京通りらしく恐らく、このビルの表側は一流商店が何億円もの商品をショーウィンドーに飾っているのではないかと思われた。

このへんは東京でいえば銀座通りに相当する。宝石店などは銀座の店よりは、はるかに豪華で百万円から五、六百万するダイヤをゴロゴロ並べている。ビルの一階は、そういう一流の店だが、二階に上がると同じ商店でも二流になる。三階に上がると洋服屋とか貿易商の事務所とか、安手の食堂があり、四階に上がると俄然、様相が一変して、あたりは暗く、アパートになっている。これから上は、ずっと、アパートなのであろう。「何しに来た」というようなウサンくさい目つきで睨まれた。

これは、この前、来た時の昼間の話。

鉄扉が下りていたが、陳さんは勝手知ったように横の目立たぬ入口から中に入った。

ただ見せショー

「オヤ、停電かな。すみません、停電でエレベーターとまっています。すみません、歩いて

下さい」

狭い階段を上って行く。

階段の中途の折返しところに、裸のろうそくがユラユラと鈍い光を放っている。

二階、三階、六階、十階と、ゴトゴト歩いて行く。肥った門馬氏は、くたびれたろうと見たが、意外に元気である。どこまで行っても折返しに所に裸ろうそくが、ともされて、「おいで、おいで」をしている感じである。

陳さんは済みませんを、くり返す。だが、暗い階段をコツコツ上がる靴音を聞いていると魔窟へでも引きずりこまれて身ぐるみ剥がれるのではないか、というようなサスペンスが漂う。

だが、十八階ぐらい上がって、いい加減ウンザリしたところに、ポツンとスナックバーみたいな店があった。

陳さんは私達を招じ入れると、カウンターにいる、あから顔のマスターと何か早口で、しゃべっている。他には誰もいない。

「少し、お待ち下さい。お飲みものは？ ビール三ドル、コーラードルです」

香港ドルだから、これは安い。

陳さんにもビールをすすめたが、固辞して飲まない。バーのマスターは、にこにこしな

がら私達の方を見る。陳さんは、
「若い、いいですか。中くらいの、いいですか」

「そうね。若い方が、いいな」

「肥った人？ やせたの？」

私はグラマーが、いいといい、門馬氏は何でもいいといった。

陳さんがマスターに何か言う。マスターはここにこしながらビールを持ってきた。

待つ間ほどなく二人の姑娘（クニーヤン）が、やってきた。門馬氏が英語で話しかけると一人の子は、どうにか答える。その子が門馬氏の傍へ坐った。私の方は英語も広東語もダメだから、こうなると、割りをくう。仕方がないから手帖とペンで筆談と行く。日本語で問いかけると、イエスとか、ノーとか答える。日本語も、ごく少しは知っている。

「どうですか？」

と陳さんが聞く。門馬氏は、どうやら気に入ったらしいが、私の方は、
「今日は、どうも気分が、のらない。疲れてるから、やめておく」

というと、陳さんは、あわてて、

「チョと待ちなさい。もう一人、います」

という。次に来たのは前のより若くて十八

九だろう。ピチピチしていて美人である。ニコリ笑って愛想がいい。日本語も少し話せて、英語と筆談とチャンポンで話をする。

そこへ突然、ポロシヤツを着た雲つくような大男が入ってきた。栗色の髪をした青い目の薄禿の男で国籍不明である。年も三十五から五十ぐらいの間だが、よく分からない。

かなり酔っぱらっていて、大声でマスターに話しかける。マスターは笑いながら応答し黙ってウイスキーのオンザロックを出す。どうやら馴染みの客らしい。この男一人で俄然にぎやかになった。言葉は、ドイツ語のようだった。

「きまりましたか」

陳さんは私に聞く。

「OK！」

私はウインクした。陳さんも、はじめてニコリ笑った。

そこへ金髪の一、七五メートルぐらいの大きな女が入ってきた。ラクウェル・ウェルケに似たセクシーな美人である。

「オウ、マインリーベ！」

とか何とか、大きなゼスチュアで迎えた男は、いきなり両手で女の顔を抱えて、キスの雨をふらせた。女は眉を寄せて、それを避け

ると、平手で一発、パシーンと男の頬をなぐった。かなり、大きな音がした。部屋が狭いので拳銃を打った放したくらいの音がした。

この大女に力一ぱい殴られたら、私などは顔が、ひん曲がってしまうだろう。だが、男は平気の平左で、女の腰を抱えると、軽々と持ち上げた。

六十五キロぐらい、あるんじゃないかと思われる女を、人形でも持ち上げるように、ヒョイとスタンドに腰かけさせた。

男は女の両足をひろげて、一本宛、自分の肩へ乗せた。やり方が荒っぽいので女の靴の片方が脱げて私達の方へ、とんできた。

男は、短いスカートを押し上げて、顔を埋めた。

男の顔に押されて女は仰向けに、ひっくり返りそうになり、スタンドに両手をついて、こらえた。

ピュッ、ピュッ、ピュッ。

という凄惨なキスの音がする。

私も門馬氏も、傍に女がいることも忘れてあっけにとられたかたちで二人の荒々しいヘビーペッティングを見つめていた。

女はチラと私達の方を見て、両足を閉じようとしたが、見ているのが黄色い人間達だと

ナミオM画廊 『硬軟の挟み討ち』 春川 ナミオ



分かると、両足を弛めて、何か早口に罵り、片方のローヒールの靴を脱いで、その靴で男の頭を殴りつけた。続けて三、四回、ぶん殴ったが男は、ひるまない。ますます顔を突込んでくる。

女は靴を投げ出し、両手を後について、つかい棒の形になったまま、男を見下ろし、
“これじゃ、しょうがないわよ”
というような表情で、傍のマスターに話しかける。マスターはつつましかかな笑顔で、

二人の方を見ないようにして、洗ったグラスを拭いている。

男はマンガにでも喰らいつくように、しゃぶっているらしい。

女は、また私達の方を見て、ウツトリしたように目を細めた。そこには羞恥の感情は何もなかった。

私は、ようやく神経を他に、はたらかせ、傍に坐っている姑娘を見た。

女は驚いたという風に瞳を一ぱいに見ひらいて、ニッコリ笑ったが、それはジェスチュアだけで、ほんとに驚いている様子ではなかった。ペンで何か書いたのを読むと、

“お客さん、今夜は幸運だわ。珍しいショーがタダで見られて”

と言うような意味が書いてあった。

男のキスは、まだ続いている。

非常に長い時間のように感ぜられたが、実際には二、三分ぐらいのものだったろう。

その間に女の方は、さまざまな表情の変化を示した。もちろん、それは我々“観客”を意識して演じたものではなく、自然の流れに沿って現われたものであるが、日本人などよりも遥かに豊富なバラエティがあって、そのひとつひとつに異なった美しさがあった。

やがて男は、首を持ち上げた。

それが首を手前にひかずに、そのままの位置から垂直に頭を上げたので、女の短いスカートは、もろに捲くれ、男の顔で隠されていた部分が、こちらから見ても、まる出しにされた。

男の顔は酔っぱらったように真っ赤になっていた。

男は女の大きな身体を軽々と抱き上げた。

「靴が、靴が」

と叫ぶ女に構わず、マスターにウインクすると、足をバタバタさせる女を抱いたまま、部屋を出て行った。

人種的なM

お定まりの観光コースを、ひと回りして、

三日目には水中翼船でマカオに渡った。

「昨夜、ビクトリアピークの丘から香港の夜景を見たでしょう。百万ドルの夜景などといわれていますが、大したことなかったでしょう。東京の夜景の方が、よっぽど素晴らしいですよ。しかしね、この水中翼船でなく、大きな船で夜の九時にマカオに発つ船があるんですよ。その船の上から見る夜景は、まさに

百万ドルの価値がありますね。香港のあかりは点滅しないでしょう。法律で禁じられていますからね。だから、あの丘から眺めても動きに乏しいし、一部分しか見られません。船から見ると香港島や九龍島と、香港の全景が悠々と移動して、近くから遠景にと変化して行くさまは二十分ぐらい見ても飽きませんよ。遅いけれど、あの船で行く方が情緒がありますね」

「ああ、船の中でストリップを見せるというあの船ですね」

「いや、ストリップは土曜日でないと見せません。近頃は、それも、やめたようです」

この船がシケを喰って沈没し、乗客が何百人も死んだと新聞に出ていた。マカオに行くにも季節を選ばないと、ひどいめにあう。

「マカオにも可愛い子ちゃんはいますか」

「いや、マカオは少ないですよ。元来、マカオという町は、まじめな町ですよ。カジノを除いてはね」

マカオではカジノに夢中になってしまうから、私には女は用がない。門馬氏は香港の女が気に入ったと見える。

それにしても、あの晩は思いがけぬハプニングなショーが見られたのは収穫だった。

「あの女、ラクウェル・ウェルケみたいなのはあれはサジスチンですかね」

「サア、どうでしょうか。多少、その気があったようです」

「あれは立派なサジスチンです」といいきりたいところだが、チラと二、三分、見ただけだから、断定はできない。我々M派としては何でも自分の畑へ引っ張りこんでしまいたいところだが、あの二人の行動を見ると、そう決定づけるには疑問の節もある。門馬氏は「女が入ってきて男が、いきなりキスしてきいた時、女は思いきり平手打ちを、くらわせたね。これをサジスチックな行為と見るかどうかです。普通の女でも、勝気な女なら、あのくらいのことをするでしょうね」

「しかし相手は、お客ですからね。娼婦が商売をするのに、お客がキスしてきたからといって一々殴っていたのでは、商売にならないでしょう」

「それと、もうひとつ、スタンドへ腰かけさせて、例のキスをしている最中に、自分の靴を脱いで男の頭を、ぶん殴った、あれはどうです」

「あれはサジスチックですね。ただ、あの男の方が、よく分からないですよ。あの男が

Mなのかどうか……」

「あれはMじゃないでしょう」

「普通のMなら、あんなに女に対して積極的な行動には出られませんね。女性を尊敬し、思慕する心情があれば、あんな半ば強姦的なキスは、できないはずですよ。あのキス自体、ちっともMの行為ではありませんからね。単なる愛情の表現か、自己の性欲の吐け口の一手段でしか、ないと見るべきでしょうね」

「でも女を一段、高い所へ坐らせて、やりましたね。あのポーズはM的でしたね」

「あれは、あの場合あでもしなければ、キスしにくいからでしょう」

私も門馬氏もM的な光景を目撃したが、それをMと決定づけるには、かなり懐疑的だった。

「しかし私が一番、Mを感じたのは、女も男もわれわれを全然、無視しているということですね。男の方は、女が入ってきた途端、われわれの存在を忘れてしまったのかもしれないね。アメリカでは、ああいうシーンは、よくあるんですか」

「ワイルドパーティーなどでは、あるでしょうね。人前でセックスするのも実際に見たというのがありますね。私は見ていませんけど。」

ああいうキスは私も見ました」

「男の方は単純に、そう解釈して、よいとして、問題は女の方ですよ。女と私達は向かい合っていて、いやでも女は私達の存在が目に入っているのですからね。そこで男から、ああされた場合、多少とも羞恥を現わすのが当然なのに、あの女は犬か猫にでも見せてやっているように、われわれの方を時々見ても、平気の平左でしたね。あれは職業的に、ああいう経験を始終、しているので、何とも思っていないのか、それとも私達が黄色い人間だから平気だったのか、私は後者だと思うのですがね」

門馬氏は苦笑いして

「ぼくもアメリカで、ああいう場面には、しばしば出くわしましたよ。最初は屈辱を感じましたがしまいに馴れてしまいましたね」

水上カジノ

マカオへ着くと、一行は市内見物に回ったが、私一人ホテル・リスボアに直行して、カジノへ行った。

昼間のカジノと言うのは何となく間が抜けたもので気合いが入らない。少しやったが負

けたので、気を抜いて来ようと外へ出た。

ホテルの前のメインストリートをブラブラ歩いて金製品の店などを、ひやかし、裏通りへ入ると煙草屋があったので、ボスというアメリカ煙草を買った。煙草は、いろいろな店で売っているが、高いところは一ドル二十セント、普通は一ドル（六十円）である。この店は煙草専門の卸屋みたいな店だった。一ドルを置いて行こうとすると呼びとめられて、三十セントのお釣りをくれた。アメリカ煙草が四十二円とは安い。私はワンカートン買った。旅先で、こんなに正直で親切な目にあうと、非常にうれしい。

水上カジノへ行ってみた。

ここは、ファンタンという中国古来の、ばくちがさかんで、洋服のボタンを、ひと掴み置いて、四個ずつ、取り除いて行って、残った数が当たりというわけで、金を張る場所は一から四まである。一カ所に金を賭けて当たると四倍になる。

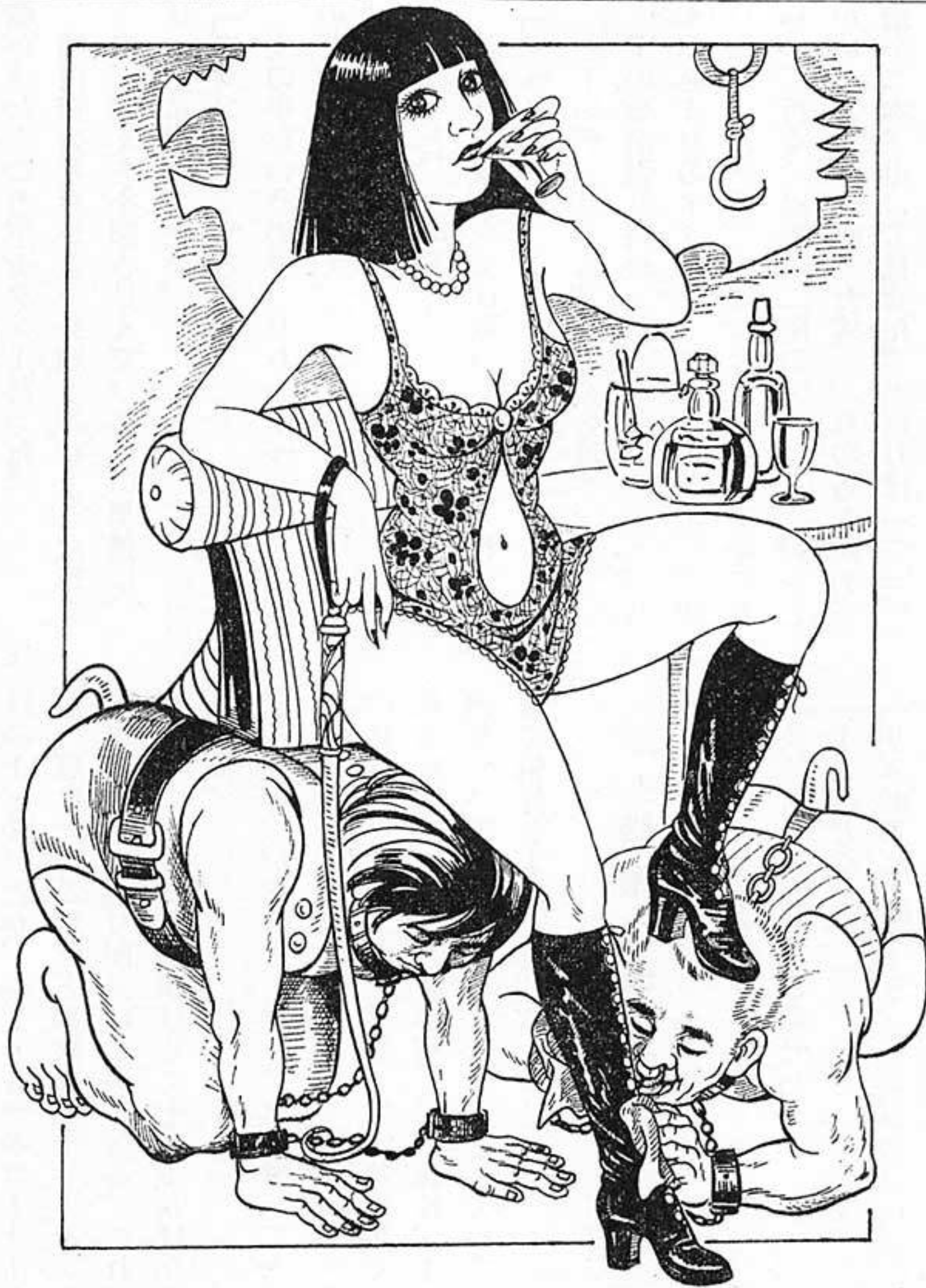
十人あまりの客が十ドルから三十ドルぐらい、賭けている。私も、やって見たかったが席がない。すると上からスルスルと紐をつけたザルが下りてきた。中に、お札が入っている。

「1に二十ドル」

二階から、声がする。下のデイラーは、いわれた通りに1の所にザルの中の二十ドルを張った。

“ホウ、二階からも下のばくちが、やれるようになっていいるのか”

と見上げると、天井がなくて、ちょうどファンタンのテーブルの分だけ二階に突き抜け



……イメージギャラリー……

『生き甲斐のひととき』

岡

たかし

ている。お客が四、五人、たかって下を見下ろしている。その中に、まんまるな顔の可愛らしい女の子が、私と目が合うとニッコリ笑った。もちろん知らない女の子だが、一谷伸江みたいに、グラマーでチャームングである。

早速、私は二階に上がって行った。カジノは二階にあるから、ほんとうは三階に上がるわけである。

この水上カジノは長らく改築中で、最近、出来上がったばかりなので綺麗だったが、客種は何といってもリスボアよりも落ちる。中国人ばかりだった。ルーレットも置いてあったが、客がいなくて動いていない。客は、もっぱら大小とカードに、たかっている。

私はファンタンの真上の、目指す女の傍へ行った。

「ニーホーマー（今日は）」

とたんに女は、ペラペラと広東語で話しかけてきたが、こちらは広東語は、できないから、

「アイアム、ジャパニーズ」

というと、女は多分そうだろうという顔で「コンニチワ」

といって白い歯を見せた。足の長い椅子に

腰かけて足を組んでいたが、ミニスカートからストッキングの先の豊かな太股をチラリと覗かせたところがセクシーだった。

随円形の井戸から下を覗きこむような形で下の、ばくちを覗き込んでいる他の男達は、ばくちに夢中である。

「ファンタン、やる？」

女の子がいうので、私も十ドル札を、二階のディーラーに渡して、

「三へ十ドル」

というと、他の客は一へ二十ドル賭けた。

ディーラーは金を受け取ってザルへ入れ、

「一へ二十ドル、三へ十ドル」

と下のディーラーに言って金を渡す。

下の金が張り終わったところでサッと、八十個あまりのボタンが、つぼざるの下から現われた。竹ベラで山になったボタンを平にならして行く。途端に二階のディーラーは顔をしかめ、二十ドル張った客と、私の方を眺めて指を二本、出して見せた。当たりは「二」だというのである。

坐匠が、竹ベラでボタンを四つ宛、取りのけて行って、残りを見ると、果たして残りは「二」であった。八十個もあるボタンがサッと平になった瞬間に、残り数を読み取る技倆

は、さすがはプロだと思った。私は四分の一の倍率を当てるのは困難だと思い、それから「1・2」とか、「2・3」のコーナーとかへ賭けた。これだと確率は五十パーセントになる。その代り配当は二倍になる。これでやって、当たると倍掛けして七十ドルばかり勝った。

このへんが潮時だと思い、腹も減ってきたので、女を飯に誘うと、ついてきたので一階のレストランに入った。立って一緒に歩くと私より三センチほど背が高く、上体は、よく肉がついているが、足はスラリとしていて、凄く恰好がよかった。

傾国の美姫

女の名は李芳春と言った。

英語も日本語も少し話せた。

「ホテルどこ？」

「リスボアだよ」

「ああ、わたしも、そうよ」

芳春は、ニッコリ笑った。ただし、彼女はホテルリスボアのナイトクラブのショウダンサーで、お客ではなかった。

「道理で君は、きれいだと思ったよ」

「ありがと。あたしの踊りを見に来て下さいね」

「ああ、必ず行くよ」

彼女は日本のことを、いろいろ質問してきた。

「わたし、日本へ行きたいわ」

「ぜひ、おいでよ」

「でも遊びに行くのでない。働きに行くの」

「ホウ、何して働くの」

「ストリップライザー。ウフフフ」

なるほど彼女の働き口としては一番、手っ取り早いだろう。

「アサヒ会社、知ってる？」

「アサヒ会社？ 知らないなア」

「有名よ。大きいよ。ニュースペーパーの会社よ」

「ああ、朝日新聞だろう」

「そうそう。キタカミさん、知ってる？」

彼女は北上なる青年に会いにくのだと言う。彼女が香港にいた頃、北上青年と一週間ばかり、つき合ったが、その青年が忘れられないのだと言う。

「結婚するつもり？」

「ええ、でもキタカミさん、OKしてくれるか、わからないわ」

「中国人と結婚しないの」

彼女は淋しく笑った。とにかく日本人が凄く好きだという。どうしてと聞くと、

「日本人は、みな紳士よ。中国人でもアメリカ人でも、すぐセックスを要求するわ。けどものみたい」

「日本人だって、全部が紳士じゃないよ」

「でも好き」

「ストリッパーになるって、どうやってストリッパーになるつもり？」

彼女はハンドバッグから名刺を出した。

「この人のとこへ行くの。一日、二万円のギャンブル出すから来てくれ、と言われてるのよ」
見ると、それは関西ストリップの興行をしている男の名刺だった。

「だが、この人の言うストリップはオープンだよ。きみ、オープンをやるつもり？」

私はオープンの説明を手まねを使って説明した。

「やるわ。生活のためよ。しかたがないわ」

と彼女は、わりきって言った。彼女が日本でオープンをやったら確かに受けるだろう。

いま、日本にはロクなストリッパーのスターがないから……。

そろそろ、楽屋入りする時間だと言うので

彼女と一緒にホテルに帰った。

カジノに行くと見ると、昼間から賑わっていた。昔は昼間はガラガラで、お客がいても一ドルばかりのお遊び連中ばかりだったが、いまは昼間でも相当、大きな勝負が展開されている。そこへ日本の観光団がドカドカと入ってきた。男ばかりの観光団で、我々のグループとは違う。それと前後して、カジノに花が咲いたように我々のグループも見物を終わってやってきた。何しろ、若い綺麗な女性の団体とあって、カジノ側は大歓迎のていだった。門馬氏もやってきて早速ルーレットの台に、かじりつく。日本人はルーレットは、よく分からないとみえて、みな「大小」や「ブラックジャック」の方へ、たかっている。

八時頃までやったが、私は一進一退、門馬氏は二百ドルほど、負けた。

「食事しましょう」

地下のナイトクラブへ行った。

マカオのナイトクラブにはホステスはいない。私はショウのはじまるのを待った。

間もなくステージにライトがつき、派手なバンドの前奏でショウが、はじまった。

七、八人のダンスガールがサンバのリズムでテンポの早い踊りで幕開きとなった。

私はショウを見るためにステージに近い席を、とっていた。

見ると、いるいる。李芳春が中央で踊っている。ステージ用のメイクアップをすると、また一段と綺麗になり、スタイルも抜群で、群舞の中ではスター格だった。

彼女は、すぐ私を発見した。踊りながら私に微笑みかけた。

「ああ、あの娘ですか。こりゃ、凄い」

門馬氏も芳春のチャーミングな容姿に驚いたようだった。

ショウは中国人の男性歌手が、イタリアのオペラ歌手のように声量一ぱいに歌ったり、女性の歌手が、日本の歌謡曲を中国語で唄ったり、その間に、また芳春達の踊りが入り、まあ言葉は違っても、日本のキャバレーでやってるショウと、あまり変わりはない。私は李芳春の出でくる踊りだけを楽しみに見ていたが、終わりごろになって、ショウの流れがプツンと切れ、ステージに暗黒と沈黙のひと時が、ポツカリと穴をあけた。

「オヤ？」

どうしたのかな、と観客が注意をステージに向けた時、マイクのボリューム一ぱいに、「さて、皆さま。いよいよ、お待ち兼ね、傾

ナミオM画廊

『悲鳴の拳がる至福』

春 川 ナミオ



国の美姫、劉騎麗の登場です！」

これは英語でも繰り返され、門馬氏が訳してくれた。

舞台の一点にスポットが当てられる。

そこに黒のドレス、くろいエメラルドのネックスレスをつけた女性が、腕組みをして立っていた。

ハッとするような美貌であった。

私は、思わず門馬氏と顔を見合わせた。

その顔は、東洋的ではなく、むしろイタリア系に近いもので、シルバアーナ・マンガーノとソフィア・ローレンと一緒にしたような彫りの深い顔立ちであった。

スカートは靴まで隠れるように長かったが上半身は、むっちりとした二の腕から、乳房が半分のぞいている豊かな胸のあたり、黒のワンピースと強烈なスポットで、抜けるように咬い肢体だった。

腕を胸の下で組んだまま、ステージの中央に、しずしずと歩み寄り、中国歌曲を、低い巾のあるアルトで唄い出した。

これまでの中国の女性歌手とは、全く異質のもので、この劉騎麗という歌手は、顔を現わした時から、客席に向かって頭を下げなかった。

中国でも日本の歌手でもそうだが、客に媚びるように笑顔を決やさないものだが、この女性は全然、笑顔を見せなかった。

傲然と客席を見下ろし、睨みつけるようにして唄う。だが、その気高さは、たとえばもなく、客席はシーンとして、ただ彼女の美貌と、聞き手の筋肉と神経を、ゆさぶるような唄声に魅入られて行った。

マイクは身体につけているのか、置きマイクを使わず、ゼスチュアも殆どない。組んだ腕を、ほぐさず、一曲唄い終わると、スポットがサッと消えた。その瞬間まで彼女は笑顔のかけらも見せず、頭も下げずに終わった。

アンコールの拍手が、はげしく鳴った。だが彼女は、それに応じず、舞台はパッと全部の照明がついて、フィナーレの踊りが始まっていた。

私と門馬氏は、また顔を見合わせた。

「凄い女ですね」

いつとき、私は愛くるしい李芳春が目の前で踊っていることさえ忘れてしまった。

「あのひとに是非、会ってみたいですね」

門馬氏の目も情熱的に、ひかっていた。

「あれは、ほんとに中国人かしら。ハーフじゃないのかな」

私と門馬氏は、しばらくは劉騎麗のことで夢中に話し合っていた。

ふと、香水の匂いがしたので振り返ると、李芳春が、イブニングに着替えて、にこやかに立っていた。

「やあ、よく来てくれたね、サアどうぞ」
傍で見ると、李芳春も、また美しい。酒をすすめたが、まだもう一回シヨウがあるの

彼女は酒を飲まなかったから、食事をとってやった。

話は、いつの間にか劉騎麗のことになってしまった。

「あのひと、ほんとの中国人ですよ。上海のお金持ちのお嬢さんで好きで唄ってるのよ」

「一度、紹介してもらいたいな」

一時間ばかり飲んでいると李芳春が、次のシヨウに出るからと言って席を立った。

我々も引き上げようと勘定を頼むと百ドルちよつとだった。私が払おうとすると門馬氏が「ぼくが……」と百ドル札を出した。

「じゃあ、割り勘で行きましょう」

百ドル札二枚、合わせて李芳春に渡し、

「払っておいてね。お釣りは、いいよ。あとで劉騎麗に会わせてくれよね。私達はカジノにいるから」

と言って、クラブを出た。

神 技

カジノは一階にも増設されたが、やはり地階の方が満員であった。ルーレットも幸い良い席が空いたので坐ったが、途中でやめて席を立つと、二度と席がとれないような混み方

なので、私と門馬氏は九時から午前一時ごろまで、ぶっ通しでやった。

私は少しプラスしていたが門馬氏は惨敗で千五百ドルほど負けていた。

二人とも李芳春からの連絡を心待ちにしながら、やっているの、気が入らないことも負けの原因だった。

「明朝は六時半、朝食。七時出発ですから」
旅行社の人やガイドが注意してまわる。

午前二時頃になると、客は三分の一に減った。ルーレットを囲んでいた客もポツリポツリと陥落して、今は我々の他に二人ほどの中国人が頑張って、やっている。皆、相当、損をしているようである。

「遂々来ませんでしたね」

門馬氏は落胆の色が見えた。

「相当お高く、とまってる女ですね。それにしても李芳春だけでも来そうなものだが」

ブラックジャックの方は大きな勝負が行なわれているらしく一ぱいの人ばかりで、時々歓声が、あがっている。

と、そこへカジノがパッと明るくなったように五人のすばらしい美人が入ってきた。それを囲んで七、八人の紳士がドヤドヤと入ってきた。

「あ、来た」

五人の中に、ひときわ後光がさすように輝いて見える劉騎麗の姿があった。真紅のドレスに大粒のルビーのネックレス。靴も赤だった。全く目をみはる美しさだった。

李芳春も混じっていた。彼女が私に向かってウインクしたのを、危く見逃がすほど、私は劉騎麗に見とれていた。

彼女を中心とする一団は、まっすぐカードのテーブルの方へ行ってしまった。

「やっぱり、来ましたね」

「だが、とりまき連中が大変だな。あれじゃ我々の方へは来ないんじゃないかな」

私達はカードの方を気にしながら、ルーレットに賭けていたが、十分ばかりすると、劉騎麗と李芳春が、カードのテーブルを抜け出して、ルーレットの方へ、やってきた。

ディーラーが、すぐ立ってきて最敬礼し、彼女達のために椅子を引いて、席をつくった。

劉騎麗は門馬氏の隣に坐った。

「お傍に坐らせて頂いて、光栄です」

門馬氏が英語で挨拶したが、彼女はニコリとも、しない。

つと彼女は門馬氏のチップを、つまんだ。十ドルチップを赤の23に、百ドルチップを

B列に賭けた。まるで自分のチップを、あつかうような無難な動きであった。門馬氏は黙って彼女のなすままに委せている。

この時ルーレットを廻していたのは五十才ぐらいの最年長のディーラーで、このカジノの中では一番、うまいディーラーだった。

客が賭け終わったのを見、彼女が23に張ったのをチラリと横目で睨んだ時、この眠そうな顔をしたディーラーの顔が一瞬、緊張した。唇をへの字にゆがめ、廻転盤をキッと見つめて左手でハンドルを慎重に廻し、機を見てクイーン

金属音を立てて象牙の球は、目にもとまらぬ早さで廻りはじめた。

この時、私はサッと勘が、ひらめいた。老ディーラーは確かに「23」を狙ったのだ。

私は、すばやく23に十ドルチップを二枚のせ、更にB列に百ドルチップを、のせた。

こうなったら老ディーラーの腕を信頼するほかない。

お断わりしておくが、この場面は私が実際に目撃した事である。話の筋を面白くするためのフィクションとしないで頂きたい。

球は勢いよく廻っている。ディーラーの投げ込んだ球は、二十九秒間、廻っている。投げ

込んで残り十秒くらいになると、チンチンとベルがなり、それからチップが張れない。

真のルーレッターは、ディーラーが投げこんでからの約二十秒間に勝負するのである。

カラカラカラ

乾いた音を立てて白球は数字の並んだホールへ転がりこんだ。

23!

まさしく23。いや、もののみごとに23に投げこんだのである。

「おう! ブラボー!」

私達は思わず立ち上がり、握手した。

門馬氏のところへ六百六十ドル、私のところへ千二十ドルのチップが運ばれた。

李芳春が悲鳴に近い歓声をあげた。

門馬氏は喜びのあまり、劉騎麗に握手を求めたが、彼女は相変わらずニコリともせず、氷のように冷たい表情を変えなかった。

私は老ディーラーの妙技に、感嘆の意をこめて見つめた。老ディーラーは23が出た瞬間、脇

を向いて、ほんの少し満足の笑みを浮かべただけであった。老ディーラーと反対側には、チップを配る若いディーラー達が四人、いた。彼

等でさえ、敬意の目で老ディーラーを見つめていたのである。

——可哀想な男の便り——

妻が私を苛めます

繁木 気次朗

私は只今、失業中です。三カ月前に、勤めていた工場をクビになったのです。私は安い月給分だけは働いていたつもりですが、妻は、私を怠け者だといいます。そして、今働いているバーで面白くないことでもあった時など、帰ってくるなり、夜中でも明け方でも構わずに、私にあたり散らして暴れます。私は隣に気兼ねして、されるままになり、逆らわないようにしています



写真、絹川文代のサディスティンぶり

が妻は、それが余計に腹がたつ、といつてめちやくちやに私を、いじめます。食べさせて貰っているのだから仕方ないとは思いますが、叩かれたり抓られたり縛られたりで、体中アザがいっぱい出来ました。それでも妻は最後には、きつと抱いてくれますが、先日、あんたはマゾよ、といって貴誌をフトンの中に持ち込んできました。店のお客がくれたそうですが、翌日、ゆっくり読んで私は、妻こそサドだと思い、私はただ苛められても我慢しているだけだと思いました。けれど、妻は私がマゾだいい張ります。どちらが正しいのでしょうか。

門馬氏は配られたチップの山を、

「どうぞ、お使い下さい」

と劉騎麗の前に押し出したが、彼女は見向きもしなかった。ただ、その中から百ドルだけ取って、現金に換えた。その百ドル札を、老ディーラーにチップとして投げ与えた。私も懷中から百ドル札をチップとして老ディーラーに贈った。

「なんだ、なんだ」「どうしたんだ」

李芳春の悲鳴？ を聞きつけて、ブラックジャックをやっていた連中が、女を交えてドヤドヤとルーレットの方へ集まってきた。

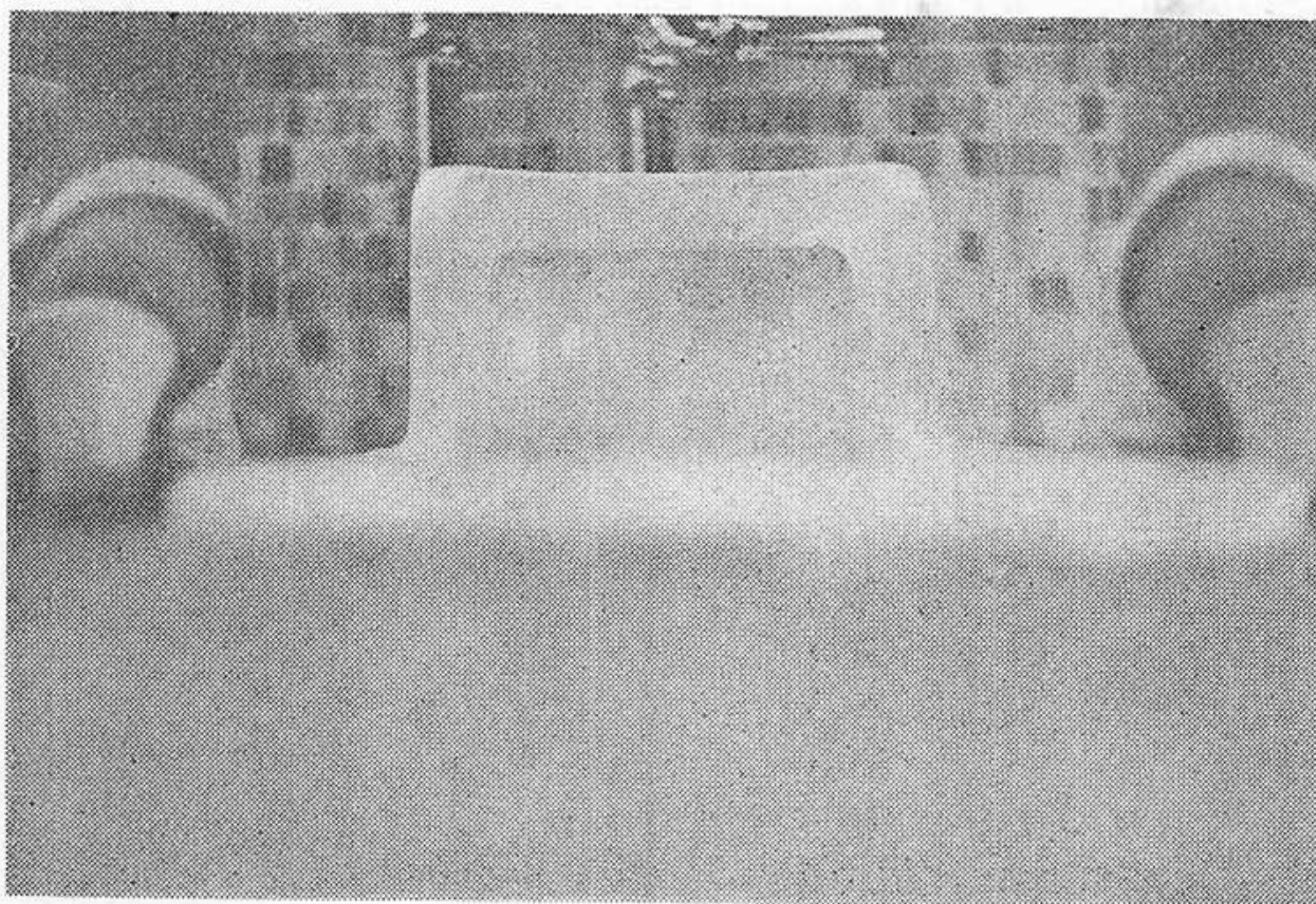
李芳春が何か早口で説明する。その連中が皆ルーレットの席へついてしまい、五百ドル札が何枚も投げ出されて、チップがドンドン売れた。俄に、さびれていたルーレットが景気づいてきた。

門馬氏も負けを一気に挽回して勢いづいたが、その時、後から李芳春がソツと囁いた。

「もう、やめましょう」

皆がワイワイ言ってる中で、劉騎麗はスツと席を立ち、李芳春が、あとに従った。

私達も急いでチップを現金に換えて、劉騎麗のあとを追った。この劉騎麗こそ、世にもたぐいなきサジスチンだったのである。



——(写真は福島和男氏提供)——

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

密室(トイレ)

での女の生態

豊田 二浪

私は今春、大学受験の為に上京して来たのですが、試験の結果は、国立、私立大学共に失敗してしまいました。しかし、自分の頭がそれほど悪いとは私には、どうしても信じられません。

実家はあまり豊かな方ではありませんが、来年もう一度受験したくてそのまま、東京で下宿生活をすることにしました。

家からの仕送りは、物価高の東京で予備校生活を送るのには、とても充分という訳にはいきません。そこで、私はビルの清掃のアルバイトをすることにしました。私の下宿は予備校から一時間程の距離ですが、アルバイト先は予備校から歩いて十分と掛かりません。

私としては、丁度、具合が良かったのです。

私は毎朝早く、下宿の不味い朝食をすませてから予備校へ通います。予備校の授業は、週の前半、月火水は午前中で、あとの三日間

は午後の三時で終わりましたので、私は近くのパン屋で、パンと牛乳を買って、アルバイト先へ急ぐのが日課になりました。

ビルの清掃というアルバイトは、一見すると、あまり良い仕事のように思えませんが、やってみると、案外呑気なもので、まあ、面白くはありませんが、それほど辛い仕事でもありません。唯、私はまだ若いので、汚れた作業服を着て、モップなどを持っている時などに、同じ若い世代の人達と、バツタリ視線が合ったりなどしますと、少々恥ずかしい思いをすることがあります。けれども、慣れてしまえば、それも、べつにどうということもありません。

ビルの地下にある控え室で食事をした後で作業服に着換えて、バケツやモップ等の清掃道具を持ち、階段を上ってゆくのです。

主な仕事は、階上の廊下や便所を掃除することです。その職場では、私の他には、二人の年とった男の人を除いて、あとは全部、中年以上の女の人達ばかりで、若い男性というのは私一人でした。

私は彼等と気まずい関係になって、このアルバイトを失いたくなかったので、なるべく無駄口をきかず、おとなしく目立たぬように

振舞っていました。

そのアルバイトをやり始めてから、一カ月ばかり経ったある日のことです。私はいつものように予備校が終わった後、地下の控え室でパンと牛乳の食事をすませ、便所の掃除に取りかかりました。

毎日やっているのですから、そんなに丁寧にやる必要はありません。唯、水を流して、タイルを洗い、あとはトイレトペーパーを補充し、ゴミ箱の中身を片づけければいいだけです。

男子便所の方は、なんともありませんが、女子便所の方は、なるべく人と出会わないように急いで、やってしまわなければなりません。偶々、その日は水洗便所の流れ口が詰まってしまう、私はゴムの吸引棒を持って、ゴボゴボと音をさせて詰まった物を一生懸命、取り除いていました。

すると、その時、ハイヒールのタイルを踏む音が、あわただしく近づいてきて、駆けこむように女の人が、私の仕事をしている隣の入室に入ったのです。そして、鍵が掛かり、気ぜわしく下着を降ろす気配がすると同時に激しい下痢の音と共に、強烈な臭気が漂って来ました。

その女の方は、余程我慢をしていたのでしょう。それこそ、恥も外聞もない、といった待ち切れない様な風に見えました。

私は仕事をするのも忘れ、じっと隣の様子を窺っていましたが、その内に、トイレトペーパーを切る音がして、水流の音と共にドアが開き、女の方は何事もなかったように靴の音も高く出てゆきました。

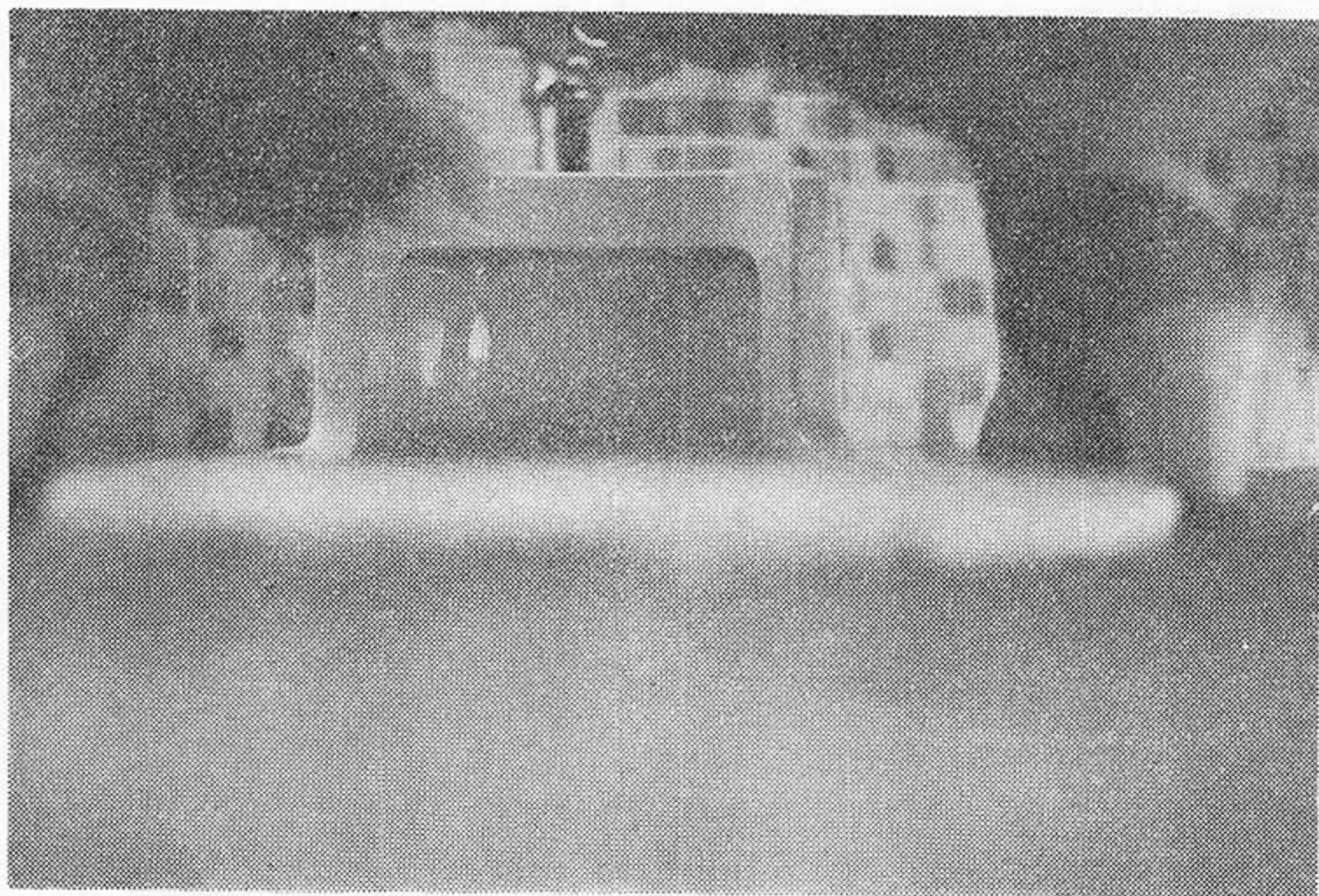
私は恥かしくて、とても出て行って顔を会わせる勇氣などはなく、女の方が便所を出て行く迄、内側から鍵を掛けて、じっとしていました。

私は胸の動悸が、なかなか、おさまりませんでした。私は、ぼんやりした、うつろな頭で、仕事を始めましたが、その内、とんでもない考えが頭の中に浮かんできたのです。

それは、最初は、なんということもない、唯もやもやとした感情でしたが、つい先程の情景を思い出している内に、女の下着を降ろす姿がパツと頭の中に現われたのです。そして、その後に現われた光景は……。

私は、その頃、まだ、いわゆる女というものを知らなかったのです。

19才といえば、もう知っていても、おかしくはないのですが、私の場合は、まだそのよ



うな機会に、めぐり合えなかったのです。だからといって、私には、そういう事に対

する興味がなかったというわけではありません。いや、むしろ反対に、その様な機会に、

めぐまれていなかったからこそ、なおのこと、そういう事に対する欲望は、ますます、高まっていったのです。

私の想像は果てしなくエスカレーターしてゆきました。そして、とうとう最後には、どうしても、あの密室での女性の行為を見なくては気が持たなくなってしまうました。

その時に、あの素晴らしく巧妙で幼稚な考えが私の頭に浮かんだのです。

近頃のビルなどの水洗便所は、全部かどうかは知りませんが、仕切りの壁が床のタイルの上に、2センチちょっと位までしかありません。ひどいになると、3センチ近くもあいている場合があります。

私は、その隙間から隣室を覗き見ようと思ったのです。まさか床のタイルの上に顔をつけて見るなんてことは、出来る筈がありません。そこで私は鏡を利用することを思い付い

たのです。

小さな鏡を仕切り板から3センチほど離して斜めに置き、頭を仕切り板に、ひっ付けて鏡を見ると、隣はほとんど丸見えです。

私は自分の工夫に夢中になっていました。毎日、掃除の途中で、鏡をポケットから取り出しては、隣室を覗き込んでいました。しかし、いざ実際に人が使用中に実行してみる事には相当の決心と勇気が必要です。

まず第一に、鏡が見付けられはしないかという心配がありますが、これは私が何度も実験した結果、ほとんど大丈夫だという確信を持てるようになりました。

普通だったら、女子便所に男性が入ることは問題ですが、私の仕事の性質上、これは、そんなに難しいことではありません。そして仮に中に居るのが見つけれられたとしても、掃除しているのだと説明すれば、誰からも怪しまれる恐れはありません。

私は何度も実行しようと思っては、ためらうということを経験しましたが、中を覗いてみたいという欲望は、日々に強くなるばかりです。遂に、一度でいいからやってみようと決心してしまいました。

それは八月の始め頃で、ちょうど私の通っ

ている予備校は夏期休暇でしたので、私は朝早くからアルバイトに来ておりました。

朝の十時前迄に、廊下などの掃除をすませて、私は急いでトイレの掃除に取りかかりました。この時刻が便所を利用する人が一番少ない時なのです。

私は清掃道具を婦人用トイレの隅に置き、三室ある便所の一番手前の一室に入り、内側から鍵を掛け、ポケットから鏡を取り出して隣室の様子を窺いました。以前に試^{ため}してみたように、中の様子が手に取るように鏡に、はっきりと写ります。

中で、じっと身をひそめて、誰かが入ってくるのを待っている緊張感といったら、それはもう、私が今までに経験した中で最高のものでした。

やがて、十時になりますと、そろそろ廊下のあたりに、人の話し声が近づき、便所のドアの開く音がして、二人か三人かは分かりませんが、足音が聞こえてきました。彼女達はどうやら化粧を直しながら、今日の退社後の予定を話し合っているようでした。

映画とか、ボーリングとかいうようなことが耳に入ってきます。数分の間、そういうような話し声が聞こえていましたが、その内に

一人が私の居る前の一室に入ってきました。

私は夢中で鏡を見つめました。二本の、キューツと引きしまった足首が写っています。下着を降ろすような音がして、鏡の中に、突然、真白な大きいお尻が写りました。それは本当に大きなお尻で、すき透るように色が白くて、青い静脈が、うっすらと写っています。実際には、そんなにゆっくりと鑑賞している暇などありません。

お尻が写ると同時に、丸いお尻の二つの小山が谷をなしているその間から、一条の白い線がシュルシュルという音と共に、激しく迸り出たのです。

それは、この世で最も清い液体、まるで神水のように思えました。

トイレトペーパーを切る音がして、心持ち腰を浮かした、その丸いお尻の向こう側からマニキュアをした可愛い白い手が延びてきて、小じんまりと生えそろうっている神秘的な草むらを後から前へ押えるようにしてぬぐう様子が、くっきりと鏡に写っています。

すると、まん丸いお尻が消えてなくなり、すらりとした二本の足が写りました。

私が急いで鏡の角度を変えてみますと、むちむちと脂肪の乗った肉感的な太腿に、真白

なパンティのゴムひもが、くっきりと喰い込んでいるのが見えました。

その上をベージュ色のパンティストッキングが覆い、さらにスカートが、かぶさっていました。ゴーツという水流の音と共にドアが開き、女の人は出て行きました。

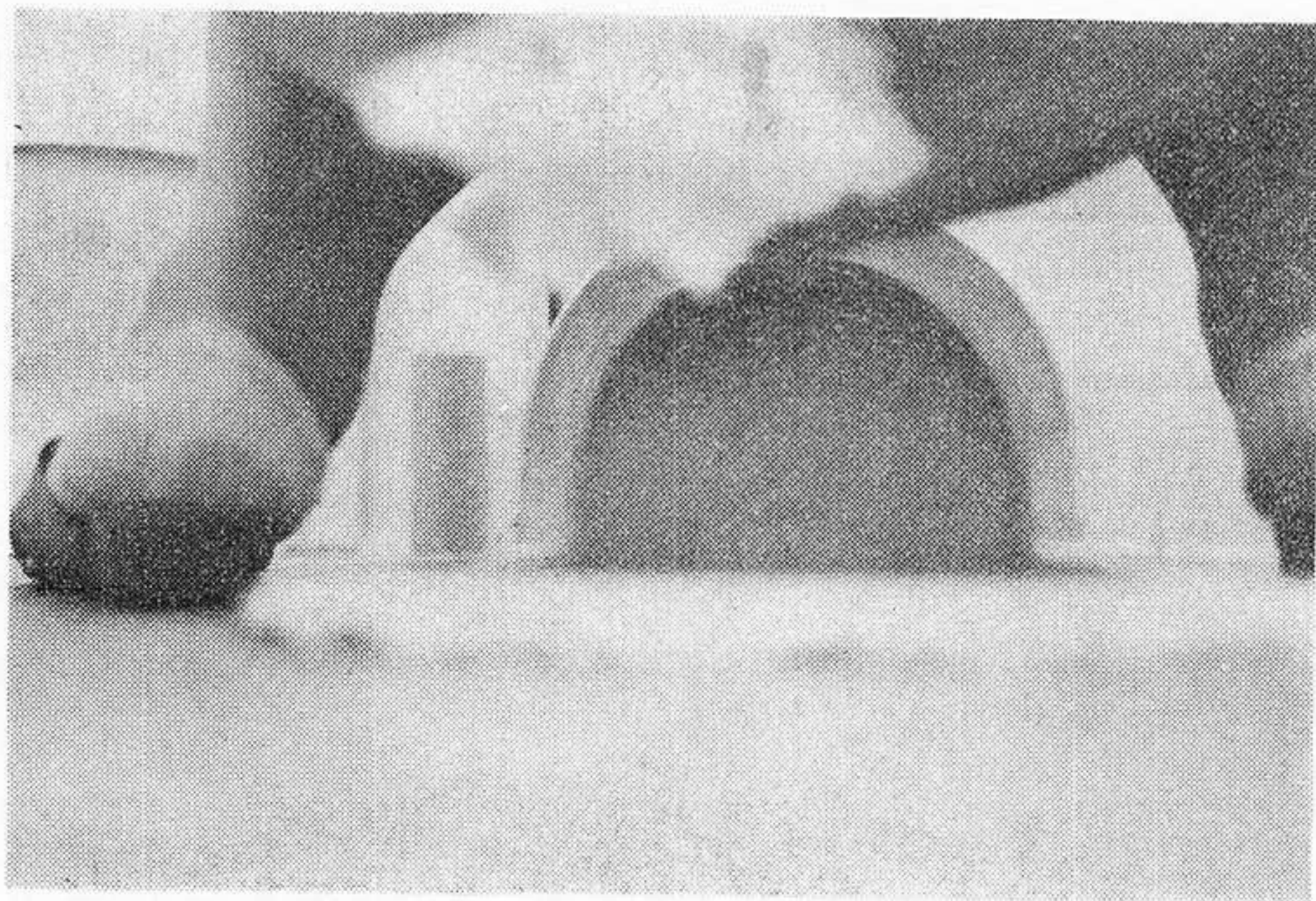
化粧を直していた女の人達は同僚が出て来たので、また話の続きを、やり始め、やがて笑いながらトイレを出て行きました。

私の心臓は早鐘を打つように、ドキンドキンと荒々しく脈打っていました。今の光景を思い出そうとしましたが、あまりにも強烈な印象で、頭の中では、何がなんだか分からないといった状態です。

それから三分と経たぬ内に、トイレのドアが開き、また一人が入って来ました。今度は残念ながら私が居る場所の一つおいた向こうの一室に入ってしまった。それでも、私は先程の状景を思い出して、今行なわれているであろう女性の排泄行為を想像するだけで凄く興奮しました。

と、その時、また人が入って来て、すぐに私と先客との間の一室に鍵の掛かる音がしました。私はまた、じっと鏡を見つめました。

今度は、白と小麦色のコントラストの鮮か



な、引きしまった、それでいて、ポチャポチャとした感じの可愛いらしいお尻が現われます。

した。

よく見ますと、ビキニのパンティの形が白

く焼け残っているお尻の丁度、真中あたりに、何やら紙屑のようなものが、こびり付いています。多分、前に用を足した時に、あまりに強く拭いたのでトイレットペーパーの一部が千切れて草むらの中に、もぐり込み、それがパンティに押し上げられて、尻たぶに、こびり付いたのだでしょう。

私には、それがとても印象的でした。

私はその日、全部で五人の女の人のお尻を拝見したのですが、その中で一番、私を引き付けたのは、三番目のお尻でした。それはもう言葉では言い表わせないような素晴らしいお尻でした。

形といい、色艶といい、週刊誌のグラビアなどに載っているような、くたびれたヌードのお尻などとは、まるで違います。熟れた果実を見る思いです。マシヌマロのように、指で押えると、ぐっと指を包み込んで

しまうような、それでいて跳ね返すような弾力性があって、いわゆる餅肌というのでしょうか、きめの細かい豊満なお尻です。

私は、その豊満なお尻に、顔をすりつけてその肌の感触を味わい、香りを胸一杯、心ゆくまで吸いこんでみたい。そして、お尻につづく、豊かに肉づいた二本の太腿に首をはさみこまれて、その秘境の谷間に顔を埋め尽したい……というような強い誘惑に駆られたほどです。

私が、まばたきもせず鏡を覗き込んでいますと、隣室からは密かにウツ、ウツという押し殺したような声が洩れ聞こえてきます。

すると、白い二つの小山の間、神秘的な亀裂から、小さな固形物が絞り出されるようにむっくりと現われ始めました。そのせいか、うすく静脈が、すき透った白い肌が、ほんのりと色づいて見えます。

それは、みるみる内に巨大な固まりとなつて、黄金の輝きを見せています。とみるや、急に途切れて、便器の中へ吸い込まれていくように真さかさまに落ちて行き、その底に溜まっていた水がポチャンと飛沫を上げます。やがて、あの独特の臭いが漂って来ます。私は吸い込まれるように鏡を見つめています。

した。すると、その臭気を洗い流してしまふかのように、一条の清流が迸り出ました。

強烈な勢いで便器を打っています。

私の頭は、もう何も考えることを忘れてしまっていました。

目前に行なわれている行為が、夢ではなくて今、実際に私の見ている前で、本当に行なわれている事なのか、どうかさえも私には判断できませんでした。

それほど、この初めて見た行為は、私の頭の芯まで、しびれさせてしまいました。

私も、このような排泄行為を雑誌などで読み、頭に思い浮かべて見たことはありませんがけれども、想像したものと実際に見たものと

では、まるで異なります。

よく百聞は一見に如かずなどと言われますが、正にその通りです。

人間の想像力にも限界があります。どれほど詳細に、精巧に思い浮かべたとしても、実物を眼前に突きつけられれば、その想像が、如何に空中の楼阁に過ぎなかったことを、思い知るでしょう。

私の場合が、ちょうど、その通りだったのです。

この日に見たことの中で、もう一つ、私の印象に残っていることがあります。そして、その事の為に私は自分の行為に対して、一種の罪悪感を持つようになりました。それは五

〔伝言板〕

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありましても最近号に掲載していないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。

番目に入って来た人でした。

彼女の行為を盗み見た後では、私はそれ以上つづけて鏡を見ることに耐えられなくなるほどの自己嫌悪を感じました。

それは女の宿命とも言うべき、生理を処理する光景でした。

彼女は生理パンツを降ろすと、少し股を広げて、懸命に自分の前を覗き込みながら後始末をやっていました。そして、ハンドバッグから新しいナプキンを取り出すと、自分の股深くはさみ込んで生理帯を引き上げました。

私は彼女の秘密を覗き見たように思い、同時に自分自身の行為に、言い知れぬ嫌悪感を抱きました。

彼女が出て行った後、私がすぐに便所を出たことは言うまでもありません。

その夜、下宿の蒲団の中で、女体に対する興味が増々激しくなつてゆき、もう一度見たいという強い誘惑と共に、自分の行為に対する罪悪感もまた、一層、胸にひしひしと感じられるのでした。

この二つの思いが、同時に頭の中を駆けめぐり、悶々として、なかなか寝つかれませんでした。



第五十四回

フローテイング

楽園にて禁断の木の実を摘んだのは、イヴの罪である。それは、女の業（ごう）となった。それ以来、女は仔をみごもる苦しみを味わなければならぬ。自らの体の芯部に、この業の果実は秘めやかに育って行く。月満ちて生まれてくる新しき生命は、肉の営みの帰結としては、余りにも聖なる欲びを母体に約束するであろう。それだけに、その部分は神聖で不可侵であった。如何なる暴行者といえ

ども肌を汚すことは出来ても、仔の宮居を凌辱することは出来なかった。それは母性そのものであったといってもいい。

林美玉の受難は、内臓そのものに加えられたという点で、百戦練磨の彼女を完全に圧倒し去ったのである。呂親分などから、蒙ったあの酷い拷問すら、見事に耐え抜いた林美玉であったが、このように酷薄な意図に向かつては所詮、敵すべくもなかったのである。

林美玉は、もはやシンジケートの女ボスではない。犯した罪の当然の報いを、戦慄しつつ待ち受けている、一介の罪人でしかなかった。

前号まで「秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され、巧妙な統制管理を受けている。かつて日本のジャンヌと呼ばれた学生運動の女闘士、小林敏子も今は有明に忠誠を誓ったアマゾン士官である。彼女は自分の姉を殺した麻薬シンジケートのボス、とはいっても可憐な少女に見える林美玉にひき会わされ、姉の力タキとばかり内臓責めに力を注いだ。けれども……」

た。そして、その罪の償いとして、想像を絶する責め苦が、執念深く続けられ、その結果として、彼女の腹膜は、通常の妊娠時を、はるかに上回る程の拡大を余儀なくされるのであった。

その責め手にさせられたジャンヌは、あまりの残酷さに、さしもの復讐心はどこへやらただひたすら、つきあげてくる激しい嘔吐をこらえるのがセイーぱいなのである。

とうとう、林美玉の顔色が紫色に変わり、悲鳴さえ、出せなくなってしまう。失神寸前であろう。そのとき、それまで黙って見ていた有明が、やっと口を開いた。

「どうかね、今日はこの位で許してやってもいいんじゃないかね」

まるでジャンヌに、たずねている調子なのだ。とんでもない。こんな、ひどいことをやれと命じたのは有明の方ではないかと、ジャンヌは心に思う。しかし、だからといって、そんな口答えなど許されるものではない。

「ハ、ハイ」

といいながら、ポンプを押す手を休めた。パンパンに張り切ったお腹では勿論、前にかがむことが出来ない。そうかといって転が

ってしまつと、もっと苦しい。臀を床につけると一層、押し込まれるような感じでキリキリと激痛が走る。いても立ってもいられないというのは文字通り、こんな状態を指すのかも知れぬ。わずかに息のつける姿勢というのは、膝立ちになって脊骨を、やや反らせて、あの妊婦がよくやる不様な恰好しかない。

辛うじて、その態位を見つけ出した林美玉は、それでも短い息をゼイゼイいわせながら苦痛と斗っている。その耳元に口をつけた有明が、

「ジャンヌは、もっとお前を責めたがっているが、私が止めさせてやったのだぞ。その代り、何でも私の言うことを聞くか」

ジャンヌにわかったら啞然とすることだったけれど、彼女には福建語が全くわからないから、有明のデタラメを聞いても平然としている。

一寸でも現在の苦しみから助かりたい一心の林美玉は、あわてたように叩頭して、

「是々々（シー、シー……）」

と叫んだ。

「よし。これからのお前はブタだ」

といって、ジャンヌを振りかえった有明は

「あの隅にある、箱を持ってきてくれ」

と命じた。ジャンヌが言われた通りに持つてくると、有明は蓋をとって箱を逆さにして中のものをブチまけてしまった。箱の中に入っていたのは、白象牙の撞球玉だった。十五コの重い球は、あちこちにコロコロと散らばって行った。

「サア、この玉を口にくわえて、もとの箱に並べるんだ。五分でやるんだぞ。出来なければ懲罰だよ。いいか、おい、ジャンヌ。ストップ・ウォッチを押せ」

拷問室には、大きなストップ・ウォッチが壁に、はめこんであった。ジャンヌがボタンを押すと、時計は大きなセコンドの音を立てながら、秒をきざみはじめた。

「ウォー」

獣のような声を立てて林美玉が飛びあがった。どんなところに、そんな力が残されていたのであろうか。いや、失神寸前まで追い込まれた内臓責めに、そんな余力があろう筈はないのである。それなのに彼女を駆り立てる原因は何か？ 拒むことを許されない絶対的命令は、今も林美玉に、死力をしぼり出させるだけの威力を持っていたのだ。それにも増して、怖ろしい懲罰は今までの責め苦を更に

上回るものであろうことは疑いを入れない。

しかし、哀れな林美玉に、この命令は、はじめから出来ないことを承知の上で与えられたのである。第一、直径6センチもある重い象牙玉を啜えることが如何に至難のことかは先ず試してみられたらいい。その上、臨月のような太鼓腹では、床に屈み込むのが大変なのだ。しかも、後手、膝枷の拘束された肢体である。どうして痛めつけられた腹部を、かばうことができるだろうか。突き出した臍のあたりが先ず、ザラザラのコンクリートに触れ、それをギュッと、おしつぶすようにしなければ、口が床に届かないのだ。

空しい努力だった。大変なエネルギーの消耗だった。柔らかな腹部の肌は、内側から押されて、思いきり引っぱられていた。それだけに一層、傷きやすくなっている。その上、床はヤスリのようなコンクリートである。膝頭でさえ、既に破れて鮮血を、したたらせているというのに、どうして腹部の皮膚だけが無傷でいられるだろうか。本当をいって、林美玉は、お腹の皮がスリむける痛みを殆ど感じなかったと言ってよいであろう。むしろ、彼女は自らの腹が破れて、この苦しい、おぞ

ましい空気の玉が、一挙につぶれてしまうように願ってさえ、いたのだった。

肉体が蒙った犠牲に比べて、林美玉の収獲は、あまりにも貧弱だった。顎が外れそうに口を開いたとしても、重い象牙の球は、くわえきれない大きさだった。唾に濡れてツルリと、すべってしまう。唇を密着させて息を吸い込んで、やっと持ちあげることができる。激しい息使いで、一寸でも吸気がゆるめば、ストンと落ちてしまう。そうしないためにはすぐ顔を上へ向けて球を落とさないように支えるしかない。そうしてから、横目で箱をにらんでヨタヨタといざり、うまく箱の中へ落とし込めればよし、若し箱の外へ転がり出したとすれば、もう一ぺん同じことを繰り返さなければならなくなる。

手が使えれば五秒もかからないことが、五分して漸く彼女が箱に入れた球数は僅か六個にすぎなかった。

ストップ・ウォッチのブザーが、けたたましく鳴る。

哀れな林美玉は恐怖に身をこわばらせながら、悄然と、うずくまった。

「雌ブタめ、大分、汗をかいたな」

冷然として有明が言った。例によって罵声が飛ぶのを覚悟していた林美玉が一瞬、戸惑うような素振りを見せた。

しかし、何でもない言葉の意味が、どういうことなのかは、すぐに思い知らされることになるのだ。

ジャンヌに向かって言う。

「隣の水槽に漬けて、汗を洗ってやれ」

隣の水槽——かつて清水由香や得惠華が連縛でアップアップした水槽だった。(第31回参照)そこへ引き立てられてきた林美玉は、有明の新しい責め手について、ネチネチと説明される羽目になった。

「十六世紀のスコットランドでは、魔女であるかないかを判定する方法として、フロート・リングが採用されていた。それは容疑者を全裸に剥き、左手首を右足首と、右手首を左足首と、それぞれ交叉して縛りあげるのだ。そうそう、それでいい」

ジャンヌが、林美玉の四肢を一旦ほどいて有明の言葉通り、再び縛り直していた。疲れ切った林美玉は抵抗する、そぶりさえなく、ジャンヌに、されるままであった。ここでも大きな腹が邪魔をして交叉した手足が、うまくとどかず、縄をかけて無理矢理に引き絞ら

—— オスボーンの水責め (1751年当時のパンフレットより) ——



*They in Marlston Were turning & Pulling of poor Woman about and Humbles and the
Boat holding of hopes that they drew her in by.*

なければならなかった。当然の結果として、その腕や足首が、太った腹にメリ込むようである。圧迫感は、ますます強まるばかりだ。

「ウ、ウ……」

苦しげに呻く林美玉の胸に、太いロープが仮借なく巻きつけられる。天井からスルスルと降りてきたフックに、そのロープが結びつけられる。

「アッ、ウーン」

胸乳に喰い込むロープの痛さに悲鳴をあげる林美玉には、お構いなしに、あぐらをかいたような恰好に固定された彼女の身体は軽々と宙吊りになった。それが横に動いて、満々と水をたたえた水槽の真上に来て止まる。

マイクを使った有明の福建語が、苦痛に堪えきれない林美玉の呻きを打ち消すような強さで、響きわたった。

「当時のスコットランドでは、魔女は水に浮くものと信じられていた。したがって、容疑者は必死に水に沈もうと努力し、そのため、溺死する者も多かったという」

フグ提灯のように、大きな腹をブラさげたまま、ピクピク痙攣してい

た裸身が、一瞬、硬直したように見えた。ようやく有明の意図がハッキリわかってきたからである。浮き袋を体内に、とり込んだような林美玉が浮かないでいられるということは不可能であろう。それも、四肢が自由なら兎も角、獣のように手足を、くぐられた状況では、水を掻いて、もぐることも出来まい。

「おまえが魔女でない証しを立てるがいい」有明の怖ろしい宣告が終わると同時にカラカラと滑車のゆるむ音がして、アッという間に林美玉は水の中に投げ込まれたのである。はじめ、落ちた勢いで一旦は水に沈んだかに見えたが、すぐにグリーンと、異常な速度で水面にあがった。はずみに、水をはねて跳び上がるような感じだった。

哀れな林美玉は、それでも、不自由な手足をバタバタさせて、少しでも水に沈もうとするが、僅かに彼女に出来たことといっては、頭を真下に沈めるだけであった。

もがくたびに、まるで大きな腹と、張り切った臀部の双丘が交互に水面に浮き沈みするのだったが、全く水底に沈むことは遂に出来なかったのである。

「ゲー、ゲー」

異様な音と一緒に、林美玉は呑み込んだ水を吐き出していた。

溺死寸前に引き揚げられた彼女は、仮死状態のまま逆吊りにされていた。もう手足の拘束は解かれていたけれども、もはや、それを動かす力がない。

体腔を圧する空気が、胃や肺にとび込んだ水を激しく押し出しているのである。その苦しみに、女を失神から呼び戻す程の威力があった。吐きながら、彼女は叫んだ。

「タ、ス、ケ、テ……」

「どうする？」

わかり切ったことを、又もや有明がジャンヌに、たずねる。

「ゆるしてやるかね」

あわててジャンヌがコックリする。さすがのジャンヌも、あまりにも凄絶な責めの連続で、姉のカタキに対する恨みを喪失してしまっていた。

「よし、それじゃあ、これを腹に突き刺してやれ。空気を出してラクにしてやるのだ」

小さな金属製の筒だった。先に、注射針がついている。

「いいかい。まよわずに、一気に、まっすぐ突き立てるのだ。どこでもいい」

ジャンヌは、催眠術にかかったように言いなりだった。

腹部のまん中に、突き刺さった筒の中には笛が仕掛けられていたのである。

「ピーッ」

林美玉の腹から抜けて行く空気がチャルメラのような音色を奏でる。それは、残酷な現実とは裏腹に、ひどく滑稽だった。

特別調教

「送ってやろう」

悄然と肩を落としているジャンヌを有明はやさしく自らの戦車に招き入れた。

見事な黄金のボデーは、王者たる有明の貫録に、ふさわしかった。だが、それにも増して素晴しかったのは、あれ以来、すっかり有明のお気に入りとなったアン・ブラウンことE一四三号とアメリカ富豪令嬢、今はF五五四号としか呼ばれない畜位女囚のペアであった。馬具以外は一切を剥き出しにして、その流麗な曲線を惜しみもなく揺らせ、責め手の目を飽きさせない。激しい調教の成果が、爛熟した肉体に結晶したといってもよいであろう。

^{ながえ}轢を素股にはさんで、上体を、やや前傾して一心に牽く、そのまっ白な肌は、早くもウッスラと汗ばんでくる。そして金色のウブ毛をしめらせて、えもいわれぬ起伏に一層アクセントをつけるのであった。

訓練連隊では夜間のことではあっても、予め高橋侍従武官からの電話連絡を受けて、伊藤連隊長以下の幹部が、八文字に開いた正門の内側で徒列して有明の戦車を待ち受けていた。

ところが平素と違って、その戦車が正門の手前まで来たところでピタリと止まってしまったのである。

ジャンヌが正門を乗り渡ることを、どうしても固辞したからである。正門は有明、その他、極く限られた高官のためにのみ開閉される。まして上官が並んで出迎える中を、大轟（大きな旗）の蔭にかくれて平然としていることは、余りにも畏れ多いというのだ。しかし、これはジャンヌにとっても表向きの理由で、彼女の官位が準士官である今日、ただでさえ特殊な目で見られる微妙な立場から、周囲の陰湿な嫉妬や意地悪を出来るだけ、避けようとする、いじらしい配慮が、その背後に

にじみ出ていたのである。

結局、有明も折れて彼女だけ歩いて副門から入ることを許した。しかし、これは後日譚だが、彼女のそうした遠慮でさえ裏目にとられて、有明の鹵簿を止めさせたのは非礼だったとか、何故、有明の命じた通り、しなかったのかとか、様々の批判が出たものである。

ジャンヌの場合、その陸進の早いことがハッキリしているので、どうしても不平組から嫉視されることを免れなかったのだ。

有明の気まぐれに、いつも皆がキリキリ舞いをさせられるのだが、今度もジャンヌに、お前の私室を見せろと言いだしたのである。これには伊藤連隊長以下が、仰天してしまった。およそ有明のような立場の方が、一兵士の居住区を訪れた例はなかったからである。必要なことは、いつでも貴賓室へ呼び出して済ませていたのだ。しかし一旦、有明が言い出したことは拒否出来ないし、第一、そんなことでグズグズしている有明でもない。ジャンヌを、せき立てて若紫騎兵小隊の廠舎へ、歩きはじめている。あわてて伊藤連隊長以下も、それに従う。その前を連隊副官が駆け抜けて行った。異例の「お成り」を、免も角も

先触れしようというのだ。

小隊長の小川晶子が、全身をコチコチにして一行を出迎えた。

「小隊総員、六十名。現在員、六十名」

と報告するのに、気軽に答えながら有明はズンズン兵員室の中に入った。

第37回で詳しく説明したように、アマゾン女兵は一分隊単位の区画を持ち、その中に班別の三つの居室、それに食堂兼学習室、バスルーム等がつき、さらに分隊長用の個室が出入口を扼している。

兵員室だから何の装飾もないが、極端なまでに、清潔整頓が要求されている。隊内でも時々抜き打ちで査察が行なわれ、チリ一つで分隊全員が懲罰される場合もある。今日、突然に有明が入ってきたのは、正に驚天動地の事件で、若し何か瑕疵があったら、それこそ命がけのことになりかねないことだったから全員が懼れ戦ったことも無理からぬことであつた。

小さな白いデコラ貼りの机上に、一冊の本が置いてあった。

「何を読んでいるのかね」

有明がとりあげてパラパラと頁を、めくっ

た。側に立っていたジャンヌは全身を真っ赤に染めて羞じらいを見せた。

「ほう、ヴィリエ・ドウ・リラダンじゃないか。懐かしいなあ」

こんな時の有明は、ひどくやさしかった。

「娘よ、そなたは奥津城の中の玻璃燭（らんぷ）。私は、そなたを『希望』に蘇らせてあげたいのです」（斎藤磯雄氏訳による）

彼は声をあげて朗読した。アクセルの一節だった。そこに鉛筆の線が、ひいてあった。

修道院という異常な環境に押し込められた美女ド・モオペエルに対するアベス（院長）

の言葉が、痺れるような感動をジャンヌに与えたのだ。その言葉は、有明に対する熾烈な愛とハミングして彼女の心情を捉えて放さなかった。

「私の非情な世界に生きて、君は尚且、希望に蘇ったと考えるのかね」

有明の質問は、今まで莫然と感じていたジャンヌの信念を、より確乎とさせる効果があった。彼女は胸をはって軍隊調で答えた。

「ハイッ。わたくしは希望を持ち続けております。それは……」

「それは？」

有明に聞き返されて、又もやシドロモドロ

になってしまふ。恰好よく盛り上がった双の乳房が、はげしく揺れ動いた。

その時間は就寝前の自由な、ひとときであった。アマゾン女兵たちは、食事当番を除いて思い思いに武器の手入れをしたり、自分の「持ち馬」を洗ったりしている。

「馬に恋をしている兵隊が、いたな」

有明が、ふとジャンヌに、たずねた。

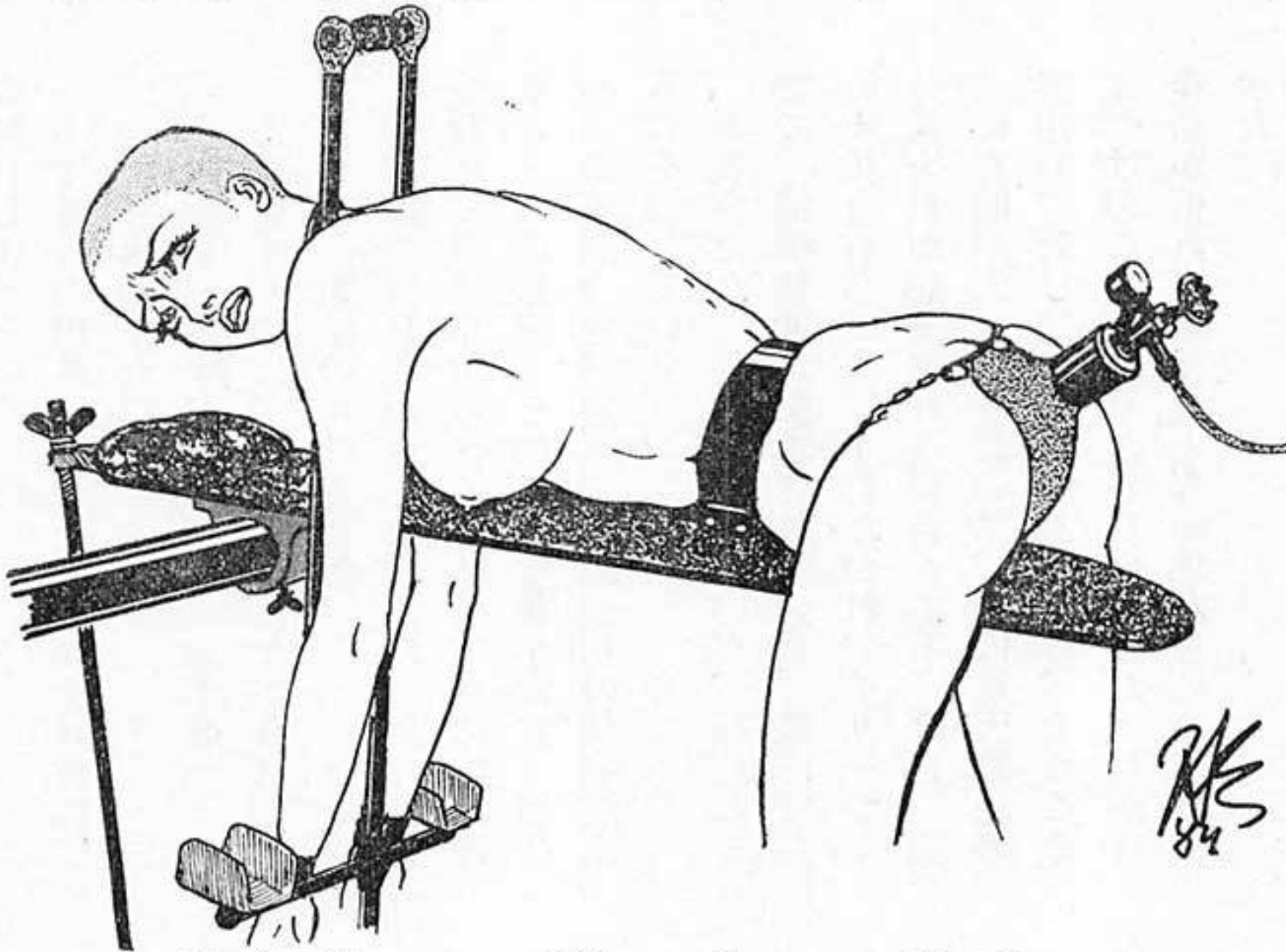
「あれは、確か君の分隊に編入された筈だったね。えーと……」

「あの、望月、いえ、F—〇一八号のことでございますか」

「そうだ。俗名をジュリー・シェリバンという、ブロンドの尻尾を持った馬を、あてがった筈だね」

「はい。その通りでございます」

ジャンヌは有明が、どうしてこのような細かいことまで知っているのかと、舌を巻く思いであった。実際のところ、ジャンヌが望月レイ子をかばったことが王宮での話題になったことを彼女は知らされていなかった。(45回、参照) 小川少尉は伊藤連隊長から、そのことを聞いても、それを具体的にジャンヌに話す事は、わざと差し控えていたのである。



ジャンヌは、少し困ったような顔をして、「F—〇一八号は只今、厩舎に行っておりま

す」
「厩舎? こんな時間に一体、何をしているのかね」

「はい。持ち馬F—〇二七号の特別調教を命ぜられておりますので……」

「ほう。どんな特別調教なの」

有明が、興味をそそられたように、聞き返した。

「アノウ……」

ジャンヌが狼狽して、急に頬を染めた。

畜位女囚は、乳畜、その他、ペット用に当てられる愛玩畜と、俗に「馬」と呼ばれる役畜に大別される。

さらにその役畜が戦車などを牽く輓畜とアマゾン騎兵の乗用となる軍用畜に分類されることは前に述べた通りである。

畜位女囚—
愛玩畜—乳畜(例、アマトル)
(ブタ) その他(例、林美玉)

役畜—輓畜(例、アン)
(ウマ) 軍用畜(例、ジュリー)

牛や馬など、四つ足の動物とちがって、人間は手の長さが足の長さの、およそ五分の三しかない。それを四つん這いにさせて、且、脊中を水平にさせるためには、アマトル・アミンのように膝立ちにさせた場合は膝に約〇・五の長さをプラスしなければならない。

これが軍用畜となると、逆に手の方を長く

するのである。つまり、五分の二だけの長さをパイプで足して、それに車をつけてあるのだ。二本のパイプは首をはさんで、騎手のグリップとなり、そのパイプから直角にのびた水平パイプが胴環に熔接されているので、軍用畜は横倒しに寝ない限り四つん這いの姿勢のまま四六時中を過ごさなければならない。

「ウーン」「ハー」

有明が厩舎へ入ると、何か切迫したような喉音が耳に、とび込んできた。鉄のクラスにランクされた畜位、物位の女囚たちは、ことごとく言葉を封じられてしまっているのも、獣のような喉声しか、出せないものである。

リズムカルに繰り返される「ウーン」「ハー」の間を縫うようにして「シッカリ！」とか「サア」とか「よいしょっ」とかの掛け声が混じって聞こえる。

軍用畜の繋留バーには丁度、洋式のアイロン台のような、柔らかいフォームラバーで覆った巾十センチ位の細長い台が直角に、とりつけてあった。軍用畜はパイプの間隙を、それにさし込む。丁度、うつ伏せに跨いだような恰好になる。このアイロン台に体重を托して休息をとるのだ。夜も、このままの姿で眠

るしかない。その上、前腕の車がロックされパイプの上部にカンヌキを、さし込まれると美獣は四つん這いの姿勢で、ガッチリと、おさえこまれて、絶対に抜きさしならなくなってしまうのである。

櫛の歯を横にしたようにアイロン台が一定間隔で突き出しているのへ、一匹ずつ軍用畜が胸を差し込んで休んでいる。その数は小隊の人員と同じ、つまり六十頭で、三十頭ずつ臀を中通路に向け繋留される。中通路には汚物を水で流すよう中央に溝が作ってあった。

向かって右側の列の中程で、望月が奮闘していた。可愛い愛馬のF-〇二七号。かつてカンヌの映画祭で知り合ってから、怪潜水艦ネプチューン号に捕獲され、数奇な運命の虜囚となってからも、二人は、ひめやかなレスピアンを感じていた。望月は好んでジュリーを苦しめたくはなかったけれども、他人に責めさせるよりは、自ら手を下ろすことを、えらんだ。そして、ジュリーの方も、どうせ酷い目に合わなければならぬとしても、それが愛しい望月の手にかかることを欲した。勿論、なれ合いの手加減は絶対に許されなかった。そんなことをすれば、望月自身も処罰

されるであろうし、第一、折角、一緒になれたのが、又、離れ離れに引きさかれることは確実だったからである。

シッポ抜き競技(第51回、参照)でアヌスを裂かしてしまったジュリーは、特別に患部を鍛えることが要請されていた。さもないと競技の度毎に血を流し、激痛にのたうちまわらなければならない。

そこで、特別の括約筋調教が施されることになった。挿入した細長いゴム筒を空気で、ふくらませる。(ゴムの厚さと、ふくらませる太さは調教度によって異なる)それを括約筋の力でギュッと絞るのである。力を抜くとゴム筒内の空気が再び膨らむ。これを際限なく繰り返すことによって括約筋を、しなやかにして行くわけだ。カウンティング装置は施錠され、望月のインチキを不可能にしているし、その上、筒を千切る程、強く絞らないとカウントされないから大変な労働である。

「しっかり！ あと十回よっ」

エキサイトした望月が、苦悩に痙攣する白いジュリーの臀部を、ピシャピシャ叩きながら怒鳴っている。ウーン、と美獣が足を突っ張った途端、やっと寛解(許可)のブザーが鳴った。

(未完)



カット・よみじどり

今日は思い切って「告白」とまではいきませんが、私のゴムフェチになった、いきさつでもと思ってペンをとりました。文章は苦手ですので小学校の作文のようになってしまいましたが、自分のしてきたことを偽りなく書いたつもりです。奇クの読者には、私の様なゴムマニアが多い様ですから、私も一マニアとして、同好の皆様に自分のことを知ってもらうべく、敢て寄稿致しました。

そんなわけで私がゴムマニアになった一人として、その過程を、ありのまま、述べてみたいと思います。

告白

あるゴムマニアの体験

私のラバちゃん

加藤 明 美

私は小学生の頃から「ゴム」に大変、興味がありました。私の小学生時代は終戦直後で品物が現在の様に豊富ではなく、学校へ行くのにも、雨の日は雨に濡れながら、履物もゴム長等はなく、草履をはいて通っていたものです。

そんな中で、ある日、学童用雨合羽（男子用は綿布にネズミ色のゴム引きマント形式、女子用は赤色のゴム引きで、頭巾にはヒダがあり、ひさしがついていて、マント形式のもの）とゴム長靴の配給がありました。

全員に渡るだけの数がなかったのでクジ引

きということになり、私は祈る気持でクジを引いたのですが、残念ながら両方とも当たりませんでした。その時は本当に口惜しい気持ちがしました。

中学へ進学した頃、近所に履物店があつて夏休みにアルバイトで手伝いに行ったことがあります。ある時、店の主人から、「よく役に立ってくれたから、何かほしいものがあれば……」といわれましたので、私はすぐ「長靴がほしい」と答えました。

実は雨合羽がほしかったのですが、その値段が、ずっと高いことを知っているのはいえ

なかったのです。

店の主人から長靴をもらい、その時、初めてゴム長を手に入れた次第です。しかし、まだ雨合羽には未練がありました。手に入れる事が出来ませんでした。

この様に私は小、中学校の時代に、すでにゴムについて非常に関心を持っていました。

中学も二年の終わりになった頃、そろそろ異性に興味を持ちはじめ思春期となって性欲も湧いて来ました。そんなある日、朝目覚めて、びっくりしました。下着が、べとべと濡れているのです。驚いて蒲団をしらべてみましたが、別に地図を書いている様子もありません。それが夢精であることを知ったのは、大分してからでした。

大体が神経質な方で下着が気になり、そんな時は気持が悪くて仕方がなかったのです。高校へ進学する頃、夢精の時の快感が忘れられず、いつしかマスターベーションを覚える様になりました。

高校を卒業して一年、浪人をしました。翌年の入試にも失敗し、家庭の事情で長く遊んでいるわけにもいかず、ついに大学進学を断念して就職しました。勤務先が自宅より離れていたため、下宿生活をする事になったの

ですが、この時、初めて、他人のメシを喰う気持を味あわされました。

そんな時、ふと、書店で見かけたのが、奇クでした。ユニークな内容に大変、興味をひかれ、早速、買って帰って読みました。独身の私には、何もかも物珍しい内容でしたが、やはり一番、関心があったのはゴムに関する記事でした。

奇クの記事に啓発されて、思い切って薬局へ行って病人用のオムツカバーを買いましたが、それは表地は綿で、裏地はビニールのもので、腰の所に紐がついているものでした。

それから、夢精するかも知れないと思う時は、夜寝る時、着けて寝る様にしました。

会社に勤めて二年程してから軽い発熱が続くので医者に見てもらった所、肺湿潤と診断され入院しました。病院の庭に重症患者用のオムツカバーが干してあるのを見て、ゴムについて、いろいろ想像する様になりました。

ある日、親しくなった患者の一女性と散歩しながら話し合っている時、たまたま話がメンスの事になり、「夜寝ている時、急に始まったら、どうするのですか?」と聞きます。「私は大体の日がわかってるのでバンドをつけて、もし洩れた時の事を考えて、タオル

を下に敷いています」と答えました。

私が、「そんな為にはオムツカバーをつけたら、いいのではありませんか」といったら「あれは大きくて不恰好ですし、それにガバガバして嫌ですわ」との事でした。まあ、病院の入院生活という事もあって、オムツカバーにも、少しは関心がある様でした。

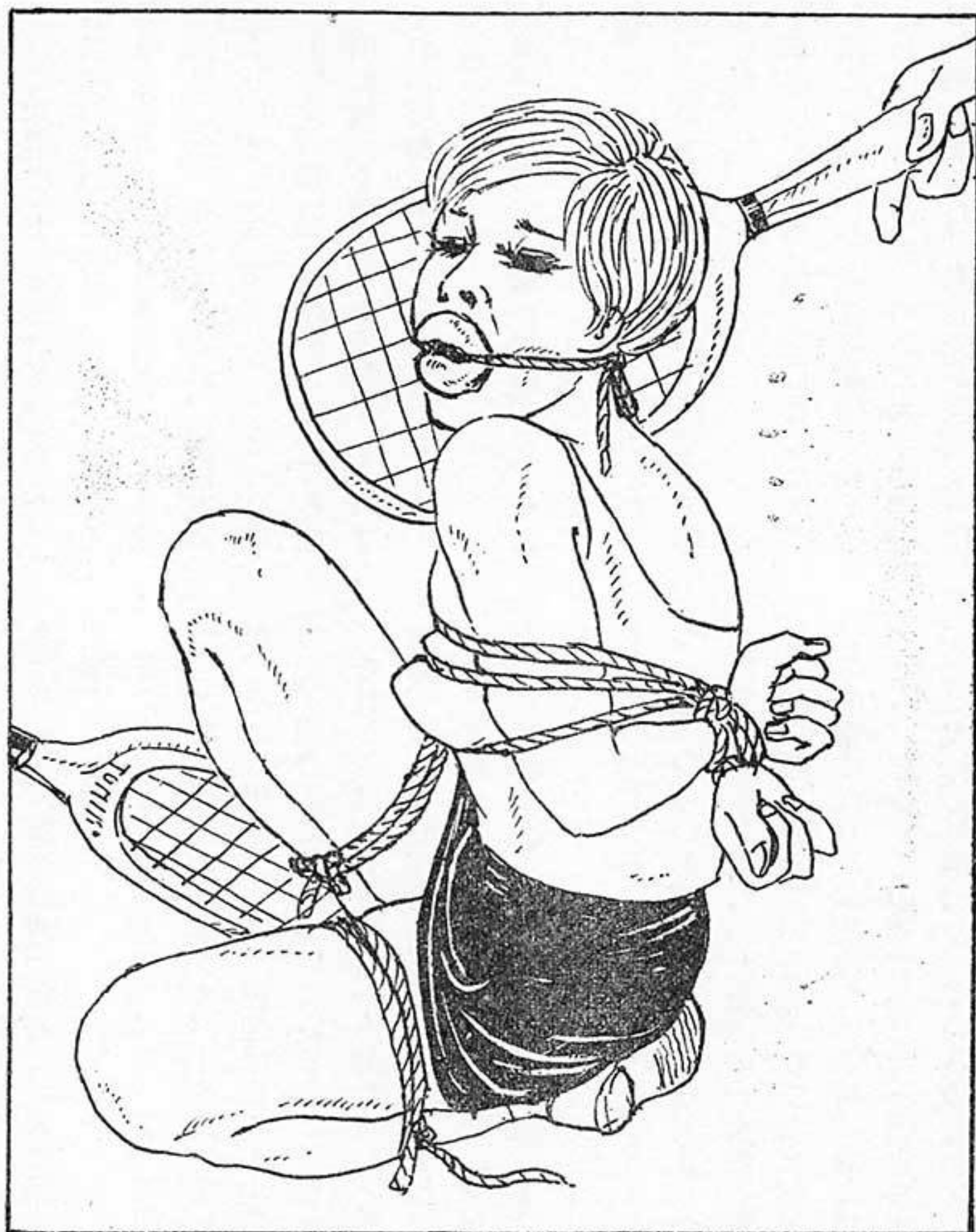
退院して、すぐ、私は結婚しました。妻はこれといって特別、何のとりえもない平凡な女性でしたが、只、気立てがやさしく私には従順でした。

新婚半年ぐらひは、お互いに異性珍しさも手伝って夢の様に過ぎましたが、ある日、夜尿をやってしまった。さすがに大人だけあって量も相当なもので、まさに世界大地図を描いてしまいました。妻は恥じてベソをかき、しよげ返ってしまいましたので、同居していた母と相談して、私と二人でとにかく、他所に知れない様に内密に後始末しました。

それから半年程して、又々、妻が夜尿をやらしたのです。今度は前例もある事だからと、母に相談し医者に見て貰う事にしましたが、結果は別に身体には異常なし、との事でした。それで私は妻にいったのです。

「お前の夜尿ぐせも別に病気ではないだろう

----- イメージギャラリー『ボールぐつわ』志羽利也 -----



が、やはり子供じゃないのだから、そう度々やって貰っては困る。そこで一つ注文があるのだが、今度、粗相をしたらオムツカバーをつけることを決めよう」

「私が意識して粗相しているわけではありません

んが、いつの間にか漏れてしまっているのです。オムツをつける事は恥ずかしいですけど自分の性癖のためですから、仕方ありませんわ。今後、十分注意しますが、もし粗相した時は、どうか罰して下さい」

妻はそう言って自分の粗相を恥じ、涙ぐんでさえました。それから一カ月ほどした雨の降る土曜日の事でした。私は友人と一緒に飲んで晩く帰宅しました。妻はもう一人で先に寝ていました。

私はごろりと横になってテレビでも見ようと思っていたら、妻が急に起き上がり蒲団の上に坐って泣いています。「どうしたのだ」と聞くと、「夢の中で夜尿をしたので、びっくりして目が覚めました」というので、まさかと思って下着へ手をやると、やはり本当に濡れています。そこで私は、「今夜は下着を替えて寝なさい。よい方法は明日にでも、また考えよう」といって慰めたのですが、うなずいていた妻も気になるせいか、なかなか寝つかれない様でした。

そこで私は、「明日の夜からは蒲団の上にビニールを敷いて、その上にバスタオルでも敷いておいたら、もし粗相した場合でも、後始末が簡単でいいじゃないか。そして用心の為に、生理帯でもつけていたらどうか」といったら、「はい、そうします」といって安心したのか妻は寝てしまいました。

日曜日の朝起きて、私は今夜は何もなかったと心の中で祈りました。

妻は昨夜の事があるので気持ちが落着かないらしく、入念に寝床の準備をしている様でした。私は床へ入る時「バンドは、つけたか」と問うと、「はい、つけました」という返事が返ってきました。妻の顔にはバンドをつけているので、もう大丈夫という安堵の色が見えました。

月曜日の朝、「昨日は、どうだった？」と聞いたら「少し漏らしました。でもバンドをつけていたので、外には大してこぼれませんでした。私、すっかり癖になってしまっているのですね」と諦め顔でした。

その日、会社の帰りに薬局に立ち寄り、オムツカバーを求めました。ビニール製とゴム製とがあり、ビニール製の方は色は豊富ですが、乾きが遅いそうです。ゴムの方は生ゴム製で色はアメ色一色しかなく、濡れた場合は乾いた布で拭くといひそうです。

どちらも実用的には一長一短があるそうですが、私は幼い頃からゴムに関心があったのでゴム製の方を買いました。そして取敢えず紙オムツも併せて買いました。

帰宅して夕食後、妻に、「ちょっと部屋まで来てくれよ」といったら、「なんですの」といって来ました。「君の大好きなものを買

ってきたので、ちょっとつけて見てくれ」といって、紙包みからゴムのオムツカバーと紙オムツを出してひろげたところ、妻はドキッとしたように一瞬、顔を赤らめて「私、大好きなものといったから、何かと思ったら、オムツとオムツカバーじゃないの。ガックリきたわ。でも仕方ありませんわ、これも今夜から私の下着になるんですもの、大好きにならなくてはね」といって、ゴムのオムツカバーを、ひろげて見ています。

私は妻に「サイズの見当がつかないので、とにかく大寸と中寸の二つを買ってきたから一応、つけてみてくれないか」といったら、妻は観念したのか下着をとり、オムツカバーの大寸の上にオムツをのせ、股間に当たるようにして穿き、ホックで止め、私に「これでいいかしら、どう似合うでしょう」と、はにかむように笑うのです。

私は、「大きい赤ちゃんが出来たな。そこで名前をつけよう。これからはオムツカバーをつけている時は、ラバちゃんと呼ぼう」といったら、「この人のいじわる」といって、私を軽く、にらみつけるのです。

「今夜はもう、そのままですみなさい。それだったら、大船に乗った気持ちでいいだろ」

といったら、「いじわるな人ね」といっても、カバーをつけた姿を鏡にうつしてみたりしています。ラバちゃんも今夜は楽しい夢を見る事でしょう。

私のラバちゃんは今夜は漏らさない様に念じつつ床にいたのですが、私が夜中に目覚めてみるとラバちゃんはいません。暫くして戻って来たので聞いてみると、「粗相をしてオムツを濡らしたので後始末をしてきたの」との事です。「オムツをしていてよかったじゃないか。もしつけていなくて粗相したら、どうするつもりだ」と叱ったら、「今度から貴方のいわれる様にオムツカバーをつけますわ。でも、もし私が粗相しなかったら、貴方を私の気のすむようにしてもいい?」というので、「君がそれだけ自信があるんなら、私の方はいいよ」と答えておきました。

それから数日は、妻は明るい笑顔で、「昨夜は何ともなかったわ。私、これですっかり自信がついたようだわ。もう大丈夫よ」といっていたので、私は、「それはよかったナ。しかし油断は禁物だよ」といいながら一安心しましたが、まだ不安は残っていました。

それから十日程後の事です。土曜日は半日なので昼迄、仕事をして帰宅してみますと、

母は孫をつれて田舎へ行ったとの事で、妻がひとり留守をしていました。私は奥の部屋でテレビを見ながら、つい、うとうととしていつの間にやら眠っていました。

夕方近くになって目が覚めると、手足の自由がききません。私が、うたた寝している間に妻が私の手と足を縛ったのです。私が「何故、縛るんだ」といったら、傍でニヤニヤしながら眺めていた妻は「私が粗相しなかったら、私の好きな方法で貴方にお仕置すると約束したでしょう」私は「そんなバカな」といったものの、よく考えてみますと、ここ暫く、妻は粗相していません。

妻は「今夜一晩中は細引きは解きません。そのかわり食物や飲物は、私が食べさせてあげます」というので、私も「まあ、仕方がないよ、君のためを思って約束したんだから」と妻のいい分を聞く事にしました。

それからは、蒲団の上に手足を括られたまま寝かされて、夕食の時は首の所にエプロンをつけて御飯を食べさせてもらいました。飲物も注文すると、お茶でもビールでも持ってきて親切に飲ましてくれました。そのうち、尿意を催してきましたので、妻に「便所へ連れていってくれ」と頼みましたら、「いいこ

とがあるわ。あのオムツカバーをつけてあげから、あの中でしたら」といって、大寸のオムツカバーと木綿布でつくったオムツを沢山、持ってきたのです。

足首の縄を解かれて、蒲団の上に寝たまま下着を全部はがれてオムツを前に当てられ、オムツカバーをつけられてしまいました。暫くは辛抱していたのですが、とうとう辛抱しきれなくなって、オムツカバーの中に思いきり排尿してしまいました。

「おい、頼むから替えてくれ」妻に頼みますと、妻は湯気のたつようなオムツをとってくれ、熱い蒸しタオルで局部からお尻にかけて丁寧にふいてくれました。シツカロールをふってから、また新しいオムツとオムツカバーをさせられたのです。私は自由がききませんので、その夜はずっとカバーの厄介になったのです。夜中、二回ほど洩らしましたが、やる時は気持ちいいくらいですが、後はあまり気持ちのいいものじゃありません。

翌朝、やっと解放され、日曜日は一日中、ゆっくりするつもりでしたのに、妻が午後になって街へ行こうと、いい出したのです。

「君がオムツカバーをつけて行くなら外出しよう」といったら、「仕方ないわ。それだっ

たら、貴方のいう通りにします」といって、妻はカバーをつけましたので一緒に家を出ました。繁華街まで電車で行き、商店街をあちこち歩いてまわり、デパートでもエレベーターやエスカレーターを利用せず、専ら階段を利用してしたので妻も、いささか疲れたと見えて、額に汗を、びっしょりかいています。

カバーがむれるせいか、足どりも心なしか悪いようです。それで喫茶店へ入って暫く休む事にして、暑いのでビールを注文しましたところ、妻も咽喉がかわいたといってゴクゴク飲んでいました。喫茶店を出て歩いていみると、トイレへ行きたいといい出したので、暫く辛抱しなさいといっておいて、目指す目的の店へ来ましたので、そこで手洗いを借りて用を済ませました。

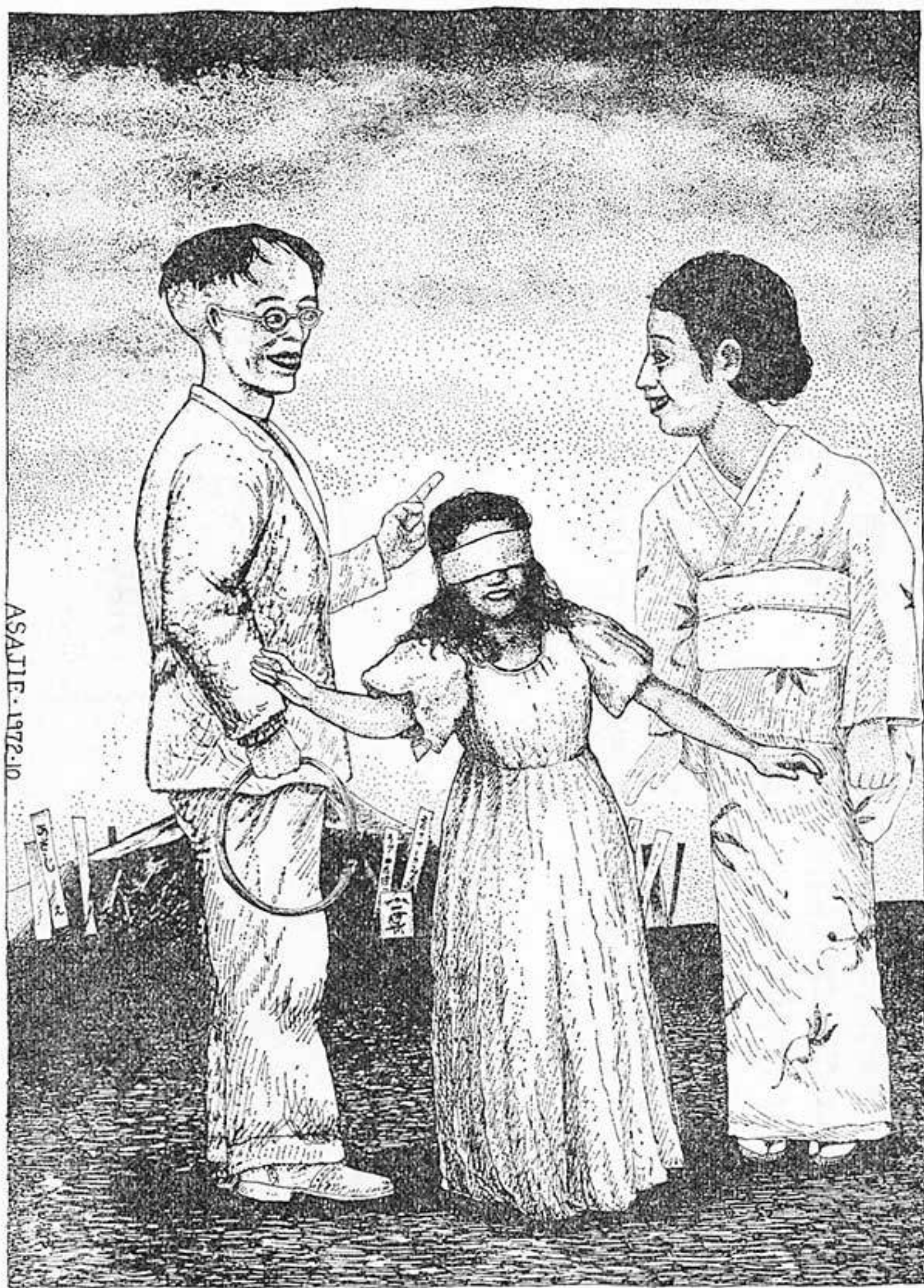
その店で、作業用のゴムの雨合羽（上衣）大寸とズボン式のゴム長靴（25センチ）、モモ迄のゴム長（水中長）25センチと作業用合羽（膝下迄のもの）を買い求めました。作業用のゴム合羽上衣は表黒色、裏赤色の総ゴム製、ズボン式のゴム長は緑色で裏なし、股迄のゴム長は黒色でした。帰りは妻も疲れていたし荷物もあったのでタクシーにしました。

帰宅して妻に「今日は一日、カバーをはい

ていて、さぞむれた事だろう。私がきれいに拭いてあげるから」といって服を脱がせたところ、もうカバーはつけていません。「何故とったのだ、つけている約束じゃないか」と詰問しますと、「余りむれて気持ちが悪いので

さっきトイレを借りた時、はずしました。どうも、すみません」と謝まっています。

そこで私は、「罰としてお仕置するよ。約束を破ったんだから仕方ないだろ」と命じて風呂から上がった妻にオムツとオムツカバー



僕のイメージ画集 『ある家族』 室井 亜砂路

をつけさせました。これは予想していたらしく素直につけました。カバーの上から自分ではずしたら直ぐわかるように黄色の絶縁テープで封印しました。そして粗相してカバーから洩れてもいように緑色のズボン式のゴム長をはかせ、その上に作業用の表が黒色、裏が赤色のゴム合羽の上衣をつけさせました。そして頭にはフードをかぶせ、口にはマスク、手にはゴム手袋をつけ、これで妻に対して、お仕置のゴムの囚衣は全部、着け終えました。

妻は最初はいやがったのですが、やがて観念したのか、私の命ずる通り着用しました。じっと黙って、むれるのを耐えている様でした。今夜は手だけ縛っておこう。そのうち、妻もゴムの感触になれて、ゴムマニアになるのじゃないでしょうか。

可愛い私のラバちゃん（オムツカバーをつけた妻）。ゴムのネチネチした感触ってとてもいいだろう。そのうちに、ゴムの良さを知ったら、その虜となって、オムツカバーなしでは暮らせなくなるだろう。

私のラバちゃん、今夜はうんと粗相をしてもいいよ。安心して、今夜はゆっくり、お休みなさい。私のラバちゃん。

S M カメラ・ハント (最終回)

悦

虐

の

遍

歴

△プレイ妻 佐野みさ子の巻▽

辻 村 隆

もう一度、強烈極まる、SMの極致のプレイをしてみたいという思いは、佐野みさ子の場合、いつまでも尾を曳いて私の脳裡に、くすぶり続けていた。

その願望に拍車をかけたのは、思いがけず届いた、達筆で原稿用紙に書かれた、部厚い彼女の便りの、余りにも熾烈な欲望のすさまじさが、私の心を決定づけたかのようであった。

原文の尽、ここに再録したいが、公表を前提とする奇クサロン欄の原稿にでも、ドキッとすることを書く人である。到底、ナマの文

は発表しにくいので、ところどころボカしてあるのは、私の添削や、おとなしく書き直したところである。

『貴男様には、日夜御多忙のことと拝察いたします。みさ子は、貴男様のカメラ・ハントを、どのように心躍らせて読ませていただいたことでしょうか。三度、四度、五度、いくら読んでも、又読みたくなる思いでございませう。あれからすぐ、お便り出そうと、毎日のように心では思いつつ、心のどこかでは、貴男様からのお便りを、心待ちしていた私でございました。』

貴男様は、もう私のことなどお忘れになったのでしょうか。待てど暮らせど来ぬ、お便りに、とうとう、私の方から差し上げてしまいました。

プレイ妻、奴隷妻にされた私が、その後、どのように変わっていったか、貴男様はそれを、ちっとも知ろうとはなさらない。非情の方のように思えて、恨めしく存じますわ。

みさ子は、貴男様との、あの愉しいプレイが契機となって、夫から、夫婦交換プレイを誓約させられました。みさ子は、相手がどんな方であろうとも、夫の命令であれば、否応

なく、交換プレイしなければならぬのでございませう。夫は私の人權を完全に無視し、奴隷妻として、仕えることを命じました。それは、貴男様の責任ではなく、すべては私の心によることとでございます。

みさ子は、夫に対し、貴男様との、あの日の、忘れじのプレイの逐一を告白しました。

ハントに書かれるのを承知しておりましたから私の方から白状したまででございます。

夫は、辻村様とのプレイに対しては、何も申しませんでした。むしろ、非常に興味を抱いて、貴男様の人となりや、性格や、人柄など、いろいろと聞き訊しました。

「お前のような女を、辻村さんは気に入ったのか？」

と、ききますので、

「多分、お気に入ったように思います」

と応えますと、

「そうか、それでオレも自信が出来た」

夫はそういって、その時から、夫婦交換プレイの呼び掛けに踏み切ったようでございます。辻村様がお気にいったという、みさ子の言葉に、夫は自信が出来たのだと思います。

私の一存で、貴男様のお気に入ったなどと申しましたが、若しそうでなかったのなら御

免下さい。

私は、貴男様が、もっともつとスゴいプレイをなさるお方と考えておりましたが、予想以上に紳士的なので、安堵と、軽い失望の入りまじった気持ちで、あの日は帰りました。他にもお約束があつて、急いでおられましたから、私ばかりに心を走らせてはおられなかったのでしょう、きっと。

今の私は、どんなムゴいことでも、恥かしめにもたえられる女であると思います。ウソだと思いでございましたら、この代理妻を今一度お試し下さい。きっと貴男様の、十分満足のゆく女になっていることを、みさ子の肉体のすべてが保証いたします。

今の私はどんな夫婦と交換プレイしても、絶対ヒケをとらないよう、三日にあげず、筆舌に尽しがたい、調教と訓練を受けております。

夫は、貴男様とのプレイを機会に、再び以前のような、SMの情熱をわき立たせたようでございます。そうした意味では、苦しく死にそんな特訓の連続でも、私達夫婦は、近年にない充実した日々を過ごしており、これは偏に、貴男様とのプレイの賜わりものでございましょう。

みさ子はプレイの時は、奴隷宣言をさせられまして、名前を改めさせられます。それは女にとって、最も口ににくい言葉でございます。

「みさ子、お前は今から×××子と名前を変えるのだ。×××子と呼んだら返事をするのだ、いいな」

夫の命令一下、みさ子は忽ち、×××子と改名し、特訓をうける時も復誦して、

「×××子は、ご主人様のオ×××を頂戴いたします」

とか、

「×××子を、存分にして下さい」とか、いわされるのでございます。夫婦交換プレイが実現のあかつきにも、私は、もうみさ子ではなく、×××子と名乗って、相手の男性の方に、私を×××子と呼んでいただくのでございます。

貴男様のハントにも書かれてありました通り、以前の私は、コカコーラ瓶の、口瓶の方で、自分ではひとかど、大した行為のように思っておりましたが、確かにこれは、貴男様の仰有るように、序の口でございました。

今では、夫の訓練の結果、コーラ瓶の底の方でも可能になりました。

イルリガートルで高圧浣腸をうけまして、コルクにて栓をし、飛ばないよう、栓にセメダインを塗りつけ、その上から、粘着力の強い、包装用の紙テープを貼りつけて、更に股縄をかけられ、ポット一杯の塩水をのまされた苦しみと腹痛は、その経験を味わった者ではないと分らないと思います。

忘れもしない、十一月十一日の土曜日、夜のことでございます。主人は明日が休みなので何か思い切った計画を実行するつもりだったのでしょうか、その夕方、子供を親許に預けてくるように、といい出して、家には私達夫婦だけになりました。

それを待っていたように、時折、夫の眼を盗んで、プレイしにゆく、Kさんを、ここへ呼べと夫は命令しました。

Kさんは、みさ子の花電車を楽しむ人で、近頃は、Sの方もかなり進んで、みさ子は、いつも楽しく虐められている方です。

私が白状しますので、夫は、Kさんのことは何もかも知っておりますが、未だかつて、一度も家には来たことのない人です。

私とKさんのSMプレイを、夫は、隠れてその一部しじゅうを見ようという魂胆で、自分の見ていることを、絶対告げてはならない

と申しました。

「緊縛と羞恥責めと浣腸とセックス。この四条件を絶対やらすのだ。彼がやらなかったらお前から、してくれと頼むのだ。名前の改名もお前から申し出るのだ。プレイの時は、××子と呼んで下さいっていうのだぞ。分かったな」

私は仕方なく、うなずきました。心の中に潜む、もう一つの悪魔めいた女心が、夫が承知なのなら、むしろハッスルして、見せつけてやろうと思っていたのですが、素振りには詮方なく承知したようにみせかけました。夫が、それに対して、どんな反応を示すか、ということにも興味がありました。

夫は隠れて見えていても気付かれない場所をあれこれ物色しておりましたが、長時間潜んでいる場所というものは、普通の家庭の場合そうそう見当たらないようです。物音を立てたり咳をしたり、おナラしたりしたら、すぐバレてしまいますものね。

結局、考えた挙句、夫は、使い古した衣類の押し込である、ステレオの空箱から、三分の一ばかりボロ布をとり出し、黒字の印刷したところに、小穴をあけて、その箱に寝そべり、小穴から覗くことになりました。

夫は、私の告白はきいていても、Kが果たして、どのようなプレイをするか、自分の眼で確かめたく、それが興味シンシンだったようです。

部屋中がよく見える位置まで、ステレオの空箱を、そうとは気付かれぬ程度に引っ張り出し、夫がもぐり込んだあと、云われるままに、その上にもボロ布をかけ、箱の蓋をして雑誌類や、座布団をつみ上げ、さり気なくしますと、私は夫から命じられた通り、ガストープに火を点じて、全裸になり、Kさんに電話しました。

彼の家と、私との距離は、車なら数分のところでした。突然の電話でしたが、いい具合に彼は在宅でした。この距離の近さが、つい夫に隠れて、Kさんとプレイし、セックスする結果になったのです。

「夫も子供もいないのよ。淋しくて仕方ないの。遊びにいらっしやらない？ 大丈夫、夫は、今夜は帰らないかも知れないから……」

と、夫に云いつけられた通り、誘いの電話をしたのです。

「でも、何だか気が咎めるよ」

Kさんは、余り乗気ではありません。そこを、ここを先途と甘えて口説き落とし、やっ

とKさんも承知して、やってくることになったのです。

ドアをノックする合図に、全裸の俣、ドアを開きますと彼は一寸、驚いたようでした。いきなりハダカの女が、飛びついたら、誰でもギョッとすることでしょうネ。

夫の言い付け通り、プレイの間は、改名して呼んで貰うことを、私の口からいったら、彼は撥った表情で、

「フフ、そいつは面白いや。そのものズバリでいいよ。正にみさ子は、×××子の塊りみたいな女だからなあ」

と、夫が聞いているとも知らず、云いたい放題をいって、上がり込んできました。

しっかり鍵をかけ、カーテンをすべて引いて、密室にすると、私はいつものように甘えて、おしゃぶりを求めてゆきました。

「せっかちなあ」

といい乍らも、彼は、ファスナーを引き下げてゆきます。隠れた夫の存在を、意識すると、反ってみさ子の心は、すぐくハッスルして、Kとのいつものプレイ以上に、激しく自ら求めていったのです。わざと口にするのをはばかりような言葉で、

「ねえ、早く(……………)思い切り

縛って(……………)のませてね」

など、これが女のいう言葉かと思うような羞かしい言語を羅列して迫ったのでした。

それに刺激されたのか、いつになく彼の羞恥責めは、執拗で、次々と奥の手を出して責め上げてくれ、私は幾度か、恍惚の淵に追いやられました。

夫のことも、見栄も体裁も、かなぐり捨てて私はKと存分に愉しみ、Kも又、珍しく度重なる氣力を振り起こして喜びました。セックスに走ると、約束の浣腸が、もううるさくなり、彼も元来、それ程、特別に興味を持ちませんでしたから、浣腸プレイは抜けてしまいました。緊縛といっても、私の自由を奪う程度で、その方に重点はおかず、唯、彼の好む花電車は、この夜、卵で試みてみました。

二、三度、ステレオの空箱が、ガタリと揺れ、私はハッとしましたが、夢中のKは氣が付きませんでした。一応、夫の試みは成功したようです。いえ、夫が考えていた以上に、私が本気で歓び、正体もなく取り乱していたのを、夫はどのような思いで、みつめていたことでしょうか。

本気でプレイした酬いは、Kの帰ったあと忽ち私にハネ返ってきました。

「この×××子、売女奴！　こうしてやる」

夫は自ら計画しておき乍ら、私とKの態度がアタマにきたのか、空箱から飛び出してくると、いきなり拳をかためて、私の頬を殴りつけ、後手に捻って手錠をかけると、鎖にとりつけてあった鍵を、鍵ホルダーごと引きちぎり、庭先の雨戸を開いて、暗闇の庭にパツと投げ捨て、

「さあ、あの鍵を、四つ這いになって探してこい。見付けて来ないと、ズツと手錠が嵌まったままだぞ」

と、うそぶいてビールの中瓶の栓を抜くとラッパのみして、フーッと大きく息を吐いていました。全程、興奮しているようです。

いわれる俣に、夜風の冷たい、真っくらやみの庭に出て、私は中腰になり、眼を一杯に見開いて、探し廻りましたが、狭い十平方メートル足らずの、猫のひたい程の庭でも、あのちっぽけな鍵を、暗闇の中で探すことは、難行中の難行でした。

「ああ、ダメ。見当たらないわ」

と、泣くように訴えても、夫はそしらぬ顔でビールをのんでいます。

本当に泣き出したい思いで、私はとうとう庭先で、しゃがみ込んでしまいました。

「戻ってこい。電池を貸してやる」

夫の声にホッとして部屋に戻ると、夫は円筒形の電池の、真中あたりを細縄で巻きつけて縛り、私の前にツカツカと近付くと、

「両脚を思い切り開くのだ」

と命じます。

電池の後半部が冷たい金属の感触を伝えてきて、燃えていた疼きを、急速に冷やしてゆきました。

縄が腰で結ばれ、まわしのように、腰のうしろから、おしりに喰い込んで、電池を固定させてゆきます。

脱落しないのを、引っ張ってみて確かめた夫は、パシリと私のおしりを叩いて、

「ホラ、これなら明るいだろう。ゆっくり探すのだ」

と、頬を真赤にほてらせて、怒鳴るように命じるのでした。

冷たい金属の感触は、奇妙に私の心を疼かせ始めます。ガニ股みたいに、股を開いてそろそろ歩き乍ら、私は、植込みの蔭や、根元や、小砂利の地面を、股電池の光を頼りに、必死に探し廻りました。

紅い蕾をつけたシシガシラの、剪定した小枝の先に、キーホルダーが引っ掛かっている

のを発見した時の喜び。腰をかがめて、口を近づけ、歯でしっかり啞えて引き返した時、夫は始めて、親密な笑みをうかべ、黙って、手錠を外すと、私を抱きしめてくれました。夜風で冷えきった裸身を、夫の胸に犇とよせ、私はわけもなく、

「もういやよ、いやよ、こんなこと……」と、泣きじゃくって、夫の胸を叩いていたのです。

何かおノロケみたいになりました。

みさ子は、この出来事を、奇クに投稿するつもりで、題も（夫のみにいる前での、SMセックスプレイ）と、つけるつもりでした。

でも、急に気持が変わって、貴男様だけに読んで欲しく思いました。

ということは、夫は近頃、しばしば、Kにしたように、又、隠れて、みさ子と貴男様とのSMプレイを覗きみたいなんて言い出したからです。覗き趣味に憑かれて、病みつきになったみたいです。

このみさ子だって、夫の覗いているのを、わざと承知で、貴男様と、魂のとりけそうなプレイをしてみたい——と、そんな無理な願いに心を疼かせています。

お忙しいところ、長々と、私のために時間

をとっていただいて、さぞ読み苦しかったろうと思います。

ゆっくりと時間をいただいて、もう一度、このみさ子を、天国に遊ばせて下さい。

夜毎の夢にまでみる、私の切なる願いでございます。

貴男様の色よきお返事、ただひたすらに、一日千秋の思いで、待ち続けております。

貴男様のプレイ妻 みさ子

× × ×

幸い、執筆を頼まれている、鬼六さんからの上京要請もあり、これを機会に、このプレイ妻たる佐野みさ子と、ひとときの歓を交すべく、私は、いつになく、朝の早い新幹線に乗り込んでいた。

急に日がきまったので、もしやこの愛すべき代理妻の都合が悪いのでは……と電話をしたところ、一も二もなく、承諾の返事が返ってきたのであった。

待ち合わせ場所は、前回とおなじところ、西武新宿駅の売店の前である。佐野みさ子の場合、ここが一番、都合がよかったらしい。

鬼六さんには、夜になってから訪問する旨を伝える。先ず、佐野みさ子と再会し、タツプリ耽溺することが、私にとっては先決問題

であった。

彼女の、原稿書きの便りは、余りにも刺激が強く、久し振りに、沈滞気味の、私の嗜虐心を盛り上がらせてくれたのであった。

午後一時、おち会う約束である。早目のひかりに乗ったから、時間はタッピーある。

あれこれのプレイを考えて、随分整理したつもりでも、矢張りショルダーバッグは重くバッグに入り切らないプレイ用具が、丈夫めの、ペーパーバッグに納まっている。

いつの場合も、持参した縄や、女悦の器具は、すべて使いこなせないのに、やはり出掛ける時は、あれも、これもを頭に描いて、持参してゆく癖も、過去十数年の、ハント根性が身についたせいであろう。

晩秋の十一月下旬であったが、コートなしで、背広だけでも快適の暖かさであった。

相変わらず雑踏する西武新宿駅へ歩いてゆくと、既に私の姿を先に認めたのか、佐野みさ子の方から、足早に近づいてきた。

午前十二時五十七分——。若干でも予定より早く会えて、そうした時間厳守が、私には快かった。

「元気そうだね」

他人行儀の粋を外して軽く声をかけると、

「そうでもないのよ。腰が少し痛いの」

と、彼女の言葉も、なれなれしい。

「どうかしたの？」

「ええ、ダンナが、余りハッスルしたものですから……。辻村さんと今日プレイするとうことが、コーフンのタネなんですよ。そりゃ、すごいんだから」

「何をされたんだい？ 逆さ吊りかい……」

「私の家は吊りにふさわしくない構えなの。吊るところあったら、多分やってたでしょ。

折りたたみ式の、金属の梯子あるでしょう、あれを二つ折りして部屋に持ち込み、そのてっぺんに仰向けに寝かされて、両手、両脚を開いて、梯子の枠に縛りつけられちゃ、まるで体が弓ぞりでしょう。アクロバットダンサーならいざ知らず、こんな私の体では、耐える方が無理ですわ。痛くなって、ギックリ腰みたいになっちゃった」

激しいSMプレイの模様を、佐野みさ子は日常茶飯事のように、恬淡と喋る。そういえば、何となく顔色も冴えない。

「寝ていないんでしょう。夜っぴてのプレイで——」

「凶星ですわ。主人ったら、午前三時過ぎまで寝かさないのよ。今頃、会社で生あくびの

連続でしょう」

「子供さんは」

「プレイが目当てですもの。いつものように親許に預けてきましたわ」

「梯子の上で弓ぞりになって、それから？」

「渡部好美さんのプレイを真似て、木綿針に羽根をくっつけて、離れたところから投げて突きさすの」

「痛い？ それとも感じる」

「どちらもですわ。痛いけど感じるわ。きつと渡部さんの奥様だって、私と同じように、痛いけど感じるのじゃない。もっともあの方は、針責めでは、私よりずっと先輩ですから感じる度合は、私より上でしょうけれど」

「その針、持ってきて貰えたら、よかったのになあ」

「そう仰有れば、持ってきましたのに……」

佐野みさ子は、親密さを全身に漲らせて、私のかいなに腕を組んで、ヒタと寄り添っていた。

新宿の雑踏に揉まれて、私達は巷を歩く。

食事をきくと、当然、未だであった。

通りすがりの小綺麗なレストランへ入る。

相変わらず、主食を断ち続けている私は、

ビフテキとビール。彼女はAランチ。

待つ間、食事の間にも、話は弾む。虚飾を
かなぐり捨てての、専らズバリのSM談であ
った。

「主人がね、私をいつでも辻村さんにお貸し
するから、誰方か夫婦プレイのマゾ性の奥さ
んを貸して貰えるよう、頼んでおいて欲しい
なんて言ってたわ」

「奇クサロンでは、東京在住の方なんて書い
てあったけど、私は関西だから、東京の方は
余り知らないんだよ。阪東太郎の奥さんなん
か知っているけど、彼の奥さんは幼な妻で、
彼の趣味に合わせてプレイしているが、根っ
からのマゾ女性ではなし、貸すとなると話は
別だろうね。渡部好美さんなら、出来るかも

知れないと思うけど、一度、声をかけておく
よ。しかし貴女は、ずいぶん、はっきりと割
り切っていますね。夫の命令なら、どんな男
性にも貸し出されてゆく気？」

「結局は私のマゾ性を利用して、自分も愉し
みたいのでしょ。だから、私だって割り切っ
ています。変わった、いろいろの方とプレイ
出来るなんて、最高だと思っていますわ」

「それで夫婦の感情にヒビは入らないだろう
か——」

「SMのプレイとして愉しむのですもの。辻
村さんの仰有る、アイライクと、アイラブを
使いわけて、その場限りの燃焼をしたいと
思います。夫がその気なら、妻だって、その
気になってもいいと思うのですけど……」

「男の場合は割り切れても、女は感情に左右
され易いからね。危険な遊びですよ」

「じゃあ、こうして、辻村さんとお会いして
いること自体、否定しなければ、ならないじ
ゃありませんか。辻村さん御自身ならいいけ
ど、他の男性となら危険だ、と、そういう風
に受けとれますわ」

「SMプレイには、まず自分を制御するとい
う、かなり強い理性が絶対に必要なんだ。感
情に流された時の結末が怖いね。カタストロ



フを予想して」

「まるで、他の男性には、強い理性がないみたいない方ですわ。それは女の場合だって同じじゃありませんか。私が夫の命令で、プレイに出掛けたとしても、その対象と、心を許して燃焼するか、拒絶反応を起こすかは、やはり私の心にあると思います。いかに私がマゾな女でも、相手によっては、好きになれない場合だってあります。それは辻村さんの場合だって同じでしょう。Wプレイの場合、谷山さんと渡部さん、川路さんと渡部さんと相手をかえてプレイしていても、私はいつも辻村さんが、渡部さんに好意をもって、ひいきめに書いてるように思えるのですよ。それは辻村さんの好悪の感情でしょう。だからアラにされた、谷山さんや川路さんは、あのカメラ・ハントを読んで、或は怒っているかも知れませんか。均等に愛情のプレイは、わがちにくいとは思いますが。しかし、辻村さんの場合、やはり渡部さんにウェイトがかかっているように思えるのです。そうじゃないでしょうか」

辛辣な彼女の、私に対する批判であった。彼女の言う通り、確かにそれは、否定出来ない。谷山久美子を怒らせ、川路むら子にソッ

ポを向かせたのも、今こうして彼女の言をきけば、私の感情によるものであったことに思い当たるのであった。

二人の女性を、同時に等しく均等に欲ばせるむつかしさに、私は過去、幾度となく突き当たり、私自身、強い理性を働かせてプレイしていると自認しながら、やはり、好悪の感情に、無意識のうちに押し流されていた様であった。

彼女にそのことを指摘され、私は肯定せざるを得ない。背徳の倫理を、もっともらしく説く私が、彼女の卒直明快な理念に、あっさり負けてしまったのであった。

既成観念の夫婦という枠に、いつまでも関わっているのは、むしろ私自身であって、現在の夫婦の在り方というものを、改めて見直すべき時期に来ていることを、しみじみと、彼女の言葉の、はしばしから感じたのであった。

苦笑を泛かべて、ビールをホロ苦く、のみ乾し、言い負けて口を緘していると彼女はムキになった自分に気付いたのか、甘い表情にかわって、

「御免なさいね、ナマイキいっちゃって……そんなつもりじゃなかったのだけど、つい云

い過ぎちゃったようすわ。済みません、お気を悪くなさった？」

「いやいや、いちいちごもっともだと、反省しているんですよ。しかし、あなたは鋭い観察眼ですね。Wプレイの場合、両方均等に書いていたつもりなんだけど、やはり渡部さんを、ひいきめに書いたのかなあ」

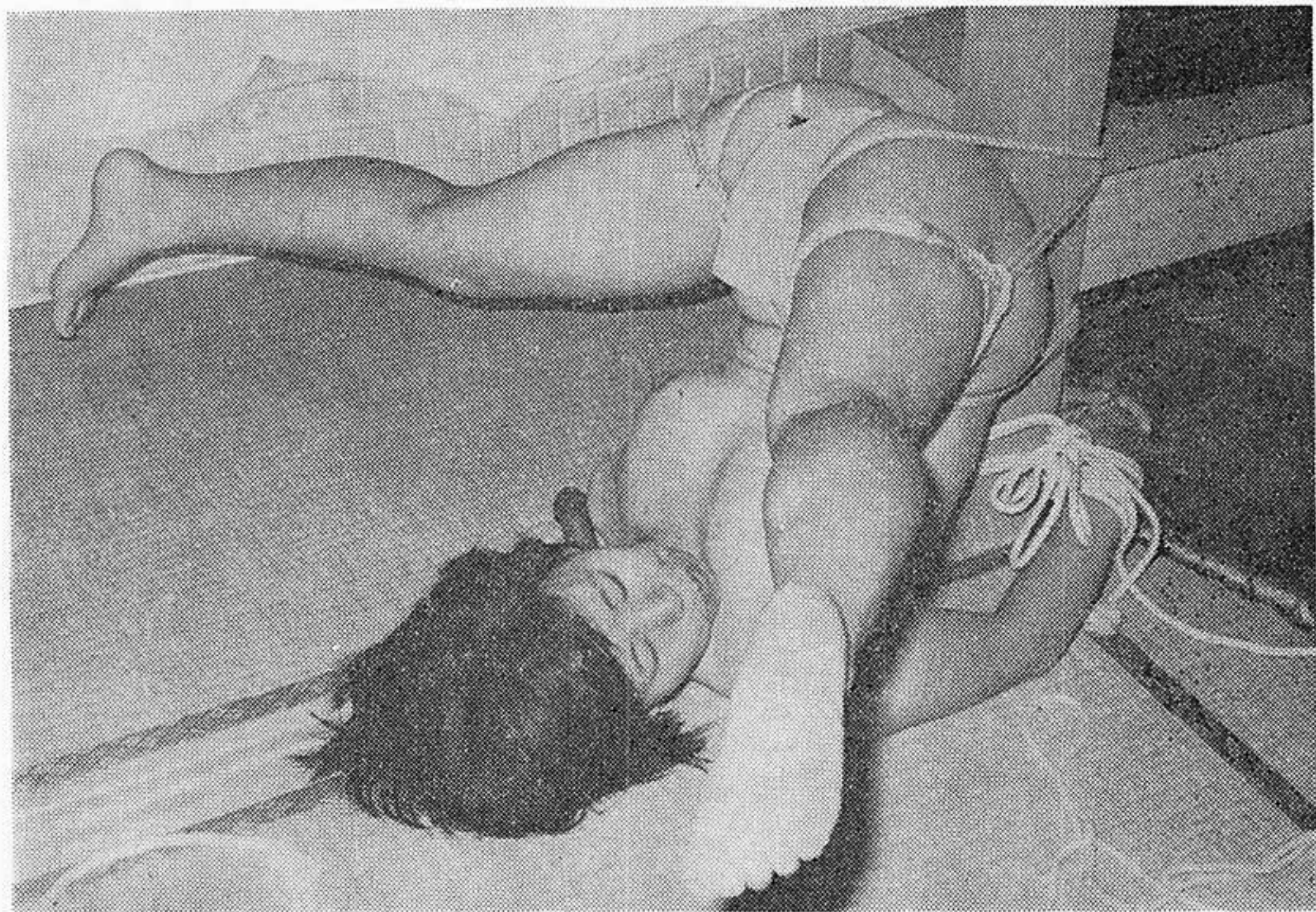
「女が読めば、すぐピンとききますわ。私の先日のハントの文だって、何だか私が、すごい過去を持った、まるでアバズレみたいに思われそうな書き振りでしたわ。こうして今、お目にかかっていて、私が、そんなアバズレ女のようにみえますかしら……」

「とんでもない。正直に言って、この新宿の雑踏の中にふんだんにみかけられる、ごく平凡な、おとなしい婦人といったタイプです」
「夫しか知らない、綺麗な体の、貞淑な妻だとは申しません。かつては家庭の事情もあって、水商売にも入っていたのですから。でも今は、夫の命令を忠実に、素直にきく、二児の母の、ごく在りきたりの妻のつもりであります。夫に対し、爾前承諾の時もあり、時には、爾後承諾をうけることはあっても、すべては夫に告白しておりますし、職務には、まじめで極道もしない夫の、唯一の趣味に、気

に入る妻になろうと懸命に迎合しているのですわ。SMのプレイの折々に、チョッピリ私の本心が、覗くということですよ。どうせプレイするのなら、愉しくやらねば私自身つまらないからですの。分かっていただけます？ この気持」

「よく分かりますよ。立派だと思っ
なあ、その考え——。私のいわんと
することを、あなたが皆、仰有って
しまった。それでいいんですよ。私
だって、あなたに関心がなければ、
こうして、東京くんだりまでプレイ
しに来たりはしない。明日は鬼プロ
で、若い女性二人の、緊縛フォトを
撮るのですが、正直いって、それよ
り、今あなたと、一対一でプレイす
る方がどれ程、愉しいか——。あな
たとなら、赤裸々な、ナマのSMプ
レイが出来るからですよ」

「じゃあ、御期待に、おそい出来ま
すよう、辻村さんの奴隷にさせてい
ただきますわ。御満足のゆくまで、
好きなようになさっていいですよ。
今日一日、あなたのプレイ妻でも



のね」

彼女は、私にだけ分かる、媚を含んだ
なまめかしい視線を、ヒタと投げかけた
のであった。

食事を済ませて表通りに出たが、雑踏
の巷に巻き込まれては、これといったホ
テルの見当もつかない。

「前のホテルでも、よろしいかしら？」
「いいですよ。中へ入ってしまったえば、東
西の別なく、いずこも同じですよ。お任
せしますから——」

もう少し広い部屋、そして緊縛にふさ
わしい部屋のしつらえを内心、希んでも
いたが、そうそううまくは、ゆかない。
結局は、先日、初めて出会った思い出の
ホテルへ、私達は肩を並べて歩き出した
のであった。

× × ×

案内係が部屋から出てゆくと、佐野み
さ子はドアをロックして戻ってきた。

ドッと堰をきったように女の感情が溢
れ出したかのように、彼女は、机に向か
って足を投げ出していた私に襲いかかる
ように、のしかかってくると、

「会いたかったのよ。夢ばかりみてたわ

今日の日のこと——」

と、言葉もうわずって、貪るように、私の唇を求めて、熱い舌端が、ぬめりこんできたのであった。

冷静に私を判断し、批判していた、レストランでの彼女は毫もなく、ひたむきの情熱をたぎらせた、マゾ願望の赤裸々な女に、一変していたのである。

この見事なヘンシン——。

狭い密室に一步、足を踏み入れ、一對一の男と女に還元すると、女はかくも豹変するものなのであろうか。

夫や子供のことを、人妻であるということ、すべて忘却の彼方へ放擲して、全身にセックスを漲らせた、女の舌は、ぬめぬめと私の口腔内を這いずり廻っていた。

やっと唇が離れる。熱い塊をのみこんで、私の胸は嗜虐の欲びをたたえて燃え始める。

第一回で実現出来なかったプレイを、今こそ、やりとげずにはおかまいという信念めいたものが頭を拾げ、脳裡は、めまぐるしく、ナマナマしい、強烈なプレイの構図を、断片的に描き続けていた。

「御主人様と呼ばせていただいて、いい？」
熱い吐息を、私の頬に吐きかけて、女は喘

ぐようにいう。うなずくと、

「嬉しいわ、私の体はすべて御主人様のものよ。思い切り、あらあらしく扱っていいわ。

脱がせて……私の、ハダカをみてえ」甘い要求は、既に体を濡らしているのか、喘いで、なまめかしい。うなじに両手を巻きつけた侘みさ子は、しなだれかかり、強烈な刺激と愛撫を、ひたすらに希んでいた。

「よしよし、脱がせてやろう。お前の亭主の匂いを、早く洗い流してくるんだ」

「御主人様と一緒にでなくちゃ、いや——」

首に絡んだ両手が解けて、みさ子の右手は私の胸を撫で、おもむろに下がっていった。

ファスナーにかかった手を払いのけると、

私は命令するような口調で、

「よし、私の前に立って、一枚一枚、脱いでハダカになれ」

みさ子は、うなずくと、すつくと立ち上がり、ネックのセーターを首からスッポリとぬいて、両腕をくるくる巻くようにして脱ぐとスカートを外し、まるで追い立てられるかのように、下着をとっていった。

網膜に灼きついて離れぬ、あの堅肥りの、白々とした裸身が私の眼前に立ちはだかつている。部屋こそ違うが、よく似たしつらえの

同じホテルで、同じようなことが再現されようとしている。

九月四日に始めて会って、あれから八十日の経過が、まるで一瞬のこのように思えて信じられぬくらいであった。

髪形、容貌、豊かな乳房、出産でこころもち、たるみをみせた腹部など、すべてが、あの日と同じである。いや厳密に言えば唯一点怖いほど、よく切れた替えたての刃で安全カミソリを当てた、あのすべやかなふくらみがかたちよい蒼丘に、かわっていたことであった。熱い感慨で、そこに眼をやっていると、「伸びたでしょう。これが御主人様とあたしの、へだたりの時期ですわ。あたしをいつも不毛の土地にしておいてほしいわ。今日も刺ってね」

と、撫でている。

「剃毛して帰って、あの時ダンナ、何かいたかい？」

「やっぱり剃られたかといって、じっとみつめていましたわ」

「それだけ？」

「マジックで、剃られたあとを、黒々と塗って、その横に『みさ子のバカ』なんて、ラクガキしていました」

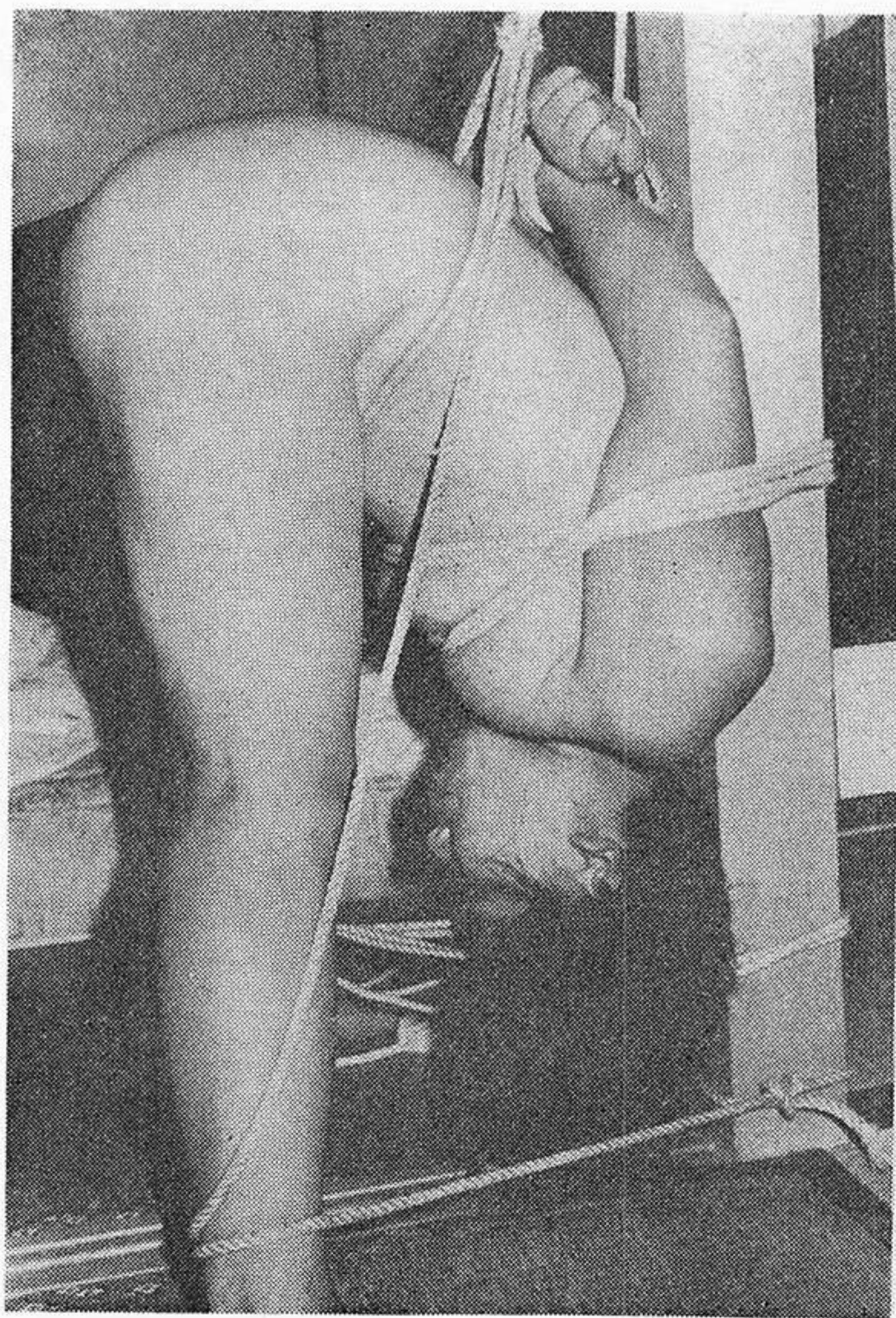
「無かし、デリケートな心理が交錯して、感慨無量の気持だったことだろう。今日は剃るの、やめとこう」

何となく夫の気持が分かる気がして、フト私の心は微かに咎めた。夫たるもの、自分以外の第三者によって剃られてきた妻に、嗜虐と被虐の交錯した、淡い愛憎を抱いたことは

否めなかったに違いない。

「いやいや、綺麗に剃ってえ。みさ子、つるにしてほしいのよう」

鼻を鳴らし、甘え声で腰を振る。全身に媚態をみなぎらせて、みさ子は両手を腰にあてがい、これみよがしに、背をのけぞらせて、私の鼻先すれすれに突き出してきた。



「今日は奴隷妻の宣誓はしないのか」

「もう前にしたでしょう。一度宣誓すれば、もう二度と御主人様に対する気持は、変わりはありませんもの」

ドキドキする様な紙片の文句を、澱みもせず、読み上げていった、あの時のみさ子の、火照って情感の昂まった顔が、脳底に蘇ってくる。あの宣誓のあと、縛ってバスに行き、みさ子の大好物のおしゃぶりを堪能させて、散々痴戯に耽ったことを、ありありと思い出したのであった。

同じコースを再び、私達は歩もうとしている。確かに再現してみたい気持もなくはなかった。しかし、そっくりその俚では、余りにも曲がない様にも思えた。この魅惑のプレイ妻と一緒にバスにゆけば、又ぞろ、情事が先行するかも知れない。

その時、さっと頭に閃いたのは、浣腸プレイのことであった。果たそうとして、果たせなかった第一回の未練を今日は存分に吐かしてみたい意欲にかられ、あわよくば、数度の浣腸を試みてみる気になったのであった。

縛り上げて浣腸し、ゆっくり風呂につかって、スケスケの風呂場の硝子窓越しに、苦悶する実態をみつめるのも面白かろうと思った

のである。

「さあ、早くきれいきれい、してくるのだ。匂いが残っていると承知しないから——」

パチリと一つ、おしりを叩いてやって、追いやるように突き放すと、みさ子はあきらめた様にタオルをとり上げてバスへ向かった。

歓びを知りつくした女体が、湯に浮いている。硝子窓越しにチラリと覗いて、私はプレイの場所を物色した。

閨との仕切りの襖を外すと、右側はテレビ台が、はめ込まれていて、恰好の縛り柱が出来上がる。早速、襖を外して入口に立てかけ私は、フォトをとる準備を始め出した。

いきなり浣腸プレイから始めるつもりであった。第一回のような、謂わば、加減見の前戯的な緊縛は必要ではない。赤裸々の女体の隅々まで既に知り尽した今、懼らく彼女も、ズバリ核心を突いたプレイに、いきなり没入したかったことであろう。

もう一度、チラリと浴室を覗くと、一杯に石鹸の泡を立てて、夫の匂いを払拭すべく、大童でごしごし洗っている。微笑ましく見つめていた眼を外らし、既に私の頭は、やがて始めるSMプレイの構想のあれこれで一杯であった。



一人湯は早い——。湯上がりの馥郁とした香を撒きちらして、みさ子は裸身の俛で、私の前に立ちはだかり、チラッと、はにかんだ笑みを泛かべて、両手を胸で組んだ。

「いいかね、すぐ——」

「ハイ、どうぞ」

「じゃあ、この柱の前に仰向きに寝て、体を

柱に添わせて持ち上げてゆくのだ」

「そうですか」

素直に、言われた通り、みさ子は試みる。介添えして、ぐいぐい体を持ち上げたところで、両手を背後にさせて、柱のうしろで縛り上げる。

腹から両腿へかけて縄をかけ渡し、両脚を

一杯に拡張させる。みさ子は自己の意志で、大きく開いた。

ふくよかな女の匂いが、私の鼻腔を擦り、ありありと展開する豊満な肉体に、嗜虐の想念は疼いていった。

「浣腸してやるからな。この間のプレイでは遂々出来なかったから、今日はその続きだ」黙っていたが、みさ子の眼は、許容していた。

洗面器に、軽く一杯の湯を汲み上げてくると、エネマシリンジを、とり出してくる。

この俛、しばらくは放置しておくので、余り大量注入は、やらないつもりであった。

円球をにぎりしめると、ぐぐぐと温湯を吸い込む手応えがあって、嘴管から、みさ子の腸内へ、液体が急速に移動してゆく。目見当で、五〇〇CCぐらいは、確実に注入している。

最初、チラリと眉をしかめたが、みさ子の双眸に、あきらかな恍惚が流れ始め、静かに閉じた瞼が、ピクピクけいれんして、欲びに震えていた。

エネマシリンジを除去して、感情の尺度を確かめると、このプレイ妻は、早々と昂まりの呻きをあげるのであった。

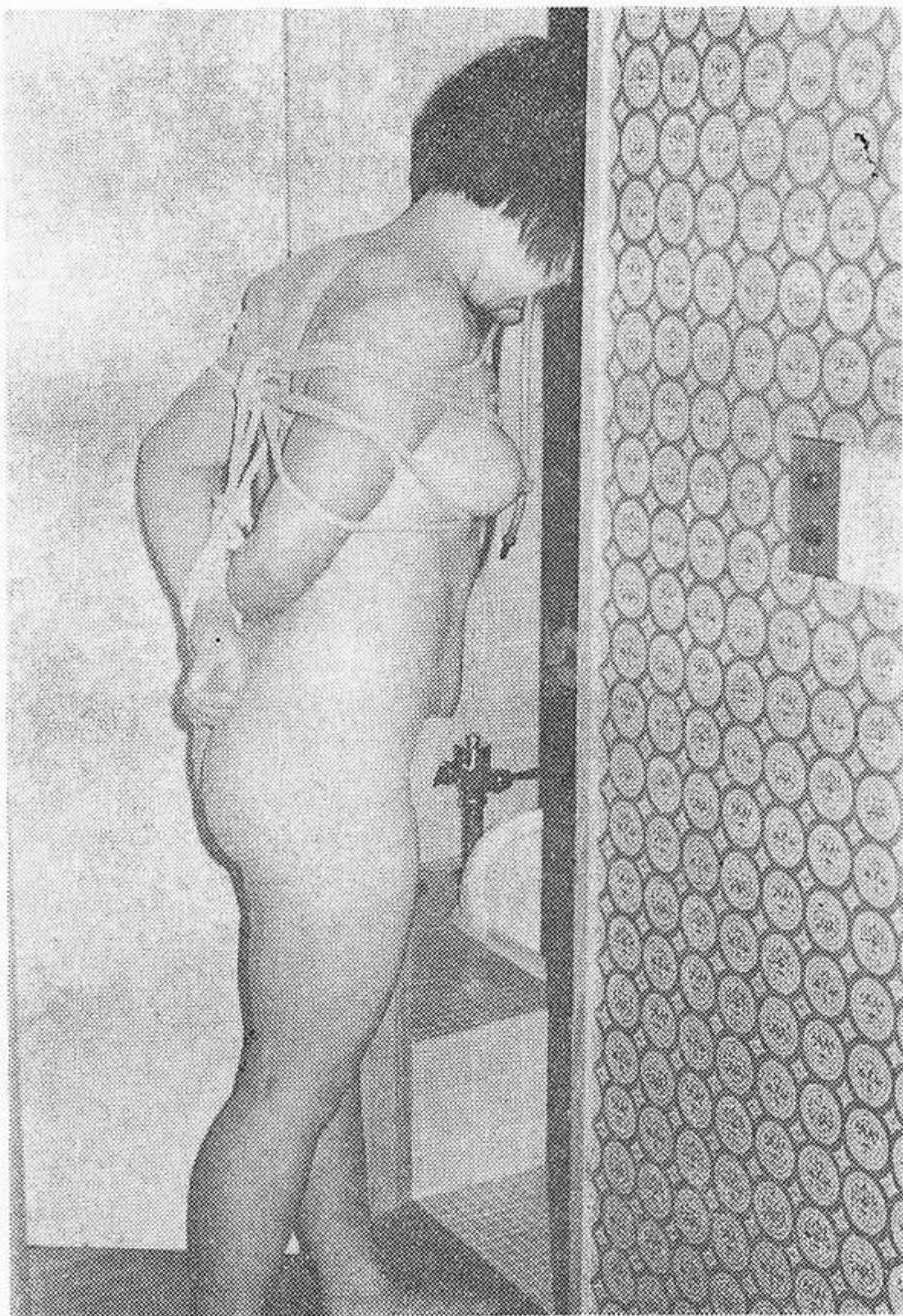
浣腸責めで、幕をきって落としたSMプレイの、あられもない数々の行程を想像して、その反応は、早くも、濡れにぞ濡れしであった。

女の匂いを鼻腔に残して私は顔を上げる。螺旋状の赤いローソクに灯を点じると、注入液の洩れない様に、赤く斑々と点滴してゆ

く。蠟の熱さに身悶えて、そのくせ、みさ子は、その熱さを快楽にすりかえて、歓喜の呻きをあげるのであった。

ローソクを頂点に屹立させて、部屋のスイッチをきると、ほの暗い部屋に、ローソクの灯りで、女体が白く浮かび上がり、頂点の周辺を、紅々と照らし出していた。





おもむろに服を脱ぐ。

脱落を懼れて、フツと火を吹き消すと、かなり大型のパイプと取り替えて、一際、昂まる嬌声をあとに、私はバスに向かった。

女の歓声は、閉ざされたバスの中までは届かない。少しぬるくなった湯にひたり、湯栓をひねって、温めてゆく。その時、勃然と、

私自身の五官が充血してゆくの、熱い思いで、肌に覚えたのであった。

× × ×

パイプを手にして、私は見下ろしている。

点灯した明るさの中に、赤い軀骸は、こぼれ落ちていたが、みさ子は洩らしてはいなかった。

激しい嬌声がハタと止んで、奇妙な静寂に閉ざされ、甘い吐息だけが、陶醉のあとを物語るかのように、長く尾を曳いて吐き出されていた。

顔に跨がる私――。

みさ子は口を開く。

待ちかねてウズウズしていたかの様な儀式を済ませて、やっと縄を、といてやる。

ドサリと柱から腰を外して横倒れになり、苦しいポーズの長さに女は喘いでいた。

抱き起こして、次のプレイが、休む間もなく始まる。

「御主人様、おながが痛い……トイレへゆかせて」

遠慮勝ちに、みさ子は訴える。

「ダメダメ、未だ序の口だよ。本格的な浣腸は、これからだ」

「息を吸い込むと、出そうになるの」

「もう少し、我慢するのだ」

せき立てて、柱に向かわせて、上体を折り曲げてゆく。

充分、屈曲したところで、上体を柱に縛りつけ、後手縛りの両手を吊るし気味にして、両脚を開かせてゆく。

足縄かけて柱に絡ませ、ぐんと臀部を屹立

させたポーズは、浣腸プレイには、もっともふさわしかった。

紅骸を払い落とし、引き続きのプレイの手順はポンプから始まる。浴室から持ち出してきた湯桶一杯の温湯を、シューッと吸い上げては、かぐわしさをたたえた、よく締まったかたちよい双つの連山へと運ぶ。

三度、四度……。私の愉しい作業は続く。ぐっところえて、みさ子は息をつめ、食欲なまでのポンプの作業を、易々として受け止めていた。

従順に忍耐するが故に、私は尚更、それに付け込んで、意欲をそえられる。

湯桶を片手に持ち上げ、再びエネマの洗礼を続けてゆく。湯桶の湯量は、既に残り少なくなりつつあった。

懼らくは、二リットル以上の液体が、彼女の腸内に充滿しているのではなからうか。

「ああ、苦しい。もう出そう。我慢出来ない……」

切ない訴えを無視して、最後の一滴までも吸いあげ、すっかり注入し終わって私は一つの作業を完了したような気分で直視した。

じつとりと、注入した湯液が滲んで、今にも噴出しそうなのを制御して、懸命に抑圧し



ているのが、まざまざと、みてとれたのであった。

もう限界は超越しているのだろう。

「ああダメ。ゆかせてえ……もうダメヨ。本当に……」

悲痛に叫ぶ、みさ子の必死の声が、股の間から私の耳朵を打つ。

柱から解き放すと、両手で、膨らんだ腹を押えて、かけ出そうとするのを、ぐいと羽搔いじめにし、地団太ふむ、みさ子に素早く繩をかけて、しっかりと後手に縛り上げる。

「さあ、これを啜えてゆくのだ」

屈辱のエネマを口に啜えさせ、トイレを開いてやる。



あわただしく白い陶器に跨がるみさ子に、もう待てしばしはなかった。

一杯にドアを開いて、意地悪く、私はカメラを構える。

けたたましい潑音。

ふるさとの異臭が漂い始め飛沫が、陶器に点々と飛び散っている。

洩り腹を、何度となく圧迫させて、長々とみさ子の吐露はつづく。

「もう、いいですわ」

流石に、羞恥を満面に泛かべて、みさ子は振り返って私に声をかけた。

女体を跨ぐようにして、片足でペタルを踏みつけ、勢いよく流される廃液が、すっかり消去し終わってから、体をうつぶせて腰をあげた、みさ子の後始末を、ゆっくりとし終わり、立ち上がった彼女と眼が合った時、女はハニカミの笑みを、うかべた。

「愧かしかったですわ。一番、愧かしい恰好をみていらっしゃるんだもの」

「お前が始めてみせた羞恥じゃないか。だから、その羞恥を確かめてみたかったのさ」

私は、命ずる通りに、逆らわず行為をつづける、この代理妻に、感謝のキスを与えてやった。

縛られた女体を、男の胸に投げかけて、トイレのドアの近くで抱擁する奇妙な男女を、ノーマルな人間がみたら何と思うだろう。

一つのプレイをなし遂げた喜びなど、汚辱にまみれて、赤裸々なプレイを展開する当事者でなければ、恐らくは理解に苦しむ行為に違いなかった。

「浣腸の味は、どうだった」

「余り沢山、入れ過ぎると、苦しいですわ。やはりホドホドでなくちゃ」

「もう懲りたというのか」

「ウウン、そうじゃないの。御主人様のなさることなら、どんなことでも我慢する——。唯、とても苦しかったってことよ」

可愛いことをいって、みさ子は私の胸に顔を埋めた。

「暫く横になろうか。但し、そうして縛った俣だぞ」

「嬉しいわ、抱いて……」

いそいそと、私の後についてきて、闇の上
布団をまくり上げると、横ざまに坐って、そ
っと体をにじり、身を横たえる。

愛撫の手に、身もだえして、みさ子は、喜
悦の声を挙げた。

「ああ、御主人様、この縄を解いてほしい。
抱きしめたいの」

きれぎれに女は訴える。そうなれば、S M
プレイの終焉である。緊縛が、プレイを続行
させる、辛うじての、きずなであった。

「ぜいたくいうな。解いてやらない。私の思
い通りに、お前さんの体を自由に、もてあそ
びたいのさ」

女は、太腿の力を抜き、卑語を交えて、そ
うなりたがっていた。

（接して洩らさず）——と、貝原益軒の、養
生訓の一節が、チラリと脳裡をかすめる。

この際、それもよし。しかし、洩らさずと
いう自信が私にはなかった。余りにも、心が
昂ぶり過ぎているからである。

起き上がって、バイブを握って戻ると、こ
の場合の代用をさせることにした。そうでも
しなければ、私自身この俚、果てそうに思え
たからである。

泣き喚くような、みさ子のうた声を、傍で
耳にし乍ら、不覚にも私は、いつしか、睡魔
に魅き入れられるように、仮寝の夢を辿って
いた。

× × ×

夢というものは、不思議なもので、ごく短
い束の間の仮寝に、長い長い夢をみることも
あるし、一夜の熟睡の間に、ごく限られた僅
かの夢をみることもある。

私のうたたねの夢が、この前者であった。
（よくもオレの女房を可愛がってくれたな。
お礼に、今度は、オレが辻村君、君の奥さん
を存分に可愛がってやるぜ）

こういって、佐野みさ子の夫の佐野正が、
ぬっと部屋に入ってきた。私は佐野みさ子と
もう、幾晩、S Mプレイに耽溺しているのだ
ろう。心身共に疲れ果て、みさ子の叫び声が
挙がったのも数知れない。

私の傍で、佐野みさ子は、相も変わらず、
歓声を挙げつづけている。

夫の佐野正は、皮肉な眼で、妻の痴態を見
下ろし、ガラリと境の唐紙を開いた。

広々とした邸内の中央に縛り柱があつて、
全裸の私の妻が、柱の中央に高々と、くくり
つけられ、両足首に縄をかけられて開股のポ

ーズで、両脚を吊られていた。
「あなた……助けて」

妻が私を、みた。妻は岩下志麻であった。
（オレの女房は、こんな美人だったのか。ま
るで岩下志麻ではないか。いつの間に、あんな美人になったのだろう。よし、助けてやらなくちゃ）

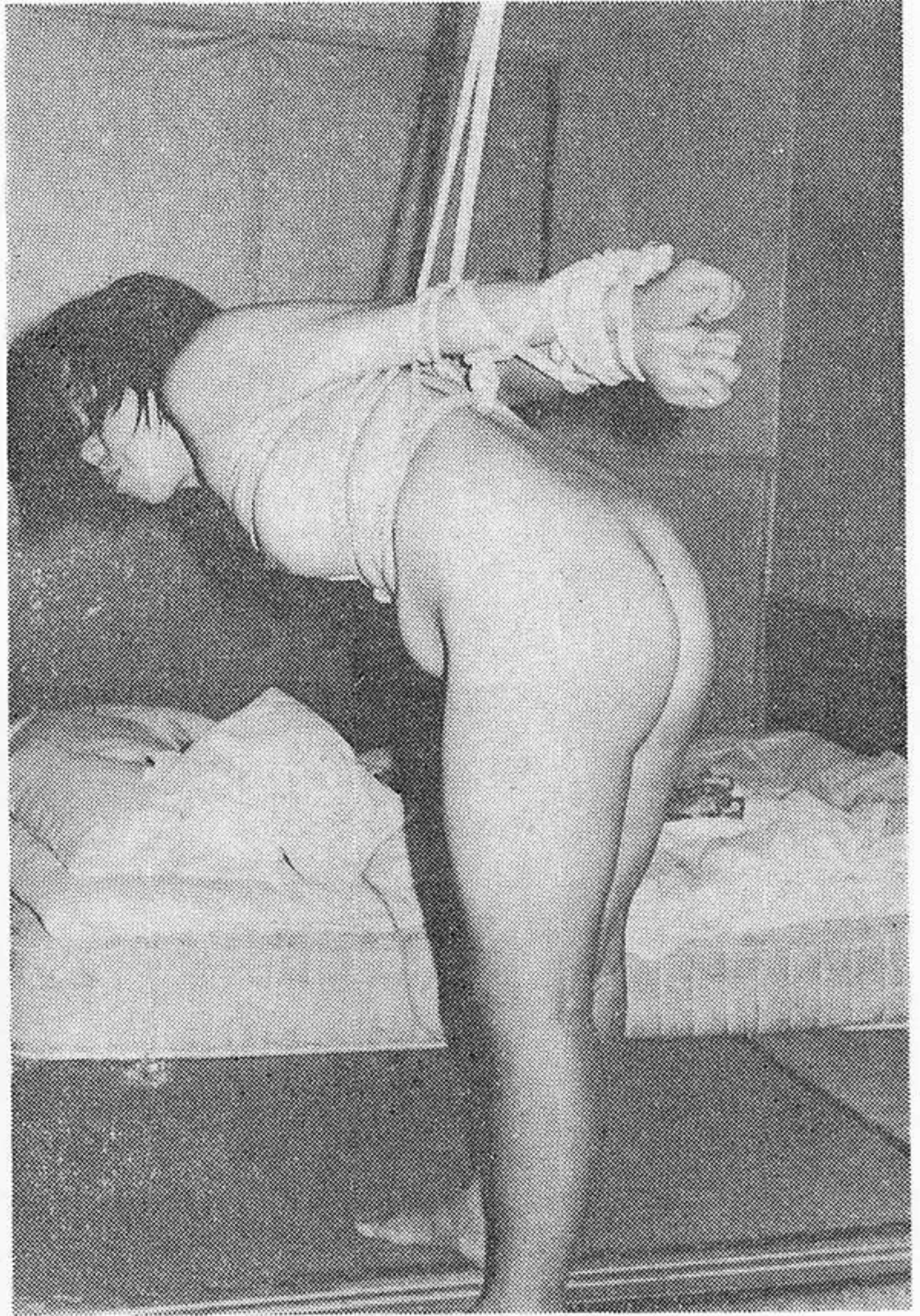
起き上がろうとして、私は身動きもならな
いことに気付いた。全身、雁字搦目に縛られ
ていて、しかも、佐野みさ子の上下の歯が、
私にがっちり噛みついていて、喰い干切ら
れそうである。

（助けてくれえ）

私は喚いた。

（フッフ、いい気味だ。これから辻村隆の奥
さんを、皆んなで代りばんこに頂戴するから
な、みているがいい）

覆面を外した佐野正は田宮二郎であった。
佐野みさ子の夫とは、こんな美男子だったの
か——。私は恐れた。私の妻は、大の田宮二
郎のファンなのである。果たして妻は、微笑
を浮かべて、田宮二郎そっくりの佐野正に、
媚笑を送っていた。忽然と岩下志麻の顔が消
えて、いつも見馴れた私の妻の顔に、還元し
ている。



「おおい、みんな来いよう。数知れぬ女をクイモノにした辻村隆の女房を、みんなで頂戴しようじゃないか」

佐野正は、広い邸内で叫んで手を挙げた。

暗闇から数十人の男共が現われて、高々と柱に縛りつけられて、両足を吊られて開かされた妻を取り囲んでいた。

町内会長がいる。なじみの銀行員がいる。

弟もいる。箕田京二に、増田喜代司に、徳永昭一に、渡部光雄に、ドクター氏に、私の知っている顔が、すべて勢揃いし我勝ちに脱いでゆく。

縛り柱が乱立して、その一本一本に、私の妻が、同じ恰好で縛りつけられていた。

剃毛している奴がいる。

妻の髪に鋏を入れて、剪ってゆく。みるみる丸坊主にされて妻はニタニタ笑っていた。

リーダーはいつしか、町内会長に変わっていて、佐野正の姿は、人浪に没していた。

ドヤドヤと数人が私を胴上げし、佐野みさ子は、スッポンのように啖いついて、ぶら下がっていた。

妻の縛られた柱が円形になり、その中央で私は逆吊りにされ、佐野みさ子が、くらくらいて、一緒にぶら下がっていた。

「いい気味だわ」

「一寸、可哀そうね」

「余り、いろいろの人と、プレイするからバチが当たったのだわ」

「私達で、今迄の分、今日は、とり返さなくちゃ」

円形の数十本の柱に縛られた、私の数十人の妻が、てんで、めいめいに口走って、私を凝視している。

「気をつけい！ 辻村隆に向かって敬礼！」
中隊長だった町内会長が号令をかけると、一斉に一同が私に挙手の礼を送った。

「なおれーッ。では、唯今より始めッ」
ワーンと、ときの声と共に、数十人が一斉

に、数十人の私の妻に飛びかかっていった。
狂宴の喧噪——。

一本、一本、柱が闇に消えて、冥路の中央に私独り吊り下がり、佐野みさ子が、しっかりと齒を立てて、私にぶら下がっていた。

微かな、羽虫に似た音が、地底より響いている。千切れそうに痛い——。

オレは、どうなるのだろう……。

絶望と痛みが、ハッと仮寝の夢をさませ、私を現実に戻してくれた。

羽虫の音は、現実の世界でも響いていた。体をにじりよせて、私の仰臥の体に蔽いかぶさったみさ子が、快楽の疼きを、上下の齒にこめていたのも現実であった。

「痛いッ！ よせよ」

夢と現実の間で、恐怖にかられて、思わずみさ子の髪の毛を掴んで、引き離そうとする私——。

「私を放っておいて、眠ったりして……噛みついて起こしてあげたかったの。何かウナされていたみたい」

両手を背後に縛られた後、不自由なポーズで、みさ子は猥らに笑った。

長いバイブの洗礼に、感覚はもう麻痺しているのだろうか——。私はやっと手を伸ば



して、忘れていたものを、とり出していた。

× × ×

夜までに、鬼六郎を訪問すればいいのだから、時間は、たっぷりある。

この長い時間を、一度のチャンスに賭けるため、据膳の女体を前にして、私はプレイを如何に長びかせるかに四苦八苦であった。

タフな堅肥りの女体は、被虐の願望を、むき出しにして、挑みかかってくる。

女体の自由を束縛しながらも、私は挑まれていることを自覚した。

「ねえ、どうしたの？」

「少し疲れたのだ。イヤな夢をみた」

「どんな夢、はなして」



しなだれかかったみさ子の手が私をふるい立たせようとしている。

ありありと覚えている夢物語を、在りの俤話そうとして、私は口を緘した。愉しい夢なら、それもいい。しかし、余りにもナマナマしく、数十人の私の妻が犯されていたとは、どうも口にも出したくなかったのである。

心乱して、淫らに挑んでくる女の手に辟易して、私はその手を握ると、抱きあげて一緒に立ち上がった。

「どうするの」
「鴨居に縛っておいて、ゆっくり鑑賞してやるからね」

一本の縄で、手早く腰縄かけて縛り終わる

と、別の縄をつないで上体を鴨居につるし、ポクリと縄目から飛び出した双房を、かなり手荒く掴んで、揉みしだいていった。

それだけで、みさ子は、華々しい声を立てて、大仰に欲びの呻きをあげていた。

左足首に縄を巻き、一本足で直立させて、ぐいぐい足首を吊り上げてゆく。

こうして、一つのポーズは出来上がったものの、夢が尾を曳いて、何故ともなく、私の嗜虐への関心は薄れていた。

平手でシリをパシパシと叩きのめし、
「しばらく、そうしているのだ」

捨て台詞のようにいって、私はゴロリと、傍のベッドに転がり、煙草に火をつけて、天井に向かって紫煙を吐き出していた。

黙した俤、この代理妻は、一本足の直立でこのポーズを維持していた。

けだるい心に忍びよる、これが無常というものであろうか。あらゆる奉仕をいとわず、むしろ、彼女の方から積極的に、男性の欲ぶ行為をしようと努めているのに、私はそれが煩わしくなって、避けようとさえ、しているのであった。

オーラルインターコースを、私の方から求めるくせに、もう一息という処で、いつも制



御し、不満な表情を、みさ子に泛かべさせていた。それも、もう幾度くり返したことか。

今もこうして、シンプルな縄で後手縛りにして鴨居に吊り、片足をうしろに吊りあげておきながら、私は寝そべって眺めている。何かなし、心が、けだるい。

気がむくと、尻を叩き、愛撫してやるプレ

イ——。

ポーズは変わっても、同じくり返しの連続であった。私の脳裡には、短い、うたたねのあの凄まじい夢の跡が、しこりとなって、いつ迄も残っていて、それが、SMプレイのブレーキにもなっているようであった。

確かに世の、平凡な男性にくらべて、私は

女体を知り過ぎていた。口に出さねど、怨嗟の妻の声、同好者の羨望と嫉視の観念が、今みた夢に結集されているようであった。

（毎月毎月、SMカメラ・ハントを書く為に過去八年半、どれくらい、苦勞したかしれない。人が思う程、愉しくもなければ、快樂そのものでもない）と、弁解はしてみても、高嶺の花と思う人達からみれば、贅沢この上もない悩みであったかも知れない。

（もう、そろそろここらが引けどきだ——）

私は、はしなくも夢に刺激されて、SMカメラ・ハントの無理な続行を断念することに心を決めた。

（これを最後にしよう。もっと気楽に機会のある時には書くもよし、相手なければ書かざるもよし。要はフィーリングの問題なのだ。もう少し自分を大切にしなければいけない。五十才の坂を越えて、残された人生の方が少なくなつた今、何を好んで、毎月々々、あくせくと、カメラ・ハントという、愚にもつかぬルポを書くために、かけずり廻っているのか——）

その考えは、かねてから私の心の中で、くすぶり続けていたが、佐野みさ子との、SMプレイの間隙の、仮寝の夢が、私の観念を決

定づけてしまったのである。

その想念が私の気持ちを軽くさせた。自分で作りあげた負担に、勝手に喘いでいたのだ。

何も今回で、私の女体遍歴に終止符をうつわけではないが、SMカメラ・ハントと称する、連載ルポは、これが最後になるだろう。

幸いにも、プレイする相手は、稀代の代理妻、マゾ願望の願ってもない女性である。

最後を飾るにふさわしい女性でもあった。

私は簡単に吊るしていた縄を、とき放つと嗜好の想念に、俄に一本、筋金の入ったような気持で、もうすっかり、浅い眠りからさめた、けだるさを吹っ飛ばして、被虐体に向かって、縄をとって立ち向かっていった。

「このシコシコした尻を、思い切り、叩きのめしてやるからな。いいな」

「ハイ、御主人様のお気の済むように……」

幾度かの恍惚の境地を彷徨して、佐野みさ子は半ば忘我の状態で、反射的に応える。

「お前との、今日のプレイをカメラ・ハントの最後にするつもりだ。謂わばお前は、SMカメラ・ハントの、最後を飾る女でもあるのだ」

「どうして、おやめになるのですか——」

何か自分に落度でもあったのかと、みさ子

は、びっくりしたように聞いた。

「やめたくなったから、やめるのさ。書きたなくなったらから、書かないままだよ。書く書かないは私の自由だからね」

「どうして、急にそんなこと、いい出したのです。気になりますわ」

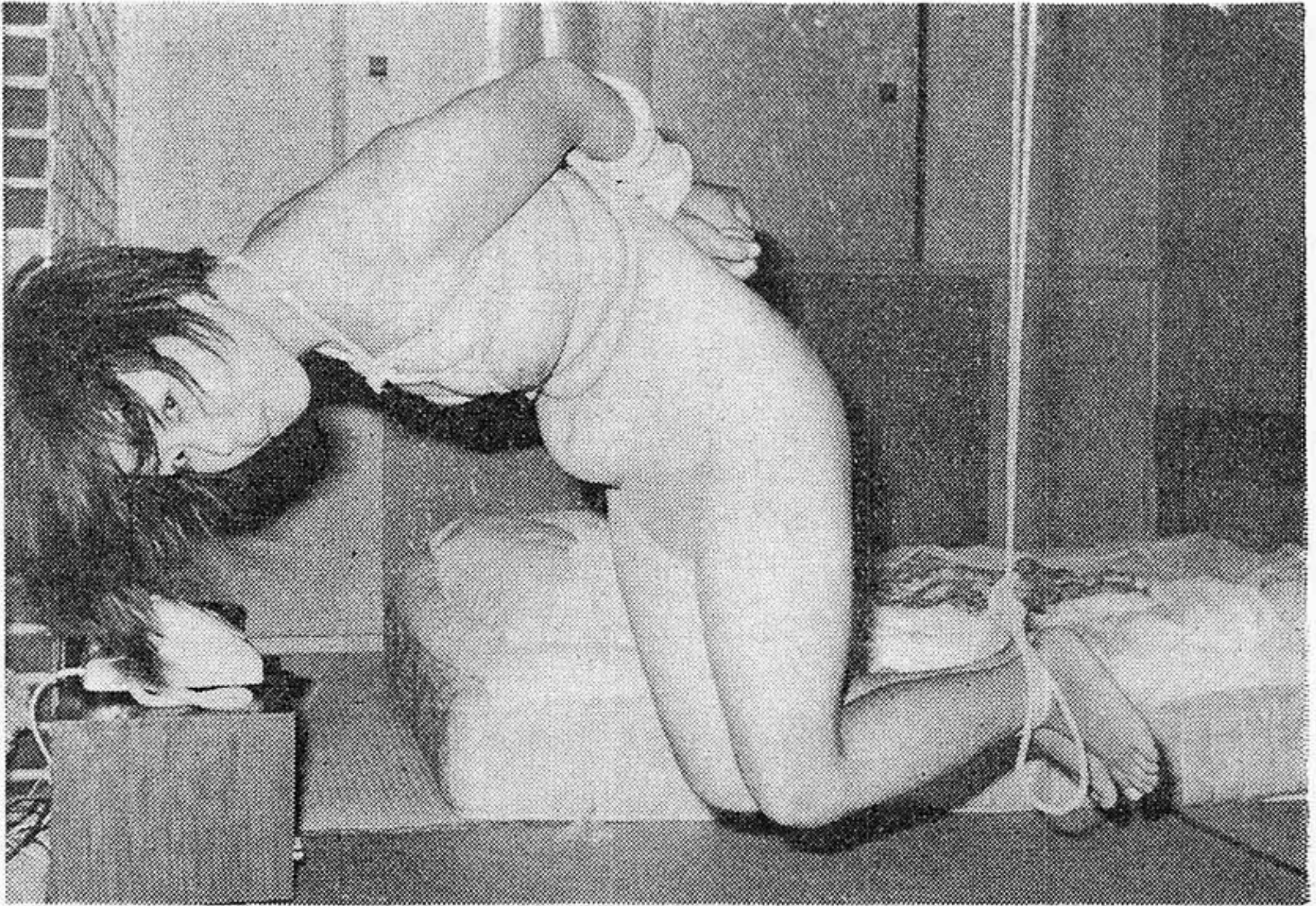
「それは、あんたに関係のないことだよ。唯

ね、カメラ・ハントの最後を飾るに、あんたはふさわしい女性だということだけは、断言出来るよ」

「まあ、私なんか……」

「例え、ひとときの間でも、プレイ妻、代理妻という、面白い表現で、私の嗜虐の対象となつて、あらゆる行為を許容してくれる。そ





んな女性は、この広い日本を探しても、そうそうザラにはいないからね。まして、私とここを出て別れたら、もう夫に従順、奉仕的な人妻に戻るのだからね。佐野正の、れっきとした妻が、夫の承諾を得て、ひとときのプレイ妻になってくれるなんて、考えてみりゃ、私は最高に幸せな人間かも知れない。これ以上の愉しみは、そうそうザラにはないと思うよ。これ以上、何を求めようというのだね。その最高の愉しさを味わったところで、チョンと一幕、花道のひきどきというものじゃないかね。渡部好美と、あんたの二人は、夫の諒解のもとに、存分のプレイが出来る、最高の女性だったよ。いずれ恋しくなったら、又上京するよ。しかし、それは書かない。二人だけが知っているSMプレイセックスの、楽しいプレイ

になることだろう」

「そんなにいつて戴いて、光栄ですわ。夫にもこの愉しみを、わかち上げたい——そんな気持ですわ」

みさ子の眸は、しつとりと濡れて、黒眼がちの円な眼が、一入、輝いていた。

「心がきまると、別れるまでの、ひととき、激しいものが、やりたくなってきた。覚悟はいいかね」

「ええ、存分に虐めて下さい、御主人様」

「あなたと、いえ」

「ハイ、あなた」

満足げに私は頷き、胸から腹にかけて、しっかりと縛り上げて、鴨居につなぐと、両腕を、絞り上げるようにして、手首まで、ぎりぎり縛り上げていった。この鴨居に吊り下げるともりの緊縛の、第一手段であった。

「両脚を開くのだ——」

いわれた通り、みさ子は易々として、股を開いてゆく。前のめりになって、両肢を開いたポーズは、尻叩きにもっともふさわしい、恰好のポーズであった。

鍛えられた、強靱な、双臀が、私のムチを待って、従容と眼前にある。その逞しさが私の嗜虐心を向上させた。

手触りは、コリコリと堅く締まっている。手始めは、このホテル備えつけの、浴衣の帯紐であった。柔らかいから、皮膚を傷つけることもあるまい。

拳に、ぐるぐる巻いて、かなりの力をこめて、発止と叩く。

勢いで、上体が前にのめったが、みさ子は両足に力を入れて、ぐいとふんばり、声も挙げなかった。

パシリ、パシリ……音だけは派手に、部屋一杯に響き渡った。

「痛いかな？」

「ううん、いい気持。もっと強くたっていいわ」

うつむき加減の顔が、うしろの私に、弾んだ声で応える。おしりが、うっすら赤らんでいた。帯紐を細目のしなやかな縄にかえて、打擲が再度、始まる。今度は、思い切り叩けば、皮肉が破れるかも知れまい。幾分は手加減しながら、私は縄ムチを、ふり上げる。

ピシリ——ピシリ——。

「あッ、いたッ……ああ」

打擲と比例して、断続的に悲鳴があがる。苦痛のみが先行しては、快楽は伴わない。

しかるべき快楽が伴ったら、ムチ打ちには、苦

痛から快楽に、すり変わってゆく。

体を近づけ、片手で飛び出した乳房を摘み、モミモミし乍ら、一方の手は、矢継早やに女のシリにムチを、ふるい続ける。

果たして、みさ子の苦痛の呻きは、甘い快楽を含んだ、歓びの声に変化していった。乳首の指は加速度を増し、歓びに喘ぐ、女の呼吸は切迫する。

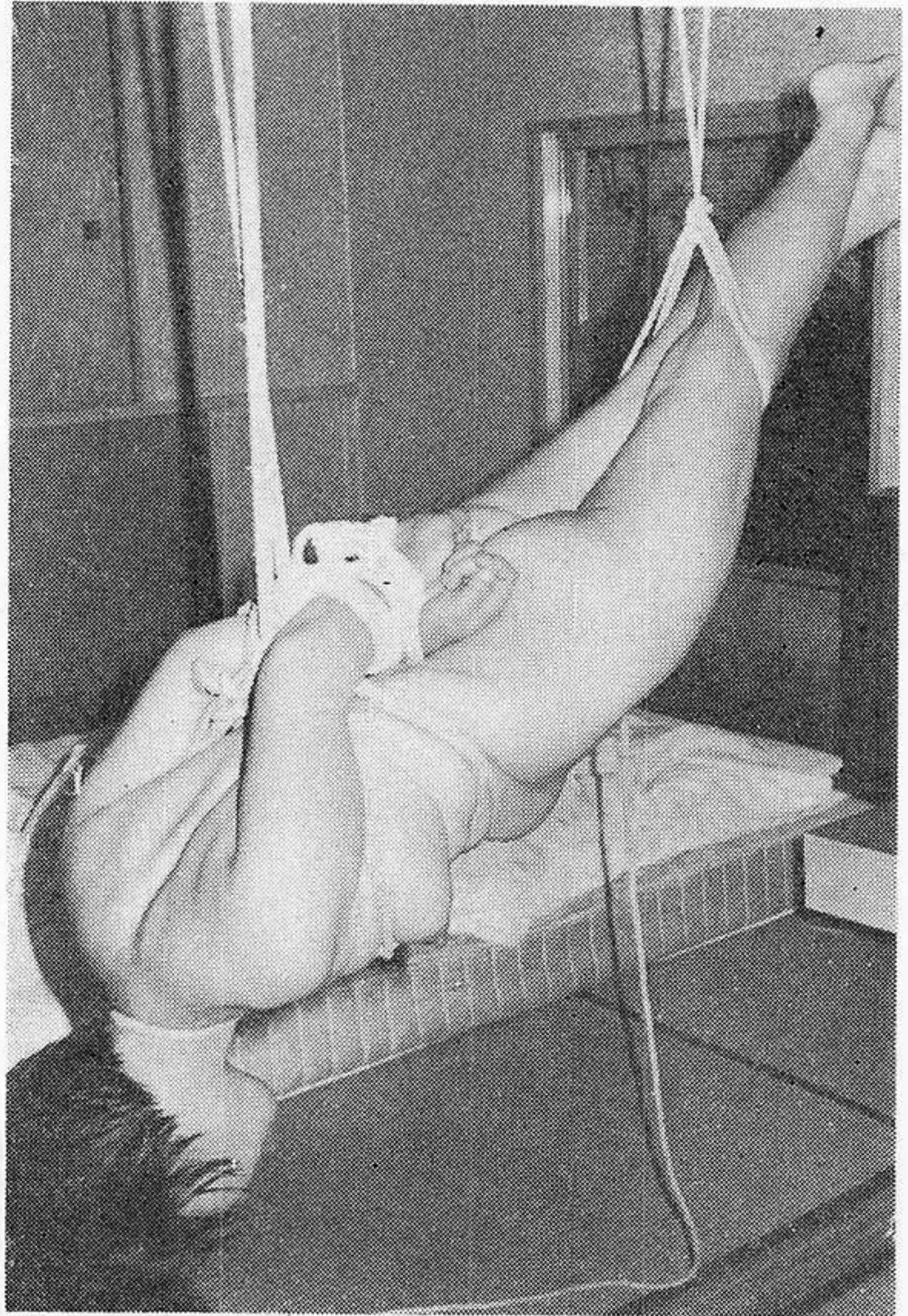
「もっと、もっと、きつく……」

女は、尚、激しいムチ打ちを、自ら求めている。強さがましてゆく。

遅しい臀部は、赤々と条線を縦横に描いてムチ打ちの条痕を留めていた。

乳首の指先が所を替え、この打擲のプレイによる反応を確かめつつ、私の右手は休む間もなく、縄ムチを双臀にふ





るまい、つづけていた。

女の息が弾む。

「もっと、もっと虐めて……」

虐めてという言葉は、恍惚と快楽を意味していた。絶え入りそうな声は、快楽の昂進のしるしでもあった。

みさ子の求める、女悦器具の起用チャンス

である。

細い麻縄で十文字に股縄かけて、身動きのとれぬように首から膝へ、縄を連絡させ、足首をしめつけてゆく。

女の頬がピクピクとケイレンし、恍惚が泛かび上がる。

これでよし——。縄ムチの打擲は、更に激

しさを加えていった。

打擲の痛みは、完全に甘美な悦楽に、すり変わっていた。

しじまを震わす、快楽の叫び声が、如実に女の欲びを表現していた。

嚙言が口をつき、それは卑語めいて、彼女が私に送ってよこした一文の中の、プレイの時は、みさ子と呼ばず、××子と呼んでくれと書いてあった通りの言葉を、際限もなく吐き出し、関西人の私にとっては、その言葉はピンと来ぬにしても、東京の人間が聞いたら、ドキリとするような卑語を、憶面もなく喚きちらす、みさ子は、完全に一匹の性に、たけり狂った牝獣と化していた。

その言葉自体に、男は昂揚する。女の口から吐き出される卑語のナマナマしさは、男性を、際限もなく、アブノーマルなセックスの世界にかり立てる効果を放っていた。

それが、飽和の状態になりつつあった私の嗜虐心を、更にゆさぶり続けてゆく。

ピンクに染め上がった、豊かで逞しい双臀は、私の好き心を、そそるに充分であった。

恍惚の度を、極度に昂めさせておいて、苦痛度の高い、吊り責めへと誘導してゆく、私の思惑は図に当たった。

いとおしげに、くれないの臀部を撫でさすりつつ、私は足縄、股縄と解いてゆく。

吊り責めを考えて縛ってあるので、上体の縄は、その俛にして、解き放ったあと、直ちに、両足を簡単に縛っていった。

女悦の器具が私の手許に戻っても、尾を曳く快樂の放心状態が女の喘ぎに残っていた。

縄の一端を鴨居に、かけ渡し、思い切った一気に、ぐぐっと引っ張り上げると上体を吊った縄にぐっと全重量がかかって、みさ子は

「ああッ……」

と呻いた。

呻きと共に、彼女の体はタタミを離れて、宙に浮き上がっていた。

首縄かけて、別の縄で、胸から腹をしめつけた縄の背で、吊縄を結びつけて、鴨居へつないでおいたのであるが、足首がタタミを離れた刹那、忽ちその縄に全身の重みがかかりみるも痛々しげに、乳房の下へ、かけた縄と腹部をしめた縄が、重みで深々と、くびれて肌に喰い込んでいた。

腹の縄は、完全に皮下に埋没し、乳房の下

の縄目は、女のみぞおちを強く圧迫していたことであろう。

みさ子は、切迫した呼吸で喘ぐようにいった。

「我慢するのだ」

パシリと一閃、縄ムチを尻に見舞うと、女は、やるせなげな眼で私をみた。

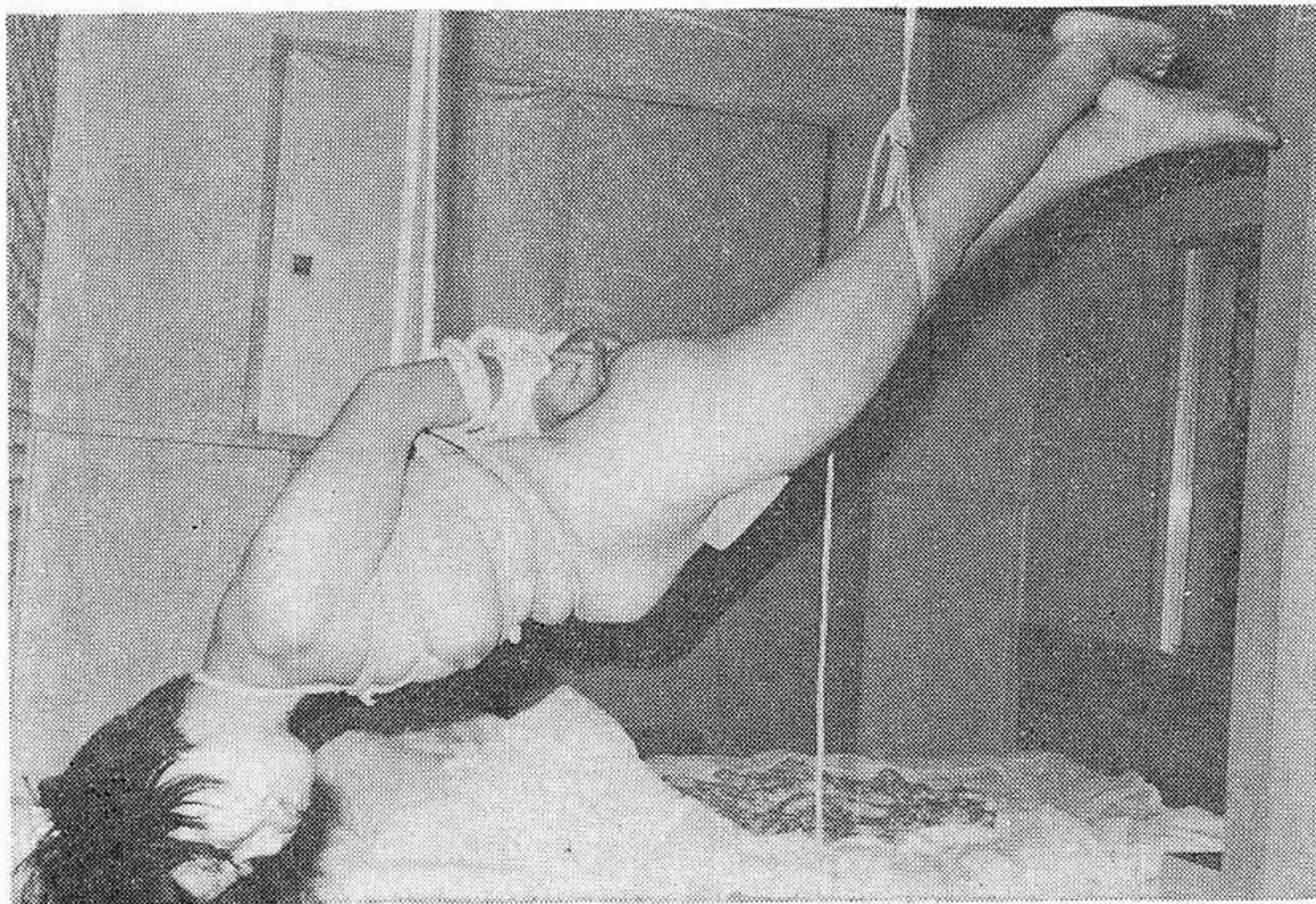
腹部の縄の喰い込みの激しさにあふられて、出産でややたるみのきた腹部の肌が、ポクリと、臍窩を中心にして突き出ていた。

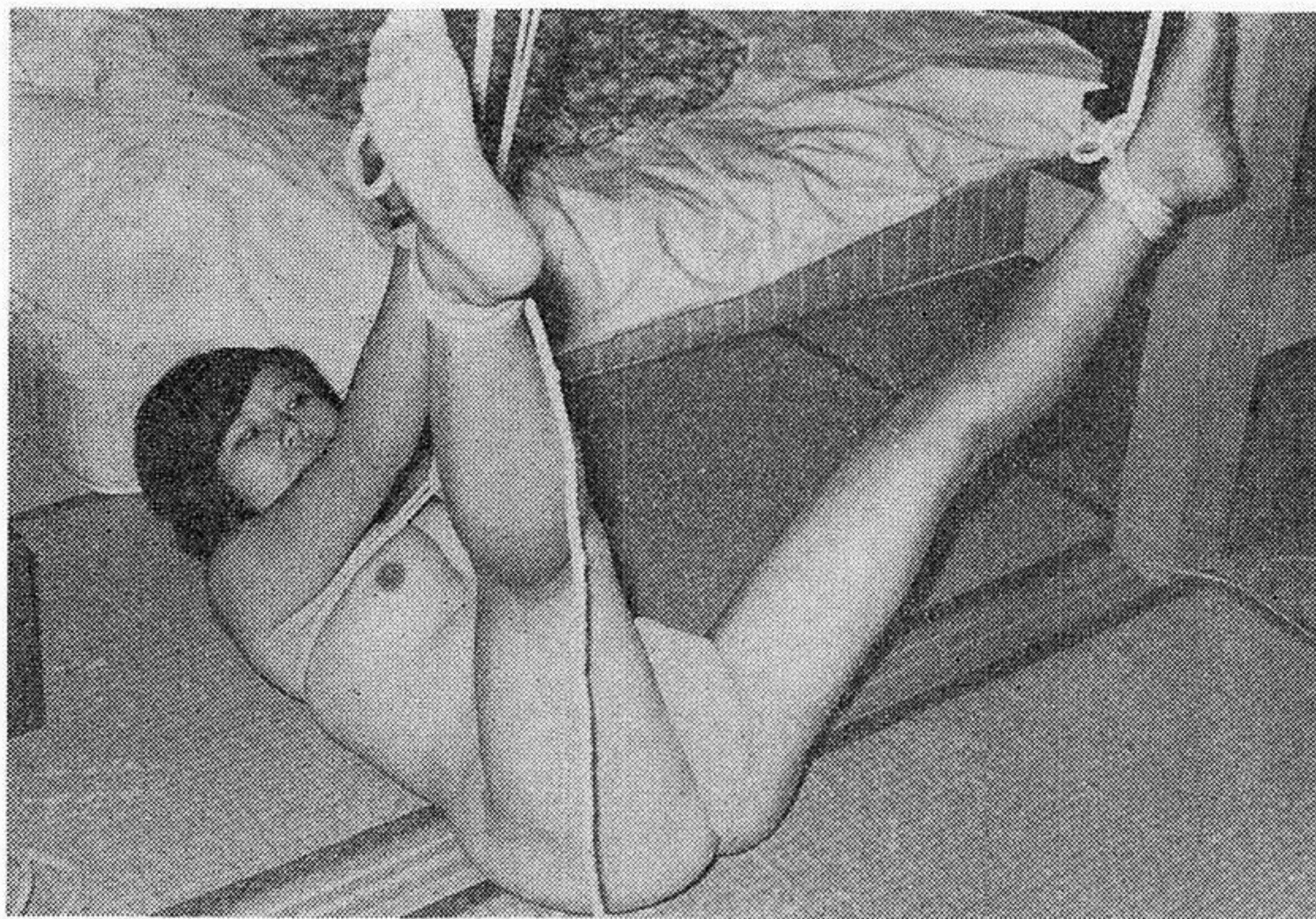
もう一卷き、あの腹にも縄をかけておけばよかったと、私の眼はその豊満さへ走る。

「苦しいかい？」

カメラを構えて声をかけると、吊られた顔が、こちらを向き、眼が柔らかに微笑んでいた。

決して、ラクであろう筈はない。縄の皮肉への喰い込みは、尋常ならざる強烈さで、力のかかった、その個所だけが、鋭角に喰い込んでいるのでも分かった。





吊り下がった下半身が、膝で折れ曲がっているのは、両脚首の縄が、上体を吊った縄に近いせいであった。

一旦、体が宙に浮くと、もうその苦痛は、高くても低くても同じことである。どのようなポーズをとらせても、問題は、腹と胸にかかった吊縄一本に、すべての重心が托されているからであった。

足を吊った縄を、ぐいと引き上げて、鴨居の後方へ、掛かった縄をズルズルと、ずらせてゆく。吊り下がった女体は一直線に伸びる。

足首は、タタミすれすれでも、紛れもなく、女の体は宙に吊り下がって浮いていた。

傾斜した双臀に、縄ムチを走らせ、私は、女体をブランコのようにゆさぶってみた。

ミシ、ミシと鴨居が、きしみ、この逞しい女体が、ユラユラと前後に揺れ、みさ子の

苦楽の呻きが、唇をついて、ほとばしった。

この吊りの苦痛を、快楽に切り換えるべく羽虫の響きが、女体の胸から腹、愛の匂える園へと、這いずり廻り始める。

腹部の圧迫によって、たえだえの甘い呻きを洩らし続けて、女体は揺れている。

足縄をゆるめると、両足が安堵の地に安定し、じりじりと歩を進めて、前のめりに吊り下がっていた体の態勢を立て直してゆく。

上体をもち上げて、ほてった顔が私を振り仰ぎ、愛虐の喜びを湛えて、充実していた。

「おなかの縄が、相当深く喰い込んでいるけど、苦しくない？」

「苦しくないこともないけど、我慢は出来ませんわ。私って重い方でしょう。だから吊られると、やはり、こたえますもの」

べっとりと、ひたいが汗で濡れている。苦痛をこらえた脂汗であろうか。

濡れたタオルで拭いてやり、私はかがみ込んで、忍耐に対する感謝のくちづけをした。

刺激に、唾液も涸れ果てて、生唾をのみこんでいたのか、みさ子の口腔は、微かに生臭さかった。

「水をのませてやろうか」

「ええ、ノドがカラカラなの」

コップの水を一杯に口に含むと、口移しに冷水をのませてゆく。女のノドがグビグビとなって、旨そうに、のみ込んでいった。

「もう一度、吊り下げるからね。いいな」
「ハイ、あなたのいいように……」

みさ子は絶対、拒否しない。飽くまで、奉仕の精神に徹していて、従順であった。

下半身を高く吊り下げるべく、足首の縄を移動させて、膝頭で結ぶ。

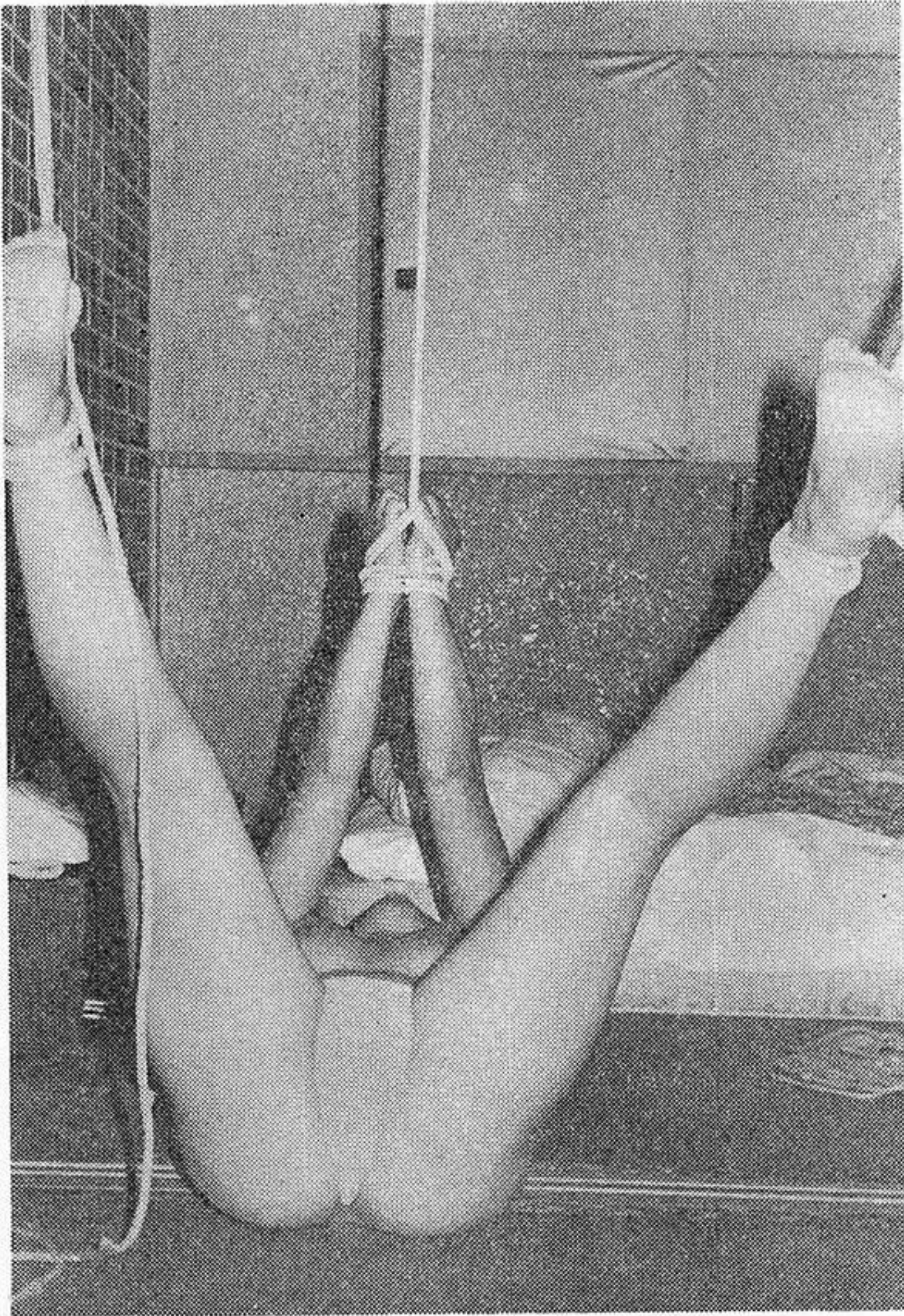
先に鴨居に縄をかけておいて、みさ子の下半身を、下から抱えるようにし乍ら、一気にぐいぐいと引き上げて、手早く結び止める。両足が高く上がると、頭は当然、低く垂れ下がってゆく。

上体を吊った縄は均一でも、足縄一本の高低によって、種々に変化する吊りの形態が、私には格別の興味があった。鴨居が高ければ逆吊りも可能であるし、一対一でプレイする場合、こうした手段で吊ることが、もっとも労力も要せず、手軽に吊れる方法ではなからうか。唯問題は、上体に重心のすべてがかかる為、上体を吊る縄のかけ方に、若干の手加減が必要であった。

心臓部へかけた胸縄に、吊り縄の力をかければ、危険である。古来からも、よく見られ

る、菱形に縛るのは、決して恰好のよさばかりではないのであって、首に縄をかけて、首の根元で結びめをつくり、二の腕に引き絞って菱形に縛ってあるのは、心臓部の縄を避けているのではなからうかと、私案するのである。

SMのプレイでの、フォートを撮るためのも



のや、短い時間の緊縛なら、何ら差し支えないが、長時間に亘ったり、吊り下げるとなると、心臓を圧迫する縄は危険である。

佐野みさ子の、この吊りのフォートからでは判っきり分からぬかも知れぬが、首縄かけて別の縄で腋に絞り、その絞った縄に、吊り縄をかけていて、心臓に圧迫を加えていないか

ら、種々の吊りポーズに耐えられるのであることを御留意、願いたい。

吊り縄は、腹とか胸の、一本の縄にかけるのではなく、胸、腹、胴など、数本にかけておいた方が、被虐者にとっても耐えられるということも、私の過去長年の、緊縛構成によって得た知識である。一本の縄にかけると、胸なり、腹なりの、その個所だけに、全重量の体重が集中して、かなり苦しく、数分にも耐えられぬ場合が多い。男にくらべ軽いといっても、数十キロの体重が、吊り縄によって宙に浮くのであるから、目的がSMプレイの苦痛を与える責めといっても、所詮がプレイであれば、耐えられるように縛るのが当然であり、そのことを研究してみるのも、吊り好きの同好者の、つとめではなからうか。

佐野みさ子を、鴨居に吊り下げた場合などは、足縄が、かなり体重を助長しているの一本縄の吊りよりはラクである。

この吊り方で、上体のみ一本縄で吊り下げるとなると、ごく短い時間なら耐えられても長時間となると、無理かも知れない。腹部にかかった縄の圧迫が強いからである。

私の好きな、吊りの体位が、ここにある。この狭いホテルで、吊りを敢行するとなる

と、この程度で満足すべきであった。

私は浴衣を脱ぎ捨て、下帯を外した。

裸身を曝して、吊り下がった、みさ子の下に寝そべるとこの吊られた女体を、ゆっくり味わうべく、頬づえついて見上げるのであった。

私の足が、みさ子の頭のところにある。

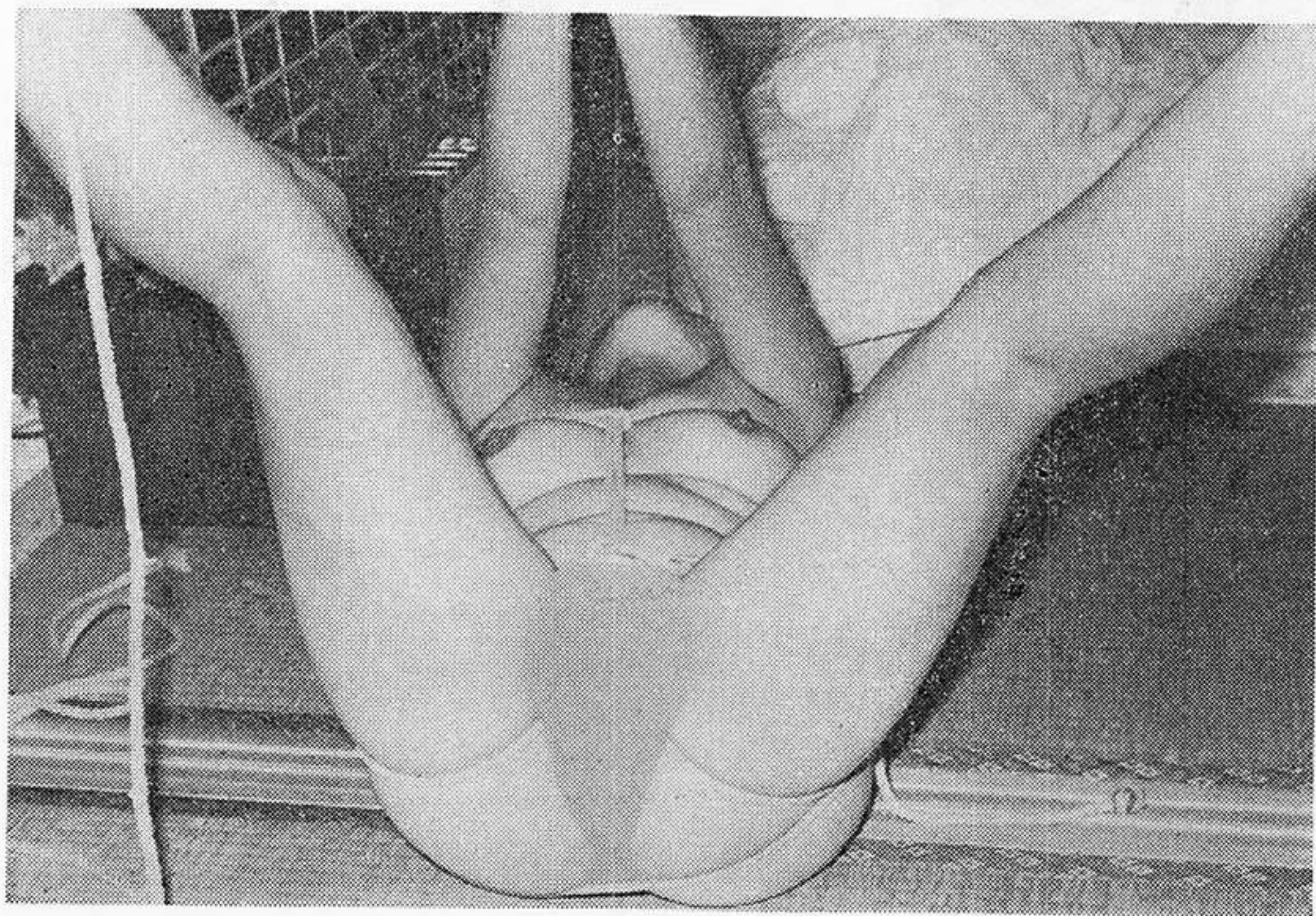
足の拇指と中指で、みさ子の髪を挟んで、引っ張り、ゆさぶると、眼上の裸身が、微かに揺れる。

手を伸ばして、たるんだ腹の皮を、ぐいと引っ張って、ひねり上げると、みさ子は眉をしかめた。

乳首が恰度、手の届く、いい位置にある。

弄び乍ら、

「ああ、いい眺めだ。どうだい、吊られた気分は——いい気持だろう」





と、うそぶく私。

「今迄、吊り責めされたことがあるのかね」ときくと、微かに首を振って、

「いいえ、余りありません」

みさ子は、私の下腹に答えていた。

「SMプレイでは、誰とのプレイが一番、愉しかった？」

「あなたですわ」

「へへ、うまいこといつてる。ロマン派生とやった時も喜んでたじゃないか」

「ムードが又、違いますわ」

「私とプレイして、どうして楽しいんだい」

「プレイに、いろいろと変化があるからですわ」

「それだけ私がタフだということかな」

「ロマン派生様は別でしたが、SMプレイといっても、縛るとすぐセックスに走ってしまいます。それで、私の満足せぬまに、すぐ終わりにしてしまうのです」

「誰だって、みさ子のおしゃぶりには陥落するよ。私だって、こらえるのに必死だったんだからな」

幾度かのオーラルセックスを未遂に終わらせて、そのくせ、今再び私は、素晴らしい乍らじりじりと体をずらせて、みさ子の顔の真下に持ってきていた。

「さあ——」

促すと、吊られた俤、みさ子はごく当然のように首を伸ばしてくる。

大脳神経は、この放恣なプレイに急激に動転していった。

これぞ、SMプレイの本望——。

宙逆りの女が、奴隷奉仕者の権化の如く、妖しく眼上に揺れる。

自己の意志によって、女体は揺れていた。夢魔が描いた、あのナマナマしさの、逆のポーズが、そこに現実にあった。

官能を靡れさせて、男と女が疼いている。制御する知能を抛擲する意志が、カーッと

熱く頭脳を奔り抜けた時、私はぐったりと、その位置で憔悴していた

× × ×

全身の骨が、とろけそうに、手足が、けだるい。

ノロノロと起き上がると、膝を吊り上げた縄をとく。正直いって、気力は萎えていた。軌を一にして、第一回のプレイの時も、みさ子を机上に縛りつけ、剃毛のあと、激しく心の揺れ動くまま、オーラルセックスに果ててしまったのであった。

(のどが渴いていて、おいしかった……)

艶然と笑って、みさ子は、あの時、そうだった。

そして又、今も、形こそ異なれ、私はオーラル・インターコースを辿っていたのであった。

「いつも、こうなのね」

裸身を私に寄り添わせて、女は呟く。

「どうしてだろう」

「敬遠なさっているんじゃない」

「そんなことはない」

「もうやめるの?」

「ああ、疲れた……」

「いや、いやよ、いやよ。もっと虐めてくれ

なくちゃ。物足りないわ、私

——」

「夢の通りだ」

「何? その夢って……」

「連日、連夜、ぶっ通しで、

あんたとSMプレイに耽溺して、ヘトヘトになった処へ、あんたのダンナが乗り込んできた」

「ヘンなユメ。私の夫の顔も知らないのに」

「覆面を外したら、田宮二郎そっくりだったよ」

「へエ——、そんな美男子じ

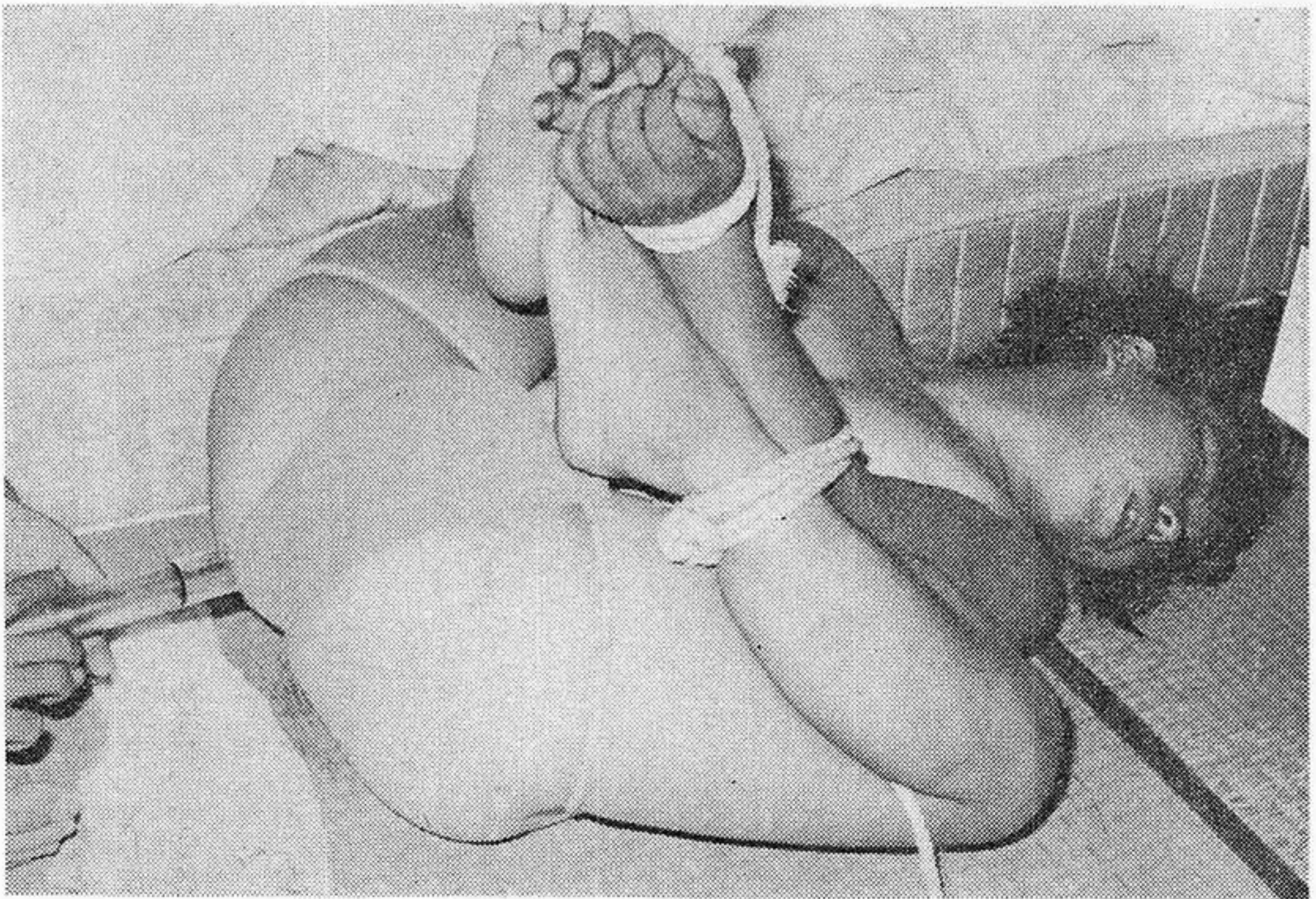
やないわ。似てるといえば、そうねえ、あなたに少し似ているわ。もっと若いけど……このテの顔付きはS男性が多いのかしらネ」

私は苦笑して、みさ子の顔をみつめた。

「ねえ、もっと縛って虐めて

——。こんなのどうかしら。両手を縛って吊るでしょう。

そいで両足も開いて吊るの。





宙吊りじゃ、もたないけど、そうしたポーズをとったら、あなた、よく見えるでしょう」
みさ子は積極的に駄々をこねた。どうしても、ひきずり込まずにはおかぬ、遅しい性欲が、全身に横溢している。

「ねえ、早く、縛ってえ」

じれたように、彼女は縄を差し出して両手

を前で揃えると、縛ってくれというのであった。縛られて放恣な露出のポーズをとれば、又ぞろ私の嗜虐心が、否応なく湧き上がるとでも考えているようである。

迫る、その勢いに気圧されて、たじたと辟易し乍らも、私の手は無意識に、女の両手に縄をかけていた。

よいしょと憶劫げに立ち上がり、鴨居に縄をかけると、みさ子は大の字に仰臥して、両手を高々と、かかげるのであった。

みさ子の注文通り、足首を別々に縛って、大きく開股させ、両足を鴨居に吊り上げる。女が自ら、いった通りであった。自らその気で、腿の力をゆるめて開ききっているのだから、当然であろう。

ゆくりなくも、彼女の計画したように、私の好き心は急速に昂まりつつあった。かくも早く、私の疲労が回復することは珍しい。ひとえに、彼女の積極的な献身ぶりが、私の機能を蘇らせていったのかも知れない。

奔放な被虐ポーズに、ひきつけられるように、私の顔は近づく。

甘酸っぱく、むれた匂いが、むうッと鼻腔を、よぎる。

氣力を甦生させて、私はみさ子に溺れていたのであった。

意識を喪失させて彼女は酔い痴れていた。プレイへの昂まりは、瞬くうちに、私達を、雰囲気にとけ込ませていった。

縄の味に憑かれて、上体を起こして隆起を二本の縄によって盛り上げる。開股の股縄は太腿で分かれている。

あさましい縛られ姿を異性からみられている——。

その感覚が、彼女を更にエスカレートさせていった。

たつぷりと果汁を含んだ爛熟の果実は、正に喰べ頃合である。この果実は、もぎとって欲しがっていた。果実の旨さを、味わって欲しがってもいた。その据膳を、彼女自らが演出していた。

菊の花が、鮮かに一輪、ひっそりと可憐に咲いている。

私の想念は浣腸に走る。

これも又、その想念にふさわしいポーズであった。

浣腸の挙句、その俛、挑みかかれば、みさ子は、どのような反応を示すだろう。

そんな想いにかられると、もう私は待てしばしもなかった。

汲み上げたバスの湯は、生ぬるく、さめている。湯桶に軽く一杯、汲んでくると、ポンプで注入を始める。開股吊りでは若干、注入の位置が低く、眼を愉しませる魅力に乏しかった。屹立させて、一部始終を、この眼で確かめ乍ら、注入してゆく欲望にかられ、俄に開股の足縄を鴨居から、はずすと、二つ折り

に屈曲させて、両足を縛っていた縄を、その俛、左右の肘のあたりに密着させて、縛りつけていったのであった。下腹部を圧迫されてみさ子は呻いていたが、いっそ、その被虐ぶりが快いのか、私の次の行為を期待して、心を疼かせているようであった。

得難い被虐女体は正に私の眼前、咫尺の間に開放されている。

エネマなら数分で片附くところを、私は、浣腸するという、その行為の愉しみに耽り乍ら、ポンプでの注入を、幾度となく繰り返しては、ゆっくりと吸いこまれて行く液体の反応如何と、みさ子のA感覚を観察していたのであった。

両手足を一束にして、彼女はまるで、双臀の化身となっていた。

数えていたら、十九回で、湯桶のぬるま湯が、あらかた、吸い込まれていった。

クルクル、クルクルと、圧迫された腹部が鳴っている。

「どうだい、気分は？」

「少し、おなかが痛くなっちゃった」

「行かせないよ——こうして、あんたの御希望を叶えてやるからね」

「嬉しいわ。抱きたいの、あたし……ねえ、

一度、解いてよ」

「ダメダメ、縛った俛だ」

「あなたの体重に押しつぶされて、洩れてもしらないわよ」

「栓をしておいてやる、これで——」

回転させると、羽虫の響きが、私の手に伝わってきた。

みさ子は大きく呻いた。無理矢理の鈍痛が神経に伝わったのであろう。

私は、もはや逡巡しない。蹂躪しつくす、すべてが、そこにある。ベッドの上へ引きずってゆくと、心労の影を漂わせ乍らも大脳神経は鋭い程、冴え渡って、斟酌もあらばこそ欲望の狩人は愛の獲物を求めて、身を躍らしたのであった。

× × ×

冬の日、とつぷりと暮れて、ネオンの五彩が、倦怠の眼に眩しかった。

佐野みさ子の双眸は、充実の歓びに、生き生きと輝いていた。

レストランの一隅——。

眼前の鉄板で焼かれた、部厚いビフテキが失われた精気を、急速に復活させてくれるであらう。

「あの、お約束、忘れないでね」

肉を口に運びながら、みさ子は呟くようにいった。

「何だったわけ？」

「夫に、プレイの出来る奥さんを貸してやっていただきたいこと——」

「そう、そう、そうだったな。心掛けておくよ」

「真剣にね。でないと、私一人、愉しんでいるみたいで悪いもの」

割切った夫婦仲というのか、これが近頃の夫婦気質なのか、みさ子は、しきりに肉をパクつき乍、共存共楽を考えていた。

明日に又、一つのプレイが待っている。気力充実の明日になれば、又、考えが変わるかも知れないが、今の私にとっては、もうそれは蛇足に近い、飽和の行為のように思えてならなかった。

女性の肉体の強靱さを、しみじみと、みせつけられて、私の想念に、何の関連もなく、(Witch) という単語が泛かび上がってきたのであった。

佐野みさ子も亦、この魔境大東京の一隅に住む Witch の一人ではなからうかと——。

——(完)——

(カメラ・ハント終焉にあたって)

長らく御愛読下さいました、SMカメラ・ハントは、この稿を以て、一応、終焉にしたいと思っています。

昭和三十九年十一月号より本号まで、八年四カ月、我々、よく続いたものだ、と、あきれたり、感心したりしております。

その間、登場するハント女性の方々や、同好の諸賢には、種々御迷惑をおかけしましたことを深くお詫びします。

毀誉褒貶は世のならいですが、数限りない読者諸賢の励ましや御叱正、御鞭撻をうけ乍ら、毎月号、異なれる女性を刳上にすることを信条といたしまして、あらゆる努力を重ねて参り、時には、二度、三度、再登場した女性も御座いますが、ほぼ初志を貫徹したように思われます。

SMカメラ・ハントが始めて登場した時代は、吾人もアングラ的な存在で、当然に幾分の稀少価値もございましたが、現在のようなSMブームになって参りますとその価値も、かなり薄れたものと思います。

正直いって、もう疲れたというのが、終焉の真相でございます。

一九七二年、年末脱稿の、このカメラ・ハントを最後に、新年度(四月号)よりは

奇クサロン欄の『楽我記』の記事も併呑しまして、もっと気楽に、自由な立場から、エッセイあり、ルポあり、身近雑事などの告白と共に、好ましきM女性とプレイすれば、これ又、カメラ・ハントの延長の如きものなど、好き放題に、奔放に書き続けてゆきたいと思っております。

所詮、奇クで生まれた私にとりましては本誌とは切っても切れぬ、因縁浅からぬ仲で懼らくは、雀百までのたぐいで、この根性は死ぬまで変わらぬことでしょう。

この機会に、長年、溜まりに溜まった、愛惜おくあたわざるコレクションの筐底を開いて、今なら発表出来るという、過去のハント女性の、みずみずしいフォトを発表するのも又意義あることではないかと思えます。

初老、頭髮に霜を蓄え、三人の孫に囲まれ、日々是好日をモットーとして生きる毎日。今日という日が、残された人生の第一日ということに思いをいたしました、よかれ、あしかれ、毎日を有意義に過ごしてゆきたいと思っております。

これから、何卒、御叱正、御鞭撻下さいます様、貴重な誌上をかりまして、御愛読者諸氏に心より厚くお礼申し上げます。



~~~~~ 浣腸マニアの告白 ~~~~~

私にとって 素敵な浣腸

ふじ
藤の
野よう
陽こ
子

もし、子供の頃の私が人から「一番好きなものは」と尋ねられたら、私は心の中で、「母に浣腸される事」と答えたでしょう。

また、「二番目に好きなものは」と聞かれたら、「妹が母に浣腸されるのを見る事」とやはり心の中で言ったでしょう。

しかし、その母は、私が小学校の四年の時に、かりそめの病いで亡くなってしまい、私達姉妹は、母と、そして、この世で一番楽しい浣腸されるという喜びを同時になくしてしまったのです。

その母の亡くなる少し前、今でも強く私の印象に残っている思い出があります。

それは、雨の降る夏休み中の一日でした。三日ばかり大阪の祖父母の家へ遊びにゆき帰って来た私と妹は、便秘にかかっていて、母に浣腸される事になったのです。

母は「便を見てみましょうね」と私達が子供の頃使っていたオマルを持ってきました。

私は、自分や妹が浣腸されて、あそこで赤チャンみたいに、うんこをするのだと思うともう、それだけで恥かしい、しかし、ワクワクするような嬉しい気持ちになるのです。

はじめに妹が浣腸される事になりました。股をひらいた、恥かしいかっこにされた妹のからだに浣腸器がさし込まれ、浣腸液が注入されていきます。そして浣腸器がぬかれ、母に肛門のぬれたのを、チリ紙で拭かれる時

には、妹はもう、催してくるおなかの痛さを感じているはずなのです。

やがて妹は、両足をびったりおしつける様にし、腰のあたりをかすかにピクピク動かしはじめます。目をつむり、可愛い眉をかすかに寄せて、はげしくなってくる便意を辛抱している妹の様子を見るのは、私にとって、何とも言えない素敵な事だったので。

やがて妹は、もう辛抱しきれないという風に起きあがると、便をもらさないように用心してオマルにまたがり、はげしい勢いで排便するのでした。

私は、妹の様子を見た時、ジンとした気持ちいいものが、からだ中に広がっていき、私の股間は、おしっこを漏らしたようにぬれてしまっているのです。私は、あとで母に浣腸される時、そんな所を見られてしまうのが嫌だったので、自分の室に入り、チリ紙でそのぬれた所を拭いて始末したものでした。

そして、次に私が浣腸される事になるので。もし、その時の母が、「陽子ちゃん浣腸しなくてもいいのよ」と言ったら、私は母を「意地悪」と恨んだ事でしょう。

私は、横に寝かされ、シュミーズをめくりズロースを脱がされていきました。そして、股をひらかれながら、母と妹の見える前で死ぬほど恥かしい事をされ、泣くほど痛い目にあわされたいと思うのでした。

その時の母の浣腸は、何だか、いつもより強く、私のからだに注入され、母も私をいじめたくて、そうするのではないかと、私には思えました。やがて、おなかの痛さが、やってきました。

私は、わざと股をひろげたままでいたので肛門のあたりを、すばめたりして便意をおさえているのを、母と妹に、みな見られてしまっているのです。

私は、からだを動かせば便を漏らしてしまいそうになるまで我慢し、用心して起きあがると、オマルにまたがるのでした。

母と妹の見ている前で、恥かしい排便をするというのは、私のそれ迄に知らない不思議な喜びでした。

母の死後、私と妹は浣腸器を持ち出し、それを使って、お医者さんごっこをしたものですが、本当の浣腸からは次第に遠ざかってしまふのでした。そのお医者さんごっこも、私達が中学生になる頃には、お互いにきまり悪くもあり、新しい母が来た事あって、自然やらなくなっていました。

しかし、だからと言って、私の浣腸に対する興味が消えてしまったというのでは、決してありませんでした。

子供の頃には、浣腸など、子供だけが面白いがるもので、大人になれば、そんな事は興味なくなるものだと思っていたのですが、決し

て、そうでない事を私は知ったのでした。

死んだ母親も、私達姉妹に浣腸して、それを楽しんでいたのだという事が、中学生になる頃の私には、よく理解出来るようになっていました。

私は、本や新聞を読んでいても、別の所に「浣腸」という文字があらわれますと、それだけ、自分の目にパツと飛びこんできますし薬局で浣腸器や、イチジク浣腸の箱が並べてあるのを見ただけでも恥かしくなり、顔が赤くなってしまうのでした。

私が中学二年生になった頃の事です。

そんな私は、ある日、思いきって誰もいない時を見はからい、浣腸器とグリセリンのビンとワセリンを自分の室に、そっと持ち込みました。私は、自分が泥棒にでもなって悪い事をしているように胸がドキドキし、腋の下から冷汗が流れるのを知りました。

私は、自分の机の上に、その浣腸器やグリセリンを並べて眺めていますと、永らく会っていないかった恋人に出会ったような懐かしい気持がこみあげてくるのでした。

そして、その浣腸器を取りあげ、私はふるえる手でグリセリンを、そして水を順々に吸いあげてゆきました。浣腸器の筒の中で、そのグリセリンと水が、妖しい模様を描いて混じり合っていく様子は、私にとって、なんと魅惑的なものだった事でしょう。

私は、自分で浣腸するというこわさと、そして、そのこわさゆえ強められるゾクゾクする期待に胸をしめつけられながら、やがて、自分の肛門にさし込まれる浣腸器の筒先を、いじってみるのです。

私は、布団を敷くと、そこへ横になり、スカートをめくりズロースを押しさげました。そして、赤チャンが浣腸されるみたいに、脚をあげ一番恥かしいかっこになりました。

私は、ワセリンを自分の肛門になすりつけた薬のいっぱい入った浣腸器をとりあげるのです。そして、自分が赤チャンになって、これから、浣腸をされて泣くんだと、そんなつもりになって筒先を肛門にさし込みました。

私は、浣腸が痛くて、自分が泣き出すほどの痛みを押しました。そんな事を思っ

た私のからだの中心に向かって押し込んでくるような、私を少しいじめるような気持の悪い痛さは、やがて、なんとなく素敵なものに変わってきました。

私は、気持ちいいものが、自分の肛門から、からだ中に拡がってくる様な気がしました。そして、やがて、やってきた下腹の痛さ。その浣腸のおなかの痛さに合わせた気持よさは、なんと素晴らしいのでしょ

うか。おなかの底からジンとひびいてくるような力強くて、ねばりのある快さでした。

私は、それ迄に自分の経験した感じとは、比べものにならないほど強い喜びを始めて知ったのでした。

グリセリンをあまり使ってしまうと、新しい母にばれてしまうといけなかったので、その後は、薬局でイチジク浣腸を買う決心をしました。それに、私は、あのイチジク浣腸が欲しく、あれで自分に浣腸してみたくてたまらなかつたのです。

しかし、薬局で浣腸を買うとひと口に言っても、それは中学生の私にとって、そうした易い事ではなく、買うために出かけた私は、どうしても中に入らず、何軒もの薬局の前を通り過ぎてしまふのでした。

これではいけないと思った私は、出来るだけ、みすぼらしそうな店を選び出し、もう死ぬほどの気持ちになって、その店に入ったものでした。しかし浣腸をくださいと口にする事が、私にはどうしても出来ませんでした。

私は、けげんそうな顔をしている薬局の主人をうしろにして、真赤な顔をし、その店先から逃げ出していたのでした。

しかし、イチジク浣腸を欲しいという私の気持は、そんな事では消えず、いよいよ強くなつてゆくばかりでした。

そこで思案した私は、ひとつの計を考えだし、紙に、テンカ粉とか赤チンとか、どうでもいいものをいくつか書き、その中に、なに

げなく浣腸ひと箱と、まぜ込みました。

そして、家から使いで来た風を装って薬局に行き、これだけくださいと薬局の主人に、その紙を渡しました。

薬局の主人が、「この浣腸は大人用でしょうか、子供用でしょうか」と言うのを聞いた時、私はなんと狼狽して、まごまごしてしまい、なにか、店の主人に自分のたくらみを見抜かれたような気がしたものでした。

私は、出来るだけ大きなイチジク浣腸が欲しいと思つていたのですが自分の口から出た言葉は「子供用の——」というものでした。

それでも、家に帰り、苦心して手に入れたイチジク浣腸の箱を、袋から取り出した私は幸せでいっぱいの気持ちになるのでした。

私は、その浣腸の箱を開いてしまふのが、もったいなく、それを開けて中を見る楽しみは、夜まで我慢する事にしたほどです。

私が、そのイチジク浣腸を使って、どんな事をしたか、恥かしさをしのんで書いてしまひます。

私は、よる、自分の室でひとりになりますと、自分の着ているものをみな脱ぎすて、生まれたままの姿になってしまひました。

そして、かけ布団を細長くまるめ、その上に、それを抱くようにして、おおいかぶさるのです。私は、そうしておいて、イチジク浣腸を、自分の肛門にさし込むのでした。

浣腸器でなくて、イチジク浣腸は、こんな時、非常に取扱いが便利なのです。

私はイチジク浣腸をさし込んだまま、腰を動かし、内股を布団にこすりつけて、両腕で強く抱きつくようにするのでした。

私は、自分のからだだが、だんだんいい気持ちになつてきた時、イチジク浣腸の玉を押して浣腸したのでした。

その浣腸と、そして、やがてやってきた、しぼるような下腹の痛さを感じた時、私は、なんとも言えない天国へ行つたような気持ちよさを味わうのでした。

そんな私ですから、「カンチョウ」という言葉を想像するだけでも、胸がドキドキし、恥かしい気持ちになるのでした。

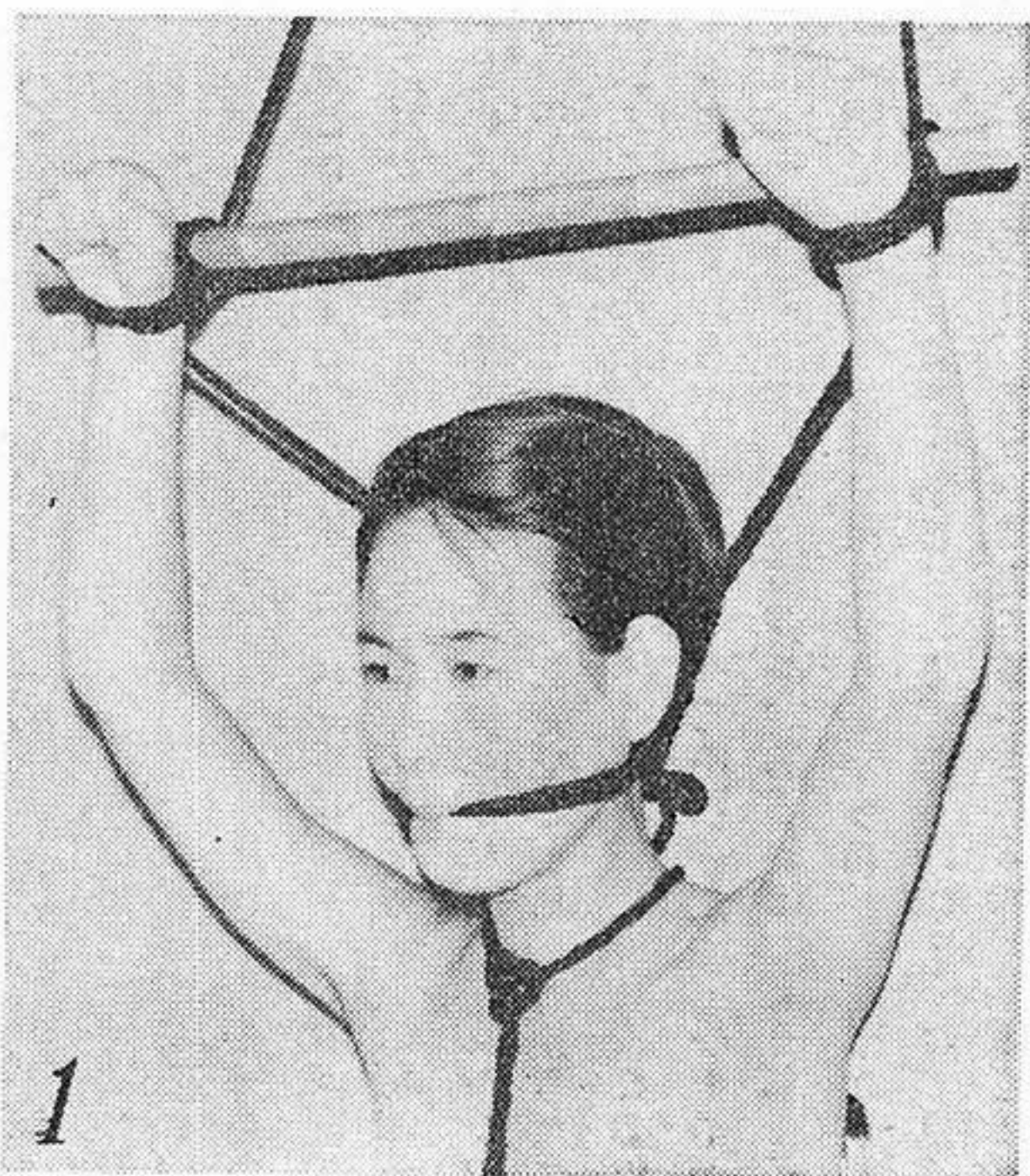
“浣腸”

それは、こそばゆく、恥かしく、そして、少しこわくて、この上ない秘密をこめた、なんと素敵なものなのでしょう。

私は、家庭医学書の子供が浣腸されている絵を見つけ出したのを、度々取りだして眺めたり、浣腸器の筒先のなめらかなふくらみを指先で、なでたりしています。

羞かしがつて逃げまわる私をつかまえて、無理矢理、私に浣腸しようとする男の人達のことを秘かに想像しては、ひとり胸を熱くしている、今日この頃の私なのです。

——(おわり)——



…… 那津子追想 ……

ひとり

都の夕暮れに

城 章 夫

光陰矢のごとしとはよくいったもので、あれからもう九カ月の時が流れた。散りしく梨の花にまぎれて、那津子がどこへともなく消え去ってから。

日暮れ時、街の雑沓にもまれながら歩いていると、ふと、かたわらに人の気配を感じることもある。うちとけて、しかし慎ましげに寄り添う幽かな人の気配。

「おや、那津子かな」

頭をめぐらすと、そこには誰もいない。あわただしく無関心に、ぼくのまわりを流れて

ゆく見知らぬ人々の群ればかり。そんな時はど切実に、あの詩が思いだされる時はない。今は亡き室生犀星の絶唱、望郷のうたが。

○

故里は遠きにありて思うもの

そして悲しく歌うもの

よしや、うらぶれて

異土の乞食^{かたい}となるとても

帰るところにあるまじや

ひとり都の夕暮れに

故里おもし涙ぐむ

その心もて

とおき都に帰らばや

遠きみやこに帰らばや

○

ぼくは、それを勝手に作り変えて、そっと口のなかで、つぶやいてみるのだった。

○

ひとり都の夕暮れに

亡き人おもし涙ぐむ

その心もて

淋しき家に帰らばや

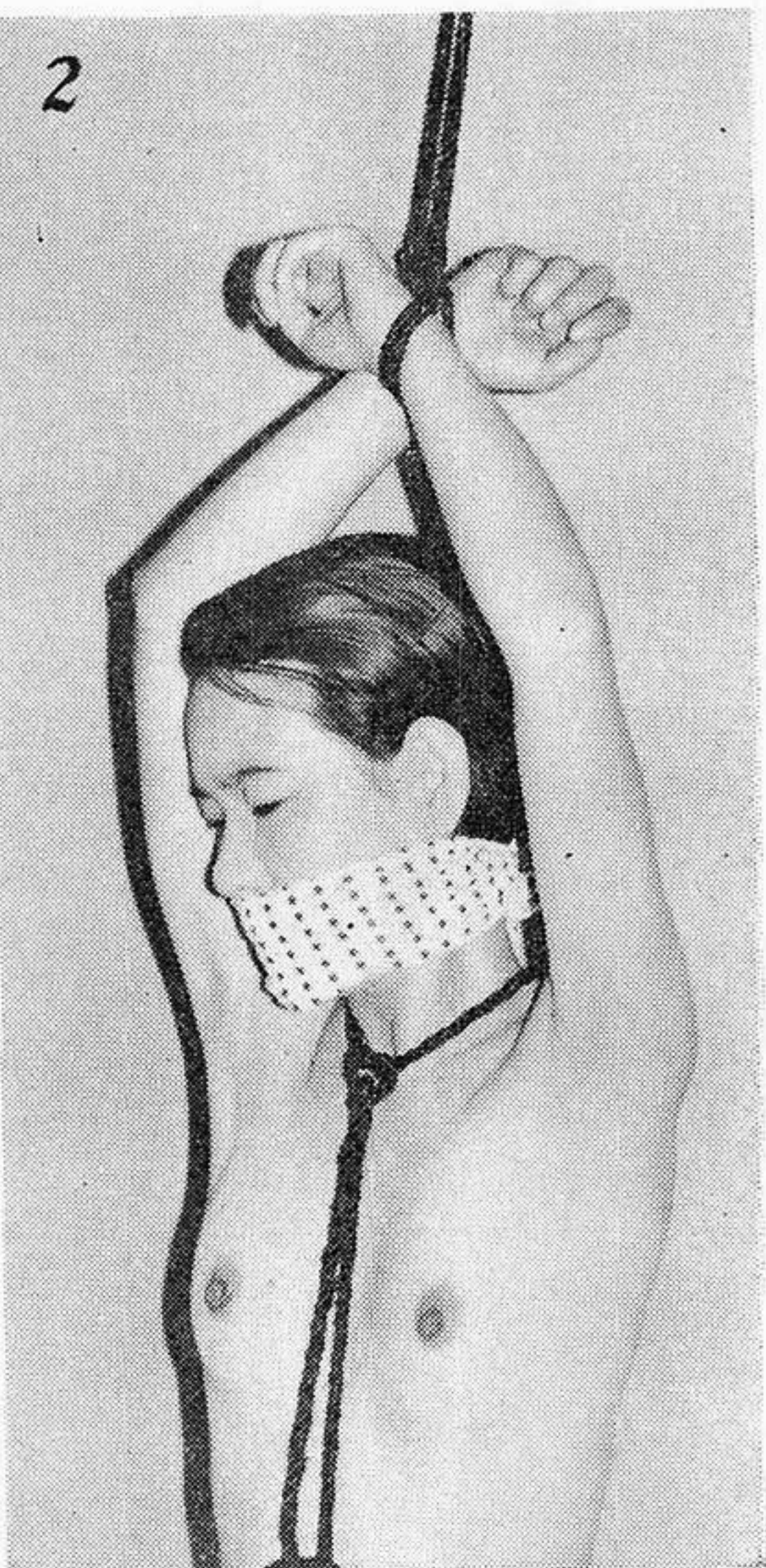
2

淋しき家に帰らばや

○

淋しき家——しかし、そこには篋底深く秘められた数十葉の那津子の写真が、ぼくを待っているのだ。ああ、これらの写真の中に、那津子は、なんと魅力にあふれた姿をとどめていることだろう。

身につけているべき衣服のすべてを引き剥かれ、その白くつややかな裸身を、あるいは白い縄で、あるいは黒い縄で括りあげられ、口には、かたく猿轡を噛まされて、あるいは正座を命じられ、あるいは立て膝を強いられ



あるいは畳の上に引き倒されて、さまざまな姿態をさらけだしているこの蠱惑の女人は、^{こわく} 那津子であって那津子ではない。それは現身^{うつそみ}の那津子をモデルとしながら、ぼくのカメラのレンズを通し、薄いセルロイドの膜の上に創りだされた幻の像なのだ。

この世に実在しない女、写真のなかでだけひそやかにもだえ、息づいている女。お前こそ那津子だ。お前こそ、ぼくのいとしい那津子だ。もう嘆くまい、うつそ身の那津子の死は。ぼくにはこれらの写真があるのだから。ぼくにはぼくだけの那津子がいるのだから。

× × × × ×

ところで、ぼくは那津子と旅に出て、その緊縛写真を、撮影した折のことどもを、拙いルポにまとめては、幾つか本誌に発表してきた。拙いルポ——そう、その拙さ（文章も写真もひっくりくるめて）は、ぼく自身、よく知っているつもりだ。しかしそれにも拘らず、ぼくのルポが本誌に掲載されると、それに対する読者の反響が、気になってしかたがないのは、やはり凡愚の身の浅ましさであろうか。とはいえ、下手は下手なりに、ぼくは一生懸命に写真をとり、文章を書いたのだ。それが読者に全く黙殺されてしまうと、淋しい気がするのを、どうしようもないのである。

いったい、本誌のような特殊な性格の雑誌における、寄稿者と読者との関係は、例えば一般の総合雑誌などは論外であるが、作者と読者との結びつきが、かなり親密な文芸雑誌や同人雑誌におけるそれとも、かなり趣きを異にするのではなからうか。

本誌の寄稿者も読者も、ひとしく少数異端の性向の持主ばかりである。いかに強弁しようとも、われわれの性向は健全にして円満なる社会常識からすれば、忌むべく、また恥ずべき変態心理の所産と目されざるを得まい。

そしてそのことは、われわれ自身、充分わきまえているのだ。そこから生ずる一種の後めたさが、われわれを、謂わば「共犯者意識」で結びつけ、われわれ（寄稿者も読者も含めて）を独特な親近感で近づけ合うのではあるまいか。

だから、本誌に発表された作品や通信文に対する読者の反応は極めて速やかである。それが読者の関心を惹くものであるなら、早いときには翌月号、遅くとも翌々月号には、読者の感想や批判が掲載される。

ところが、ぼくの場合について言えば、ほとんど読者からの反応は見られなかったといつてよい。精々、ぼくのルポに「言及」する程度の反応はあったものの、これをまともに取りあげて、物を言ってくれた読者はひとりもなかった。ぼくは少々がっかりした。もとより、ぼくにしてみれば那津子をモデルに緊縛写真をとることそれ自体が愉しみであり目的なのだから、その撮影行を書き綴ったルポを本誌に投稿することは、いってみれば余技でしかない。それが本誌の読者にどう迎えられようと、どうでもいい筈なのだけれど、先にも書いたように、本誌の読者に対してぼくは共犯者意識ともいふべき仲間意識をもって

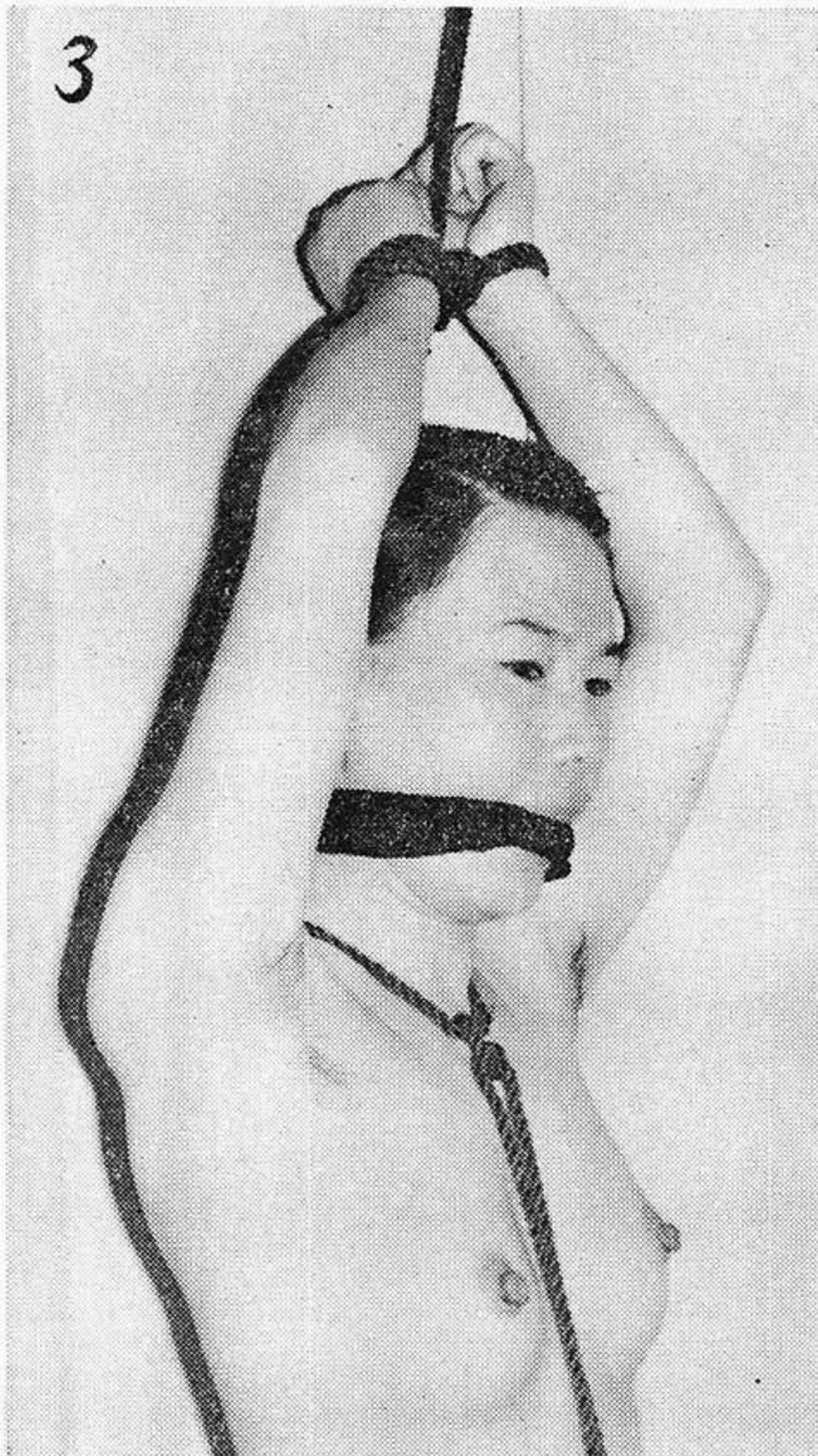
いるだけに、その仲間から黙殺されるというのは、やはり淋しいことだった。

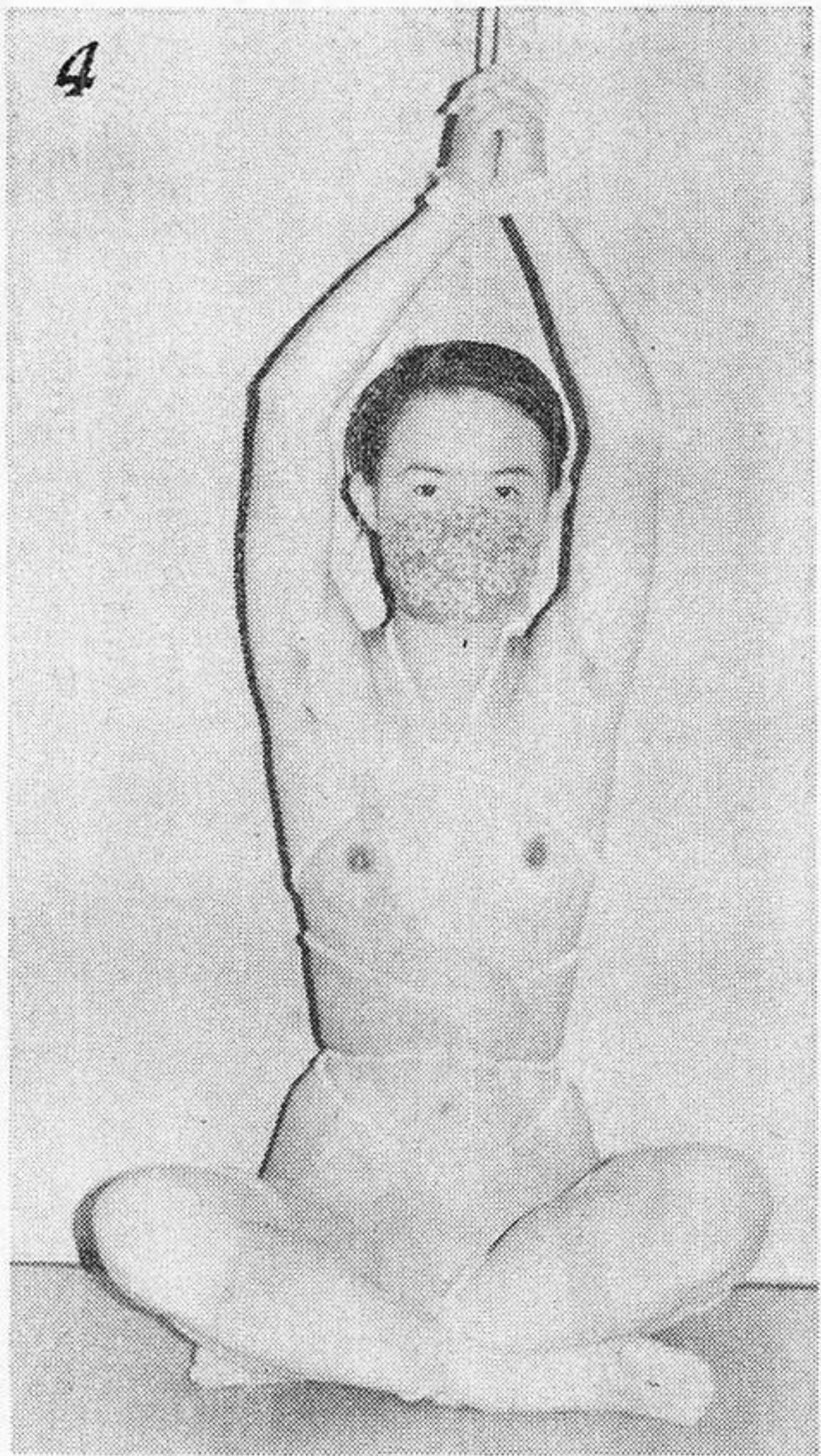
ところが——果然、そんなぼくにも知己はあったのである。本誌四十七年五月号に『那津子にとまどう』なる一文を寄せられた長田二郎氏こそ、その人であった。

長田さん（などと、親しげに呼び呼ぶことをお許し下さい）は、昨年二月号と四月号に掲載された、ぼくのルポ『途方にくれる那津子』と『白い露台で』を取りあげ、まこ

とに好意あふれる感想文を寄せられたのである。ああ、こんな有難い読者もあったのか、と、ぼくは、さして長からぬその感想文を繰り返し読ませていただいた。

続いてぼくは六月号に『四つのポイント』と題する小文を寄稿した。これは四百字詰原稿用紙五枚ほどの短い文章ではあるけれども編集部のほうで、いみじくもつけて下さった副題『わが緊縛美感』が示すとおり、ぼくはそこで女体緊縛に関して、かねがね抱懐する





美学を、四枚の写真に、ことよせて展開したのである。むろん今までに発表した幾つかのルポのなかでも折にふれて、ぼくの緊縛美学を述べてはきたものの、正面きってこれを論じたのは、これが初めてであった。女のからだの美のポイントを「乳房」と「尻」にともめ、その「乳房」をかこむ「菱縄」と尻に喰いこむ、ぼく独特の「股間縛り」に縄掛けのポイントを認めるといなのが緊縛美に関するぼくの年来の持論なのである。

実をいえば、ぼくはこの小文に対してこそ読者の反響と批判を期待したのだった。女体緊縛については、それぞれ一家言を持つはずの本誌の読者諸賢のことだ。さぞぼくの小文をめぐって侃々諤々の議論が戦わされるだろう——そんな期待で、ぼくは胸を躍らせた。が、ぼくは又もや失望しなければならなかった。『四つのポイント』は完全に黙殺されたのである。

しかし、読者の声は聞かれなかったけれど

も、ぼくはぼくの内なる声にしたがって引き続き那津子をモデルに写真をとり、そのルポを書き、そしてそれは『雛祭の夜』と題されて、本誌八月号に掲載されたのだが、これまた読者に冷たく無視されてしまった。九月号でも十月号でも、誰ひとりとしてぼくの仕事に言及する人はなかったのである。

そして十一月号——ここで再び、ぼくは長田さんに、はげまされることとなった。長田さんは『那津子慕情』と題して前回よりさらに長文を費やして、ぼくの記事と那津子の写真を称揚してくださったのである。

長田さんは「あれほどの名ルポ」と呼んで下さった。そうまで言ってくると、ぼくとしては少々テレくさいが、しかし、八、十月号での完全黙殺がこたえていただけに、嬉しさもまた、一入であった。

だが皮肉なことに、その同じ十一月号にはぼく的那津子追悼の記『淡月梨花のうた』が掲載されていたのである。そこにも書かれているように、すでにこの年の春、薄倖的那津子は、あわただしく現世を立ち去っていた。『淡月梨花のうた』という題は、もちろん、佐藤春夫の詩に拠ったものであるが、上述の五月号で、長田さんが那津子を、往年の緊縛

モデル梨花悠紀子になぞらえておられたことも、ぼくの頭のどこかで作用していたことは否めない。もとより、那津子は梨花悠紀子の美貌には及ぶべくもないが、その儚い散り際は梨の花を連想させるに充分であった。

× × × × × ×

いや、筆がどうも横に滑りすぎたようだ。

ぼくは今、ひとり、都の夕暮れから淋しき家に帰ってきたばかりのところだ。つい数カ月前、那津子と肩を並べて歩いた道、膝を寄せあつて腰かけた喫茶店、手を振って右と左に別れた地下鉄の駅——いまは亡き那津子を思いださせる、それらすべてから逃がれて、ぼくは、もう一人の那津子、ぼくにとっては、こっちのほうこそ真実の存在である那津子の写真を、机の上に繰りひろげている。

それらの写真のなかで那津子は、ほとんどいつも後ろ手に縛り上げられている。

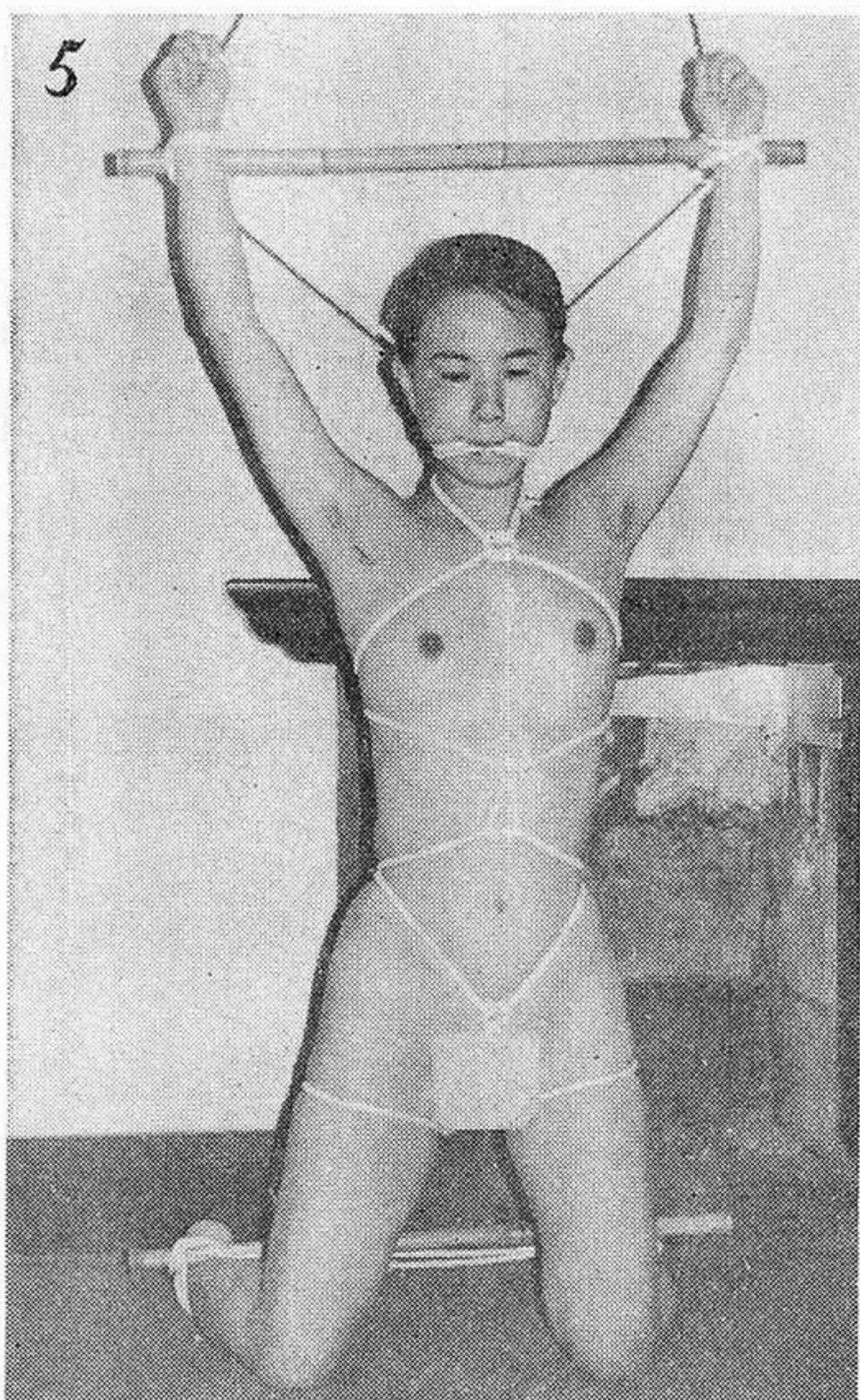
そもそも、縛るといふことが身体的自由を拘束することにあるとすれば、その目的に、もっとも適う縛り方としては、後ろ手縛りということになるのは当然だろう。背中に回して交叉させた手首を縛り合わせるだけでも身体的自由の拘束という目的は、かなり達せられるといつてよい。ところが前手縛りとなる

と、そうは行くまい。この場合、からだの前面で交叉させた手首を縛り合わせるだけでは不十分なのである。それだけなら、囚われ人は手首の縄を、みずから噛み切ることができらるであろうから。

だが、そうした謂わば実面的な面は措くとしても、ぼくら緊縛マニアにとって、前手縛りは、そのように縄を掛けられた女の最も美しいからだの前面の、かなりの部分を覆い隠

すことになるという点で、甚だ望まじからぬ縛り方だといえよう。そういう意味で、ぼくは那津子を前手縛りにしたことは、一度もなかった。

これに反して、両手吊りは、数こそ少なけれ何度か試みたことがある。この縛り方は、やはり後ろ手にギッチリ縛り上げたときのよくな緊縛感に欠ける憾みはあるけれども、両手を一条の縄で吊りあげられ、腋の下も胸の



両側面（これらは何れも後ろ手縛りのときには、我とわが腕で覆い隠される）も何もかもさらけ出さなければならぬというシチュエーションが、吊られた女に心細さと羞恥感を与えるという心理的効果をもっているように思われる。

写真1では、那津子は両手を万才したときのように上方に抅げ、その両手首を竹の棒に括りつけられている。手首を縛った縄は、さらに延びて、ハンカチを詰めこまれた那津子の口を割り、頬をくびれるほど締めあげた無惨な猿轡になっている。

この写真をとったのは夏の前であったか後であったか、いずれにしても衣服の袖が短い

時期で、那津子は腋毛を処理してしまっている
ので、折角、両手吊りにしても、豊かな腋
毛が風にそよぐといった情趣は、残念ながら
望むべくもない。

写真2は、手首を交叉させて縛っている。猿轡は豆絞りの手拭いで口を覆うスタイル。

手を吊り上げられるというのは、血が手の先のほうまで流れにくくなるせいかな、案外に苦しいようだ。このときも、そんなに長い時間吊っていたわけではないように思うのだが、あれこれとポーズをとらせたりピントを合わせたりにしている中に、それでもかなりの時間がたったと見え、那津子は目を伏せて、苦しさに耐えているような表情を見せているのが

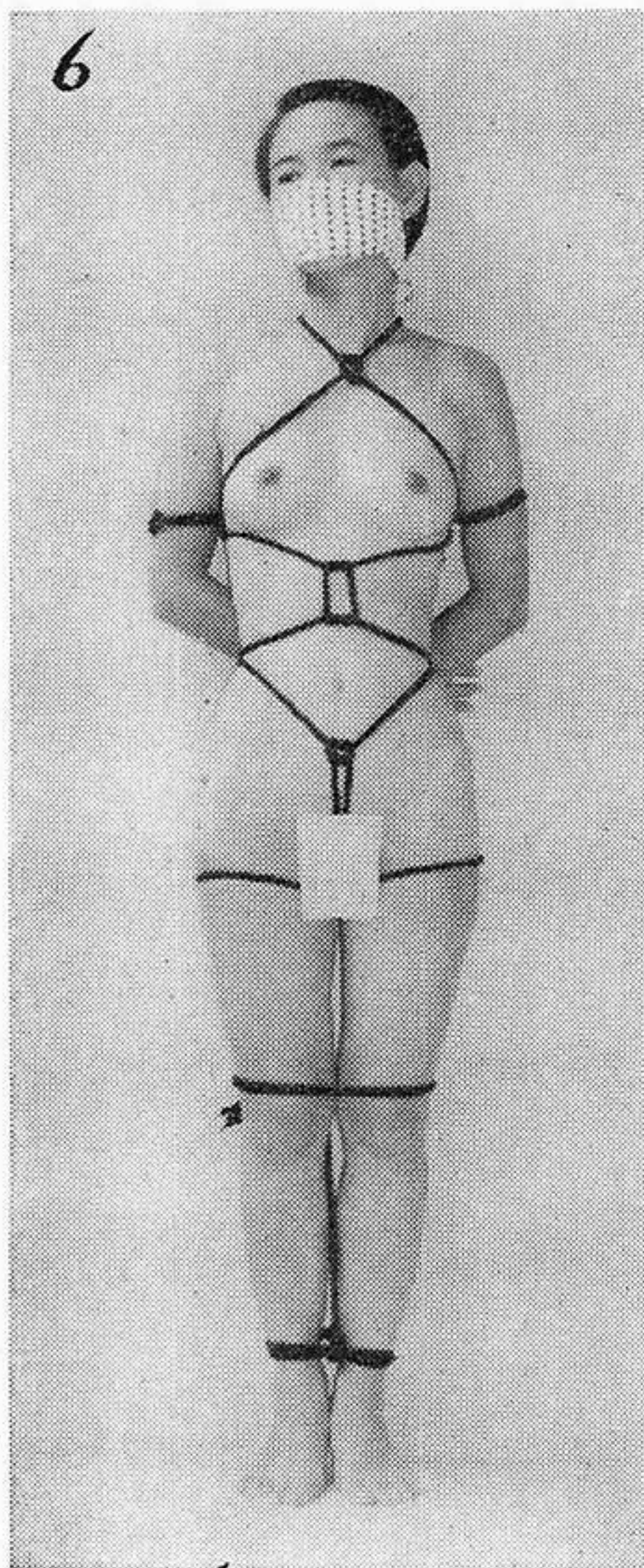
১০৫৮

写真3は、手首を交叉させずに縛り合わせたもの。この時は、腋毛を剃っていなかったもので、クローズアップのせいもあって、細くしなやかな腋毛が一本々々それと数えられるくらいに、はっきりと写っている。

それから、印刷した場合に出るかどうかわからないが、右の二の腕には、この撮影に入る前に後ろ手に縛っていたので、その縄の跡が二筋、くっきりと残っている。猿轡は写真1と同じように、口を割って縄を噛ませるスタイルだが、この時は縄をグルグルと四回も巻きつけたのが、却って失敗だったようだ。これは、やはり二本くらいのほうが頬にぐっと喰いこんで、緊縛感を、より高めたと思う。

写真4は、あぐら縛りの両手吊り。黒い縄を used だす前の写真だから、前の三枚にくらべると、ちょっと古い。首から胸、腹から股間へと掛けられた縄は、からだの自由を拘束するという意味では不要で、あくまでも視覚的効果を狙ったもの。

猿轡は鼻まで、すっぱり覆っている。ギツチリと顔の下半分を覆った猿轡の上に目だけがのぞいているというこのフォームは、やはり猿轡として一番すぐれているようだ。視覚



的にも（縛るほうから見て）また心理的にも（縛られるほうから見て）このフォームが最も効果的なような気がする。

写真5は、竹の棒を二本使って、それぞれ手枷、足枷とした両手吊りのポーズ。両手は写真1と同じように、万才をした形で上に挙げさせ竹の棒に手首を括りつけて固定してある。もう一本の竹は両足首を開いて固定している。もう一本の竹は両足首を開いて固定しては立つことも坐することもできない。腋の下も脇腹も、そして股間も、何もかもむきだしにして、立て膝をしたままの格好で、そこにさらされていなければならない。曝しものの女——目を伏せ気味にした那津子の表情には、そんな情感が、あふれているようだ。

猿轡は写真1と同じく、二筋の縄を噛ませる式のもの。この縄も、かなりきつく掛けたので、頬がくびれるほど喰いこんでいるのだが、正面から、しかも、だいぶ離れて撮っている。その緊縛感に充分に表現されていないのが残念だ。

こうやって、新しい写真、古い写真をくり拡げていると、ああもしたかった、こうもやってみたかった。あそこには、あんなふうな縄をかければよかった、ここは、こんなふう

なポーズをとらせればよかったと、次々に、いろんな想いが、わいてくる。しかし、それも詮ないこと。那津子がこの世を去った今となっては、もうどうしようもない。せめてはこれらの写真を昨日の日の形見として、尽きぬ追想に我と我が身を沈めるほかはない。

三好達治の詩集『草千里』にあった、こんなみじかい詩が、ふと口に出る。

○

枕上口占

ひと日ひと日に失われる

ああ この旅のつれづれの

私の詩は 三日の間もてばいい

昨日と今日と明日と

ただ その片見であればいい

○

那津子の裸身をくりあげ、それを写真にうつしとる。そんな営み、あるいは、そんな戯れの意味は、いったい何であったか。いまにして思えば、それもこれも「ひと日ひと日に失われる」この人生という、長からぬ旅のつれづれをまぎらすための、果無い試みではなかったろうか。

三好達治の詩ならば、昨日と今日と明日の片見に、三日は優に、もつだろう。それなら

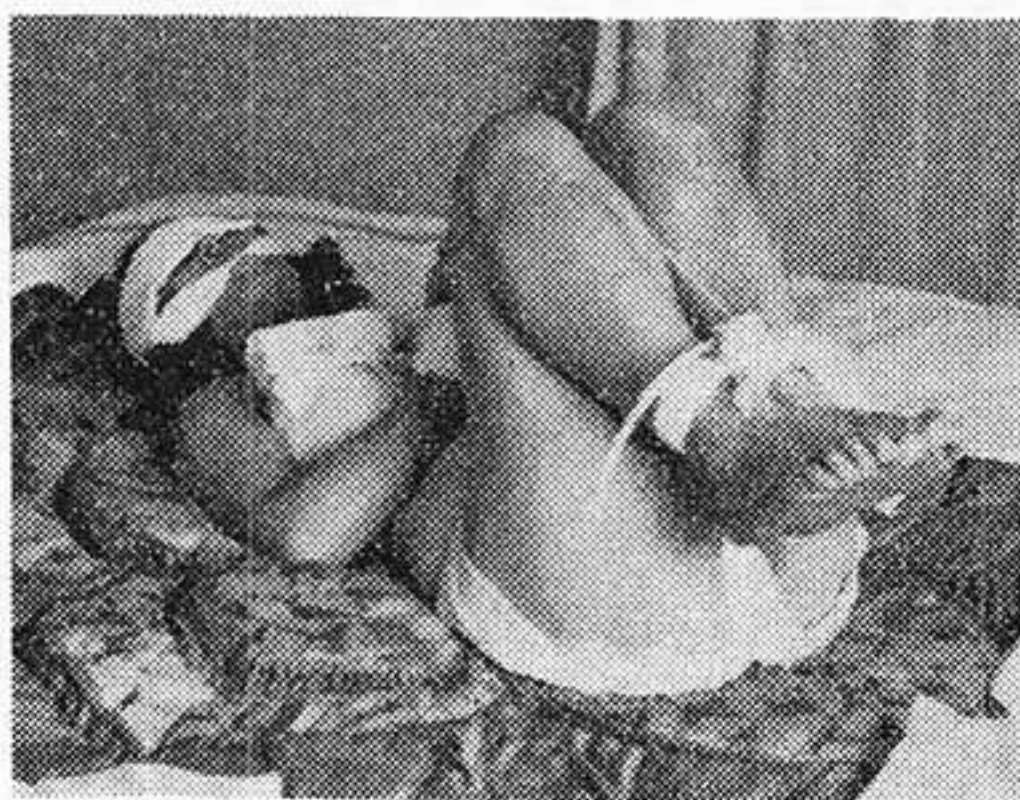
ぼくのはかない試みの名残りであるこれら数十葉の写真は、ただ昨日の形見として一日だけもてば、それでいい。しかし、その昨日という日は、いま、ぼくの心のなかで、ぼくの思い出のなかで、尽きることなく流れて行くのだ。愚痴に似た追憶の繰り言を、ぼくは、こうして、ここに書きつらねている。

その繰り言に、しばし耳をかされた読者のために、ぼくは、とっておきの写真を一葉お目にかけよう、などともったいぶるまでもない極めて平凡な写真6がそれである。これは「白い露台」でとった、セミ野外撮影の一駒である。実をいうと、那津子のからだのプロポジションは、あまりよくなかった。だからぼくのとった写真は、ほとんどがそうした欠点をカバーできるようなポーズを選んで写されている。こんなふうな立像は、めったになかったことがないのだ。しかし、この写真は那津子のそうしたからだの欠点が、カメラ・アングルが低目であったせい、あまりあらわにでないように思う。そして何よりも、ぼくが日ごろ強調してやまないシンメトリカルな縄掛けの美しさが、ここには、ほぼ満足のゆく形で表現されてはいしないだろうか。

奇クワさろん

余聞……女子トイレ考現学、私のプレイした女性

福島和男



います。

これらのデータはいずれアレンジした上で詳細を発表したいと思っています。

それから、これも最近になって、私の知り合いの女性を口説いて縛り写真を撮影しましたので、ここに同封いたします。

やはり、全裸になることは拒みましたが、下着をつけたままのポーズですが、はじめて

のこととて、これも無理もないと思います。

これから徐々に飼育していきたくて考えています。塚本氏等のような馴致状況のルポが出来たら、最高と思って努力している今日此の頃です。

もし、私に協力して下さる若い女性の方がおられましたら、お申し出下されば有難いと思います。

それから、これは誌上掲載というわけには参りませんがトイレに於ける女性の排泄音の録音テープを所持しております。何かの参考にもなるようでしたら、編集部へ、お送りしてもよろしいです。

尚、会社が手記の通り、テレビ関係の放送局でありますので、徐々にはあります。ビデオテープを使用しているプレイの録画などもしていきたいと思います。

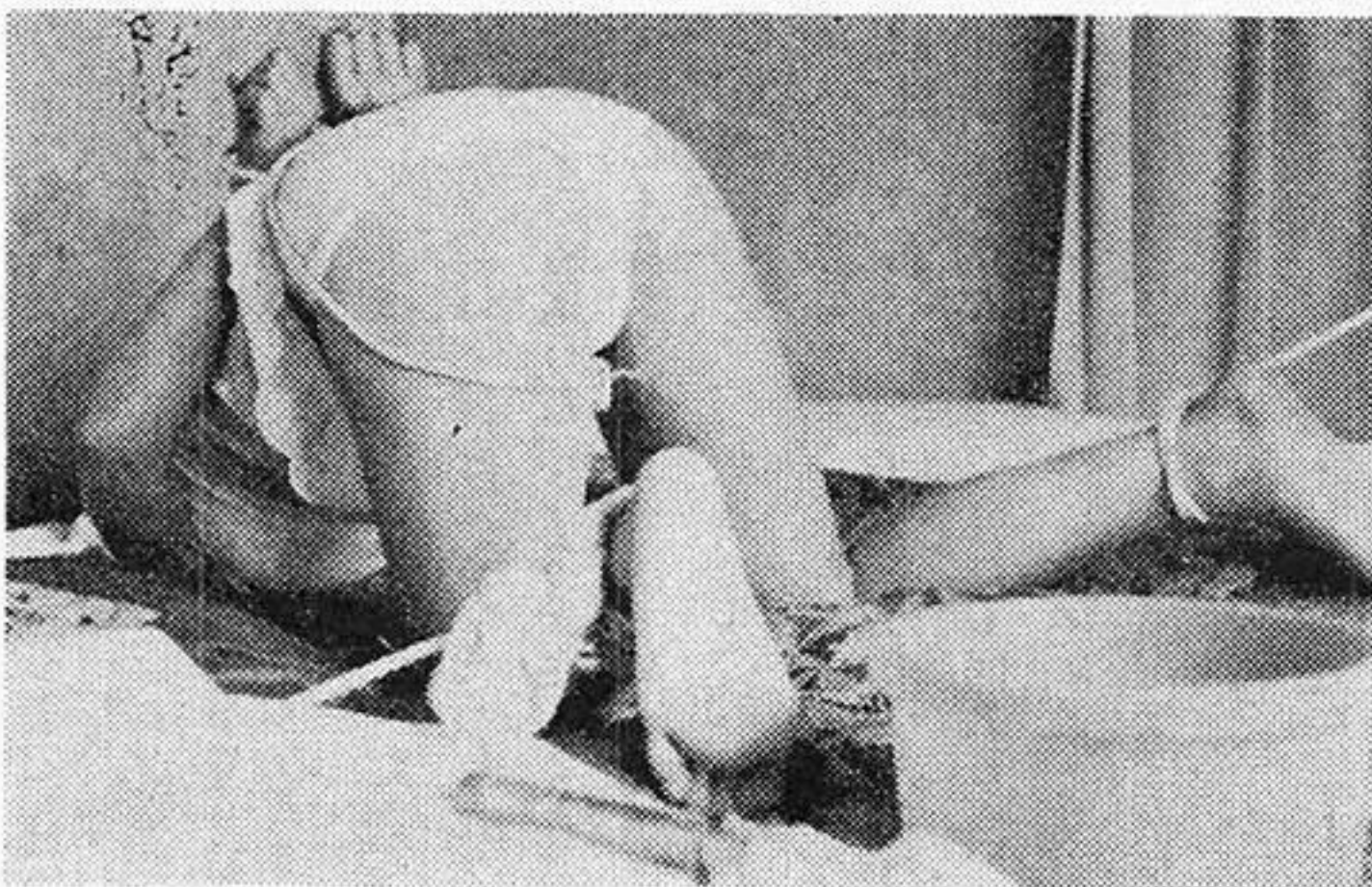
写真はあまり出来が良くありませんので失望されたことと思いますが、これはプレイフォトとしては第一回目のもので、これから一層努力してゆきたいと思っております。

屁という名の理窟

細縄で縛ろう

優敷良男

自分でもダラシがないほうの部類と思うほど、日常生活では女性に優しい私。それが、なぜ裸女の縛りに惹かれるのだろうか？ 苛めるなんてとても出来ないのに……と考えてみた。



答は、なかなか出てこない。

奇クワの縛り写真を見ながら、あれこれと理由づけの二時間余りの奮闘。遂に決定的得心は諦めようとした寸前に、フト閃いた一現象、これぞ正しく正解。『縄にくびられた、やわ肌の、たたずまい』

なんのことはない。つまり私は、女性共有のふくよかな、や

私は一月号に「女子トイレ考現学」という読者告白をのせてもらった福島和男です。

その後もトイレの探訪を続け、最近になって、数回の撮影をしました。パチンコ店、ボーリング場などで、女性の出入が数少なく、その中でも若い女性となると、とても困難であるので、これは貴重な資料になるものと楽しみにして

奇ク狂、のくりごと

大 島 雅 夫

年の瀬も押し迫まり、新春も早くも目前に來ました。毎日毎日が戦場の如く多忙の事と存じます。奇クも毎月拝読して早や十年近くになります。

毎月、新しい緊縛女性が顔を見せているのでうれしく、いつもヨダレをたらして熱狂して見ています。縛りを好む女性の愛好者、大を口に食する者、小を飲用するもの、女性にいたがられて涙を流して悦ぶもの、危険な状態に迄責められて、まだまだと強要してやまぬもの、狂気の如くにエロ的な表現を平気で口に出す上流社会の婦人のこと、緊縛を続々と申し出る希望者の女性。信じる様な信じられぬ様なことを、奇クによって初めて知りました。

でも、今では、それ等がエスカレートして、直接自身が、この目で見なければ辛抱出来ぬ様にまでなりました。緊縛希望者が沢山いるようですが、我々はいくら望んでも中々OKしてくれないと思うし、紙クズのように見捨てられるのがオチだと思つてヨダレをたら

して辛抱しているだけです。

福井桃子、鈴木千鶴子、高村浩子、その他有名モデルさん達の呼びかけは、全身がワクワクするよつです。奇ク愛読者でも、多くの女性読者の方々から呼び掛けがあります。せめて文通だけでもと思つても、字も文章も下手で書く勇氣が湧きません。淋しい思いで仕方ありません。

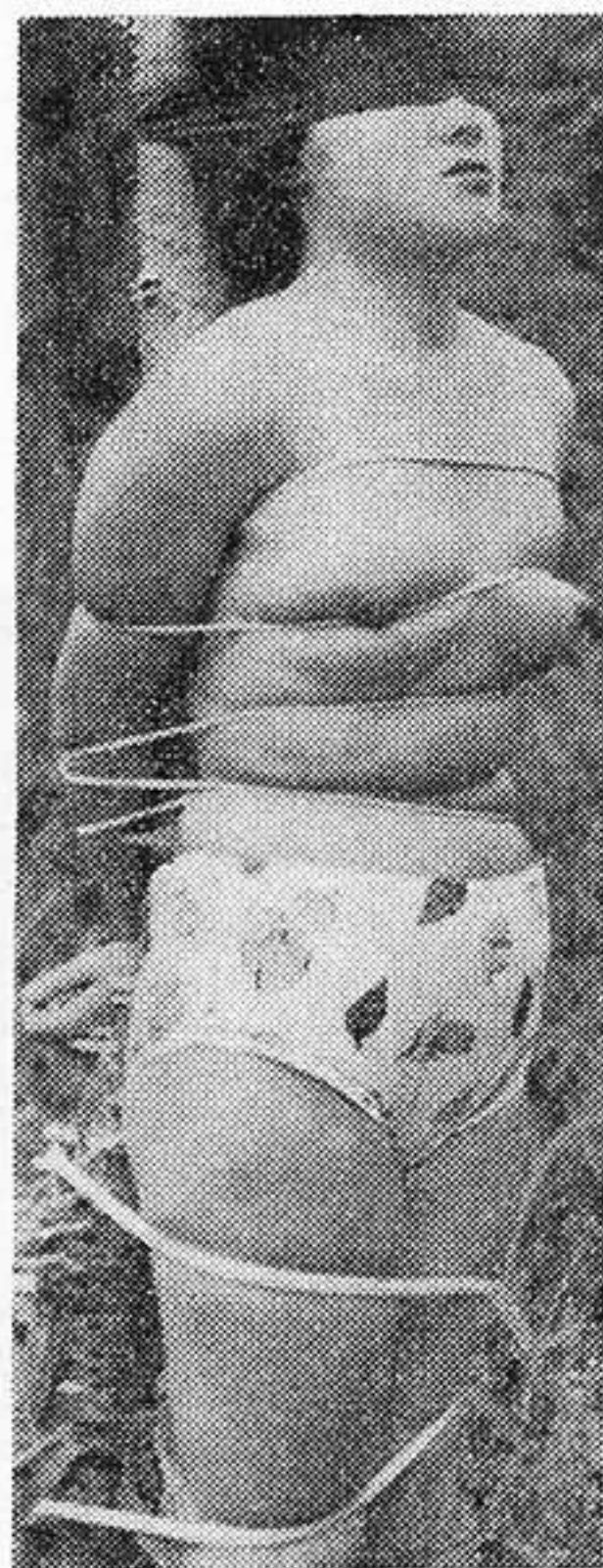
奇クを手にして第一に辻村さんのカメラハント、第二に塚本さんのカメラロボ、第三にグラビア写真、第四は奇クサロン。

一月号で「一条さゆりさんを想う」という記事がありました。が、とても気に入りました。ありがとう。私は一条さゆりの大のファンです。彼女のポルノ映画もすごかったです。もっと早く記事になったら、とんで行ったのに。金にいとめはつけない筈でした。一カ月の刑決定、早速彼女宅にゲキレイ文を出しておきました。

秋山夫妻が12月31日にダイコーミュージックに來る由、知らされて大悦びです。辻村先生ありがと

わ肌を視覚によって感じられるが故に縛り写真に魅せられていたらしいのである。その証拠は、被縛女性のポーズよりも、その肌のクビレ方、如何によって感受度が違うことである。太い縄よりも、細

い紐の方にハッキリする喰いこみ状態に、ゾクツと來るのだ。そこで私は安心した。私の縛りは、いじめるのが目的ではなく、豊満美強調、つまりは健康な異性慕情なのだから……。



う。必ずや万難を排して行きたいと思ひます。秋山夫妻のフォト、大切にしまつてあるもの、取り出して繰返し眺めています。天下一品です。

今年、元旦に神戸新劇ゴールドミュージックでピンクスタアの辰己典子の舞台挨拶がありました。一般観客にセリ市をして五名のスターのサイン色紙と、プロマイド(キッスマーク付き)の配布が四日間ありました。パンティは全部新品で、シミもなにもなく、新品を次々とはいて、彼女専用のものでなくガッカリしました。

元旦が二千元、二日が六千元、三日が千円、四日が百円? 原価は百円迄の物でした。香水をふりかけてピンクスタアのはいていたというだけが値うちでしょうね。

宮城県西郷房子様。パンティを分譲される由、申し出がありました。が本当でしょうか。もしお手元に在庫がありますれば是非パンティ一枚、おゆずり下さいませんか。年令、色白かヤセ形、中肉等お訊かせ下されば満点です。奇クの御希望号、フォト、バイブレーター、御必要なれば御礼に差し上げます。

△夫婦SMプレイ雑感▽ 同好の士を求めて

伊 勢 国 男

夫婦SMプレイ実践者の皆様、今日は。私達夫婦も、皆様方のお仲間入りをさせていただきたく、自己紹介の代りに、私達夫婦のプ

レイフオトを御覧に入れます。小生は34才、妻は32才で二児の親です。SMプレイじたいの経験は浅く、四年ぐらいですが、フォ

トの撮影は六年位になります。

最初は妻をモデルに仕立ててのヌード撮影からエスカレートしてセックスフォトにすすみ、今ではセックスフォト、SMフォトが五分五秒程度で、アルバムに貼ったフォトは数百枚になります。

勿論、写真技術はフィルム現像から印画紙の焼付まで、すべて自分で処理します。最近(約一年位前から)はカラーを始め、フィルム現像から焼付まですべて自家で行ないます。カラーのフィルム現像はコダックC-22プロセスにて行ないますが、フィルムはフジ

サクラのN-100で、どちらも同程度で仕上がります。

焼付はCC法でオリエンタルペーパー及びオリエンタルの10センチを使用しています。経験不足で余りよい発色では有りませんがやはり白黒に比べると格段の差があります。カラーもポラロイドですと相当高価につきま

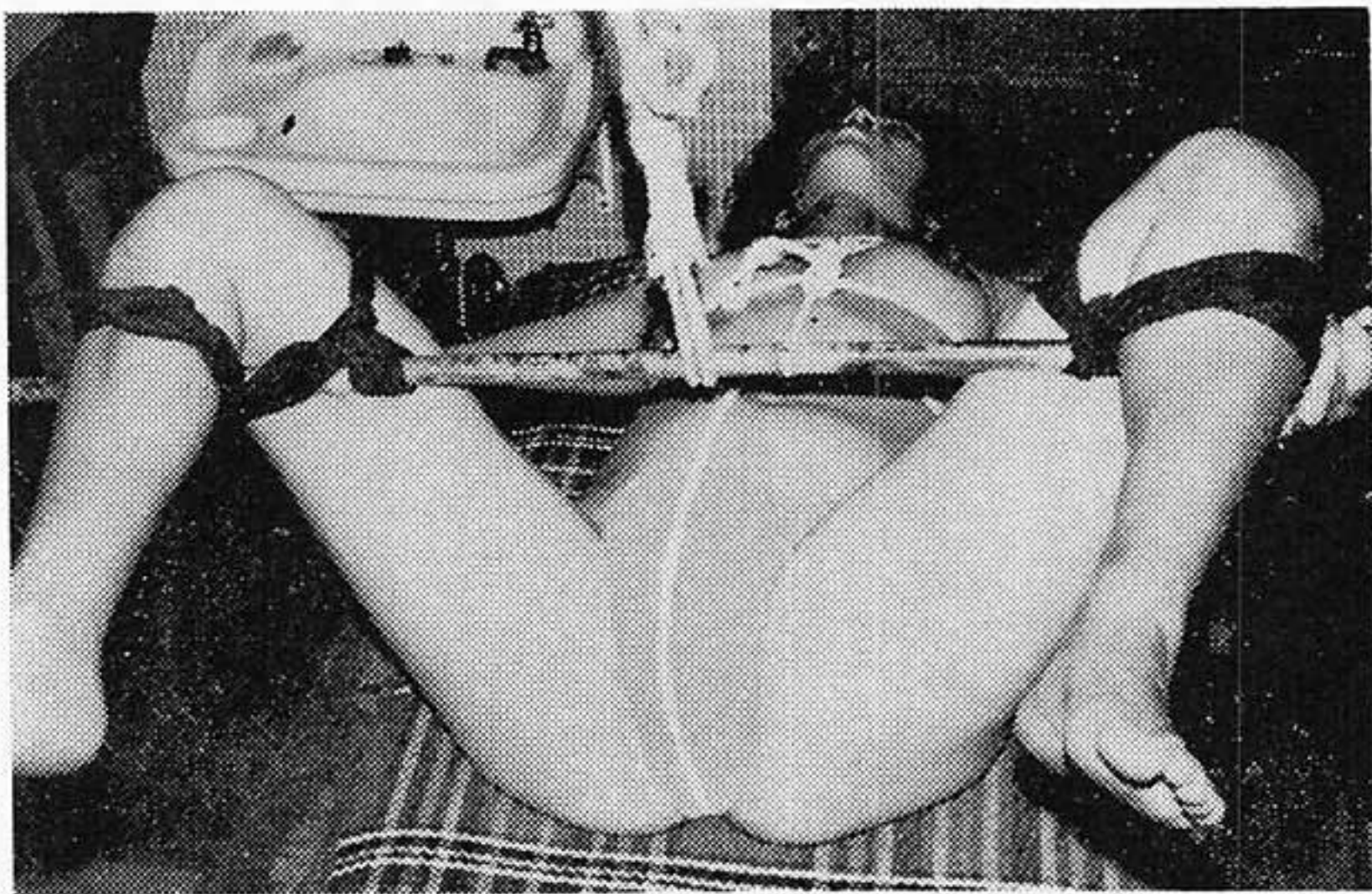
すし、何枚もプリント出来ないのが不便ですが、自家製ですとキャビネ判で一枚約百円余りで出来ます。

写真のお話は、これぐらいにして、私達夫婦のプレイの概略を述べて皆様方の御指導を賜りたいと思います。

私達のSMプレイは主として羞恥責めが主です。即ちプレセックスプレイですので、余り強烈な事はやりません。すべて軽いもので一応、開股、股間縛りベルトによる臀部打ち遠くからの蠟涙責め、剃毛、バイブによるV及びA責め、人間花台人間燭台、目前でのオ

ナニシヨ、アナルセックス等軽度のものは一応は総て行ないましたが、浣腸と吊り責めは、まだ行なっておりません。

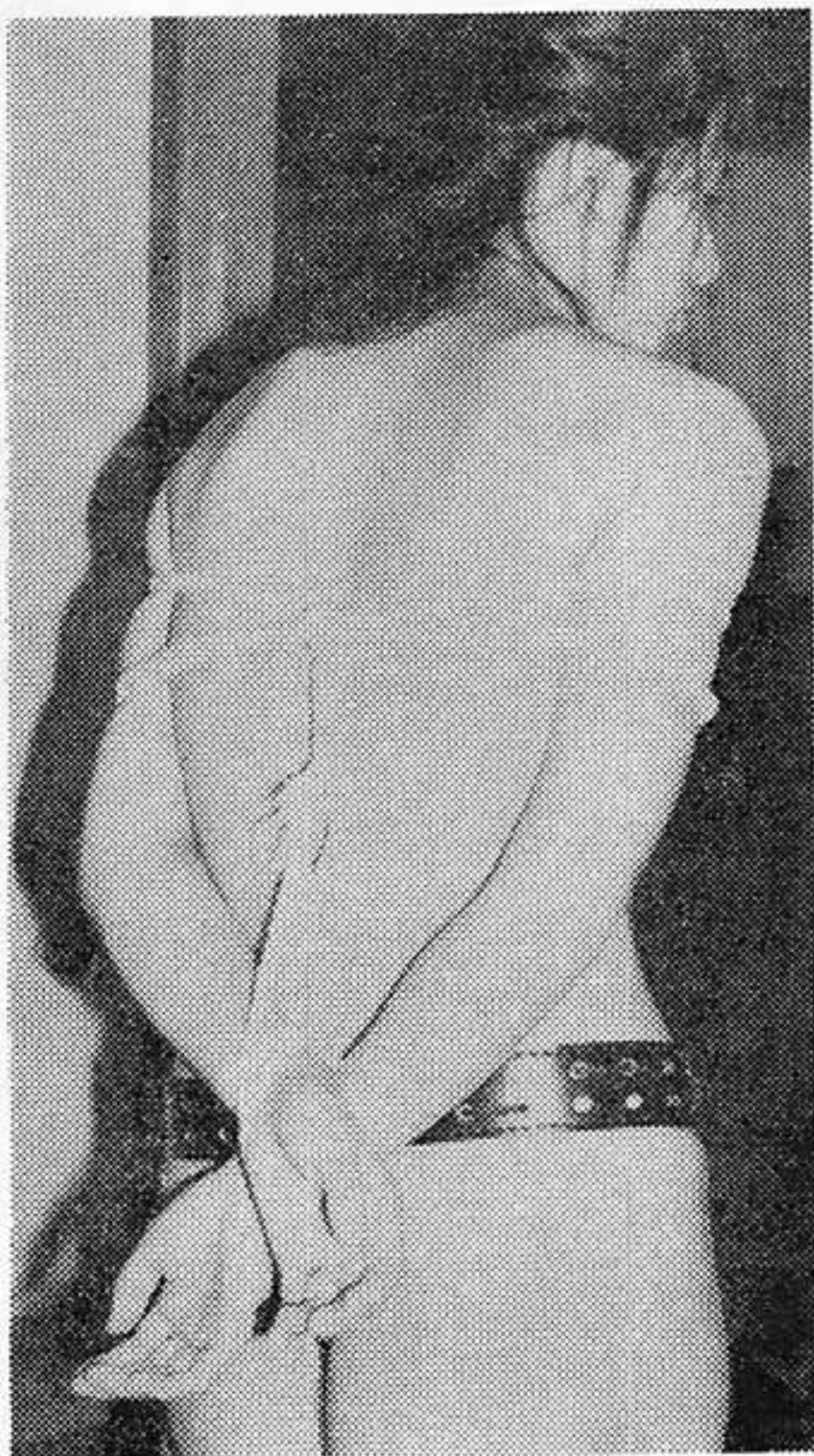
現在、計画中のものは、花芯の一番、敏感な個所に穴明けを行ない、金の鈴をつけるべく、穴明け方法を検討しております。一説に



よると、その部分を強く冷やしておいて、針で明ければよいとか聞きますが、どなたか、良い方法があれば御教示下さい。

とにかく羞恥責めを主体として、V及びAを徹底的に責めるのです。

九月号で発表された佐野みさ子さんの花電車は、本当に嬉しく、幾度も読み返しました。私達のアルバ



オイラも募集中

求む！ M女

原 多津男

アイツも、ヤツも、あの野郎も、あんちきしょうも、どいつもこいつも見せつけやがる。ああ、どなたさんの彼女も、美女でございますとも。美女中の美女ぞろい、ビジョビジョさんでございますとも、ハイッ。

だけどネ、キミたちやあ、オイラの彼女……だった女の素晴しさをえのを知ってるかい？ ええオイ。知った上で見せつけ

てるのかよ！ ざまあみろ、知らない。そりゃあベッピンとは云わないさ。だけど体はいいんだ。肌はピカ一で、だいいち縄が大好きってんだからねえ。フッフン。逢う度によ、ピカ一肌をギュッと絞り上げて縛ってやるんだ。後手高手小手ってやつでサ。キーキー云って悦んじゃってサ、海老縛りがいいの、片足吊りがどうのって、体当たりでネダルんだから、たまねえよ、マッタク。それが亭主に知られてからは、彼女とは云えなくなっちゃった。よう、誰か紹介してくれよ。ナ。

ムにも、Vを責めるビール瓶、コーラー瓶、化粧液の瓶、胡瓜、茄子、バナナ、コケシ、ローソク、単二型懐中電灯等のものが数十枚、作成されています。

夫婦プレイ報告をされている方々で、私達夫婦と同じ好みの方、ホー

ムポルノを作成してみえる方、又は外国製ポルノをお持ちで、おゆずり下さるか、交換可能な方、御連絡下さいませんか。当方、特にアブフォトが希望です。V及びA責め中のもの、獣姦、多人数姦、排泄シーン等があれば尚うれしく思います。

それから信頼出来る方でしたら夫婦交換プレイも実現したいと思えます。妻も夫婦交換プレイを前提に信頼出来る方と、お近づきになりたいと申して居ります。

妻のプロポーションは身長一六二、体重五三で、B八三、W七〇H九五です。顔も主人の私が申すのも変ですが十人並み以上ですが年齢が年齢だけに余り希望は持た

ないで下さい。私の方は身長一六二、体重六八で、すこし肥えすぎに居ります。私の希望は年令よりも、特に体の肉づきの良い方、佐野みさ子さん、村上喜美さん、紀川正信氏の御愛妻タイプの方が理想です。

十一月号の中村洋様、加治進様村井志摩夫様。十二月号の鈴鹿山賊様、喜怒写楽様、佐野みさ子様紀川正信様。一月号の佐藤真由夫様、土田純一様、福岡草二様、早坂信二様、最上卓也様、高松志朗様、その他同好の方々とフォト交換が出来れば、この上ない喜びです。

私達夫婦の選んだ夫婦プレイフォトの本年度ベスト10フォト。

- 1、12月号二四四頁、佐野みさ子
- 2、12月号二四〇頁、喜怒 写楽
- 3、11月号二四〇頁、早坂 信治
- 4、9月号二四五頁、高松 志朗
- 5、12月号二四〇頁、喜怒 写楽
- 6、12月号二三七頁、鈴鹿 山賊
- 7、12月号二二九頁、紀川 正信
- 8、11月号 八七頁、早坂 信治
- 9、11月号二四五頁、中村 栄
- 10、11月号二五一頁、村井志摩雄
- 次、7月号二三七頁、後藤 執正

(敬称略)

二百cc浣腸器讃歌

竹 迫 誠 也

二百cc浣腸器よ。おまえは、なんと素晴らしいプロポーションをしているのだ。

とっても長い硝子の胴。そこに刻まれている悩ましい数字。40、80、120、160。そして、ああ200。しかも余白を多分に残し、恐らく硝子筒にグリセリンを満タンにした

ら三百ccは、はいるだろう。その筒の先端は、またなんと可愛い嘴管だろう。それでもズングリした

その嘴管が、どれほど重用な役目を受け持ち、どれほどの威力を秘めているのかを私は知っている。

おまえ達仲間間の力が偉大だということも承知している。彼らはそ



アマゾンの脚下に…
—— 佐 野 寿 ——

暇さえあればアマゾンを求めて彷徨するマゾヒストが、幸運に巡り合った時の感激がどれほどのものであるか、お分かり頂

けるでしょうか。

マゾヒストは、ダイアナ夫人もかくの如くあらせられしやと、呆然自失の一瞬後、その貴族的な高

れぞれに私を唸らせ、狂喜させるのだから。

おまえの訪問先は、まずたいいていの場合、一定しているだろう。私もまた、その常識的とりきめを違えることはしない。ただ少々違うことは、嘴管だけというわけではなく、おまえのその胴までも出来るだけ奥座敷まで案内しようと思うことだ。

おまえは、見ただけでも私に悩ましい気持を起こさせる。掌にのせればズシンとこたえるぐらいの重量感に、またゾクリとさせられる。おまえには、さすが浣腸器の王者らしい風格が備わっている。

この、おまえの堂々たる逞しさと比べてみて、おまえの弟分の五十cc、百cc浣腸器などの、何と弱々しく感じられることよ。

それでも私は、おまえをこうして知るまでは、おまえの弟分たちをマスコットとして、ずいぶん可愛がり大切にしたものだ。だが、おまえの持つ、風格、悩ましさ、堂々たる巨大さに接した今では、百ccにウツツを抜かしていた自分が馬鹿らしくさえ思える。

だが、待てよ。

五十cc、百ccの彼等なら、半身以上の奥座敷招待も容易だった。

しかし、おまえほどのバカでかさととなると果たしてどうだろうか。

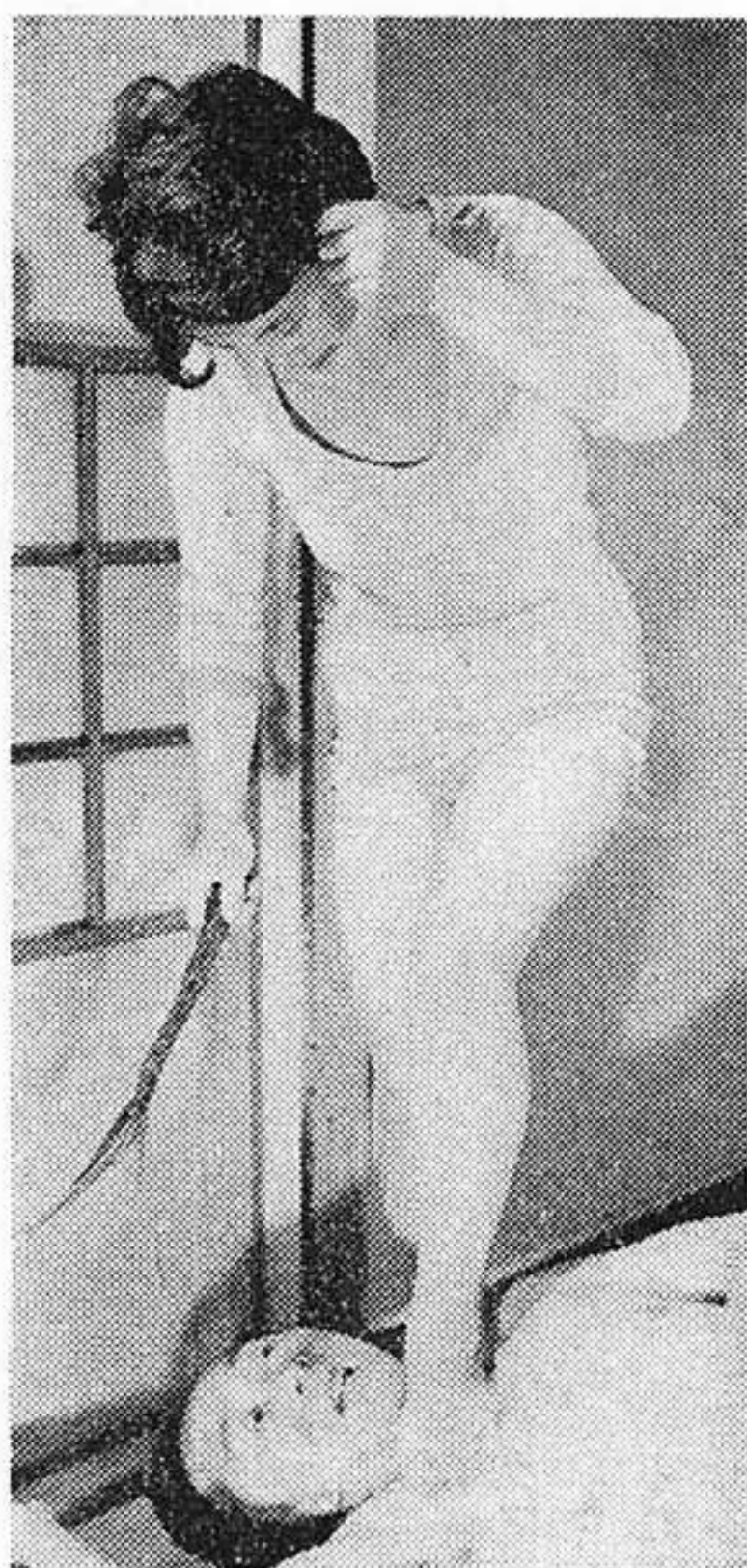
おまえの胴回りから見ても、こんなに突然訪問されたら、いかに歓迎ぐせのついた私の裏玄関といえども、それこそ化物のナグリ込みでも受けたかのように、悲鳴をあげてしまうのではなからうか。

おまえに来訪してもらうとすれば、まず、準備が大変だろうことは疑えない。裏玄関の改築は容易なことではないから、せめてもの応急処置としてオロナイン軟こうの大量動員を発令し、揉みほぐし部隊の活躍に期待することにしようと思う。ポマードも惜しまずに消費する必要がある。

勿論、私はそれらの招待準備を整えることをためらうものではない。おまえの来訪を願ってこそ、こうしておまえを我が手にしたのであるから……。

さあ、来たれ。おまえの訪問を受けようではないか。

嘴管が、アツという間に滑りこんだとして、私はなんら不思議とは思わない。軟こうとポマードは滑らすためのものだ。問題は、おまえのその巨大な胴回りなのだ。硝子製のおまえのことだ、胴を細くしろというような無理もいえない



M男を責める大塚啓子

大塚啓子様を慕う

女王ぶり今一度

キトー・淳

貴さ溢れる、美しくも気高いお顔を仰ぐのも恐れ多い気持で、スナップ撮影のご認可をお願いしたに相違ありません。

お許しをいただいたとたん、駆け寄って跪き、悩ましい乗馬鞭の底を押し戴くようにして、騎乗の踏み台代りをつとめたマゾヒストは、感激に慄える手を必死に制しながら、夢中でカメラの操作をしたことでありましよう。

日本人ばなれした雰囲気をお持ちの若き女王。ゆったりと鞍

を召して微笑されるお美しさに、マゾヒストは陶然としてその妖しいまでの魅惑に酔い痴れたに違いないのです。

三年以上の乗馬歴ありと仰せられたこの麗わしいアマゾン、ギヤロップで馬を飛ばすことが好きとのこと。

マゾヒストは多分、若さと美しさに満ちたグラマラスな体格、特に、スンナリと伸びやかな美しい御足に魅せられ、正に讃美するにふさわしい最大のクリテリオンに、生唾を呑んだことでしょう。

忘れられない啓子さま。オールドフアンはこの私。丈なす黒髪ふりみだし、縛られていたアナタだが、その意趣晴しをするように、Sの女王に変身の、あの責めぶり

から、せめて静かに、私の誘導通りに、その胴をゆっくりと回転して滑り進んでもらいたい。

そうそう、その調子だ。

見る。おまえの目盛りが、だんだんと姿を消して行くのを……。

がんばれ。大変なのは、おまえだけでは無いのだ。それっ、あと一息だ！

120。130。150。ついに160！

どうした？ なぜ止まるのだ？

そうか。これで通行止めというわけか。なるほど、そうかも知れない。おまえを先導する、あの可

の素晴らしさ。人魚が水を得たように、精気みなぎるあの美体。Sの境地に酔う如く、妖しくほほえむアナタをば……。

SとMとはうらおもて、なにも不思議じゃなからうが、S女となつた啓子嬢、最初に目にしたあの時の、私の感激キミ知るや。狂喜といえる血の騒ぎ、五体慄えし印象は、今もありあり思い出す。

ギリギリ縛りに呻きつつ、豊満美女に責められて、オス犬として扱われ、なぶりぬかれる情景を、想いこがれていた私。理想の女王の面影を、そっくりそのまま身につけた、アナタの見事な妖艶さ。

愛い嘴管は、ずいぶん奥深い廊下にいるらしいから……。

私の予想通り、準備完全の裏玄関での悲鳴は聞かなかった。しかし、ああ、しかし！ 今、猛然として湧き上がる奥座敷からの呻きはどうか。こ、これは、お、おまえの、お、弟分たちの招待では、い、いままでに、起こった、こ、ことのない、お、おおさわぎ、なの、だ！

浣腸器の王様よ！

おまえはやはり、素晴らしい実力者だ！

しかも憧れピッタリ、嗜虐女性の悩ましさ。

当時の私のやるせなさ、吐け場のなかったじれったさ。アナタのお手にて縄打たれ、そのおみ足を戴いて、責めて貰える幸運な、男モデルの憎らしさ。湧き上がりくるジェラシーに、男の顔だけ切り抜いて、千々に破った事もある。バカなこととは承知でも、それほどまでの衝動に身を慄わせたこの私。せめて一度と嘆願の、手紙を書きし思いは、わが青春の一ページ。十年有余の歳月も、私にとりては、無に等し。今なお強き思慕の念。叫わぬ事とは知り乍ら。

ナルシスト小杉千恵羞恥の宴

千 恵

考 抄

由 起 夫

うずき、悶えている千恵。

過去に、その悶える裸身の片鱗を、誌上で見た記憶のある私なのだが、十二月号に再び現われた千恵のヌードに、どうもかけはなれた思いが拭えず、積み溜まった奇クのパクナンバーをひっくり返して、四月号に潜んでいた前の写真を発見、比べてみた。

私の記憶違いではなかった。その二葉のフォトは、「浣腸の回数が多過ぎて、やせている」にしても、ひどすぎるほどの対照的な感じを、どうしようもない。

四月号で誇らしげに息づいている艶々しい見事な乳房は、十二月号では、いったい、どこへ隠れてしまっているのだろうか？

しかし、相変わらず千恵の呼びかけは精力的である。羞恥責めを求め、浣腸を求め、被虐の陶醉を求める千恵の声を、私は、あの豊かな乳房の絞り出す声と思って、読んでいる。牝犬が牝犬を求めて鳴く、オナニーの呻きとも聞こえる。

可哀想な、千恵。乳房の叫びが

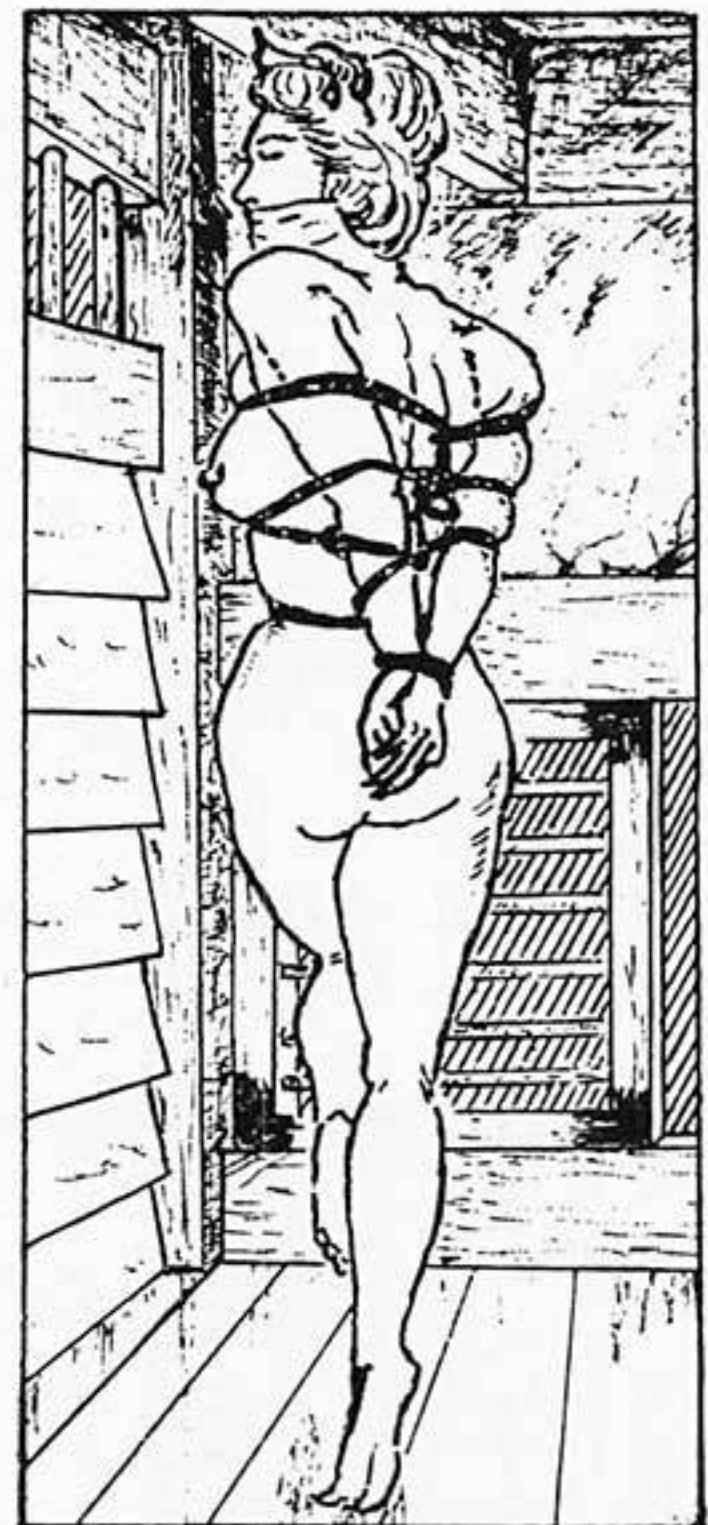
また可憐に私の心臓をゆさぶる。

あの叫び声。中河恵子、佐野みさ子両M女を羨望するあの叫び声は、私に、観衆の前にハラワタまでさらけ出し、花電車、シロシロシロクロ等を演じせしめられることを願望する女を想像させるのである。

オナニーに酔いきれない千恵。

その千恵に、私は、私なりのプレイプランをプレゼントしたい。私のプランに登場する千恵は、捕えられ売られてきた「チエ」であって、SMショーのスターと女郎の二足ワラジの女である。もちろん一切の着衣禁止の生活であるが、代りに毛髪類の全部を金色に染め上げる。つまり金髪スターに仕立てて、SMショーの訓練に明け暮れさせるのである。

毎朝の日課として、荒々しい男に取り囲まれたチエは、訓練開始前の入念な身体検査を受けなければならぬ。両手吊りにされて、人の字に足を開いて縛られ、微に入り細に亘っての受検である。そして引き続いて腸内清掃が必ず行



『脱出?』 堀 真彦

神さま、仏さま、慶子さま

浮気の果て

早 木 夢 二

時には慶子以外の女を縛ってみたいと思うことがある。だが、慶子に飽いたというのではない。

一糸まとわぬ全裸で、菱縄股間縛りを唯々と受けてくれる女なんて、日本中、探したって、そういるものではない。

ばち当たりな話だが、ちょっと浮気がしてみたいのだ。

慶子と一緒にいる前、ちょいちょい試みた女はいるが、何年も何年も慶子との緊縛生活になじんだ後で、それは又、こんなものでは

ないかと思ったりする。

あの女、この女、何やかや行きがかりのあった女を思い出して、今なら、あの女は縛らせてくれるかもしれないと自惚れてみるが、さて、いざとなると、どんなものか心細くもある。下手をすると、折角、乳房の上を一巻きしたのに、変態! と吐き捨てるようにいつて、体をぶるると震わせて縄を振り落としてしまった、いまいまい場面が再現するかもしれない。「こんやは縛るからね。縄を用意しとけよ」

「ハイ」

「縛られたら、拷問を受けるんだよ」

「ハイ、お受けします」

慶子だから、こんなに、すらす

『不安定な安定』 中河恵子



なわれる。これは「浣腸ショー」の訓練も兼ねての美容術であり、特大の浣腸器によって、食塩水、牛乳、グリセリン、石ケン水、コーラ、酒、ビール等々、あらゆる液体を毎日、替えては試みられるのである。

すっかり体を軽くしてから、縛られ方の訓練、そして縛られたまままでのサービス訓練、さらに花電車訓練と、ビッシリ詰まった日課スケジュールをこなし、その後に

は、舞台とお座敷が待っている。

スターともなれば忙しいのは当然ながら、チエの場合には、お仕置の鞭と、羞恥責めのひと時が加わるから尚更、忙しいのである。

変わりばえのしないファンタジック・プランだと笑うなかれ。このような状況下に呻吟する何時間かこそ、牝犬千恵の、あの見事な乳房が歓喜に慄える時であろうと思うのである。若々しい肢体を誇る千恵、いつまでも健康であれ。

らと行けたのだ。

女たちは、大なり小なり私の緊縛趣味を知っている。

「へえ、まだ……。偉いわね」お褒めとも、ひやかしても、つかないが、これなら、まだまだ、すがりつく余地はある。

「まだ、そんなことやってんの」こんな女と一時的にせよ、愛とか何とか言ってたのが、つくづく悔まれてくる。

「今、流行ってるじゃない。あなたも流行の先端を行ってた訳よ」

全くシラけてしまう。あの時、張り切っている女に縄をかけようとして、シラけさせてしまった仕返しを受けているということか？ 縄をまとわない女なんて意味がない。

「あら、もう終わったの？」

年輪の分だけ、ぜい肉をつけたような裸身を、くねらせている女と、味気ない別れをして私は買ったばかりの真新しい縄を持ち、ああ、やっぱり私の神さま仏さま、慶子さまの処へ、さり気ない風をして帰って行くしかない。

「あら、お縄、こないだ買ったばかりなのに」

「何本、あったって、いいさ」そんな夜、私は慶子に思いきり

責めていただくのだ。

私は股を拡げて慶子の膝の上に後向きにのせられ、前に回った慶子の両手で、たっぷり責められながら、

「お、お役人さま。もっと、もっと責めて下さいませ」

と、お願いするのである。

浮気をしてきたから、その償いをしようなんて殊勝な心がけではない。慶子も、うすうす察しているかどうか、そんなことも、どうでもいい。

ただ何となく、そんな夜の慶子の責めは実が入っているようだ。

「申し上げろ、申し上げろ」

と、いつものように責め言葉をかけながら、ぐいぐい責めてくると、私は、すっかり何か本当に白状することを持っている罪人のような気持ちになって、

「いいえ、私は何も、何も知りません……」

などと、お答えしながら、菱縄股間縛りの裸身を、くねらせているのだった。

しかし、その恥をかいだ縄で、いつか慶子を縛ることになる。縛られているのが、あの女であるかのように、私の責めの感興は一段と盛り上がってくるだろう。

—— 幻想譜 ——
夢の処刑場

—— 沙斗左徒 ——



室井亜砂路・画

テレビ映画「キイハンター」の中で、美女が絞首刑になるシーンがありました。

死刑といっても、せいぜい宣告場面か、新聞に「執行さる」とかでる程度とっていましたが、白装束のまま踏板をのぼり、吊輪を首にかけられる場面を正面から、更にこれは人形でしようが、ガシヤーンと床がひらき落下する姿。そして横たえられた死顔と、予想もしなかった大サービスに感激しました。

元来、私はこの様なことが大好きなのです。実際に美女を殺すわけにいかず、すべて想像ですが、いろいろな処刑を、楽しんでいきます。その一つを紹介しましょう。

○ 前田真知子は、その若き美しい肌を、惜しげもなく晒し、且、縛られて美しさを倍増するという、

大きな罪をおかした。

判決は絞首、銃殺、斬首の三重複死刑であった。

「私の生命は、一つだけ。いちど死刑をうけるだけでいいのね」
真知子は、こうたかをくくっていたが……

まず絞首刑。よくみられる踏板落下式なら頸部神経が切れ、意識はたちまち失われ、せいぜい十五分で確実に絶命する。しかし真知子は、大型クレーンの前にひきだされた。いでたちは言うまでもなくオールヌード。

クレーンの腕から、太いゴツゴツとした吊輪がさがって、咽喉よりアゴに近い処に、ひっかけた。これは苦しみを長くさせるため、徐々に吊りあげるのだ。すくなくとも三十分は、ジタバタと、もがかねばならぬ計算。

そればかりか、おへソに直径十

センチの黒い紙をはりつける。雪白の裸体だけに、よくめだった。絶命前にここを狙って銃撃するという。銃殺ではない。一斉射で殺さず小口径の銃を用いるという。第三処刑場で斬首し刑は終わるそう。

○

いよいよ処刑開始。クレーンの腕が徐々にあがりだした。ロープがピンと張り、真知子の身体も上にのびあがる。つま先で立った。それも地をはなれ、白く柔らかな咽喉にロープが喰いこむ。

とうとう完全に首吊りとなり、地上高々と、ゆっくり弧を描き、ブランブランゆれながら銃殺場へはこばれていく。もだえ苦しむ美女。あまり身体をふるわせたためおへソにつけた的がはがれて舞いおちてゆく。約十分、経過。

第二銃殺場では、五人の射手がイケニエをまっていた。そこへ空中から首吊り美女の御到来。

「射て！」五つの銃が火をふき、全弾ことごとく黒い的に吸いこまれていく。何かわめいたらしいが絞首スタイルでは声が出ない。処刑開始から十七分、経過。

○

やがて斬首場へ動いてゆく。気

の毒に、まだ死にきっていない。鼻翼がパク、パクとふるえているのがわかる。完全に締まっておらず僅かだが息が通うらしい。それだけに苦しみはまだ終わらぬわけ。銃撃により裂けた肌から鮮血が太股を、下腿を伝って流れおちている。二十二分。

ここでも即座に首を刎ねたりはしない。短刀をグサリと、おへソに柄まで刺しこむ。また新しい苦痛に慄れんする女体。

ようやく大刀のサヤを払う。正面から大上段にふりかざし、真一文字に下方へ。右の乳房がパッ！と裂けた。二十六分。

横にまわり第二撃。左の乳房に真赤な地獄の花が咲く。「そろそろ、この位で、かんべんしてやろう」

背後にまわる。頸が長くのびているので斬りやすい。気合と共に横流れの一刀。胴体がドサッと落下。次いで、べつべつになった首が……

処刑開始より三十二分。

○

ざっと、こんなことを夢に見ております。美女の処刑、生首愛好家のかた、どしどし名のりをあげられることを希望します。

志高 牧 晴着残酷物語 夢艶新春

それは新春、早々の夜のことだった……。
突如、東方海上の沖合に現われた怪しい船が、北風の吹きすさぶ異国の破れ棧橋に着いた。



モソモソ、ガヤガヤ、言葉は東洋的な響きだが何を喋っているのか、さっぱり判らない。だが宰領と、おぼしき男が、出迎えらしい男に、薄っぺらな送り状を手渡し

目に、あわされるの？　ここは、いったい、どこ？　まさか、噂に聞いた南蛮の地獄では……。
「ワッハハッハ、と雲助連——。や」と気がついたかネ。そう、

夜目にもパツと花が咲いたように和装の日本娘が、一人、また一人と、甲板に曳き出されてきたではないか。
「おお、なんという残酷さだ。正月の晴着衣裳のまま、胸高に締めた袋帯や、背負い上げたふくら雀の帯に、総鹿の子絞りの帯揚げも、一際、目立つ鮮かさ。」
両の腕は、まるで、へし折るかのように帯の後ろに回されて手首を重ねて、きつく幾重にも縛りあげられている。
「ピューッと、南風が、冷く吹く。」
晴着の裾が乱れ、長い袂が揺れ、こぼれた緋色の長襦袢や蹴出しが、なまめかしい。
「見世物じゃねえぜ。へたな同情は禁物だ。」
「なんしろ、夜が明けちゃあコトだから」と、一人また一人、音もなく船外へ。
「拐された日本娘——。」
「どうして、あたし達、こんな

その通り。地獄も地獄、零丁目の零番地という恐ろしい所さネ」
「なぜ、あたし達が……？」
「それは、おまえらが美しい日本の娘だからさ」
「いや、いやです！　帰してッ」
「諦めなヨ。もう、一生、帰れねえんだから。な、ネエちゃん」
「ひどいわ。国際友好団体のパーティに招待だなんて騙して……」
「ハッハハ。とんだパーティで悪かったネ。なにしろ、晴着つきの日本娘は高く売れるんでネエ」
「売って？　まさか私たちを」
「そうさ。明日は世紀の国際女のセリ市があつて……こりゃあ、つまらんことを、日本語で云っちゃまった。オヤ、泣き出したナ。面倒だから、猿ぐつわをかましナッ。ついでに目かくしもして、ひっぱって行けッ」
「か、かんにんし……ムムムム」
○
もう誰も居ない明け方の破れ棧橋に風が一際、強く吹きつけた。ふと見ると、どの娘が落としたものやら、髪花簪が一つ、土に汚れてヒラヒラと、転がっていた。急を告げようにも、ボクの脚は岩のように硬直して、それっきり動こうともしなかった……。



＜最終回＞ 辻 村 隆

東映セックスドキュメント『プロセクサー』の断片

十二月一日、東映京都撮影所の天尾氏から、一つの企画協力の依頼が、私に持ち込まれてきた。恰度、本職の方が一段落したところなので、久し振りに、撮影所を訪問する。

前作、セックス・ドキュメント『性倒錯の世界』が、SMブームに乗って、意外に評判がよかったので、柳の下のだジョウを狙ったわけでもあるまいが、前作と同じ中島貞夫監督によって『性倒錯の

世界』の続篇ともいうべき、ドキュメント映画が、再度、企画されたのであった。

「性倒錯の世界に賭ける、プロのセックス人間。そうした人々の生きる道を、追跡ルポするのが、今回のテーマですが、例の『前衛』の猪熊氏など、テーマにふさわしい人間だと思うのですよ。彼の消息を知りませんか」

天尾氏の質問に、私は首を振った。現在の彼の消息は、その後、沓として不明だったからである。『性倒錯の世界』で、相対死の壮絶さを、涅槃のテーマで心憎いばかりに演出し、レズのSMショーをナマナマしく浮き彫りにしてみせてくれた猪熊氏は、たしかにプロのセックスの演出家であった。

大阪ミナミの、秘密クラブ『前衛』が、派手にやり過ぎて検挙され、釈放されると、秘密会員喫茶『ゼン』で引き続き、大阪人間のド根性でショーを続けたが、ポルノ解禁ではないだけに、時期尚早で、これも停止の憂目のみ、その筋から、エロ事師と眼をつけられてからは、遂に地下に潜り、猪熊氏のその後の消息は、知る手掛かりもなくなっていたのであった。「残念だが、何か辻村さん、いい

企画ないかしら」と、天尾氏は、しきりに私を当てにする。

過去数作、SM面では、随分、天尾氏とも接触してきただけに、何とか力になりたいと思ったが、私としても、前作で、渡部好美、谷山久美子、野村信子、石田敦子等、カメラ・ハント女性の皆さんの協力によって、強烈なSMの境界に挑戦し、全力投球しただけに再度、協力の要請を受けても、緊縛裸像や、同工異曲のSMの描写では、余りにも芸がなさ過ぎるしお呼びをうけたものの、正直いって内心、困惑したのであった。

私としての協力は、いうまでもなくSMである。その時フト、頭にひらめいたのは、秋山夫妻のことであった。

最近、欧州の放浪の旅から帰り正月勿々、大阪ダイコミュージックで、再起第一回公演が決定した、秋山夫妻の話を持ち出してみたのであった。彼ならプロのショーマンでもあるし、私に最も密接な、SMでも、あるものを掴んで帰ってきたからである。

このところ、私は、彼等夫妻の行動に興味を持ち、この欄や、SMカメラ・ハントでも、その動静や、SMの観念に、かなり頁をさ

いてきたのは、彼等の、再起に賭ける並々な熱意に、うたれたからであらう。

東映の企画は、私のこの提案を快く採択してくれた。忽ち話はトントン拍子に進み、現在、故郷の熊本県下の衛星都市の一隅で、秘かに日夜、研鑽している秋山夫妻のすべてを、追跡ルポすることに決定したのである。

猪熊氏の消息は、東映の方で探索することになり、その他、東京のヒイシ・プロの、ピンクスター飼育ルポなども含まれていた。

歌舞伎の女形が、ゲイバーをやるというエピソード……。

そして、東映の新造語で、『プロ・セクサー』とタイトル決定。セックスに(ロカ)をつけて、つまりセックス人間、或は、性の探究者と解すべきであろうか。そのプロフェッショナルということになる。私などは、さしずめ、SMセミプロ・セクサーというところか――。

しかし、東映が採択し、私が如何に推薦しても、当の御本人の意向は、きいていない。

数度、電話連絡して、やっと秋山美智夫氏と対話出来、私は、この委細を精しく説明した。かつ

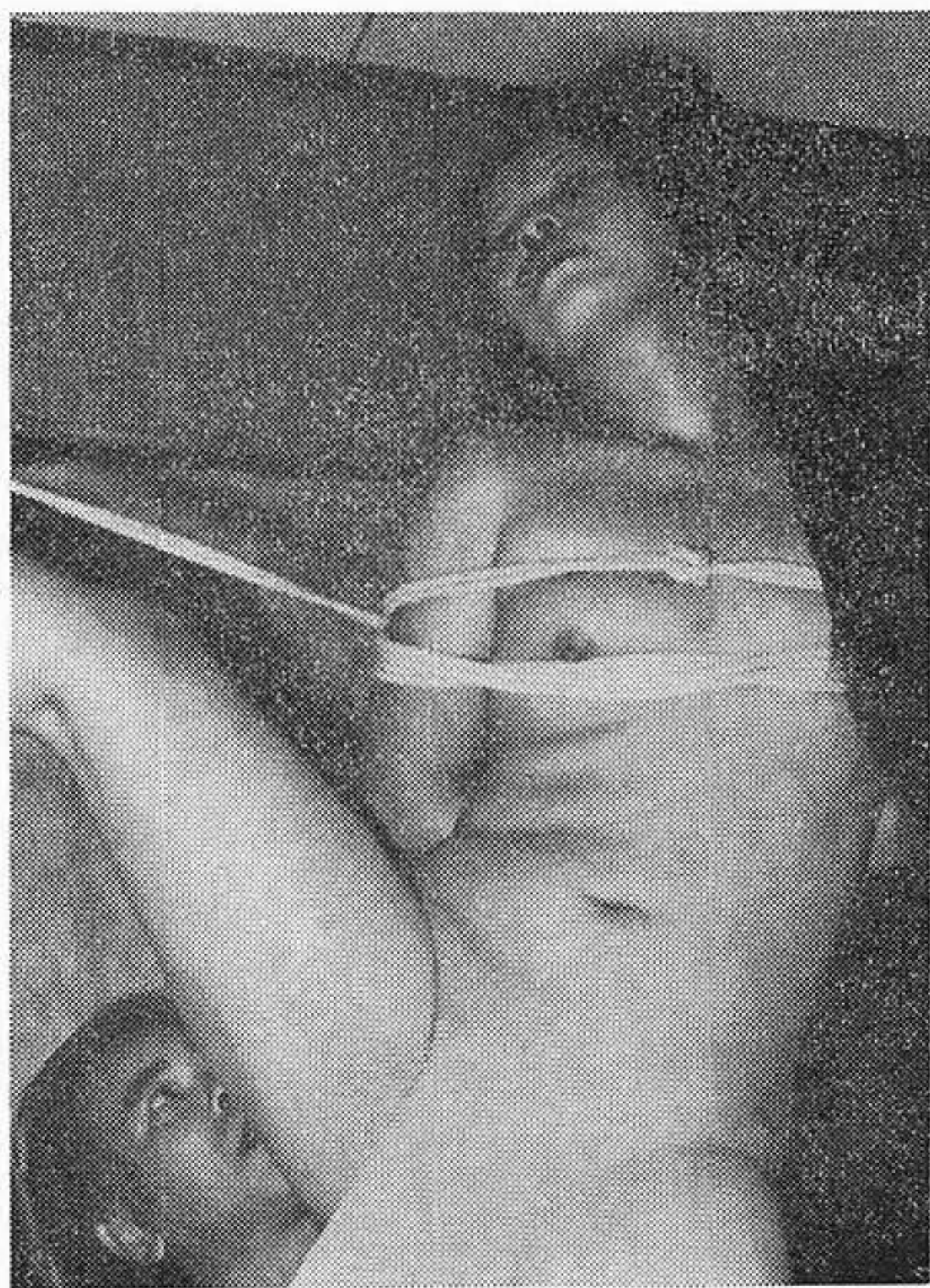
て、イレブンPMに紹介し、今又映画の出演を要請する結果になってしまった。

彼としても、日夜、正月公演に賭けて、秘策を練る、試練の秋でもあり、かつは、プライバシーを刳抉されるので、最初は躊躇していたが、私の熱心さに負けたのか遂には、はっきりと快諾してくれたのであった。

O・Kをきいて、中島監督と企画の三村氏が、直ちに空路九州に飛び、彼の私宅を訪問したのは十二月六日のことである。

秋山夫妻と懇談し、意気投合して、大牟田の街を、のみ歩き乍ら中島監督の胸中には、一つのテーマが、着々と実を結んでいった。年の暮れの二十五日、秋山夫妻は、九州を出発し空路来阪する。その刻々をカメラは追い、ナマのドキュメントは執拗に夫妻を追跡する。

ホテルに到着して、大晦日の出演までの、ショーの練習、時間調整、秘策、公開ショーの限度など種々検討し、苦しみ抜いた挙句に完成した、再起第一回の、新残酷ショーの細大を、カメラは非情なタッチで捉えてゆくのである。秋山夫妻の、このショーでの、



最大のヤマ場は、何といっても、大阪港区八幡屋宝町、ダイコーミュージックでの、晴れの正月公演にあった。

その為には、どうしても、ダイコーミュージックの協力がなければならぬ。

私と、企画の三村氏は、劇場での撮影の許可を得るため、一日、ダイコーを訪問し、支配人にあつて、映画の性格や、追跡ルポのすべてを、ありのまま説明した。隠し撮りするにしても、観客の顔がカメラに入り、迷惑がかかっ

てもいけないからである。ダイコーミュージックには舞台がない。観客が四方から取り囲み、出演者は客席のうしろの楽屋から、椅子の間の通路を通って、中央のエプロンステージに登場する。謂わば前方後円墳のようなかたちの中央が出演者の舞台であった。それだけに、どこから撮っても、前方の観客の顔が入るのであった。

支配人は以前、軽演劇やミュージックショーにも出演していて、かつては、中島監督のもとで出演したこともあり、快く承諾してくれたが、かなり技術を要しそうである。

秋山夫妻の来阪と共に、私は、アドバイスを兼ねて、一緒に行動することになっている。

何とはなしに、協力を引き受けた手前、彼等のマネージメントした事も、引き受ける羽目に立ち到ったのである。年末から年始にかけて、私は懼らく、例年になく多忙であるに違いない。

加えて、先月紹介したSMスナック『レイ』のマスターが、夫妻の上阪を機会に、是非SMフロアショーをお願いしたいと頼み込まれ、こうなりゃ、もうおいそがしいついでと引受け、貪婪なサービス精神は『レイ』の存在を、三村企画に話したら、それは面白い。

秋山夫妻のナマの姿を捉えるには、こうしたSMスナックこそ最高と、『レイ』のマスターに相談する始末であった。

この欄で『レイ』の存在を知らせてから、全国の同好諸氏より、チラホラと電話の連絡があるのは結構だが、スナックへは、やって来ず、長電話で、あれこれ聞こうという人が多くて時間がとられると、マスターは、こぼすのであった。私の最大の知人だと称する人

士なども現われて、私の住所、本職など、マスターがそれとなく聞くと、何も御存知なく、彼を苦笑させるような、自称知人が現われるなどと、面白いSMのウラ話をしていたが、映画のことになると彼も案外、度胸が据っていて、承諾してくれる。M人間に随喜の涙を流させるような、春川ナミオの等身大のSMの色彩絵が、壁に描かれてあり、トイレの白壁の正面にも、如才なくM男性好みに描かれてある。

東京新宿の「昆」に似て、ここも自然、M族が多い。S人士も偶には訪れるそうであるが、やはりM男性が、主流を占めているようであった。

私の楽我記を読まれて、電話連絡などなされた方は、やがて封切られる、セックス・ドキュメント『プロセクサー』を御覧になったら、SMスナック『レイ』の内貌に、幾分は接しられることであろう。

締め切りの期日もあって、この稿を書いている現在、私は未だ、SM的な行動は起こしていない。電話や、速達による、秋山夫妻との連絡は密接ではあるが――。映画の公開は、一月下旬から二

月上旬にかけて封切りの予定であって、同時併映は、石井輝男監督の『忘八武士道』という、丹波哲郎主演の、ポルノ時代劇。(仁義礼智信忠孝悌)の八道徳を忘れた武士道ということで、相当、どぎつく、面白いらしい。

ホテルで秘策を練り、練習し、種々、残酷ショーに伴うSMプレイをする彼等夫妻の姿の中に、幾らかでも、私好みのカメラ・ハント的シーンが登場する筈である。これが私の、アドバイスの唯一のシーンでもあるのだから、それを発見していただけたら、幸甚である。

数日前の、彼からの速達によって、私はショーの秘策の概要を知ることが出来た。

SM愛好者にとっては、正に息をのむ迫力があるが、舞台では、どこまで実現出来ることだろう。秋山夫妻のショーをみられた同好者の方々が、強烈な見聞記を寄せてくれるかも知れない。

彼はこのショーのために、長く垂れ下がった黒髪を真白く染め、白髪鬼と化して登場する。

秋山夫人も、連日の訓練と飼育に耐え、食事を制限して、贅肉をとることに毎日、努めている。

ミュージックショーの秋山夫妻が、一躍、ドキュメント映画『プロセクサー』によって、全国的に有名になる日も近い。

最後に、奇クファンのために、彼の秘策、正月公演のショーの内容を御紹介しておこう。(原文の俚語ですが、活字にしにくい処は伏せておきました。御判読下さい)

『師走の風と共に急に寒くなってきました。先生のお力添えで、この度の思いがけぬ事態に、家内と二人、事の重大さを、ひしひしと感じております。東映のスタッフが到着し、映画の始まるまでに、私達の芸は、完成させなければなりません。毎日、毎日が必死で、私も妻も、懸命に取り組んでおります。』

昼は子供がいますし、近所の人から覗かれる心配もありますので夜、子供が寝たあと、十時頃から夜中の二時頃まで、毎夜、縛りの研究です。

見た眼に恰好よく縛ると、時間がかかるし、ショーで一番大切な心構えは、スピードと迫力。エロではなく、強烈なSMの面だと思えます。時間が掛かるといことはスピードに欠けているということとです。スピードがないことは、

迫力も半減するという結果になります。

SMにも、暗い面が出てきて、私達のショーではなくなります。

スピードのある縛り、しかもSMの面を、これでもか、これでもかと、淫靡さを、舞台一杯に漲らせ、観客を淫靡な気分陶酔させた時に、ショーの成功があると確信しております。

そのためには、縛りを先にするか、鞭打ちを先にするかに苦悩しております。

今までのショーでは踊り・ベツド・シーン・縛り・鞭打ち・ローソク責めの順序でしたが――。

今度は、家内を、腰巻一枚で舞台に走り出させ、その跡を、鞭を持った私が追いかけて、鞭打ちをし、縛り上げます。

その縛りは体に縄をかけます。そこで、舌と指による、快楽の責めを始めます。

縛りをほどくと、両手首と片足首を一緒に縛り、うしろに寝かせると、片脚は胸のところまで上がり股は大きく開きますので(ダイコーでは、腰巻の下には、なにも着けません)××が、みえると思えます。

乳房や××を、舌や指で責めた

短信往来

最上卓也様へ

西原 浩より

最上様。奇ク二月号に、のったゆう子様とのフォト八葉の、なんと、すばらしいこと。

かなり私もカメラのシャッターを切りましたが、SMの道は、やればやる程、ああでもない、このアングルからと、気はあせるばかりで、未だに満足感のある作品は出来上がりません。

次から次へと願望をつのらせるばかりで、ろくなものは完成しません、それでも私は私なりにやっております。SMの責めというものは、どこまでもきりがなく、その奥の深さには悩まされております。

これだけ、ゆう子様も、がまんされ、本当に貴方様も御満足だったでしょう。

私は最近、ある女性と、あらゆる浣腸プレイをやりましたが次回は貴方様のプレイを真似させて頂きます。ローソクプレイも、したり落ちるローが女性の柔肌に花

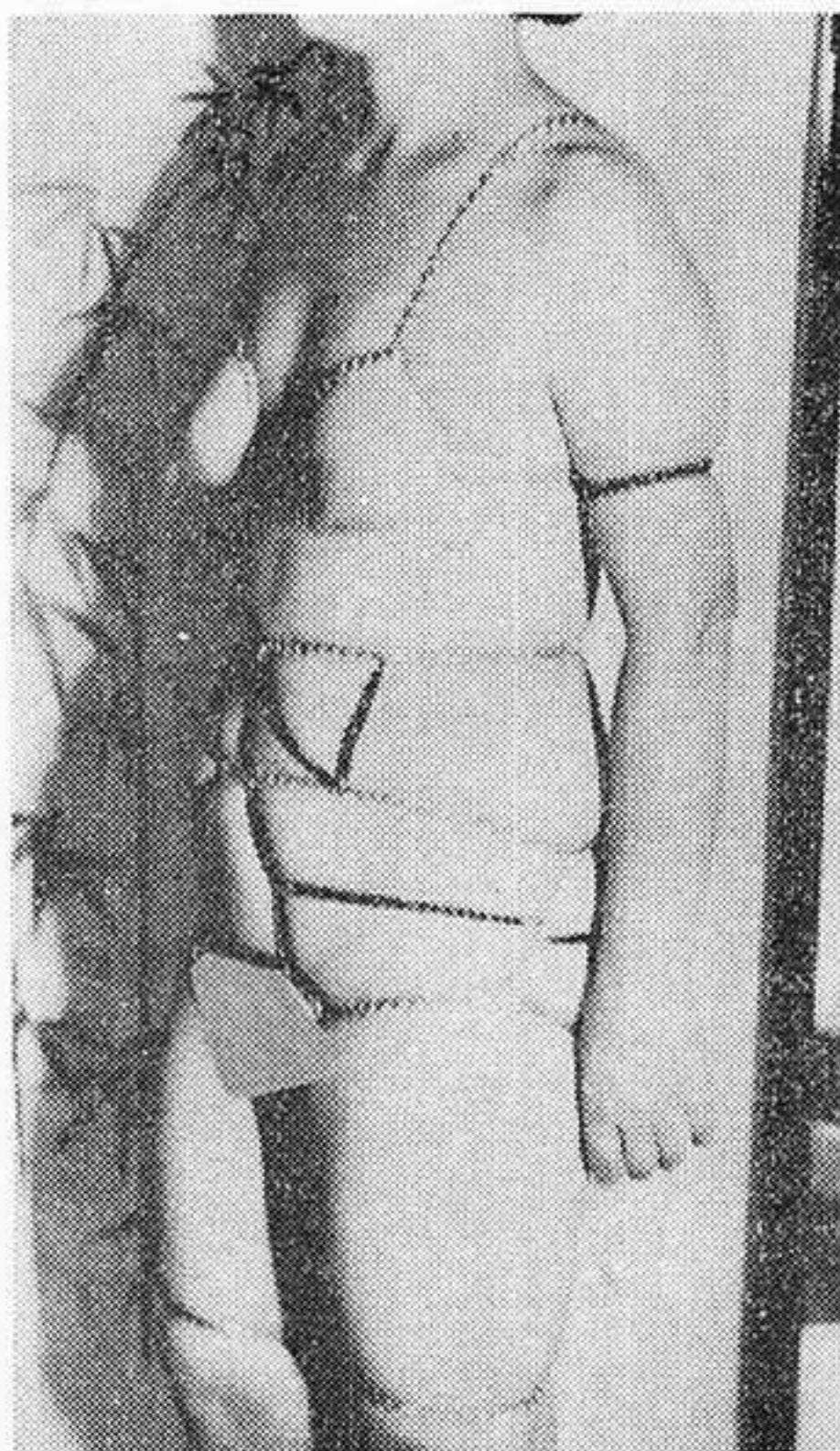
を咲かせました。百奴ローソクの熱いプレイは、私達S男性にとり本当に幸せなものです。竹、又は棒を利用するの責めは経験ありませんが、バイブは三種、弱中強と実施済ですが、これが女性にとって最高の喜びだと、つくづくそう決定づけております。

SMプレイにおきましては羞恥責めが絶対的にイニシヤチブをとります。貴方様のパンティプレイも中々の珍プレイだと存じます。羞かしさの表現的プレイは全く同感です。クリップ責めも私はクリップを三十個から五十個の使用を考えております。

玉ギラは珍しいものです。この件につきましては、詳細に御説明をお願いします。又多数のローソク使用のプレイも私のやりたいものの一つです。その他、もう少し迫力のある重量級の責めを考えておりますので、機会があれば、そのような責め方によって、ゆう子様を悦楽の世界へとお導きしたいと思ひます。

出来たら、私の願望とするアイデアによって御一緒に、ゆう子様を調教されませんか。くわしくは御一報次第、御面接の上、SM話に花を咲かせましょう。

フォト通信 『妻の下着』 紀川正信



松本たえ様へ

芦屋・山本徹男より

松本たえさんは、二、三日続けてSMプレイをしたいと云っておられました、SMプレイを絶えずしておるのであれば、二、三日続けても、出来ると思ひますが、一カ月や二カ月に一度した位では

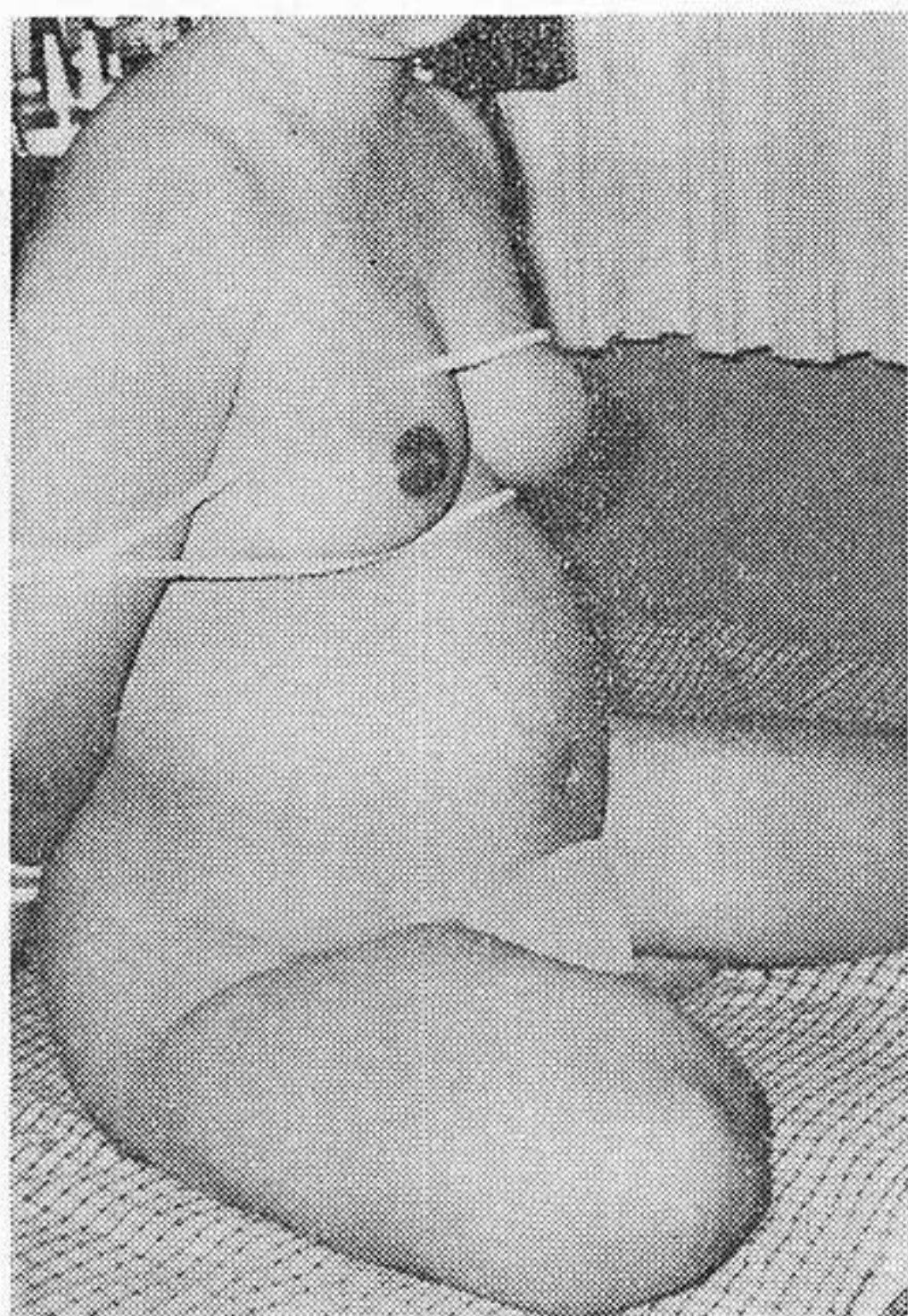
二、三日は、とても無理だと思ひます。恐らく一日で身体がバラバラになった様になって悲鳴をあげる事になります。

私が昔、N子とSMプレイをし

ていた時は、毎日五時間以上、続けておりましたので、連休とか又は飛石連休には休暇をとり、三日間位、連続で、よくSMプレイをした事があります。これはN子の身体が完全にSMプレイに馴らされてしまったため、恐らく一月でも二月でも続くと思ひます。

三日間といえ七十二時間で、その間ずっと緊縛され続けで、その間に色々の責めを受けるわけです。勿論、相当きつい緊縛ですから、そのままでは腕や身体は血行がとまり、くさらないとも限りま

『ボリュームを縛る』 村井志摩雄



せんし、変形を起こしますから、縛りの方も忙しく、一日に何度も縛り直すという事になります。

ただ手首が、いくら首迄あがり何遍、海老責め逆海老責め等にかけられても身体がそれになれてしまっておりませんので、大して苦痛がない様です。勿論、これは本人が声を出せないだけで、案外そうでないかも知れません。しかし、今、私が松本さんの手首を力一杯肩迄あげ、身体や腕、手首が変色する迄、何度も力のある限り、縛り上げ、海老責めに、これも思い

きり身体を一日中、何度も曲げると、貴女は身体がもちますか。恐らく、一日で身体がバラバラになってしまふと思います。

十二月号の菅原妙子さんや小林マリ子さんも若いから直ぐ馴れるかもしれないが、一度、本式に緊縛されてごらん下さい。百年の恋も一度にさめる様に、SMプレイをあきらめるかも知れません。SMプレイに馴れるには、ある程度、時間をかけねば、本当のSMプレイに馴れないのではないでしょう。

私も今年で四十四才。二十才になる娘があり、とても娘と同年輩の小林マリ子さんや菅原妙子さんを緊縛出来ないかも知れませんが、少し冒険してみたいですね。一度、紳士に出会い、一度でSMにこりてしまふか又は経験の意欲で結婚迄にSMの味を覚えるのも面白いかも知れません。私のN子も今では結婚して良き二児の母になっております。どちらになっても、同じSM同志、お互いの冒険がうまくゆく様、心からお祈りしております。

長谷田真知子様へ

伊勢国男より

一月号の「地獄の快楽、A感覚に魅せられて」を、幾度も読み返させて頂きました。流暢な文の流れ、構成、かゆい所に手の届くような繊細な表現等、まったく感心のほかありません。

昨年八月号に「ポルノ思いつくまま」を書かれた長谷田亀治様は真知子様の御主人ではないかと思いますが、本場の外国ポルノグラフィを沢山蒐集されている、ご様子、大変、羨ましいことです。文中の「フォーサム」は、私も複写

物ですが四、五枚、持っており、妻にも見せておりますが、満更でもなさそうですし、A感覚の訓練を致しているのですが、まだまだ充分とはいえぬ状態です。

アナルセックスについては、私なりの根気と努力で、ある程度までの成果を得ています。パイプを併用しての同時責めなどが、私達には、合っているようです。

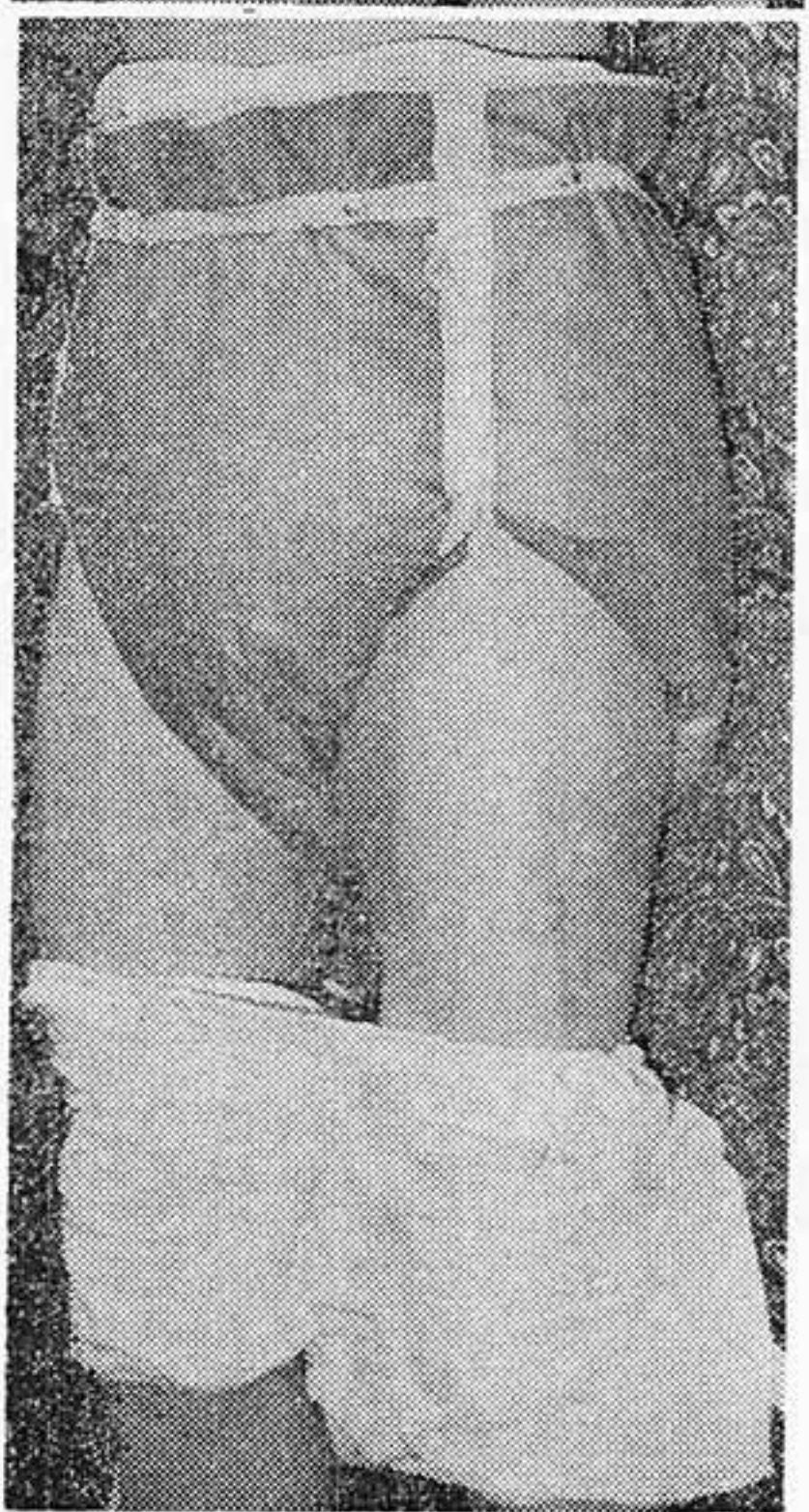
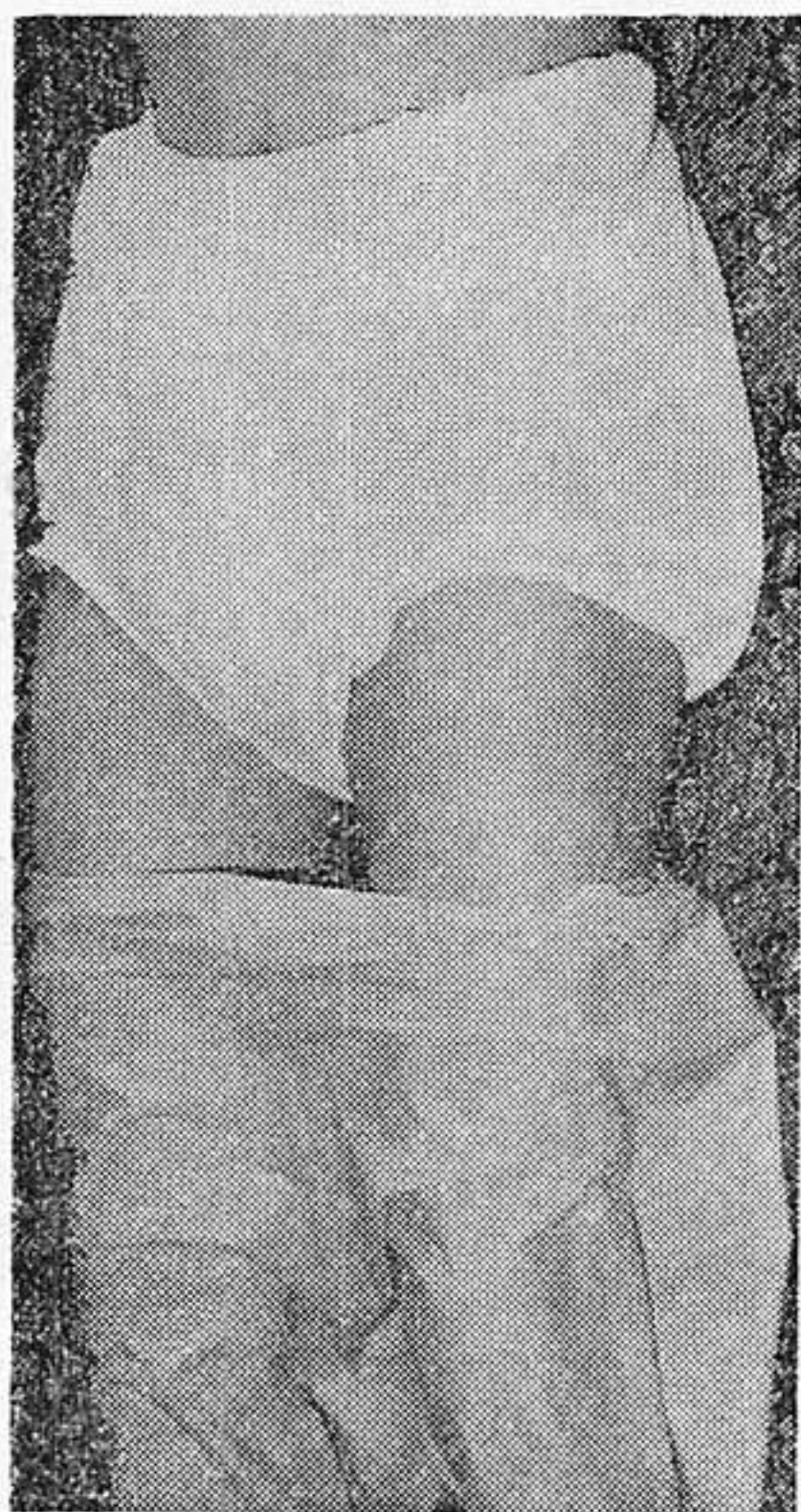
有名人の御夫婦の中でも、案外同好者がおられる様子などを聞いて安心してはいますが、妻は時々、一度、フォーサムをやってみたいといひます。でも、なかなか思うようにはまいりません。勿論、思うだけなら私も、一人の女性を三人掛かりで責めてみたり、妻が三人の男に同時責めされているのを眺めてみたいなどと、悪魔的なことを考えています。

真知子様、あの発表文以外にもいろいろな、ご体験が、お有りの事と存じます。いかがでしょう。私達の先輩として、妻のA感覚についての御教導を頂けないものでしょうか。

もし、お近づきになれましたら私達のプレイ写真なども見て頂けるのにと考えています。どうぞ宜敷く、お願い致します。

粗 相 防 止 装 備

仁 戸 せんじ



私の寝巻ともいうべき完全装備は次のようです。まず、パツド形の当て布を用い、長尺の腰巻をして、その上から、オムツ

カバーを穿きます。そして、更に吸水ブルマーを重ね着し、尚、その上に、ゴムブルマーを穿くのです。

こうすれば、絶対に布団に粗相することはなく、安心して眠れるというわけです。写真は、上が腰巻とオムツカバーを装着したところ

ろで、下が、その上に穿いた吸水ブルマー姿で、太腿のところにあるのが、これから引き上げるべきゴムブルマーです。

「赤ちゃん」の告白

おしめカバーと私

高 畑 勝 則

欲しい。とにかく欲しい、という気持は絶えず有ったのですが、恥ずかしくてどうしても買いに行けなかった、おしめカバー。

そのおしめカバーを、遂に我慢

しきれなくなって最初に買ったのは、私が高校二年の時でした。

いよいよ買おうと決心した時、警察に連れて行かれるかもしれないと、真剣に考えました。でも、

お金を出して買うのだから、叱られても、買ったおしめカバーはボクの物にだけはなるだろう。そう私は考えて、店にとび込んだのでした。必死の買い物です。

おしめカバーのショーケースを指さして「これを下さい」と、店のオバさんに頼みました。どうしても「このおしめカバーを……」とは口に出せなかったのです。

「おしめカバーですか？」と、店のオバさんは大声で聞き返しました。私は、心臓がドキドキして逃げ出した気持でした。

「おしめカバーは、何カ月位のにし

ましようか」と、聞かれても私には分かりません。おしめカバーに大きさの分類があるのを知ったのは、この時が最初です。

カッカとする頭で、自分の年×12と暗算しかけて気付き、あわて「12カ月」と答えました。二百五カ月などといったら、オバさんに、すぐバレてしまいます。

「赤ちゃんは、男？ 女？」オバさんの次の質問に、私は嘘のむつかしさを深く感じました。「男です」と答えました。私は男なのですから……。

「それじゃあ、この辺の物ですがどれにしましょう」とオバさん。

私はもう、どれでもいいから早く売ってもらいたい気持で、いらしていました。それにしても私の憧れるおしめカバーが、こんなに、ややこしい手続きを必要とする買物とは思いませんでした。

包みを、しっかり抱いて、とぶ

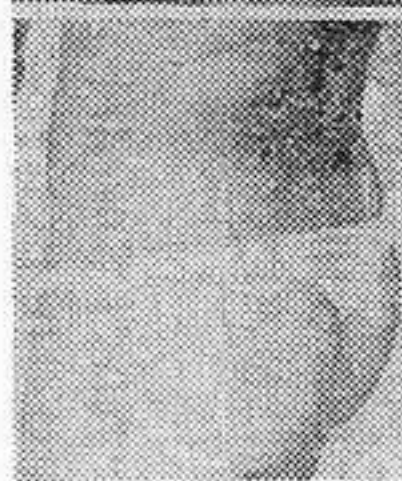
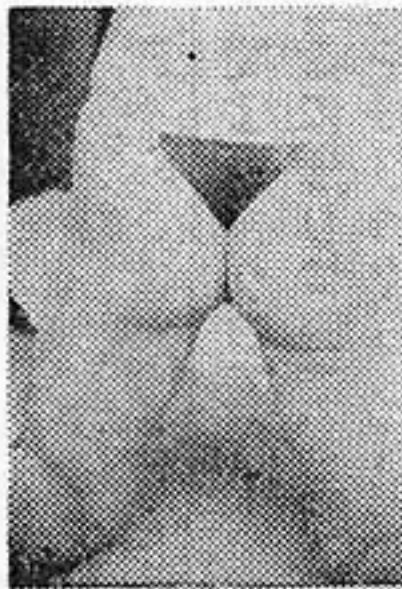
ビキニを穿こう

— 村田好雄 —

写真は小生手持ちの
ビキニです。上から手
作りの皮ビキニ。太い

ナイロンメッシュで後ろは小さな
三角のもの。穿くと伸びて中が透
けて見えるゴムビキニ。白いナイ

ロンビキニの順ですが、この他に
もかなり持っています。変形下着
愛好者の皆さん、ご活躍下さい。



ように帰った自分の部屋で、よう
やく自分の物となったおしめカバ
ーを撫ぜ、握りしめた時の感激！
私は感極まって早速、おしめカ
バーの中で、快感を呼ぶ作業を始
めかけたのですが、汚れる！と
気がついて中止しました。

勿論、その夜はフトンの中に持
ち込み、幸せいっぱいの充足感で
寝たのですが、夢の中で、母にお
しめを取り替えてもらっている私
を見て、甘え声を出した途端に目
が醒めて、それから、どうして
も寝つけませんでした。

次の日、学校から帰ると、母が
私の部屋を掃除しており、日干し
したらしいフトンが、ちゃんとた
たみ直されているのを見て、ホン
トに困ってしまいました。私は、
おしめカバーをフトンの間に挟み

こんで置いたのですから……。急
いで、フトンを、ひっくり返しま
した。ありました。ホッとしまし
た。持って行かれたのではないか
と心配した、おしめカバーは、ち
ゃんとたたんで上フトンと下フト
ンの間に入れられていたのです。
「黙ってボクの部屋の掃除なんか
して……」と私は、母に抗議しま
した。おしめカバーのことを何か
言われると思っての先制攻撃のつ
もりでしたが、母は、おしめカバ
ーのことは一言も触れず、私は拍
子抜けしたような気持でした。

○

私は今でも、精神年齢は極めて
幼稚だと思っています。甘やかされ
育ったからでしょうか。幼稚な精
神が、おしめカバーに執着すると
すれば、甘やかした母の責任なの

でしょうか？ でも同じ母に育て
られた妹は私とは正反対のようで
私だけが、甘えん坊のようです。
甘えん坊だから、幼稚なのでしょう
う。そして幼稚だから、おしめカ
バーが欲しいのかも知れません。
赤ちゃんになりたいのではなく
今も私は赤ちゃんのままの精神だ
といえそうです。退行現象とは関
係はないようです。体は大きな
っても、精神は成長していないの
でしょう。私が、おしめカバーに
執着するのは、成長することを必
死にならねば止めようとしているの
かも知れません。

私は赤ちゃんのままで居たいの
でしょう。おしめカバーを持って
いることで、赤ちゃん感覚を持続
しようとしているのでしょう。
私は父が嫌いです。私が粗雑に

扱われた思い出から、父が怖く、
父を代表とする大人の男の仲間入
りすることが嫌なのでしょうか。

おしめをしようか、と言われた
ら、子供は自信を失って、恥ずか
しさで充満します。性的な気持も
あるでしょうが、大部分は、性と
は無関係な心理だと思います。私
の場合は、未熟な性意識が、多分
に作用している気がします。

岩手信夫さんは、これを病気と
表現しておられました。私は、
病気ではなく「状態」だと思いま
す。だから、もし私が、大人の精
神になることが出来たら、大人の
状態になれると思います。

同じ、おしめカバーに執着して
もゴムフェチの方は、おしめカバ
ーのゴムの感触と感覚に性以前の
快感を得ていられるのではないで
しょうか。だとすれば、おしめカ
バーそのものではなく、おしめカ
バーに着いているゴムに執着して
いることになり、私のおしめカバ
ーに対する執着とは、少し違うの
です。

私の場合、赤ちゃんという概念
そのものが、即、おしめカバーに
接続しているのです。
おしめカバーマニアの方、ご意
見を、お聞かせください。



●腰巻マニアの願い●

二十数枚の
宝ものと共に

赤井尾越

四畳半ひと間ぼっきりのアパートですが、ここに帰りついて、部屋一杯に宝物を張りめぐらして眺めると、私は、一日の仕事の疲れを忘れることが出来ます。

私の宝物。それは、二十数枚の「赤い腰巻」です。一枚ごとに、多少によらず思い出がある、その赤い腰巻を私は裸になった体に巻いたり、スッポリと頭から被って転げまわり、楽しい妄想にふけるのが日課になっています。

今、私の腰に巻いている絹の赤い腰巻は、三十センチ巾ほどの白い布が上についた上等な品で、ある大きな、お邸の若奥様に頼みこんで、三週間ぶりに、ようやく譲っていただいた腰巻です。

また、頭に被り、背中に流れてまといついてくれているのは、神田の未亡人サロンのホステスさんに、新しいのと取り替えてもらった腰巻ですが、OKをとりつけるまでには、私としては、かなりの

無理をして通いつめたもので、甘ずっぱいニオイの忘れられない化粧の赤いオコシです。

この悩ましい肌ざわりに包まれて、部屋一杯に吊り下げたり、広げたりした赤い腰巻の中に埋まっていたら、私の妄想は実感を伴って発展するのです。

——いつ這入ってきたのか、私の前にスラリと立っているのは、黒地に鮮かな花模様を散らした着物姿の芸者さんでした。おどろく私を面白そうに見詰める微笑した顔の、なんとキリッとした美しさでしょう。

彼女は、いきなり坐っている私の肩に片足を載せました。とたんに着物の裾が大きく割れて、赤い腰巻が白い素足に、まといつくようにして現われます。私はドキドキしながら思わず、その腰巻に顔を寄せようとしましたが、肩の足に強く蹴られて、ひっくり返ってしまいました。

見上げる私の鼻の先で、芸者さんがパツと着物の裾をまくり上げて、赤いオコシを見せつけるようにするではありませんか。私は矢も楯もたまらなくなり「どうかそのオコシを譲って下さい」と頼みました。

すると彼女は「では裸におなりよ」といいます。私が云われるままに裸になりますと、彼女は私の体を品定めでもするように眺めてから、今度は自分が帯を解き始め、何本ものシゴキを次々と解いたかと思うと、そのシゴキで私を後手に縛りあげてしまったのでした。

手足を縛られ身動きも出来ない私の目の前で彼女は、ゆっくりと腰巻一つになりました。豊かな乳房や、見事な裸身を包む真赤な腰巻は妖しくも美しく悩ましい。

しかも、その赤い腰巻が、彼女の手でフワッと宙に舞い、縛られて身動きならぬ私の裸身に舞い落ちてくるのです。

プーンと鼻をくすぐる、何ともいえない赤い腰巻の匂い。柔らかな絹の感触。

私は、そんな幸せが降ってきたら、そのまま死んでもよいと、真剣に考えながら、二十数枚の赤い腰巻と戯れているのです。

編集部だより

○十年近くも続きに続いた辻村隆氏の「カメラハント」と「サロン楽我記」が今月号を以て終わりを告げた。よくもこれだけ長く続いたものである。執筆者辻村隆氏の御努力と御声援下さったファンの方々に厚く謝意を述べたい。次号からは装いも新しく型破りの構想で辻村氏の連載掲載する予定なので大いに期待して頂きたい。

○カメラハントの穴埋めとしては現在「カメラルポ」執筆中の塚本鉄三氏を起用して、更に一段と活躍を計って貰う考えである。すでに玉木章子氏、西条紀代氏など新しく誌上を賑わしているが、その他、南加津子氏を初めとした読者通信の女性並に塚本鉄三氏独自で取材した女性等の登場が期待されるので誌上を春の花園のように飾ってくれることと思っている。

○読者通信の女性愛読者の方のなかでも同じく愛読者の方と意気投合して、そのまま誌上から姿を消される方が多いのだが、出来るだけ誌上に顔を出して頂くよう、誌友ファンのためにも、極力お願い

映画、テレビの
縛りシーンから

東山 映史

SM作家の団鬼六原作の「緋ぢりめん博徒」が東映で映画化された。原作では、白狐のお藤が主人公だが、映画では鬼百合のお勝になっいて、藤純子の緋牡丹お竜に対し、カラー映画にふさわしく中村英子のお勝の背中に、けんらんなる鬼百合を描いている。彼女

を中心に土田草苗の江戸川お秀、藤純子の盲目の波千鳥お紋、池玲子のハイカラお仲、松平純子の流れ星お蘭と女侠五人がポスト藤純子を争い、競艶している。数で行こうというところか。

原作では、白狐のお藤が、世話になった親分の娘を救うために自ら捕えられて、女郎にされる特訓ぶりが売り物だが、映画では、お勝の危機には必ず助人があらわれ救われる。そのかわりに、女郎屋の折檻部屋が出てきて、そこで女郎が石抱き、木馬責めなど色々な

拷問をされるシーンを見せてくれる。とくに、武士の妻から女郎にされた女が、数人の男にもてあそばれ、最後は腰巻一枚で両手吊りにされ、乳房などの色責めにあうシーンは、まことに、迫力があつた。

日活の「続・大奥秘話——やわ肌献上」では、ポルノ女優の二条朱実扮する中蔵の藤尾が、敵に捕えられ、腰巻一枚で乳房の上を緊縛して吊るされ、ムチ打たれる。失心すれば水をかけられるところなど、なかなかの迫力。

最近、テレビでも、よく緊縛シーンを見せてくれるが、田村正和の「眠狂四郎・裸女の中に神を見た」では、川崎あかね扮するおつやが、キリシタンとして引き廻しの上、ハリツケ、火あぶりの極刑にあう。

彼女は大映時代「女牢もの」で豊満なハダカを見せているだけに適役だ。

北大路の「地獄の辰捕物控」でも、心中未遂の女郎が晒しの刑にあう。菱縄縛りの正座で、びしょ濡れの晒され姿は甚だ、よきものだった。また、三船敏郎の「素浪人峠」など、よいシーンがあり、今後の番組が楽しみだ。

女囚拷問之図

市原幸三郎



している。それと共に、可能な限り告白や手記をも書いて頂くよう慫慂している。女性読者の方々はどうか引込み思案になられないで積極的に誌上で活躍してほしい。

○ポルノ旋風が吹き荒れて以来、映画に演劇に出版物にと煽情的なものが一時的に氾濫したが、やはり根無し草のようにブームに便乗する事だけを当て込んだ場当たり式のものには長続きしないようだ。地道に実績を作ってゆくものが最後まで残るのではなからうか。日本の現下の状況は、いつまでもポルノの跳梁にまかしておく程甘くはないと思うのだが、如何？

○発行部数を極力制限して、その純粹さを保ってきた本誌なのだが反面また同類誌の簇出を促したことも事実である。しかし、それもSM雑誌が経済的に旨味のある市場でないということが判れば、いづれ転向するのは火を見るよりも明らかであろう。儲るからSM雑誌を出すというのではなくて、SMが大好きだから出すというマニア誌でなければいけないと思っている。その意味でもSM雑誌の王者としての本誌に、無名のマニアが結集してほしいものだ。無名もまた有名になる道だからだ。

〔秘蔵版SM資料一覧表〕

従前一時的に分譲中止しておりましたSM資料の中で特に好評だった左記の写真は特に御希望の方々に限り焼増し致します故、前金にて天星社宛お申込み願います。

レインコートの拘束

大手札四枚一組 略号△いろ▽
大塚 啓子

猪吊りの美女

大手札三枚一組 略号△いの▽
梨花悠紀子

色褌の開股縛り

大手札三枚一組 略号△いふ▽
長野 良子

椅子責めの果て

大手札三枚一組 略号△いす▽
大塚 啓子

マニヤの全裸緊縛フォト

大手札三枚一組 略号△いな▽
栗本 ミチ

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号△いら▽
山原 清子

洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号△いこ▽
山原 清子

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号△いさ▽
山原 清子

可憐島田髷全裸縛り

大手札三枚一組 略号△いみ▽
山原 清子

メンスバンド責め

大手札五枚一組 略号△はん▽
東浦ひかる

ハリツケ

大手札三枚一組 略号△はみ▽
新宮 夫人

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号△はす▽
大塚 啓子

メンスバンド足挙げ

大手札三枚一組 略号△はそ▽
東浦ひかる

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 略号△はた▽
鈴木 晃子

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 略号△はね▽
山原 清子

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆ▽
中河 恵子

投げだす緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよ▽
中河 恵子

待望の脚挙げ姿態

大手札四枚一組 略号△はて▽
中河 恵子

ニツ折女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はわ▽
中河 恵子

開股縛りにて喜ぶ女

大手札四枚一組 略号△はふ▽
中河 恵子

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 略号△はふ▽
中河 恵子

診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 略号△にし▽
田中美佐子

臨月腹開陳(座位)

大手札四枚一組 略号△にり▽
田中美佐子

臨月腹開陳(立位)

大手札三枚一組 略号△にす▽
田中美佐子

突き出した臨月腹

大手札三枚一組 略号△にい▽
田中美佐子

臨月の裸身像(座位)

大手札三枚一組 略号△にぬ▽
田中美佐子

柱縛りの妊産婦

大手札二枚一組 略号△にや▽
田中美佐子

臨月の妊婦緊縛

大手札三枚一組 略号△にち▽
田中美佐子

膨隆七カ月腹鑑賞

大手札五枚一組 略号△にひ▽
増田みゆき

縛られた妊婦の裸身

大手札二枚一組 略号△にる▽
田中美佐子

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号△にん▽
安原さゆり

八カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号△にへ▽
安原さゆり

乳房強調妊婦菱縄縛り

大手札四枚一組 略号△にめ▽
増田みゆき

双胎八カ月腹大寫し

大手札四枚一組 略号△ほり▽
増田みゆき

双胎妊娠線の出た蛙腹

大手札四枚一組 略号△ほぬ▽
増田みゆき

後手縛りの双胎妊婦

大手札四枚一組 略号△ほか▽
増田みゆき

八カ月の双胎の猿轡と緊縛

大手札四枚一組 略号△ほよ▽
増田みゆき

股間縛りに喘ぐ妊婦

大手札四枚一組 略号△ほつ▽
増田みゆき

初産双胎妊婦開股縛り

大手札四枚一組 略号△ほえ▽
増田みゆき

双胎妊婦腹の凄愴切腹

大手札四枚一組 略号△ほら▽
増田みゆき

八カ月の双胎革具責め

大手札四枚一組 略号△へね▽
増田みゆき

九カ月の双胎首枷責め

大手札四枚一組 略号△への▽
増田みゆき

逆さ吊りの正面と背面

大手札二枚一組 略号△つる▽
増田みゆき

手と足の宙吊り

大手札三枚一組 略号△つた▽
梨花悠紀子

弓吊り責め

大手札二枚一組 略号△つき▽
梨花悠紀子

最近撮影の新人新趣向緊縛責め写真集

SM組百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚

八〇〇〇円

十組十枚

一五〇〇〇円

二十組二十枚

二八〇〇〇円

五十組五十枚

五〇〇〇〇円

百組全部百枚

八〇〇〇〇円

(郵便番号 545-91) 天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

奇クの誌上を賑わしている新しいマゾ女性の方が、清纯に或は妖艶に、それぞれその個性にマッチした縛られ方責められ方をされて甘い吐息を洩しています。マニアの方の蒐集帖の一頁に更に新鮮な資料を加えて頂きたく、ここにSMの香ぐわしい魅力に溢れるニューフォトを提供いたします。

☆

1 片足吊りに喘ぐ(玉木 童子)
2 柱に晒す全裸女(玉木 童子)
3 猿轡に呻く縛女(玉木 童子)
4 開股縛りの片足(玉木 童子)
5 菱縄縛りに泣く(玉木 童子)
6 右足挙げ柱縛り(玉木 童子)
7 日陰の女の羞恥(玉木 童子)
8 開股責めの正面(玉木 童子)
9 八の字開脚責め(玉木 童子)

10 乳房縛り真正面(玉木 童子)
11 開股縛りの強要(玉木 童子)
12 正座正面晒縛り(玉木 童子)
13 バイブ責め姿態(玉木 童子)
14 絶叫！開脚責め(玉木 童子)
15 手吊り足吊り責(玉木 童子)
16 臀部からの苛虐(玉木 童子)
17 正面で足を開く(玉木 童子)
18 卓上の開股痴態(玉木 童子)
19 縄は女を泣かす(玉木 童子)
20 強烈縛りに開脚(玉木 童子)
21 強烈海老責縛り(江口 淑子)
22 鞭打ちにもがく(江口 淑子)
23 強制する開股責(江口 淑子)
24 辱恥をさらける(江口 淑子)
25 奴隷の誓を開陳(江口 淑子)
26 排泄姿態の強制(江口 淑子)
27 耐久カガシ責め(江口 淑子)
28 排便姿態で縛る(江口 淑子)
29 欄間に晒す開股(江口 淑子)
30 答で強要の汚辱(江口 淑子)
31 縄の痛さに泣く(鈴木千鶴子)
32 浣腸にのけぞる(鈴木千鶴子)
33 凄絶海老なぶり(鈴木千鶴子)
34 大の字開脚晒し(鈴木千鶴子)
35 棒責め裸女失神(鈴木千鶴子)
36 両足首開脚吊り(鈴木千鶴子)

37 全裸手吊り正面(鈴木千鶴子)
38 エビ責にあえぐ(鈴木千鶴子)
39 艶美椅子に悶ゆ(鈴木千鶴子)
40 全裸緊縛浣腸責(鈴木千鶴子)
41 足の裏の温い女(深田 菊子)
42 亀甲縛乳房責め(深田 菊子)
43 足を吊るのは嫌(深田 菊子)
44 強制開股椅子責(深田 菊子)
45 交叉した手首結(深田 菊子)
46 伸びやかな肢体(深田 菊子)
47 のけぞる両の足(深田 菊子)
48 開股で見ないで(深田 菊子)
49 縄猿轡海老責め(三浦 純子)
50 令夫人緊縛横顔(三浦 純子)
51 引回された裸女(福井 桃子)
52 色気発散の脚線(福井 桃子)
53 さあどうするの(福井 桃子)
54 寝乱れたマダム(福井 桃子)
55 臀部晒し柱縛り(福井 桃子)
56 高手小手臂部晒(福井 桃子)
57 長髪的美女緊縛(福井 桃子)
58 縛られてお喋り(福井 桃子)
59 縄が痛いんだよ(福井 桃子)
60 高々と上る手首(福井 桃子)
61 ボリウムを括る(笠井奈保子)
62 逞ましき臀部責(笠井奈保子)
63 太股に喰込む縄(笠井奈保子)
64 飛出す乳房責め(笠井奈保子)
65 柔肌に喰込む縄(笠井奈保子)
66 豊満臀部鞭打ち(笠井奈保子)
67 首縄高手小手縛(笠井奈保子)
68 縄の束に埋れる(笠井奈保子)

69 開股強制を拒む(笠井奈保子)
70 喰い込む股間責(笠井奈保子)
71 美少女逆エビ責(前田真知子)
72 足吊りくの字指(前田真知子)
73 股間縛りで開脚(前田真知子)
74 交差した後手首(前田真知子)
75 強烈股間縄涕泣(三浦 純子)
76 バイブ責で悶絶(松本 たえ)
77 高々と後手縛り(松本 たえ)
78 強烈海老開股責(松本 たえ)
79 柱縛り正面晒し(松本 たえ)
80 後手両手逆吊り(松本 たえ)
81 責められた乱髪(大塚 啓子)
82 後手縛り足吊り(大塚 啓子)
83 全裸柱抱き縛り(大塚 啓子)
84 太ロープ首縄責(大塚 啓子)
85 麻縄亀甲綾縛り(荒尾 慶子)
86 喰込む縄股間縛(荒尾 慶子)
87 首縄縦縛り正面(荒尾 慶子)
88 強烈緊縛で絶頂(荒尾 慶子)
89 美体乳房強調縛(荒尾 慶子)
90 股間縛りの麗姿(荒尾 慶子)
91 海老責浣腸地獄(長井葉津子)
92 後手吊りの全裸晒(長井葉津子)
93 迫るイルリ嘴管(長井葉津子)
94 素人娘緊縛全裸(長井葉津子)
95 浣腸責めの恐怖(長井葉津子)
96 半減した浣腸液(長井葉津子)
97 稚き臀部を開く(長井葉津子)
98 麻縄縛りの正面(長井葉津子)
99 注ぎ込まれる液(長井葉津子)
100 洋裁生のM姿態(長井葉津子)

奇ク活躍若手人気五人娘緊縛写真集

K組百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇円
十組十枚 一五〇〇円
二十組二十枚 二八〇〇円
五十組五十枚 五〇〇〇円
百組百枚 八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

最近の奇ク誌上に於て口絵或は本文の写真や告白手記などで活躍している若くて美しいM女たちの印画紙に焼付けたフォトを女体緊縛コレクトマニアの方々の為に譲ります。この素晴らしく迫力に満ちた奇ク独特の華麗な蒐集品を、どうかファンの皆様のお手元で愛して下さいよう願います。

☆

1 正面から狙う眼(鈴木千鶴子)
2 引回し股間縛り(深田 菊子)
3 ポリウムを縛る(笠井奈保子)
4 M女なればこそ(高村 浩子)
5 柔肌にむごき縄(深田 菊子)
6 後手足首後吊り(高村 浩子)
7 縄で開股を強要(深田 菊子)
8 臀部と後手縛り(前田真知子)
9 排泄を耐える女(笠井奈保子)

10 椅子開股両足吊(鈴木千鶴子)
11 屋上のいたぶり(前田真知子)
12 臀部を晒す緊縛(笠井奈保子)
13 高々と後手縛り(鈴木千鶴子)
14 首縄に泣く屋上(前田真知子)
15 美女両脚柱縛り(深田 菊子)
16 豊満な尻部責め(深田 菊子)
17 惨美貌の羞らい(深田 菊子)
18 猪宙吊りの浩子(高村 浩子)
19 棒責めにあえぐ(鈴木千鶴子)
20 美へ与える汚辱(前田真知子)
21 縦縄に呻く女体(深田 菊子)
22 白き裸身の縄目(笠井奈保子)
23 両足吊流腸姿態(鈴木千鶴子)
24 闇での羞恥責め(深田 菊子)
25 正座しての懇願(前田真知子)
26 仕置と折檻の果(高村 浩子)
27 奴隷の誓い宣言(笠井奈保子)
28 菱縄縛りに喘ぐ(笠井奈保子)
29 強烈な股間縛り(鈴木千鶴子)
30 総てをさらして(前田真知子)
31 片足挙げ柱縛り(深田 菊子)
32 全身に喰込む縄(高村 浩子)
33 宙に浮いた苦痛(鈴木千鶴子)
34 もっと股を開け(笠井奈保子)
35 転がされた女体(笠井奈保子)
36 形よきお臍悦情(深田 菊子)

37 そんなのはイヤ(前田真知子)
38 喰込む股間縛り(高村 浩子)
39 菱縄正面髪掴み(鈴木千鶴子)
40 両足吊り逆エビ(高村 浩子)
41 縄束の中の折檻(深田 菊子)
42 乳房強調の猿轡(笠井奈保子)
43 責め抜かれた果(鈴木千鶴子)
44 全裸の緊縛正坐(笠井奈保子)
45 階段に呻く女体(深田 菊子)
46 後手縛りの模範(深田 菊子)
47 両足首逆さ緊縛(深田 菊子)
48 階段で逆立縛り(深田 菊子)
49 責めに反る拇指(前田真知子)
50 豊満な全裸縛り(笠井奈保子)
51 プロポーズ(鈴木千鶴子)
52 羞恥を晒す女体(深田 菊子)
53 海老責二つ折り(高村 浩子)
54 正面開股菱縄縛(深田 菊子)
55 白肌に喰入る縄(前田真知子)
56 尻立てアヌス責(深田 菊子)
57 竹と棒責め地獄(前田真知子)
58 豊隆乳房へ責め(高村 浩子)
59 海老棒責めの惨(鈴木千鶴子)
60 羞恥股裂き責め(前田真知子)
61 高々棒吊り両足(深田 菊子)
62 正面片足引上げ(前田真知子)
63 強烈麻縄の魔力(笠井奈保子)
64 ニツ折りの仕置(鈴木千鶴子)
65 猿ぐつわの表情(笠井奈保子)
66 逆片足エビ責め(前田真知子)
67 嚴重な後手縛り(笠井奈保子)
68 反り返った女体(鈴木千鶴子)

69 縛りに放心状態(笠井奈保子)
70 美を汚辱する時(前田真知子)
71 片足吊りの正面(深田 菊子)
72 乳房強調の縛り(深田 菊子)
73 片足吊りの序曲(笠井奈保子)
74 縄で攻める開股(深田 菊子)
75 縄痕むごし柔肌(前田真知子)
76 淫らな羞恥責め(鈴木千鶴子)
77 開股を攻める縄(高村 浩子)
78 放置された縛体(笠井奈保子)
79 憂愁の美女緊縛(深田 菊子)
80 足挙げ開股責め(深田 菊子)
81 猿轡苦痛の表情(笠井奈保子)
82 悦虐に泣く乳房(高村 浩子)
83 責められた悦楽(鈴木千鶴子)
84 屋上の引き回し(前田真知子)
85 写真マニアの顔(笠井奈保子)
86 臀部突立足縛り(深田 菊子)
87 氣懶るき責の宴(鈴木千鶴子)
88 さあ立たないか(前田真知子)
89 棒縛り開脚責め(深田 菊子)
90 人身御供の裸身(笠井奈保子)
91 悶えに悶えた末(鈴木千鶴子)
92 痛いから許して(前田真知子)
93 乳房責と股間縛(高村 浩子)
94 諦観の晒しもの(笠井奈保子)
95 階段で開く両脚(深田 菊子)
96 強制された開股(笠井奈保子)
97 顔を向けないか(前田真知子)
98 大の字開股責め(深田 菊子)
99 美しき縛り表情(深田 菊子)
100 豊かさを縛る縄(笠井奈保子)

▲最新撮影V異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一枚一組 (送料共)

四組四枚	五〇〇円
十組十枚	一〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

(郵便番号545-91)

いずれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆

10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
痛苦に耐える女(三浦純子)	喘ぐ縄猿轡痛め(三浦純子)	正面エビ強烈責(三浦純子)	海老縛り閨責め(三浦純子)	エビ責め縄猿轡(三浦純子)	麻縄強烈柱縛り(三浦純子)	二つ折り臀挙げ(三浦純子)	尻挙げ開脚責め(三浦純子)	開股パイプ責め(三浦純子)	台上に晒す全裸(三浦純子)

37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
全裸緊縛の愉悦(渡部好美)	閨中の股間縛り(渡部好美)	悦虐の開股縛り(渡部好美)	蠟涙責めに哭く(渡部好美)	開股責めの序曲(渡部好美)	責に諦観の美貌(前田真知子)	逆反り弓吊り責(前田真知子)	光に映える白肌(前田真知子)	裸女を押込める(前田真知子)	柔肌に喰い込む(前田真知子)	首縄菱亀甲縛り(前田真知子)	純肌を柱に晒す(前田真知子)	鏡に映るエビ責(前田真知子)	全裸の美女に縄(前田真知子)	さらけ出した女(前田真知子)	純肌を柱に晒す(前田真知子)	緊縛に悶える足(座間明子)	開股縛りに諦観(座間明子)	後手縛りを誇る(座間明子)	美しき全裸縛(座間明子)	股間縛りに喘ぐ(座間明子)	高らかに笑う顔(座間明子)	沖縄美人の表情(座間明子)	豊満を縛る魔手(座間明子)	開股正面逆立責(三浦純子)	二折りの引回し(三浦純子)	驚づかみの黒髪(三浦純子)

68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38
羞恥に悶える女(叢子・好美)	連縛双丘の珍景(好美・叢子)	椅子開股の二人(好美・叢子)	高手小手を開陳(好美・叢子)	全裸の二女陳列(好美・叢子)	責め疲れた二女(好美・叢子)	柱に二女の連縛(好美・叢子)	女性自身を晒す(谷山久美子)	哀憫非情な麻縄(谷山久美子)	条痕を尻に残す(谷山久美子)	ムチ打ちに泣く(谷山久美子)	徹しき後手縛り(谷山久美子)	情容赦ない麻縄(谷山久美子)	大の字開股縛り(谷山久美子)	強縛愉悅の極み(谷山久美子)	椅子開股で晒す(谷山久美子)	苦悶の末の頂点(谷山久美子)	責めるの許して(谷山久美子)	齒で咬んだ猿轡(谷山久美子)	緊縛最高の悦楽(谷山久美子)	悦虐悶えの果て(谷山久美子)	極限の苦痛襲う(谷山久美子)	苦痛に反る足指(谷山久美子)	アニマルの表情(谷山久美子)	赤裸の尻を暴く(谷山久美子)	強烈二折り責め(谷山久美子)	海老責に喘ぐ顔(谷山久美子)	股間縛りの正面(三浦純子)	愛妻飼育の過程(三浦純子)	ムチ打ちの洗礼(三浦純子)	爛熟した女体責(三浦純子)

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69
縛った異国の女(シーラケニ)	暈の上に転がる(シーラケニ)	卓上の一輪の花(シーラケニ)	投げだした全裸(シーラケニ)	諦観白人の表情(シーラケニ)	高小手に縛る(シーラケニ)	金髪碧眼の女性(シーラケニ)	白人の肌を縛る(シーラケニ)	碧眼に驚きの目(シーラケニ)	日本式胡坐縛り(シーラケニ)	両手挙げ美肌晒(シーラケニ)	後手縛りで開脚(シーラケニ)	金髪は縄に動く(シーラケニ)	白肌と汚れた縄(前田真知子)	美は麻縄を超越(前田真知子)	無垢の肌に麻縄(前田真知子)	Mを恋する表情(前田真知子)	灯籠の前で縛る(前田真知子)	一糸まとわぬ女(前田真知子)	伸びやかな肢体(前田真知子)	麗しき首縄旅情(前田真知子)	三本の棒で拘束(川路むら子)	棒縛り羞恥責め(川路むら子)	足挙げ正面棒責(川路むら子)	点火した蠟燭責(渡部・川路)	一体にした緊縛(渡部・川路)	捕われの全裸像(渡部・川路)	尻も何も丸出し(好美・叢子)	股間縛りの併立(叢子・好美)	正面相對の連縛(叢子・好美)	羞らう美女二人(叢子・好美)	美しき床の飾り(叢子・好美)

浣腸責め地獄の妊産婦 大手札四枚一組 略号△ほな▽ 増田みゆき	浣腸責めの甘い恐怖 大手札三枚一組 略号△とか▽ 中河 恵子	浣腸液注入直後の状況 大手札三枚一組 略号△とま▽ 中河 恵子	強制浣腸の各美姿態 大手札三枚一組 略号△とみ▽ 中河 恵子	浣腸責めの美態開陳 大手札三枚一組 略号△とめ▽ 中河 恵子	浣腸を待つポーズ 大手札三枚一組 略号△とも▽ 中河 恵子	エネマと縛りの恐怖 大手札三枚一組 略号△よて▽ 長井葉津子	エネマ責めの恐怖 大手札三枚一組 略号△よる▽ 長井葉津子	浣腸器を弄び愛撫する女 大手札三枚一組 略号△よる▽ 長井葉津子	イルリガートルの浣腸責め 大手札三枚一組 略号△よた▽ 長井葉津子	浣腸にむせび泣く女 大手札四枚一組 略号△つゆ▽ 大島 照代	身動き出来ぬ浣腸地獄 大手札四枚一組 略号△つえ▽ 大島 照代
浣腸とオシメ装着 大手札四枚一組 略号△ひそ▽ 大塚 啓子	強制浣腸責めの序曲 大手札三枚一組 略号△よか▽ 長井葉津子	襲いくる浣腸器嘴管の先 大手札三枚一組 略号△より▽ 長井葉津子	鼻孔の奥を探る魔手 大手札三枚一組 略号△はむ▽ 中河 恵子	開孔器にてひらく鼻孔 大手札三枚一組 略号△はら▽ 中河 恵子	なぶられる拘束裸身の鼻 大手札三枚一組 略号△はれ▽ 中河 恵子	仰臥した緊縛女体の鼻なぶり 大手札三枚一組 略号△はに▽ 中河 恵子	美女の鼻をもてあそぶ 大手札三枚一組 略号△ちる▽ 左近麻里子	美女の鼻孔を觀賞する 大手札三枚一組 略号△ちれ▽ 左近麻里子	開孔器で検査する鼻孔 大手札三枚一組 略号△ちき▽ 左近麻里子	鼻孔に煙草挿し込み責め 大手札三枚一組 略号△ぬと▽ 美木乃々子	可愛い鼻責めのアップ 大手札五枚一組 略号△ぬは▽ 美木乃々子
強烈縛りで顔面翻弄 大手札八枚一組 略号△ぬほ▽ 美木乃々子	可憐乙女の鼻をいたぶる 大手札四枚一組 略号△るえ▽ 一宮百合子	鼻責めと鼻孔のアップ 大手札三枚一組 略号△ねけ▽ 中河 恵子	鼻責めの陶酔境 大手札三枚一組 略号△なは▽ 大塚 啓子	淫虐鼻なぶりの形相 大手札三枚一組 略号△ない▽ 大塚 啓子	鼻の穴を責める 大手札三枚一組 略号△なく▽ 大塚 啓子	夫婦連縛にて鼻責め 大手札十枚一組 略号△らか▽ 増田みゆき	鼻責めに悶える女 大手札七枚一組 略号△むる▽ 木村 洋子	顔を凌辱される女 大手札四枚一組 略号△むよ▽ 木村 洋子	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 略号△うい▽ 大塚 啓子	鼻責めによる悦楽 大手札二枚一組 略号△きな▽ 東浦・大塚	美しき鼻をいたぶる 大手札三枚一組 略号△ゆは▽ 遠藤百合子
乳房いじめの責め 大手札二枚一組 略号△とお▽ 大塚 啓子	豊かな乳房を責める 大手札三枚一組 略号△とき▽ 東浦ひかる	逆エビ吊り責め 大手札六枚一組 略号△りつ1▽ 梨花悠紀子	逆胴吊り責め 大手札六枚一組 略号△りつ2▽ 梨花悠紀子	大の字逆さ吊り 大手札二枚一組 略号△むの▽ 増田みゆき	豊満乳房しばり責め 大手札三枚一組 略号△うは▽ 長野 良子	吊り打ち責め 大手札三枚一組 略号△やり▽ 関谷富佐子	腰元の吊り責め 大手札二枚一組 略号△こり▽ 村井知可子	乳房強調膨隆責め 大手札三枚一組 略号△こわ▽ 佐々木真弓	エネマシリシ挿入責め 大手札三枚一組 略号△えね▽ 大塚 啓子	ワシづかみ責めの乳房 大手札三枚一組 略号△えう▽ 大塚・東浦	強烈乳房責め五態 大手札五枚一組 略号△てら▽ 山原 清子

若妻初妊娠の哀歎 大手札三枚一組 略号△さい 五〇〇円	妊娠腹の緊縛ヌード側面 大手札三枚一組 略号△さみ 五〇〇円	若妻の緊縛妊孕美 大手札三枚一組 略号△さま 五〇〇円	膨満腹妊婦の乳房責め 大手札三枚一組 略号△さむ 五〇〇円	臨月腹若妻全裸晒人形 大手札三枚一組 略号△さむ 五〇〇円	躍動する妊婦の裸像 大手札三枚一組 略号△さち 五〇〇円	金原奈加子 略号△さほ 五〇〇円	妊娠という異常美 大手札三枚一組 略号△さほ 五〇〇円	金原奈加子 略号△さへ 五〇〇円	見てほしい若妻の臨月腹 大手札三枚一組 略号△さへ 五〇〇円	金原奈加子 略号△さよ 五〇〇円	若妻妊婦の全裸全身肢体 大手札三枚一組 略号△さよ 五〇〇円	大手札三枚一組 略号△ささ 五〇〇円	金原奈加子 略号△ささ 五〇〇円	八カ月の妊孕腹鑑賞 大手札四枚一組 略号△ささ 五〇〇円	増田みゆき 略号△ほち 六〇〇円	双胎妊婦の乳房と腹部 大手札四枚一組 略号△ほち 六〇〇円	増田みゆき 略号△ほる 六〇〇円	八カ月の双胎腹菱縄縛り 大手札四枚一組 略号△ほる 六〇〇円	増田みゆき 略号△ほわ 六〇〇円					
岩田帯をする双胎妊婦 大手札四枚一組 略号△ほた 六〇〇円	増田みゆき 略号△ほた 六〇〇円	双胎懐妊の生態を探る 大手札四枚一組 略号△ほれ 六〇〇円	増田みゆき 略号△ほれ 六〇〇円	全裸の双胎妊婦を見せる 大手札四枚一組 略号△ほれ 六〇〇円	増田みゆき 略号△ほそ 六〇〇円	便々たる双胎初産妊娠 大手札四枚一組 略号△ほそ 六〇〇円	増田みゆき 略号△ほま 六〇〇円	臨月の妊婦ヌード 大手札三枚一組 略号△ほま 六〇〇円	田中美佐子 略号△にわ 五〇〇円	臨月妊婦の裸身立腹 大手札二枚一組 略号△にわ 五〇〇円	田中美佐子 略号△にわ 五〇〇円	田中美佐子 略号△にわ 五〇〇円	九カ月の妊娠腹 大手札三枚一組 略号△にわ 五〇〇円	安原さゆり 略号△にわ 五〇〇円	首枷手枷で責められる妊婦 大手札三枚一組 略号△にわ 五〇〇円	増田みゆき 略号△にわ 五〇〇円	双胎妊婦腹強調縛り 大手札四枚一組 略号△にわ 五〇〇円	増田みゆき 略号△にわ 五〇〇円	緊縛と猿轡双胎妊婦虐待 大手札五枚一組 略号△にわ 五〇〇円	増田みゆき 略号△にわ 五〇〇円	後手縛りの双胎妊産婦 大手札四枚一組 略号△にわ 五〇〇円	増田みゆき 略号△にわ 五〇〇円	動物的な双胎妊婦の生態 大手札四枚一組 略号△にわ 五〇〇円	増田みゆき 略号△にわ 五〇〇円
白肌に喰い込む縄目 大手札三枚一組 略号△とわ 五〇〇円	松山真樹子 略号△とわ 五〇〇円	一糸まとわぬ白い柔肌 大手札三枚一組 略号△とわ 五〇〇円	松山真樹子 略号△とわ 五〇〇円	開陳した華麗な肢体 大手札三枚一組 略号△とわ 五〇〇円	松山真樹子 略号△とわ 五〇〇円	縄目に喘ぐ麗人諦観の相 大手札三枚一組 略号△とわ 五〇〇円	松山真樹子 略号△とわ 五〇〇円	縛られた美女二人 大手札三枚一組 略号△とわ 五〇〇円	小池・松山 略号△とわ 五〇〇円	全裸の美女二人の連縛 大手札三枚一組 略号△とわ 五〇〇円	小池・松山 略号△とわ 五〇〇円	SとMの美女の甘い一瞬 大手札三枚一組 略号△とわ 五〇〇円	小池・松山 略号△とわ 五〇〇円	縄に通うSM愛情の焰 大手札三枚一組 略号△とわ 五〇〇円	小池・松山 略号△とわ 五〇〇円	全裸の豊満な女体にムチ 大手札四枚一組 略号△とわ 五〇〇円	関谷富佐子 略号△とわ 五〇〇円	両手吊りで悶える裸身 大手札三枚一組 略号△とわ 五〇〇円	関谷富佐子 略号△とわ 五〇〇円	女奴隷を飼育するシーン 大手札五枚一組 略号△とわ 五〇〇円	大塚・東浦 略号△とわ 五〇〇円	凌辱されるマゾ女の恥態 大手札五枚一組 略号△とわ 五〇〇円	大塚・東浦 略号△とわ 五〇〇円	
完全逆さ吊り責め 大手札三枚一組 略号△さつり 五〇〇円	木村 洋子 略号△さつり 五〇〇円	少女全裸アグラ縛り 大手札三枚一組 略号△てへ 五〇〇円	長野 良子 略号△てへ 五〇〇円	少女全裸屈伸縛り 大手札三枚一組 略号△てへ 五〇〇円	長野 良子 略号△てへ 五〇〇円	鬼面と接吻する少女 大手札二枚一組 略号△てへ 五〇〇円	長野 良子 略号△てへ 五〇〇円	緊縛女体撮影風景 大手札四枚一組 略号△てへ 五〇〇円	大塚 啓子 略号△てへ 五〇〇円	柱縛り宙吊り晒し 大手札二枚一組 略号△てへ 五〇〇円	大塚 啓子 略号△てへ 五〇〇円	柱縛り全裸臀部晒し 大手札五枚一組 略号△てへ 五〇〇円	大塚 啓子 略号△てへ 五〇〇円	柱正面縛り折檻 大手札三枚一組 略号△てへ 五〇〇円	大塚 啓子 略号△てへ 五〇〇円	豊満な双乳の強調縛り 大手札三枚一組 略号△てへ 五〇〇円	長野 良子 略号△てへ 五〇〇円	八の字開股縛り羞恥責 大手札四枚一組 略号△てへ 五〇〇円	中河 恵子 略号△てへ 五〇〇円	菱縄縛りの全裸を晒す 大手札四枚一組 略号△てへ 五〇〇円	中河 恵子 略号△てへ 五〇〇円	金縛り二重縛り縛りの苦悶 大手札四枚一組 略号△てへ 五〇〇円	中河 恵子 略号△てへ 五〇〇円	

木馬責めにあう三態

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚 啓子 略号八もく

乳房責めの苦悶表情

大手札二枚一組 略号四〇〇円
関谷富佐子 略号八もろ

強烈なエビ 縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
関谷富佐子 略号八もい

乳枷と貞操帯着用

大手札三枚一組 略号五〇〇円
山原 清子 略号八もや

檻に入れられた捕われ女

大手札二枚一組 略号四〇〇円
山原 清子 略号八もの

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 略号一二〇〇円
山原 清子 略号八ひろ

入墨女体の全裸姿態

大手札十枚一組 略号一五〇〇円
山原 清子 略号八ひへ

黒フンドシの刺青女体

大手札十枚一組 略号一五〇〇円
山原 清子 略号八ひね

刺青姐御晒の腹巻脇差姿

大手札十枚一組 略号一五〇〇円
山原 清子 略号八ひほ

刺青姐御晒の腹巻短刀姿

大手札十枚一組 略号一五〇〇円
山原 清子 略号八ひり

両手吊りにあえぐ女

大手札三枚一組 略号五〇〇円
東浦ひかる 略号八ひお

ポリウムをくびる妖蛇の縄

大手札三枚一組 略号五〇〇円
東浦ひかる 略号八ひか

後手垂直強烈しぱり

大手札三枚一組 略号五〇〇円
東浦ひかる 略号八ひけ

一糸まとわぬ柔肌緊縛

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚 啓子 略号八ひく

豊胸をくびるむこき縄目

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚 啓子 略号八ひき

開股羞恥責めの恥態

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しう

尻立て鞭打ちの艶姿

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しつ

あぐら縛りの羞恥責め

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しよ

片足引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しち

髪吊り責め強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八した

柔肌に炸裂するムゴい笞

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八して

貞操帯着用にて鞭打ち

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しや

ムチの痛打にもかく女体

大手札四枚一組 略号六〇〇円
安井喜久子 略号八しゆ

前開きゴム製オシメカバー

大手札十二枚一組 略号一八〇〇円
大塚 啓子 略号八しま

前開き布製防水オシメカバー

大手札十二枚一組 略号一八〇〇円
大塚 啓子 略号八しな

妊娠したお腹を見て

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河 恵子 略号八ゆわ

縛られた妊婦横臥姿態

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河 恵子 略号八ゆよ

被虐に燃える若き妊婦

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河 恵子 略号八ゆぬ

縛られて尚見せたい妊娠腹

大手札四枚一組 略号六〇〇円
中河 恵子 略号八ゆる

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚・東浦 略号八きす

奴隷の捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きむ

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きま

竹柱立縛り正面晒しもの

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きみ

柱宙縛り苦悶表情

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きめ

猿ぐつわ股間縛り引回し

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きも

マソ女のMの生態

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きに

奴隷女のマソの生態

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きね

私はあなたの奴隷です

大手札三枚一組 略号五〇〇円
木村 洋子 略号八きふ

美貌の裸身に鮮やかな縄目

大手札三枚一組 略号五〇〇円
絹川 文代 略号八きん

激痛！ 逆エビ責めの惨美

大手札四枚一組 略号六〇〇円
大塚 啓子 略号八きえ

女奴隷を弄ぶ三人プレイ

大手札八枚一組 略号一二〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きあ

二女をいじめめる啓子

大手札十枚一組 略号一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きい

股裂き責めと逆さ吊り

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きう

口中の詰物で汚辱する

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きお

猿ぐつわのいたぶり

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きさ

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 略号五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号八きし

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号六〇〇円
大塚・東浦 略号八きせ

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号八〇〇円
大塚・東浦 略号八きそ

パイプ責めに呻めく女	体内に奔流する浣腸溶液	八カ月の妊婦裸身開陳	後手高手小手縛り三態
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きわ	深田 菊子 略号△みや	福井 桃子 略号△えせ	鈴木千鶴子 略号△ぬみ
両足挙げ柱宙縛り	浣腸ブレイを楽しむ美女	柱縛りの九カ月腹妊婦	卓上の緊縛悦虐姿態
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きろ	深田 菊子 略号△みぬ	福井 桃子 略号△さて	鈴木千鶴子 略号△ぬろ
強烈黒縄縛り悦虐地獄	オシメから生ゴムカバーへ	引き回された妊婦腹	全裸浴室での股間縛り
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札12枚一組 二〇〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きる	深田 菊子 略号△みめ	福井 桃子 略号△さり	鈴木千鶴子 略号△ぬひ
羞恥責めに陶酔する女	おムツに排便する乙女	膨隆妊婦腹の股間縛り	悶える踊子の欲情処理
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札12枚一組 二〇〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きは	深田 菊子 略号△みし	福井 桃子 略号△され	鈴木千鶴子 略号△ぬま
猿轡と縄に涕泣する瞬間	生ゴム製のオムツカバー着用	鏡に映る太鼓腹縛り	美しき全裸の縛り
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札10枚一組 一八〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円
松本 たえ 略号△きへ	深田 菊子 略号△みせ	福井 桃子 略号△さえ	鈴木千鶴子 略号△ぬふ
柱宙縛りと逆さ縛り責め	メロン腹白縄縛り	蛙腹誇張の緊縛美	柱縛りと脚挙げ縛り
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	カラ一三枚一組 一〇〇〇円
松本 たえ 略号△きた	福井 桃子 略号△えす	福井 桃子 略号△さう	前田真知子 略号△すき
足を吊られた悦虐に泣く	正面柱縛りの蛙腹	足挙げ縛り蛙腹妊婦	麻縄高手小手首縄縛り
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	カラ一三枚一組 一〇〇〇円
松本 たえ 略号△きは	福井 桃子 略号△えき	福井 桃子 略号△さた	前田真知子 略号△すめ
浣腸溶液を圧入される	開脚縛り妊娠腹	卓の脚に縛った蛙腹妊婦	荒縄強烈エビ縛り
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	カラ一三枚一組 一〇〇〇円
深田 菊子 略号△みは	福井 桃子 略号△えけ	福井 桃子 略号△さつ	前田真知子 略号△すけ
全裸で受ける三種の浣腸	蛙腹を晒す開股責め	九カ月妊娠腹の緊縛美	荒縄悦虐羞恥責め
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	カラ一三枚一組 一〇〇〇円
深田 菊子 略号△みふ	福井 桃子 略号△えこ	福井 桃子 略号△さゆ	前田真知子 略号△すら
イルリの嘴管挿入浣腸	太鼓腹強調片足吊り	豆絞りの猿ぐつわ哀情	悶える強烈海老責め
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	カラ一三枚一組 一〇〇〇円
深田 菊子 略号△みほ	福井 桃子 略号△えさ	前田真知子 略号△ぬも	前田真知子 略号△すへ
突き刺さる浣腸器の恐怖	妊孕緊縛美の極致	逆エビ地獄の美女	柔肌をくびる厳しき縄目
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	カラ一三枚一組 一〇〇〇円
深田 菊子 略号△みち	福井 桃子 略号△えあ	前田真知子 略号△ぬや	前田真知子 略号△すれ
自ら施す浣腸の悦楽	美しき妊孕腹緊縛	麻縄亀甲菱縄縛り	緊縛の全裸女体をいびる
大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	大手札三枚一組 五〇〇円	カラ一三枚一組 一〇〇〇円
深田 菊子 略号△みそ	福井 桃子 略号△えか	前田真知子 略号△ぬむ	前田真知子 略号△すろ

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

遅しき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円

女に縛られて弄ばれる

大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円

美女のおいしい足を戴く

大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円

〔女相撲と禪関連資料〕

御要望により再分譲開始します

裸女レスリング熱戦譜

大手札40枚一組 五〇〇〇円
山原・大塚 略号△れす▽

好取組女相撲三番勝負

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うむ▽

迫力実戦好取組女相撲

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うめ▽

取組む女相撲三人娘

大手札七枚一組 一〇〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うゆ▽

マワシを締める三人娘

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦・大塚・木村 略号△うや▽

二女真迫格闘場面

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚・玉田 略号△のか▽

女子全裸斗争場面

大手札三枚一組 五〇〇円
玉田・大塚 略号△のわ▽

裸女相搏つ取り組み

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚・啓子 略号△えく▽

禪裸女の寝業乱斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
木村・大塚 略号△めき▽

禪裸女の真剣な争斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
大塚・木村 略号△めん▽

女相撲連続写真(四つ相撲)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めれ▽

女相撲連続写真(投げ業)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めよ▽

女相撲連続写真(投げ合い)

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めわ▽

女斗美立業大立回り

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めた▽

女斗美寝わざ妖艶攻合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めな▽

女斗美妖蛇の固め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めそ▽

女と女の争い髪のかみ合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めか▽

女同士の争い押さえ込み

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めね▽

女子レスリング首絞め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めつ▽

女子レスリング押え込み

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めお▽

白晒六尺禪姿(背面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しろ▽

白晒六尺禪姿(正面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しほ▽

六尺禪を着用し終るまで

大手札20枚一組 三〇〇〇円
山原・清子 略号△ひは▽

砂浜での真剣裸女格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すえ▽

草原で止とめをさす格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すう▽

松林の中での裸女死斗

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・東浦 略号△すき▽

琵琶湖畔での女相撲

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すよ▽

女相撲真迫連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すな▽

室内女相撲熱戦模様

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すも▽

相撲禪着用連続フォト

大手札11枚一組 二〇〇〇円
大塚・啓子 略号△すま▽

相撲禪を締ゆ込む

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△すい▽

女相撲激しい投げ業

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・木村 略号△すね▽

女相撲組打ちの美体

大手札八枚一組 一五〇〇円
木村・大塚 略号△すか▽

女斗立術の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すち▽

寝業の女レスリング

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すほ▽

女斗の連続場面展開

大手札九枚一組 一八〇〇円
木村・大塚 略号△すく▽

女斗立術の攻撃場面展開

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すた▽

室内女相撲好取組み

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すみ▽

湖畔女相撲連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すふ▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すは▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
木村・大塚 略号△すむ▽

湖畔女相撲迫力場面展開

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すや▽

湖畔女相撲熱戦場面点景

大手札20枚一組 四〇〇〇円
東浦・大塚 略号△すゆ▽

実戦女相撲業の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すに▽

実戦さながら女相撲図絵

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すぬ▽

雪崎京人指導女相撲実戦

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すの▽

迫力抜群実戦女相撲

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すつ▽



初めてお便り致します。僕はまだ22才になったばかりの若造でございます。47年12月号を初めて手にし、感動のうちに1月号を買い求め、考えぬいた末、どうしても『読者通信』にのせて頂きたくてペンをとりました。僕は現在、大学の4年生です。47年12月号のこの雑誌を初めて手にする以前は、過去、種々の自分の性行動が異常に思え、自己嫌悪におちいったことが、しばしばでした。しかし、この雑誌を見、勇気ができました。僕は、まだよくわかりませんが、

軽いS的要素があるようです。それは、大学で現在、キックボクシングと柔術をやっている相手を思いっきりぶちのめしKOすることによって、言葉ではないあらわせない、ある種の快感があることからきているようです。又、反面、空手の練習で巻ワラなどをついている時、手からものすごく出血し、後輩がおどろいてとめようとしたがその時、何とも言えぬ快感が電流の如く体を走り、やめることができなかったのも覚えております。これなどM的要素といえるのでしょうか。ですから、まだ僕はSなのかMなのかよくわからないのです。僕も、このような雑誌に投稿する以上、勇気がいりました。もしこの文章に目が止まり「自分にもSMの傾向はあるのだが、本当のSMの人は、まだこわくて、いや」などと思って、手紙をだすのを考えておられる女性の方がおられましたら、安心して僕に手紙を下さい。僕もまだ全然わかりません。二人で文通などから始め、楽しく交際し、体の中に眠っているS性・M性について研究しませんか。

(東京・加藤美雄)

執筆者にとりまして読者諸賢の高評がないということは、芸妓がお茶を挽くのにも似た心境、やるせないものです。十二月号は、いささか自負しておりましたところ新年号で、まず第一番にひらいてみました読者通信欄がなく、奇クサロンにもなく、しかたなく「自慰」的心境で自作に目を通しまして冷汗三斗。まことに申し訳なくどうしてこんなことになったのかカリギュラの如く、ラスプーチンの如く、自己を鞭うつこと三千回。ちなみに新年号一五六頁をおひらき下さい。上段、初行で小紫のお景に着せました長襦袢は「友禪縮緬」——しかるに一六〇頁の下段、おわりより二行目には「鳩羽紫の長襦袢」とあります。友禪縮緬に「鳩羽紫」は、完全に、私のミスであります。幸いにして、いまだどなたからも御指摘をいただいておりませぬが、ここに謹んでお詫び申し上げます。さて、そこで、書庫に秘蔵しております旧号を開きまして、過去数々お寄せ頂きました御激励の言葉をあらためて読みかえし(就中、連載開始直後の71年10月号で最初に御高見を賜った福井市の久保康次様の玉

章など)決意をあらたにしております。執筆者というものは「読者諸賢」あつてのもの、即ちありとあらゆる小説は、すべて「あなたのもの」であり「あなたのため」の「き夜」に捧げ奉るものであります。私の好きなオマーカイヤムの詩に、——この世は、夢よ、幻よ、錯覚よ! というのがございます。この境地にはまだ達してはおりませぬが、人生があまりにも短いものだということは、いくらかわかり始めて参りました。その「うたかたの夢の世」を「憂世」ではなく「浮世」たらしめるために、今後とも私は、——より深くより高く、より広く! 書かせて頂きたいと存じております。群小のSM誌のなかで「奇ク」こそは私たちにとって唯一無二の存在であり、日常生活に不可欠のものであり、一面では学術的な「古典」として日本歴史にその名を燦然としてとどめる貴重な書籍であります。その「奇ク」に執筆させて頂いている光栄を噛みしめながら、私は書きます。読者諸賢よ、ご一緒に、秘めやかな、見果てぬ夢を追いつづけようではありませんか——いついつまでも。

(風流極道軒)

○ 一月号の女装のS様へ。小生自分のの中にMの血が流れているのを感じています。是非、貴君の手で上手に引き出していただきたいと存じます。一時、女装にも興味がありました。今は薄れてしまったようです。23才です。

(京都市・豊島M男)

○ 高村浩子様、いかがお過ごしですか。当方七月号の「お便りにお答えして」で貴女に書いてもらった者です。時々貴女宛にお誘いの文を書いておったのですが……。そして何月号だか忘れましたが、貴女にプレイメイトが出来たと書いてあるのを見つけた時は、非常にガッカリしたものでした。やはり貴女も、ぼくの手のとどかない人だったのかと、一時はあきらめ

〓 御送金についてのお願い〓
現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替、定額小為替、普通小為替等の方法もあり、普通小為替で利用下さい。便宜上「切手代用」にも結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願い致します。

ようと思いましたが、どうしても貴女の事が忘れられず、又、こうして誘いの文を書いておる次第です。以前は、よくM女通信を書いておられ、楽しく拝見しておったのですが、妹さんが、こちらに連れて来てからは、文も思うように書けないのでしようね。でも時々、何か書いて下さい。ところで、一度、ぼくの相手してもらえないでしようか。以前から貴女とプレイが出来たらと思ひ、貴女の大好きな羞恥責め、開股縛り、股間縛り、そして、流腸、その他、バイブ、くすぐり責め、剃毛などと、色々豊富に考えてあり、又、貴女が前から言っていた、責めの旅や二、三日、どこかに、とじこめられ、いろいろな変わった責めや扱い方をされ、女奴隷みたいに扱われる。と言うようなことも、貴女さえよければ、いつでも現実のものとしてあげますよ。最近、貴女の望んでおられる、芝居がかった責めも楽しいでしようね。いつまでも、貴女の事を忘れられず、バカなと思われても、しかたのない男です。では、貴女の気持が、この文を読まれ、ちょっとでも傾いたなら、いつでも返事下さい。いつまでも待っておりますから。

(奈良秀夫)

○ 菅原妙子様。奇ク十二月号の読者通信欄のあなたの文章を読み、この手紙を差しあげる次第です。私は以前からSM(というよりは女性の緊縛美)に興味をもつ、二十四才の男性です。だから、あまり変わったプレイは好みません。今までは空想や写真を見て楽しむだけで実際に行なった事はありません。私の考える美というものを自分の手で作りあげたいと思ひ、あなたなら私の協力者になっていただけると信じます。一度、お便り下さい。文通の上、あなたが納得なされば一度、縛らせていただけませんか。(大阪・早乙女明)

○

菅原妙子様。K・C誌十二月号で、お便り拝見しました。貴女のお呼びかけを、文面より推察しますと、純真なお方と思われま。小生、M女性とプレイを志願している者ですが、生来の女性コンプレックスのため、未だ実現致しておりません。初心な貴女と、親子程、年の違う男性で、よければプレイを試みませんか。小生、社会的職業にたずさわる関係上、限界は承知している心算です。貴女

の純潔は保証致します。

(京都市・S・呉竹)

○ 東京の山下悠子さん、卒論に奴隷制度を文学の方から、アプローチされるとか。大変、興味を持ちました。貴女の通信を読ませて頂きました。ぼくも学生時代、バルバドス島の反乱の話を読んでショックを受け、文学における被隷属者の意識の問題をレポートにした事がありました。しかし、貴女のように自ら奴隷体験をしようとは思ひつきませんでした。奴隷制度については今まで、多くの人達が書いてたり語ったりしてきましたが、その多くが、実は近代の基盤に立った上で語っているため、自由の尊厳やヒューマニズムだけでは捉えられない本質を見落としていたように思います。貴女のような方の出現は実は大変、待たれていたのではないかと思います。我々は安易に、SとかMとかという言葉を使っておりますが、責められた人という人間を、ただマゾヒストと呼ぶ事は分類でこそあれ、何の解明もなく、その存在自体が、人間性の不可解さを語っているのです。悠子さん、どうか立派な論文をしあげて、出来たらその梗概

でも、奇くに発表なさってください。期待している読者は、ぼくだけではないと思います。

(東京都・室井亜砂路)

◎最新版優秀分譲品一覧表◎

(略号明記の上、前金にて大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社へ)

豊満な臀部の晒し責め

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△るる▽

猿轡に悶える全裸の肢体

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△るる▽

エビ縛りのグラマー娘

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△るる▽

羞恥に泣く魅力の女体を縛る

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△るる▽

緊縛羞恥の表情各種

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△るる▽

柱縛りの悦虐肢体開陳

大手札三枚一組 五〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

羞恥責めの極致悶悦表情

大手札三枚一組 五〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

強烈責めに泣くマゾ女

大手札三枚一組 五〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

エビ縛りの開股責め

大手札三枚一組 五〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

菅原妙子さん。私は二十四歳。

残念ながらプレイは未経験の男の子です。以前からSMについて関心を持っていたのですが、SMのパートナーを捜すことは、だれそれ

片足吊りに悶える全裸女体

大手札二枚一組 四〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

両足吊りの宙縛り責め

大手札二枚一組 四〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

開股責めに痺れる女体

大手札三枚一組 五〇〇円

松本 たえ 略号△るる▽

縄に依る悶悦姿態の表情

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬゆ▽

縛りを耐える恍惚表情

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬき▽

若い女の肢体美を縛る

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬさ▽

羞恥縛りの全裸種々相

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬあ▽

女体神秘の悦虐を挟る

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬな▽

女体の若さを縄でくびる

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬた▽

緊縛の姿態に類染める女

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬて▽

にも言えないので難かしく、空想

として楽しんで来ました。しかし空想だけでは、つまらなく、何とか、よいパートナーを見つけ出したいと考えています。妙子さんの

乙女の女体秘奥を曝く

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬら▽

開股縛り羞恥の決定版

大手札三枚一組 五〇〇円

笠井奈保子 略号△ぬつ▽

出産直前の臨月緊縛美

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬせ▽

臨月腹の苛酷な開股縛り

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬく▽

堂々たる臨月蛙腹縛り

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬよ▽

両手吊り臨月腹の妊婦

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬり▽

逞ましき臨月腹と臀部

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬし▽

後手縛りの臨月太鼓腹

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬぬ▽

全裸出産直前の臨月腹展示

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬい▽

臨月腹の奴隷犬を調教する

大手札三枚一組 五〇〇円

福井 桃子 略号△ぬの▽

呼びかけを読んで名乗りを上げなくてはいられなくなりました。身長一六八cm、体重六〇kgの軽度のSで、羞恥責めが好きです。ぜひ、ご返事を下さい。

(京都市・南文雄)

私は貴誌を愛読致しておりますが、十月号の読者通信で寺田陽子様の通信文を読ませて戴きましたから、寺田様とプレイがしたくて厚顔しさもかえり見ず寺田様にお手紙を書きましたので、色々とお都合もありと存じますが、ぜひ御返事御願ひ申し上げます。もしプレイが出来ましたならば写真、告白文など書かせて戴きたいと思っております。(発表して戴けるかどうかは別にして)誠に厚顔しい御願ひですが、お聞きとどけ戴きます様御願ひ申し上げます。

(宮城県・豊田収)

都内の某私大に在籍中という山下悠子様。アメリカにおける奴隷制度を卒論のテーマに考えているということは変わっていて、おもしろいものであると思います。貴女は短時間のSMプレイではなく長時間に亘るプレイを望んでいるようですが、本格的なプレイを行

なおうとすれば、自然と長時間に亘ってしまふものと思ひます。それに時間があるのなら、奴隷として初歩からの責めに入ることが出来る訳です。貴女も全裸になったり、肉体労働もするという考えのようですから、かなり真剣なようです。前置が長くなりましたが私も折角SMプレイをするのならば、遊びなどではなく、本格的に行ないたいと思ひております。一例をあげるならば、全裸にエプロン着用の上で前手錠のままで食事の準備をしたり、買い物に行く時や外出する時は、勿論、私の承諾を得て、外出するのですが着衣はミニスカートとストッキングだけで下着は一切、着ることは出来ないのです。貴女も、わかつていてくれるとは思ひますが、奴隷期間中は私が、そこにいてもいなくても、下着をつけることは一切、許しません。その他、いろいろな縛り方や鞭打ち等は勿論のこと、浣腸、アヌス責め等の羞恥責めで、貴女を桃源の世界に送ってあげましょう。しかし、SMプレイを行なうからには、不真面目では困ります。私だけが真面目に、どれだけ真剣でも、貴女が「これは単なる遊びだ」というような考え方で

は、決して十分なプレイは出来ないと思ひますので、このことだけは十分に心して下さい。貴女の羞かしさというものを十分に引きだしてあげます。

(神奈川県・大山康行)

○ 小生、若輩乍ら緊縛プレイの相手になってくださる女性を求めています。小生の責めは一種の羞恥責めであり、小生自身、暴力否定論者のため鞭打ちや乱暴な責めは一切、いたしません。先天性ねちねち症とでも言うのか、ともかく相手の女性が恥辱で、朱の中に全身を溶けこましますほどの色責めが最も得意です。衣服を一枚一枚、剥ぎ、ホテルやモーターでの場合にはプレイ後、どうやって帰ったらよいのか、とベソをかかれるぐらいに着衣を切り裂くことから、小生のプレイは始まります。下着一枚にしたところで、股間縛りや海老責めを施し、下着を下げたり上げたりで焦らし、続いて団鬼六スタイルのあるいは四つ這いの浣腸責めやバイブ責めで徹底的に馴ります。その他、アヌス責めや、くすぐり責め、蠟燭責め等々望まれるままにプレイをしてあげましょう。十二月号でプレイを希望して

いられる小林マサ子様、菅原妙子様。よかったら小生とプレイを楽しみませんか。文章を書くのも得手です。奇くルポを発表できれば最高だと思ひます。冬の新潟は雪景色も美しく、その中で身体は芯まで熱くなるようなプレイをされる御意志がありましたら、一度お手紙をください。

(新潟県・霜月一)

○ 奇ク誌の美しい緊縛写真や、すばらしい記事を毎号、見せてもらっております。一度、自分でプレイをやってみたいのですが、どなたかM女の方、ご連絡下さい。後手縄の縄尻で部屋中を追いまわしたり、テーブルの上にのせて冷水や香水を振りかけながら、順次、下着を剥いでしまい、スワン縛りにして浴槽に浮かべたり？ また立姿のまま、天井から吊り下がった首輪をはめさせ、利尿剤や多量のビールを飲ませれば、きつと見事な律動美が生まれるでしょう。女体に傷をつけずに、そのさまざまに美しさを味わいたいと思ひます。自分は二十九才の独身の公務員です。三十四、五才までのM女の方、お返事下さい。

(神戸・垣久敬吾)

○ 山下悠子様。私は銀行に勤務する二十八才の独身男性です。貴女の考えている奴隷生活、私を主人に選んでいただきたく、お便りします。私の考えている奴隷との生活は、まず貴女に、いくらのお金を支払います。それというのも奴隷として品物のように扱うという証明のようなものです。貴女はこの時点において知性、教養は完全に無視され、奴隷として私に奉仕しなくてはなりません。防音装置のついたマンションを借り、そこを女奴隷の飼育場所としたいと思ひています。先ず貴女は私の足にキスをし、それから奴隷宣言をしなければなりません。それが終わると、奴隷のしるしとして、全裸にして足に三十センチぐらいのクサリの後手錠、錠つき首輪、それにクサリのフンドシ、これが女奴隷である貴女が身につけるものです。また鼻ネジにクサリをつけ食事のときは後手錠のまま、そのまま食器に鼻クサリをならせながら食事をします。また両乳首に鈴をつけます。寝るときは鉄格子のある錠つきの犬小屋の中に入れます。炊事、洗濯、掃除をするときも前手錠にします。もたもたして

いると、すぐ、私のムチが尻にとびます。私が風呂に入るときは、舌、乳房などで私の身体を洗い清めなければなりません。私は家の中では歩くことは、いっさいせず貴女は女馬として四つんばいになり、口輪をとられ、尻にムチを浴びながら、私を乗せて歩かねばなりません。私が気が向けば、いろいろな縛りで女奴隷を、もてあそびます。貴女に奴隷の悲しみ、みじめさを、たっぷり味あわせてあげます。貴女を人間としてではなく、下等な浅ましい一匹の女奴隷として扱いたいと思います。しかし、貴女の健康はもちろん、後に残るようなキズあとは絶対、つけないことをちかいます。私は、ふだんは、まじめなおとなしい青年として通っています。お互いに秘密は守り、夢のような二カ月を過ごしたいと思っています。後は私達は他人、きつと一生の思い出になると思います。貴女が望むなら信頼できる奥さんと一緒に、二人で奴隷教育をしてあげます。また女奴隷の二カ月として、みじめな写真をとれば、すばらしい写真集ができると思います。どうか私の飼育を受けることを、おすすめます。

(神戸・一夫)

作六鬼団



決定版

● 睥睨のサティズム小説総集篇遂に成る!!
—— 番号「花決定版」—— 定価一、〇〇〇円(送200円)——
昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サティズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発行となつた訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

第一章	発	第一	身代金奪取の失敗	第四十四章	生れかわるスター京子
第二章	恐	第二	運命の逆転	第四十五章	激しいスターへの訓練
第三章	美	第三	奇妙な三々九度	第四十六章	低脳男と令夫人の結婚
第四章	華	第四	飼育される白い動物	第四十七章	愛弟子を調教する静子夫人
第五章	救	第五	悪魔と悪女の悪業	第四十八章	羞恥と屈辱の日本舞踊
第六章	救	第六	屈辱の地獄図	第四十九章	悪魔たちの哄笑
第七章	狼	第七	逃走の恐怖と失敗の結末	第五十章	地下室の羞恥と汚辱地獄
第八章	恐	第八	悪鬼連の残忍な所業	第五十一章	珍芸を開陳する令夫人
第九章	弄	第九	淫らな美女の調教	第五十二章	淫靡な時代劇ショー
第十章	淫	第十	汚水にまみれた宝石	第五十三章	華々しきショーの展開
第十一章	美	第十一	対峙する美女と美女	第五十四章	野卑な妾二人のいたぶり
第十二章	色	第十二	あくどい陥	第五十五章	ズベ公達の邪悪な責め
第十三章	津	第十三	清純な令嬢の屈辱	第五十六章	屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
第十四章	落	第十四	人身御供の令夫人	第五十七章	悪党の執拗ないたぶり
第十五章	密	第十五	深夜の美女とズベ公	第五十八章	文夫と小夜子の屈辱的対面
第十六章	脱	第十六	変性色事師の登場	第五十九章	勝ち誇る悪党一味
第十七章	華	第十七		第六十章	中国伝来の秘法
第十八章	地	第十八		第六十一章	緊縛された美女の泣泣
第十九章	獄	第十九		第六十二章	新しい餌食への触手
第二十章	翻	第二十		第六十三章	苦痛と屈辱の生地獄
第二十一章	弄	第二十一		第六十四章	恐怖の責め続く
第二十二章	一	第二十二		第六十五章	結末なき責めの結末
第二十三章	千	第二十三		第六十六章	甘美な拷問に悶える夫人
第二十四章	万	第二十四		第六十七章	新しい儀の到来と静子の狂騒
第二十五章	円	第二十五		第六十八章	あくなき汚辱に泣く美女
第二十六章	の	第二十六		第六十九章	ニューフェイスに飼育開始
第二十七章	身	第二十七		第七十章	肉体の悪魔に魅せられた女
第二十八章	代	第二十八		第七十一章	熱気を帯びたマゾの競演
第二十九章	金	第二十九		第七十二章	女盛りの妖美な肉体
第三十章		第三十		第七十三章	優雅な木馬夫人の崩壊
第三十一章		第三十一		第七十四章	美女と野獣の奇妙な闘争
第三十二章		第三十二			
第三十三章		第三十三			
第三十四章		第三十四			
第三十五章		第三十五			
第三十六章		第三十六			
第三十七章		第三十七			
第三十八章		第三十八			
第三十九章		第三十九			
第四十章		第四十			
第四十一章		第四十一			
第四十二章		第四十二			
第四十三章		第四十三			

以前にも何度となく、この欄に載せていただいたことのあるSM愛好家の一人です。皆様も、すでに感じておられると思いますが、最近の夫婦プレイ愛好家の再度にわたる出現は、私共、同じ穴のムジナにとっては、喜ばしい次第で

す。しかし私共も、何組かの御夫婦が経験されるように、御他聞にもれず現在、マンネリ化という、見えぬ壁に、あえいでおり、外に刺激を求めております。どなたか理解ある御夫婦の方と、お近づきになりたいと思います。小生は二十四才、電機会社勤務。容姿は

十人並。身長は百七十、体重五十八。好みの責めは羞恥責めに吊り上げ責めです。しかし、体にキズをつけるような強烈な責めは好みません。妻由美子は二十三才。身長百五十四、体重三十九。上から八十二、五十四、八十九。体つきは大塚啓子タイプです。どこにも

いるような平凡な夫婦ですが、末長く交際できる方々と一しょに人生をエンジョイしましょう。

(長野県佐久市・小諸道夫)

小杉千恵様。私は、あなたを縛り、大胆なポーズで責めることを願望している二十才のサラリーマンです。浣腸をし、羞恥と喜びで、もがくあなたの肉体を美しくカメラにおさめ、心ゆくまで楽しみたいと思います。私はSMは初心者ではありませんが、カメラには自信があります。せちがらい孤独な世の中、お互いの理解を深め、新しい時間的空間を作ろうではありませんか。お互いに安心できる相手であることが第一条件です。あなたのアナルを責めてあげましょう。快いお便りをお待ちしております。

(大阪市・山彦海彦)

鼻マニアの諸君。奇ク読者の中の鼻マニアが、お互いに情報を交換したり、経験を話し合ったりするために、会を結成したいと思うが如何？ 名称は鼻マニアクラブ鼻マニア会、何でもいい。女性も参加してくれて、鼻責めのモデルにでもなってくれたら、最高にシアワセ。私が今まで女の鼻をつま

んだ二千人の記録も、マニアの諸君に公開したい。手帳四冊に、日時や場所、鼻の味、形、その他、その時の説明などがギッシリ書かれていて、今読み返してもゾクゾクするノダ。自分一人で楽しんでるのが、もったいないので、ぜひ皆さんにお見せしたいのです。とにかく、鼻マニアよ。一つになろう。

(東京都・齊藤香根雄)

妻の共鳴を得て、一つのことを書いて見ました。如何でしょうか私達は誌面を通じて語り合っていますが、心からSMを語り合える友人達を得たいものです。私も妻も喜んで赤裸々に手を取り足をとって、秘やかな生活の場で過ごしたいという気持ちに偽りはありません。奇クは生活のうるおいと、いえるでしょう。マンネリにならないように夢の二十年を明け暮れました。二十年たっても私達は信賴し、愛し合っています。その愛に更に大きな飛躍を——それが私達の心境であり、行動です。身体を張ってのプレイを私達は求めています。若い方、年輪のある老練の方々とも交りを深めたいものです。妻が交感を夢見たのは遠い昔のことですが、なかなか踏切りが

つかなかったのです。この頃は私と同じレベルに立って動くのですが、それを今一步で足踏みしてきたのは社会的な立場の関係でしょう。私の妻はサドもマゾも強烈な女です。それだけに人一倍、愛も深く、私自身、希望をかなえてやりたいと思っています。体重四十キロ、身長百五十四センチ。胸線と腰の線は自慢で、容貌は五人並み。私はカメラ自慢の婦人専科です。生活は安定していますのでどなたの重荷にもなりません。御来信を歓迎します。元海軍士官の経験を生かし、何種かの職業を持っています。気楽にプレイを楽しみたいと思っ、生きていく喜びを満喫したいと思っています。

(神戸・瞳浩太郎)

小生、奇クの大ファンです。二十数年来の愛読者です。初めてお便りしますのは、十月号の木村洋子様の「マゾ放浪記」を読んだ心気一転、私の気持ちを発表したいと思い、筆をとった次第です。木村洋子様。貴女こそ、私になくはない人です。申しおくれましたが、私は今年四十三才、今までに二、三人の女性と同棲しましたが、うまくいかず、現在一人で生

活しています。貴女の文中で、新世界、飛田、山王町などの附近が好きだと書いてありましたが、私はその中で生活しています。住居は悪名高き釜ヶ崎の中、曳船町。勤めは新世界のチンドン屋の運転手をしています。貴女のマゾと私のサドがピッタリとそのまま私の生活にあてはめられます。一字一句が私に話しかけているようで、貴女をたまらなく愛しく思うようになりました。これぞ真実の愛といふのでしょうか。貴女のそのまを、ぶっつけて下さい。私は心から、お待ちしております。

(大阪市・森悪太郎)

奇クに出会ってから、まだ三カ月ぐらいしかたっていませんが、変化のある生活をしてみたいと思ったのは、この奇クを愛読し始めてからのことです。もちろん私は浣腸や剃毛などのプレイの経験はありません。初心者か、関心のある女性の方、自分自身でプレイしている女性の方などと、今と違った別世界を二人で探求できたらなあ、と、一人でも思いにふけていて二十才の学生です。身長は一七〇センチで、少々やせ型の体です。私より年下の東京近郊に在

奇譚クラブ臨時増刊

女体緊縛写真集 定價一〇〇〇円(送50円)



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子
首縄横臥二態 前田真知子
典型的後手縛り 前田真知子
自由な肢のもたえ 前田真知子
麻縄と統肌の明暗 前田真知子
麻縄と統肌を味う 前田真知子
準備態勢OK 前田真知子
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

本誌写真部構成

金髪碧眼の美女	シラ・ゲ
答打ちの態勢	関谷富子
鞭撻の痛さ	関谷富子
洗腸の痛さ	関谷富子
亀甲縛りの美態	長井葉津子
麻縄と白肌の対照	左近麻里子
陽を浴びた柔肌	中河恵子
狼くつわに嗜く	中河恵子
緊縛裸身の露り	中河恵子
責め疲れの放心	中河恵子
没我の悦境	中河恵子
痛打の末の悦境	中河恵子
沖縄美人の緊縛	関谷富子
刺玉子の縛り	佐々木真弓
狂変する裸女	川路義子
責めくたびれて	佐々木真弓
紅毛碧眼の白人を責める	シラ・ゲ
海老責の狂態	川路義子
ボリウムの挑戦	関谷富子
鞭打の下に挑戦	関谷富子
祭壇の人身御供	関谷富子
稚妻は縄を知りぬ	金原奈子
開股の正面と背面	中河恵子
華麗な開股責め	中河恵子
イルリガートルを前に	長井葉津子
非情な責めの終末	長井葉津子
両手吊りの晒し	中河恵子
柱縛りの完了	川路義子
処女縛りとまどう	三浦恵子
麻縄に身をゆだね	中河恵子
盗視するSMの目	佐々木真弓

緊縛女体の光と影

編集部構成

両手挙げ棒責め	川路義子
柱縛りに浮く	長井葉津子
後手吊りに苦しむ	中河恵子
どこまで責めて	佐々木真弓
鞭の法悦境	関谷富子
ムチが痛い、許して	関谷富子
柱を挟んだ連縛	関谷富子
花と蛇の静子です	中河恵子
針責めをして頂戴	中河恵子
二つ折りの女体	長井葉津子
狼くつわの哀飲	中河恵子
日本式縛りの白人	シラ・ゲ
マゾの女王に答	関谷富子
柱縛りの白に恥らう	金原奈子
夫婦の悦境	関谷富子
長井葉津子の悦境	関谷富子
豊満ボディを誇る	花坂道子
美少女の悦境	関谷富子
折檻にも汚れる	関谷富子
責めくたびたい	関谷富子
日本式高小手縛	シラ・ゲ
猫の目のような女	中河恵子
足吊りの風情	中河恵子
亀甲縛りの花	中河恵子
奇麗な二輪の黒髪	中河恵子
開股縛りの幻想	中河恵子
鏡の前での放恣	中河恵子
愉悅のひととき	中河恵子
ハリツケ晒し	中河恵子

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆

女体緊縛の醍醐味を語る 塚本 鉄三

これから、どうするの?	長井葉津子
美しき吊り	前田真知子
苦痛の悦楽	関谷富子
一筋の縄の魔術	関谷富子
逆エビ縛りに入る	三浦恵子
愛撫の責め	中河恵子
俯臥撮影	前田真知子
黒縄と白肌	中河恵子
身動きできぬ境地	中河恵子
ボリウムの縛り	中河恵子
浮上した女体	中河恵子
汚辱の悦境	中河恵子
高小手本縛り	関谷富子
責めくたびたい	関谷富子
失神したマゾ女	関谷富子
前手縛りの悦境	関谷富子
柱の彼方の天国	中河恵子
荒縄の海老責	中河恵子
美少女の悦境	関谷富子
可憐な女体	関谷富子
なまけの天使	中河恵子
酒の肴になる	中河恵子
妖艶の洗礼	中河恵子
奔弄されるままに	中河恵子
柱縛りの妙味	中河恵子
痛さをこらえる異国	中河恵子
責の果の諦観	前田真知子
痛打の一瞬	前田真知子
ホステス裸人生	佐々木真弓

住している女性の方のお便りをお待ちしています。

(神奈川・相模原生)

小林マリ子さん、貴女の通信を読み、筆無精の私ですが、思いきってお便りを出しました。私は十数年来の奇クファンです。今まで

にも幾度かM女性に呼びかけを、と思つたことはあるのですが、若さで血気にはやっつては、と思ひ控えていました。しかし年令も二十ハ才にもなると落ちつきもでき、プレイに没頭できると思ひます。体力には自信がありますので、貴女の好きな責めはもちろん、私の

考えている責めを十分に満たしたく思ひます。私の責めは少し、きついかもしれませんが、体に傷のつく責めは好みません。吊り責めが重点になるか、奇想な責めを考へています。

(神戸市・吹出素人)

一月号で大阪の北田勝利様、東京の大和様、横浜の新井様から、お呼びかけをいただき、ありがとうございます。大和様、痛烈な言葉で恥かしめられ、私は身が締まるような気持ちになりました。私は確かに大和様がおっしゃられるような「マゾ奴隷」で「素裸で鎖に繋がれ」るのが、ふさわしい女なのかもしれません。北田様からは具体的なお呼びかけをいただき、ありがたく存じます。「全裸の動物のような姿」で正座し、「人格を剥奪」され、調教される。本当に奴隷の心理が体得できるかもしれません。特に奥様もいらっしゃるとのこと、同性から恥かしめられ侮べつされ、鞭打たれることを考えると、いたたまれないような気が持です。私は大阪は旅行したことがあるくらいで、良く知りませんが、いっそ見知らぬ土地で奴隷として暮るのが適するように思ひます。(東京では知人の目も気になりますので、知らない土地の方がよいと思ひます)今のところ、学校とパートの仕事で自由になりませんが、二月か三月ごろでよろしいのでしたら、大阪までまいりたいと存じます。北田様のお言葉に応じ、奴隷になるつもり

です。ただし、一カ月間ぐらゐにして下さいませんか。なお私は、肉体的な責めや屈辱にも耐えるつもりですが、奴隷としての体験をさせていただく以上、肉体労働、苦役を課せられたいと思います。素裸の身を鞭で追い立てられながら、泥や汗にまみれて働かされる——それが本当の奴隷の姿かと思ひます。体験もないくせに生意気だと思われるかもしれませんが、北田様の責めがプレー的な感じがするのが一寸、気がかりです。私は健康には自信がありますので、男性がするような労働を試みてみようと思うのです。また、こんな恥しらずなことを書いてしまいました。でも、多少の躊躇を感じながら、北田様の奴隷を志願し、きびしく検査をお受けした上、人格を放棄し、一カ月の期間を素裸で働く女奴隷になってみたいと存じます。このように奴隷を志した以上、私の身体をどのように扱われましようとも、決して不満は申しません。ただ、勝手な申し分ながら、不具にされたりするのは困りますので、そのようなことだけは、ないように願ひします。

○ (東京・山下悠子)

皆様には、その後いかがお過ごしでしょうか。私は事情があつて今、大阪に住んでいます。この頃ひとりでいると奇クばかり読んでいます。他にもそのような本がありますが、買って惜しくないのは「紫蘭の門」と「花と蛇」が好きで、読んでいゝうちに興奮してしまつて、自分の身体が切なくなるのを感じます。そして恥かしいことをされているのを想像しながら、自分で感じてしまひます。街に出て私の好きな女の人に逢いますと、その女の人が男に乱暴され、いたぶられるのを想像して、激しく抱きしめたい気持ちが起るのです。私は男のひと好きですが、女のひと好きなのです。学生時代から、好きだと思つたひとは絶対、友達にしたものです。手を握るのはかんたんですが、身体にさわられるのが嫌いなひといます。私は何とかうまい都合をつけて女の人にさわつたりしたものです。私には母親がいません。小さいときに亡くなったのです。それで二人きりになったときなど抱きしめて「おかあさんって、いいものなんでしょうね。あなたが、うらやましいわ」って、いってやるのです

が、その頃には親しくなつていたので、みんな黙って抱かれます。でも、私が女の人にさわられるのは、嫌。さわるのは好きだけど。やはり、さわられるのは男の人がいいわ。ほんとうに、つくづく感じます。男の人って、いいものだ……と。でも私の彼氏、私がなるとかしようと、しつこく誘つてみたけど駄目なのです。そして「お前、変態か」っていわれました。私はショックと共に気持ちがスーッと白けてくるのを感じました。もう彼の顔、みたくありません。やっぱり奇クがいいわ、と思う淋しいこの頃です。

○ (大阪市・南加津子)

南加津子様。発売日を待てずに何度も書店へ足をはこんでしまいました。そして本を手にしますと主人公の女性を加津子さんにおきかえて夜のふけるのも忘れて一気に読みすすんでしまうのです。貴嬢の文章を読みまして、若々しい魅力的な女体がいたげられ恥かしめられて、羞恥のうちにも喜びの情感が身体全体に現われてくるのが目にみえるようです。白い肌にピッタリと菱縄、股間縛りがかけられた貴嬢は、よく見ると適度

なふくらみを持つ乳房にも魅力的な双丘にも、深々と縄がくい込みぐいぐいと縄をしぼると、臀部をつきだすようにうねらせ、ハッハッと荒い息をしているのです。こんどは、そんな貴嬢に目かくしをして、両手は万才型に吊り上げ、足は棒の両端にくくりつけて、ハリツケ縛りにするのです。手と足を大きく開いたまま、棒で縛られた姿は、全身を開放した女の全くの無防備状態です。糸として身をおおうものさえない裸身をさらしている貴嬢は、どんな残酷な責めも、甘んじて受け入れなければならぬ。目かくしをされた貴嬢は、どんな責めを、これからされるのかと、暗黒の世界で思い悩まなければならぬでしょう。想像の世界では浣腸器の嘴管の恐怖に悶え、バイブレーターの低い唸り音もなくふりかかるローソク、そして尻部に走るムチの痛さに、むせび泣かねばならないのです。実際には責め手がいなくても、目かくしをされたことで心の動揺をおさえきれずに、つぎつぎとめぐりくる被虐の想念におびえ、悶えるのです。つぎに何をされるかわからないという恐怖の中で行なわれる思いもよらなかった責めは、加

次号(四月号)は二月二十五日に発売いたします

津子さんに強烈な羞恥と新しい刺激を与えることでしょう。しかしそれには、お互いに理解しあえるものがなければなりません。今はとにかく、語り合い理解し、信頼することができるときの時間が得られることを希望します。もしよろしければ文通して、私なら大丈夫と気が進める段階になったら、実際のプレイをしませんか。

(名古屋・三宅俱隆)

去り、海辺育ちの両親に死に別れて上京し、見知らぬ東京に住んで身よるべを失ったような、いい知れぬ孤独の寂しさを痛感しています。誰もいない静寂なアパートの一室で待ちこがれてばかりの私は、SMプレイによって、一人暮らしの哀れな私と肉体的快楽を味わえ合える心やさしい明朗な女性の方、ぜひご遠慮なく、ためらわずに決断してお便り下さい。

○

(東京都・小林定夫)

私は毎月、奇クを楽しく愛読している三十八才の独身男性で、現在、運送業の力仕事に汗を流しながら根気よく働いています。この寒さにも力ゼ一つひかず、毎日が太陽の下での肉体労働なので、浅黒く日焼けした肌に六尺フンドシをキリリと締めて、いかにもたくましく頑健です。生来、この肉体美、肌色などを人前に見せびらかしても恥かしくない、ひきしまった筋肉質の露出的傾向があり、マゾっ気も多く、加えてポルノSM写真に大変興味をもっています。何といっても裸祭りとして全国的に有名な故郷の岡山県西大寺市を

私が貴誌を始めて知ってから二十年になると思います。はなはだ平凡で通常の異性への関心が燃えさかる中に、貴誌は私の性に無意識の内に、いろいろな影響を与えたようです。その頃の三、四年間ほど私は、こりにこって貴誌を読みふけたものですが、その頃の頭脳でこれは異常なもの、他人には普通のセックスの雑談のように気軽に話せないものだぞというように本能的に感じていて、私の性の秘密の一コマであったわけで、す。そして、努めて貴誌から顔をそむけようとする時期に入り、二

三年おきにこの誘惑の波は私に近づき遠ざかりしつと時を経たのですが、まさかこんなにこのようなフリーセックス時代を迎えようとは想像もできなかったことです。そしてSMが、こんな陽の当たる場所に出てこようとは——。今、私は三十七才になり、三十四才の妻との間には五才と三才の女の子がおります。そして仕事も家庭も、まずまず平和で、おだやかな状態であり、満足すべき状態にあるといつてよいようです。現在に至るまでをふりかえりますと、ホモの経験をした大学時代、半同棲の時を過ごしたサラリーマンなり立ての頃、二十九才で結婚した頃、それだけに貴誌からの感化が、まわりついているのを感じさせられます。SMといいホモといい、女装、アナルセックス、浣腸等々、性の複雑さ、奥行の広さを、ひととおり味わって卒業したつもりでまた舞いもどるといった、くりかえしが、普通の性のつまかさねの中で、流れ流れて来たという感じは、私の性の過去の、貴誌は友人であり先生であったわけですね。これから先、二十年は性の追求ができるだろうと思っておりますが若い頃と違ってムチャもできな

○

(高原あきお)

なり、体力も段々とおとろえて行くことでしょうし、またおっくうにもなっていくことでしょう。けれども私の好奇心が消え失せぬ限り、体が不可能になるそのときまで、がんばっていかうと思っております。どうぞこれからも、永く永く貴誌が御繁栄を続けられますよう、お祈り致します。

編集長様、突然お手紙をさせていただきます、失礼申し上げ、おゆるし下さいませ。今の主人と結婚しまして15年になります35才の平凡な主婦でございます。10年程前から主人に奇ク誌のあることを知らされ、以来、今日まで私たちのSMは奇クと共に続けて、私はすっかりMとして飼育され、夫婦でありとあらゆるプレイをしてまいりました。この間、何度か読者通信をと考えましたが、つい気おくれして現在に至っております。主人はDPをやりますのでプレイフォートのアルバムも、もう10冊を越えてしまいました。この次に通信をすることがありますときは、思い切って出してみようかしらと考えております。お他聞にもれず夫婦プレイのマンネリの故か主人

は3人プレー、交換プレーを考え
ているようですが、現在、田舎に
住んでいるため思うにまかせず、
主人も読者通信欄を通じて同好の
士をと考えているようですが私が
通信で先を越してしまいました。
大阪に妹夫婦がおり来年6月にこ
ちらから遊びに10日程、旅行の予
定をたてており、主人はそのとき
チャンスを見て、辻村先生か塚本
さまに、お前がプレー出来るよう
にしてやるなどと冗談を言ってお
ります。でも生まれて始めて主人

以外の方にプレーされたらと思う
と、めくるめく思いで、気が遠く
なりそうです。長い間、奇クファ
ンでありながら、始めてペンをと
りました。皆々様の御健斗を祈り
また後程おたよりさせていただき
たいと思います。

(北海道・松田芳子)

二月号に投稿された静岡県の沼
田敦子さん、私は東京に住む二十
二才の男性です。私は以前からS
Mにとりつかれ、奇クを愛読して

いましたが、まだ本格的なプレイ
の経験もなく、かといって投稿す
る勇気もなかったのですが、二月
号で貴女のことを知り、思いきっ
てお便りしました。この奇クには
多くの女性が登場しましたが、一
部の女性は何だかスターのような
存在で、我々一般読者には手が届
かぬようですし、また一部の人は
プレイよりモデルなどで自分を
売り込むタイプの人もあり、やは
り我々一般人にはSMプレイなど
無縁に思われ、むなしい思いでし

た。そんなところへ沼田さんの出
現。お互いに年令も近いし、私と
同じようにプレイの経験もないと
のことですし、それに私がこの本
を読むようになったのも、今の貴
女と同じ年令からというの何か
の縁でしょうか。共に語り合い、
よく知り合えたらプレーへ……と
考えていますが、いかがでしょう
か。私が真面目なことは、お会い
すれば分かると思います。

(東京・武内秀男)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記の一覧表の通り
行の在庫にありついで、在庫が少なくな
るものもあつて、お早目に御注文願ひ
御注文願ひ願ひ願ひ願ひ願ひ願ひ願ひ
○七月一日より郵便送料は段々
い、全面的に改訂の必要が生じ、段々
も、全面的に改訂の必要が生じ、段々
た、全面的に改訂の必要が生じ、段々
号、全面的に改訂の必要が生じ、段々
合、全面的に改訂の必要が生じ、段々
し、全面的に改訂の必要が生じ、段々
注、全面的に改訂の必要が生じ、段々
ます。全面的に改訂の必要が生じ、段々

既刊雑誌在庫案内

昭和41年5月号(送共三三三二円)

昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

編集後記

○「水蜜桃のような双丘」を、ひとつピシャリとやってやり、くると返せば目を瞠る、「黒い乳房」がとび出して、妖美世界の幕上がる。回遊の友欲しいなら、「M女よペンを執り給え」、縄を片手に飛んで行き、望みの実演織り混せて、ガイドの役は引き受ける。○「とき子の自縛教室」は、入試地獄はありません、手続きなんぞも不要です、暇と縄さえあれば良い。「見せたい妻の寝乱れ姿」？よろしいトックリ眺めよう、見せつけられたそのあとは、マアどうにかキャアなるタイ。○「命預けます」とはウッフ、云われてみたい一度でも。弾みに満ちたヤワ肌、どこにあってもイロ「黒子」、ほくらだらけも困るけど、さがせる彼女が欲しいもの。

○「別嬪じゃない」だけ余分です、鉄さんトリ目か目カンチか？「凄く可愛い娘」のうえに、縄に悶えるあの裸身、これがホントのベッピンさん、ポッチャリ型の美人なの！○傍目じゃ「奇妙なカップル……」も、愛が基調のプレイなら、「花は傷つ……」く答はない。「緊縛女体への幻想」も「紫蘭の門」への憧憬も、人それぞれの「……処方箋」○「花と蛇」がケンカしても、「ヒップを晒して」「交友」しても、「妻が」「密室で」「大噴火」しても「ラバちゃん」が「悦虐の遍歴」で「素敵な流腸」をして、「都の夕暮れに」ラッパを吹いてもいいじゃナイ、アカの他人じゃホッチチ……とくらあ。フーッ、オトソは……もうないの？アア頭が痛い。

懸賞原稿募集

体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

感想、論評、批判

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌弾なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を贈呈します。

映画、雑誌、通信

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

読者通信原稿

巻末の通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆本誌御購読の葉☆

予約に限り
一月分(1冊)四〇〇円△送32円▽
三月分(3冊)一二〇〇円△送共▽
半年分(6冊)二四〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 四〇〇円

三月号 (第二十七卷第三号)

昭和四十八年二月二十日 印刷
昭和四十八年三月一日 発行

郵便番号558

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別取扱承認雑誌第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条に指定されなすいよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しておりま売下さらないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。